

青森県埋蔵文化財調査報告書第97集

大石平遺跡Ⅱ

昭和60年度

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書第97集

大石平遺跡 II

—むつ小川原開発事業関係埋蔵文化財調査報告書一

昭和60年度

青森県教育委員会

序

青森県教育委員会は、昭和59年度に、むつ小川原開発予定地内に所在する大石平(1)・(2)遺跡の記録保存を図るため、発掘調査を実施しました。

遺跡からは、縄文時代後期及び弥生時代の住居跡と数多くの遺構・遺物が発見されました。

本報告書は、この発掘調査の成果をまとめたものであり、いささかでも文化財の保護及び活用に資するところがあれば幸いに存じます。

最後でありますが、調査の実施と報告書の作成にあたり関係各位から御協力、御指導を賜りましたことに対し心から感謝の意を表します。

昭和61年3月

青森県教育委員会

教育長 本間茂夫

例　　言

- 本報告書は、昭和59年度に実施した青森県上北郡六ヶ所村に所在する大石平(1)・(2)遺跡の発掘調査報告書である。
- 調査に際しては、試掘調査を先行させて行い、遺構・遺物のみられる箇所では、その周辺を拡張・調査する弾力的な考えのもとに実施した。
- 本報告書中のIV-1区については、その東側隣接地が、昭和58年度に発掘調査を実施し、多くの成果を収めた当時のIII区に相当していることから、本区の内容は、III区の成果と関連させた記述をしており、また、本書の内容を検討・把握するに際してもIII区と関連づける必要がある。なお、昭和58年度の調査成果は、青森県埋蔵文化財調査報告書第90集「大石平遺跡」として昭和59年度に刊行している。
- 昭和60年度には、昭和58年度調査時のIII区西側と、本書のIV-1区の各々南側一帯の発掘調査を実施しており、予想通りかなりの成果をあげている。これら3か年にわたる発掘調査の結果、58年度のIII区、59年度のIV-1区、60年度の調査区の3区は、連続した一つの集落……遺跡の中心部……であることが判明した。換言すれば、一つの大集落跡を3回に分けて調査したことである。

このような観点からすれば、昭和58年度に実施した発掘調査は1次の調査、59年度実施のIV-1区については、2次の調査という意味に受けとめることができる。

そこで、本文中の随所に、昭和58年度の発掘調査における遺構・遺物が引用されることから、便宜上、昭和58年度に実施した発掘調査のことを第1次調査、59年度を第2次調査と仮称することにした。

- 本報告書では、広大な調査対象面積のため、地区割りを行い、区ごとに記述する形式をとっているが、主体を占めている区は、IV-1区とVII区である。
- 本報告書の記載内容は、前述のごとく2次の調査であることと、昭和60年度の発掘調査が3次の調査であり、「大石平遺跡」の最終年度調査でもあることから、できるだけ、遺構・遺物のとらえ方は、第1次調査のとらえ方に準拠し、そのイメージを損なわないよう努めた。
- 執筆者の氏名は、依頼原稿については文頭に、ほかは文末に記した。
- 石質鑑定は、県立八戸高等学校教諭 松山 力氏に依頼した。
- 本報告書の文中における用語は、できるだけ統一をとるよう努めたが、数度にわたり使用されるものは、簡略化したり、仮称したりしたものもある。
- 図版の縮尺は、各図ごとに表示してあるが、ないものは任意の縮尺である。
なお、写真図版の縮尺は、統一していない。
- 土層の観察・表記は、農林省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」に基づいている。

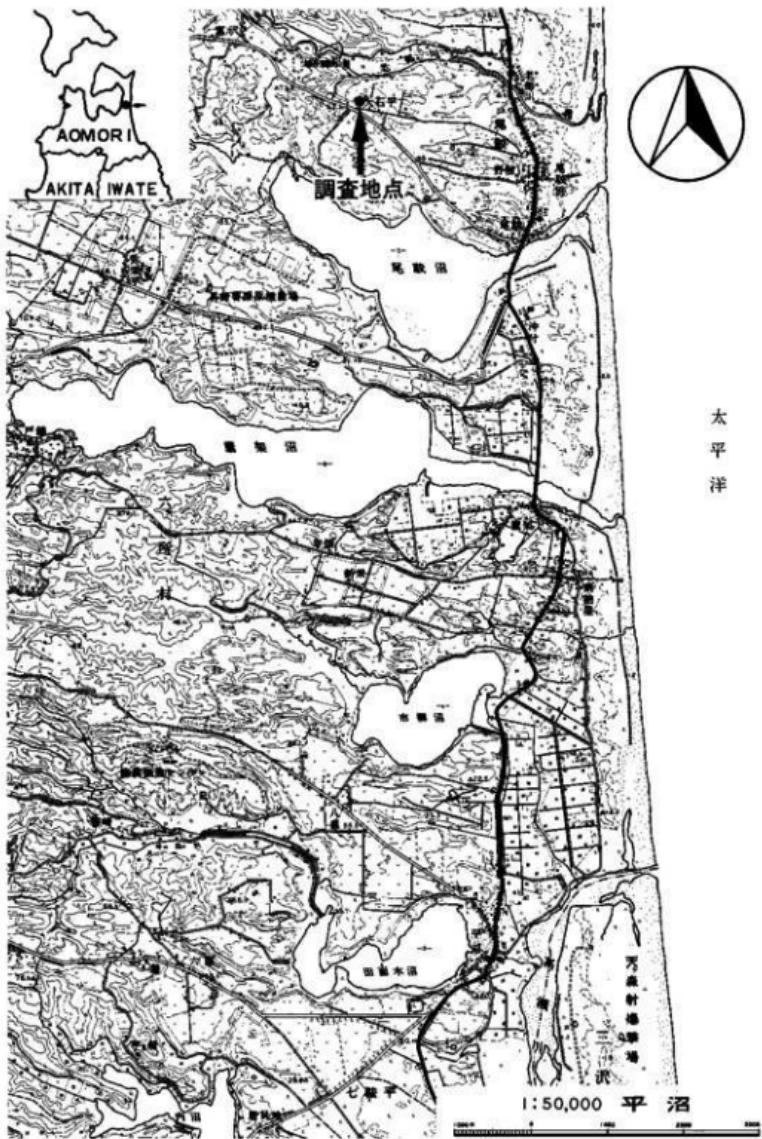
目 次

序

例 言

第Ⅰ章 調査に至る経過と調査要項	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査要項	1
第Ⅱ章 調査の概要	3
第1節 調査の方法	3
第2節 整理の方法	5
第3節 調査の経過	6
第Ⅲ章 遺跡の環境	7
第1節 遺跡周辺の地形	7
第2節 遺跡周辺の地質と遺跡内の土層区分	8
第Ⅳ章 検出遺構と出土遺物	12
第1節 IV 区	12
1 検出遺構	12
(1) 垂穴住居跡	12
(2) 土 壤	37
(3) 配 石	83
(4) その他の遺構	87
2 出土遺物	90
(1) 土 器	90
(2) 石 器	137
(3) 土 製 品	158
第2節 V 区	202
1 検出遺構	202
2 出土遺物	203
(1) 土 器	203
(2) 石 器	206

第3節 VI 区	211
1 検出遺構	211
2 出土遺物	213
(1) 土器	213
(2) 石器	216
(3) その他の遺物	217
第4節 VII 区	224
1 検出遺構	224
(1) 壁穴住居跡	224
(2) 土器埋設遺構	244
(3) 土壙	245
2 出土遺物	249
(1) 土器	249
(2) 石器	256
(3) その他の遺物	256
第V章 調査の成果	262
まとめ	269



第1図 遺跡の位置

第Ⅰ章 調査に至る経過と調査要項

第1節 調査に至る経過

むつ小川原開発事業計画にかかるむつ小川原開発株式会社所有地内の調査は、昭和49年、50年に実施した新住宅建設に係る千歳遺跡(13)の発掘調査に始まり、昭和54年、55年には、石油国家備蓄基地建設に伴うパイプライン敷設に係る表館遺跡並びに発茶沢遺跡の発掘調査、更に昭和56年、57年には、備蓄基地の消火用水確保に伴う弥栄平遺跡(2)の発掘調査、昭和58年には大石平遺跡の第1次発掘調査を実施してきた。

昭和58年11月、むつ小川原開発株式会社から、大石平遺跡（総面積約76万m²）約25,000m²の第2次発掘調査の依頼があった。

そこで、青森県教育委員会では、同年11月受諾する旨回答し、昭和59年5月7日から同年11月9日までの予定で発掘調査を実施することにした。(山田)

第2節 調査要項

1. 調査目的

むつ小川原開発事業実施に先立ち、当該地区に所在する埋蔵文化財の発掘調査を行い、その記録保存をはかり、地域社会の文化財活用に資する。

2. 調査期間 昭和59年5月7日から昭和59年11月9日まで

3. 遺跡名及び所在地

大石平 (1)・(2)遺跡 青森県上北郡六ヶ所村大字尾駒字野附

4. 調査面積 25,000m²

5. 調査委託者 むつ小川原開発株式会社

6. 調査受託者 青森県教育委員会

7. 調査担当機関 青森県埋蔵文化財調査センター

8. 調査協力機関 六ヶ所村企画課

六ヶ所村教育委員会

上北教育事務所

県むつ小川原開発室

9. 調査参加者

(1) 調査指導員 村越 潤 弘前大学教育学部教授

青森県文化財保護審議会委員

- (2) 調査協力員 田中 澄 六ヶ所村教育委員会教育長
(3) 調査員 小山 陽造 八戸工業高等専門学校教授
〃 滝沢 幸長 八戸市文化財保護審議会委員
〃 佐藤 巧 県立郷土館学芸員
〃 山口 義伸 県立木造高等学校福垣分校教諭

(4) 青森県埋蔵文化財調査センター

所長 工藤 泰典 (現・県地方労働委員会事務局総務課長)
〃 三橋 時男 (昭和60年4月 教育庁財務課副参事から)
次長 須藤 昭二
総務課長 館浦 善清
調査第一課長 新谷 武
調査第二課長 山田 洋一
主査 遠藤 正夫
〃 三浦 圭介
主事 白山 升
〃 白鳥 文雄
〃 赤平 智尚
〃 一条 秀雄
調査補助員 須藤 徹彦 (昭和60年3月退職)
〃 大沢 国 (昭和60年3月〃)
〃 安原 渡 (昭和59年5月〃)
〃 木村 清孝
〃 福士 聰彦 (昭和60年2月退職)
〃 小田川暫彦
〃 佐藤 謙 (昭和59年10月退職)
〃 石塚 邦仁 (昭和60年3月退職)
〃 鶴谷しげ子 (昭和60年10月退職)
〃 田中 伸子 (昭和60年1月退職)
〃 佐井 理賀
〃 蝦名 知子
〃 奈良 郁子 (昭和60年3月退職)
〃 竹内 史

第Ⅱ章 調査の概要

第1節 調査の方法

1 調査区の設定

調査対象区域が広範囲にわたるため、第1次調査の区割りに準じてIV～VII区の4地区に区割りした。調査時においてはIV区—C地点・V区—D地点・VI区—D5地点・VII区—中の島と仮称し、遺物の取り上げ・遺物の注記等もこれを用いた。

また、各地区内でも作業の円滑化を図るために数地点に分割した。

第2次調査（59年度）が、埋蔵文化財調査センター2チーム・文化課1チームの計3チームで実施することや、第1次調査（58年度）の調査区に接すことなどから、各地点ごとに軸線等に異同がないよう、第1次調査の基準軸線を延長して遺跡全域に4m×4mのグリッドを設定した。

グリッドは、第1次調査に準じて、南北方向にアルファベット2文字の組み合せを、東西方向に算用数字を付し、その組み合せで呼称した。またAAラインから北側はZZ～YAを付した。呼称は第1次調査に連続したが、VII区は調査開始が遅かったことなどから、軸線は同一としたが、呼称は独自なものを使用した。VII区のIIA100グリッドは全体のCH-300グリッドに相当する。アルファベット及び数字の方向は全体と同じである。

2 発掘の方法

基準線に沿って試掘トレンチを設け、遺構・遺物が検出された部分から順次拡幅を行った。

トレンチは対象面積の10%を目安とし、各地区的地形・現状等を考慮して設定した。このため、各地点ごとにトレンチの形状等は異なる。

各地点ごとに土層観察用のトレンチを設けた。各層はローマ数字を付して呼称した。

〈遺構の調査方法〉

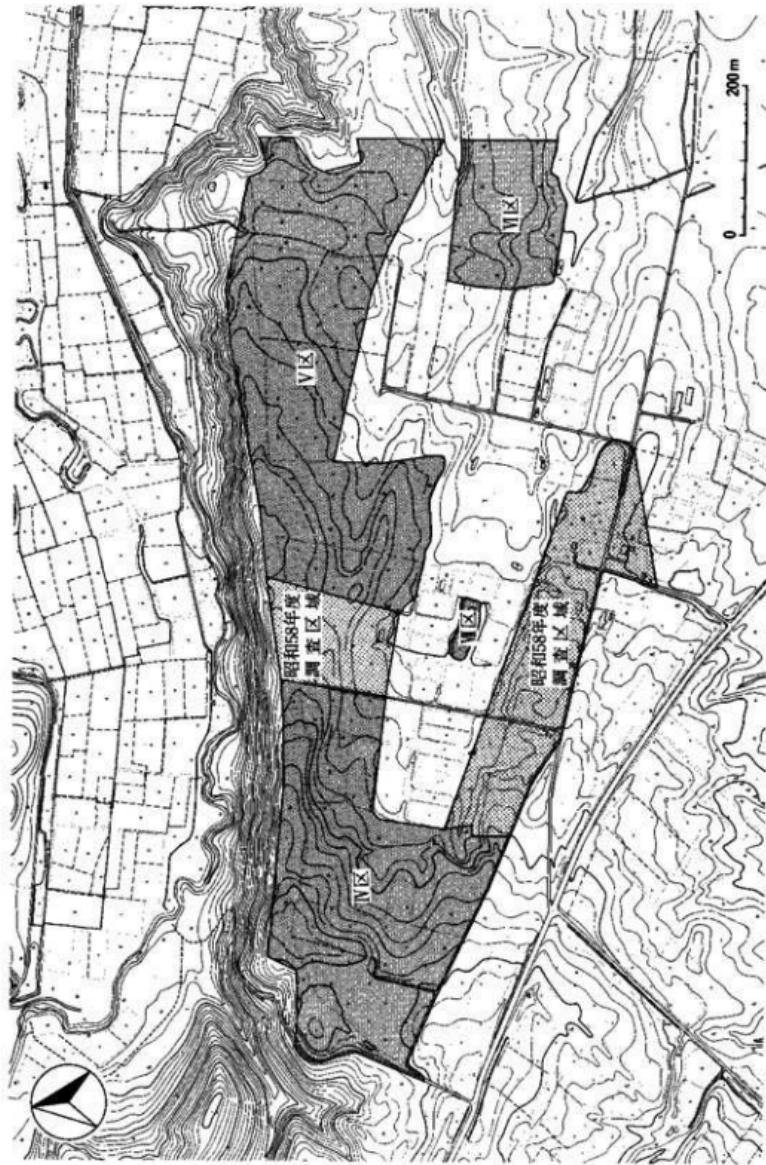
遺構は、各種類ごと及び確認順に番号を付した。遺構の調査は堆積土の状態を観察するため原則的には四分法を用い、規模の大小により二分法・半截・その他を用いた。堆積土層は算用数字を用いて呼称した。

遺構の実測における縮尺は、基本的には20分の1とし、遺物出土状況・規模の大小等により10分の1・その他とした。

また、記録保存のため適宜写真撮影を行った。写真は、モノクロフィルム及びカラーリバーサルフィルムを使用した。

〈遺物の取り上げ方法〉

第2図 通勤周辺の地形・施設全体図



遺構内出土遺物は、遺構及び層位ごとに取り上げることを原則とした。遺構外出土遺物は、グリッド単位で取り上げた。取り上げに際しては、種類ごとに色分けしたカードを使用し、出土位置、出土層位を記入した。(土器一日・石器一青・その他一赤)

第2節 整理の方法

調査終了後、遺物は水洗い、乾燥のち出土地点等の注記を行った。注記は、前述のとおり調査区の仮称を用いている。復原・実測・拓影・写真撮影等、一連の整理作業を行った。また遺構実測図等の補正・トレースなども、これと併行した。

各遺物における分類基準は、おおむね第1次調査に準じたが、担当者の変更等による見解の相異などから若干異なる部分がある。以下各遺物の分類基準を明記する。

1 土器

土器の分類は、大筋では第1次調査に準じた。時期的区分による群別は以下のとおりである。

第I群 繩文時代早期の土器	第IV群 繩文時代後期の土器
第II群 繩文時代前期の土器	第V群 繩文時代晚期の土器
第III群 繩文時代中期の土器	第VI群 弥生時代の土器

各群の中における細分(類)は、第1次調査のものと相異点があり、その詳細については、第IV章第1節—2—(1)の項で記載する。

2 石器

石器の分類は大筋では第1次調査と同じである。しかし、あらたに注目された石器の存在や、担当者の変更等による見解の相異によって、変更した部分がある。なお、分類についての具体的な概念規定は最も多量に出土したIV—1区からの出土石器に基づいている。

第1次調査で示された分類基準との相異から想起される誤解を防ぐために、これら相互の共通点・相異点及び再分類の理由等は、記載が重複することから第IV章第1節の石器の項で明確に記述する。この項では各類別の名称を記載し、細分は前述の石器の項で記載する。

第I群石器(剥片石器)	第II群石器(石斧)	O類 円盤状石製品
A類 石鏽	I類 磨製石斧	P類 有孔石製品
B類 石槍	J類 打製石斧	Q類 滑車形石製品
C類 石錐	第III群石器(礫石器)	R類 石棒
D類 石匙	K類 石錐	S類 石刀(石剣)
E類 石鎚	L類 敗磨器類	T類 石冠
F類 不定形石器	M類 石皿・台石・砥石	U類 その他
G類 鞍形石鎚	第IV群石器(石製品等)	

H類 ピエス・エスキュー

N類 軽石

出土石器の観察表は、各器種別に遺構内・遺構外出土を含め、付表として巻末に一括した。

実測図に用いたスクリーン・トーンの指示は、類似する図柄が、縮尺率の違いから、混乱を招く恐れがあることから、各図版上に明示した。

表中の略語等は、本文中及び表の欄外に表示した。

(遠藤・畠山・白鳥・一条)

第3節 調査の経過

5月7日、調査区のはば全面を覆う箒の刈り払い作業から開始した。10日には、これと併行して、58年度の調査地点からグリッドの軸線を移動し、IV区では西方、V区では東方へとグリッドの設定をすすめた。

広大な面積のため、試掘を先行し、包含層や遺構を検出した際にはその範囲を拡大し精査するという基本的な考え方から、グリッド組みは、東西方向は20m間隔、南北方向は4m間隔を原則とした。

11日から粗掘りを開始し、以後、刈り払いして、グリッドを組み、粗掘りするというサイクルで順次進めていった。6月の半ば過ぎ、V-4区では溝状ピットの検出が続き、IV区でも土器片等の遺物が若干出土し始めたが、遺構は検出されなかった。

7月に入り、V-2区の南東部から焼土や土器が出土、IV区では北側縁辺部で配石遺構を確認し精査に入った。18日から19日にかけて、V-2区から弥生式土器が1個体単独で出土したため、周辺を拡張・精査したところ、縄文土器片が多量に出土した。末頃には、V-3区の縁辺部まで粗掘りが及び、縄文土器の密集部を2箇所検出した。IV区では竪穴遺構1基を確認し精査を終える頃には、粗掘りは南東部の沢彌IV-1区付近までですんだ。

8月初め、以前、遺物が出土したV-2区の隣接部である1区南側を調査したが、遺構・遺物の出土はなかった。そこで、次の調査区であるVI区(D-5地点)の現地踏査を行い、道づくりや作業の手順を整えた。11日には、V区の全調査が終了した。VI区の箒刈りは29日で一応終了し、グリッド設定、粗掘りにかかった。IV区では4号土壙を精査中、軟玉17個が出土した。

9月上旬、調査の主体がIV区西側からIV-1区に移り、確認した溝状ピット、フラスコ状ピット等の精査に併行して、407ライン付近の粗掘りや397、447ラインのグリッド組みを行った。

9月10日、VII区の箒刈りを開始し、13日には粗掘りに入った。また、VI区においては粗掘りが続行された。一方、IV-1区の遺構精査はいよいよ本格化し、出土遺物もこの時点で約120箱(ダンボール箱)に達した。

10月には、大きく調査の拠点がIV-1区とVII区に分かれ、他チームの応援も得て、31日にはVI区、IV区の調査が終了し、残るVII区の調査は11月9日に終了した。

(山田)

第III章 遺跡の環境

第1節 遺跡周辺の地形

上北郡六ヶ所村は下北半島頭部の太平洋側にあって、この付近には、北方から尾駿沼、鷹架沼、市柳沼、田面木沼、内沼そして小川原湖の湖沼群がみられる。太平洋沿岸には、これらの湖沼を閉塞するような形で天ヶ森砂丘が現汀線に沿ってほぼ南北方向に約200mの幅で分布し、さらに内陸側には標高5～23mにも及ぶ古砂丘が同じく南北方向に300m余の幅で分布している。現在、古砂丘は松林となっていて防風、防砂林の役割を果している。また、この付近には、海岸段丘の発達も顕著であって、上位から吹越鳥帽子段丘、長者久保段丘、千歳段丘、七鞍平段丘の4段丘が確認できる。これらの段丘のうち、本遺跡が立地しているのは最下位の七鞍平段丘（標高50～12m）が主であって、一部は上位の千歳段丘（標高100～60m）上にも立地している。

本遺跡が立地している地域は、北方に東流して太平洋に注ぐ老部川があり、南方には尾駿沼があつて、その幅は約2kmである。この地域に広く分布している段丘は最下位の七鞍平段丘で西端部には千歳段丘が幅狭く分布している。本地域のほぼ中央部には南東流して尾駿沼に注ぐ侵食谷があつて、この侵食谷の北側に分布する七鞍平段丘は、小谷の開析作用がみられるものの比較的平坦な地形をなしている。侵食谷の南側においては、この谷の侵食作用により、多少起伏に富む地形となっている。なお、西端部においては上位の千歳段丘とは約10mの比高差をもつ侵食斜面でもつて接している。

本遺跡は、現汀線より2～3km程内陸側にあって、標高が62～37mである。遺跡の北端は老部川に臨む急峻な段丘崖となっている。遺跡内には老部川の枝流が2本あり、いずれも七鞍平段丘上に谷頭をもち、並行して東流している。両枝流の間は、侵食作用によって東西方向に帶状の小丘地としては残っているものの、全体的には200m余の幅で、5～10mの比高差のある谷凹地となっている。またこの枝流の谷頭付近は、上位の千歳段丘へ連続する侵食斜面でありかつ、この枝流による馬蹄形状の侵食地形となっている。枝流の南縁から本地域の中央部を南東流する侵食谷までは比較的平坦な地形となっている。（第3図）

本遺跡はかなり広範囲にわたって分布しているので、各地区毎にその地形の概要を述べたい。本遺跡は、上述の2本の枝流のうち、南に位置する枝流の右岸に沿うほぼ東西方向の線引きで南側を大石平(1)遺跡、北側を大石平(2)遺跡と区分している。なお、大石平(1)遺跡の中で枝流右岸沿いについては昭和58年度においてすでに発掘している。

まず大石平(1)遺跡は、昭和58年度発掘した地点より西方にあって、枝流の谷頭付近に拡がる

馬蹄形状の侵食地形の南半分をしめている。標高は61～46mでかなり急傾斜面となっている。ただ、プラスコ状ピット及び溝状ピットの分布する地点は千歳段丘上であってこの付近はやや平坦な地形となっている。なお、本調査した場所は、枝流の谷頭部を取り囲む形であって、湧水がひどい所である。

大石平(2)遺跡第IV区は、大石平(1)遺跡の北に隣接していて、馬蹄形状の侵食地形の北半分を占めている。第IV区の北端は、老部川に臨む段丘崖となっている。標高62～44mであり、全体的に南方への急傾斜面となっている。ただ、配石遺構の分布する地点は、標高が62mあり、やや小丘状をなすように千歳段丘が発達している。

大石平(2)遺跡第V区は、北端の段丘崖に沿って、約200mの幅で800mの長さをもつ帯状の分布を示している。標高が48～37mであって、枝流の侵食作用によりやや起伏がみられるが比較的平坦である。全体的には南方への緩傾斜面となっている。

大石平(2)遺跡第VI・VII区は枝流間の小丘地内に点在している。第VII区は、標高が42m程で、周囲が開墾のために削平されていて全くの孤立丘である。第VI区は標高が36～34mで、枝流の侵食作用により低湿地状の地形である。

第2節 遺跡周辺の地質と遺跡内の土層区分

下北半島の頭部を構成している地層のうち、基盤をなす地層は新第三系中新統の泊安山岩類及び鷹架層である。また、本地域に最も広く分布する地層は新第三系鮮新統の浜田層及び第四系下部洪積統の野辺地層である。新第三系中新統の泊安山岩類は安山岩質角礫岩及び同質集塊岩からなっていて、本遺跡北端の老部川に臨む段丘崖にみられるが、主に本地域北方の山岳地に広く分布している。中新統の鷹架層は主として塊状のシルト質砂岩からなり、泊安山岩類の上部と指交関係にあって、本遺跡南方の鷹架沼を中心にはほぼ南北に分布している。新第三系鮮新統の浜田層は塊状無層理の砂質シルト岩と砂岩との互層からなり、下位の中新統を不整合におおっていて、本地域に広く分布している。また、第四系下部洪積統の野辺地層は全体的に砂とシルトの互層からなり、下位の新第三系を不整合におおい、ほぼ水平に堆積していて、一般に段丘構成層におおわれている。

次に遺跡内における土層区分及び各地区の土層の対比を第4図に示した。これに基づき、各層の概要を述べたい。

I層 黒褐色土層 (10～20cm) 表土。※昭和58年度発掘した大石平遺跡のI a及びI b層に對比される。草根を多量に含んでいて、全体的にしまりがなく、ソフトな感じがある。斜面及び低地においては約20cmと厚くなり、I a及びI bの2層に区分され、このうち、I b層はやや腐植質となり、苔の発生がみとめられる。

II層 黒色腐植質土層 (10～20cm) ※のII層に對比される。草根を含み、粘性湿性が多少あ

り、やや硬さもある。乾くと灰黒色に変色し、全体的に格子状の割れ目が発達する。本層は平坦地においてはレンズ状の分布を示している。

- III層 暗茶褐色土層（5～25cm）※のIII a 層に対比される。風成による堆積でしまりがなく、非常にソフトな感じである。平坦地では下位層の粒子状の混入で明るい色調を示すが、低地においては水の影響をうけていて、多少粘土質になっている。なお第IV区B Q-387の低地においては本層に2枚の降下火山灰層が挿入されているのを確認できた。
- IV層 黒色腐殖質土層（0～40cm）※のIII b 層に対比される。上位のII層に酷似していて、より粘土質である。II層よりも湿性が多く、II層が格子状の割れ目が発達するのに對して、本層は表面がなめらかでしまっている感じである。部分的に欠如することはあるともほんの跡全体に分布している。
- V層 暗褐色火山灰質土層（20～40cm）※のIV層に対比される。下位の火山灰層を粒子状あるいはブロック状に多量に混入していて、層全体としてのしまりに欠ける。本層は火山灰の混入状況により2層に区分でき、上位のV a 層は火山灰が粒子状に混入し、暗い色調を示し、下位のV b 層はブロック状に混入し、全体的に火山灰質になっていて、明るい色調を示している。ただ低地においては、火山灰粒の混入はあるものの、全体的には黒褐色粘土質土に変化し、下部には砂礫層を伴なうこともある。
- VI層 黄褐色粘土質火山灰層（50cm+）※のVI層に対比される。全体的によくしまった感じで粘土質である。昭和58年度に発掘調査した大石平(1)遺跡の296ラインにおいては本火山灰層の直上にブロック状のラビリ質浮石を確認できた。この浮石は、おそらく、上北上部火山灰層基底部に伴う千曳浮石（C b, P）に相当するものと考えられる。

ところで、各地区的土層分布をみると、まず大石平(1)遺跡においてフラスコ状ピット及び溝状ピットの分布する地点では耕作による削平のため火山灰質のV層の直上はほとんど耕作土としてのI層があるのみである。また第IV区では傾斜面であるためII層がレンズ状に分布するほかはほぼ標準層序に従って堆積している。なお枝流の谷頭部に臨む急傾斜面地（D A-375グリッド）ではIV層が100cm以上の厚さで堆積していく4層に区分できる。この4層のうち、上位から3番目のIV₃層にはブロック状の焼土や縄文時代後期（十腰内I式）の土器片が1片確認できた。

大石平(2)遺跡第IV区では、配石造構の分布する地点がI層直下が風成作用によって全体的に火山灰質のIV層及びV層が堆積している。ただ傾斜地においては、ほぼ標準層序に従って堆積している。

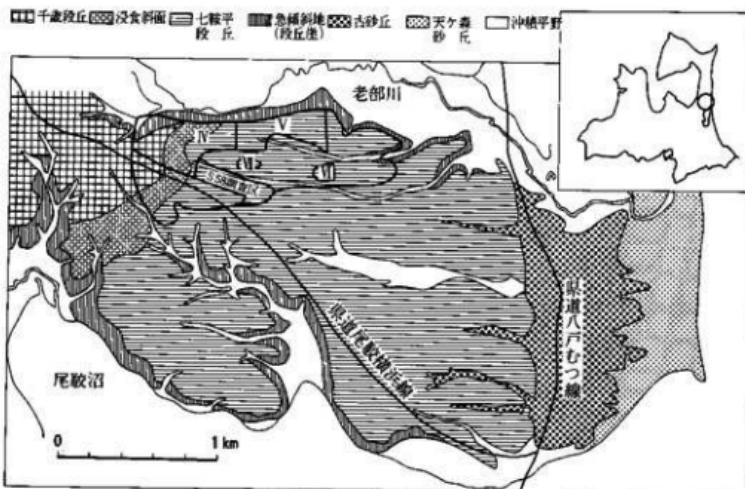
第V区では、北端の段丘崖沿いの段丘面を除いては全体的に枝流の侵食作用によって平坦地ながらもやや低湿地状になっている。このため、標準層序に従って堆積しているものの、IV層が厚く堆積していて、非常に粘土質であり、下位のV層も砂礫層となっているところがある。

第VI区は低湿地であるために全体的に粘土質であって層区分がなかなか困難である。第VII区では開墾による削平あるいは盛土のために全体的に攪乱されている。I層直下はIV層あるいはV層になっている。

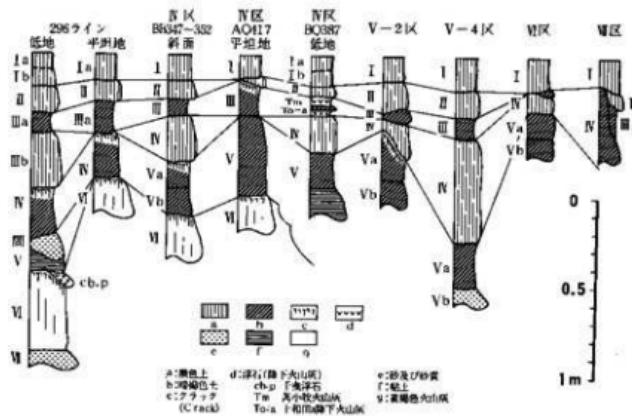
本遺跡から出土する遺物については、遺跡全体が耕作による攪乱があるためプライマリー(Primary)な状態での確認は困難である。概して、III層下部からIV層上部にかけて縄文時代前期～後期の遺物が出土している。ただ平坦地においては、風成作用によりV層中に含まれることもある。なお第VI区ではIV層上部より縄文時代中期、IV層下部から前期、そしてV層上部(V a層)からは早期の遺物が出土している。ところで昭和58年度発掘の大石平(1)遺跡においては、II層下位～III a層上部から縄文時代後期、III a層下部～IV層上部からは前期の遺物が出土している。

参考文献

- | | |
|----------------------|-------------|
| 1976 千歳遺跡(13)発掘調査報告書 | 青森県教育委員会 |
| 1981 科学Vol. 51, №9 | 町田・新井・森協 |
| 1982 発茶沢遺跡 | 青森県教育委員会 |
| 1983 鶴塙遺跡 | 青森県教育委員会 |
| 1983 古文化財教育研究報告№12 | 三辻・松山・山本・高林 |
| 1985 大石平遺跡 | 青森県教育委員会 |



第3図 遺跡周辺の地形分類図



第4図 遺跡内における土層の模式柱状図

第IV章 検出遺構と出土遺物

第1節 IV 区

1. 検出遺構

IV区で検出した遺構の総数は、205基であり、その種別は次のとおりである。

竪穴住居跡	13軒（縄文期…11軒、弥生期…2軒）
土壌	166基（160基がIV-1区、6基がIV-2区）
溝状ピット	1基
焼土状遺構	10基
屋外炉	3基
配石	12基（12基が狭い範囲にまとまっている）

これらの遺構の検出位置をみると、その大半が湧水のあるIV-1区に集中しており、わずかに溝状ピット1基とフラスコ状ピット6基が調査区南西側のIV-2区、(CK-432)グリッドを中心とした狹少範囲に、また、12基の配石も狹少範囲で、調査区北西隅に各々位置している。

(遠藤)

(1) 竪穴住居跡

第1号竪穴住居跡（第7図、第8図）

〈位置〉 C P～C R-385-387グリッドに位置する。

〈平面形・規模〉 西側の1/2しか確認できなかつたが、8.0m×約5.5mの梢円形と思われ、推定床面積は約35.5m²である。

〈重複〉 北東に検出した第8号焼土遺構と隣接、又は重複関係にあると思われるが、確認できなかつた。

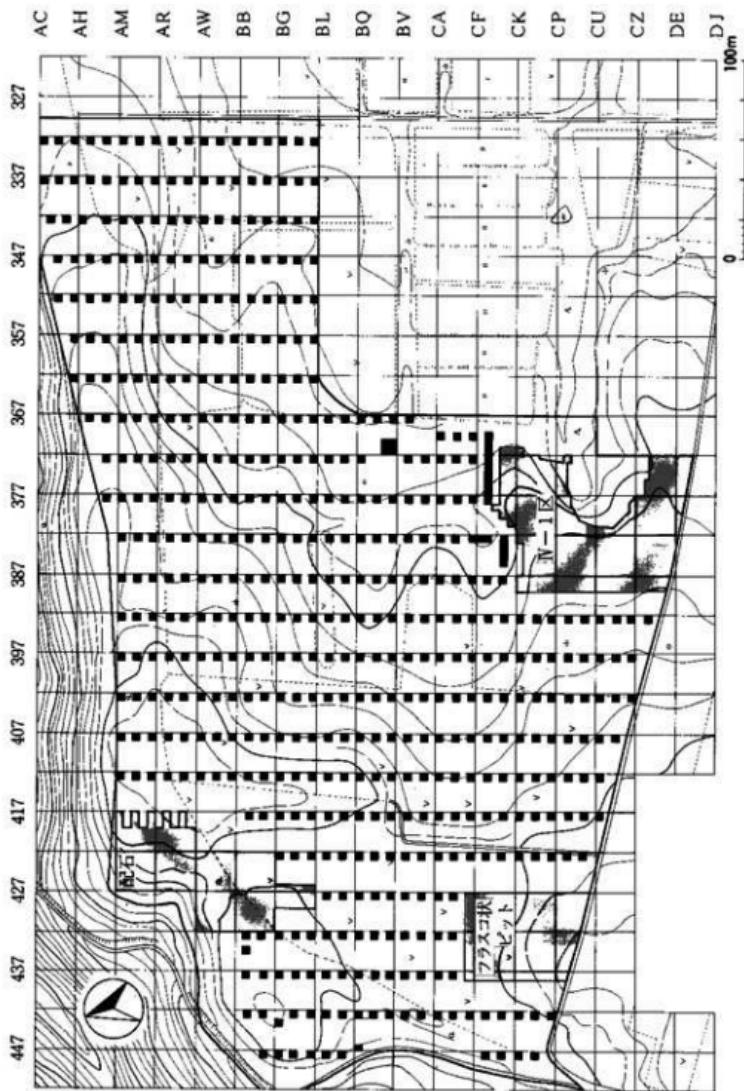
〈堆積土〉 5層に区分できた。自然堆積である。

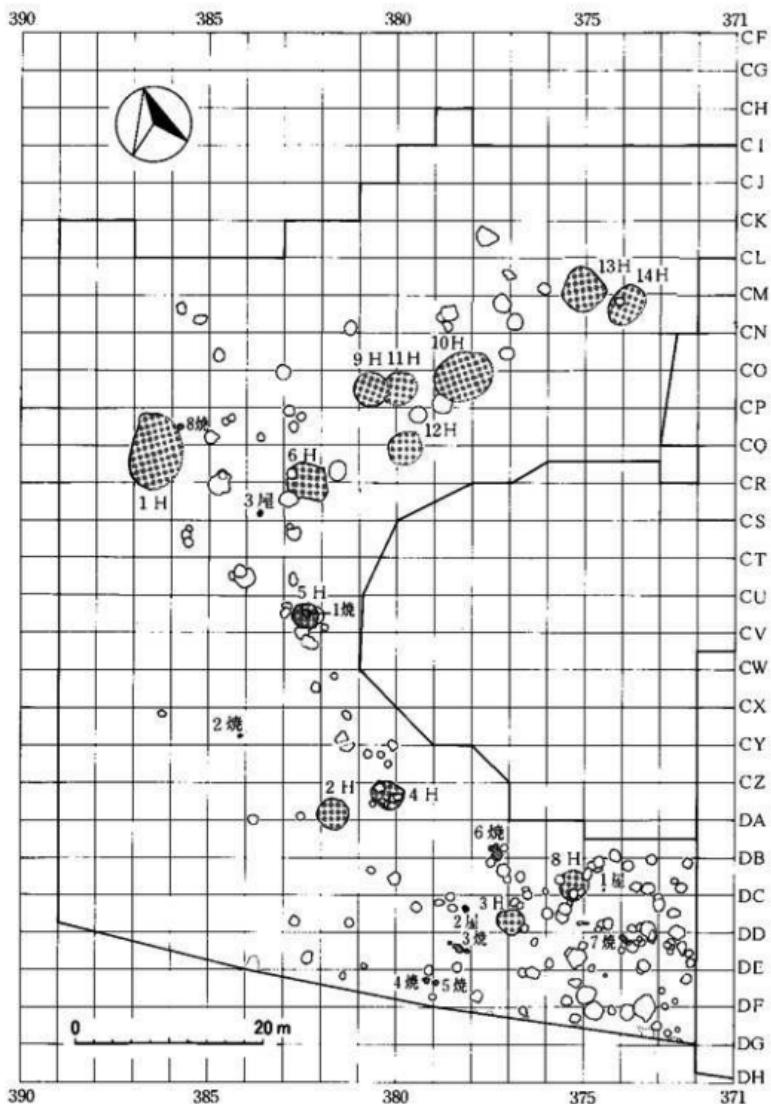
〈壁・床〉 東側の壁は確認できなかつた。壁高は南壁12cm、西壁13cm、北壁13cmで、壁の立ち上がりは急である。床面は、比較的堅緻で、平坦であるが、炉の周辺は10cm程低くなっている。

〈柱穴〉 住居跡内から22個、外から3個のピットを検出した。主柱穴と思われるのは、ピット1・2・4・5である。他の小ピットのいくつかは、補助柱穴と思われる。また、住居跡外のピットが、本住居跡と関連をもつかどうかは、不明である。

〈炉〉 住居跡の、ほぼ中央に土器埋設炉がつくられている。炉の構築は、径34cm×28cmで深さ20cmの円形のピットを掘り、そのピット内に土器（第VI群土器）を埋設したものである。また、南側に床面が焼けた部分が見られ、補助的な炉（地床炉）と思われる。

第5図 N区調査グリッド地形図





第6図 N-1区遺構配図 (土壤番号は第23図に記載
H...堅穴住居跡 焼...焼土状遺構 屋...屋外炉)

（出土遺物）ピット4から、第VI群土器の壺形土器（第8図2）が出土した。このほかには、覆土及び床面から、第IV群土器が多数出土したが、第VI群土器は、小破片のものが数点出土したにすぎない。石器は、覆土中からは石鏃1点、不定形石器（F—I II d類）1点、ピエス・エスキューユ2点、床面下位からは石鏃1点、床面上直上から敲磨器3点、石皿類3点が出土している。

第2号竪穴住居跡（第9図）

（位置）C Z・D A—381・382グリッドに位置する。

（平面形・規模）3.3m×3.15mのほぼ円形を呈し、床面積は7.8m²である。

（堆積土）4層に区分できた。自然堆積である。

（壁・床）壁高は東壁7cm、南壁11cm、西壁14cm、北壁7cmで、壁の立ち上がりは急である。床面は堅礫で、平坦である。

（柱穴）住居跡内から8個の小ピットを検出した。ピット3・8以外は、30cm前後の深さをもち、柱穴と考えられる。配置からは、ピット1・2・4～6の5本柱か、ピット1・2・4・6の4本柱と考えられる。

（炉）地床炉である。径40cm×45cmのほぼ円形を呈し、若干凹んでいる。炉は中央から、やや東側に寄っている。

（出土遺物）床面及び床面上直上から、第IV群土器が出土した。また、第I群土器の尖底部が覆土中から出土した。石器では、不定形石器（F—I II類）と敲磨器各1点と、石皿類2点が出土した。

第3号竪穴住居跡（第10図）

（位置）D C・D D—376・377グリッドに位置する。

（平面形・規模）3.0m×2.7mの楕円形を呈し、床面積は4.0m²である。

（重複）南東壁を第27号土壤に切られている。

（堆積土）5層に区分できた。自然堆積と思われる。

（壁・床）壁高は東壁20cm、南壁28cm、西壁30cmで、北壁27cmで、壁の立ち上がりは緩やかである。壁・床ともに軟弱である。

（柱穴）及び（炉）は検出できなかった。

（出土遺物）覆土中から、第IV群土器が多数出土した。石器では、石鏃・不定形石器（F—I III類）・敲磨器（凹石）が各1点と石皿2点が出土した。

第4号竪穴住居跡（第11図）

（位置）C Z・D A—379・380グリッドに位置する。

（平面形・規模）3.2m×2.92mの楕円形を呈し、床面積は7.0m²である。

〈重複〉 第9a・b号、第30号、第34a・b号土壙を切って構築している。

〈堆積土〉 9層に区分できた。自然堆積と思われる。

〈壁・床〉 壁高は、東壁5cm、南壁17cm、西壁19cm、北壁5cmである。床面は東に向かって低くなり、西と東の比高差は8cmである。

〈柱穴〉 住居内から5個のピットを検出した。ピット4は45cmの深さがあり、柱穴と思われるが、他のピットは20cm前後で、やや浅い。配置からは柱穴の可能性があるものの、疑問である。

〈炉〉 住居跡の中央から東側につくられた石閉炉である。炉の北側に石の抜取痕を検出したことから、これと3個の礎とで、「コ」の字状に組んだものと考えられる。また、炉の南側は、4cmほどの高まりが見られ、炉壁の一部をなしていたものと思われる。

〈出土遺物〉 覆土中から、第I群土器が1点の他、第IV群土器が若干出土した。石器は、ピエス・エスキューと石皿が各1点出土している。

第5号竪穴住居跡（第11図、第12図）

〈位置〉 C U-382グリッドに位置する。

〈平面形・規模〉 2.91m×2.6mのやや不整な円形を呈し、床面積は4.6m²である。

〈重複〉 第108号・第114号土壙を切って構築している。

〈堆積土〉 5層に区分できた。自然堆積と思われる。

〈壁・床〉 壁高は東壁46cm、南壁34cm、西壁49cm、北壁42cmで、壁の立ち上がりは急である。壁・床ともに堅緻である。床面はほぼ平坦で、第114号土壙の上部にロームを貼っている。

〈柱穴〉 住居内から深さ19cmのピット1個を検出したが、柱穴かどうか不明である。

〈炉〉 中央から、やや南側に寄る。炉の南側に1個の礎があり、他に礎の抜取痕を検出できなかつたので、単独燃炉と思われる。

〈出土遺物〉 床面及び床面直上から、第IV群土器が出土した。石器は、石鏃と石皿の破損品が床面から出土している。

第6号住居跡（第12図、第13図）

〈位置〉 C Q・C R-381・382グリッドに位置する。

〈平面形・規模〉 4.24m×3.76mの不整梢円形を呈し、床面積は12.7m²である。

〈重複〉 第66号、第116号土壙に切られている。

〈堆積土〉 壁高があまりなく、堆積土は2層しか確認できなかった。

〈壁・床〉 壁高は南壁9cm、北壁9cmである。床面は沢（東）に向かって低くなり、東西の比高差は13cmである。

〈柱穴〉 住居跡内から、大小あわせて7個のピットを検出した。ピット2・3は主柱穴の可能性が考えられる。ピット4は浅いことから、6は配置から、柱穴かどうか判断できない。

〈炉〉 中央から、わずかに北東寄りに位置する。方形に石を組んだ石圍炉である。

〈出土遺物〉 覆土中から、若干の第IV群土器が出土した。

第8号竪穴住居跡（第13図、第14図）

〈位置〉 D B・D C—374・375グリッドに位置する。

〈平面形・規模〉 確認した部分から推定して、径約3.2mの円形か椭円形を呈すると思われる。

〈重複〉 北壁は第84号土壤に切られ、南側では、第133a・b土壤、第134号土壤を切っている。また北東では第135号土壤と重複関係にあると思われるが、確認できなかった。

〈堆積土〉 第VI層を2cm位しか掘り込んでいたため、確認した覆土は薄い。シルト質の暗褐色土で、粘性、しまりとも弱いものが堆積していた。

〈壁・床〉 西側の約1/2しか確認できなかった。壁高は南西壁で2cm前後である。床面は、全体に軟弱であるが、炉の周辺は堅緻である。

〈柱穴〉 大小合わせて17個のピットを検出した。ピット15は、第84号土壤に切られた時の断面から柱穴であることが確認できた。配置及び深さからは、ピット15の他に、2・7a・7c・9~11などが柱穴と考えられるが、断定できない。

〈炉〉 地床炉である。

〈出土遺物〉 床面及び床面上から、多数の土器（第IV群）・石器が出土した。また、ピット4から小形の壺が出土した（第13図7）。第13図12は器面の内外に、連続山形文が施文されている。石器は、石鏃1点、不定形石器5点（F—I類1、F—IⅢ類3、F—IⅣ類1）、磨製石斧3点、石錘2点、敲磨器2点、石皿1点、輕石1点が出土した。

第9号竪穴住居跡（第15図、第16図）

〈位置〉 C O—380・381グリッドに位置する。

〈平面形・規模〉 3.5m×3.32mのほぼ円形を呈し、床面積は8.9m²である。

〈重複〉 東側で第11号住居跡を切って構築している。

〈堆積土〉 7層に区分できた。覆土中（特に第3層）に焼土を多量に含んでいる。

〈壁・床〉 壁高は南壁10cm、西壁38cm、北壁11cmで、壁は急に立ち上がっている。床面は、ほぼ平坦で、堅緻である。

〈柱穴〉 16個のピットを検出した。このうち、ピット15・16は、第11号住居跡に伴なうものかもしれない。

〈炉〉 ほぼ中央に、地床炉を検出した。

〈出土遺物〉 住居跡の床面東側から、4個体の土器が横軸して出土した。P—I・3は壺形土器P—I・4は小形の鉢形土器である。P—Iは、器内外面に連続山形文が施文されているもので、特殊な用途に用いられたものと考えられる。石器は敲磨器が3点、石皿1点が出土した。

第10号竪穴住居跡（第17図、第18図）

〈位置〉 C N・C O—377・378グリッドに位置する。

〈平面形・規模〉 北側しか確認できなかつたが、確認できた部分では、長径（東西）6.5mの楕円形を呈するものと思われる。推定床面積は、約23m²である。

〈重複〉 西壁で、第119号土壙を切って構築している。

〈堆積土〉 5層に区分した。自然堆積と思われる。

〈壁・床〉 壁高は北壁が50cmで、壁は緩やかに立ち上がる。床面は、ほぼ平坦であるが、北西では若干高く、炉の周りとの比高差は28cmである。

〈柱穴〉 大小合わせて、48個のピットを検出した。このうち主柱穴と考えられるのは、炉の局辺のピット1～8である。ピット1～4とピット5～7は、同時存在よりも、立て替え（拡張？）と考えられる。ピット1の南側には、ピット5～7に対応するピットを確認できなかつた。しかし、黒色土を掘り込んでいるため、ピットの存在を鬼のがした可能性がある。また、壁際に沿つて検出した多数の小ピットは、壁柱穴（補助柱穴）の可能性が考えられる。ピット14には、底部を欠いた浅鉢形土器が、正位に埋まっていた。

〈炉〉 中央あるいは南側に少し寄った場所に、土器埋設石圍炉を検出した。石围いに用いた礎をはずした床面上は、焼けて、硬くなつておらず、炉床と思われる。すなわち、この炉は当初、地床炉か、土器埋設炉として構築・使用され、後に円形に礎を組み、土器埋設石围炉として再び構築されたものであろう。

〈出土遺物〉 覆土内から、第I群・第IV群土器と第VI群土器が若干出土したほか、床面上からは、第VI群土器の小破片が数点出土した。石器は、敲磨器2点と石皿1点が出土した。

第11号竪穴住居跡（第15図、第16図）

〈位置〉 C O—379・380グリッドに位置する。

〈平面形・規模〉 径3.6m前後の（楕）円形を呈すると思われる。

〈重複〉 第9号竪穴住居跡に西壁を切られている。

〈堆積土〉 西壁の一部しか確認できなかつた。そこでは、2層を確認できた。

〈壁・床〉 北壁の壁高は18cmで、西壁は、第9号竪穴住居跡の床面より13cm低い。床面は、ほぼ平坦であるが、南に若干低くなり、その比高差は13cmほどである。

〈柱穴〉 7個のピットを検出した。ピット1・3～5が柱穴と思われる。

〈炉〉 地床炉である。

〈出土遺物〉 炉の北側の床面から3～5cm浮いたところに、土器が横位に潰れた状態で出土した。図のP—1は、第16図3、P—2は1・2の2個体である。また、P—3は7・8・10である。7は第VI群土器であり、一見セット関係を思わせる出土状況であるが、いくらか混在し

ている証であろう。しかし、第16図1と2は同時期のものと考えられ、本住居跡の構築時期と深い関連をもつものと考えられる。石器は、石錘と敲磨器が各1点出土している。

第12号竪穴住居跡（第19図）

〈位置〉 C P・C Q—379・380グリッドに位置する。

〈平面形・規模〉 北西側の一部しか確認できなかつたが、確認できた部分から推定すると、円形か梢円形を呈するものと思われる。規模は不明である。

〈堆積土〉 確認できた部分では、2層に区分できた。

〈壁・床〉 確認できた北西壁の高さは17cmである。床面は沢に向かって低くなり、炉の近辺までの比高差は14cmである。

〈柱穴〉 4個のピットを検出したが、柱穴かどうかは不明である。

〈炉〉 方形の右圓炉である。

〈出土遺物〉 覆土中から、第I群・第IV群土器のほか第VI群土器が出土した。また、床面直上から第IV群土器が出土した。石器は、敲磨器が4点出土した。

第13号竪穴住居跡（第20図、第21図）

〈位置〉 C L・C M—374・375グリッドに位置する。

〈平面形・規模〉 南東壁を確認できなかつたが、4.77m×4.76mの不整（梢）円形を呈する。推定床面積は14.5m²である。

〈堆積土〉 4層に区分できた。第3・4層は、沢に向かって見られ、壁は確認できなかつた。

〈壁・床〉 確認した北壁の高さは、21cmである。床面は、沢（南）に向かって低くなり、その比高差は18cmである。

〈柱穴〉 大小合わせて、10個のピットを検出した。配置からピット1・5—7が柱穴と思われるが、断定はできない。

〈炉〉 石圓炉である。中央から、幾分東に寄っている。

〈出土遺物〉 覆土及び炉の上位から、若干の第IV群土器と、敲磨器・石皿（床直）が各1点出土した。

第14号竪穴住居跡（第20図、第21図）

〈位置〉 C L・C M—373・374グリッドに位置する。

〈平面形・規模〉 北東側の約1/2しか確認できなかつたが、4.65m×(3.50)mの梢円形を呈すると思われる。

〈重複〉 第132号土壤を切って構築している。

〈堆積土〉 斜面を掘り込んでいるため、南側は確認できなかつた。確認できた北側では、5層に区分できた。このうち、第5層には焼土をブロック状に含んでいる。

(壁・床) 壁高は北壁が37cmで、やや急に立ち上がっている。床面は、沢に向かって、やや低くなり、炉の近辺までの比高差は10cmほどである。

(柱穴) 2個の小ピットを検出した。ピット1(深さ39cm)は、土壤との切合面と覆土の違いから、柱穴であることが確認できたが、ピット2は、柱穴かどうかは不明である。

(出土遺物) 覆土及び床面直上から、若干の第IV群土器と、ピエス・エスキュー1点、床面から敲磨器1点が出土した。

(畠山)

第1表 桁穴住居跡ピットの深さ一覧(単位:cm)

第1号檼穴住居跡

番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
深さ	52	62	29	44	61	24	11	13	13	13	11	8	14	7	11	20	3	4	5	6
番号	21	22	23	24	25															
深さ	6	4	10	3	14															

第2号檼穴住居跡

番号	1	2	3	4	5	6	7	8											
深さ	28	32	7	27	31	31	28	7											

第4号檼穴住居跡

番号	1	2	3	4	5														
深さ	21	23	17	45	16														

第6号檼穴住居跡

番号	1	2	3	4	5	6	7												
深さ	23	34	30	18	7	69	21												

第8号檼穴住居跡

番号	1	2	3	4	5	6	7a	7b	7c	8	9	10	11	12	13	14	15		
深さ	51	28	16	14	18	20	42	15	35	56	26	44	28	16	11	21	37		

第9号檼穴住居跡

番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16			
深さ	44	30	31	29	30		8	11	18	54	51	58	25	10	10	26			

第10号檼穴住居跡

番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
深さ	43	51	52	55	49	77	65	67	68	51	9	21	14	22	17	15	28	37	17	19
番号	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40
深さ	9	32	26	12	10	13	8	13	7	26	3	3	14	7	11	19	15	23	15	
番号	41	42	43	44	45	46	47	48												
深さ	15	15	42	43	36	12	23	16												

第11号檼穴住居跡

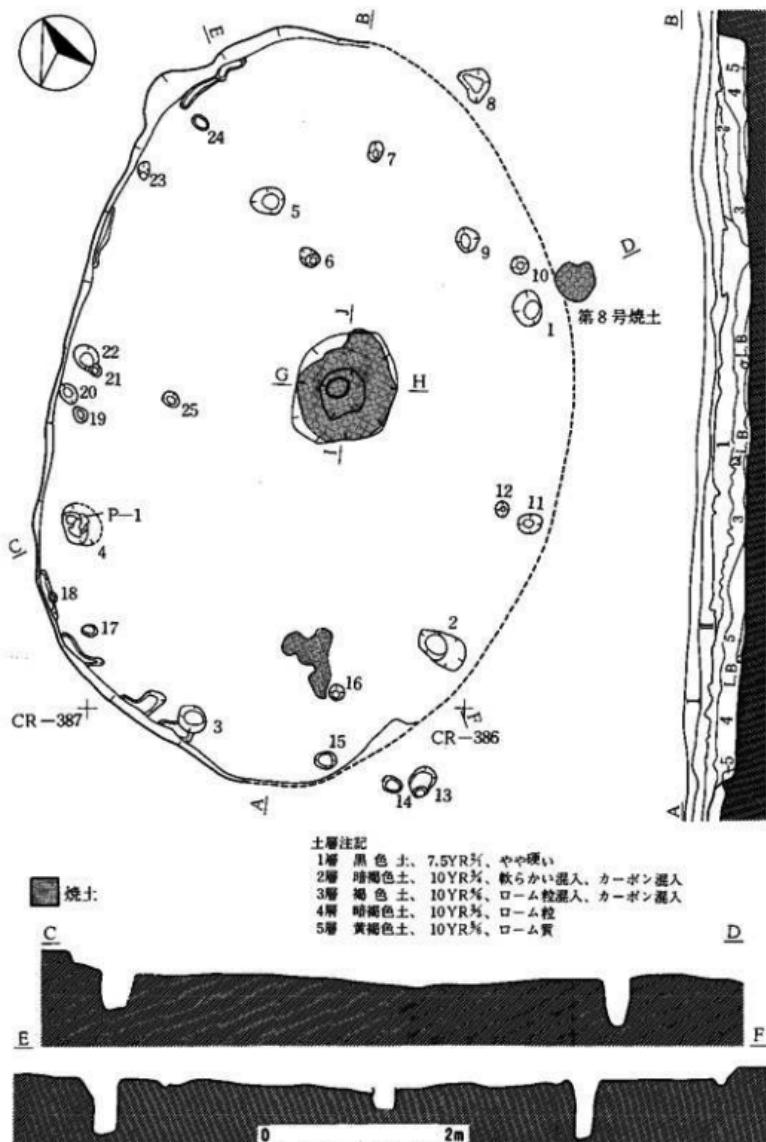
番号	1	2	3	4	5	6	7												
深さ	48	25	40	32	40	6	7												

第12号檼穴住居跡

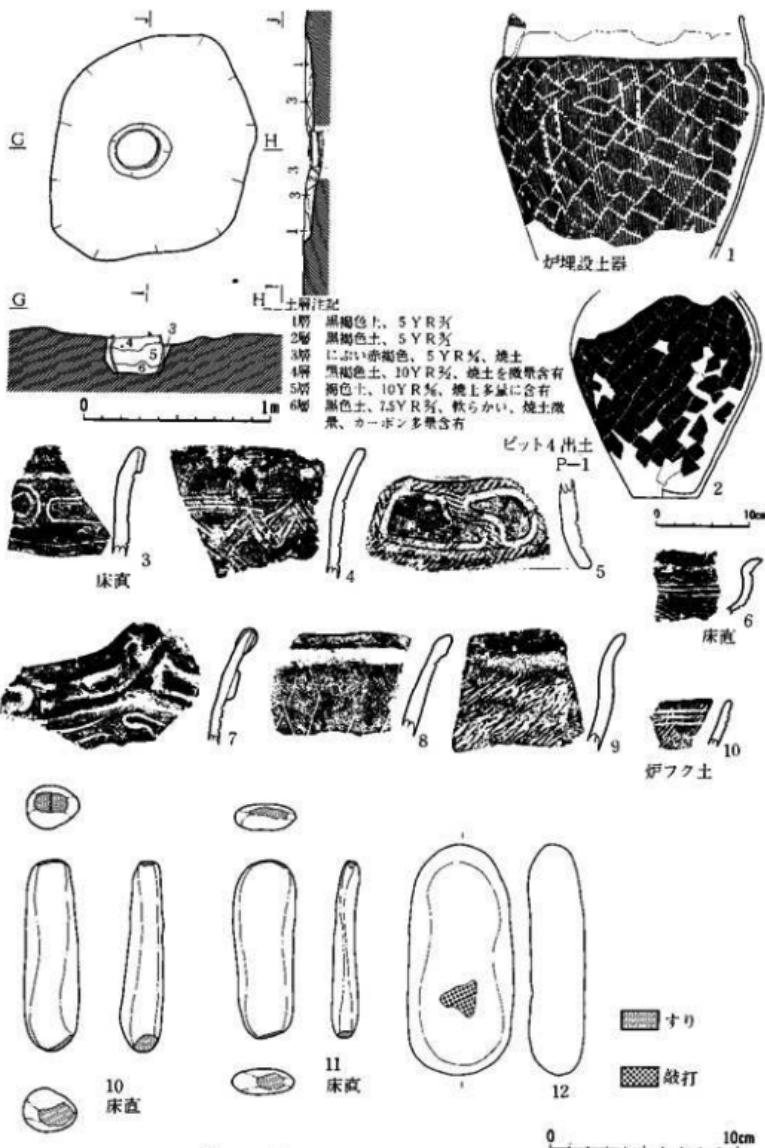
番号	1	2	3	4															
深さ	22	13	6	9															

第13号檼穴住居跡

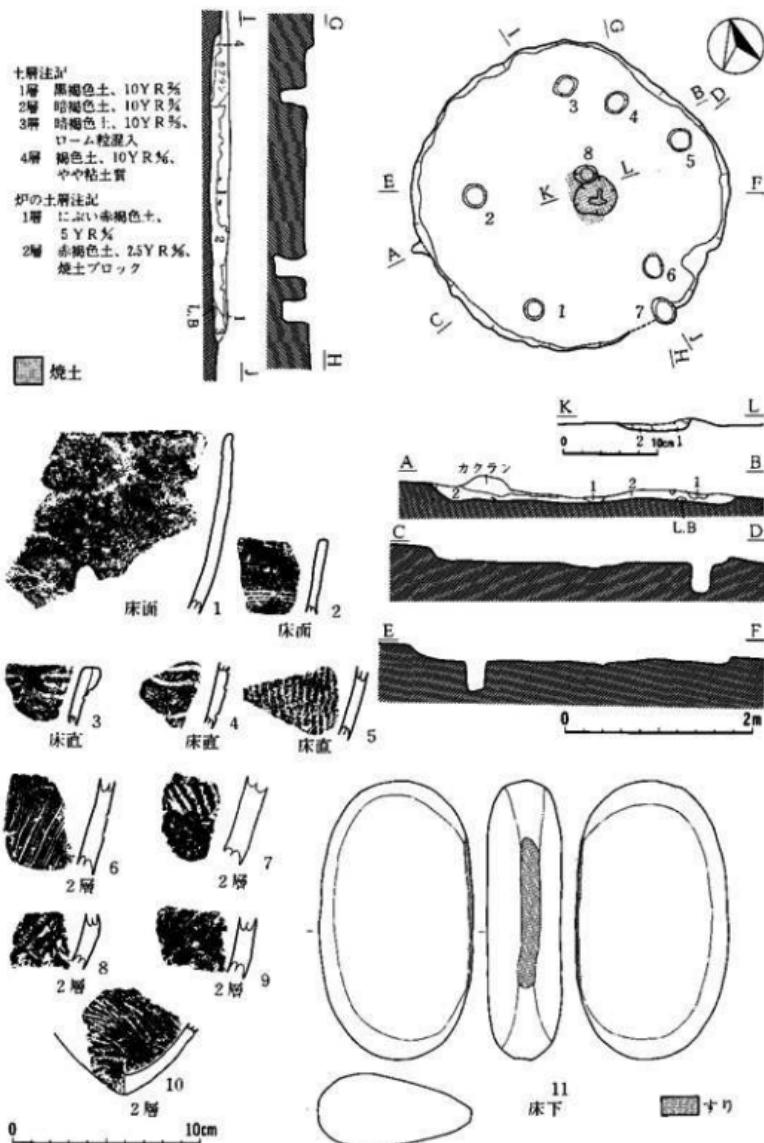
番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10									
深さ	16	11	25	8	18	15	19	7	5	21									



第7図 第1号竪穴住居跡

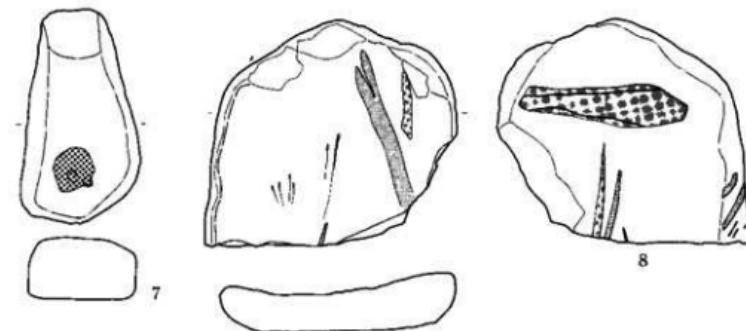
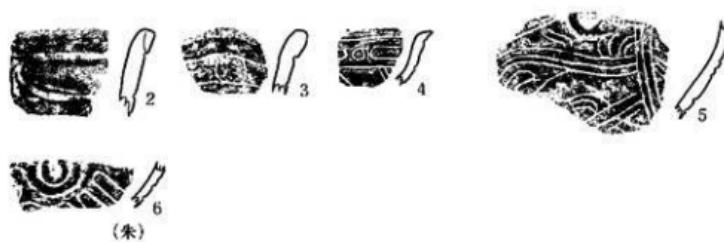
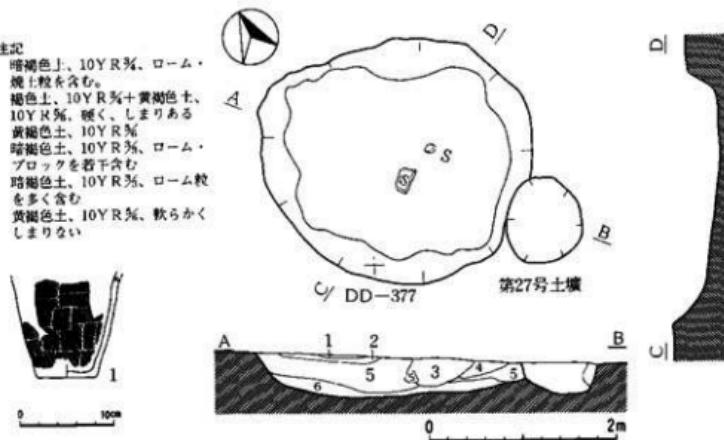


第8図 第1号竪穴住居跡の炉と出土遺物

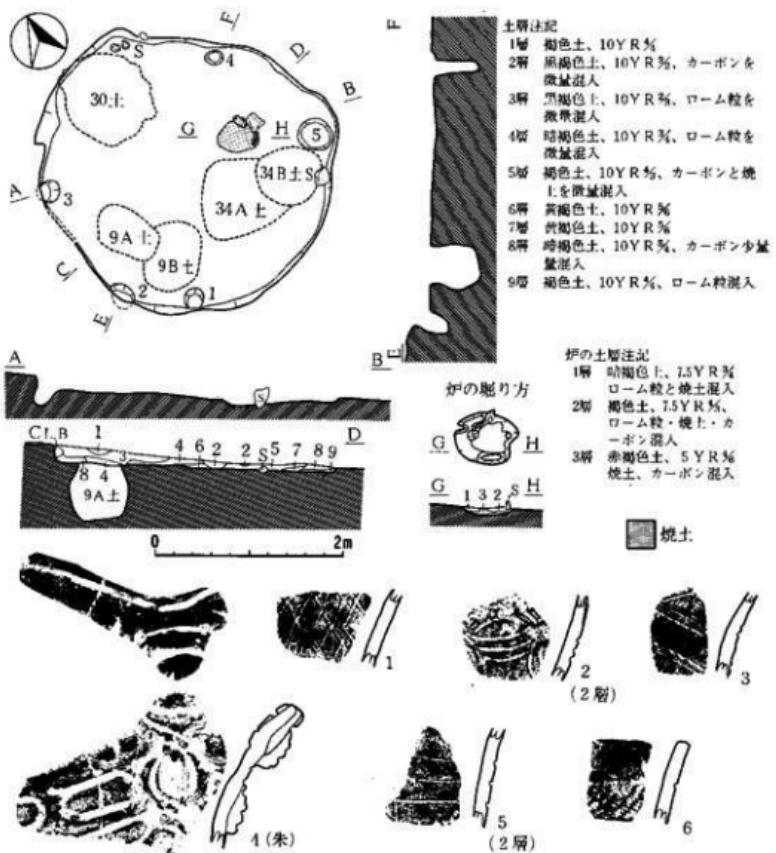


第9図 第2号竪穴住居跡と出土遺物

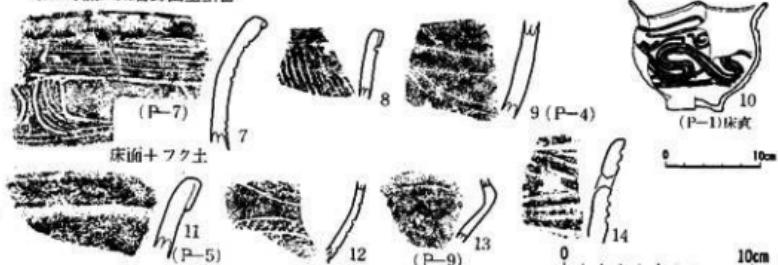
- 土層記述
- 1層 増褐色土、10Y R 3%、ローム、燒土粒を含む。
 - 2層 暗褐色土、10Y R 3%+黃褐色土、10Y R 3%、硬く、しまりある。
 - 3層 黃褐色土、10Y R 3%
 - 4層 疏褐色土、10Y R 3%、ローム・ブロックを若干含む。
 - 5層 暗褐色土、10Y R 3%、ローム粒を多く含む。
 - 6層 黄褐色土、10Y R 3%、軟らかくしまりない。



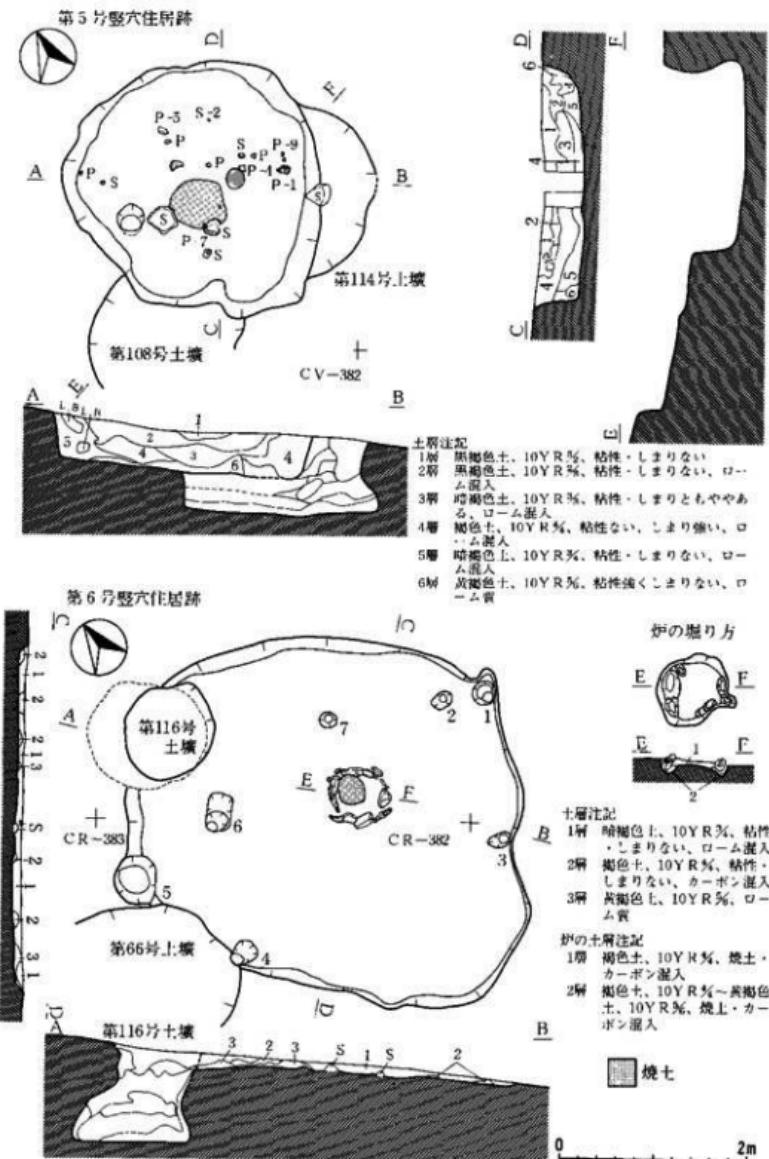
第10図 第3号竪穴住居跡と出土遺物



第5号竪穴住居跡出土土器

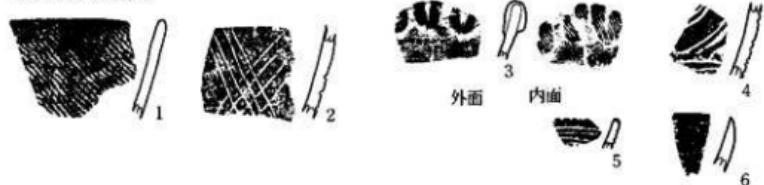


第11図 第4号竪穴住居跡と出土土器及び第5号竪穴住居跡出土土器



第12図 第5号・第6号竪穴住跡

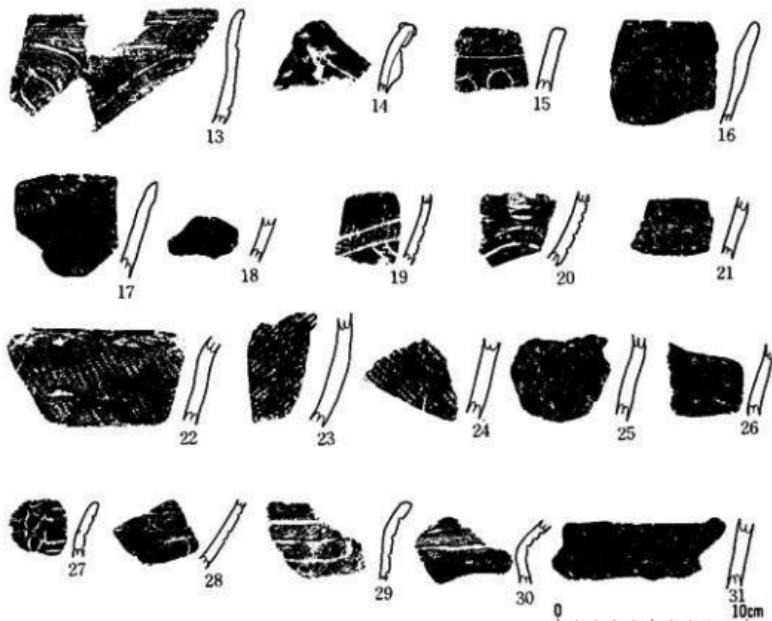
第6号竪穴住居跡



第8号竪穴住居跡



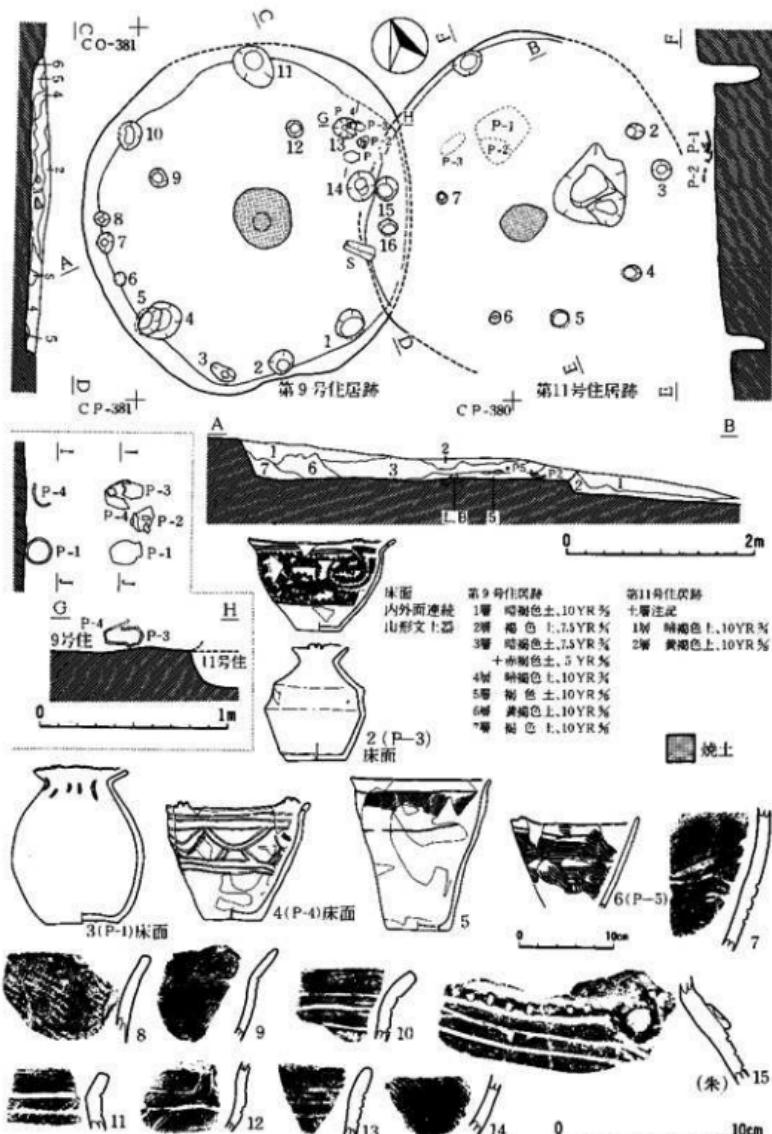
(内外面速乾山形文土器)



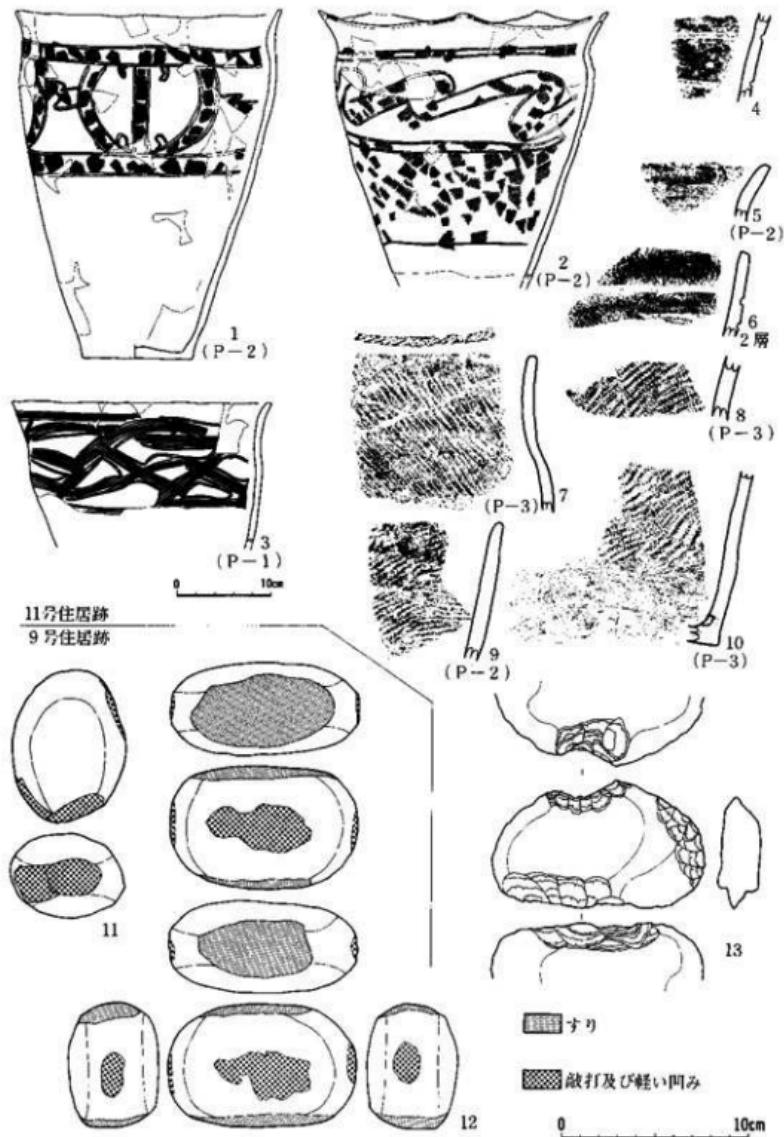
第13図 第6号・第8号竪穴住居跡出土遺物



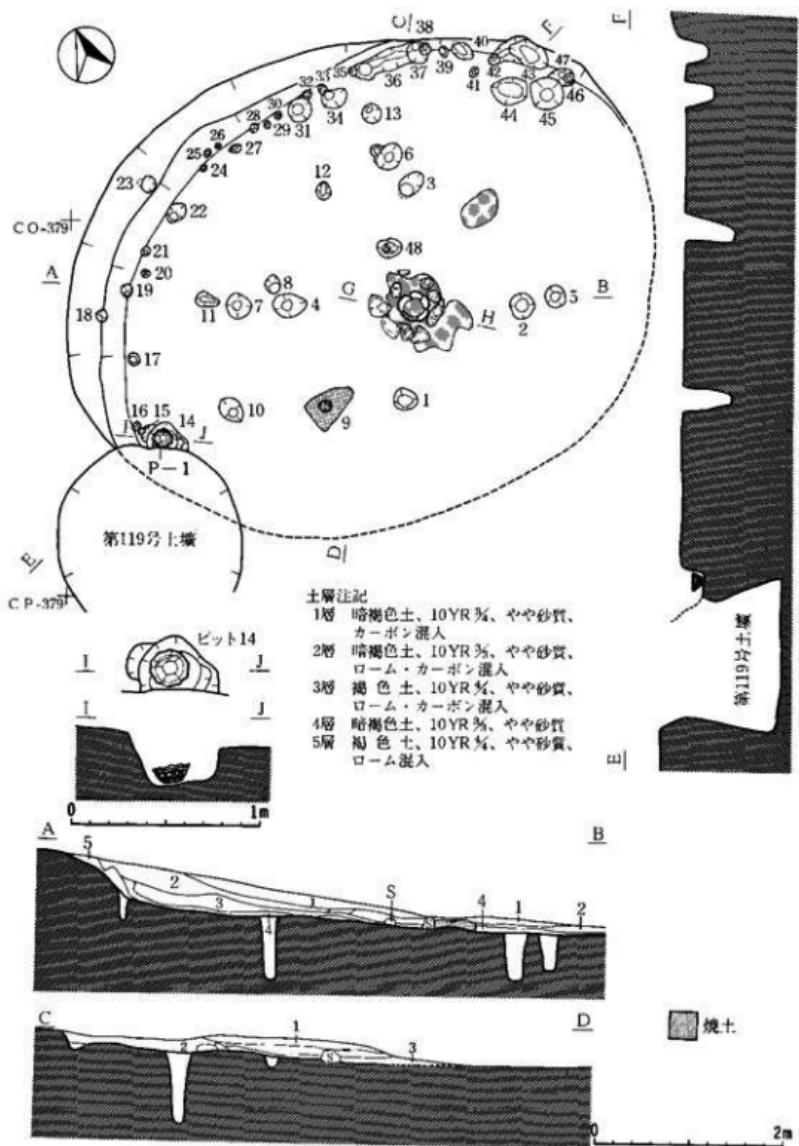
第14図 第8号竪穴住居跡と出土遺物



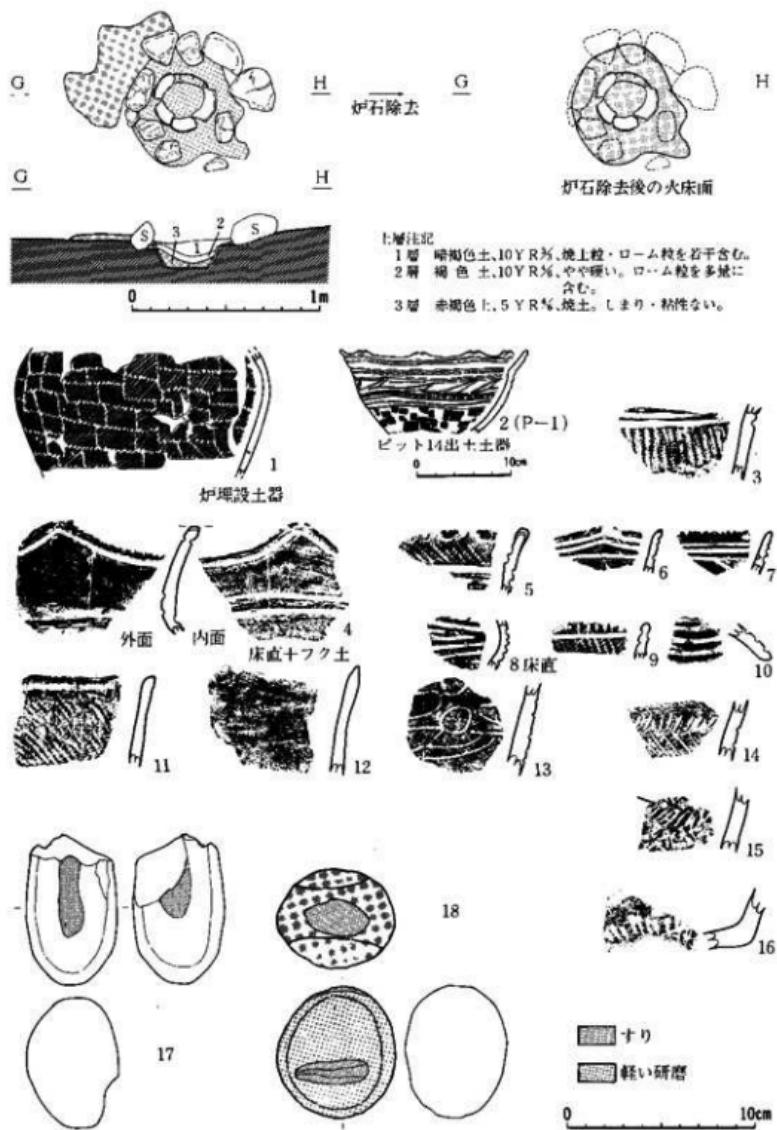
第15図 第8号・第11号竪穴住居跡と第9号竪穴住居跡出土土器



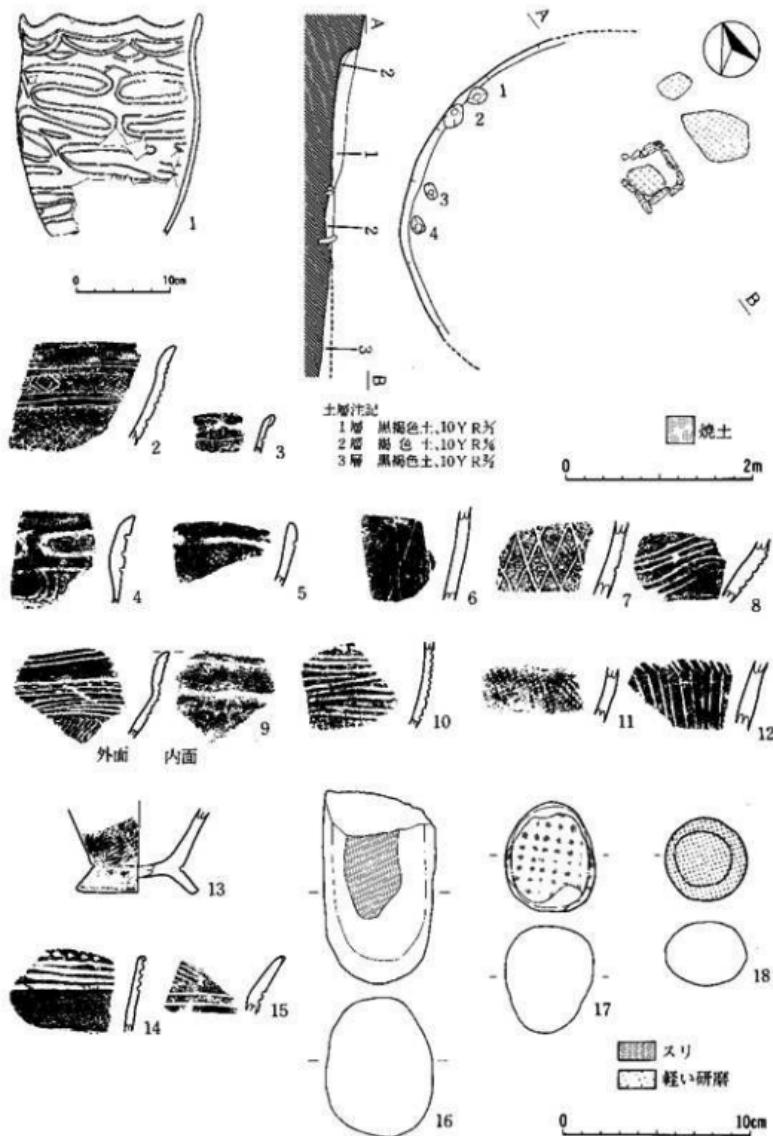
第16図 第9号竪穴住居跡出土石器、第11号竪穴住居跡出土遺物



第17図 第10号竪穴住居跡



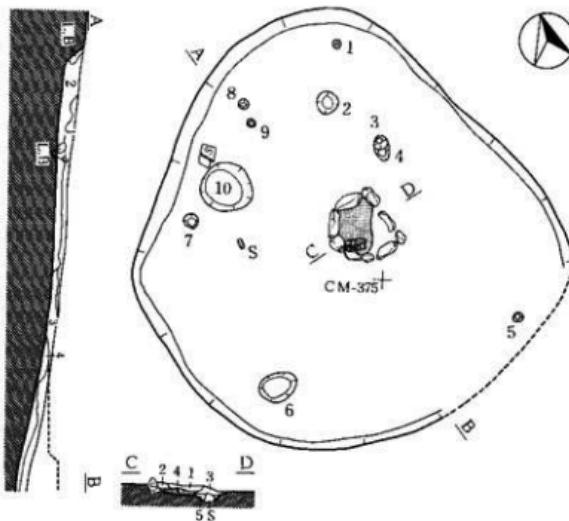
第18図 第10号竪穴住居跡、炉と出土遺物



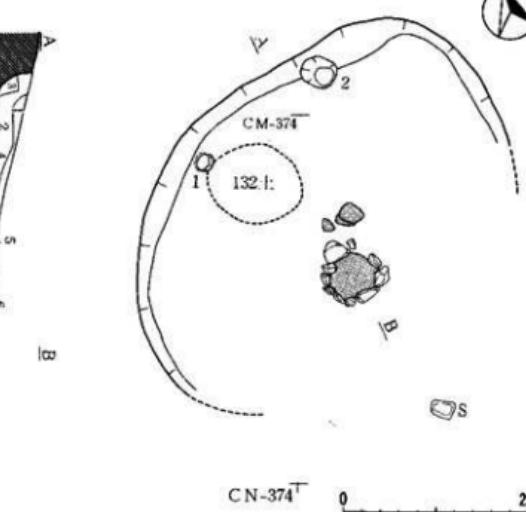
第19図 第12号竪穴住居跡と出土遺物

第13号竪穴住居跡
土壌記
1層 暗褐色土、10Y R %
粘性弱く、しまりある
2層 暗褐色土、10Y R %
粘性、しまりある
3層 黒褐色土、10Y R %
粘性、しまりある
4層 暗褐色土、10Y R %
粘性、しまりある

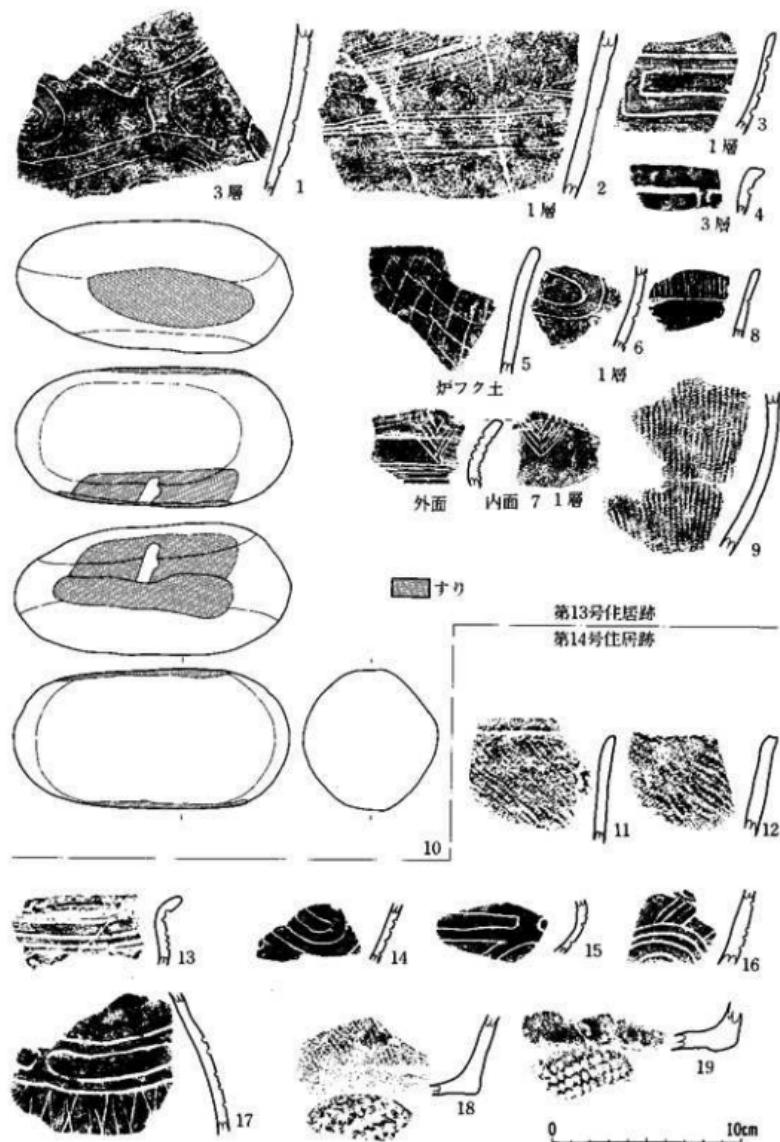
かの注記
1層 黒褐色土、10Y R %
燒土・カーボン混入
2層 暗褐色土、10Y R %
カーボン混入
3層 黑褐色土、10Y R %
カーボン混入
4層 暗褐色土、5 YR %
燒土
5層 暗褐色土、10Y R %



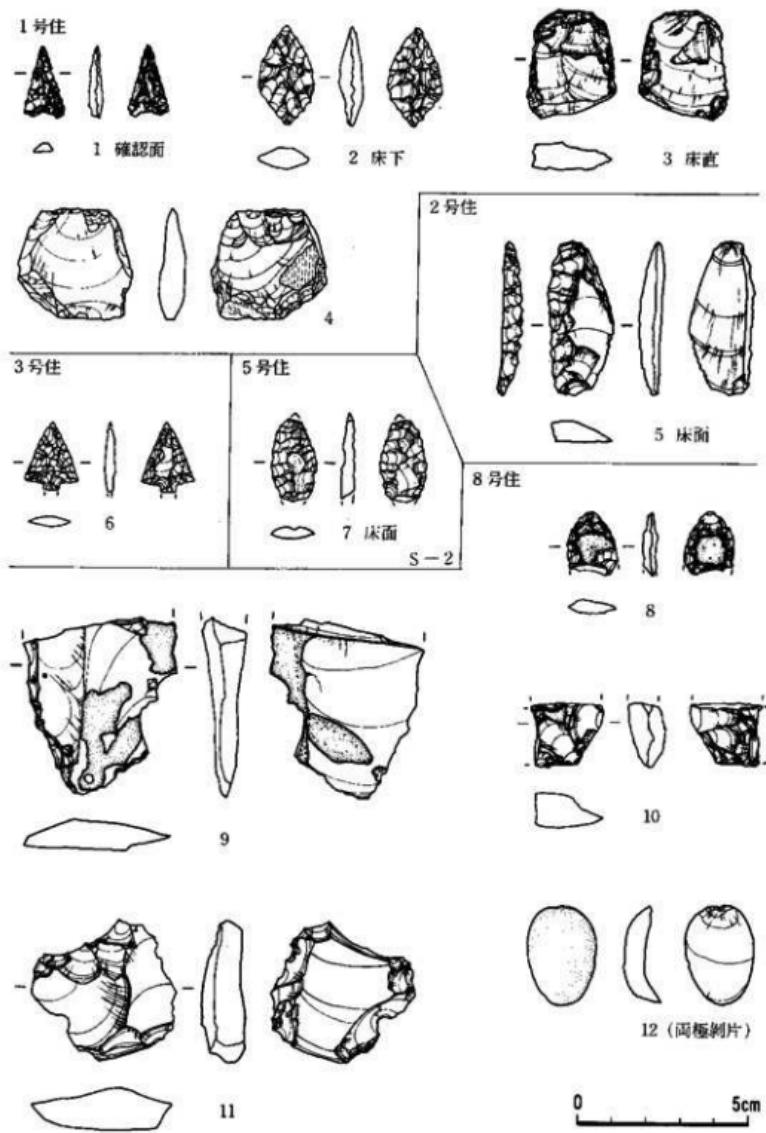
第14号竪穴住居跡
1層 土壌記
1層 黑褐色土、10Y R %
粘性・しまりある
2層 黑褐色土、10Y R %
粘性・しまりある
3層 暗褐色土、10Y R %
ローム粒を多量に含む
4層 暗褐色土、10Y R %
粘性、しまりある
5層 赤褐色土、2.5YR %
燒土
6層 黄褐色土、7.5YR %
燒土混じり



第20図 第13号・第14号竪穴住居跡



第21図 第13号・第14号竪穴住居跡出土遺物



第22図 穹穴住居跡出土遺物実測図（第I群石器）

(2) 土 壤

IV区で検出した土壤は、総数167基であり、うち160基がIV-1区で、6基がIV-2区で検出された。以下、IV-1・IV-2区の順で記載する。

IV-1区における土壤（第24-44図）

IV-1区における土壤の配置は、第6図でもわかるとおり、湧水の存在する沢を中心に馬蹄形状になって群在している。

IV-1区は、その東側隣接地が昭和58年度に発掘調査を実施し多数の遺構を検出し多量の遺物の出土をみた当時のIII区にあたることから、III区の遺構の在り方等を抜きにしては考察することができない。いわばIII区と連続した面でとらえるべき重要な地域である。

本区における土壤の在り方は、約5,000m²に160基もの土壤が密集している状況である。そこで第6図に掲示した遺構配置図には、土壤番号をすべて付すと煩雑になり、遺構配置図の本来の目的が半減することから、土壤番号を付さないことにし、第23図のごとくIV-1区を便宜上、A・B・Cの三つのブロックに分け番号を付することとした。以下の記述に際しては、A・B・Cのブロック順で行うこととした。従って、土壤番号は、調査時に付した番号をそのまま本書に踏襲したので必ずしも連番にはなっていない。

なお、前記した土壤の数160という数値は、最終土壤番号と合致しないが、その理由は、重複している土壤や、精査中に一つの土壤の中にもう一つの土壤が検出された場合に、各々異なる数値の番号を付した場合と、一つの番号でa・b・Cの細分記号を付した場合とがあったからであり、実際の最終土壤番号の137と上記の160との間に差が生じたわけで、その差は、a・b・Cの記号を付した総計23個分に相当する。

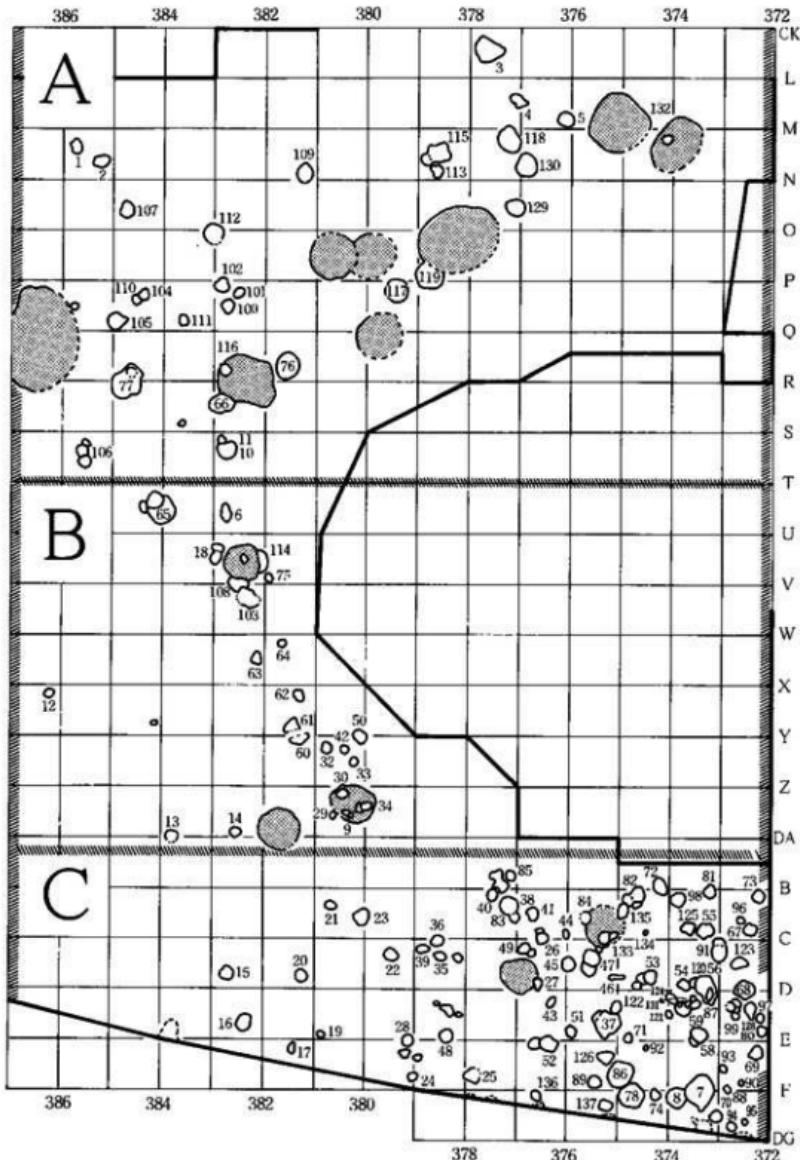
個々の土壤についての説明は、表を使い「土壤観察一覧表」としてまとめ、本区全体における土壤の帰属時期等については、第V章で記述する。

観察一覧表における凡例

1. 重複関係…新旧の意味で記号を利用して表現した。
2. 平面形……基本的には、円形・梢円形を使用しているが、なかには、形容詞的意味で不整の文字を附加している場合がある。また、円形・梢円形についての基準は、数学的な概念規定に困るものではなく、あくまでも主観による判断である。
3. 計測値……単位は、すべてcmであり、計測部位は、その土壤のもつイメージを損なわないよう最も妥当と思われる箇所である。
4. 欠番土壤…31・57・79番は欠番である。
5. 出土土器…◎一多、○一少、△一微量、×一なし

実測一復原完形土器個数（挿図掲載）

（遠藤）



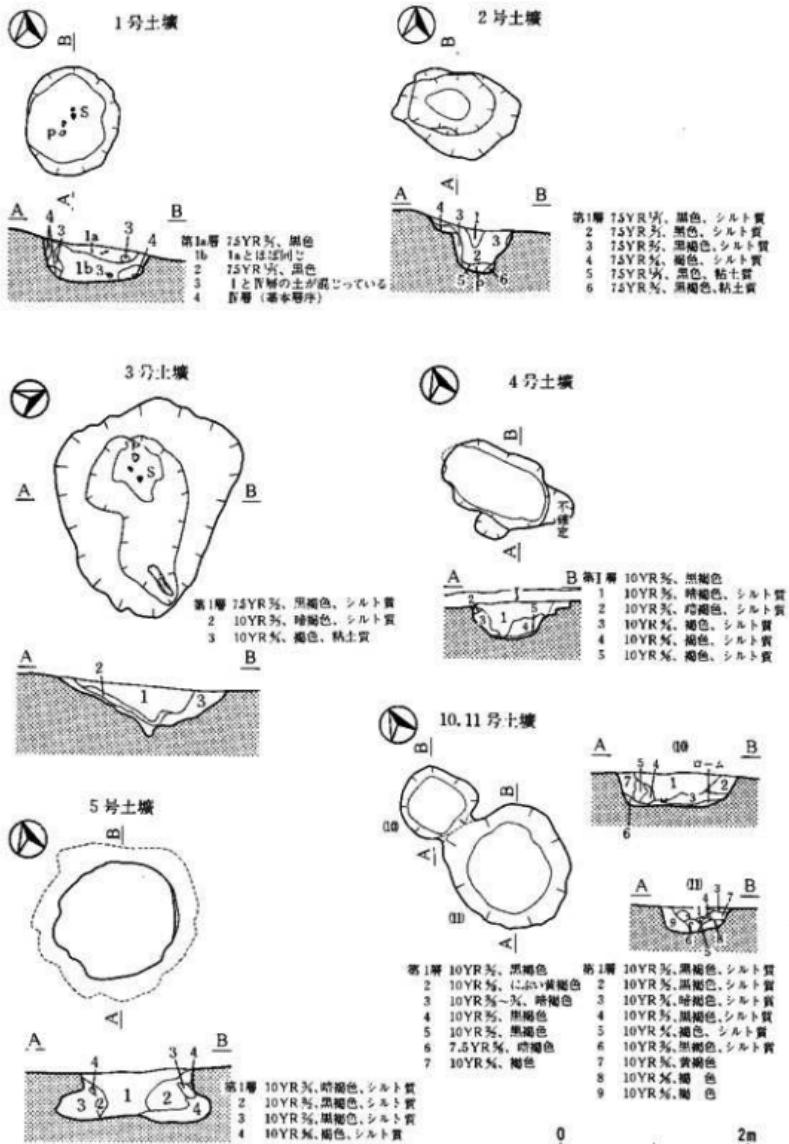
第23図 遺構配置図（土壤番号付記）

第2表 土壌観察一覧表

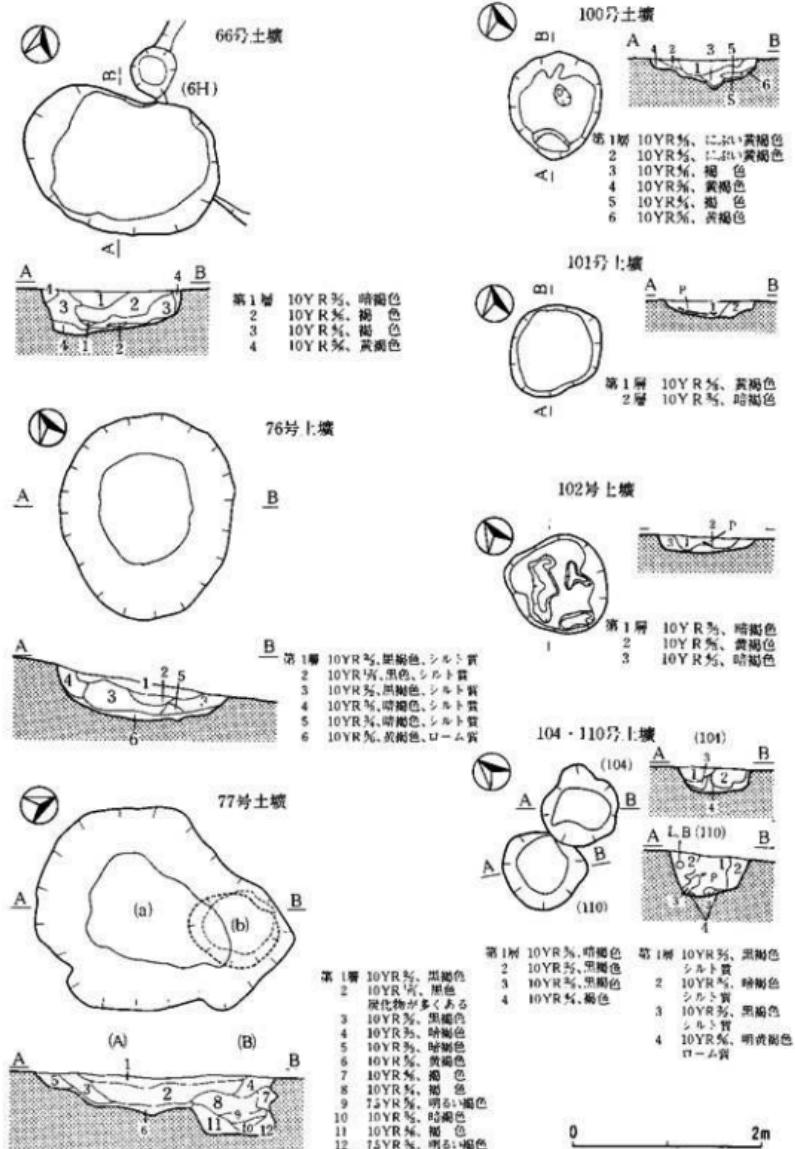
十 番 順 序 号	地図上位置	参考用語	下 方 左 右 方 上 方	計測値 (m)		比高差		上坡 の 時 間	路 面 状 況
				前 進 度	後 退 度	左 轉 度	右 轉 度		
				前進度	後退度	左轉度	右轉度		
1 CM-365	なし	円 滑	115×97	95×89	45	△	△		
2 CM-365	*	不定形	125×90	47×35	△	△	△		
3 CK-377	*	不定形	225×200	76×155	45	×	○		
4 CL-376	*	円 滑	125×75	125×55	45	△	○		安全、土壁等
5 CL-376	*	円 滑 フラスコ形	125	125	55	△	○		
10 CS-382	丘上 不規	円 滑	125	125	55	○	○		
11 CS-382	丘上 不規	円 滑	75	75	35	△	○		
66 CR-382-1	(日) 6日	滑 円 滑	235×945	189×120	45	△	3		
26 CQ-381	なし	滑 円 滑	125×105	125×95	50	△	○		
77a CQ-R-384	なし	不定形	200×225	180×100	45	○	○		
77b CQ-R-384	なし	円 滑	125	125	55	△	○		
100 CP-382	なし	円 滑	115×100	85	35	△	○		
101 CP-382	*	円 滑	95	95	35	○	○		
102 CP-382	*	円 滑	75	75	35	△	○		
104 CP-384	丘上 不規	不規 円 滑	125	125	35	△	○		
105 CP-384-5	なし	不規 円 滑	125×100	125×95	35	△	○		
106 CS-385	なし 不規	円 滑	100	100	45	△	○		
106a *	なし	円 滑	100	100	45	△	○		
107 CX-384	なし	円 滑	145×120	125×70	25	△	○		
109 CM-381	*	日 滑	150×125	155×115	35	△	○		
110 CP-384	丘上 不規	不規 円 滑	85	85	45	△	○		
111 CP-382	なし	日 滑 フラスコ形	85×75	155×100	35	○	○	C	
112 CN-0-385	なし	円 滑 フラスコ形	125	125	35	○	○	C	
113 CM-378	北の山地 北土	円 滑 フラスコ形	125×100	125×125	45	△	○		
115a CM-378	北の山地 北土	円 滑 フラスコ形	125	125	45	△	○		
116 *	*	不定形	125×125	125×125	45	△	○		
116 CQ-382	(月) 6月	円 滑 フラスコ形	120	120	125	△	○		
117 CP-379	なし	円 滑 フラスコ形	125	125	35	○	○	C	
118 CM-377	なし	円 滑 フラスコ形	125×100	125×125	35	△	○		
119 CP-O-385	(月) 6月	円 滑	200	200	35	○	○		
120 CM-378	なし 不規形	125×100	125×125	35	△	○			
120 CM-378	なし	円 滑 フラスコ形	125	125	35	○	○		
121 CM-377	*	円 滑 フラスコ形	125	125	35	○	○		
122 CM-377	*	円 滑 フラスコ形	125	125	35	○	○		
123 CM-374	(月) 6月	滑 円 滑 フラスコ形	125	125	35	○	○		
6 CT-382	なし 不規形	125×100	125×125	35	△	○			
9a CZ-382	(月) 6月	円 滑 フラスコ形	75×45	75×55	55	○	○		
9b CZ-382	(月) 6月	円 滑 フラスコ形	75×55	75×55	55	○	○		
12 CX-386	なし	円 滑 フラスコ形	100×75	100	50	△	○		
13 CZ-D-382	*	円 滑 フラスコ形	100	100	45	△	○		
14 CZ-382	*	円 滑 フラスコ形	65	65	45	△	○		
16 CZ-D-382	*	不定形 フラスコ形	65	65	45	△	○		
16b *	不定形	(月) 6月	100	100	45	△	○		
長谷中央 タビアツ									
滑走									
29 CZ-380	低山の山 4日	円 滑 フラスコ形	75	75	35	△	○		
30 CZ-380	(4日)	円 滑 フラスコ形	75	75	35	△	○		
32 CY-380	なし	円 滑	75	75	35	△	○		
33 CY-380	*	円 滑	75	75	35	△	○		
34a CZ-379-40	(4日)	不定形	75×45	75	35	△	○		
34b *	a-b-b型	円 滑 形	75×45	75	35	△	○		
42 CY-380	なし	円 滑 フラスコ形	75	75	35	△	○		
58 CY-X-380	不定形	円 滑 形	75	75	35	△	○		
66 CX-T-381	丘上 不規	不定形	105×175	70×100	45	△	○		
61 CX-381	丘上 不規	不定形	105×175	70×100	45	△	○		
62 CX-381	なし	円 滑	105×175	70×100	45	△	○		
63 CW-382	*	円 滑	105×175	70×100	45	△	○		
64 CW-382	*	円 滑 フラスコ形	105×175	70×100	45	△	○		
65 CT-T-384	b(c)	円 滑	105×175	70×100	45	△	○		
66 *	*	円 滑 形	75	75	35	△	○		
68 CT-384	*	円 滑	75	75	35	△	○		
75 CU-381	なし	円 滑	105×175	70×100	45	△	○		
76 CY-382	なし 不規	不定形 丘上 不規	105×175	70×100	45	△	○		
69 CU-T-382	(3日) 丘上 不規	(月) 6月	105×175	70×100	45	△	○		
114 CU-381-2	(5日)	円 滑 フラスコ形	25	25	20	△	○		
7 DE-Y-375	(8日)	不定形	275×120	260×150	30	△	○		
8 DE-Y-375	(7日)	円 滑	275×120	260×150	30	△	○		
15 DC-382	なし	円 滑	175×100	165×75	35	△	○		
16 DC-382	*	木林地	175×100	165×75	35	△	○		
17 DE-381	*	円 滑	105×175	70×100	45	△	○		
19 DD-386	*	不規円滑	85	85	35	△	○		
20 DC-384	*	円 滑	85	85	35	△	○		
21 DB-386	*	円 滑	85	85	35	△	○		
22 DC-379	*	円 滑	105	105	35	△	○		
23 DB-379-30	*	円 滑	105	105	35	△	○		
24 DC-379-4	*	円 滑	105	105	35	△	○		
25 DE-377	*	円 滑	105×175	70×100	45	△	○		
26 DB-C-376	b	円 滑 形	75	75	45	△	○		
26b *	(月) 6月	不定形	75	75	45	△	○		
27 DC-379	(3日)	円 滑 形	105×175	70×100	45	△	○		
28 DC-E-379	なし	円 滑 形	105×175	70×100	45	△	○		
35 DC-378	*	円 滑 形	105×175	70×100	45	△	○		
36 DC-378	*	円 滑 形	105×175	70×100	45	△	○		
37 DD-375	なし	不定形 不規	105×175	70×100	45	△	○		
37b *	102土	不定形 不規	105×175	70×100	45	△	○		
38 DE-377	なし	円 滑	105	105	35	△	○		
39 DC-378	なし	円 滑	105	105	35	△	○		
40 DE-377	*	円 滑	105	105	35	△	○		
41 DB-378	*	不定形 フラスコ形	105×175	70×100	45	△	○		

土 壹 名	地出グリッド	半剖開法	下層部 形 番	試験面 (m)	出土量物				上層 の 性 質
					土 壤 形	石 岩	木 植	其 他	
43 DB-38	なし	角 扇 形	16×15	70×35	45	○	○	○	
44 DB-32-6	*	不定 形	75×25	55×35	35	△			
45 DC-32-4	*	円 扇 形	120	65×65	45	△			
46 DC-32-5	*	130×30	130×15	45	○	○	○		
47a DC-35	b-133土	円 扇 形	140	115	55	○	○		
47b *	不定 形	-	180×(1)	(1)-	○	○	○		
48 DD-38	なし	円 扇 形	100	125	35	X			
49a DC-35	b	円 扇 形	100	35	35	X			
49b *	不定 形	55×70	55	35	○				
51 DD-35	なし	円 扇 形	95×30	55	35	○	○	○	
52a DE-38	(b)	円 扇 形	95	(1)-	35	○	○	○	
52b *	不定 形	145×120	120×95	25	△	○	○	○	
53a DC-35	(c)	小 扇 形	(1)-	(1)-	35	△	○	○	
53b *	a-5号	円 扇 形	60	65×35	35	△			
54 *	不定 形	110×(1)	90×45	35	△				
55 DC-35	133土	握 扇 形	105×35	60	35	△			
56 DB-32	なし	不定 形	130	100	60	○	○		
56a DC-32-2	a-133土	円 扇 形	100	120	55	○	○		
56b *	不定 形	130×15	100	70	35	△	○	○	
58a DD-E-32	b	不定 形	145×120	(1)-	35	△	○	○	
58b *	不定 形	130×15	100	70	35	△	○	○	
59a DD-37	b	円 扇 形	100	110	35	△	○		
59b *	不定 形	100×(1)	85	35	△	○			
60a DD-32	b-133土	不定 形	100	125×35	35	△	○		
60b *	不定 形	50×45	45×30	35	△	○			
61a DB-32	133土	握 扇 形	100	110	10	○	○		
61b DC-32-2	なし	4号 扇 形	120	115	35	△	○		
62a DB-32	*	不定 形	115×100	25	35	△			
62b DF-32-2	*	不定 形	105×95	45×25	35	△			
71 DD-32	*	握 扇 形	100×80	75×30	35	△			
72 DA-B-32	*	不定 形	100×115	75	35	△	○		
73 DB-32	*	円 扇 形	105	85	25	○	○		
74 DF-32	*	不定 形	95×85	65×40	35	△	○		
75 DE-F-32	*	円 扇 形	200	170	35	○	○		
76 DD-32	*	円 扇 形	100	130	120	○	○		
81 DA-B-32	なし	不定 形	100	100	35	△	○		
82a DB-32	(133上-a-5号不)	握 扇 形	125×(1)	(125×30)	35	○	○		
82b *	握 扇 形	140×(1)	(140×100)	(125×15)	35	○	○		
82c DB-32	(a-b)	不定 形	120×(1)	(90×15)	35	○	○		
83 DR-32-7	(a-b)	円 扇 形	50	50	35	△			
84 DR-32-5	(a-b)	円 扇 形	50	50×50	45	△	○		
85 DA-32	なし	小 扇 形	50	50×40	45	△	○		
86 DE-32-5	なし	円 扇 形	200	125	35	○	○		
87 DD-32	133-133土 不規	不定 形	70×(1)	(125×100)	35	○	○		
88 DE-F-32	なし	円 扇 形	70×50	35	35	△			
89 DE-32	*	不定 形	125×120	50	35	△			

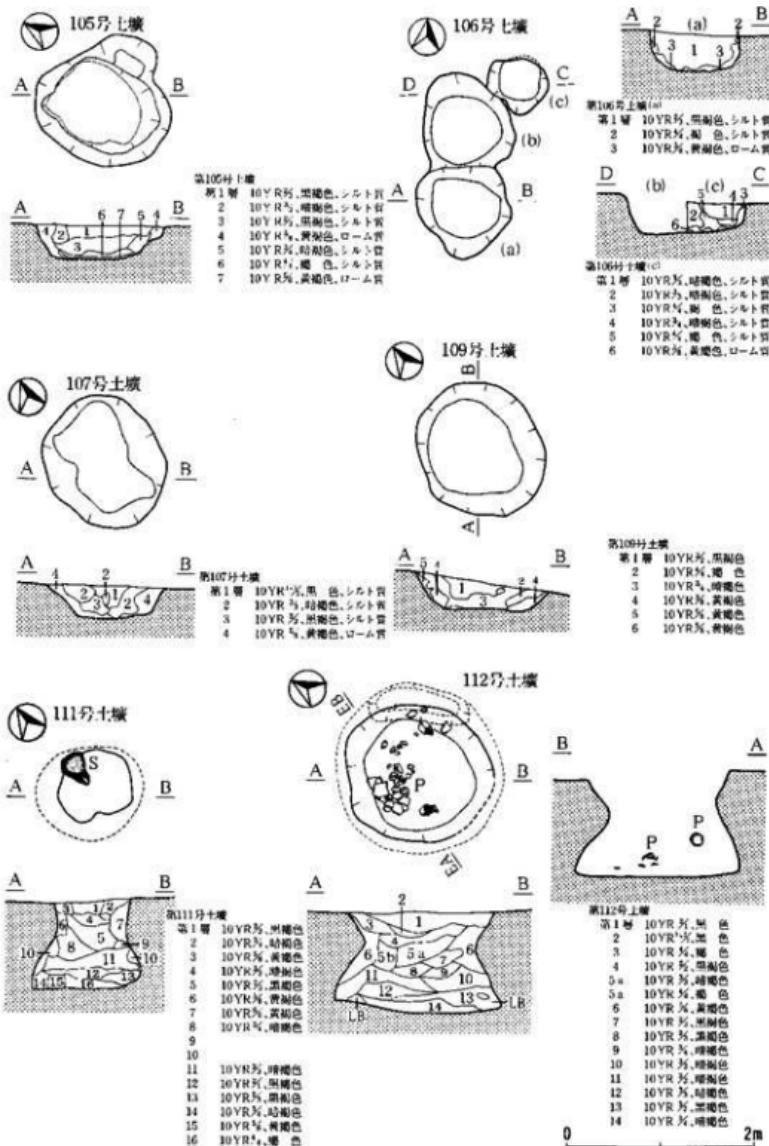
土 壤 名	地出グリッド	半剖開法	半 剖 開	試験面 (m)	出土量物				上層 の 性 質
					土 壤 形	石 岩	木 植	其 他	
90 DB-32	なし	円 扇 形	50	35	45	△			
91a DB-32-3	b	不定 形	(1)-	50×25	35	○	○		
91b *	不定 形	(1)-	35	35	35	△			
92 DE-32	なし	円 扇 形	30	35	35	△			
93 DE-32	*	円 扇 形	30	35	35	△			
94 DF-32	*	円 扇 形	70	35	35	△			
95 DF-32	*	不定 形	30	35	35	△			
96 DD-32	なし	不定 形	160×105	(160×70)	25	○			
97 DB-32	*	握 扇 形	(160×90)	(160×60)	25	○			
98 DE-32	*	不定 形	(160×70)	(160×40)	25	○			
99 DE-32	*	不定 形	(160×70)	(160×40)	25	○			
100 DE-32	*	不定 形	(160×70)	(160×40)	25	○			
101 DC-32	(54)133土	不定 形	70	35	35	△			
102 DD-32-4	なし	握 扇 形	70×35	35	35	△			
103 DE-32-5	(25)	不定 形	110×35	35	35	△			
104 DC-32	*	不定 形	110×35	35	35	△			
105 DB-32	*	不定 形	110×35	35	35	△			
106 DB-32	*	不定 形	110×35	35	35	△			
107 DE-32	*	不定 形	110×35	35	35	△			
108 DE-32	*	不定 形	110×35	35	35	△			
109 DE-32	*	不定 形	110×35	35	35	△			
110 DE-32	*	不定 形	110×35	35	35	△			
111 DE-32	*	不定 形	110×35	35	35	△			
112 DE-32	*	不定 形	110×35	35	35	△			
113 DE-32	*	不定 形	110×35	35	35	△			
114 DE-C-32	(18)133土 不規	握 扇 形	100×35	75×35	35	△			
115 DB-C-32	(18)133土 不規	握 扇 形	100×35	75×35	35	△			
116 DB-32	*	不定 形	100×35	75×35	35	△			
117 DB-32	*	不定 形	100×35	75×35	35	△			
118 DB-32	*	不定 形	100×35	75×35	35	△			
119 DB-32	*	不定 形	100×35	75×35	35	△			
120 DB-32	*	不定 形	100×35	75×35	35	△			
121 DD-32	*	不定 形	100×35	75×35	35	△			
122 DB-32	*	不定 形	100×35	75×35	35	△			
123 DE-32	*	不定 形	100×35	75×35	35	△			
124 DE-32	*	不定 形	100×35	75×35	35	△			
125 DE-32	*	不定 形	100×35	75×35	35	△			
126 DE-32	*	不定 形	100×35	75×35	35	△			
127 DE-32	*	不定 形	100×35	75×35	35	△			
128 DE-32	*	不定 形	100×35	75×35	35	△			
129 DE-32	*	不定 形	100×35	75×35	35	△			
130 DE-32	*	不定 形	100×35	75×35	35	△			
131 DE-32	*	不定 形	100×35	75×35	35	△			
132 DC-35	(18)133土 不規	握 扇 形	100×35	75×35	35	△			
133 DE-C-35	(18)133土 不規	握 扇 形	100×35	75×35	35	△			
134 DB-C-35	(18)133土 不規	握 扇 形	100×35	75×35	35	△			
135 DB-32	133土 不規 不	握 扇 形	100×35	75×35	35	△			
136 DF-32	なし	不定 形	100×35	(100×35)	35	○			
137 DF-32	*	不定 形	100×35	35	35	△			



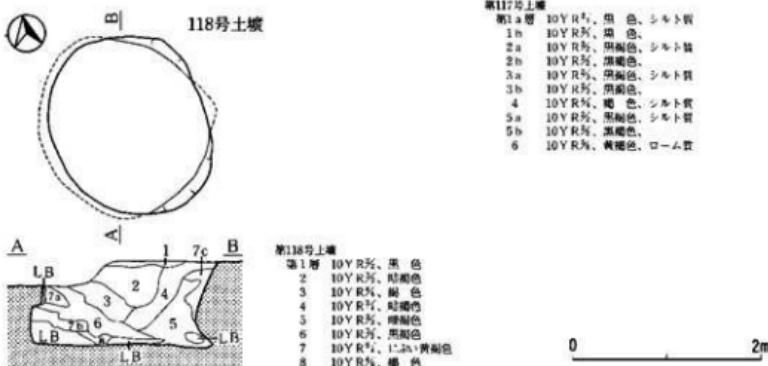
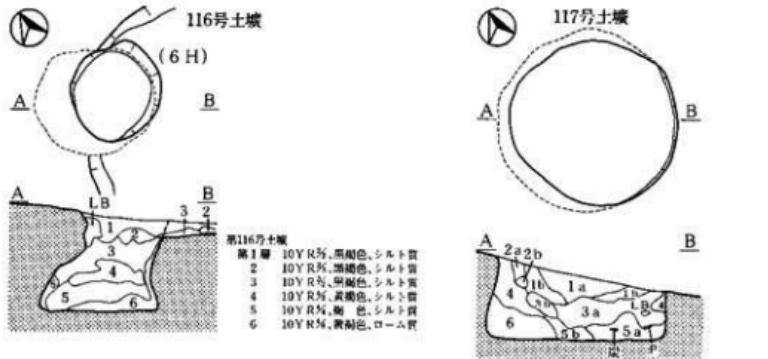
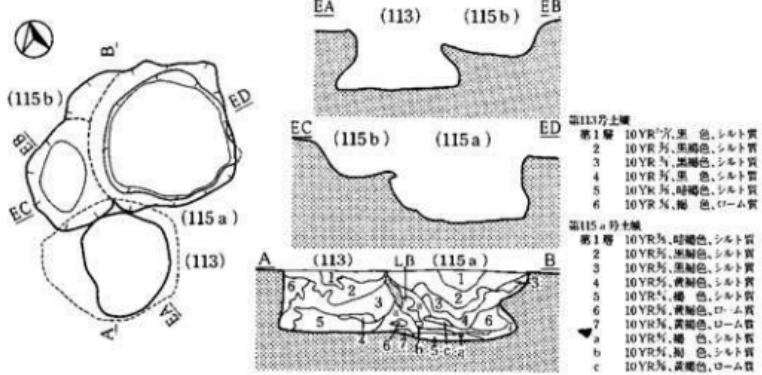
第24図 土壌平面図 (A-1 第1.2.3.4.5.10.11号)



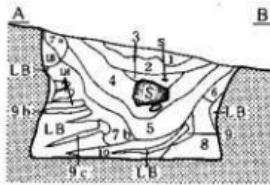
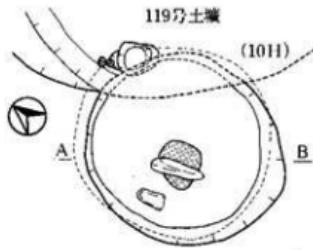
第25図 土壌平面図 (A-2 第66・76・77・100・101・102・104・110号)



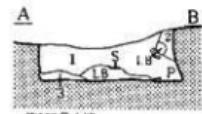
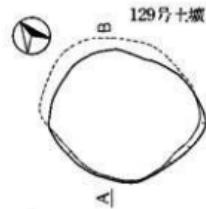
第26図 土壤平面図 (A - 3、第105・106・107・109・111・112号)



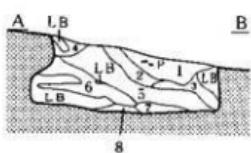
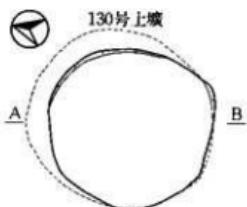
第27図 土壌平面図 (A-4、第113・115~118号)



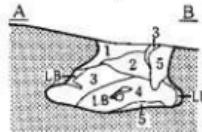
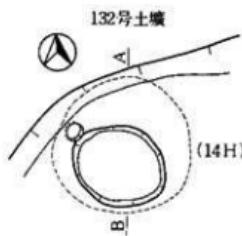
第119号土壤
 第1層 5 Y R 4%, 赤褐色
 2 10 Y R 4%, 黑褐色
 3 10 Y R 4%, 暗褐色
 4 10 Y R 4%, 增褐色
 5 10 Y R 4%, 黑褐色
 6 10 Y R 4%, 暗褐色
 7 10 Y R 4%, 增褐色
 8 10 Y R 4%, 暗褐色
 9 10 Y R 4%, 增褐色
 10 10 Y R 4%, 黑褐色



第129号土壤
 第1層 10 Y R 4%, 黑褐色
 2 10 Y R 4%, 棕色
 3 10 Y R 4%, 暗褐色

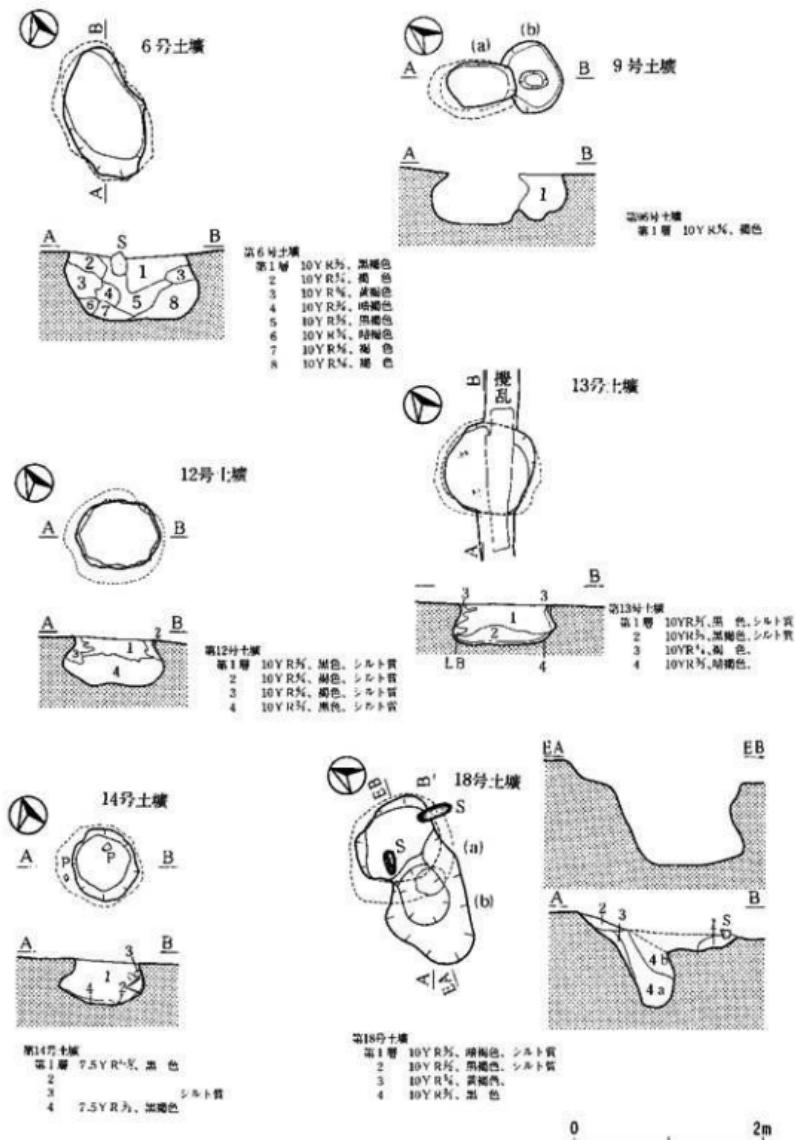


第130号土壤
 第1層 10 Y R 4%, 黑褐色
 2 10 Y R 4%, 增褐色
 3 10 Y R 4%, 暗褐色
 4 10 Y R 4%, 增褐色
 5 10 Y R 4%, 黑褐色
 6 10 Y R 4%, 棕色
 7 10 Y R 4%, 增褐色
 8 10 Y R 4%, 增褐色

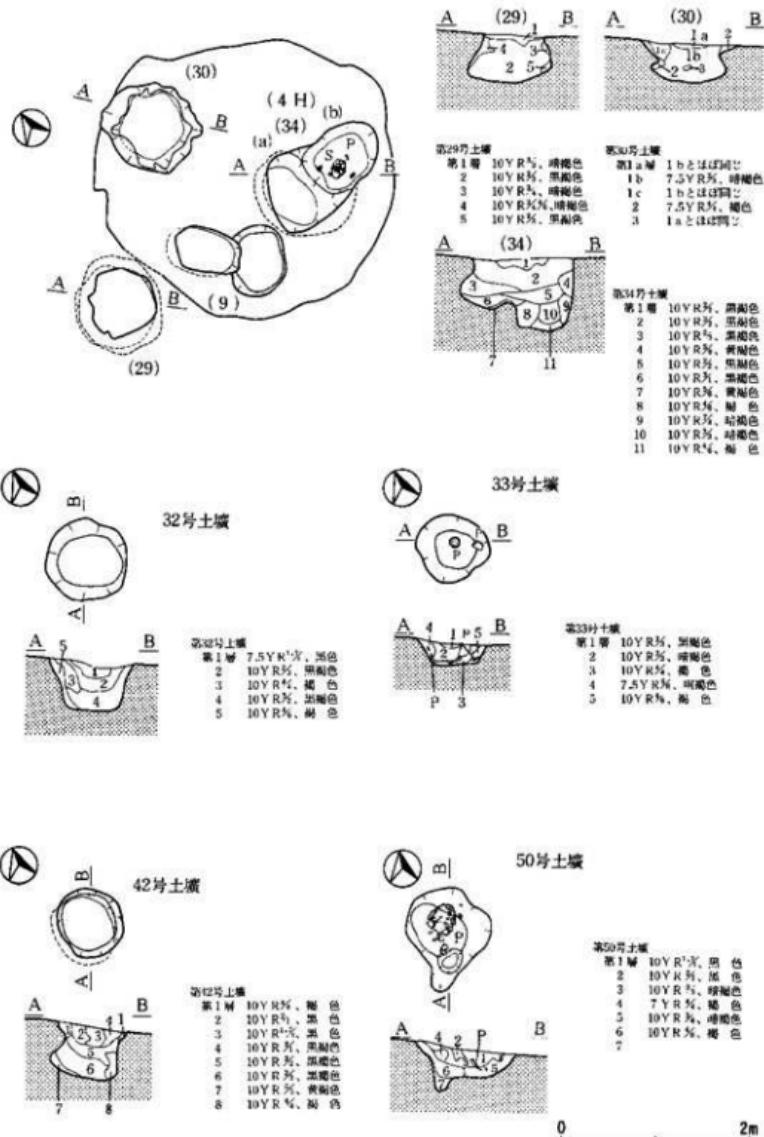


0 2m

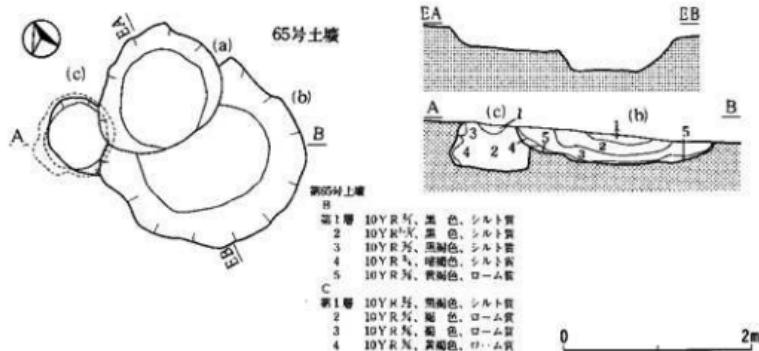
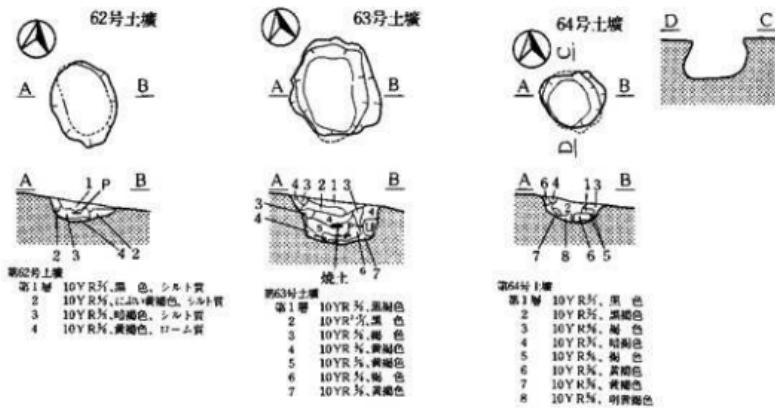
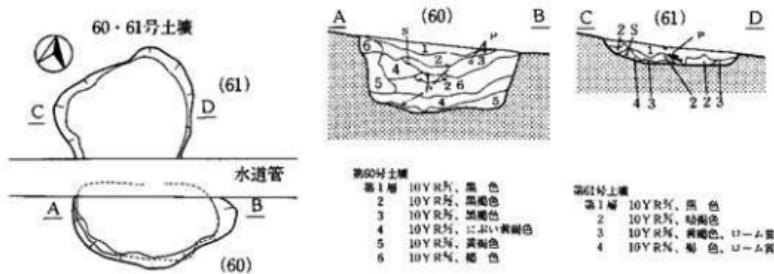
第28図 土壌平面図 (A - 5、第119・129・130・132号)



第29図 土壌平面図 (B-1、第6・9・12~14・18号)

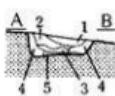


第30図 土壌平面図 (B-2、第29・30・32~34・42・50号)



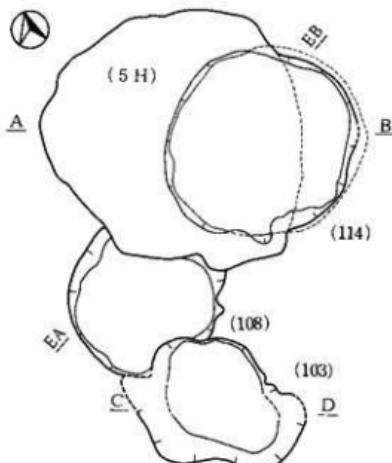
第31図 土壌平面図 (B-3、第60～65号)

75号土壤

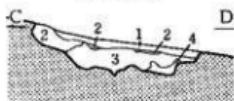


第75号土壤

- 第1層 10YR 5分、黒色、シルト質
- 2 10YR 5分、黒褐色、シルト質
- 3 10YR 5分、黒褐色、シルト質
- 4 10YR 5分、暗褐色、シルト質
- 5 10YR 5分、黄褐色、ローム質

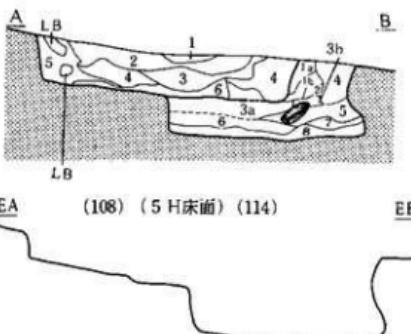


103号土壤



第103号土壤

- 第1層 10YR 5分、暗褐色、シルト質
- 2 10YR 5分、灰褐色、シルト質
- 3 10YR 5分、暗褐色、シルト質
- 4 10YR 5分、褐色、シルト質



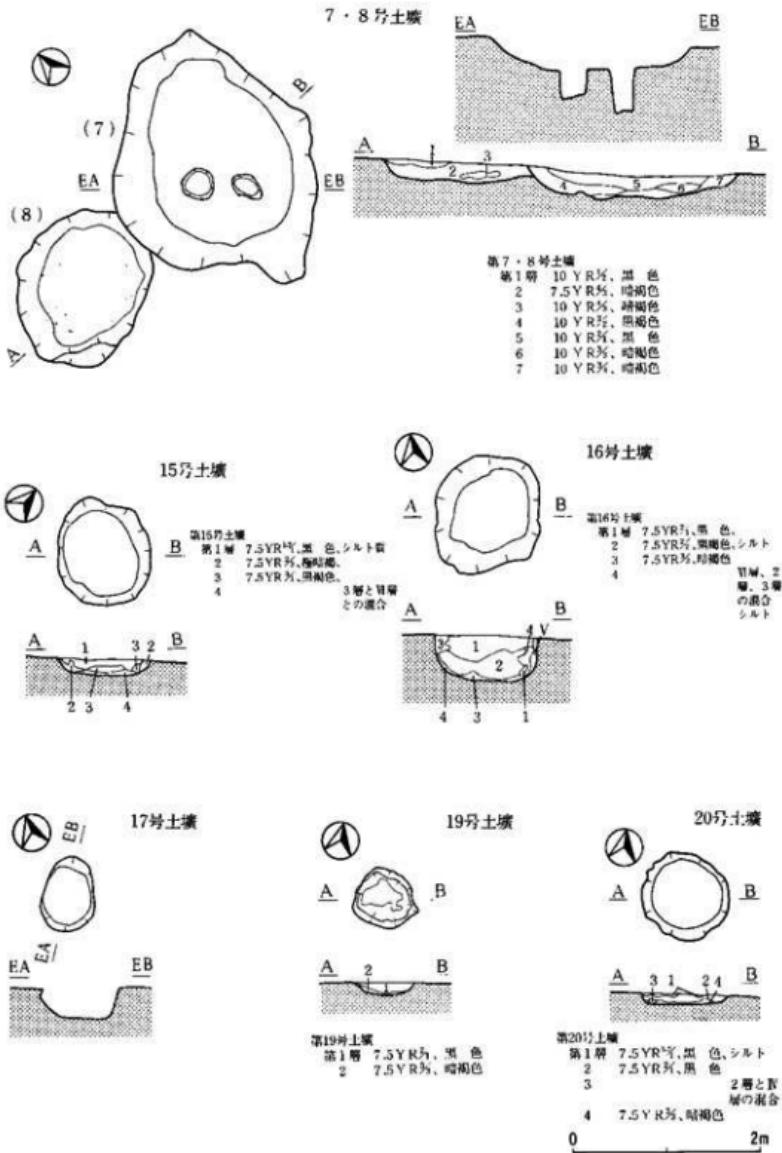
114号土壤

- 第1a層 10YR 5分、黒褐色、シルト質
- 1b 10YR 5分、黒褐色、
- 2 10YR 5分、黒褐色、ロームブロック
- 3a 10YR 5分、暗褐色、シルト質
- 3b 10YR 5分、暗褐色、
- 4 10YR 5分、明黃褐色、ローム質
- 5 10YR 5分、褐色、シルト質
- 6 10YR 5分、暗褐色、シルト質
- 7 10YR 5分、暗黃褐色、ローム質
- 8 10YR 5分、褐色、シルト質

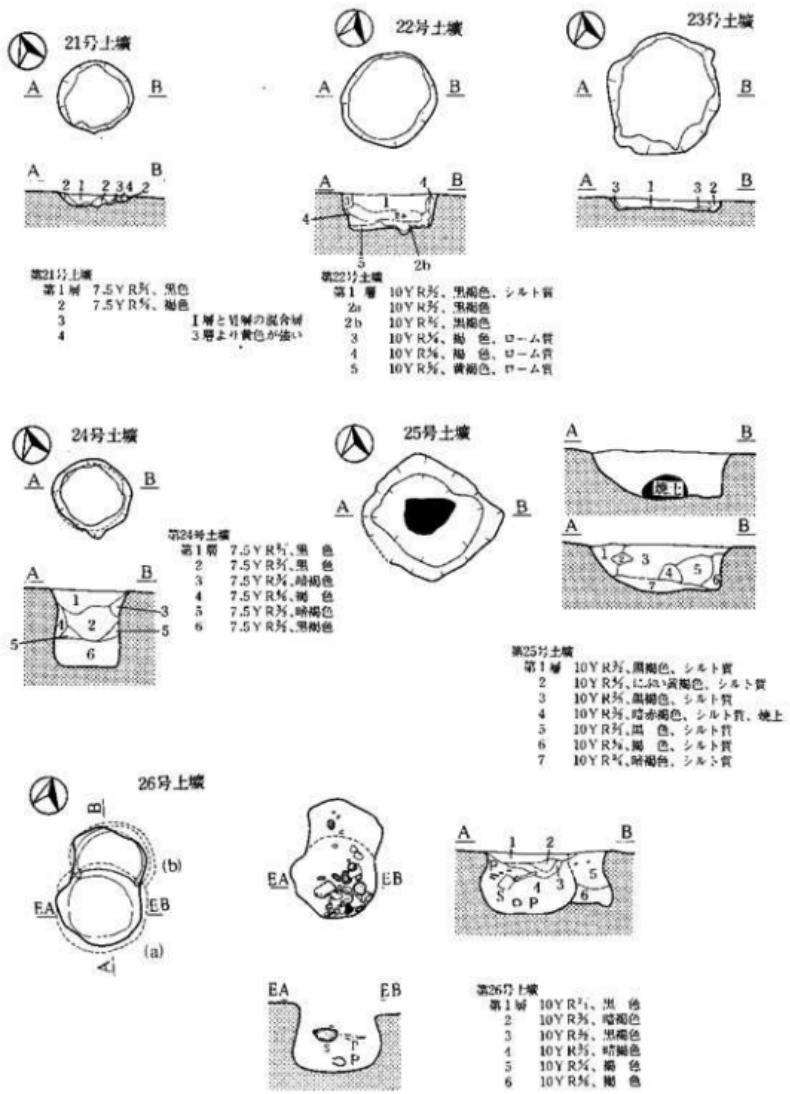
0

2m

第32図 土壌平面図 (B-4、第75・103・108・114号)

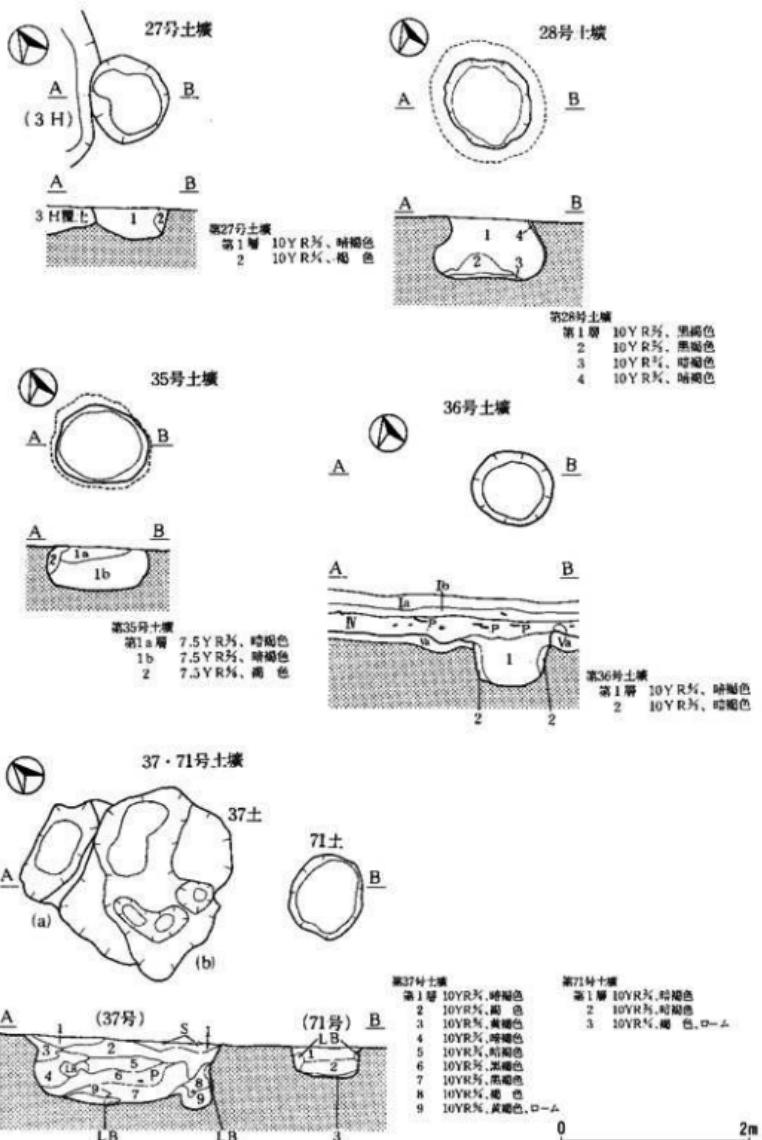


第33図 土壌平面図 (C-1、第7・8・15~17・19・20号)

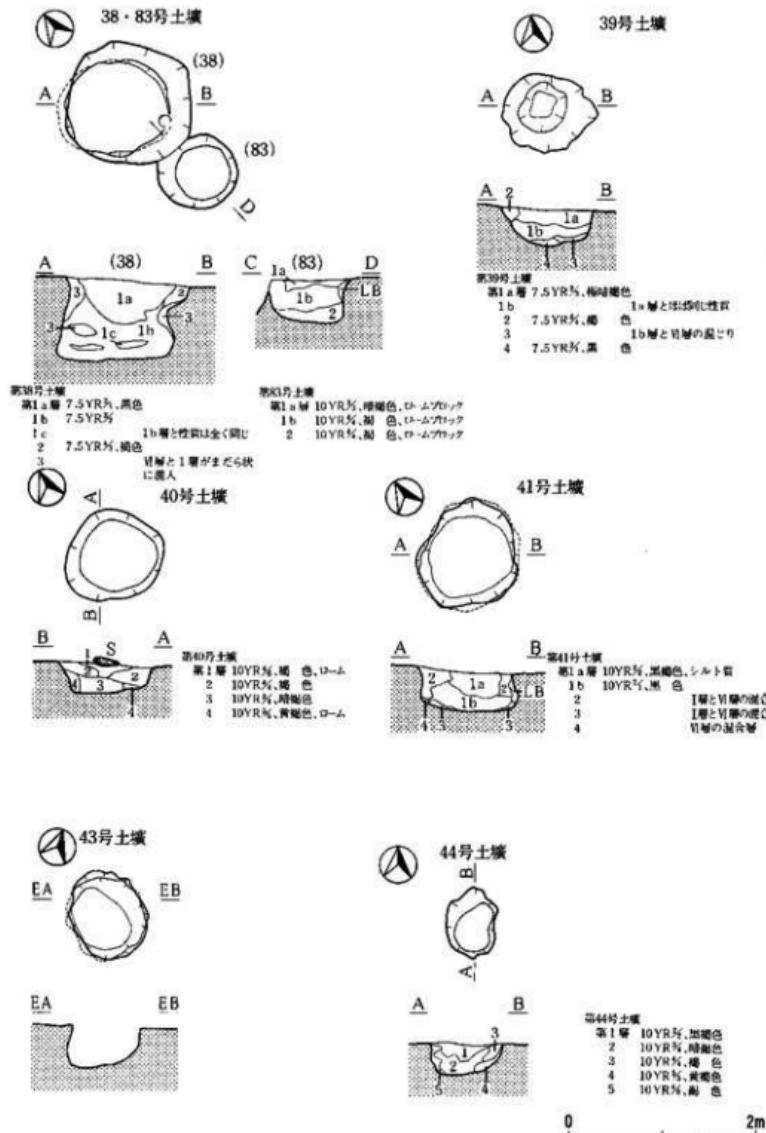


第34図 土壌平面図 (C-2、第21~26号)

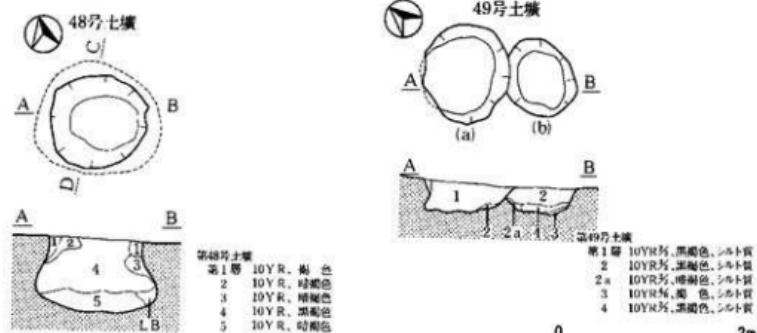
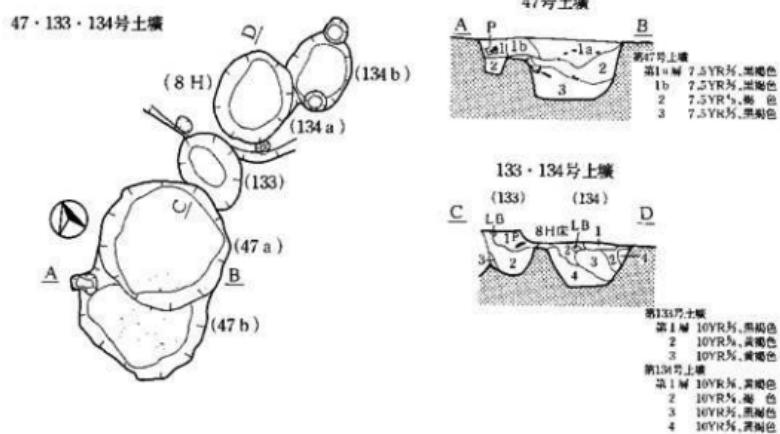
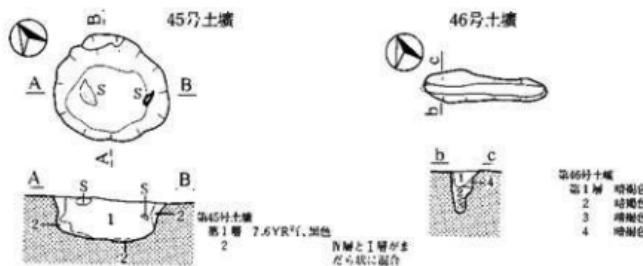
0 2m



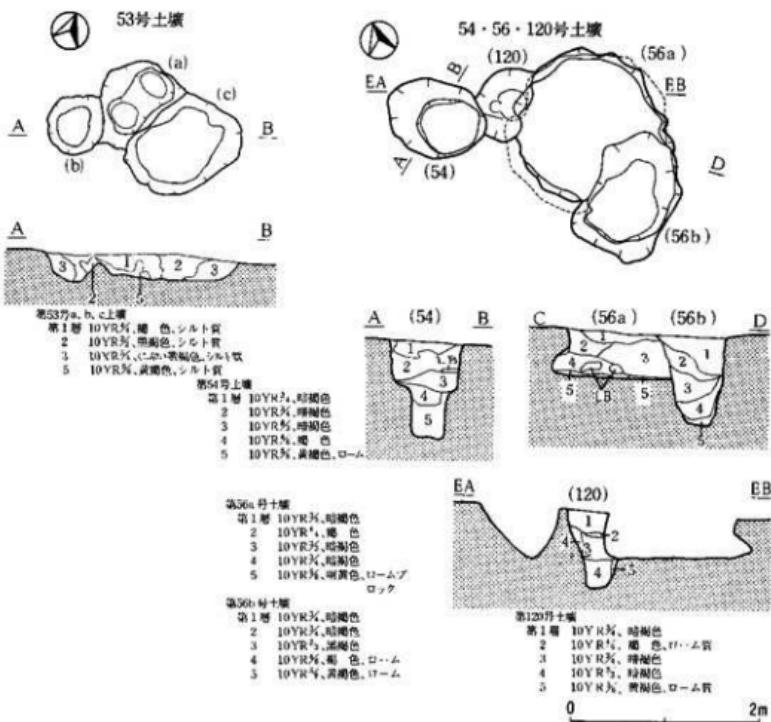
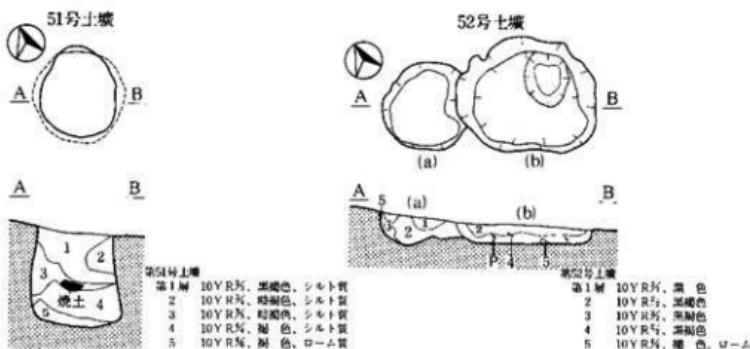
第35図 土壌平面図 (C-3、第27・28・35~37・71号)



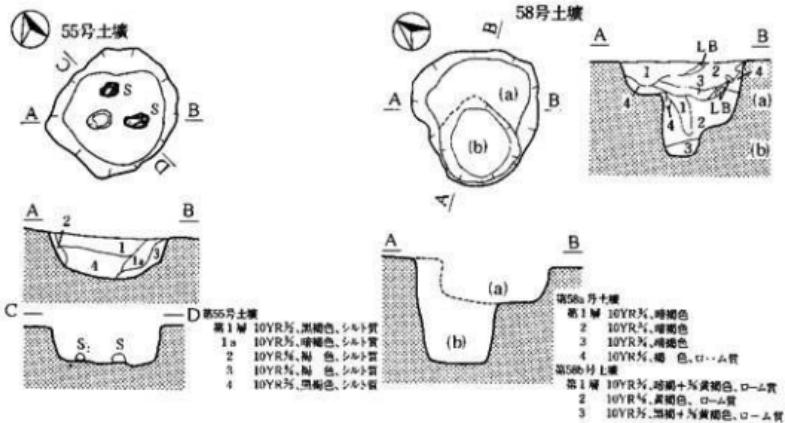
第36図 土壌平面図 (C-4、第38~41・43・44・83号)



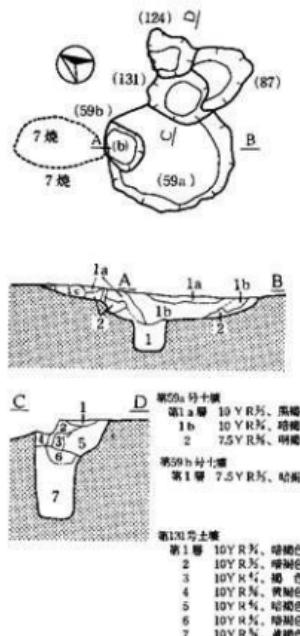
第37図 土壌平面図 (C-5、第45~49・133・134号)



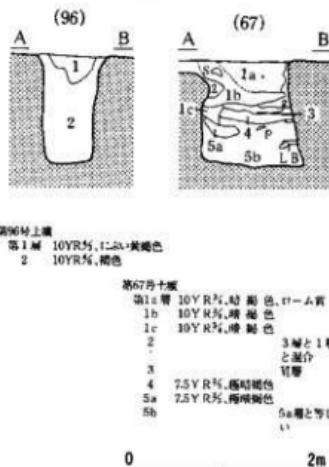
第38図 土壌平面図 (C-6、第51~54・56号)



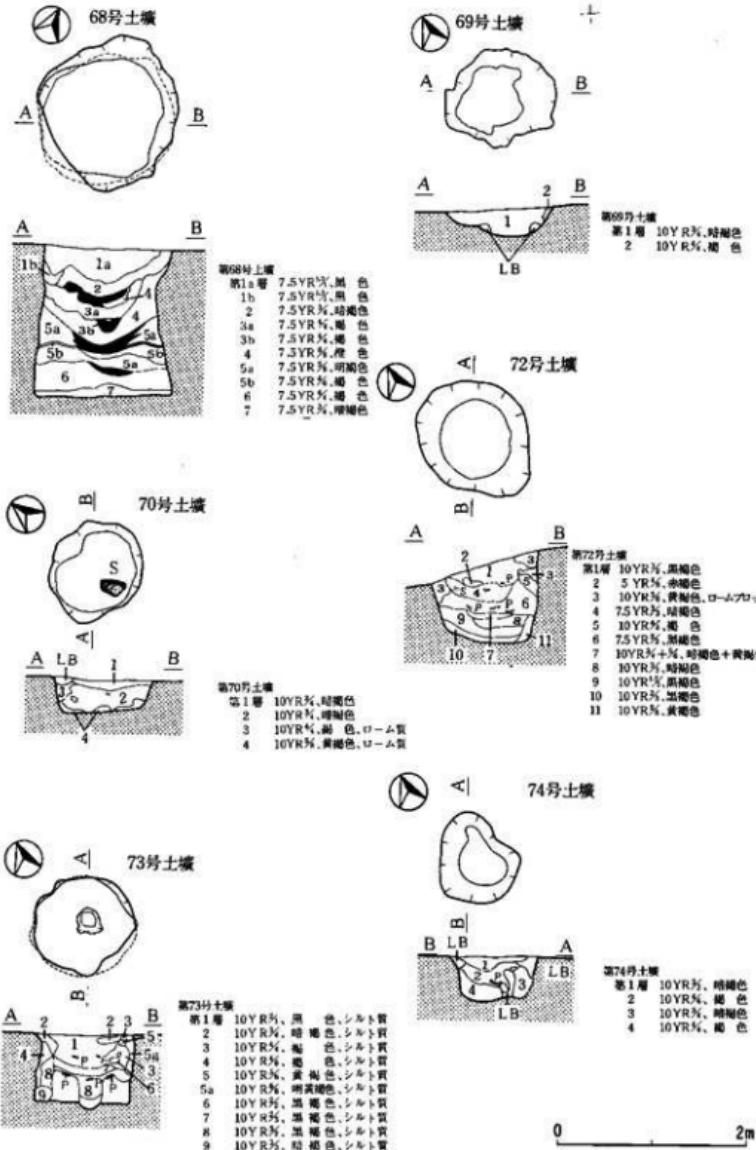
59・87・124・131号土壤



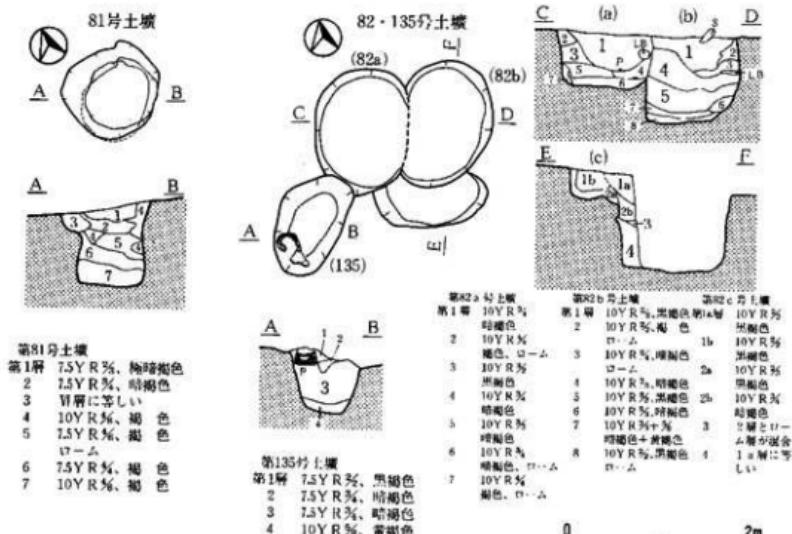
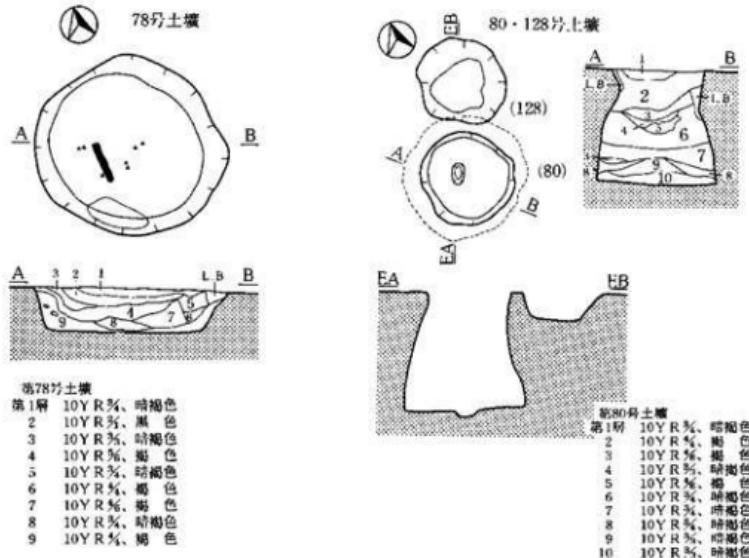
67・96号土壤



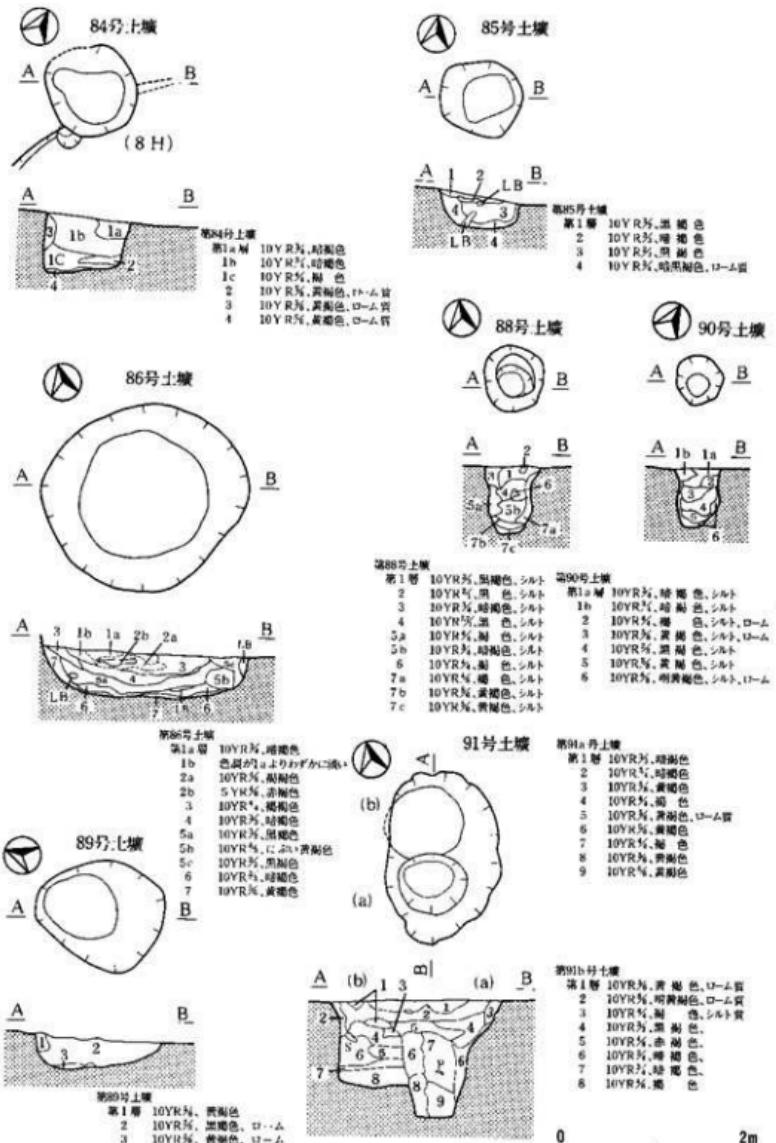
第39図 土壌平面図 (C-7、第55・58・59・67・87・96・124・131号)



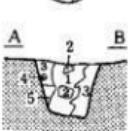
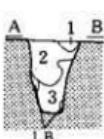
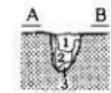
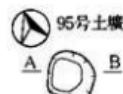
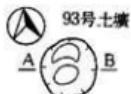
第四図 土壌平面図 (C-B、第68~70・72~74号)



第41回 土壤平面図 (C - 9、第78・80~82・128・135号)



第42図 土壌平面図 (C-10、第84~86・88~91号)



第96号土壤

第1層 10YR 5/6, 黒色、
2 10YR 5/6, 暗褐色、ローム
3 10YR 5/6, 黄褐色、ローム

第96号土壤

第1層 10YR 5/6, 暗褐色
2 10YR 5/6, 暗褐色、ローム質
3 10YR 5/6, 暗褐色、ローム質

第94号土壤

第1層 7.5YR 5/6, 黑褐色、シルト
2 7.5YR 5/6, 黑褐色、シルト
3 7.5YR 5/6, 黑褐色、シルト
4 7.5YR 5/6, 黑褐色、シルト
5 7.5YR 5/6, 黑褐色、シルト

第95号土壤

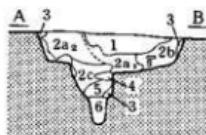
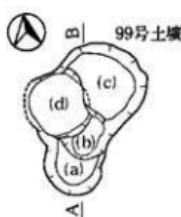
第1層 7.5YR 5/6, 暗褐色
2 7.5YR 5/6, 黑褐色



第97号土壤
第1層 10YR 5/6, 暗褐色、シルト
2 10YR 5/6, 黑褐色、シルト
3 10YR 5/6, 黑褐色、シルト
4 10YR 5/6, 黑褐色、シルト
5 10YR 5/6, 黑褐色、シルト
6 10YR 5/6, 黑褐色、シルト



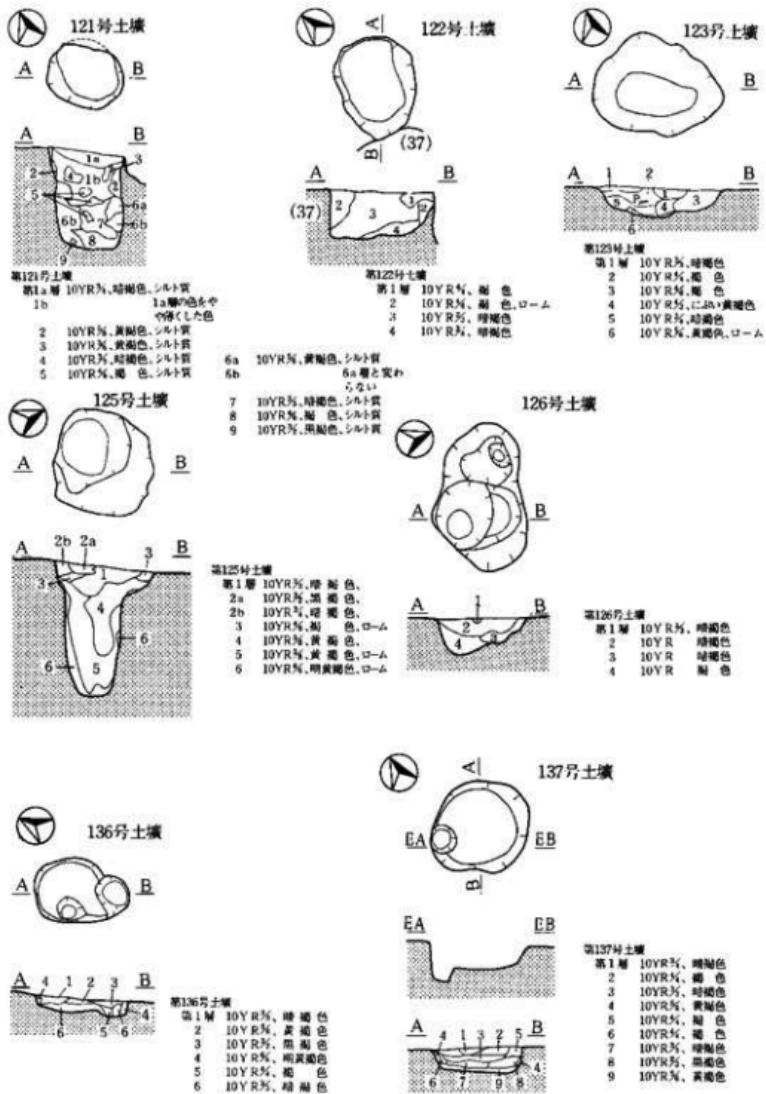
第98号土壤
第1層 7.5YR 5/6, 黑褐色
2 7.5YR 5/6, 黑褐色
3 7.5YR 5/6, 黑褐色
4 7.5YR 5/6, 黑褐色



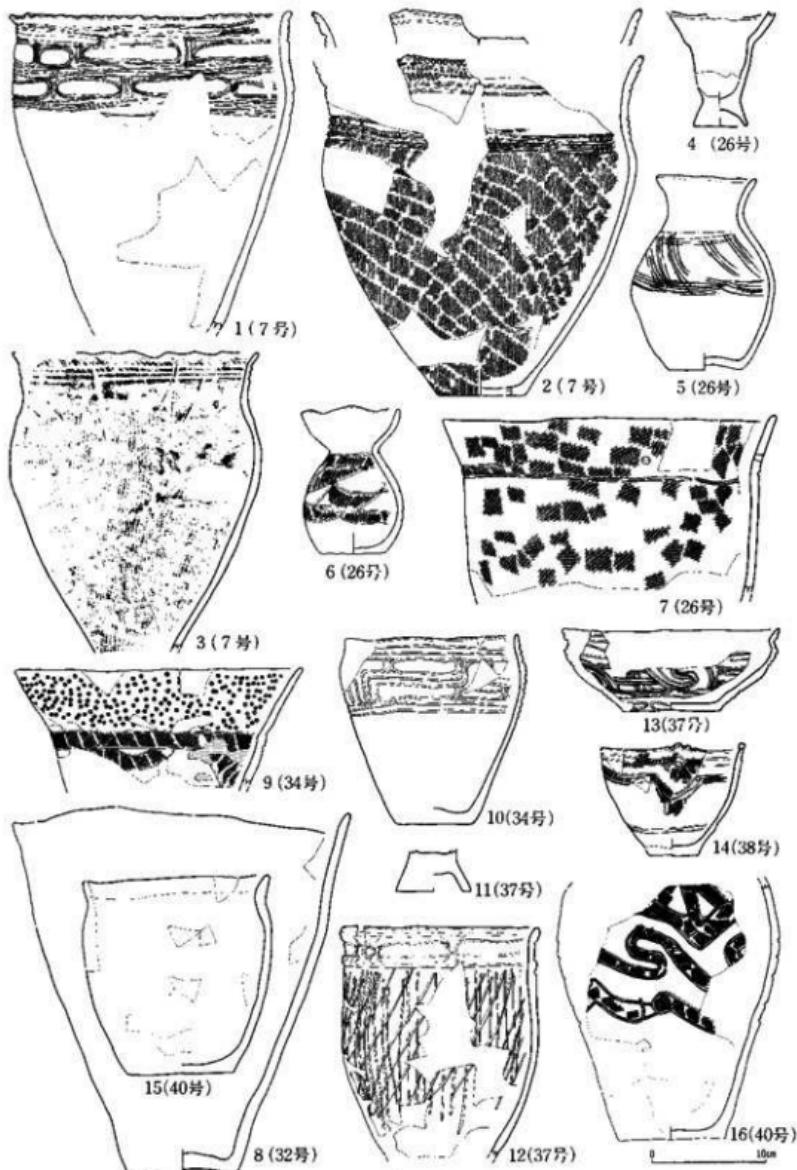
第99号土壤
第1層 7.5YR 5/6, 黑褐色、ローム
2a 7.5YR 5/6, 黑褐色
2a1 7.5YR 5/6, 黑褐色
2b 7.5YR 5/6, 黑褐色
2c 7.5YR 5/6, 黑褐色
3 7.5YR 5/6, 黑褐色
4 7.5YR 5/6, 黑褐色
5 7.5YR 5/6, 黑褐色
6 7.5YR 5/6, 黑褐色

0 2m

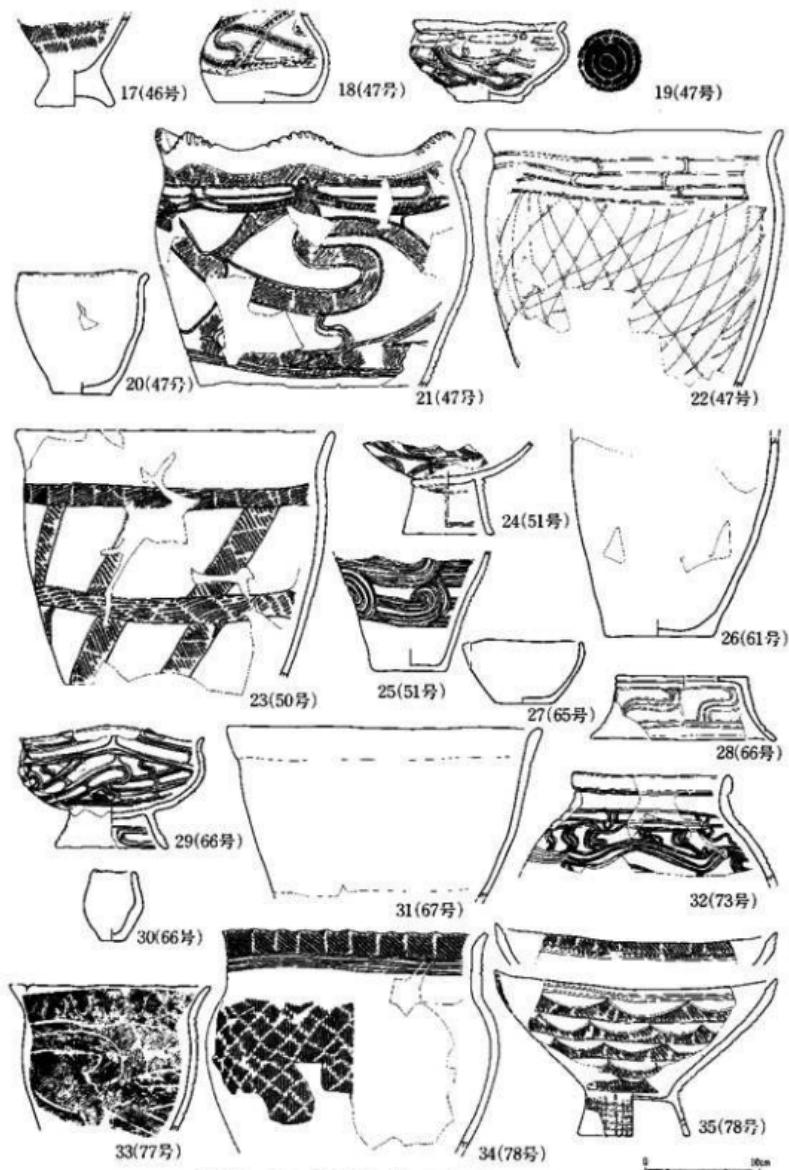
第43図 土壌平面図 (C-11、第92~95・97~99号)



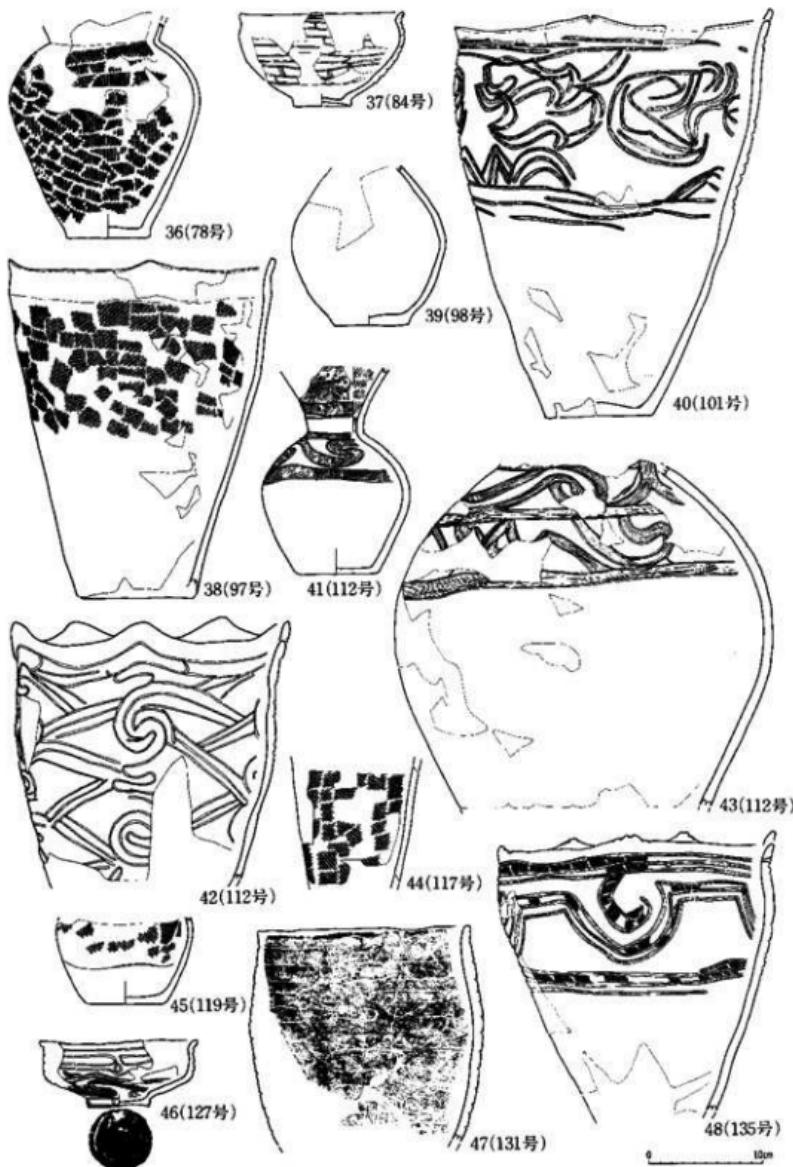
第44図 土壌平面図 (C-12、第121~123・125・126・136・137号)



第45図 M-1区土壤内出土土器実測図一(1)



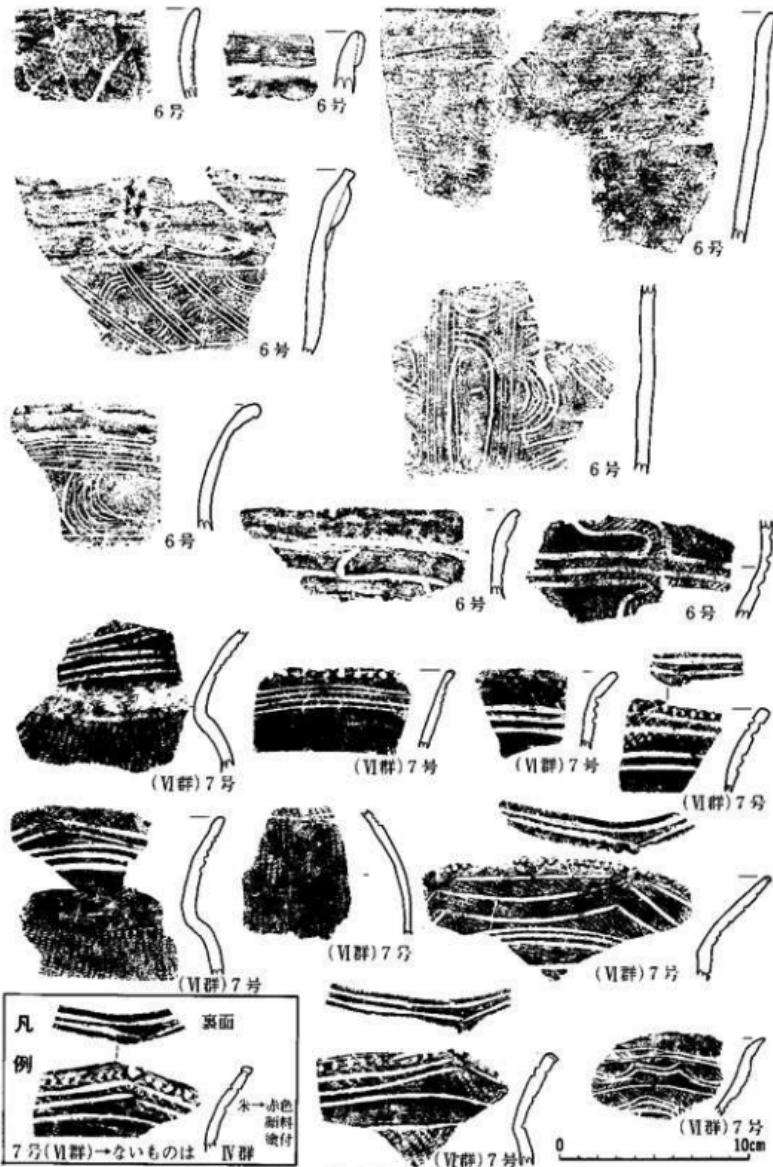
第46図 M-1区土壤内出土土器実測図一(2)



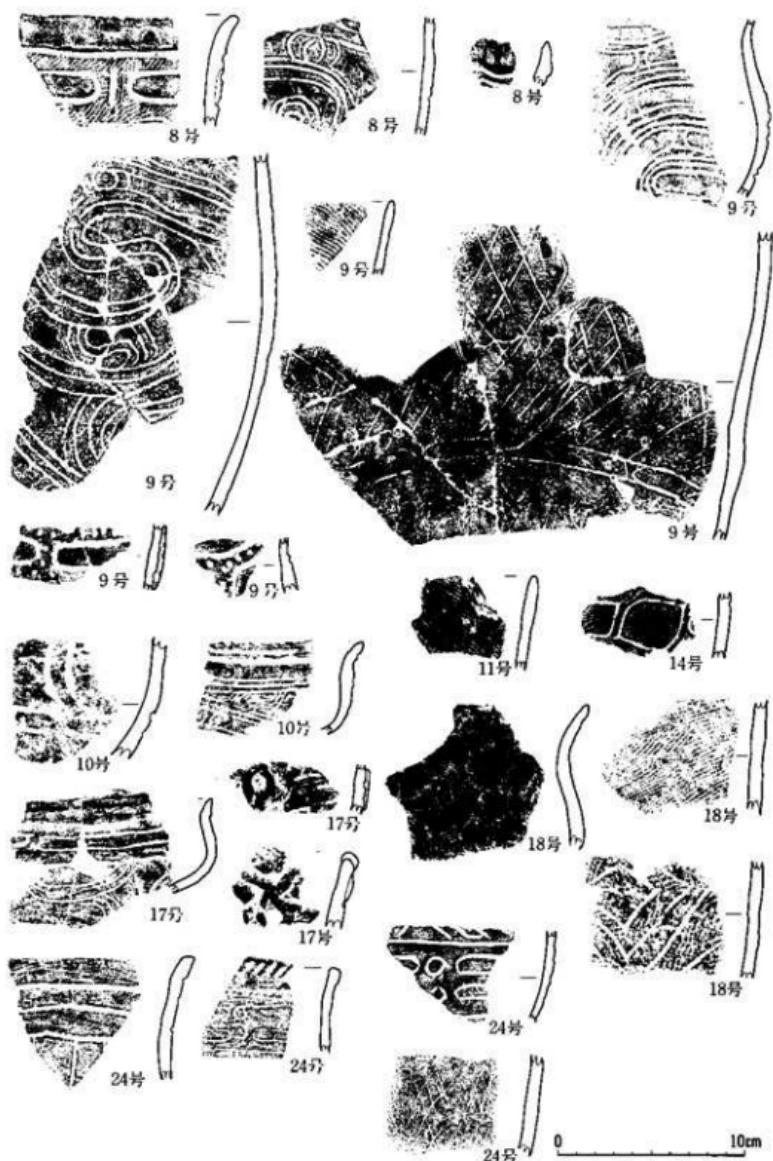
第47圖 IV-1區土壤內出土土器實測圖—(3)

第3表 IV-1区 土壤内出土土器(復原実測土器)観察一覧表

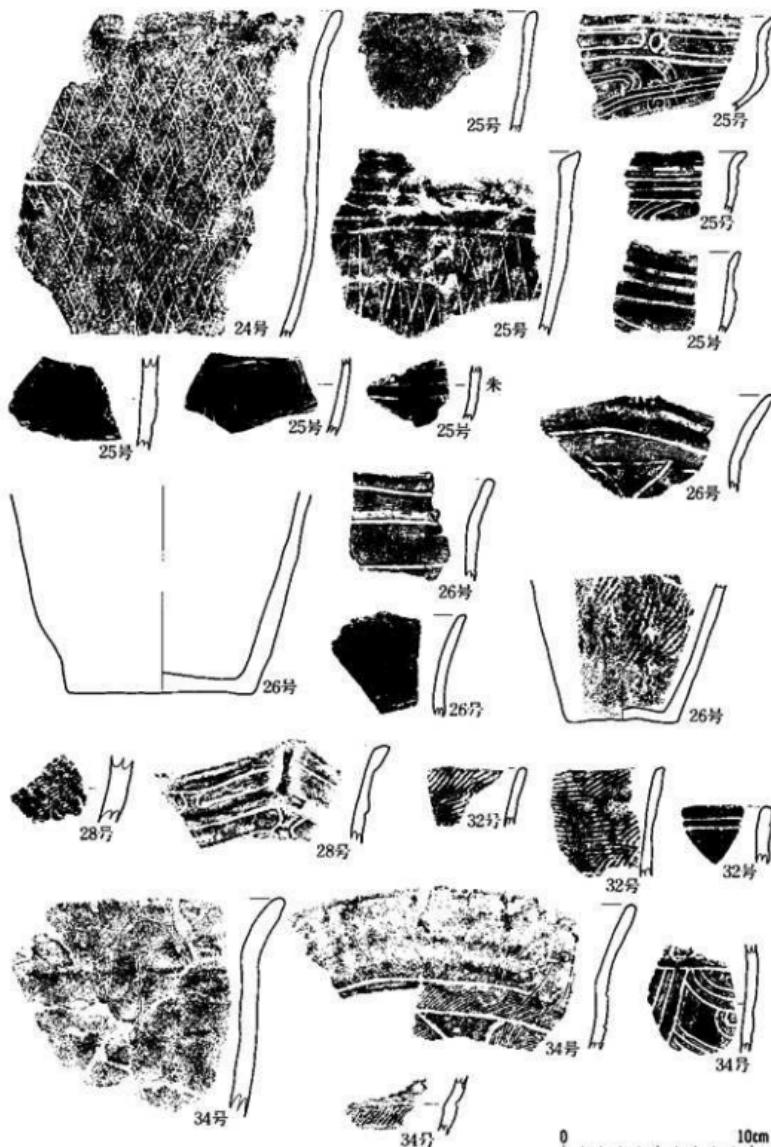
L番 番号	層	計測値(cm)			形	主文様	時 大区分	期 分類	備考
		口徑	底径	器高					
1	7土	フク上	24.8	(—)	(26.0)	深鉢 摺曲状沈縫文	IV群	H-1	
2	*	フク土	29.0	7.5	(30.0)	深鉢 地文綱文、沈縫文	VI群		
3	*	フク土	(21.6)	(—)	(26.5)	深鉢 地文綱文、沈縫文	*		拓影
4	26上	フク土4層	(9.4)	4.7	(10.2)	(台付?) 無文	IV群	A-L	
5	*	フク上4層	8.8	6.2	17.3	浅鉢 摺曲状沈縫文	*	H-1	
6	*	フク土4層	8.8	5.5	13.0	小型壺 唇頭縫文	*	F-L	
7	*	フク上4層	29.4	(—)	(16.0)	深鉢 地文綱文	*	C-2	
8	32上	フク土	(29.6)	9.6	32.3	深鉢 無文	*	A-1	
9	34上	フク土	(25.4)	(—)	(10.5)	深鉢 摺曲状綱文、斜突文捺帯	*	L	
10	*	フク上	15.0	6.5	16.5	鉢 沈縫文	*	G-1	
11	37上	フク土	(—)	6.5	(—)	台付鉢 無文	*		右部のみ
12	*	フク上	17.2	(—)	(20.0)	深鉢 唇頭縫點付、沈縫文	*	G-2	
13	*	フク土6層	(19.1)	8.5	7.2	深鉢 沈縫文	*	G-1	
14	38土	フク土	12.7	(4.2)	9.9	鉢 摺曲状綱文	*	F-1	
15	40土	フク土1層	(16.2)	9.0	17.4	鉢 折り返し口縁、無文	*	A-1	
16	*	フク上1層	(—)	9.2	(22.5)	深鉢 光滑綱文	*	F-L	長脚
17	46上	フク土	(—)	6.8	(8.0)	台付鉢 地文綱文	*		台部
18	47上	フク土	(—)	8.8	(8.0)	壺 摺曲状綱文	*	F-2	端成不良
19	*	フク土	13.3	5.7	7.1	深鉢 沈縫文	*	G-1	
20	*	フク土	11.2	5.0	10.9	鉢 無文	*	A-1	
21	*	フク土	27.8	(—)	(22.5)	深鉢 摺曲状綱文	*	F-2	
22	*	フク土	(26.0)	(—)	(22.5)	深鉢 沈縫文	*	G-1	
23	50上	フク土	(27.8)	(—)	(23.0)	深鉢 摺曲状綱文	*	F-L	
24	51上	フク土	(—)	8.0	(8.0)	台付鉢 沈縫文	*	G-1	右部
25	*	底面	(—)	6.5	(10.5)	鉢 沈縫文	*	G-1	
26	61上	フク土1層	(—)	9.3	(12.5)	深鉢 無文	*	(A-1)	L(?)
27	65土	フク土	10.4	4.8	5.4	(浅鉢) 無文	*	A-1	
28	66上	フク土	16.2	11.4	5.6	深鉢 沈縫文	*	G-1	
29	*	フク土	16.2	9.9	10.2	台付浅鉢 沈縫文	*	G-1	
30	*	フク土	4.0	2.0	6.2	ミニチュア 無文	*	ミニチュア	
31	67土	フク土	(27.5)	(—)	(14.5)	深鉢 折り返し口縁、無文	*	A-1	
32	73土	フク土	(14.0)	(—)	(8.5)	頸壺 沈縫文	*	G-1	
33	77上	フク土	(17.7)	(—)	(12.5)	深鉢 摺曲状綱文	*	F-L	拓影
34	78土	フク土	23.2	(—)	(19.0)	深鉢 地文綱文、沈縫文	VI群		
35	*	フク土	24.6	9.8	14.5	台付斜鉢 連弧文	*		右側直通孔 赤色顔料
36	*	フク土	(—)	7.3	(19.0)	壺 縦文	*		
37	84土	フク土	(14.3)	5.0	8.1	深鉢 沈縫文	IV群	G-1	高台部底部
38	97上	フク土	23.5	(10.3)	(30.0)	深鉢 地文綱文(LR)	*	C	
39	98土	フク土	(—)	6.4	(14.0)	壺 無文	*	(A)	
40	101土	フク土	27.6	9.4	35.5	深鉢 沈縫文	*	G-1	
41	112土	フク土	(—)	7.2	(18.3)	壺 創突文、充張縫文(無筋)	*	(F-2)	L(?)
42	*	フク土	24.1	(—)	(23.0)	深鉢 折り返し口縁、沈縫文	*	G-1	
43	*	フク土	(—)	(—)	(30.5)	壺 摺曲状沈縫文	*	H-1	
44	117上	フク土	(—)	(—)	10.0	鉢 地文綱文(LR)	*		
45	119土	フク土	(—)	7.0	(7.5)	鉢 地文綱文(RL)	*		
46	127上	フク土	(13.9)	5.5	5.9	深鉢 沈縫文	*	G-1	高台部底部
47	131土	フク土	(18.7)	(—)	(18.0)	深鉢 沈縫文	*	G-1	拓影
48	135上	フク土	24.5	(—)	(24.5)	深鉢 光滑綱文	*	F-2	



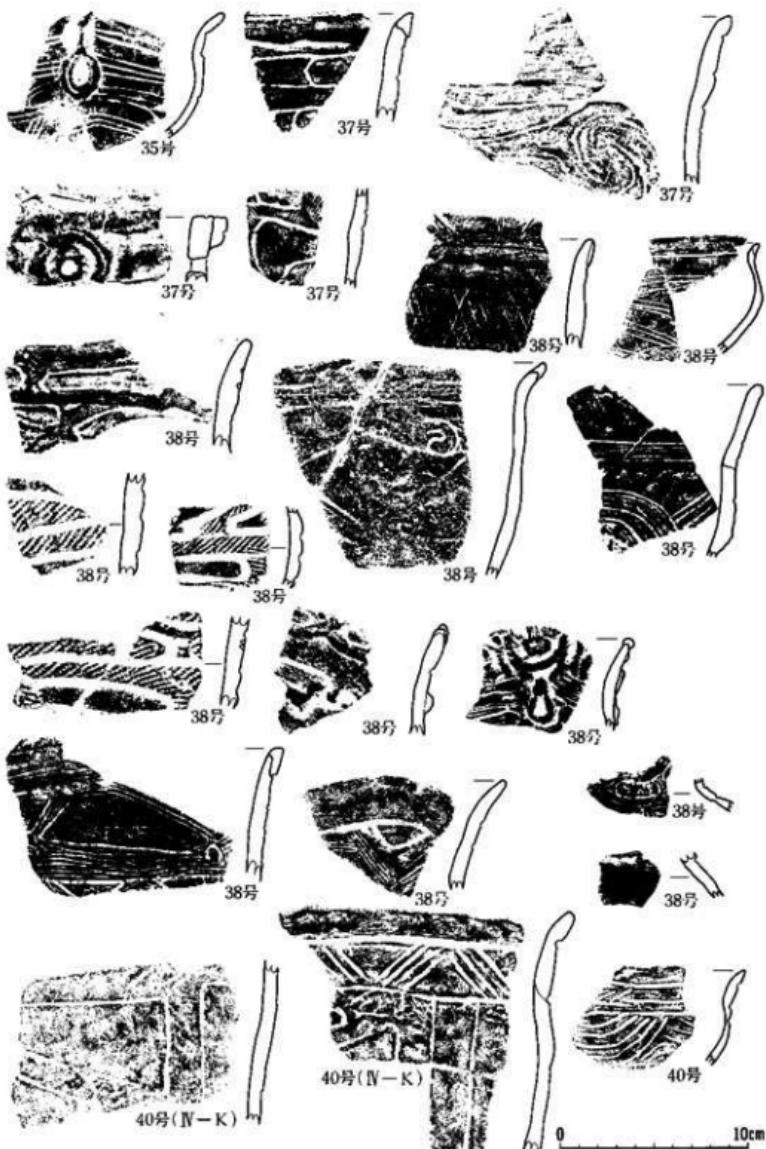
第48図 N-1区土壤内出土土器拓影図 (第6号・第7号)



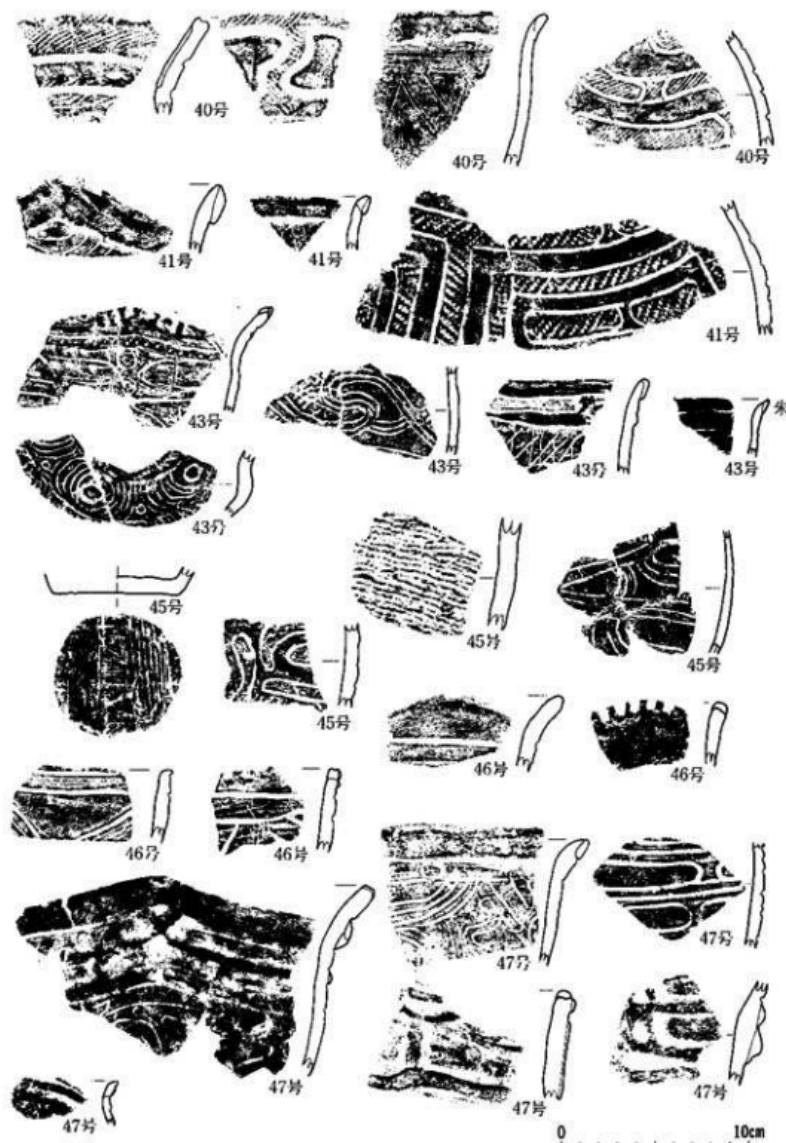
第49図 M-1区土壤内出土土器拓影図 (第8号～第24号)



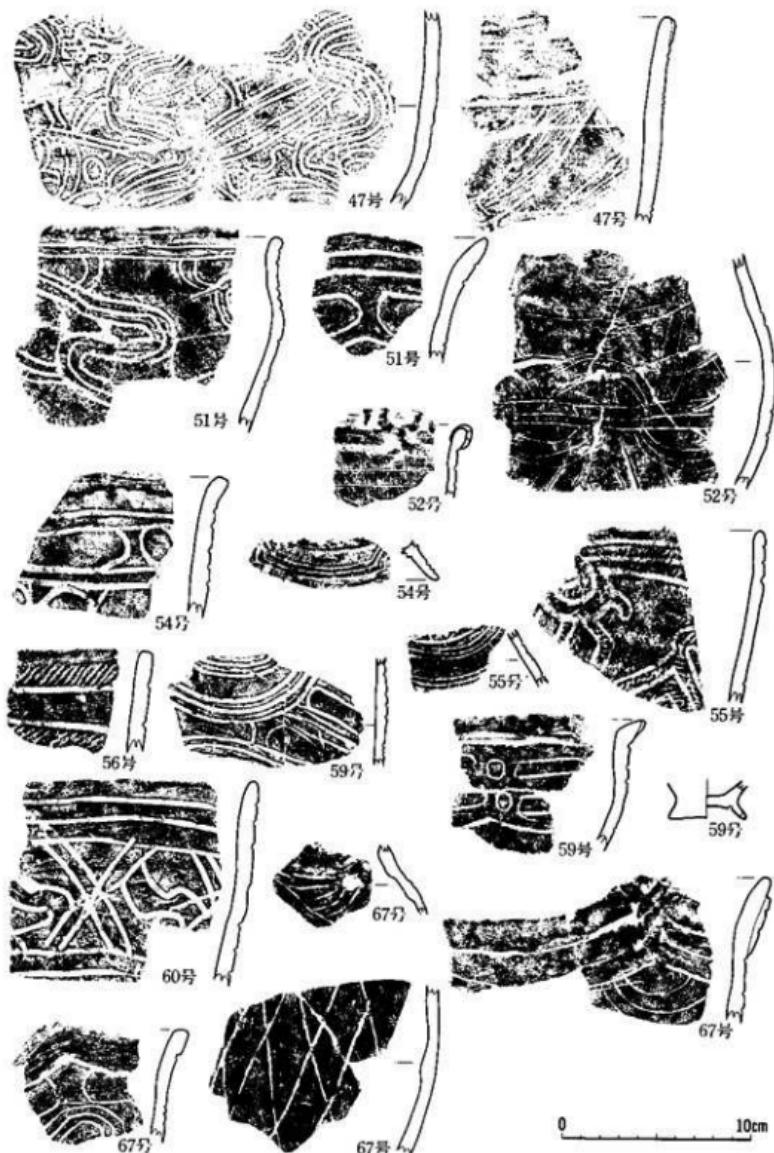
第50図 M-1区土壤内出土土器拓影図（第24号～第34号）



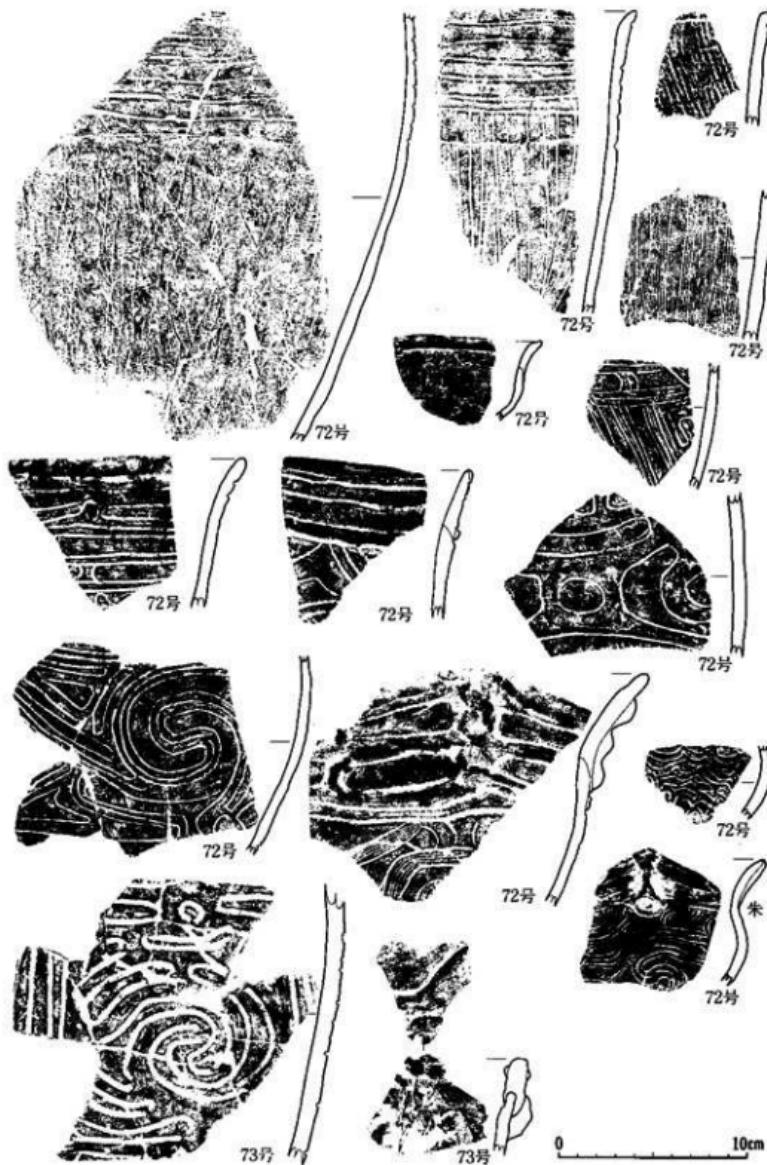
第51図 IV-1区土壤内出土土器拓影図（第35号～第40号）



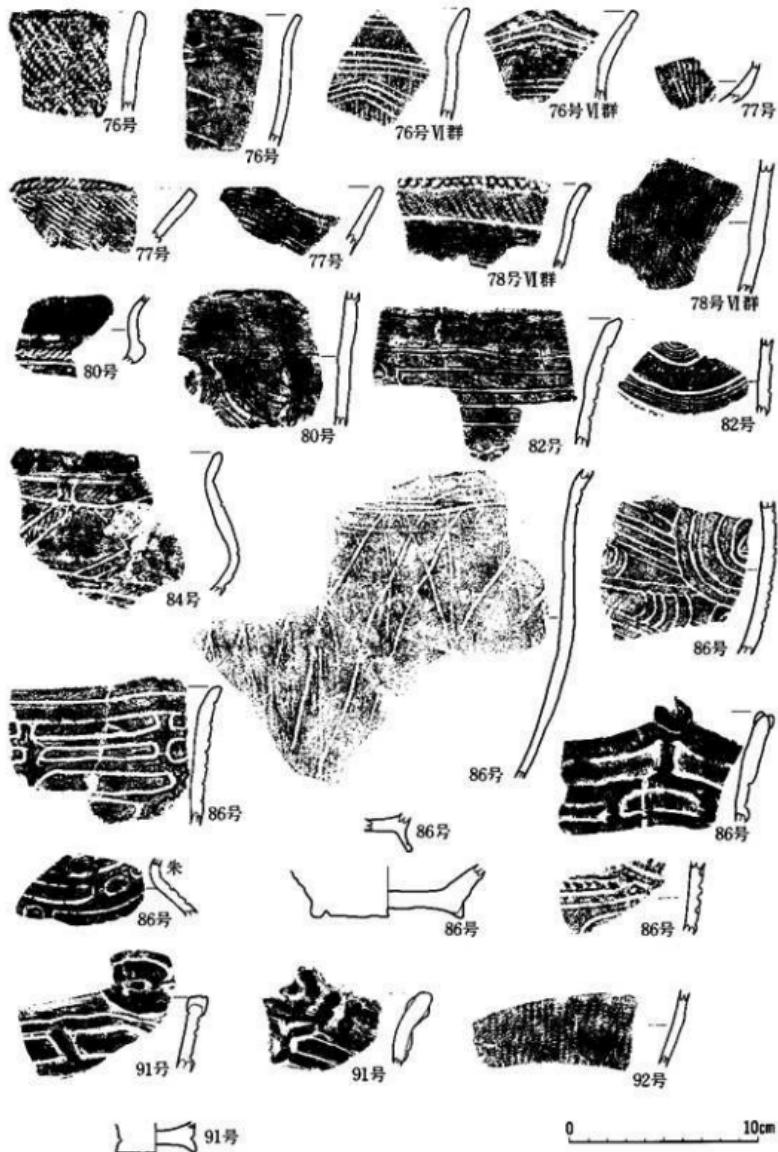
第52図 M-1区土壤内出土土器拓影図（第40号～第47号）



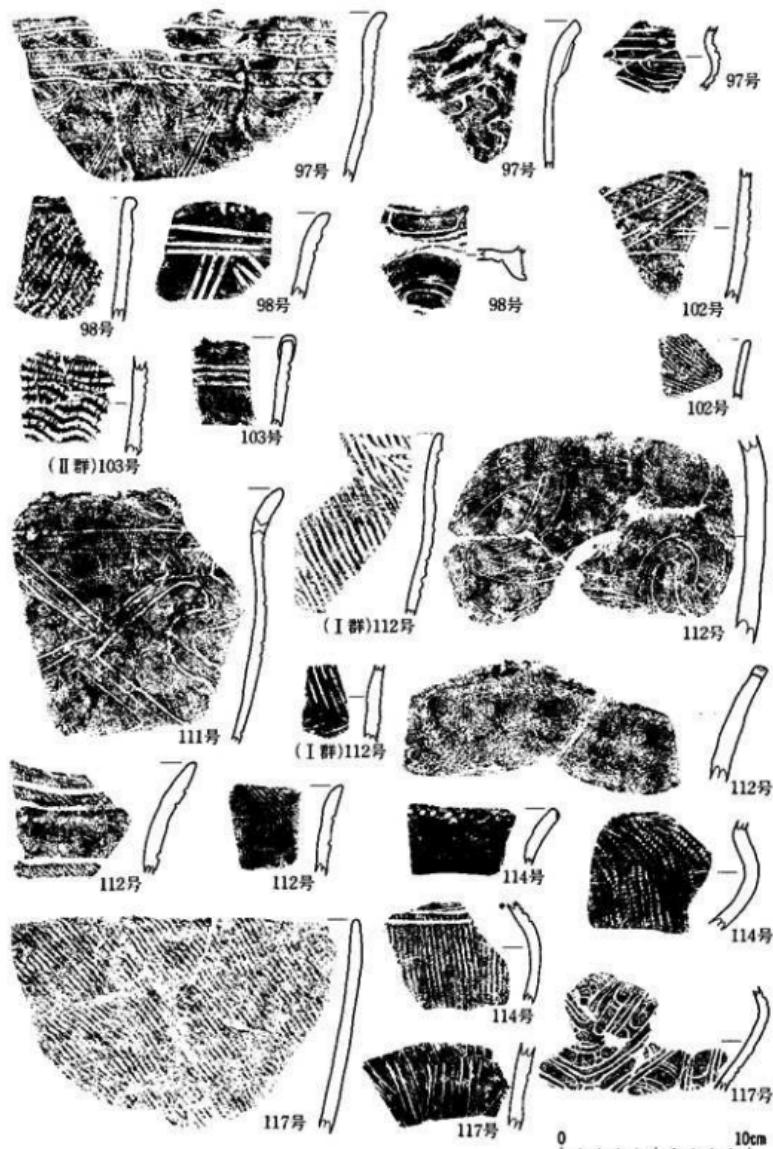
第53図 M-1区土壤内出土土器拓影図（第47号～第67号）



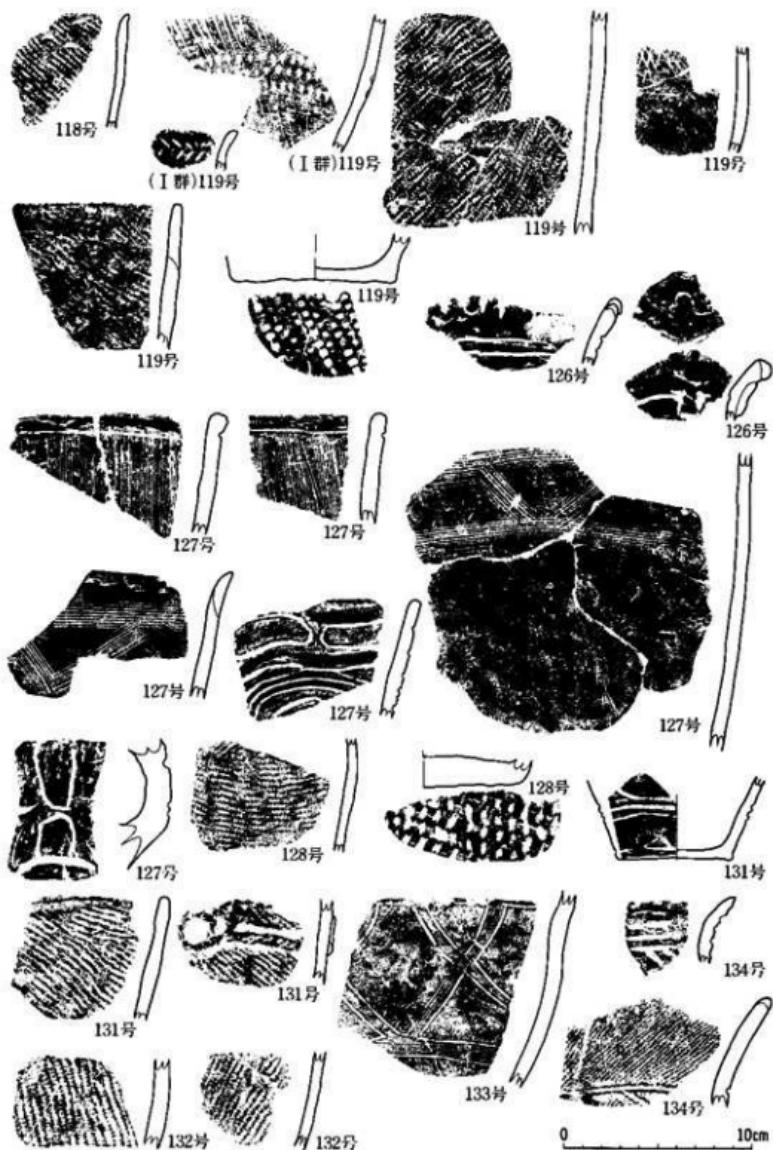
第54圖 M-1區土壤內出土土器拓影圖（第72號・第73號）



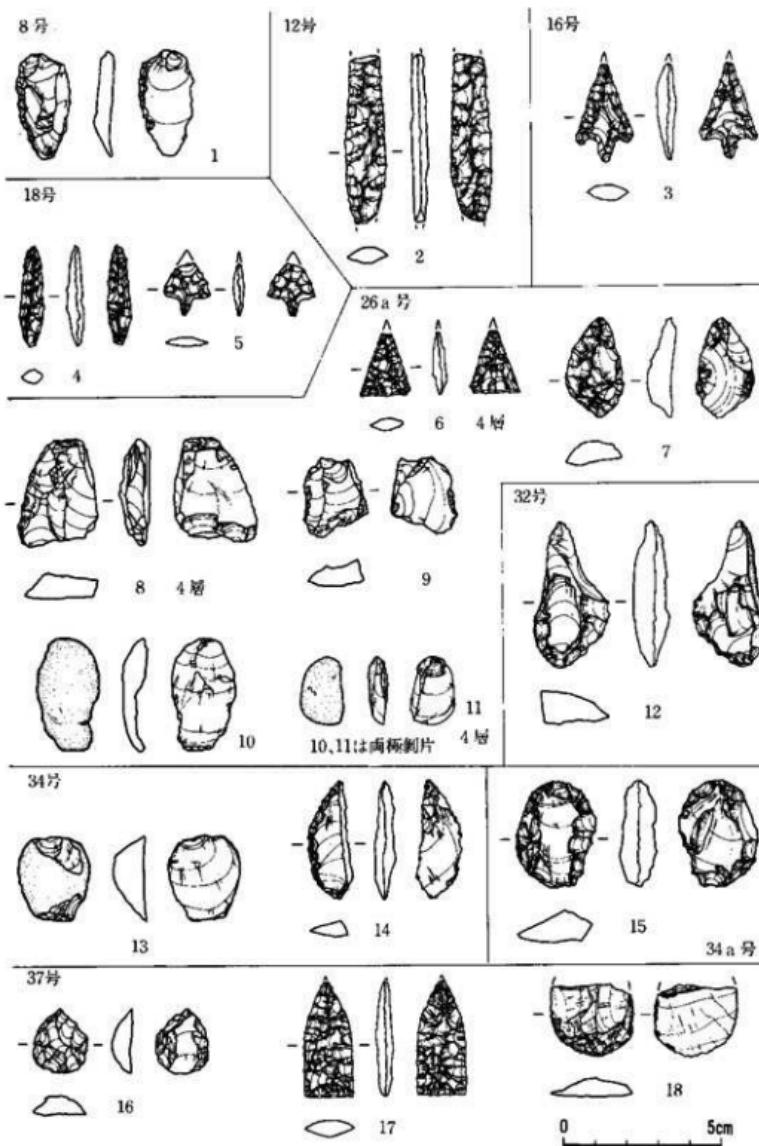
第55圖 N-1區土壤內出土土器拓影圖（第76號～第92號）



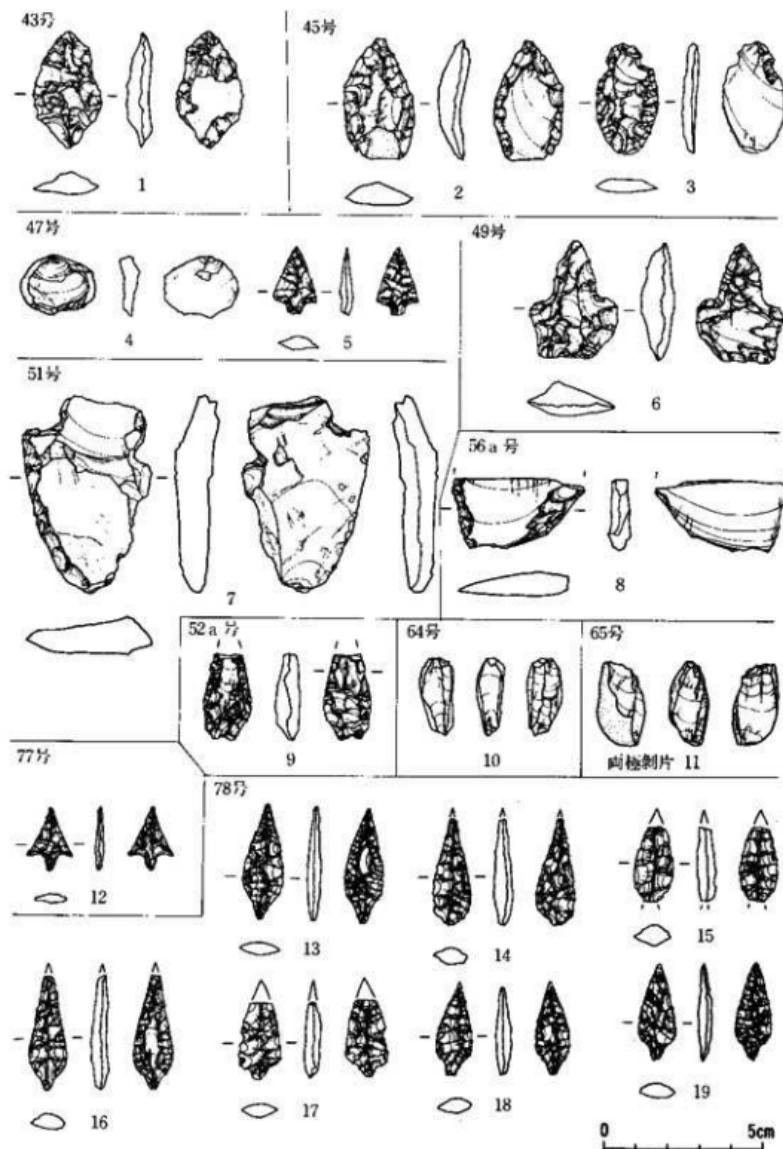
第56図 M-1区土壤内出土土器拓影図（第97号～第117号）



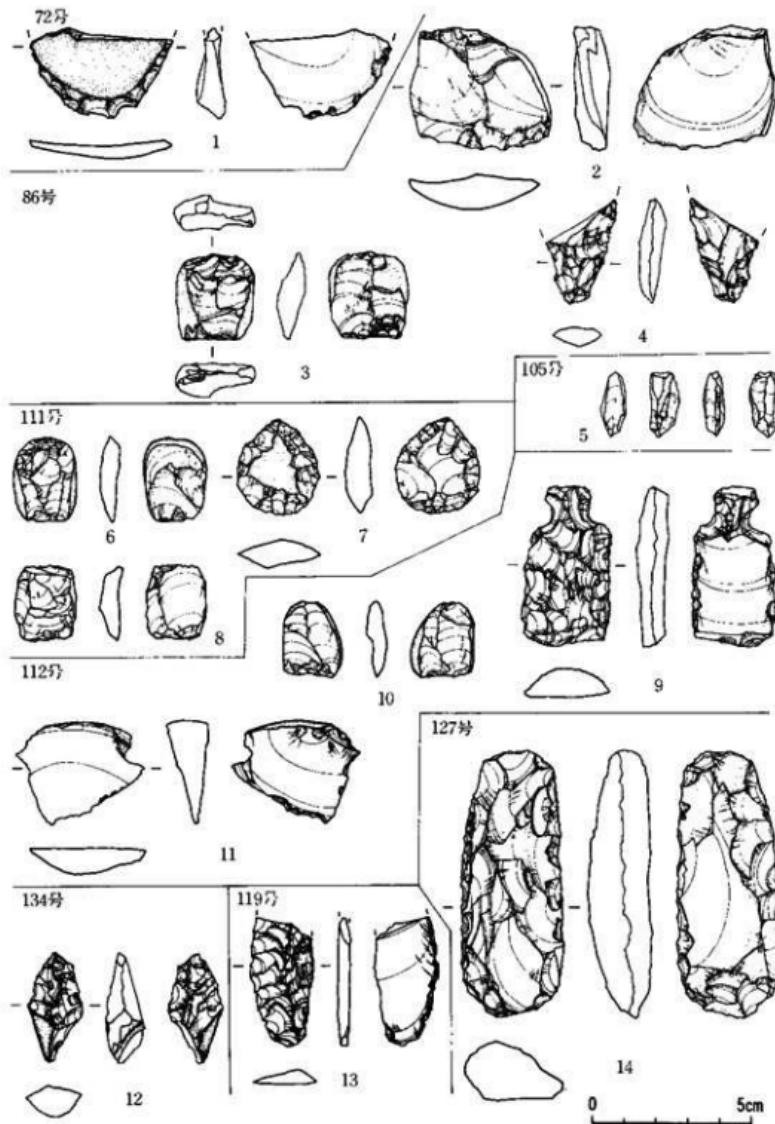
第57図 N-1区土壤内出土土器拓影図 (第118号～第134号)



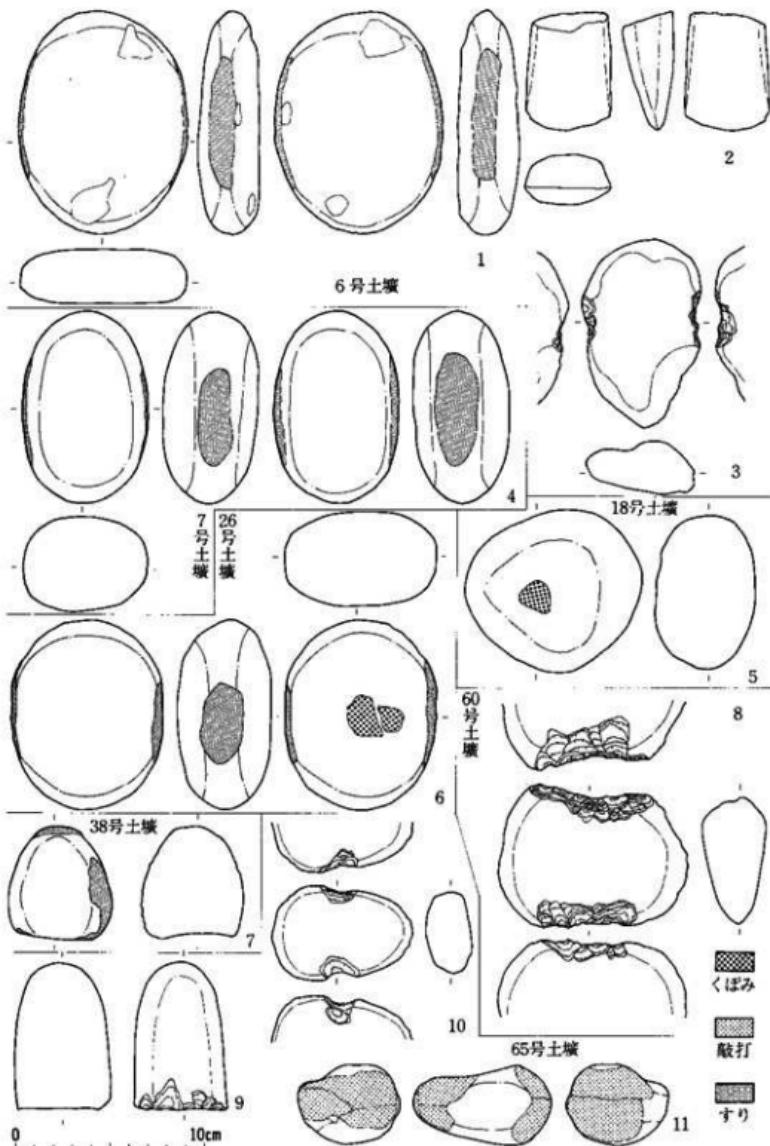
第58図 土壌内出土石器実測図 (1)



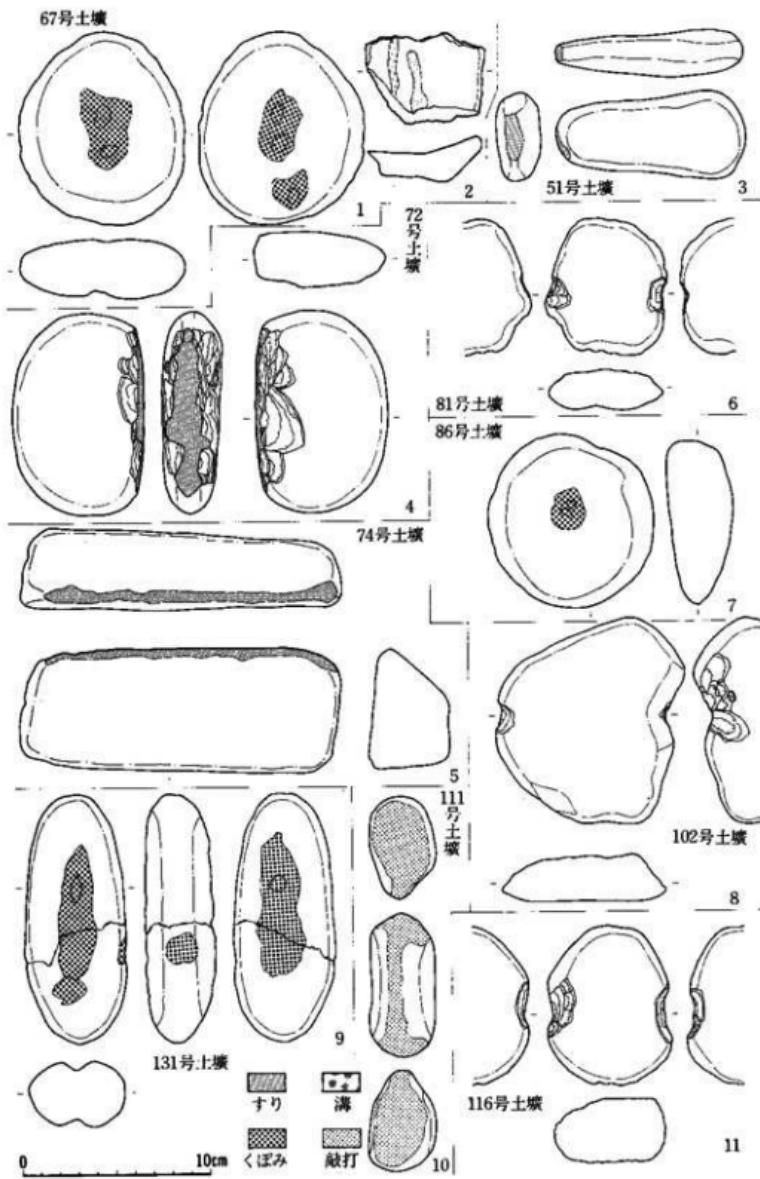
第59図 土壌内出土石器実測図 (2)



第60図 土壌内出土石器実測図（3）



第61図 土壌内出土石器 (4)



第62図 土壤内出土石器 (5)

IV-2区における土壤（第63図）

調査区南西側の（CP-431）グリッドを中心とした約16グリッド、面積にして約250m²という狭少な範囲に土壤が6基隣接しあって検出された。遺構が密集しているIV-1区からは約170mも離れている。この6基付近をまだ遺構の存在する可能性が強いのではないかという予測のもとに拡張したが、その結果は、これら6基の土壤の位置から北に約30mほど離れた地点で溝状ビットが、わずか1基のみ検出されたにすぎなかった。

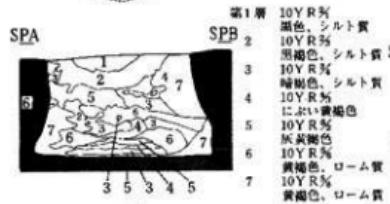
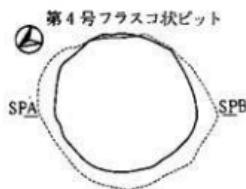
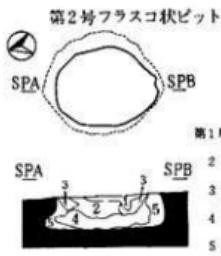
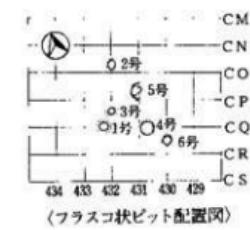
これら6基の土壤は、開口部の径が1mをこすものばかりの大規模なフラスコ状ビット（第5号についていは、若干疑問があり、フラスコ状よりは円筒状と表現した方が妥当かもしれない）である。

これら6基の土壤については、他の遺構密集地区から離れた位置に存在すること、6基が類似した形状であること、6基が隣接しあっていること、その周囲には溝状ビット1基以外に遺構が存在しないこと等を考え合わせてみた場合、それらの用途目的を追求する上で非常に興味深い事例である。まず第1に推測できることは、IV-1区の遺構群が当時の集落の中心場所であり、この6基の土壤は、故意に集落から離して構築された「貯蔵用」の穴ではないだろうかという見方である。第2には、IV-1区に存在した集落の人間の手によるものではなく、別の集落又は別の時期の人間が何らかの目的で構築したのかもしれないという見方である。

いずれにしても、その用途を決定づける大きな要因となる土壤内出土遺物については、6基とも皆無であり、現時点においては推測の域を出れないが、フラスコ状ビットという特異な形狀を有する土壤の機能を考察する面からは、貴重な資料となり得ることは確かである。（遠藤）

第4表 土壤観察一覧表

ビット番号	重複関係	検出グリッド	平面形	形態	計測値			出土遺物	備考
					開口部	横底部	深さ		
1	なし	CP・Q-432	円形	フラスコ状	130	200	75	なし	
2	#	CN-431-2	横円形	#	150×115	175×150	50	#	
3	#	CP-431-2	円形	#	115×100	195×170	100	#	
4	#	CP・Q-430	#	#	200	250×220	150	#	
5	#	CO-431	#	円筒状	125	120	130	#	
6	#	CQ-429-430	#	フラスコ状	130	140	70	#	開口部は壊れ部分があり不確定



第1層	10Y R 5% 黑褐色、シルト質 10Y R 5% 褐色、ローム質
2	10Y R 5% 黑褐色、シルト質 10Y R 5% 褐色、ローム質
3	10Y R 5% 黑褐色、シルト質 10Y R 5% 褐色、シルト質 10Y R 5% 褐色、ローム質
4	10Y R 5% 黑褐色、シルト質 10Y R 5% 褐色、ローム質
5	10Y R 5% 黑褐色、シルト質 10Y R 5% 褐色、ローム質
6	10Y R 5% 黑褐色、ローム質



第1層	10Y R 5% 黒褐色、シルト質 10Y R 5% 褐色、シルト質
2	10Y R 5% 褐色、シルト質 10Y R 5% 褐色、シルト質
3	10Y R 5% 褐色、シルト質 10Y R 5% 褐色、シルト質
4	10Y R 5% 黒褐色、シルト質 10Y R 5% 褐色、シルト質
5	10Y R 5% 黒褐色、ローム質 10Y R 5% 褐色、ローム質
6	10Y R 5% 黒褐色、ローム質



第1層	10Y R 5% 黒褐色、シルト質 10Y R 5% 褐色、シルト質
2	10Y R 5% 黒褐色、シルト質 10Y R 5% 褐色、シルト質
3	10Y R 5% 黒褐色、シルト質 10Y R 5% 褐色、シルト質
4	10Y R 5% 黒褐色、シルト質 10Y R 5% 褐色、シルト質
5	10Y R 5% 黒褐色、シルト質 10Y R 5% 褐色、シルト質
6	10Y R 5% 黒褐色、ローム質 10Y R 5% 褐色、ローム質
7	10Y R 5% 黒褐色、ローム質

0 2m

第63図 M-2区検出土壙

(3) 配石（第64図—第66図）

IV—2区のA N～A O—421～423グリッドで、12基の配石遺構を検出した。この地点の北側は急斜面となって老部川へ至り、その向こうには吹越鳥帽子岳が眺望でき、標高約60mの見晴らしの良好な丘陵上に位置している。IV—1区の湧水からは、北北西—約300m離れている。

12基の配石遺構は、第V層上面で確認されたが、その下部には土壌及び掘り方は確認できなかった。以下、各遺構の概略を記述していくが、規模の計測は、確認面における礫の外側の最大値を用いている。また、弧状や「コ」の字状のものの短軸は（ ）をついている。なお、配石を構成している礫の大きさは、長軸40～30cm前後、短軸30～20cm前後で、厚さ20～10cm後の扁平礫を用いているものが多く、他に長軸20～10cm、短軸10cm前後、厚さ8cm前後の梢円球状の挙大のものがある。石質は、すべて安山岩である。

第1号配石 位置・A Q—423グリッド、規模・53cm×52cm。

扁平礫4個を方形に組み、その内部に礫を置いて、「日」の字状に組んでいる。扁平礫は5個とも、ほぼ直立している。

第2号配石 位置・A P—421グリッド、規模・47cm×(46)cm。

扁平礫3個を「コ」の字状に組んでいる。3個の礫は、ほぼ直立している。

第3号配石 位置・A Q—422グリッド、規模・85cm×(50)cm。

3個の礫が南北に並列（？）しているものである。北側の礫は角柱状の割り石で、約1/2は地中一斜位一にあり、一部焼けている。

第4号配石 位置・A P—421グリッド、規模・47cm×(37)cm。

扁平礫3個を「コ」の字状に組んだものと思われるが、東西に位置する2個の礫は、内側に向かって倒れたように斜位にある。北側の礫は直立している。

第5号配石 位置・A P—421・4222グリッド、規模・53cm×41cm。

扁平礫4個を長方形に組んでいる。4個の礫のうち2個は内側に傾き、残り2個は直立している。

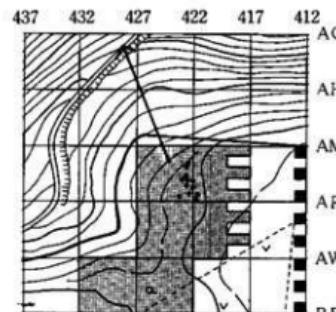
第6号配石 位置・A P—422グリッド、規模・139cm×54cm。

扁平礫と厚さ3cm前後の板状の割り石で、弧状に組んだもので、西側に開いている。扁平礫及び板状の割り石のほとんどが、内側に向かって倒れるように、斜位になっており、南端では3枚重なっている。

第7号配石 位置・A O・A P—422・423グリッド、規模・130cm×110cm。

一部擾乱を受け、南側の礫は動いている可能性がある。挙大の礫を、ほぼ円形に配したものと思われる。このうち、3個の礫はほぼ直立し、1個の礫は斜位にある。

第8号配石 位置・A O・A P—422グリッド、規模・103cm×86cm。



1 (矢印は、吹越鳥帽子房の方向を示す。)



12号

11号

AO-422



10号



7号



8号



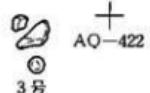
9号



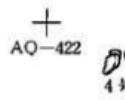
6号



5号



3号



4号



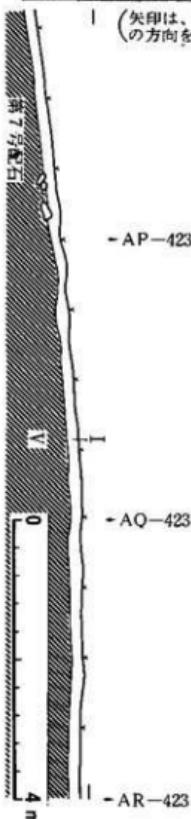
1号



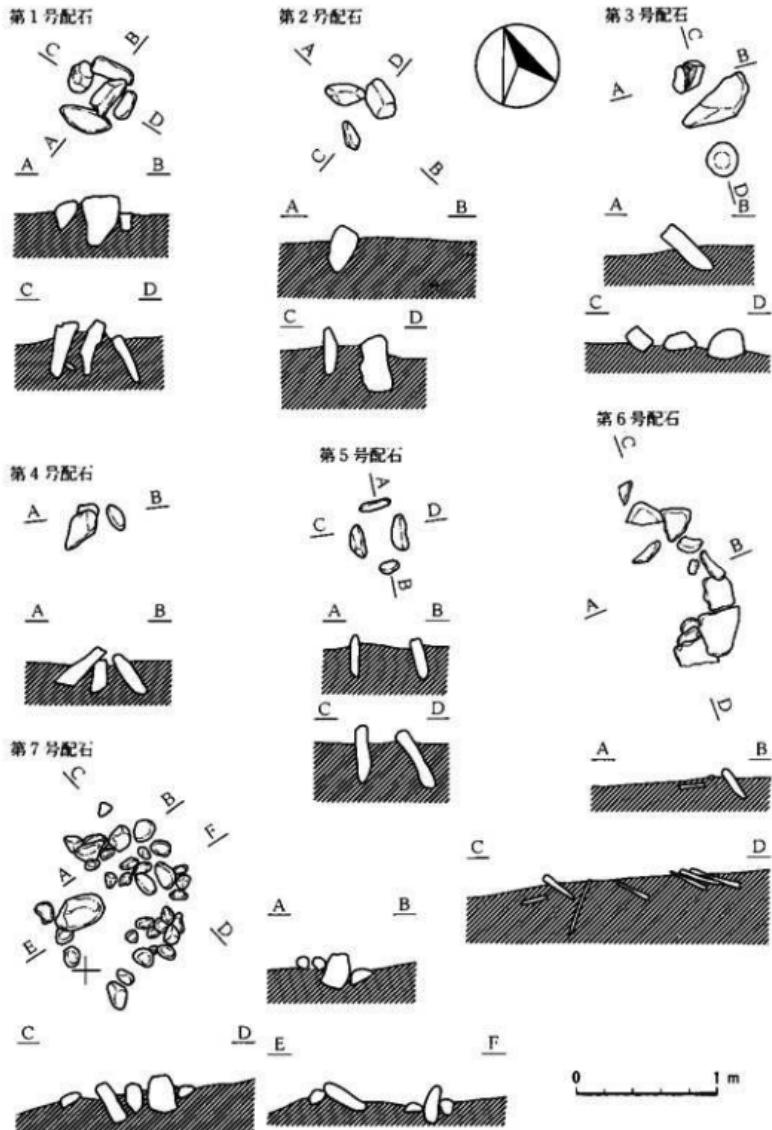
2号



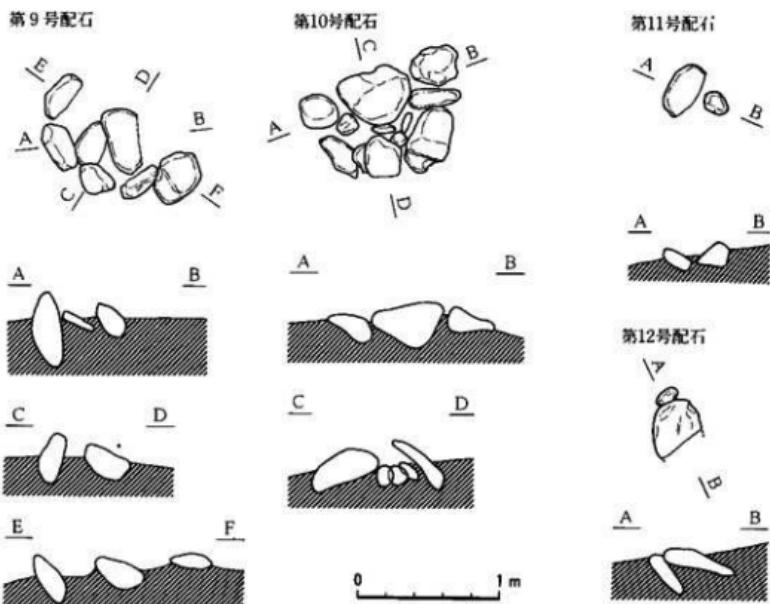
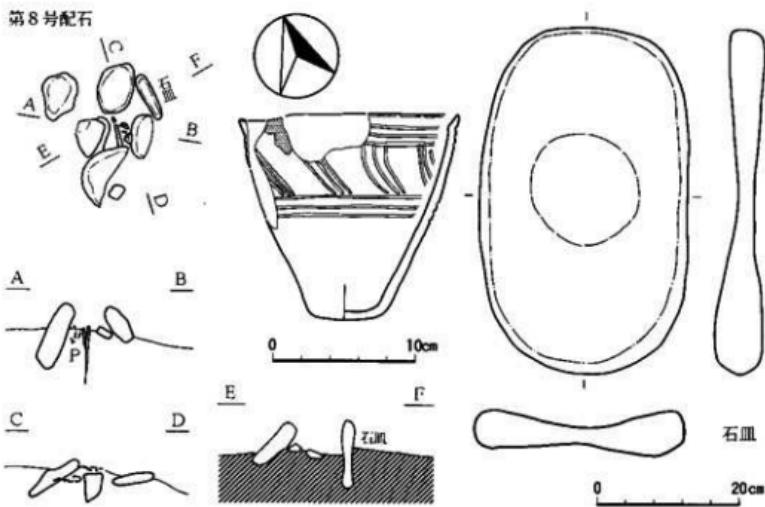
AR-422



第64図 遺構配置図



第65図 配石実測図（第1号～第7号）



第66図 配石実測図（第8号～第12号）

扁平礫4個と石皿とで、楕円形に組んだものと思われるが、見方によっては方形のものが崩れたようにも思われる。扁平礫3個は斜位に、石皿は直立していた。北側の扁平礫は横位に倒れていたが、当初は直立していた可能性が考えられる。また、内側中央には、2cm位の厚さの板状の割り石が2枚直立して地中にあり、その東側に小形の深鉢形土器（第IV群土器）が、横位に出土している。

第9号配石 位置・AO・AP-421・422グリッド、規模・123cm×(66)cm。

扁平礫7個で、弧状に礫を組んだもので、北東に開いている。扁平礫の3個はほぼ直立し、3個は斜位に、残り1個（南東端の礫）は横位にある。

第10号配石 位置・AO-422グリッド、規模・105cm×80cm。

扁平礫5個と厚みのある大礫2個で、楕円形に組み、その内側に扁平な中礫を斜位又は直立して配している。

第11号配石 位置・AN-422グリッド。

扁平礫と厚みのある礫2個を組んだもので、北側の礫は斜位にある。

第12号配石 位置・AN-422グリッド。

扁平礫2個を組んだもので、2個とも南側へ向き、斜位にある。

以上、配石遺構について、その概略を記述してきたが、これらは一般に、組石（又は石組）と呼ばれるものである。12基の配石は、ひとつのまとまりをもっており、全体に、吹越鳥帽子岳に向かっているようである。また、同一時期に構築された可能性が強い。構築時期は、第8号配石から出土した土器から、縄文時代後期前半—第IV群土器—である。第IV群土器は、II～IV—1区から多量に出土し、住居跡・土壤等が多数検出され、若干の時期差・時間差はあろうが集落を形成していたことが判明している。したがって、これらの配石遺構は、そこに住んだ集団の斎場的性格をもつ場所と考えられる。

(島山)

(4) その他の遺構

屋外炉（第67図）

3基検出した。この3基については、当初、住居跡に伴う炉の可能性も考えて、周辺の精査を行ったが、いずれも壁や柱痕を確認できなかった。

第1号屋外炉 DC-374グリッドで検出した。第8号住居跡の東側に隣接している。3個の礫（東側に石の抜取痕を確認した）をコの字状に組んだ、石圓炉と思われる。構築時期は、縄文時代後期（第IV群土器）と思われる。

第2号屋外炉 DC-378グリッドで検出した。当初、焼土遺構としていたが、確認面から10cmほど下位に、焼けた硬い面の広がり（炉底）を確認したので、地床炉として取り扱うこととした。長・短軸が50cm程の不整（円）形である。構築時期は縄文時代後期（第IV群土器）を想

われる。

第3号屋外炉 CR-383グリッドで検出した。長・短軸が60cmほどで、深さ10~15cmの掘り方に、第VI群土器の上半部を埋設したものである。

焼土遺構（第67図）

10基検出した。いわゆる焼土の堆積を確認したもので、火を燃やした痕跡が認められなかつたものである。しかし、火を燃やした痕跡が認められないという理由で、これらを地床炉あるいは焚火跡までを否定するものでもない。ここでは、屋外にある場合、火を燃やした痕跡一炉底一を有するものは屋外炉（地床炉）として、それ以外は焼土遺構として取り扱った。炉壁・炉底と呼べるものもたないが、使用された時間は短かく、屋外炉的な性格を有するものと思われる。

第6号焼土を除いた9基の焼土遺構は、暗褐色土と焼土の混じり合ったものや、焼土を多量に含む。炉壁・炉底に相当する部分は、軟弱である。第6号焼土は、焼けて、硬い部分が、広がっていた。住居跡の床面が焼けたものとも思われるが、壁・柱痕を確認できなかつたので、焼土遺構に含めた。以下、位置、規模等について、第5表で記載する。

第5表 焼土遺構一覧表

遺構番号	位 質	平 面 形	長軸cm	短軸cm	深さcm	推定時期	備 考
第1号	CU-382	不整円形	68	24	14	不 明	第5号住居跡の確認面。
第2号	CX-384	不 整 形	34	18	5	〃	
第3a号	DD-378	〃	36	22	5	純文後期	
第3b号	〃	〃	114	60	6	〃	
第3c号	〃	不整円形	44	31	9	〃	
第4号	DE-379	不 整 形	70	50	6	〃	
第5号	DE-378	〃	48	38	7	〃	
第6号	DA+DB-373	〃	164	124	5	〃	
第7号	DD-373	椭 圆 形	97	55	14	〃	第5b号に切られている。
第8号	CO-385	円 形	43	43	4	不 明	第1号住居跡の北東に隣接。

溝状ピット（第67図）

IV-2区のCG-431・432グリッドの平坦な場所で、1基検出した。この種の遺構が単独で存在することは、まれなことであるので、周辺を広げて調査してみたが、他に確認できなかつた。

確認面（第V層）における規模は、開口部で370cm×54cmであるが、セクション図にもあるように、第IV層上位を掘り込んでいるため、構築時の規模は、これより若干プラスされる（短軸では約70cm）。また底面の規模は、342cm×16cmで、掘り込み面から約30cm下位から急に幅狭となっている。深さは138cmである。

（畠山）



第67図 屋外炉跡、焼土遺構、溝状ビット実測図

2 出土遺物

(1) 土器

本項は、IV区についての記載箇所であるが、出土土器について記載する文中の初出にあたる頁でもあり、ここで、調査区全体における出土土器の概観及びそれらの記載方法について述べる。

今回の調査で出土した土器は、ダンボール箱で約120箱分になった。出土量の面からみると、IV—1区からの土器が一番多く全体の8割ほどに相当し、次いでVII区が1割程度の量で、残り1割が、IV—2区、V区、VI区の合計分にあたる。

約120箱分の土器は、縄文時代早・前・中・後・晚期・弥生時代のものがみられ、概略的には、縄文時代から弥生時代にかけての各時期の土器が出土したといえる。

このような各時期の土器が混在しているなかで、量的にみると、圧倒的に縄文時代後期の土器が多く全体の9割にも相当する量である。残り1割の中では弥生式土器が比較的多く、縄文時代早・前・中・晚期のものは各々微量である。

このように出土土器の面から遺跡全体について推測してみると、縄文時代早期のあたりからこの地一帯に人間が住みつき、それが後期の時代に湧水の存在するIV—1区付近に大集落を構成することになり、その後も弥生時代に至るまで何らかの形で人間はこの地と関わり合いをもってきたということが考えられよう。

土器の分類については、既に第II章において年代的な面からの大区分を記載しているが、各群の細分類については、前記の項でも述べたとおり、第1次調査の際の分類基準と若干の相違が生じていることなどから、本項で各群ごとにその冒頭に記載することにし、その分類基準を以下のV・VI・VII区における出土土器にも共通させることにする。

また、土器の実測図・拓影図については、遺構内出土土器は、各時期に関係なく一括して本章各節1の検出遺構の項で取り扱うことにして、遺構外出土土器は、以下に記している(7)から(6)の各時期ごとに本章各節2の出土遺物(1)の各項で取り扱うという挿入箇所における区別をした。

(遠藤)

(7) 第I群土器

第I群土器は、1～8類に分類した。以下に分類基準を示す。

- 1類：自浜式・小船渡平式に相当するもの
- 2類：寺の沢式に相当するもの
- 3類：吹切沢式に相当するもの
- 4類：早稲田2類に相当するもの
- 5類：物見台式に相当するもの

6類：ムシリⅠ式に相当するもの

7類：早稻田5類に相当するもの

8類：早期の土器と思われるが、型式の特定をし得ないもの

各類の分布状況は、第132図に示した。

I群1類（第68図1～7）

白浜式、小船渡平式に相当するもので、第IV、V a層より出土した。

(1～5)は、同一個体であるが復原し得なかった。器形は、平縁の尖底深鉢形と思われる。

口縁部は直立し、口唇部にはヘラ状工具による刻み目が施される。

文様は、器面全体に地文として貝殻条痕を施した後に、口縁部に粘土のまくれ返りを持つ縦位の爪形文（幅約1cm）を平行に3段巡らし、更にその下に横位の爪形文を1段巡らしている。

内面は、口唇部より約7cmほどの幅に、器面と同様の貝殻条痕が横位に整然と施され、それ以下にはヘラ状工具のようなもので、やや凸凹はあるが良く調整されている。胎土には、砂粒（2～3mmの大きなものもみられる）を含むが、繊維の混入は認められない。焼成も良く硬質な感じがし、色調は、暗褐色、灰色を呈する。器厚は7～8mmである。

(6、7)は、口縁部及び口縁部付近の破片で、粘土のまくれ返りを持たない爪形文（爪形状のもの）が施される。

I群2類（第68図8～15）

寺の沢式に相当するもので、IV層より2個体出土した。

器形は、口縁部が直立し、口唇部が外側に傾斜する平縁の尖底深鉢形と思われる。

文様は、(8～11)が、口唇部の傾斜部分に斜位の貝殻腹縁文を施し、口縁部に、横位の貝殻腹縁文が整然と施される。それ以下の胴部には、斜位の貝殻腹縁文が施される。

(12～15)は、口唇部の傾斜部分に、絹条体圧痕文(R)施され、口縁部、胴部には、前者同様の貝殻腹縁文が施される。

2個体とも口縁部文様を詳しく見ると、2種の貝殻腹縁文が認められる。隙間なく施されるものと、2～3mmほどの間隔を開けながら短い貝殻腹縁文が連続的に施されるものである。前者4段、後者2段で1単位と思われる。

内面には、貝殻条痕及びヘラ状工具による調整がみられ、平滑に仕上げられている。胎土には、細かな砂粒を多量に含むが、繊維の混入は認められない。焼成はあまり良くなく、全体に砂っぽい感じがする。色調は、暗褐色及びくすんだ赤褐色を呈する。器厚は10～11mmである。

I群3類（第69図16）

吹切沢式に相当するもので、(DA-428) グリットIV層より1個体出土した。

器形は、口縁部形状は不明だが、砲弾形の尖底深鉢形を呈する。

文様は、器面に貝殻腹縁文が斜位に施されるが、施文後に調整が行われているため、潰れた形状を示している。

内面は、凹凸はあるがヘラ状工具による調整が、斜位、横位に行われている。胎土には、砂粒を含むが、纖維の混入は認められない。焼成は良く硬質な感じがし、色調は暗灰色を呈する。器厚は9~10mmである。

I群4類（第69図17~24）

早稻田2類に類似するもので、主にIV層より出土した。

(24)は、口縁部で波状を呈する。外反しながら立ち上がり、口唇部は平坦に面取りされる。文様は、K字状の隆帶及び隆帶上の絡条体圧痕文（0段r）、鋸歯状沈線文、貝殻押引文が施される。内面には貝殻条痕が施され、胎土には砂粒を含み器厚は6mmほどである。

(17~23)は、同一個体と思われるが器形は不明である。文様は、竹管を押し引きながらの刺突文、隆帶及び隆帶上の絡条体圧痕文（L）、鋸歯状沈線文、貝殻押引文、やや波状の貝殻腹縁文が施される。内面には、横位の調整がみられるが、平滑な部分と面の粗い部分とがある。胎土には、多量の砂粒を含み、焼成は良く硬質の感じがする。色調は赤褐色を呈し、器厚は6mmほどと薄い。

I群5類（第69図25~40）

物見台式に相当するもので主にIV層より出土した。

復原し得たものはないが、(40)はある程度器形、文様構成を知り得るので詳しく見てみたい。器形は、口縁が波状をなし（4波状を呈すると思われる）、口縁部が内湾しながら立ち上がり、口唇部は外側に傾斜する。口縁部と胴部の境は、逆「く」の字状に屈曲している。底部はないが、尖底と思われる。

文様は、口縁部では、沈線文による三角形、鼓状の形、入組状沈線文及び貝殻腹縁文等の組み合せによって幾何学的文様が構成される。三角形、鼓状の形の頂点には深い刺突が施され、入組状沈線の終点には、瘤状の突起が付けられ刺突が施される。口縁部と胴部の境は、2条の沈線をやや波状に巡らし、その頂部には刺突が施される。胴部は、一部しか残っていないため明確ではないが、沈線文、貝殻腹縁文、刺突文の組合せによって幾何学的文様を構成すると思われる。沈線の中には、すべて貝殻腹縁文が充填される。また、内面の口唇部直下に1条の貝殻腹縁文が巡る。

(25~39)は、すべて破片資料である。口縁部は、内湾しながら立ち上がり、波状線（25~28）平線（29~31）がみられる。口唇部はすべて外側へ傾斜する。

文様は、沈線文、貝殻腹縁文、刺突文等の組合せによる幾何学的文様が施される。沈線文を

詳しく観察すると、貝殻腹縁文を沈線の中に充填するもの（26・27・32・35・38—40）沈線に沿って施すもの（25・28・30・31・36）施されないもの（29・34・37）がみられる。

内面は、すべて平滑に調整され、光沢を持つものもみられる。胎土には砂粒を含み、焼成は一般に良い。色調は、赤褐色、暗黄褐色、暗褐色を呈し、器厚は7～10mmである。

I群6類（第70図41～第72図106）

ムシリ I式に相当するもので、主にIV層より出土した。

器形を明確に知り得るものはないが、平縁の平底深鉢形土器と思われる。口縁部は、外反するものと直立するものがある。口唇部に刻み目が施されるものもある。底部資料は、1点のみだが、外周縁が外へ張り出す平底を呈する。（106）

本類は、文様により3種に分類される。沈線文のみのもの（a類）、沈線文と刺突文を組み合せたもの（B類）、隆帶を持つもの（c類）である。

a類（41～89）沈線文のみのものは、文様構成により、更に4種に細分した。

1種：（41～48）平行沈線のみを斜位に施したものである。右下りが多い。

2種：（49～60）平行沈線文によって幾何学的文様を構成するものである。異方向の斜位平行沈線を交互に施すもの、2～3条の平行沈線によって三角形を構成するもの、1～4条の横位平行沈線を施し、その上下に異方向の斜位平行沈線文を施すものがみられる。

3種：（61～84）矢羽状沈線文を施したものである。同じ長さの沈線によるもの、長さの異なる沈線によって片翼状になるもの、太さの異なる（工具の違い）沈線によるものがみられる。

4種：（85～89）沈線によって格子目状の文様を構成するものである。

b類（第71図90～第72図102）

平行沈線文と刺突文とを組合せることによって文様を構成するものである。刺突文は、沈線に沿って施されるものが多い。刺突文は、半截竹管によるものと、極めて細い管状の工具によるものがみられる。また工具を粘土に刺した後にやや引きずったものは、長めの刺突文となる。

c類（第72図103～105）

隆帶が施されたもので、3点みられる。（103）は、口縁部片で、口唇部に沿って隆帶が施され、隆帶上には棒状工具による刺突文が施される。（104）は、横位の隆帶が巡り、その頂部に刺突文が施される。（105）は、平行沈線文、刺突文、隆帶の組合せによるものである。隆帶は、その残存部分及び剥げ落ちた部分の痕跡から、曲線を描くように粘土を貼り付けたと思われる。

以上、文様を見てきたが、（106）の底部片は、底面にも沈線文が施されている。また本類は器面に貝殻条痕による調整が行われた後に、沈線文、刺突文を施しているものが多い。

内面は、貝殻条痕による調整が行われているものが多い。胎土には、砂粒を含むが、繊維の

混入は認められない。焼成は良好のものが多く、色調は、赤褐色、暗褐色を呈する。器厚は、5～7mmで薄い。

I群7類（第72図107～第73図131）

早稻田5類に相当するもので、主にIV層より出土した。

復原し得たものはないが、器形は一般に、平縁、平底の深鉢形であるが、波状縁を呈するもの（127）もみられる。口縁部は、直立するものとやや外反するものがある。口唇部に、縄文が施されるもの（109、1112）や、ヘラ状工具による刻み目が施されるもの（127、129）がみられる。

文様が裏面にまで及ぶものもあるが、ここでは器表面の文様により4類に分類する。

a類：（108～122）いわゆる単節斜縄文が施されるもので、O段多条の縄文原体を使用したものが多い。回転方向が一定しているものは少なく、様々な方向から回転されている。

b類：（123）1種が一つの原体を使用しているのに対して、撚りの方向（R・L）は同じだが2種類の原体によって縄文が施文されるものである。縦位羽状を呈する。器面右側の縄文は、O段多条R・Lだが、O段の撚りがr・r・1となっている。

c類：（124～131）綾杉状の縄文が施されるものである。撚りの異なる1段の原体を弱く撚り合せた原体が用いられる。組合せには、R・L（124～126）、R・L・L（127、129）、L・R・R（128、130、131）がみられる。

d類：（107）押圧による側面圧痕が施されるものである。口唇部直下に、馬蹄形状の圧痕が施される。内面の口唇部直下にも同様の圧痕が認められる。

以上のように分類できるが、底部の外周縁に指頭圧痕文を施したもの（120）もある。

内面の調整は十分でなく、指頭による押圧によって凹凸がみられる。また、器面同様に縄文が施されるものがある。（109、1114、123）胎土には、砂粒を含み、個体によって含有量の差はあるが、織維の混入が認められる。焼成はあまり良くなく全体的にもろい。色調は、赤褐色、暗褐色、黄褐色を呈し、器厚は12～15mmで厚手である。

I群8類（第74図132～138）

縄文時代早期の土器と思われるが、型式を特定し得えないものを一括した。

a類（132）

口縁部で、直立する。口唇部は平坦になっている。器形は不明である。

文様は、口唇部から1.5cmの幅で、縦位の絡条体圧痕文（良）が施され、更に、それ以下には3条の縦衛状沈線文、貝殻押引文が施される。

内面には、横位の貝殻条痕による調整が整然と行われる。胎土には、砂粒を含み、焼成は良好である。胎土、焼成、内面の調整痕は、I群6類に類似する。色調は、赤褐色を呈し、器厚は

6 mmほどで薄い。

b 類 (133・134)

結束しない羽状繩文 (O段多条LR・RL) が施されるものである。

器形は、平縁の深鉢形であるが、底部形状は不明である。

内面は、横位、縦位の調整が施されるが、指頭による押圧のためかなり凹凸がある。胎土には、砂粒を含み、繊維の混入が認められる。内面の様子、胎土は、I群7類に類似する。色調は、赤褐色、暗褐色を呈し、器厚は13~16mmで厚手である。

c 類 (135~138)

撚糸文 (1段LとRを棒状のものに巻きつけての回転施文) が施されるものである。

内面は、横位調整が行われているが、凹凸がある。胎土には、砂粒を含み、繊維の混入を認められる。I耕7類の胎土に類似する。色調は、明赤褐色を呈し、器厚は10~12mmである。

(I群8類について)

本類は、土器型式を特定し得ないものであるが、a~c類まであり、それぞれについて若干補足説明をしたい。

a 類

本類は、絡条体压痕文、鍵齒状沈線文、貝殻押引文が施されるものである。全体の器形は不明であるが、平縁口縁部が直立する。この種の文様は、吹切沢式、早稲田2類、螢沢AII式等にみられる。(結集体压痕文はムシリI式にも存在するがやや様相を異にする)しかし、胎土、焼成、内面調整(貝殻条痕による調整が整然と行われる)は、ムシリI式のそれと酷似し、器厚が薄いこと(5.5mm)も共通する。

以上のような特徴があるが、破片資料1点のため、どの土器型式に伴うかは、現時点では特定できない。

b 類

本類は、結束しない羽状繩文が施されるものである。O段多条のLR・RL原体を使用して羽状繩文が構成される点は、繩文時代前期初頭の長七谷地III群と共に通する。しかし、b類の胎土及び焼成は、早稲田5類(I群7類)に類似し、内面の状態(長七谷地III群のように平滑に調整されず、指頭による押圧のためかなり凹凸がある)も早稲田5類に近い。

b 類は、数量的に少ないため断定はできないが、長七谷地III耕、早稲田5類に共通点をもつことから、早稲田5類から長七谷地III群へ移行する時期のものの可能性がある。

c 類

本類は、撚糸文が施されるものである。1段LとRの原体を、棒状のものに巻いたものを回転施文することによって、ハの字状の撚糸文を作り出している。

早稻田5類には、1本の原体を棒状のものに巻きつけて施文した撚糸文はみられるが、本類のようなものはみられない。c類と同様の文様は、北海道東釧路遺跡出土の^(註1)III群8類土器の中に入られ、「絡繩体圧痕文」と呼称されているものに相当する。この土器は、絡繩体圧痕文、短縄文、繩線文等を組合せて文様を構成しているが、c類にはみられず様相を異にする。

東釧路III群8類土器との関連もあるが、c類の胎土、焼成、内面の状態が早稻田5類（I群7類）とほとんど変わらないことから、c類は、早稻田5類とほぼ併行する可能性があると思われる。

（注1）釧路市教育委員会1962東釧路貝塚発掘調査報告書「東釧路」

（イ）第II群土器

繩文時代前期の土器群で、1～4類に分類した。以下に分類基準を示す。

1類：長七谷地III群に相当するもの

2類：早稻田6類に相当するもの

3類：芦野I群・表館式に相当するもの

4類：綾縞文が施されるもの

5類：円筒下層d1式に相当するもの

各類の分布状況は、第132図に示した。

III群1類（第74図139～142）

長七谷地III群に相当するものであるが、器形を知り得るものはない。

結束しない羽状縄文（0段多条L R・R L）が施されるものである。（139）は、口縁部片で、口唇部がヘラ状工具により平坦に面取りされている。文様は、横走する縄文が施され、それ以下には、羽状縄文が施される。

内面は、横位調整によって平滑になっている。胎土には、砂粒を含み、纖維の混入が認められる。焼成は良く、色調は、暗黄褐色、黒褐色を呈する。器厚は9mmほどである。

II群2類（第74図143～第75図181）

早稻田6類に相当するものである。主にIV層より出土した。

器形は、平縁及び波状縁の尖底深鉢形である。口唇部が、ヘラ状工具により平坦に面取りされているものが多い。

文様により、更に2種類に分類できる。

a類（143～160）

口縁部及び底部に、押引沈線文が施されるものである。胸部には、ループ文、層状縄文が施されている。

b類（161～181）

縄文のみが施されるものである。0段多条の単節斜縄文、複節斜縄文、ループ文がみられる。内面は、平滑に調整されている。胎土には、砂粒を含み、個体によって含有量に差はあるが、繊維の混入が認められる。色調は、暗褐色、黒褐色を呈し、器厚は7～10mmほどである。

II群3類（第75図186～188）

芦野I群・表館式に相当するものであるが、器形は不明である。

(186)は、多種の文様によって構成される。口縁部側から順に見ると、横位の刺突列2段（ヘラ状工具による）、コンパス文（半截竹管による）、円形竹管文横位の刺突列2段、コンパス文、ループ文が施される。

(188)は、半截竹管による刺突列が何段も施される。

内面は、平滑に調整されている。胎土には、砂粒を含み、繊維の混入が認められる。色調は(188)赤褐色、(186・187)黒褐色を呈する。器厚は、7mmほどである。

II群4類（第75図182～185）

横走する綾絡文を全面に施したもので、IV層より出土した。

すべて同一個体であるが、復原し得ない。器形は、平縁の深鉢形で、底部近くの破片(185)から尖底を呈するとと思われる。口唇部は、粘土がやや外側にまくれ返り、面取りを行った後にヘラ状工具により刻み目が施される。

文様は、約15～30mmの間隔を開けながら、綾絡文(L)が横位に巡らされる。底部近くには、半截竹管による押引沈線文が縦位に施される。

内面は、横位の調整が良くなされている。胎土には、砂粒を含み、やや多めの繊維の混入が認められ、繊維の走向が明瞭に観察し得る。色調は、黒褐色、暗黄褐色を呈し、器厚は10mmほどである。

II群5類（第75図189・190）

円筒下層d1式に相当するものである。(A I-392) グリットから1個体出土した。

器形は、胴部の張った円筒深鉢形で、口縁部は、外反し、波状縁を呈する。

文様は、低い降帶によって口縁部文様帯と胴部文様帯に分けられる。前者には、撚糸压痕文(L R)が施され、幾何学的文様を構成する。後者には、木目状撚糸文(L・R)が施され、隆帶上には、刺突文が施される。

内面は、ヘラ状工具により平滑に調整され、光沢を持つほど良く行われている。胎土には、細かな砂粒を含み、極めて少量の繊維の混入が認められる。焼成は良く、色調は赤褐色を呈する。器厚は、口縁部7mm、胴部9mmほどである。

（II群4類について）

本類は、器面に綾絡文のみが施され、底部近くに半截竹管による縦位の押引沈線文が施され

るものである。器形は、平縁の深鉢形で尖底を呈すると思われる。

綾絡文の施される土器は、以下の遺跡等において出土している。

表館遺跡：^(注1) II群1類b・c（東銅路III、IV式との関連）平縁、平底、口唇部が平坦になり刺突が加えられる。文様は綾絡文。

鷹架遺跡：^(注2) II群B類一3（早稲田6類）尖底深鉢形、波状縁、口縁部、底部に押引沈線文、胴部は地文の羽状網文上に1条の綾絡文。

発茶沢遺跡：^(注3) II群7類（型式を特定せず）尖底深鉢形、底部に押引沈線文、胴部に綾絡文。

和野前山遺跡：^(注4) 8群E類（早稲田6類）尖底深鉢形、平縁、地文網文上に綾絡文。

102号遺跡：^(注5) 第23図-79（大木2a式併行）平底の深鉢形、平縁、不整綾絡文。

春日町遺跡：^(注6) I群1類A（住吉町上層式）尖底あるいは丸底の深鉢形、平縁、撚糸文と綾絡文の組合せ。

これらの中で、II群4類は、尖底深鉢形、底部に竹管による押引沈線文、胴部に綾絡文のみを施すなどの点から、発茶沢II群7類に最も近いと思われる。

発茶沢II群7類を含む本類が、どの型式に伴うものであるか、綾絡文が施されるものが多くある中で、底部が尖底をなす点、底部に押引沈線文が施される点などから、早稲田6類に伴う可能性があると思われる。

(注1) 青森県教育委員会 1981 表館遺跡

(注2) 青森県教育委員会 1981 鷹架遺跡発掘調査報告書

(注3) 青森県教育委員会 1982 発茶沢

(注4) 青森県教育委員会 1984 和野前山遺跡

(注5) 青森県教育委員会 1979 むつ小川原開発予定地内埋蔵文化財試掘調査概報

(注6) 児玉作左エ門・大場利夫 1954 函館市春日町出土の遺物について

(ウ) III群土器

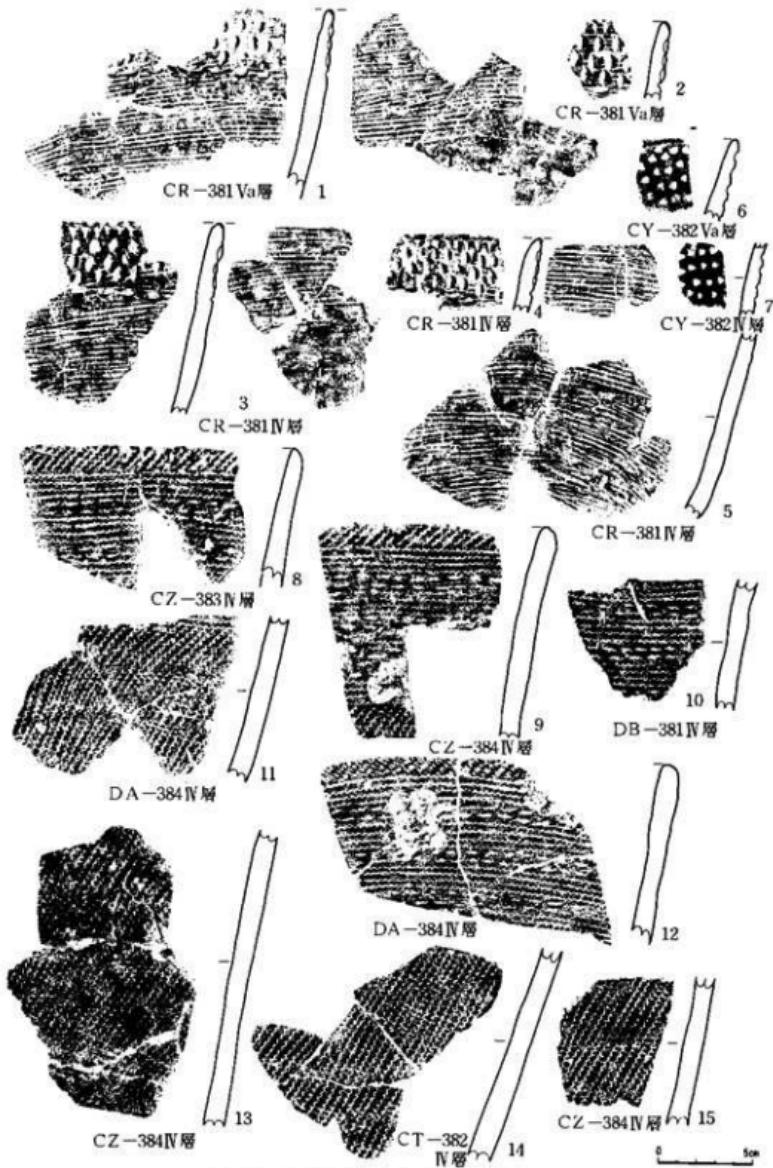
III群土器は、IV区からは出土していないが、他の区で出土しているので、ここで分類基準を示す。

1類：円筒上層c式に相当するもの

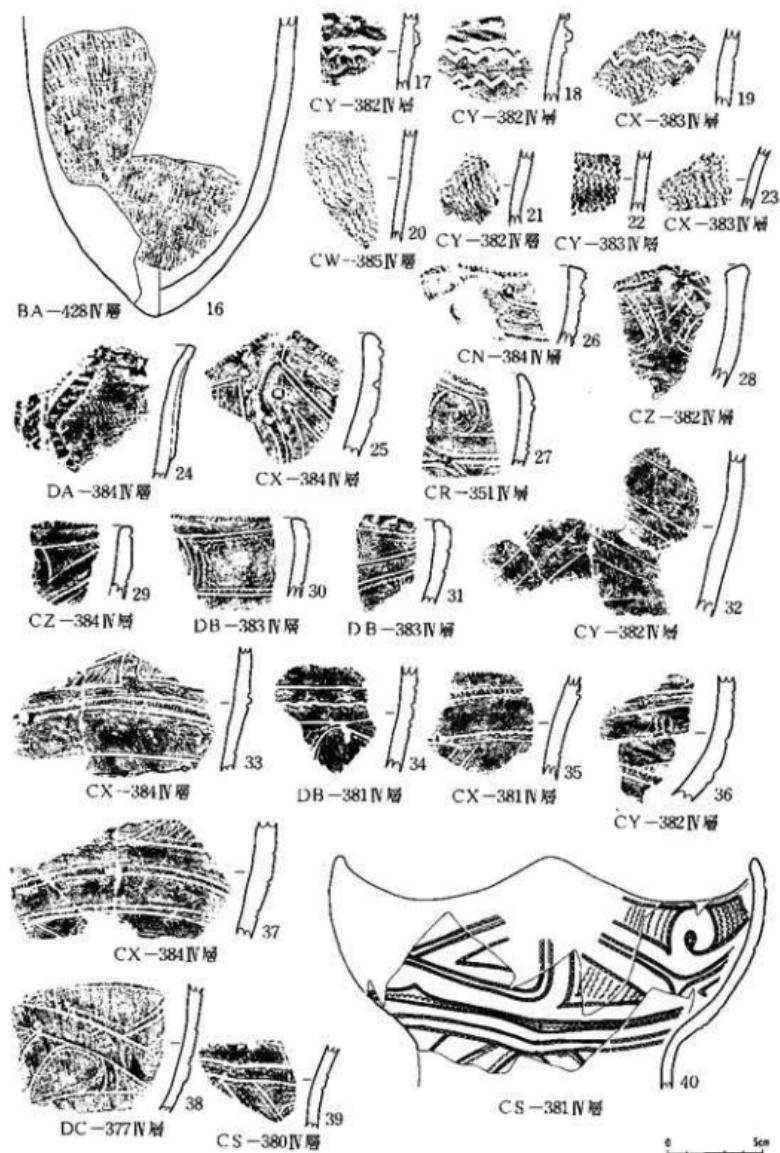
2類：円筒上層d式に相当するもの

3類：大木10式併行に相当するもの

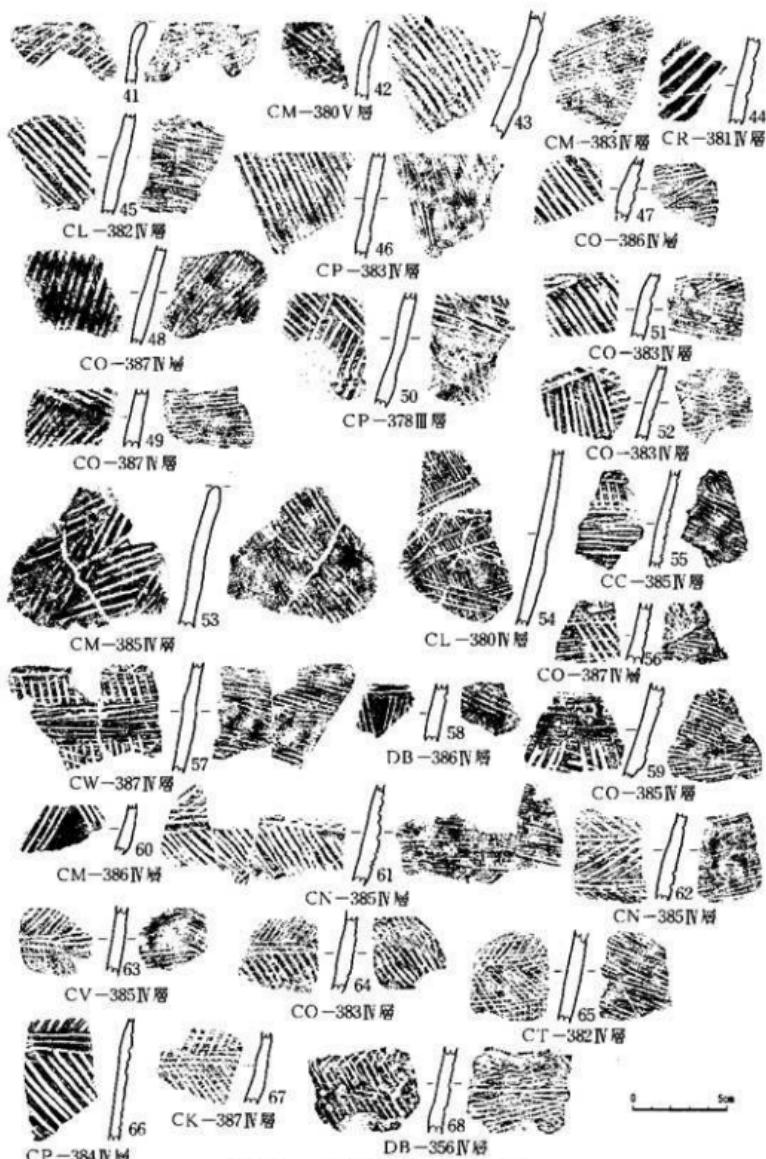
(一条)



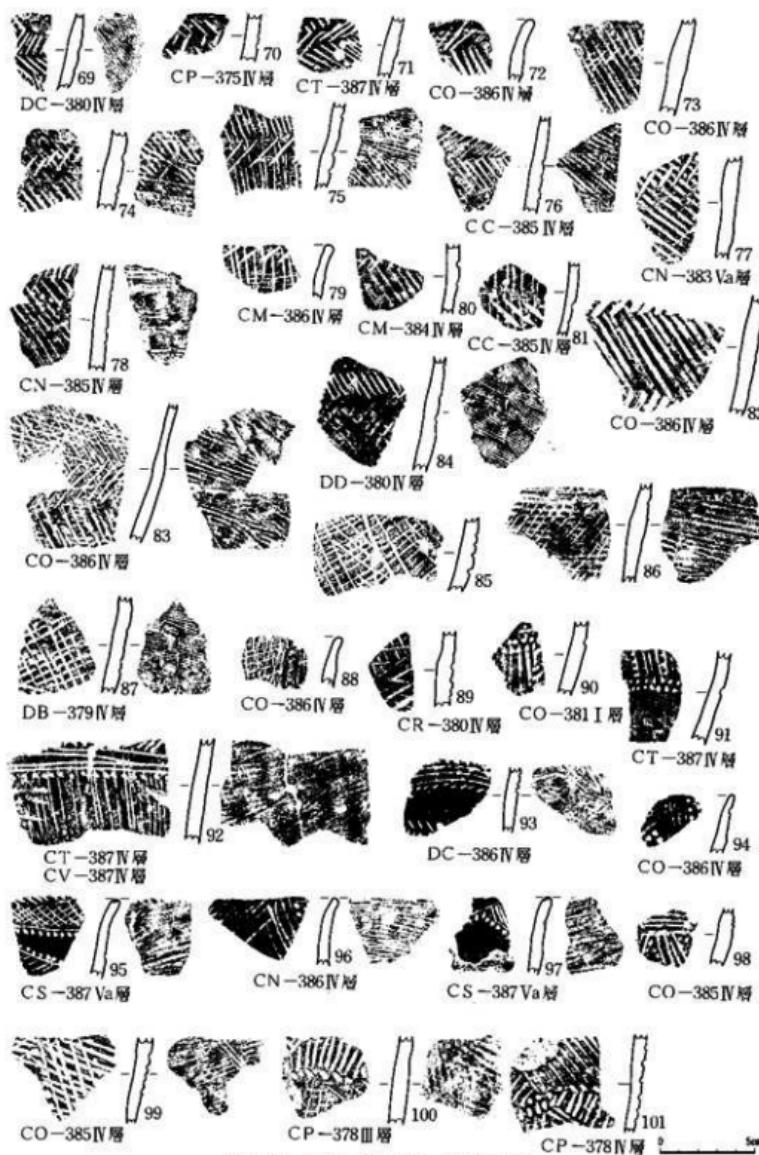
第68図 I群土器拓影図 (I群1類、2類)



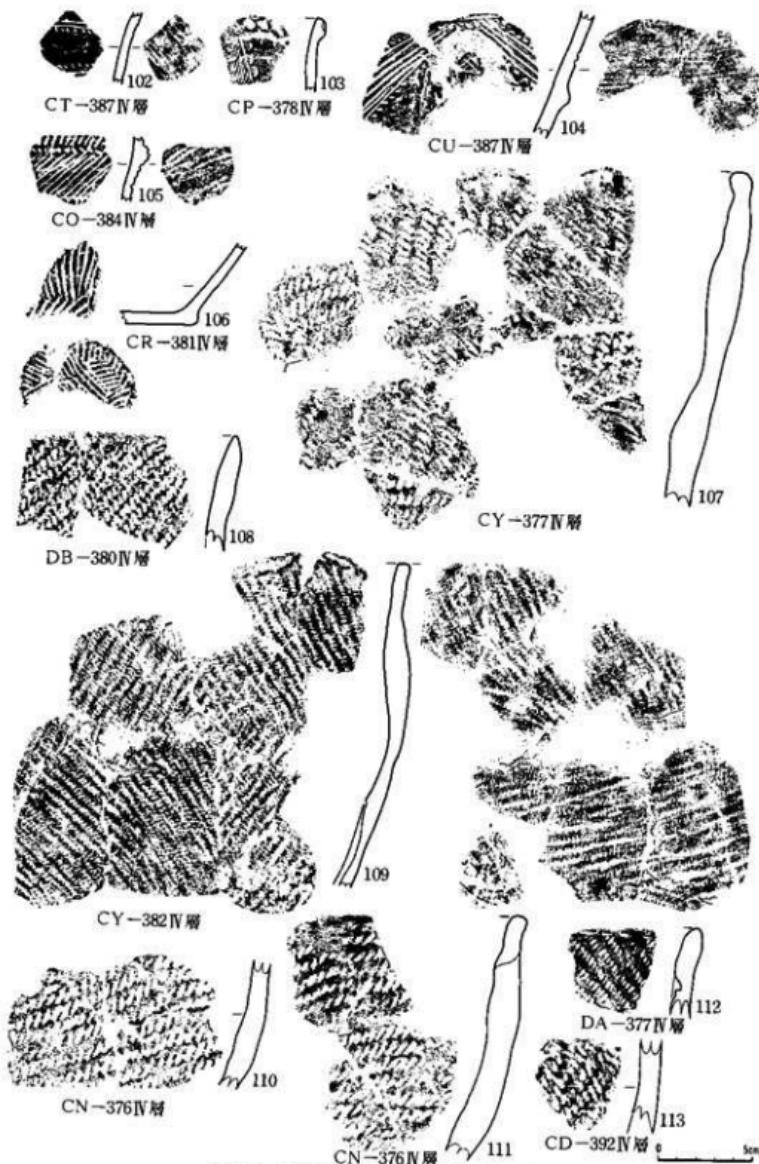
第69圖 I群土器拓影圖 (I群3類、4類、5類)



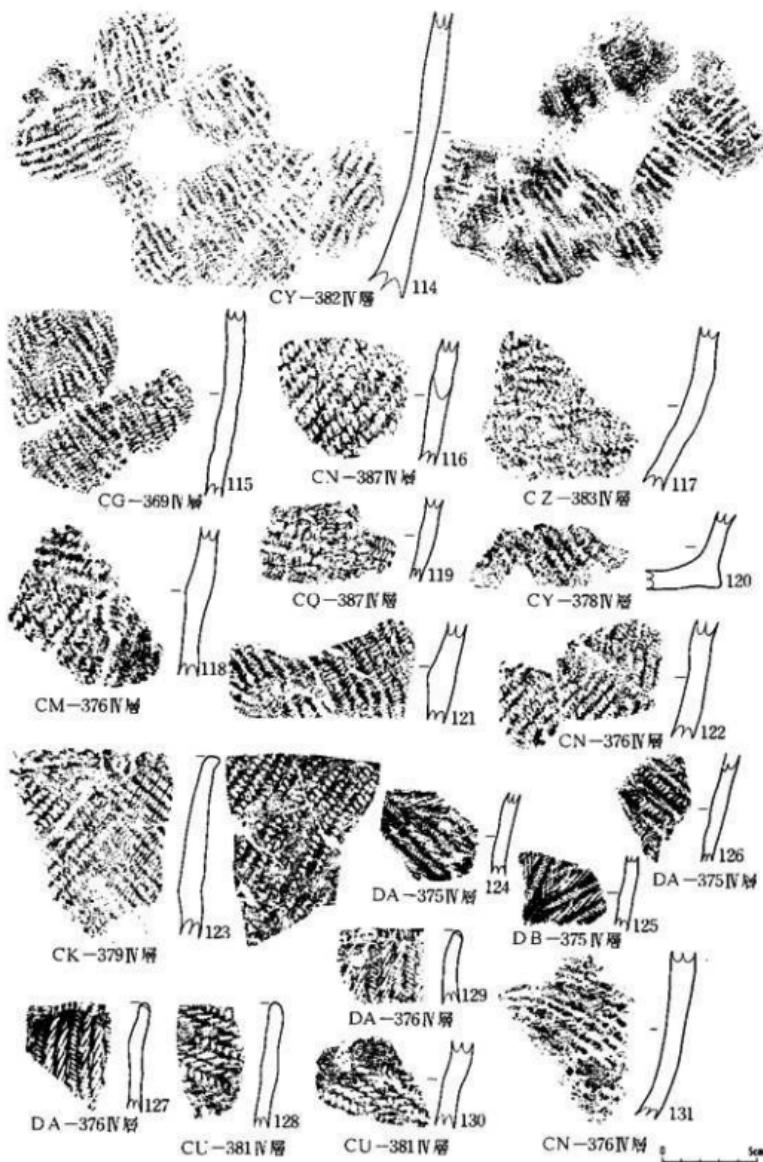
第70図 I群土器拓影図 (I群6類)



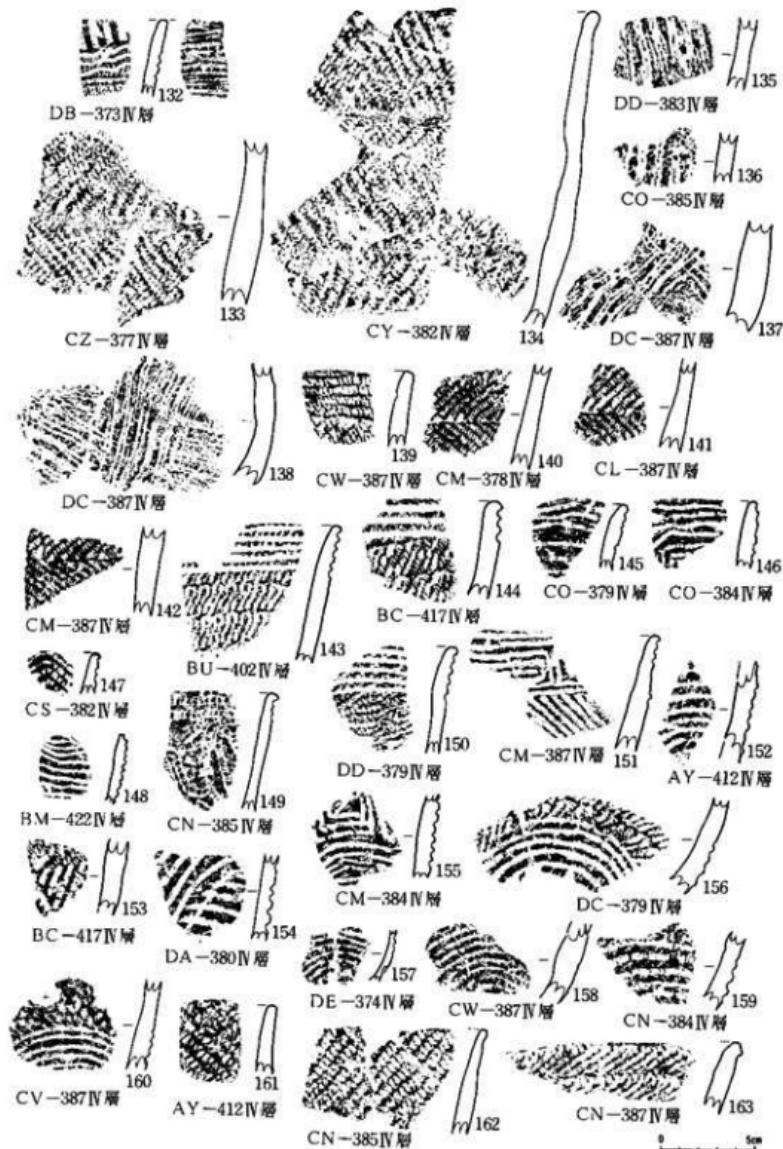
第71図 I群土器拓影図 (I群6類)



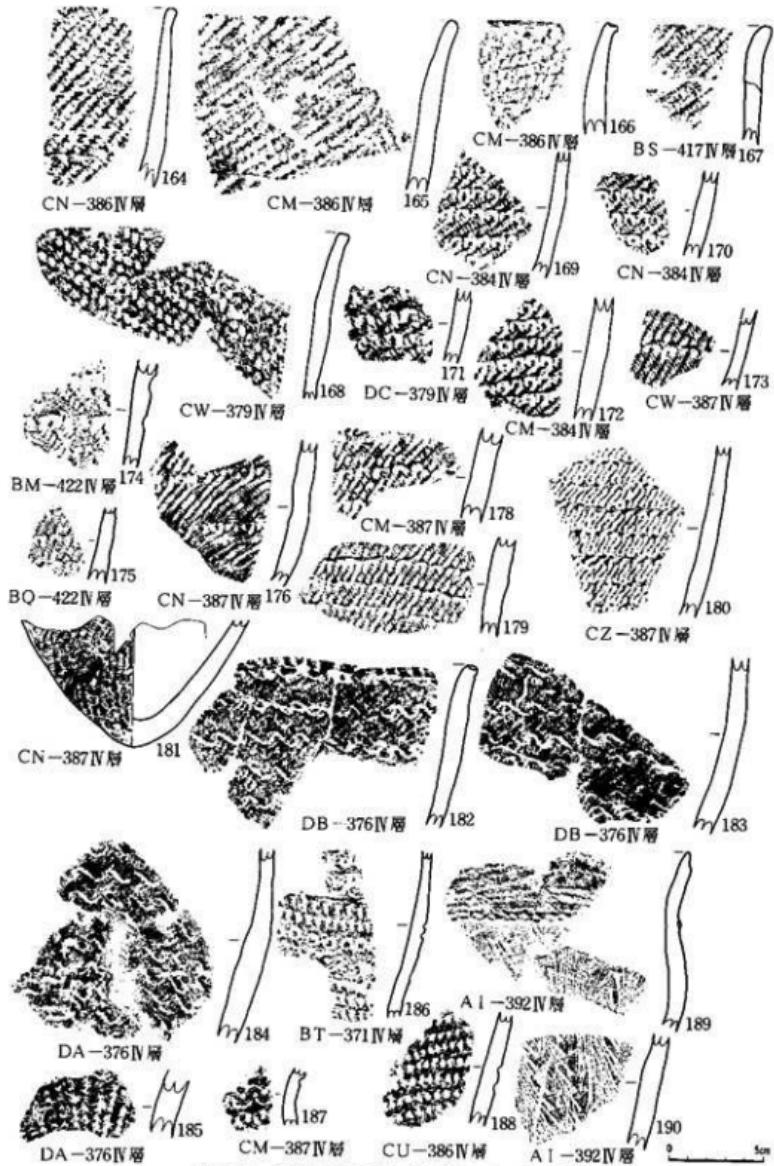
第72図 I群土器拓影図 (I群6類、7類)



第73図 I群土器拓影図 (I群7類)



第74図 I群・II群土器拓影図 (I群8類、II群1類、2類)



第75図 II群土器拓影図 (II群2、3、4、5類)

(エ) 第IV群土器

本群は、縄文時代後期の土器であり、その大半は、「十腰内I群土器」に比定できる。

本群の土器は、既に何度か述べているように、今回の調査における出土土器の主体を占めている。

本群の土器の出土層位は、明確ではないがII層からIV層にかけてであり、主としてIV層中位から下位にかけての面である。しかし、遺物包含層における土器の出土状況は、II層から地山のV層上面まで、浅い箇所では30cm前後の深さしかなく、平均的にみても50cm前後の深さしかない。この間に、縄文時代早期から弥生時代までの土器が混在しているという状態であった。

従って本群の土器についても、層位ごとの土器取り上げができず、多量の土器の出土をみながらも、層位ごとにおける時間差による土器の分類が出来ぬまま調査を終了した。上述のような理由から、以下に記述する本群の細分類の基準は、時間差的な面も考慮しつつも、文様・器形面の差異に、より比重をかけた判断によるものである。以下のとおり、基準の設定に際しては、観点の相異により、同一系統上に並べられない基準もでてきたが、ここでは、それらを一括して分類記号を付すことにした。

なお、本項で分類した結果は、第1次調査の分類（青埋文報第90集「大石平遺跡」15頁参照）と分類記号・順番に違いがみられる程度で、おおむね基本的には合致しているものと解釈している。

今回の調査で出土した縄文時代後期の土器を時代別区分の第IV群とし、その中で、文様・土器型式・施文工具・その他という観点から分類した。

本節2の冒頭でも述べたが、第IV群土器は、大きく遺構内出土と遺構外出土のものに分けることができる。土器の実測図・拓影図については、遺構内出土のものは各検出遺構の記載の項に、遺構外出土のものは本項の以下に各々掲載することにし、土器の事実記載説明文については、遺構の内外出土に関係なく一括した取り扱いで記述する。

A類 (第80図-1~6)

本類は、器面に文様の施文されない土器であり、折り返し口縁で無文の土器も含めた。

本類は、口縁部の作り、装飾の面から、更に四つに細分することができる。

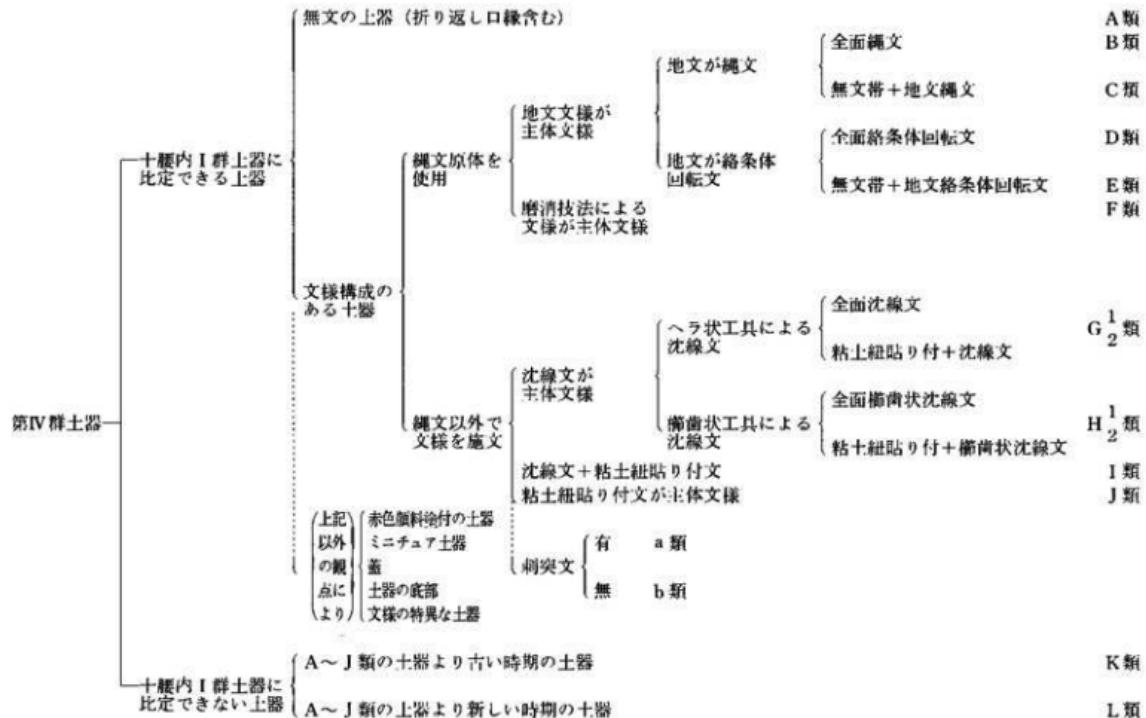
A-1類 1・2のように口唇部も含め器面に全く文様が施文されないもの。

A-2類 3のようにA-1と同様、器面に全く文様が施文されず、波状口縁のもの。

A-3類 4~6のように、折り返し口縁風の口頭部や特に肥厚した口頭部のもので、口唇部上に指頭押捺による羊肉形的装飾がみられ、その直下の口縁部と胴部の境目付近に1条の横走する沈線のあるもの。

本類に該当する土器は、概して円筒形に近い形状を呈し、口縁部が余り外反しない直線的な

〈分類基準〉



深鉢形が多い。また、その出土量については、IV群全体の土器の中では1割弱にも相当しないほど少量である。

B類 (第80図—7・8)

本類は、器面に縄文のみを施文している地文縄文の土器である。

縄文は、無節・単節でほとんどのものが斜行縄文である。

C類 (第80図—9～16 第77図—32)

本類は、口縁部に無文帯を有するもので、その下位はB類と同じ地文縄文のみの土器である。

本類は、主体文様が地文縄文であるものの、無文帯との境に施す文様により、更に三つに細分することができる。

C—1類 9—11のように若干外反する口縁部が無文帯で、その下位の地文縄文の施文された胴部との境に撚紐の圧痕文を一巡させるもの。12は、口縁部のみの破片であり、無支帶の上下位に各々一条の結節回転文を施文している土器で本類に属すると思われる。

C—2類 13～15のようにC—1類と比較して撚紐圧痕文が沈線文に変わっただけのものである。C—1・2類とも、撚紐圧痕文や沈線は、確かに文様帶の区分をする役目は果たしているが、どちらかといえば、副次的な文様にすぎず、C—1・2類ともあくまでも地文縄文が主体文様となっている。

C—3類 16のように全面地文縄文の上に粘土紐貼り付けによる口縁部を作出しているものであり、口唇部直下に2条、粘土紐上に1条各々撚紐の圧痕文が施文されている。

D類 (第80図—17 第77図—33)

本類は、B・C類が縄文を施文した地文が主体文様であったのに対し、主体文様が絡条体回転文の土器である。

17が本類の代表的なものであり、全面に縱位の網目状撚糸文が施文されている。

E類 (第80・81図—18～21)

本類は、基本的にはB類とC類を分類したごとく、同じ文様が主体文様となっているものの、無文帯の有無にのみよりD類と切り離しただけで、無文帯と胴部文様帶の境に沈線文が一巡するか否かで細分することができる。

E—1類 18のように無文帯の口縁部と胴部の境に2条の沈線が横走しているもの。この土器の胴部文様は、原体の巻きが不整の絡条体回転文である。

E—2類 19のように無文帯の口縁部から縦位の網目状撚糸文が施文されているもの。20は折り返し口縁の土器であるが本類に属して問題はないと思われる。

D・E類については、無文帶の有無を第一に取り上げて区分したが、絡条体回転文の文様により区分することも可能かつ意味あることとも考えている。すなわち、D類とE—2類を含む網目状撚糸文が地文としての意味を有する主体文様となるものと、E—1類のような、単純な絡条体回転文が主体文様となっているものの2種類である。それは、後のG・H類の中にもみられる沈線・櫛齒状工具による、やはり網目状文という文様が存在するため、特に文様による区分も考慮すべきではないかと考えたからである。

なお、21の土器については、主体文様という観点からは分類しにくい文様構成であり、本來的には、I類のごとく、沈線文と絡条体回転文の組合せによる文様構成をもつ土器と1分類設定すべきであったが、他に類例が少なく、あえてE—2類に含めた土器である。

F類 (第81・82図—22~46)

本類は、磨消繩文・充填繩文が主体文様となる土器である。

本類は、IV群の土器の中でもG・H類に次ぐ量の土器群である。

本類は、磨消技法による文様構成により大きく二つに細分することができる。

F—1類 22~34のように磨消繩文が平行線やカギ状のような直線的な文様構成をするもの。

F—2類 35~46のような磨消繩文が渦巻文・入組文・波頭状文のような曲線的な文様構成をするもの。

本類には、28・34のように、アクセント的に刺突を施すものや第76図—6のように連続して刺突文を施す土器もみられる。

G類 (第82~85図—47~91)

本類は、IV群の土器の中で最も数量的に多く出土した土器であり、沈線文が主体文様となる土器である。

本類で表現している沈線文という文様は、いわゆる「沈線文」と呼称し通用している文様をさし、ヘラ状工具により施文される文様のことであり、H類で使用している櫛齒状工具による「櫛齒状沈線文」と区別している。

本類は、全面に沈線文が施文されているものと、口縁部に粘土紐貼り付文等の副次的文様のみられるものとの二つに細分することができる。

G—1類 全面が沈線による文様のみのもので、文様構成から更に細分した。

(7) 47~51のように網目状文が施文されているもので、ほとんどが口縁部文様帶を有している。

(8) 第54図—72号のように口縁部から胴下半部まで縦位の沈線による直線文が施文されているもの。

(イ) 沈線の文様が52~70のように渦巻文・入組文・流水文風曲線文など比較的曲線的沈線文が主文様となっているもの。

(エ) 沈線の文様が71~73のようにカギ状文・平行文など(イ)と比較して直線的な沈線文が主文様となっているもの。

(オ) 沈線の文様が74~81のように(イ)・(エ)と比較して、三角形文・四角形文・稲妻状文・木目状文(79~81)など、余り文様に連続性のない比較的単発の文様のみられるもの。

G—2類 沈線文が主体文様であるが粘土紐貼り付文がみられるもので、G—1類と同様、粘土紐の貼り付部位等から、更に細分した。

(ア) 82~87のように口縁部文様帯を区画するように粘土紐を横位方向に一巡させて貼り付けているもの。本類には、86のように半肉彫的技法により隆帶として表現している文様も粘土紐貼り付文様と表現結果が類似しているこから含めることにした。

波状口縁の場合には、83・84のように波状突起部の頂部に指頭押捺による装飾的な粘土紐貼り付文がみられる。

(イ) 88・89のように粘土紐貼り付文が、横位に一巡せず、波状口縁の突起部直下等に部分的にみられるもの。粘土紐貼り付文は、大半がねじりを加えた「8」字状を呈するものが多い。

(ウ) 90・91のように(イ)の部分的な粘土紐貼り付文より更に小規模に、かつその貼り付け部位が、波状口縁の突起部の頂部にみられるもの。

本類は、小型の浅鉢形土器に多くみられ、他の器形には、ほとんどみられない。

H類 (第85図-92~106)

本類は、G類と文様的には大差ないが、沈線文を施文する工具が、G類の場合のヘラ状工具等であるのに対し、櫛歯状工具によるものでの櫛歯状沈線文（一度の施文で複数の平行沈線文が施文できる）を施文している土器である。

本類もまた、G類と同じ観点から二つに細分することができる。

H—1類 G—1類に対比できる土器であり、本類についても、更に文様構成から細分した。

(ア) 92のように大柄な網目状文が施文されているもので、文様表現としては、D・E・G類に含まれている網目状文と類似している。

(イ) 93・94のように縦・横位の櫛歯状沈線文が施文されているもの。94は胴上

半部に沈線による格子状文が施文されている土器である。

- (?) 櫛齒状沈線の文様が95~100のように弧状文・入組文・カニバサミ状文・波頭状文など曲線的沈線文が主文様となっているもの。
- (?) 櫛齒状沈線の文様が101~105のように平行文など、直線的沈線文が主文様となっているもの。
- (?)・(?)・(?)は各々、文様構成の面からG-1類の(?)・(?)・(?)に対比することができ、(?)は、G-1類の(?)と(?)にほぼ類似し対比することができる。

H-2類 G-2類とその文様構成が同じで、櫛齒状沈線文が主体文様であるが、口縁部に粘土紐貼り付文のみられるものである。

106が本類に属するもので、口縁部に3条の粘土紐を横位に貼り付けている。

また、粘土紐によるボタン状の貼り付文がみられ、このボタン状貼り付文について、G-2類にはみられなかったものである。

本類は、量的に少量である。

I類 (第76図-21)

本類は、沈線文と粘土紐貼り付文との組合せによる文様構成の土器であり、本類に属する土器は、この1例のみである。G-2類の範疇に入る可能性もあり、I類とせず、G-3類とする分類方法も検討の余地がある土器である。

本土器は、小型の鉢形土器で、口縁部文様帶に平行沈線による直線的な山形文が横位に巡らされ、その文様帶の上下位に1条ずつ粘土紐が横位に貼り付けられ、2個の山形突起部直下には、ねじりを加えた懸垂状の粘土紐を貼り付け、その上下端共に各々文様帶上下の横位の粘土紐につながっている。

J類 (第86図-107~114)

本類は、器面に粘土紐を貼り付け、その貼り付文が主体文様となっている土器である。

本類の土器は、大半が器厚が厚く大型壺の器形と考えられる。

粘土紐の両側は、沈線が粘土紐に沿って施文されている。頭部には、112・113のような橋状把手がつけられるものと考えられる。

刺突文について (第86図-115~128)

ここで、これまでA・B…の分類基準の順で記述してきたが、分類一覧にも示したとおり、A・Bの分類と観点の異質な特徴を有するものについて記述する。それは、刺突文という文様であり、文様別分類の中では、繩文以外で文様を施文するものの群の細分類した沈線文・粘土紐貼り付文の同一線上に位置する一群とも考えることができようが、土器の文様から類別作業を行っている段階で、意外に各種の文様の中に刺突文のあるものがみられ、刺突文が一つの文様別

分類の中の独立して分類できる文様要素とは考えられないと判断したからであり、もし分類の項目を立てるとすれば、A～J類の中で各類の細分類項目に位すると考えている。

刺突文については、その有無で分類することができ、以下、刺突文のみられる土器について記述する。

刺突文が施文されている土器をA～J類の中でみると、A類には見当らず大分類の項のうち、地文文様が主体文様となるB・C・D・E類にもほとんど見当らない。残りのF・G・H・I・J各類に刺突文はみられる。また、刺突文は、第45図一9や第86図115・126のような無文帶を有する土器のその部位に施文されるものもある。このようにみてみると、刺突文は、大きく分けて一つは無文帶に施文される場合と、もう一つは器面に施された文様効果が地文繩文等のような余り凹凸が目立たないものではなく、沈線文や粘土紐貼り付文のような器面に凹凸が現れる文様に施文される場合との二つの文様の場合に施文されているとみることができる。刺突文が多用される類は、F類及びI・J類である。

刺突文の施文部位は、大きく二つの部位に分けることができる。一つは、無文帶が作られる口縁部文様帶と、台付鉢等にみられる台部に施文されるものであり、この場合は、115や第45図一9のように刺突が連続して文様帶を構成している。もう一つは、117・121のように沈線文や磨消繩文の文様の交差する点等にポイント的に単独で施文されているもので、119～123のように粘土紐上に連続して施されているものもある。例外的なものとしては、126のように器内面の口唇部直下に文様帶として刺突文が施文されているものもある。これは、どちらかといえば前者の部類に属するタイプであろう。

つまり、刺突文の施文については、刺突を連続させ一つの文様を構成する場合と、他の文様との組み合わせ的な使用法、いわば付加的に刺突を施す場合とに区別することができるといえる。従って、逆に言えば粘土紐を貼り付ける土器には比較的刺突文が多くみられるともいうことができよう。

現在、刺突文は、時期的区分におけるメルクマールとしての要素が弱いといえるが、現に、刺突文が施文される土器に限定が認められ、今後の資料増加によっては、その可能性がでてくるとも考えられる。

赤色顔料塗付の土器について

この種の土器については、実測図・拓影図に（朱）と記載してある。

赤色顔料は、ほとんどが俗に「ベンガラ」と呼称している酸化第二鉄である。この種の土器は、大・小型壺、台付浅鉢、浅鉢の器形に比較的多くみられ、深鉢形の土器にはほとんどみられない。また、塗付部位は、全面のものと部分的なものの2種類がある。その比率は不明である。

赤色顔料を塗付した土器の量は、IV群土器全体の中では微量といえる程数が少ない。

ミニチュア土器 (第76図—25~27)

ここで取り上げる土器は、その大きさに特徴があり、形状が壺形に近い器形を呈し、日用雑器としての機能を果しにくいもので、一般にミニチュア、手捏ね、袖珍という呼称を付している小さな土器のことである。この種の土器には、概略的に器高10cm前後以下のものを含めた。その数は、破片等も含めて約20点弱である。

蓋 (第76図—28~31)

推定で土器の蓋と考えられるものは、4点出土した。すべて完形でないため、断定はできないが、形状から蓋と推定した。切断蓋付土器と呼ばれている蓋部のものとは違い、底部の作りは、製作当初から蓋という器形を作る意図のあったことを感じとれる。

土器の底部について (第87図—129~142)

(ア) 土器の底部文様について

底部には、無文のものと文様のあるものがみられる。文様は、明らかに文様として施文しているものと、土器製作時に付いたものとも解釈できる文様とがある。前者は、129~136のように沈線文の施文されたもので、中には、136や第15図—1のように底部内面にも沈線文様が施文されたものもある。後者は、137~141のように木の葉や板目及び網代状の編み物等の圧痕がついているものである。後者の場合においては、土器製作者が文様を意図して土器製作時にそれらを敷きその上で製作したのか、あるいは偶然圧痕としてついたのかは不明である。

(イ) 土器の底部の作りについて

一般的に土器の底部は円形となっているが、130~135のように数量的には少ないものの、土器底部外周に刻目を付けたり、貫通孔を穿孔しているものがみられる。刻目や、貫通孔については、その用途が一番問題となるが、土器に何らかの意味で紐を回すための固定箇所であろうと推測しているが断定できない。紐をかけるという解釈をすれば、蓋という物の存在をこの点から推測することも可能であろう。

土器の底部文様のうち、圧痕文のついている土器は、比較的大型の土器であり、底部文様のうち沈線文を施文しているものと、刻目や貫通孔のみられるものは、133を除いて、すべて台付及び高台風の底部の器形だけである。

文様・施文部位の特異な土器について (第15図—1、第88図—143~148 第79図一下段)

この土器については、第V章に記述した。

K類 (第88図—149 172図—3)

K・L類は、縄文時代後期の土器とは考えられるが、A~J類に属する土器と若干の時間的差異が認められる土器である。A~J類の土器は、一般的に「十腰内I带土器」としてとらえ

ることのできる土器で、K・L類はその前後期に位置する土器と考えられる。

本類は、「十腰内Ⅰ群土器」の直前に型式的編年上位置すると考えられる土器を一括した。

時期的表現としては、縄文時代後期初頭に位置する土器と言ふことができよう。本類に属する土器は、量的には少量であるが「十腰内式土器」の編年及び細分類化作業の上ではL類と共に貴重な資料となり得るものと思う。

L類 (第88図-150~160 第45図-4~7・9・16 第46図-23 第76図-23・24)

本類は、「十腰内Ⅰ群土器」の直後に型式的編年上位置すると考えられる土器を一括した。

しかし、「十腰内Ⅰ群土器」の中に最終末の時期ともとらえれることができ要素も多分に含んでおり、直後の示す時期は、表現的に矛盾しているかも知れないが「十腰内Ⅰ群土器」末葉から「十腰内Ⅱ群土器」の直前に至るまでの時期と考えている。本類もK類と同様、量的に非常に少ない土器である。
(遠藤)

(f) 第V群土器 (第89図1~7)

縄文時代晩期の土器を一括したが、数量は少ない。

(142) は、鉢形土器の胴部片で、2条の横位沈線及び簡略化した羊齒状文が施される。色調は、黒褐色を呈し、器厚は7mmほどである。

大洞BC式に相当すると思われる。

(1・5) は、粗製の平縁の深鉢形土器である。(1) は、最大胴径14.3cm、底径5.8cm、器高12.5cm、器厚5cmである。文様は、口縁部では、口唇直下に斜繩文(RL)、それ以下には、磨きによって無支帯を作ったうえで、棒状工具による押引列点文が施される。胴部との境には、約3.5cm間隔で突起をもつ沈線一条ともたない沈線が一条巡る。胴部には、RL斜繩文が施される。色調は、黄褐色、黒褐色を呈する。

(3・4) は、皿形土器の破片である。口唇部には、斜位の沈線が施され小波状を呈する。文様は、磨消雲形文が施され、縄文は細かいLR縄文である。また器面には、赤色顔料の塗布の痕跡が認められる。色調は、暗褐色を呈し、器厚は5cmほどで薄い。

(7) は、台付浅鉢形土器の台部である(台部下半は欠失している)。文様は二条の平行沈線が施される。また台部内面には、沈線によるX字状文が施される。また、器面に赤色顔料の塗布の痕跡が認められる。

以上は、大洞C2式に相当すると思われる。(6) は所属型式不明。

(一条)

(g) 第VI群土器 (第89図-第94図他)

弥生時代に属する土器である。ここでは、概略を記述することにし、あえて分類は行わない。なぜなら第3次調査において、連弧文を多用する一群の土器がまとめて出土したことや、三ヵ年にわたる調査によって、時期の異なる土器が出土したことから、大石平遺跡出土の弥生時

代の土器を整理し、編年的に再構成する必要があると考えたからである。ここでは、便宜的に第1次調査における分類と、須藤隆氏の編年に従って記述することにする。

第2次調査では、弥生時代第2群土器（須藤編年の2期）が主体を占めている。IV-1区北側一軒の竪穴住居跡（第1号・第10号）の周辺に分布しているほか、南東隅に若干分布している。このほかには、弥生時代第1群土器（須藤編年の5期）及び、連弧文を施文している土器や撚糸文を施文している土器が、それらに混在して出土している。

①弥生時代第2群土器（須藤編年の2期）（第89図～第94図他）

器形には、深鉢（甕）・鉢・浅鉢（台付も含む）・壺などがある。また、赤色顔料を塗布した土器もある。

深鉢形土器の口縁には、平口縁・波状口縁・小波状口縁がある。鉢・浅鉢形土器には、平口縁と波状口縁がある。波状口縁のものには、波状部に刻みを加えたり、粘土粒を貼り付けて、その上を更に押圧か刻みを加えている。平口縁のものは、深鉢形土器では口唇部に刻みが見られるもの、口縁に縦位に短沈線が見られるものがあり、鉢形土器では粘土粒の貼り付けが随處に見られるものがある。

主体文様は、繩文地に1～数条の平行沈線、連結沈線、波状工字文などで構成されているものが多い。繩文は、R L 繩文が縱走して見られるものが圧倒的に多いが、LR繩文も若干見られる。また、横走している繩文もある。

②弥生第1群土器（須藤編年の5期）（第67図1、第90図8・9、第94図9・11・12）

第90図8は、数条の平行沈線と鋸歯文が見られる深鉢形土器、第90図9は、頸部に部分的ではあるが、横走する繩文が見られる深鉢形土器である。第67図1は炉に転用された土器で、残存部から、底径の小さい深鉢形土器と思われる。第94図16は小型の土器である。

以上の土器は、第1次調査での第1群土器と、若干の相異のみられるものもあるが、第1群土器の中でのバリエーションと考えた。

③連弧文の施文されている土器（第46図35、第90図5、第94図8・13・14）

第78号土壤出土の台付鉢は、連弧文が5段施文されており、器外面と内面の口縁（繩文施文部）には、赤色顔料が塗布されている。第94図13は、波状文とも思えるもので、胴下位には同心円状の沈線文が見られる。第94図14は、3条の沈線による、稚拙な連弧文が見られる。

前述したように、第3次調査では、連弧文を多用する一群の土器がまとまって出土している。また、第78号土壤出土の台付鉢の一部（2片）は、第3次調査で出土（第1号住居跡覆土）したもののが接合したものである。したがって、総合的な考察は来年度に期待したい。

④撚糸文の施文されている土器（第16図7、第94図17～21）

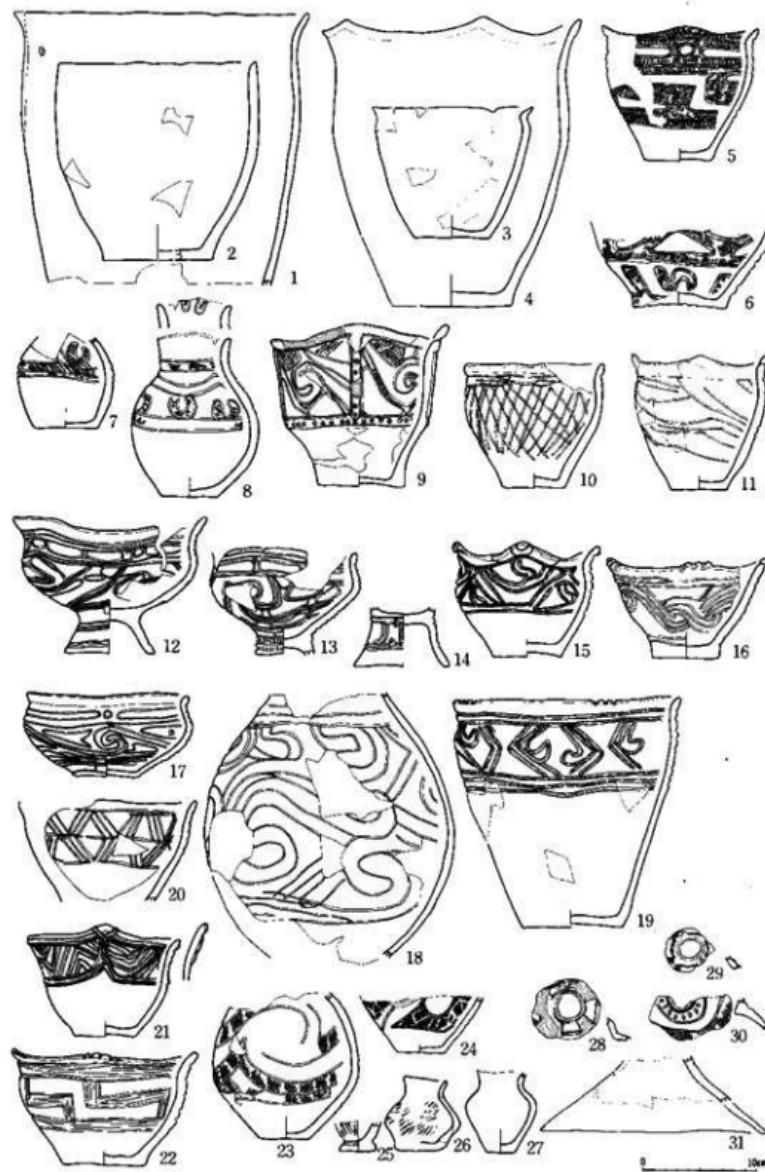
第11号竪穴住居跡覆土及びその近辺から若干出土した。撚糸文（R）が施文されているもの

で、口唇部にはR L 繩文が回転施文されている。天王山式土器との関連が考えられるが、詳細は不明である。

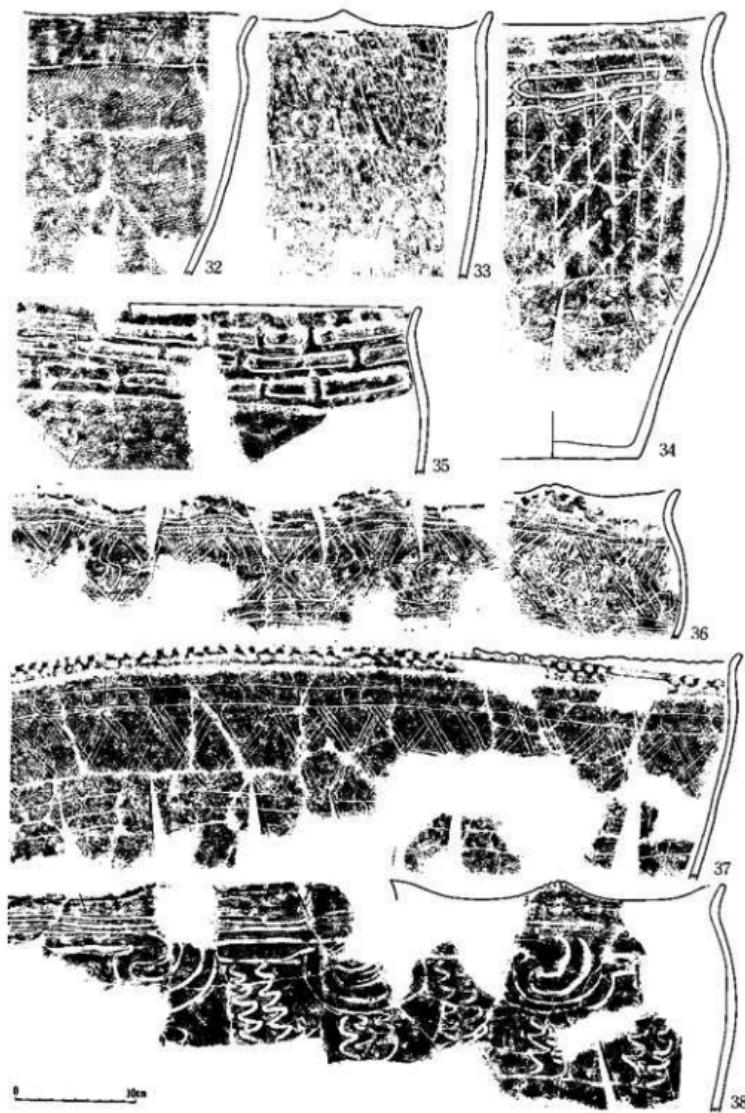
(島山)

第6表 IV-1区 遺構外出土IV群土器(復原実測土器) 繩文一覧表

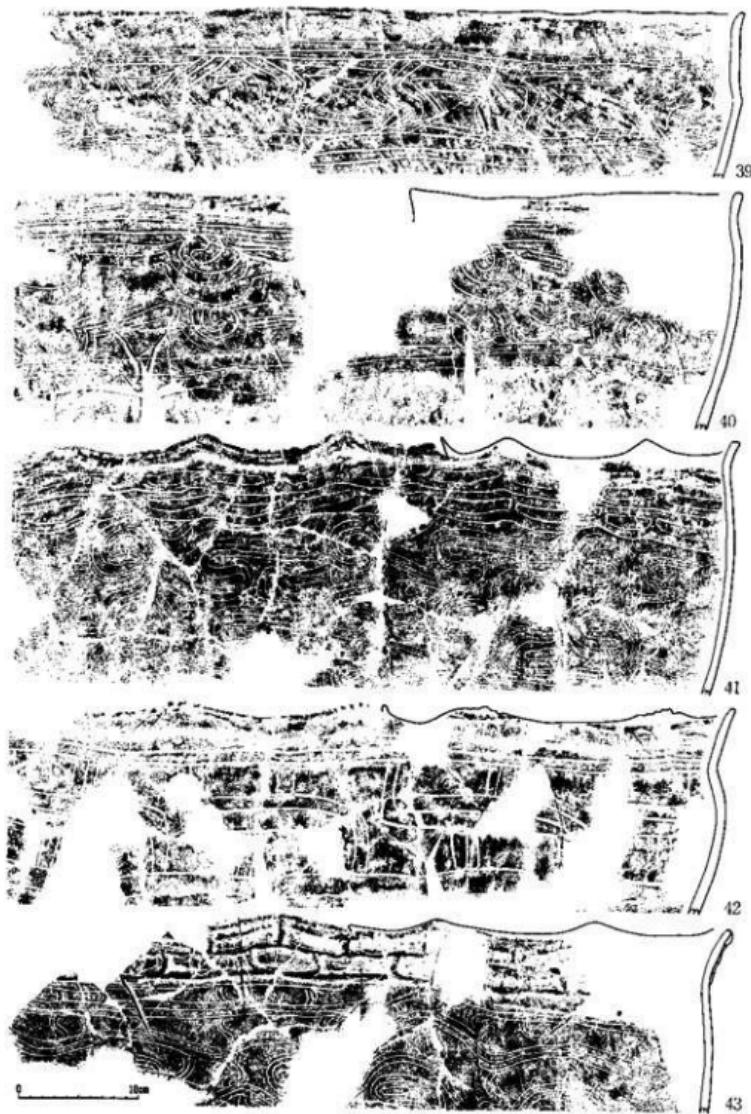
七号 番号	出土ゲリード	番	計 測 値(cm)			器 形	主 文 横	分類	備考
			内 径	底 径	高				
1	DC-379	II	(26.0)	(—)	(24.0)	深鉢	無文	A-1	
2	DD-383	II	(17.4)	9.7	17.5	深鉢	無文	A-1	
3	DC-379	II	14.0	6.6	11.4	鉢	無文	A-1	
4	DC-378	IV	22.7	10.3	25.6	深鉢	折り返し口縄文	A-2	
5	DB-377	II	13.8	5.7	11.9	鉢	充填縄文(L.R.)	F-1	
6	DC-378	IV	(—)	8.2	(7.0)	(深鉢)	充填縄文・刺突文	F-1	
7	DB-378	II	(—)	5.6	(8.4)	(蓋)	磨消縄文(無筋)	F-2	
8	DB-375	IV	(6.5)	5.0	14.7	壺	磨消縄文(L.R.)	F-2	
9	DB-379	II	15.6	7.6	14.4	鉢	磨消縄文・刺突文	F-2	
10	DC-378	II	(12.3)	5.2	11.0	鉢	網目状沈縄文	G-1	
11	DC-378	II	12.1	4.7	11.9	鉢	沈縄文	G-1	
12	DC-375	Va	17.0	7.8	12.2	台付鉢	沈縄文	G-1	
13	DD-377	II	(12.6)	(5.1)	(9.5)	台付浅鉢	沈縄文・刺突文	G-1	
14	DE-379	IV	(—)	8.4	(5.3)	(台付鉢)	沈縄文	G	
15	DB-377	IV	12.8	6.0	10.2	鉢	沈縄文	G-1	褐色
16	DD-378	II	13.9	5.7	8.9	鉢	沈縄文	G-1	
17	DC-378	IV	14.3	5.2	7.6	浅鉢	沈縄文	G-1	
18	DC-374	II	(10.5)	(10.5)	(23.5)	蓋	沈縄文	G-1	
19	CP-378	III	20.0	8.7	20.2	深鉢	沈縄文	G-1	
20	DE-379	II	15.6	(—)	(9.0)	浅鉢	沈縄文	G-1	
21	DC-378	IV	13.5	5.3	9.9	鉢	粘土貼り付・沈縄文	I	
22	DB-375	II	16.3	7.2	10.0	浅鉢	網目状沈縄文	G-1	
23	DB-375	II	(8.8)	4.3	(13.0)	蓋	磨消縄文	L	
24	CW-382	II	(—)	4.1	(5.0)	(鉢)	磨消縄文	L	
25	DD-378	II	(—)	3.2	(2.7)	(ミニチャ)	沈縄文		
26	DB-377	Va	3.7	3.7	6.6	ミニチャ	地文縄文		
27	DC-377	II	4.3	2.4	7.1	ミニチャ	無文		
28	DB-377	II	(—)	(—)	(2.5)	蓋	沈縄文		
29	DE-374	II	(—)	(—)	(1.1)	蓋	沈縄文		
30	DB-378	II	(—)	(—)	(2.8)	蓋	磨消縄文・沈縄文		
31	CW-386	II	(6.0)	(19.9)	(6.7)	蓋	無文		
32	DA-378	II	(29.9)	(—)	(22.5)	深鉢	地文縄文	C-1	新石器時代
33	CN-376	III	25.0	(—)	(32.0)	深鉢	格子条印縄文	D	
34	DE-379	II+IV	28.3	14.3	37.2	深鉢	網目状沈縄文	G-1	
35	DD-378	II	(23.0)	(—)	(40.5)	深鉢	網目状沈縄文	H-1	
36	DC-377	II	30.5	(—)	(13.2)	深鉢	磨消縄文	F-1	
37	DB-379	II	22.4	10.3	25.2	深鉢	網目状沈縄文	G-1	
38	DB-378	IV	27.8	(—)	(19.0)	深鉢	沈縄文	G-1	K(?)
39	DD-378	II	23.8	(—)	(20.0)	深鉢	沈縄文	G-1	
40	DA-377	II	27.7	(—)	(33.3)	深鉢	沈縄文	G-1	
41	DA-379	II	25.0	(—)	(28.0)	深鉢	沈縄文(折り返し口縄)	G-1	
42	CO-376	III	29.5	(—)	(28.0)	深鉢	沈縄文	G-1	
43	DC-379	II	(32.0)	(—)	(28.0)	深鉢	粘土貼り付文	G-2	
44	DD-378	II	36.3	14.5	43.0	深鉢	網目状沈縄文	G-1	
45	DD-378	II	23.0	(—)	(40.5)	深鉢	網目状沈縄文	H-1	



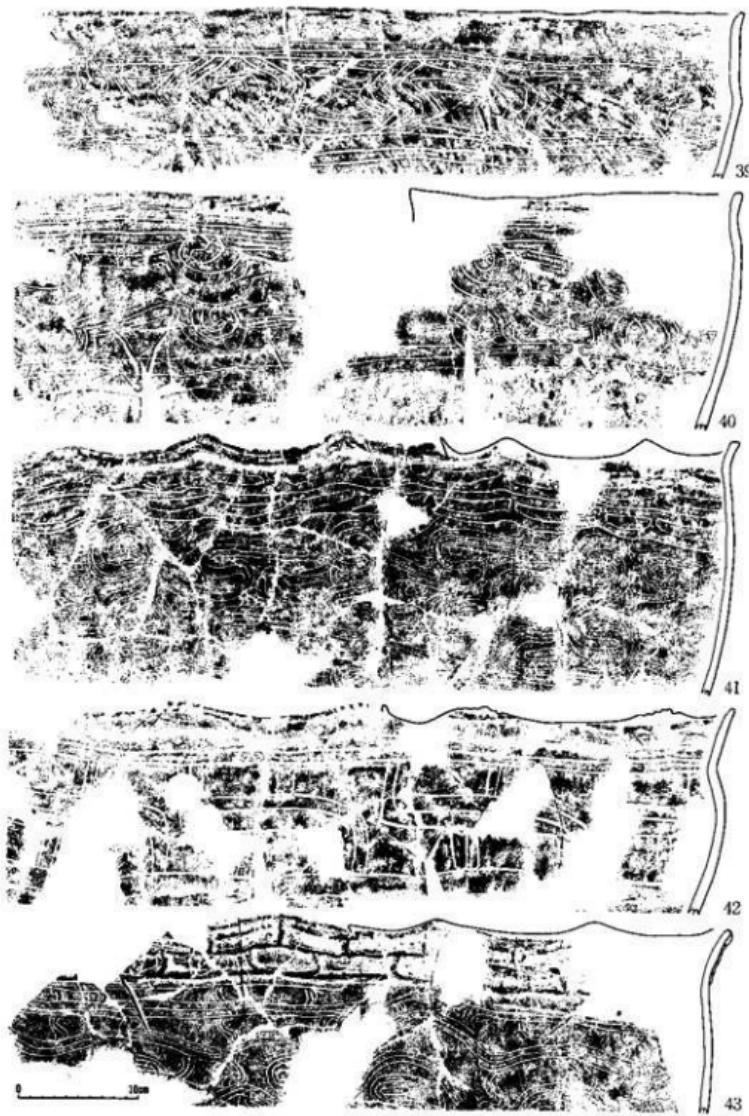
第76図 N-1区遺構外出土N群土器(1)——実測図



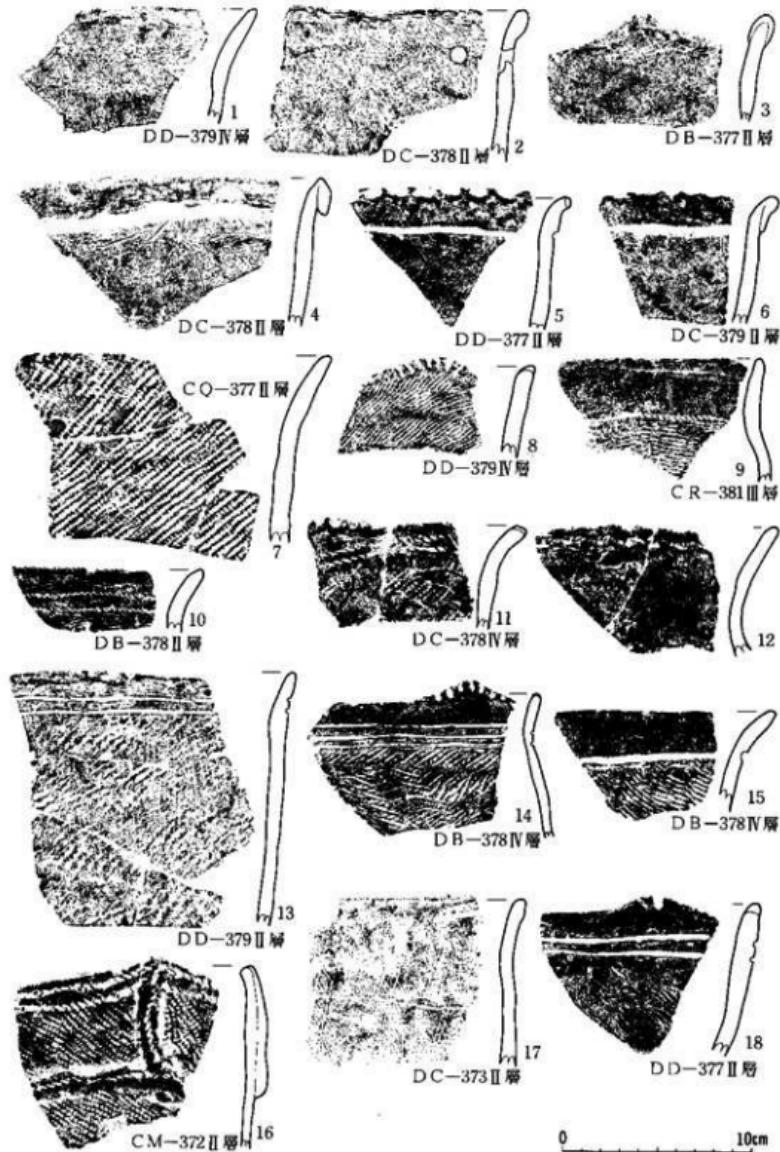
第77図 IV-1区遺構外出土IV群土器(2)——拓影展開図



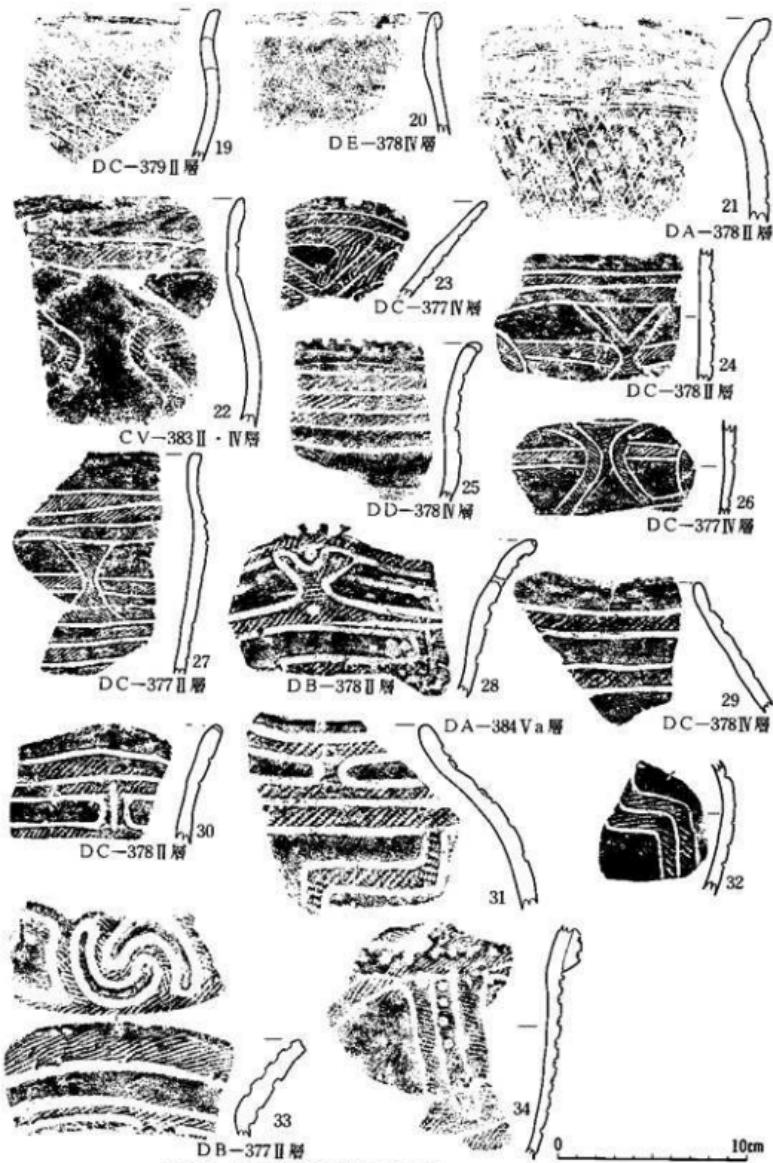
第78図 IV-1区遺構外出土IV群土器 (3) 一拓影展開図



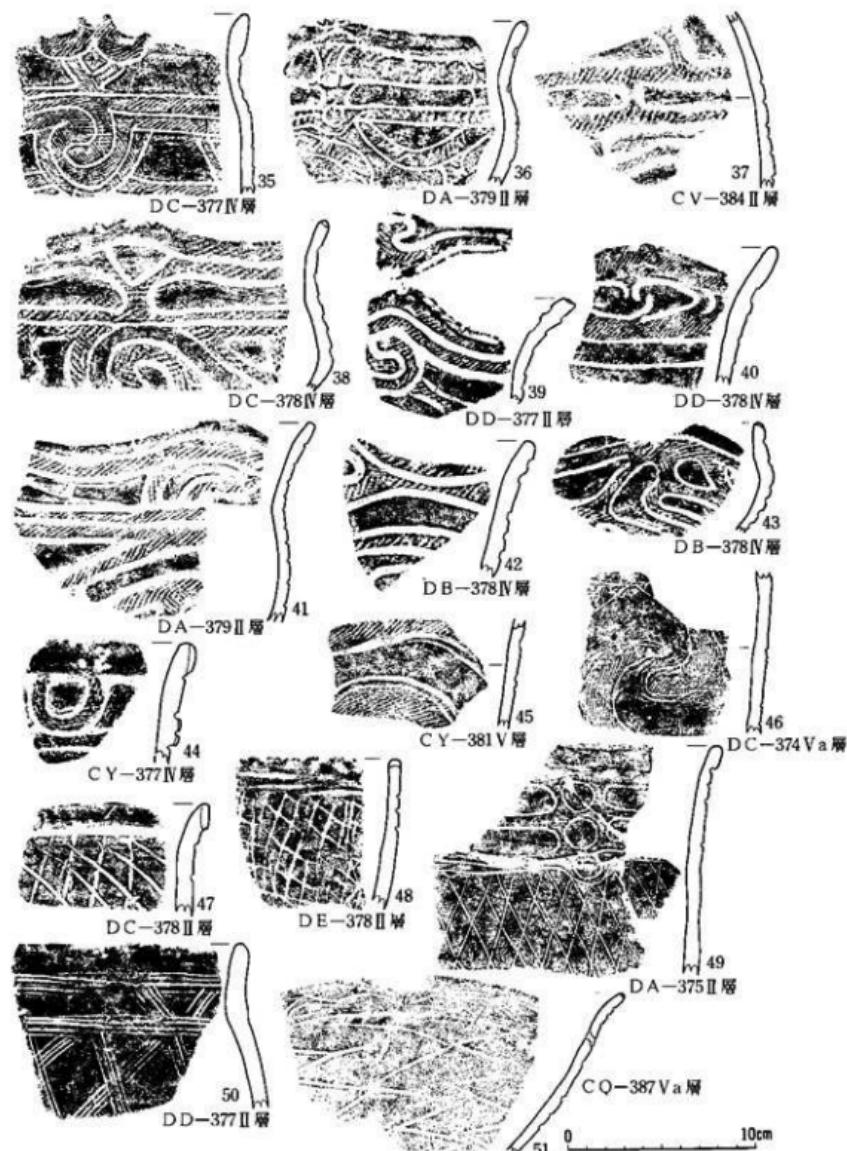
第78図 IV-1区遺構外出土IV群土器 (3) —拓影展開図



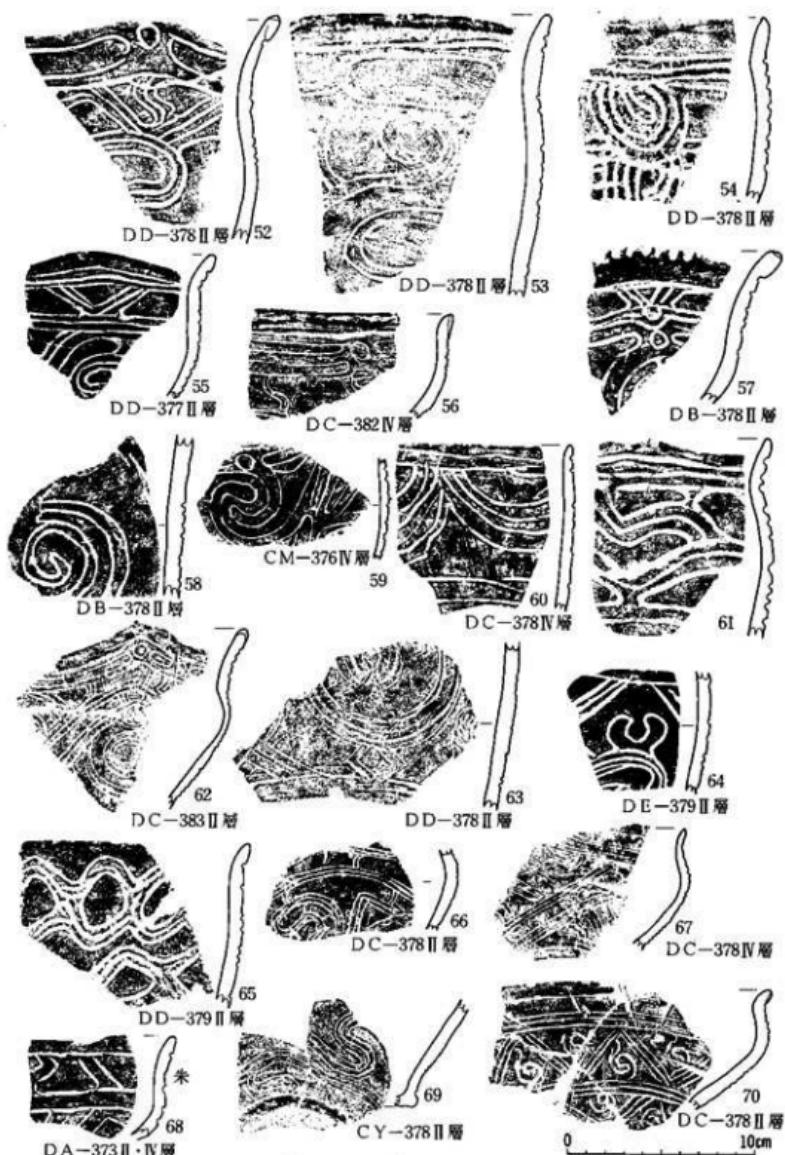
第80図 第M群土器拓影図 (A類1~6、B類7·8、C類9~16、D類17、E類18)



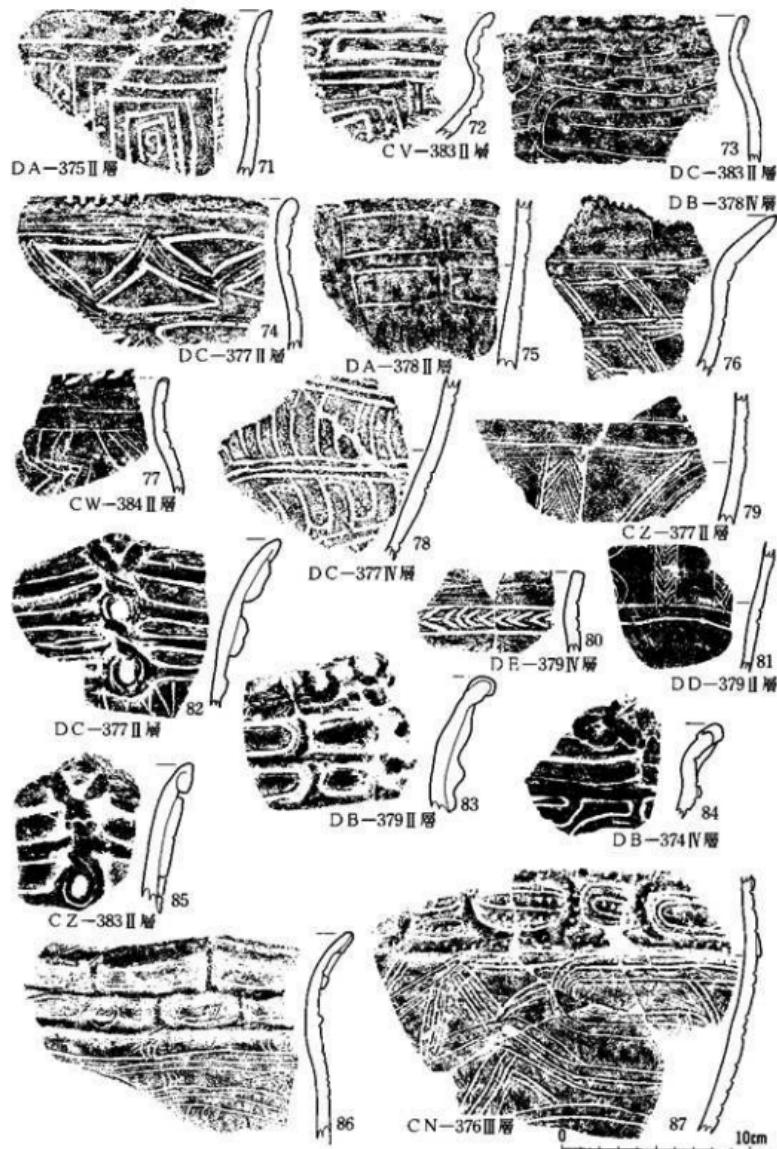
第81図 第1M群土器拓影図 (E類19~21、F類22~34)



第82図 第IV群土器拓影図 (F類35~46、G-1類47~51)



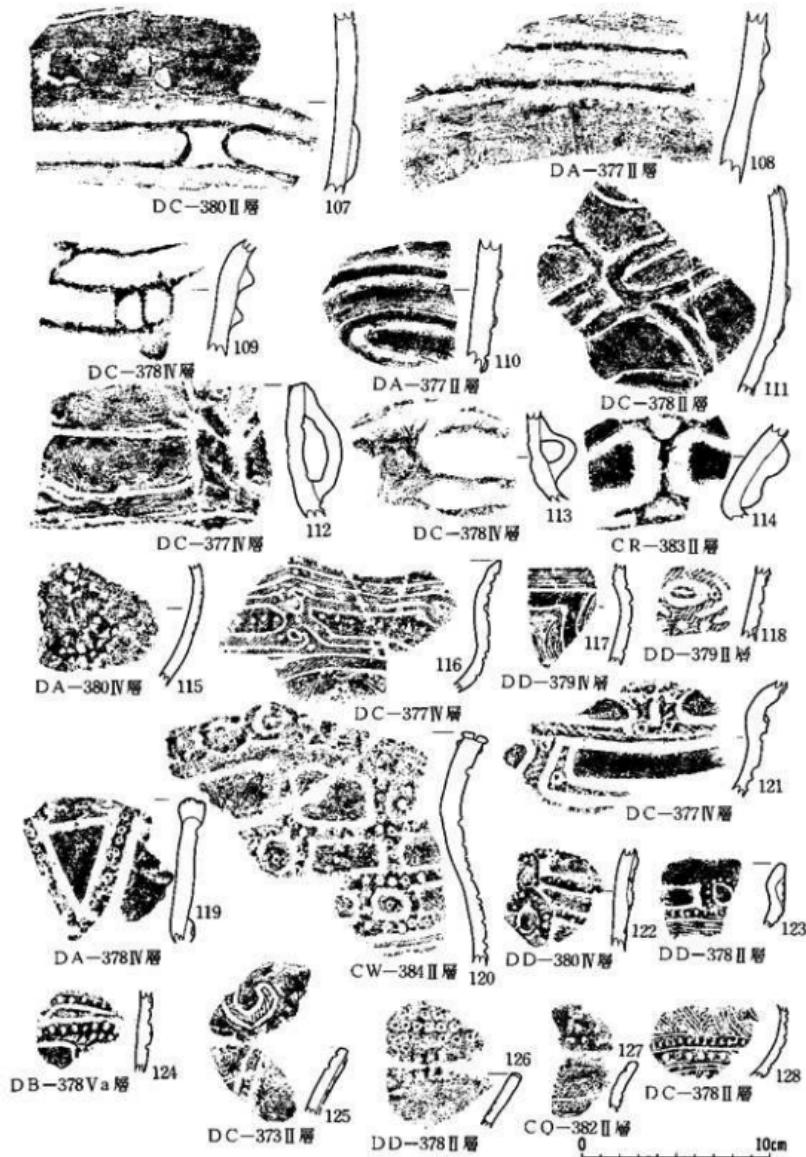
第83図 第IV群土器拓影図 (G-1類 52~70)



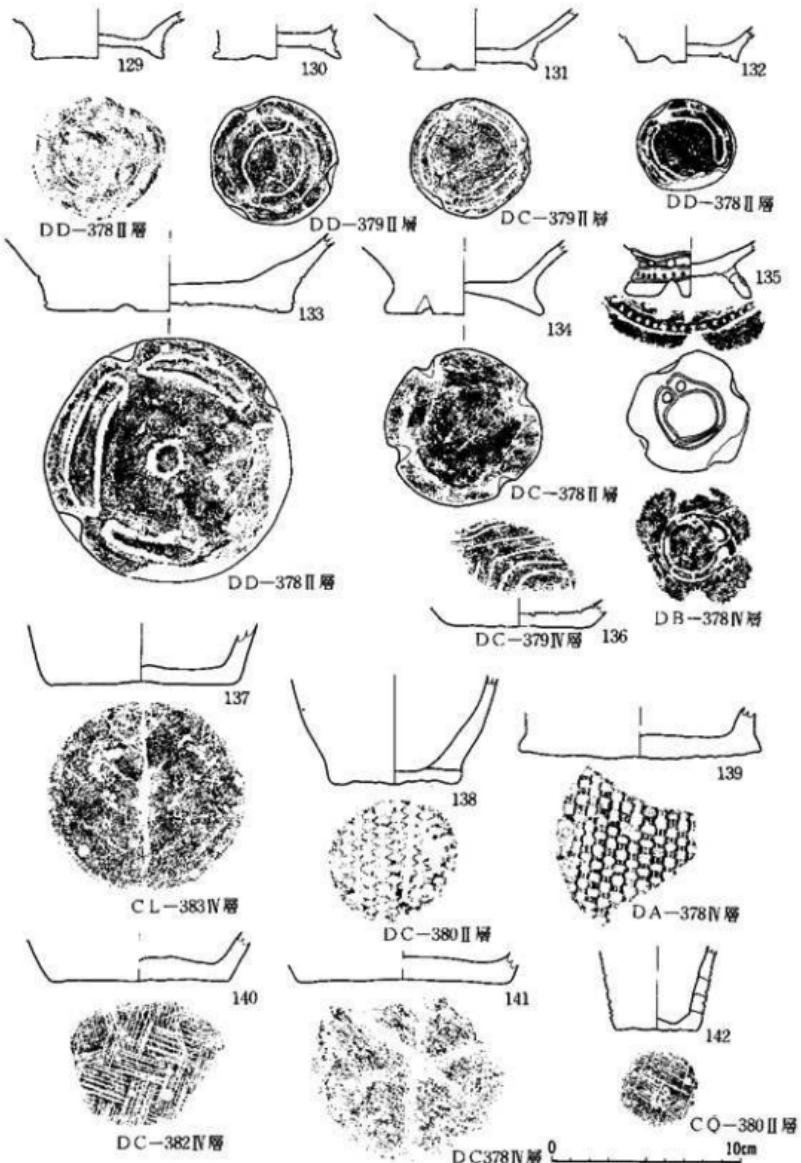
第84図 第IV群土器拓影図 (G-1類7181、G-2類82~87)



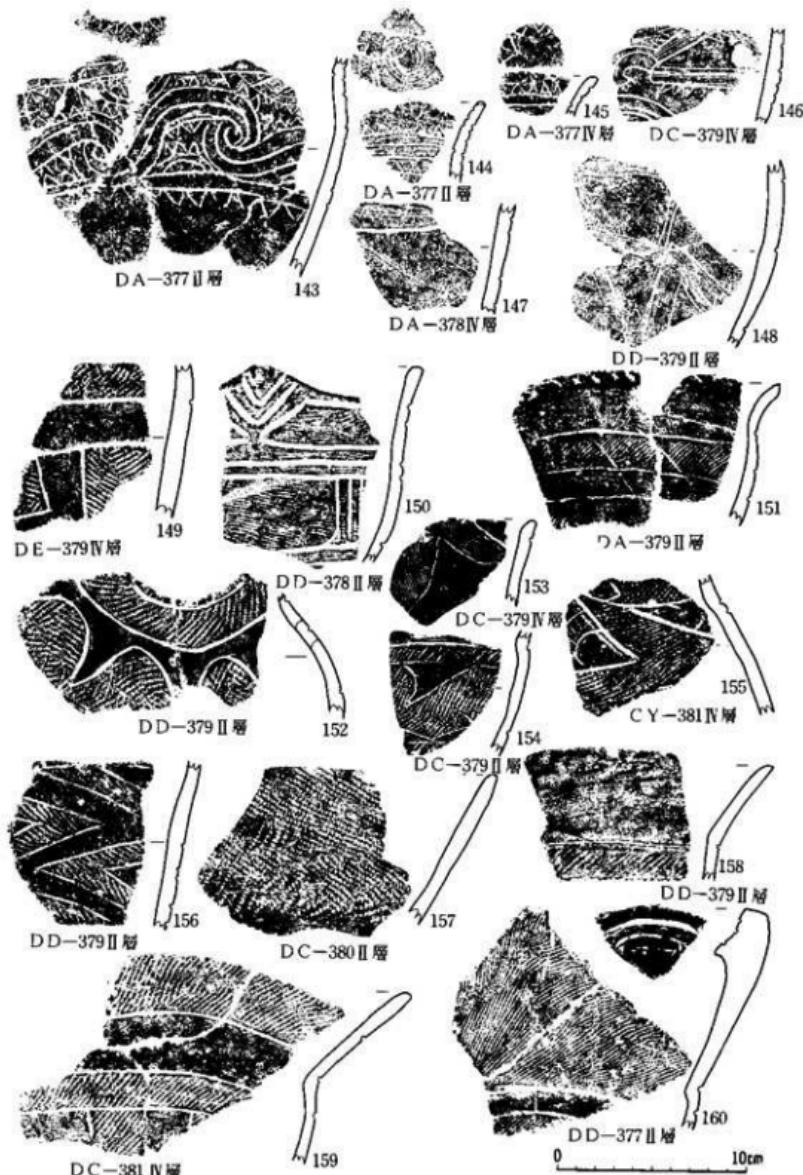
第85図 第IV群土器拓影図 (G-2類88~91、H類92~106)



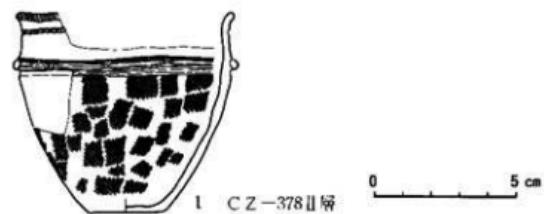
第86図 第IV群土器拓影図 (J類107~114、刺突文115~128)



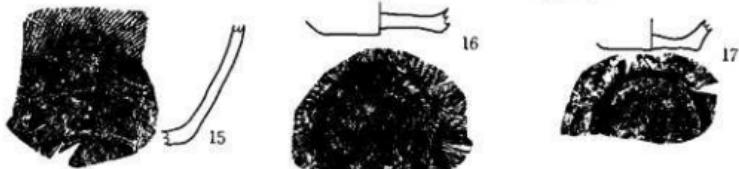
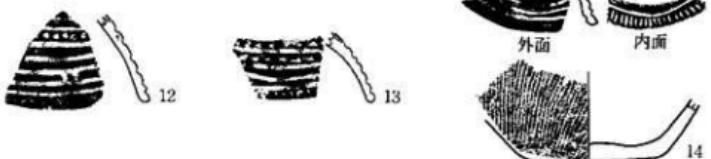
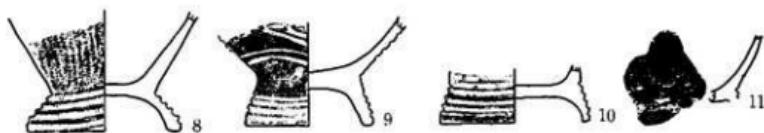
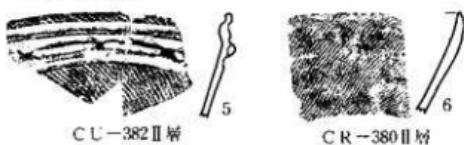
第87図 第IV群土器拓影図（土器底部129~142）



第88図 第IV群土器拓影図(特異な文様、143~148、K類149・150、L類151~160)

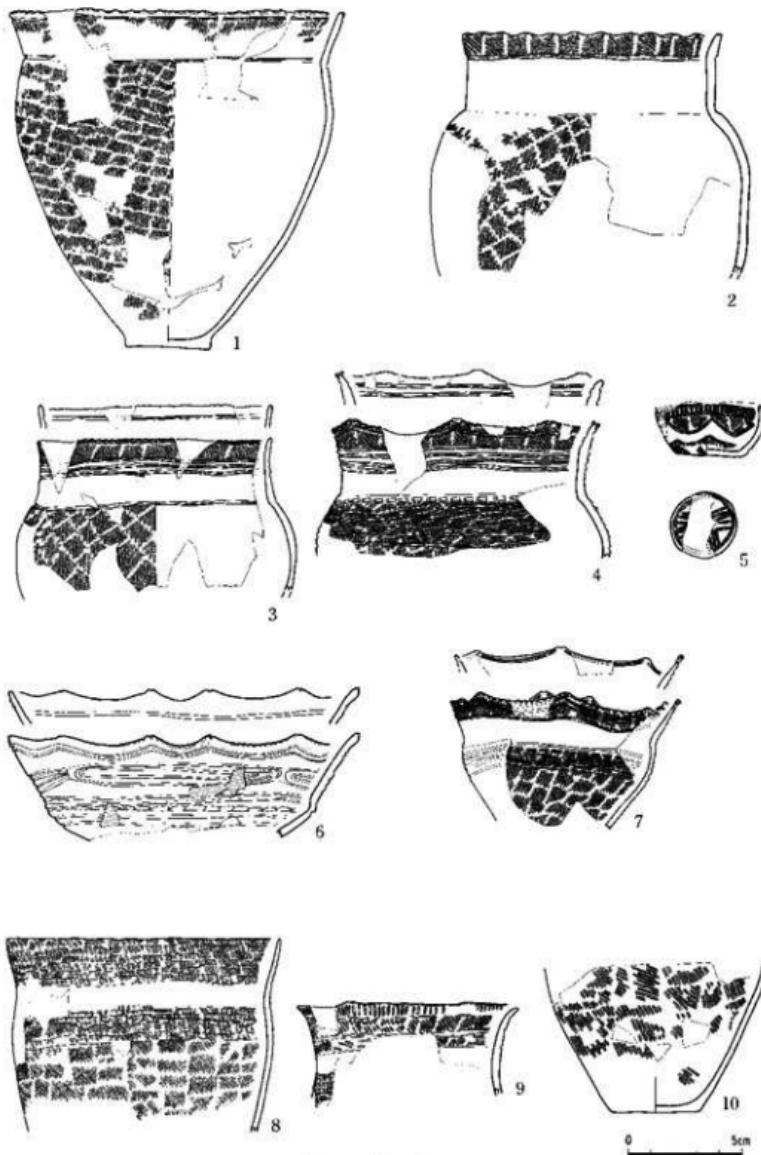


CN-376 II層

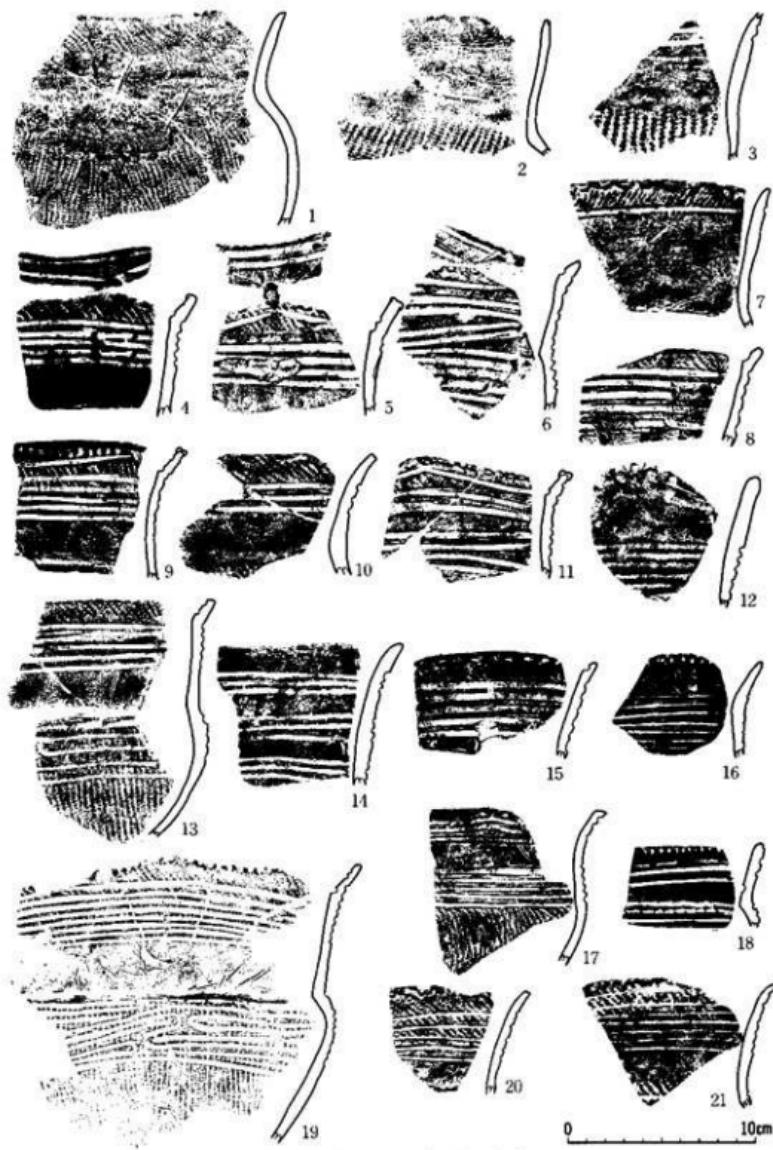


0 10cm

第89図 第V群土器(1~7)及び第VI群土器(8~17)



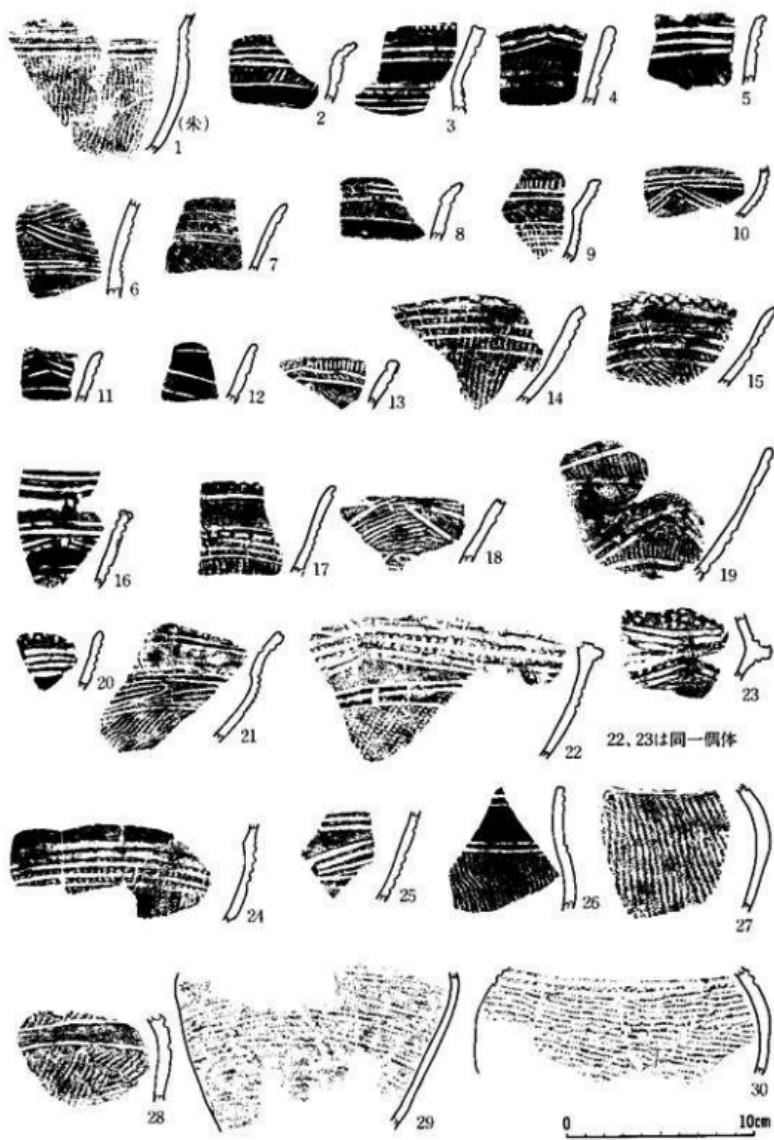
第90図 第VI群土器



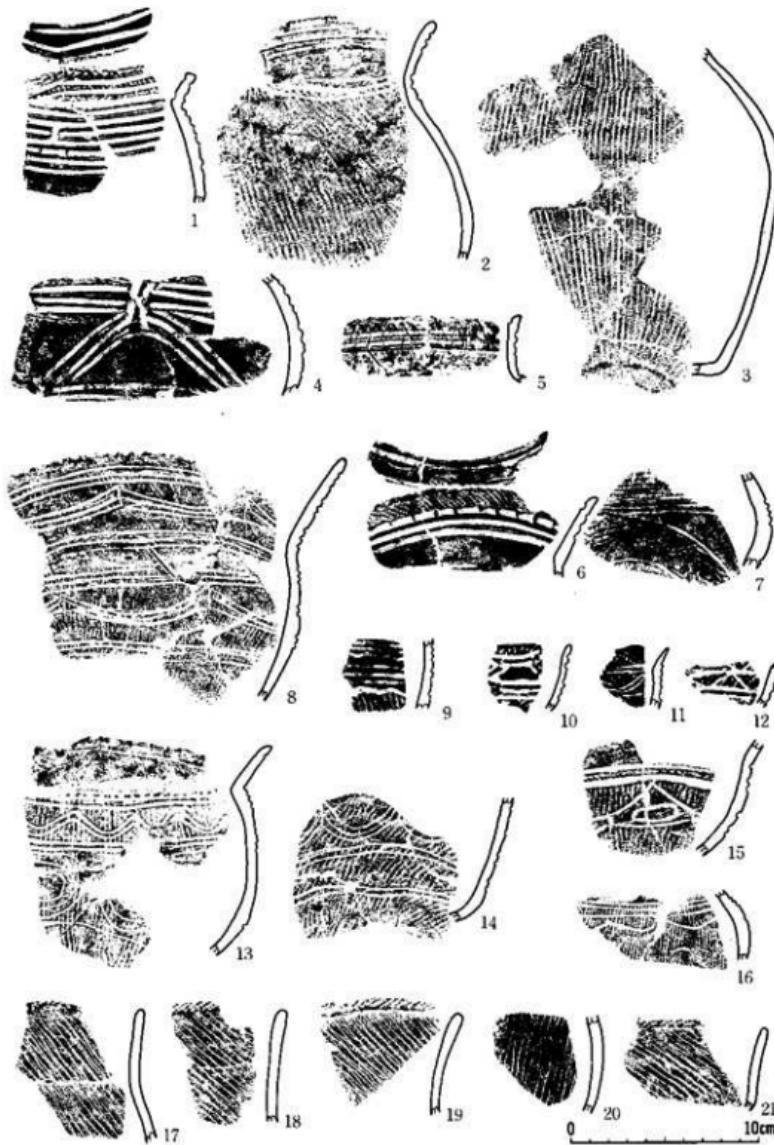
第91図 第VI群土器拓影図（3）



第92図 第VI群土器拓影図 (4)



第93図 第VI群土器拓影図 (5)



第94図 第VI群土器拓影図 (6)

(2) 石器

第Ⅰ群石器（剥片石器）

IV-1区から661点、IV-2区から19点出土している。ここでは、最も多量に出土したIV-1区のものを対象とし、記述していくこととする。なお、IV-2区からは、石鏃3点（I a類1、III b類1、不明1）、石槍1点、石匙2点（II b類1、不明1）、不定形石器12点（II a類2、II b類1、II d類1、II i類1、III類4、IV類3）、ピエス・エスキューユ1点が出土している。

A類 石鏃（第95図、第96図他）

第1次調査では、尖基鏃と円基鏃の区別が不明瞭であるので、これをそれぞれII a類、II b類と細分した。他は第1次調査と同じである。A-IV類を除くすべての類が出土している。

110点出土した。完形品62点、破損品48点である。また、遺構内からは住居跡5点、土壙20点で、特に第78号土壙からは7点の石鏃が出土している。

A-I類 有茎鏃66点

a. 平基有茎鏃 37点。完形品24点、破損品13点。（1～28、60、第22図6、第58図5、第59図5）

尖頭部が直線状のもの26点、外湾する（外側へふくらむ）もの11点で、前者が多い。尖頭部と関部との交差する部分は角張るものが多い。調整はていねいで、両面調整（全面）が施されているものが多い。ビッヂ痕の見られるもの3点、加熱による焼けはじけの痕跡が見られるものが1点ある。

b. 凹基有茎鏃 6点。完形品4点、破損品2点。（29～31、37、第59図12）

関部が凹んでいること以外、諸特徴はI a類と同じであるが、尖頭部が内湾するものが1点（第59図12）ある。

c. 凸基有茎鏃 23点。完形品14点、破損品9点。（32～36、38～40、第59図13～19）

尖頭部が直線状のもの6点、外湾するもの17点で、後者が多く、I a類と逆の様相を呈する。これは尖頭部と関部との交差する部分が、鈍角か、丸みをもっているものが多いことに関係にあることを示すものと理解される。また、35・39・41の3点は、両極剥片を素材としているもので、47はその可能性の考えられるものである。

A-II類 尖・円基鏃 16点

a. 尖基鏃 11点（44～47、第22図2、第59図1）

b. 円基鏃 5点（48、第58図16、第60図7）

調整はI類に比べて粗雑である。また片面加工、縁辺加工のものも少數ある。

A-III類 無茎鏃 14点

a. 凹基のもの。5点。（50～52、第22図1、第59図9）

基部の抉りが浅く、平基に近いもの2点と、抉りの深いもの3点である。後者は比較的小形である。

b. 平基のもの。9点。(53・54・59、第58図6・17、第59図2)

二等辺三角形に近い形状のもの7点、五角形に近いもの2点である。第59図2は縁辺加工で、やや粗雑な調整であるが、他の4点はていねいに作出されている。

●全般に、長さが3cmで、幅2cm以下の小形のものが多い。特に、I a類では長さが2cm前後で、幅が1~1.5cmのものが多い。重量分布では、0.4~1.3gのものが多く、全体の7割強を占めている。特に、I a類は、28を除くすべてがその範囲に含まれる。石質は珪質頁岩96点(うち、玉ずい質のものは50点)、玉ずい11点、黒よう石3点(第59図3・18・19)である。

●第78号土壤から出土した7点の石鏃(第59図13~19)は、出土土器から弥生式土器に共伴したものである。完形品3点、破損品4点で、I C類に含まれる。尖頭部が長く、茎部が短く、長幅比が大きい(他の石鏃が1.5~2.0の付近に分布するのに対し、完形及び略完形品の5点は2.5~3.0の付近に分布している)という特徴を有し、規格性の強いものとなっている。

B類 石槍(第58図2、第96図61~68)

12点出土した。完形品5点、破損品7点である。基部形態には、尖基のものと円基のものがある。また、薄手のものと厚手のものがあるが、幅広のものは薄手に、細身のものは厚手の傾向があるが、第58図2は、細身であっても、薄手に作出されている。全例、珪質頁岩製である。

C類 石錐(第97図)

26点出土した。完形品18点、破損品8点である。形態差が著しく、第1次調査の分類では、該当しないものもあり、新たに、次のように分類した。

C—I類 明瞭なつまみ状の頭部をもち、錐部の長いもの。第1次調査のI類に相当する。錐部の太さによって、細いもの(a)と太いもの(b)とに細分できる。

I a類は4点出土した(69~72)。すべて破損品であり、うち1点は錐部片(72)である。全体に、入念な調整が施されている。

I b類は4点出土した(73~75)。完形品1点、破損品3点である。I a類に比べて、錐部はおよそ2倍くらい太い。また、小さめの頭部をもつ。73は、頭部と錐部とが接合したもので、錐部の現存長は26mmである。75は錐部のみに調整が施され、頭部に施されていない。錐部長は16mmで、比較的短かい。

C-II類 つまみ状の頭部をもち、錐部の著しく短いもの。(76、77)

2点出土し、完形である。76は剥片の一部に調整を加えて錐部を作出したもので、錐部には磨耗痕が見られる。77は両面に残された主要剥離面の観察(とくにリングやフィッシャーの在り方)から、両極石核を素材としている可能性が強い。錐部長は、76が5mm、77が4mmである。

石質は、76が玉ずい質の珪質頁岩、77が珪質頁岩である。

C—I類 錐部がしだいに太く広がり、錐部との境が不明瞭なもの。(78~85)

8点出土し、すべて完形である。78・84は剥片の一部（尖った部分）に、簡単な調整を加えて錐部を作出したもので、錐部には磨耗痕が見られる。石質は、珪質頁岩である。

80~83は、小形のもので、次のIV類にも似る。長さが2~3.5cmの小さな剥片を素材として、錐部を作出している。79~82は片面、83は両面加工である。79・82は両極石核・剥片を素材としたもので、80・81・83もその可能性が強い。石質は、珪質頁岩が1点、他は玉ずい質の珪質頁岩である。

C—IV類 棒状のもの (85~91)

8点出土し、すべて完形である。85~88は長さが2~3cm前後的小形のものである。85・86は錐部のみ、87・88は錐部以外の側縁にも調整が加えられている。85・86は両極剥片を素材とし、88にもその可能性がある。89・第58図4も以上に述べた小形のものであるが、全面調整が加えられているものである。ここでは石錐に含めたが、石鑿との類別に問題が残るものである。

90・91はやや大形のもので、全面調整が加えられているものである。錐部には磨耗痕が顕著に見られ、石槍からの転用品と考えられる。

石質は、90・第58図4が珪質頁岩で、他は玉ずい質の珪質頁岩である。

D類 石匙 (第97図~第99図他)

第1次調査の分類とはほぼ同じであるが、II類の縦形石匙を末端の形状により3つに細分した。32点出土し、うち4点は土壤からのものである。

D—I類 横形石匙 5点

a. つまみ部が中央に位置するもの。4点。(93・94、第60図11)

すべて完形である。いずれも素材とした剥片の形状を変えないで、刃部やつまみ部を作出しただけの、粗雑なつくりである。94はその中でも、比較的ていねいなつくりである。

b. つまみ部が左右いずれかに片寄るもの。1点。(92)

腹面右側縁に打撃方向が見られるが、その部分の調整は入念で、バルブは除去されている。またつまみ部や刃部の調整も入念である。

D—II類 縦形石匙 27点

a. 先端が平坦か斜行するもの。10点。(95~101、103・107・109・111)

先端が平坦なもの、斜行するもの各5点ずつある。先端部に調整が加えられて、いわゆる刃部を作出しているものが6点ある(95・96・99~101・107)。打面方向は、つまみ部方向に位置しているものが多いが、99は腹面右側縁に見られ、打面をそのまま残している。

b. 先端部が丸みをもつもの。5点。(105・108)

細身のもの 2 点、幅広のもの 3 点である。また打面方向がつまみ部に位置するもの 2 点、先端部に位置するもの 3 点である。

c. 先端部がしだいに幅狭となり、尖頭状を呈するもの。6 点。(110・112、第59図3・7)

先端部が幾分丸みをもつものや、小さな平坦面となるもの、とがるもの等があり、各々 2 点ずつある。第59図3は先端部をわずかに欠くが、110と同様先端部がとがるものと思われ、小形の部類に属する。112は先端部が両面加工となっている。つまみ部と刃部との関係からいえば、I 類との中間（斜形）の形態である。第59図7は幅広のつまみ部をもつもので、背面左側縁に縁辺加工が見られ、右側縁には原石面あるいは風化した部分をそのまま残している。また、背面には広く油脂状の物質が付着し、光沢がある。

以上の石匙の他に、先端部を欠損して、類別できないものが 7 点ある。113には加熱によってはじけこんだ痕跡が見られる。113は両面加工のものである。116・第60図9は折損面に再調整が加えられている。

石質は、すべて珪質頁岩であるが、そのうち 2 点は玉ずい質のものである。

E 類 石匙 (第99図～第101図)

E—I 類

20点出土した。うち土壌からは 1 点の出土である。形状のわかる 19 点を対象にすると、

形態 A 基部が幅狭で、三角形～台形状のもの…16点

B 長方形状のもの……………3 点

となり、形態 A が優勢である。その中でも、台形状のものが多い。

形態 A には、⑥両面とも全面調整のもの 2 点 (120・128)、⑦背面が全面調整で、腹面が縁辺調整のもの 5 点 (119・121・123・124・126)、⑧背面が全面調整で、腹面は無調整に近いもの 2 点、⑨背面が縁辺調整で、腹面は無調整に近いもの 3 点 (116～118) となっている。しかし、刃部調整だけをみると、両面調整のものは 4 点のみ (114・120・126・128) で、他は片面調整である。

つまり、両面加工・半両面加工のものでも、刃部まで両面加工するものは少なく、したがって片刃のものが多いことを示す。

形態 B には、⑩が 1 点 (127)、⑪が 1 点で、125は⑫背面が全面に近い調整で、腹面は刃部のみの調整となっている。

刃部角についてみると、45°～80° に分布し、65° 付近に多い。

E-II 類

つまみ状の頭部、あるいは柄と考えられる部分（以下、基部と呼ぶ）を有する小形の石器である。22点出土し、そのうち土壌内出土のものは 1 点である。

（形態）体部が橢円形か円形に近い形状のものと、台形か方形に近い形状のものとに大別される。前者は円刃（弧刃）となり、後者は直刃となる。また刃部には、両面加工のもの（両刃）と片面加工のもの（片刃）がある。以上のことから、次の4タイプに細分できる。

a 1. 円刃で両刃のもの。9点。(133~139)

a 2. 円刃で片刃のもの。6点。(129~132)

b 1. 直刃で両刃のもの。6点。(140~144、第59図6)

b 2. 直刃で片刃のもの。0点。

（このうち、b 2類は、第1次調査でも出土していないものの、第3次調査の分が未確認であるため、分類項目に入れておく）

なお、129はE—I類の中で最も大きく、いわゆる横形石匙に近い（というよりは、横形石匙か？）もので、130は、刃部が斜めに作出されているものである。また、基部のみの破片が1点ある。

（調整）全般に入念な調整が施されている。a 2類は片面加工のものであるが、調整が全面に施されているものと、主要剥離面や原石面を残しているものがある。裏面は、平坦か、若干湾曲しており、基部のみに調整が施されているもの、刃部にも部分的に施されているもの、全く調整が施されないもの等がある。

a 1類及びb 1類は両面加工のものであるが、大部分のものは、両面とも全面調整が施され、主要剥離面を残しているものは少ない。

基部の調整は、石匙のようにノッチ状に施されるものと、やや尖頭状に作出されているものがあつて、前者が多い。

刃部の調整は、フルーティング様の細長い平行した剥離が施されているものが一般的である。

a 2類は、急斜度調整が施されている。

（刃部角） 40° ~ 70° に分布し、 60° のものが多い。

（大きさ・重量）大部分のものは、長さ2~4cm、幅1.5~3cm、厚さ0.5~1.0cm前後に分布している。重量分布では、10g以内に含まれ、特に2~4gが多い。

（その他）144は両面に光沢痕が見られた。138は焼けはじけの痕跡が両面に見られた。

（石質）玉ずいが1点、珪質頁岩が9点、玉ずい質の珪質頁岩が12点である。

F類 不定形石器（第101図～第106図）

第1次調査では、A~E類以外の不整な剥片石器を「F類 スクレイパー」として分類している。また、A~G類に該当しない石器を「H類 異形石器」としている。ここでは、两者を一括して、不定形石器として取り扱うことにして、新たに細分することにした。また、整理の段階で、彫器と思われる石器や、両極技法によって生産された石核・剥片と共にビエス・エスキ

ユース（楔形石器）の存在することを知った。そこで、彫器と思われる石器は不定形石器の中に含めてその中で細分し、ピエス・エスキュースをH類として報告することにした。

F—I類 彫器 (145~149、第58図12)

彫器としての概念及び認定基準は、高橋文夫氏(1982)³¹によるところが大きい。不整な剥片の一部に、使用痕や加工痕と思われる微細な剥離痕や光沢痕が観察されるもので、9点出土した。折断面を有するものは3点で、折断面と剥離面とが交差する部分を利用している。また、側縁の一部に刃こぼれやリタッチが施されているものもあり、いわゆるR-フレイクやU-フレイクの転用例あるいは複合形態としての特徴を合わせもっている。石質は、すべて珪質頁岩である。

F—III類 連続した調整が加えられているもので、いわゆるスクレイパー類。調整される部位によって、次の9種類に細分する。

a. 縦長剥片の側縁から末端にかけて調整が加えられているもの。19点。(150~158)

片面の縁辺のみに調整が加えられている縁部調整のもの(13点)や、両面の刃部のみに調整が加えられている刃部両面調整のもの(5点)、背面が片面全面調整で、腹面が縁部調整のもの(2点)がある。150は背面の左側縁下部から右側縁上部にかけて急斜度調整が加えられているもので、腹面左側縁にも調整が加えられている。156は背面の一部と腹面の全周に縁部調整のもの、第58図15は刃部両面加工のもの、151・152・157は片面に縁部調整が加えられているものである。また、両極石核や剥片を素材としているものが3点(153・154・157)あり、154は片面に縁部調整が加えられている。157・第58図15は剥離面やバルブの状況から両極石核や剥片を素材としている可能性が考えられる。

石質は、珪質頁岩が14点、玉ずい質の珪質頁岩が5点である。

b. 縦長剥片の側縁に調整が加えられているもの。20点。(159~161・163~168)

両側縁に調整が加えられているもの(7点)と、片側縁にのみ調整が加えられているもの(13点)がある。

両側縁に調整が加えられているもののうち、168は片面全面調整のもので、他は縁辺のみを加工している。

片側縁に調整が加えられるものは、刃部両面調整のものが1点で、他は片縁調整のものである。160・161・165・167は右側縁に急斜度調整、164は緩斜度調整が加えられている。160・161は両極石核を素材としたものである。また、164は上下端にダメージ痕が見られ、両極剥片の可能性が考えられる。

(この他にIV-2区出土の232は、背面右側縁に、急斜度調整によるノッチが加えられていて、II b類とII h類の要素を合わせもつものである。)

石質は、珪質頁岩が13点、玉ずい質の珪質頁岩が7点である。

c. 縦長剥片の末端に調整が加えられているもの。7点。(162・169~171・173)

片面縁部調整が加えられている。急斜度調整のもの5点、緩斜度調整のもの2点である。170の刃部腹面には光沢痕が見られる。

石質は、珪質頁岩が6点、玉ずい質の珪質頁岩が1点である。

d. 横長剥片を素材とするもの。15点。(172・174~177)

刃部両面調整のもの4点、片面縁部調整11点である。厚みのある剥片を素材としているものが多いため、急斜度調整のものが多い。横長剥片の末端に調整するものが11点で、175は両極剥片を素材としているものと思われる、側縁から末端にかけて調整がみられる。

石質は、珪質頁岩が11点、玉ずい質の珪質頁岩が3点、玉ずいが1点である。

e. 尖頭状のもの。14点。(178~186、第58図7)

大部分のものは縦長剥片を素材とし、剥片の末端を尖頭状に調整を施している。剥片の基礎を尖頭状に調整を施しているものは1点である。186は簡単な縁部調整のもの、179は片面の全面を調整しているもの、181は両面とも入念な縁部調整のものである。184・185・第58図7は、両極石核を素材としているもので、184・185は尖刀搔器であり、第58図7は刺突的機能をもつものと思われる。また180も刺突的機能をもつが、その先端部には磨耗痕が見られることから、石錐として転用された可能性が考えられる。

石質は珪質頁岩が9点、玉ずい質の珪質頁岩が5点である。

f. 半円状のもの。8点。(187・188・194、第22図5、第58図14、第60図1)

切断や折損の結果として、半円形を呈するものを一括したが、a~e類に含まれると思われる破損品については除外し、それぞれに含めている。

187・第22図5、第58図14は切断技法によるものと思われる、第58図14は折断面の両端に、第22図5は折断面の全面に調整が施されている。また、これら3点の石器は、両極石核・剥片を素材としている可能性が強い。

石質は、珪質頁岩が6点、玉ずい質の珪質頁岩が2点である。

g. 両面調整が施された(梢)円形のもの。7点。(189・191・192)

2~4cm前後の中形の石器で、両面とも全面調整が施されているものである。梢円形状を呈するものには、一端が幅狭となるものがあって、石撓(円基)に似るものがある(191・192)。石質は、すべて玉ずい質の珪質頁岩である。

h. 剥片の一部に、ノッチ状の調整が施されているもの。4点。(194)

石質は、すべて珪質頁岩である。

i. a~h類の破損品及び定形石器の破損品を一括した。44点。(195~204)

この中には、折断又は折損して、三角形・四角形を呈する形状のものがあり、いわゆる折断

調整石器と思われるものも含んでいる（計測表の備考欄に折と記載、200～204）。折断調整石器と思われるものは15点出土し、三角形に近い形状を呈するものが多い。折断（折損）は調整が施された後に行われ、折断（折損）面に調整は施されない。石質は、すべて珪質頁岩である。

また、定形石器の破損品と考えられるものは17点ある（備考欄に想定される器種名を記載、195～199）。しかし、残存部の形状・調整痕から、複数の器種が想定されるものや、a～h類の破損品とも考えられるものがあつて、その認定は困難である。

石質は、珪質頁岩が22点、玉ずい質の珪質頁岩が7点である。

F—IⅢ類 定形的な刃部をもたないものや連続しない刃部調整のもの及び連続するが2mm前後の極浅形調整が見られるものなどを一括する。

96点出土した（205～229）。縦長剥片を素材とするものが多く、約7割を占める。また、両極石核・剥片を素材とするものは25点で、側縁を調整するものが多い。

2mm前後の極浅形調整が見られるものは30点で、そのうちの10点は、両極石核・剥片を素材としている。

石質は、珪質頁岩が63点、玉ずい質の珪質頁岩が33点である。

F—IV類 使用痕の見られる剥片を一括する。57点の出土である（233～235）。縦長剥片を素材とするものは約7割を占める。また、両極石核・剥片を素材としているものは2点である。

石質は、珪質頁岩が49点、玉ずい質の珪質頁岩が8点である。

G類 鞄形石箆（第99図115）

北海道の続縄文時代に特有の石器で、1点のみの出土である。千代 繁氏の分類のA類に相当する。両面に見られる主要剥離面は、比較的大きなもので、本石器を製作する前段階において、薄手のものとなるように意図されて、調整が施されたものと考えられる。縁辺の調整は、小さな平行細部調整が、入念に施されている。長さ9.9cm、幅5.0cm、厚さ0.7cm、重さ48.7gで、刃部角は60°（平均）である。石質は珪質頁岩である。

H類 ピエス・エスキュー（第106図、第107図他）

「向かい合った二邊ないしは四辺の縁辺部に、階段状の剥離痕・つぶれが認められるもの」（岡村：1976, 1983^{注2}）をピエス・エスキューとした。138点出土した。大部分のものは両極剥離痕と2個一対の刃部をもつが、4個二対の刃部をもつものや、一边が平坦面をもつものもある。一边が平坦面をもつものは、平坦面の縁部に、階段状の剥離痕やつぶれ（ダメージ痕）が見られ、対辺の刃部の状況が他のものと同じであることから、本石器に含めたものである。

また、ピエス・エスキューが両極技法で製作され、両極技法と同じような状況下で使用されたものとすると、上記の分類基準では両極石核との区別の問題が残り、ここでは多分にそれらを含んでいる可能性が強い。

以上のこととふまえて、原石面の残存状況から I ~ IV類に、剥離痕の観察から a・b種に分類する。

H—I類	原石面を広く残すもの	a種	上下方向の剥離痕のみのもの
II類	原石面を両側縁に残すもの	b種	a種以外のもの
III類	原石面を一側縁に残すもの		
IV類	全面、剥離されているもの		

H—I類 23点

原石面を広く残しているため、石核に最も近い。

I a類 13点 (236・238~242、第58図13)

刃部の二辺が、両面とも剥離痕で構成されるもの（以下、両面剥離痕と呼ぶ）が4点、一边が両面剥離痕による刃部で、対辺が原石面と剥離痕とで構成されるもの（以下、片面剥離痕と呼ぶ）が9点である。しかし、対辺が片面剥離痕によるものは、刃部としては疑わしい。(238・241)は細長い剥離痕が上下端に走って見られる。

I b類 10点 (237・240)

上下方向のほかに、左右方向の打撃痕・剥離痕が見られるものである。刃部が二辺とも両面剥離痕のものは少ない。一边が両面剥離痕による刃部で、対辺が片面剥離痕のものや平坦（原石面）なもの、三辺が片面剥離痕のものがある。(237)は、細部調整が施され、R—フレイク (F—III類)とも考えられる。

H-II類 33点

I類より剥離が進行したもので、刃部は二辺とも両面剥離痕によるものが多い。また、I類が全体に塊状のものが多いのに対し、II類は全体に薄手で、剥離面は1~2面程度の平板的なものが多い。

II a類 24点 (243~249・251、第60図3・6・10)

大部分のものが、二辺とも両面剥離痕による刃部をもつ。247は対辺が平坦（剥離面）なものである。また、この一边には、細部調整が施されている。

II b類 9点 (252~255)

253は、対辺が平坦（原石面）で、左側縁に細部調整が施されている。

H-III類 38点

全般に、II類のものに似ており、剥離痕は平板的である。また、切断面（裁断面）の見られるものもある。

III a類 32点 (250・256~258、第22図4、第59図10)

第22図4は、一边がやや平坦である。258は一边に細部調整が施されている。第59図10は破

片と思われ、角柱状である。

III b 類 6点 (260・261)

260・261には細部調整が施されている。

H—I 類 44点

原石面が痕跡として残っているものはここに含めた。両極石核以外に、調整剥片を素材としているものが7点ある。また、切断面や縱走する剥離痕の見られるものが、I～III類に比べて多い。

IV a 類 30点 (262～266、60図5・8)

表面には、縱走する剥離痕が数面見られ、裏面は平坦な剥離底であるものが多い。264・265は小形のもので、両側縁に切断面の見られるものである。262・第60図5は破損品と思われる。

IV b 類 14点 (267～270)

調整剥片を素材としているものが、7点ある。271はラウンド・スクレイバー様のものを素材としているもので、267は一边が細部調整が施され、他辺は平坦面(剥離面)をもつものである。270は側縁の一部に細部調整が施され、R-フレイク (F-I 類)とも考えられる。

分類基準から、剥離作業はおおむね I 類から IV 類に進行している。重量分布を見ると、I 類から IV 類について、やや軽量となる傾向が見られる。全体として、2～4 g 前後のものが6割強を占め、10g以下では9割を占めている。

大きさは、長さ・幅とともに3 cm以下のものが多く、大きくとも、5 cm前後に含まれる。

石質は、玉ずい質の珪質頁岩が87点、珪質頁岩47点、玉ずい3点であり、特に玉ずい質の珪質頁岩が多数を占めている。(畠山)

注1. 高橋文夫; 1982「縄文時代の彫器」『紀要II』(財) 岩手県埋蔵文化財センター。

注2. 岡村道雄; 1976「ピエス・エスキューユについて」『東北考古学の諸問題』東北考古学会編 東山版
寧楽社

1983「ピエス・エスキューユ、楔形石器」『縄文文化の研究7』—道具と技術— 雄山閣

第二群石器

I 類 磨製石斧

99点出土した。遺構内出土4点(うち欠損品4点)・遺構外出土91点(うち欠損品77点)・IV-2区出土4点(うち欠損品2点)である。文中の番号は整理番号である。

第1次調査の報告では、残存部位についての分類が主体であるために斧自体の性格付けに不明な点が多い。このため新たに分類した。また欠損品については表中に残存部位・欠失部位を記載した。本文中の斧番号は整理番号である。

I-I 類 擦切磨製石斧 擦切痕の残存するものだけをこの類とした。

II 類 局部磨製石斧

III類 その他

I類 6点出土した。68は8号住居跡出土のものであり刃部から器体中央部まで残存している。13はIV-2区出土で、頭頂部と片面の鑄部分に敲打痕を残す。表裏面の各々3分の1ほどと1側縁に擦切痕が認められる。3は小型の石斧で、刃部端に微小な刃こぼれと、細い擦痕が認められる。40は基部で、折断面の端部に敲打痕が認められる。敲き石に転用したものか、再加工途中のものは不明である。97は刃部片で、裏面が中央側から破損しているが、刃部先端は両面とも残存している。99は刃部片である。

擦切痕の残存しないものをこの類から除いたが、本来、擦切技法に因っても、研磨等で、その痕跡が磨消しているものもある。特に小型のものや緑色凝灰岩及び輝線凝灰岩製のものは、この類の可能性が高い。

II類 1点出土した。偏平な長楕円形で、刃部と側縁部の一部を研磨によって作出している。頭頂部を除く全面に擦痕が認められるが、ほとんど自然面として残存しているため、この類とした。刃部端に微小な刃こぼれが認められる。(斧番号62)

III類 完形品及び器体の全体像を把握できるものを中心に、器体整形の特徴により細分した。

A—全面研磨のもので剥離・敲打の痕跡を完全に磨消しているもの

B—全面研磨のもので剥離・敲打の痕跡を磨消し切っていないもの

C—全面研磨に至っていないものの

D—欠損品で細分できないもの

なお、器体の基部側が半分以上残存しているもので、全面研磨のものは、A類とした。これは、通常、刃部側の整形が基部側より丹念に行われていることによる。

A類 形状的には、台形状を呈するもの(定角式に類似)と器体中央付近に最大幅をもつ、曲線的なもの(乳棒状とは異なる)がある。また、側縁が平坦面を構成するものと、面として形成されていないものが認められる。

B類 研磨の省力化によるものと思われるが、全体にざらつく程度のものと、面単位で研磨の度合の異なるもの・両面の研磨に比して側縁の研磨が難なものなどがある。

9は、片面・両側縁が非常に良く研磨されているのに対して、片面と頭頂部は、軽い研磨が成されているだけである。93は、両側面の敲打(潰し整形)が非常に難であることから研磨が及んでいない部分が認められる。23・55は、刃部だけが丹念に研磨されている。

C類 研磨が全面に及んでいないものと、研磨後に敲打を行っているものがある。

20は、刃部片の再加工品で、研磨された刃部を除いて器体部分を敲打により整形したものである。85は、片面全面と他面の刃部寄りの一部及び両側面の3分の2ほどを敲打によって整形している。敲打痕は研磨より新しいものである。この斧は刃部が鋭利であるのに対して刃部角

が鈍角であることから、刃部先端の欠損後に再加工したものと思われる。

D類 刃部片の数量に対し、基部片の数量が多い傾向を示す。また、刃部片は器体の2分の1以上残存するものがほとんどで、基部端だけ欠失しているものが多い。これに対して、基部片は器体の3分の1以下のものが非常に多い。これは、器体の破損がおおむね、この部位で起つたことを示唆するものであるが、欠損品全体の出現率の中で、基部片が多く認められることが注目される。105は基部片であり、炭化物が付着している。

接合 第1次調査の刃部片と51・29と50・11と12が接合した。前2者は、約60m離れたものが接合したもので、ともに再加工及び転用はされていない。

使用痕跡 18・23・86・109は刃部先端が潰れている。75は小さいさざれ状の痕跡を有する。刃部の両側端に小さい剥離を有するものが多い。

基部端に敲打痕を有するものが16点ある。敲打により小剥離を有するものが多く、ほとんどが頭頂部のやや横に痕跡が認められる。頭頂部中央に敲打痕が認められるものは103の1点だけである。

折損 器体の2分の1から基部寄りの3分の2程度で折損しているものが多い。折断面は、長軸・短軸上とともに斜めのものが多い。

再利用・転用20・85が再加工して使用されている。23・59は基部端に剥離と敲打の痕跡を有する。ともに刃部を有していることから基部の再加工と思われる。59は縦割れをしている。

転用しているものは、15・19・31・33・40・56・67・84・93の9点であり、31が最も使用頻度が高い。33・40・84は、折損端に敲打及び擦りの痕跡を有するもので、再加工の可能性も考えられる。19は折断面を刃部側から剥離し、刃部を作出している。礫器的な使用も考えられる。15・56・67・93はI-II類(敲き石)に転用している。いずれも折損による剥離の他に19の剥離のような痕跡を有する。また、敲打による小剥離も考えられる。

J類 打製石斧

5点出土した。すべて遺構外出土である。完形品4点・欠損品1点である。

I-1類 片面加工

II類 両面加工

I類 32・63・74の3点である。円礫を打ち欠いて作成している。いずれも片面は自然面である。32は基部端が欠失している。63はチャートを素材としており、自然面側に使用による剥離が観察される。74は刃部欠損後に再加工した可能性も考えられる。

II類 72・73の2点である。72は、つるはし状の形態をしており、器体中央が分厚く、片面に若干の自然面を残す。両端ともに刃部の可能性が考えられる。73は、基部破片で、両面に自然面を残し、偏平な礫を素材としたものと考えられる。

石質は32・74が輝緑岩・63がチャート・72が頁岩・73が砂岩であり、磨製石斧が閃緑岩を中心素材としているのに対し、1点も出土しないことが注目される。

環状石斧

石器分類中に項目がないため、第II群石器の末項に記載する。

1点の出土である。CO-374グリッドからの出土で欠損品である。輝緑岩を素材としており、ほぼ全面研磨によると思われる。孔部は敲打による潰しの痕跡が顕著に認められるが、孔の中位（最小径を有する部分）に、軽い研磨様の擦れた痕跡が認められる。刃部に使用によるものと思われる剥離及び潰れが認められる。

第III群石器

K類 石錘

143点出土した。遺構内出土9点（うち欠損品1点）・遺構外出土129点（うち欠損品22点）IV-1-2区出土55点（うち欠損品1点）である。文中の番号は整理番号である。

第1次調査の報告では、抉りの部位等についての分類が多岐にわたり、繁雑な部分が認められるため、これらを整理し、抉りの数及び位置により再分類した。

また、第1次調査におけるK-I~IV類d種（鍤の形態そのものが抉り状を呈するもの）は、鍤としての可能性が考えられるだけであり、形状の類似性だけで本類とすることに疑問が感じられるために、これを除外した。

I-K類 掊りが1箇所のもの（第1次調査のK-I~IV類にほぼ相当する）

II類 掊りが2箇所のもの

A-素材の長軸線上に抉りをもつもの（同K-I類に相当）

B-素材の短軸線上に抉りをもつもの（同K-V類に相当）

III類 掊りが3箇所以上のもの（同K-II~IV類に相当）

また、抉りの作出方法は、片面からのもの・両面からのもの・敲打によるもの（剥離後に潰し成形をしたものか、敲打だけによるものかは、素材が軟質のため判然としない）がある。

I類 5点出土した。相対する側縁に抉り状の自然面をもつものは1点であるが、非常に小さい凹みである。

II A類 12点出土した。このうち抉りが、素材のほぼ中軸線上に位置するものは8点で、小判形等の左右対称形のものが多く、素材は他の類に比しておおむね硬質である。11・12は大形のものである。

II B類 119点出土した。形状は小判形・楕円形・長方形が多く、長幅指数で6~8に集中する縦長の素材が多く用いられている。厚さは均一なものが多いが、断面三角形を呈する分厚いものがある。

抉りは、作出方法の組合せから数種類のものが認められる。a両方片面のもの16点・b一方が片面からで、他方が両面からのもの23点・c両方とも両面からのもの59点であり、c種がもっとも多い。不明のもの21点である。

III類 7点出土した。長楕円形の分厚いものが多く、他の類に比してやや大型である。

（長さ）最大13cm・最小4.5cmで、6cm～10cmに集中し、特に8.5cm～10cm・6.5cm～8.5cmの2ブロックに集中する。

（幅）最大9.5cm・最小3cmで、5cm～7.5cmに集中する。

（厚さ）最大4.8cm・最小1cmで、1.5cm～3cmに集中する。

（重量）最大495g・最小17gで、60g～270gに集中し、特に100g～250gに集中する。

（石質）安山岩が主であり、凝灰岩・チャートが数点ある。素材は、チャートとII A類を除いて軟質のものが多い。

（抉りの長さ）抉りの長さを、抉りをもつ軸線の長さ（長軸に抉りをもつものは最大長・短軸に抉りをもつものは最大幅）で割った値（抉り度）をみると、II A類の小判形などのものが、10点中6点が9.9～9.4に集中するのに対し、II B類は9.5～8.5を中心とする。点数に大きな差があることから、即断はできないが、II B類はII A類に比して抉りが深いことが理解される。

L類 敵磨器類

第1次調査の分類では、各種の使用痕跡の類別が多岐にわたるものと、不足の部分があることから、主要痕跡により再分類した。これらの痕跡は、使用によるもの・器体整形に伴うもの・機能面作出によるものがあるが、使用による痕跡に主眼をおいた。

L—I類 主要痕跡がスリによるもの (第1次調査し—I～VII類に相当)

II類 主要痕跡が敲打によるもの (同L—I～VII類に相当)

III類 主要痕跡が凹みのもの (同L—I類に相当)

IV類 複合痕跡を有するもの

V類 器体整形及び機能面を作出しているもの

VI類 痕跡の不明瞭なもの (搬入搬出等)

V類は、本来、利器として分類すべき礎器等を含むが、第1次調査の分類において、本類で扱ったことから、これに準じた。

使用面・形状等については、各類ごとに細分した。(本文中の番号は整理番号である。)

L—I類 主要痕跡がスリによるもの

形状により細分し、さらに使用面等により分類した。

A—断面が三角形のもの (いわゆる三角柱状磨石)

B—小判形及び楕円形のもの

C—棒状のもの

D—球状のもの

E—卵形及び回転椭円体のもの

F—その他

A類 遺構内出土2点・遺構外出土41点・IV—2区出土5点である。(うち欠損品24点)

1稜を使用のもの19点、うち使用面に剥離痕を有するもの6点・剥離痕のないもの13点である。剥離はほとんど両面からのものであるが、45は片面からだけのものである。

2稜を使用のもの4点、2稜ともに剥離痕のあるものは皆無であり、1稜だけに認められるもの2点である。

3稜を使用のもの1点、3稜ともに剥離が認められるが、主使用面は1稜で、1稜には、擦り痕がほとんど認められない。

面に片減りが認められるものが7点ある。また、他の類に比して破損率が高い。

B類 遺構内出土6点・遺構外出土40点・IV—2区出土3点である。(欠損品9点)

a種 1側縁だけ使用のもの

8点出土した。

b種 使用面に剥離痕を有するもの

9点出土した。すべて偏平礫を素材とし、使用面は三角柱状磨石に類似する。

2側縁に剥離痕を有するものと、1側縁だけのものが認められる。前者の1側縁は、若干擦った程度の痕跡であるが、33は両側縁ともに使用頻度が高く、1側縁は片減りしている。

c種 2側縁を使用しているもので、使用頻度の差により、1側縁が他方よりも素材の丸みを残しているもの

11点出土した。11・26は、両平坦面を研磨したような痕跡が認められる。

d種 2側縁を使用しているもので、両側縁とも、ほぼ同じ磨滅が認められるもの

(b種のさらに使用したものへの可能性がある。)

10点出土した。13・17・20・25は全面研磨の可能性がある。52・53は大型のものである。

両側縁ともに直線的であり、両平坦面ともに、平滑な感じである。

e種 3面以上使用しているもの

2点出土した。41は両側縁と両端部に擦り痕が認められる。15は両側縁と平坦面を使用している。L—IIV類に形状及び使用状況が類似しているが、擦りの痕跡だけのため、この種とした。

C類 遺構内出土4点・遺構外出土12点・IV—2区出土2点である。

素材は、偏平なものとやや肉厚のものがあり、108は円柱状のものを使っている。端部に擦り痕を有するものであり、一端・両端使用の2種がある。擦り痕は、端部中央を境に左右から

の擦りが認められる（三角形）のものと、ほぼ平坦なもの、素材の丸みに沿った使用面を構成するものが特徴的であり、大半は端部中央を中心とした三角形状を呈するものである。108は端部中央を中心として円錐状の擦り痕が認められる。

100・107は、棒状ではないが、この類に含めた。101は平坦面に敲打痕が認められる。

D類 遺構内出土5点・遺構外出土25点・IV—2区出土0点である。

全面研磨によるが、球状の転石の一部分に擦り痕を有するものもある。また、自然縫と区別し得ないものもある。素材及び擦る対象物により、表面がざらつくものと光沢のあるものがあるが、前者が多い。8号住居跡出土の221は、溝状の擦り痕と一端に擦りが認められる。

E類 遺構内出土4点・遺構外出土8点・IV—2区出土0点である。

素材は断面形状が円を呈するもので、1～数箇所に擦りの痕跡が認められる。

9・56・68は、擦りにより平坦面を構成している。70・71は端部に擦り痕が認められる。69は器体中央部に平坦面が構成され、更に両端部に擦り痕が認められる。やや偏平なものは側縁に痕跡が認められる。

L—I類 主要痕跡が敲打によるもの

素材の形状・痕跡の位置等で細分した。また平坦面に、凹みまで至らない器面の荒れを有するものもこの類とした。

A—偏平なもの

B—球状・卵状のもの

C—若干細長いもの

A類 遺構内出土2点・遺構外出土1点である。

75は、端部に敲打痕を有し、剥離も認められる。他は平坦面に敲打痕を有する。

B類 遺構内出土3点・遺構外出土8点・IV—2区出土1点である。

角ばっているものは、その突端部を使用しており、器体がなめらかなものは周縁等を使用している。ほとんどがチャートであるが、安山岩が4点あり、これらは、平坦面及び端部を使用している。

C類 遺構内出土5点・遺構外出土8点である。

端部に使用痕を有し、一端のみ使用のものと、両端使用のものとがある。111号土壙出土の267は、一侧縁部を使用している。

本類のほとんどはチャートを素材としており、使用痕跡も敲打だけではなく、擦りの痕跡を合わせもっている。いわゆる敲き擦りの用具として用いられている。（欠損品1点）

L—IⅢ類 主要痕跡が凹みのもの

129点出土した。遺構内6点・遺構外118点・IV—2区5点である。うち欠損品は38点である。

(文中番号は整理番号である)

使用面の数により細分した。使用面としたのは、明瞭な凹みを有するもので、器面の荒れだけのものは除いた。また欠損品は分類の対象から除いた。

A—1面使用のもの

B—2面使用のもの

C—3面以上使用のもの（この類中、断面形状が円等の幅厚差の少ないものは、使用部分の数により判断した。）

A類 遺構内2点・遺構外27点・IV—2区1点の出土である。

B類 遺構内2点・遺構外54点・IV—2区1点の出土である。A類に比して小型のものが多く、全体の半数量を越す。63は石皿の破片の転用である。56は偏平で硬質の素材を利用しておらず、端部に剥離が認められる。

C類 遺構内2点・遺構外15点・IV—2区2点の出土である。

各類とも形状は多岐にわたるが、梢円形及び円形のものが主体である。また、小型のものは偏平なものが多く、大型のものは分厚いものが多い。大型のものは台石としての分類も可能であるが、主たる痕跡が凹みで、他の痕跡がほとんど認められないものは、この類とした。

IV類 複合痕跡を有するもの

スリ（擦り・研磨）・敲打・凹みのうち2種以上を合わせもつものを一括した。（器体に細かい荒れを有するものは除いた）

複合痕跡の種類と部位から細分した。

A—1側縁にスリ・平坦面に凹み・端部に敲打の痕跡を有するもの

B—2側縁にスリ・平坦面にスリと凹みの痕跡を有するもの

C—端部に敲打とB類の痕跡を有するもの

D—その他

A類の50・61は、分厚い素材を用いており、側縁の使用面は片減りしている。

C類の1は、この類の代表的なもので、器体全面に何らかの痕跡を有している。平坦面は研磨と凹み・側縁は擦り及び研磨・端部は敲打痕を有する。平坦面の凹み（敲打痕）と研磨は、研磨が後に行われており、端部の敲打が最も新しい。敲打痕は潰し整形様の痕跡である。

2は、1に最も近いものであるが、端部の敲打が側縁まで達していない。

6は分厚い素材で、側縁にも凹みを有する。

B類はC類の前段階的様相を呈する。

D類 275は全面研磨によるものと思われる球状の礫で側縁の一部とやや平坦な面に敲打痕を有する。

A～C類とも凹みは浅い。

V類 器体整形及び機能面を作出しているもの

84は、半円球状の素材の下端の周縁3分の2ほどに帯状の擦りの痕跡を有する。器体表面は研磨によるものか、光沢が認められる。

87は、円錐形を呈しており、下端が凸の曲面をもつ。器体は敲打及び研磨によって整形されている。使用面は下端部である。

243は、87と類似するが、使用面を有していない。器体は敲打によって整形されているが、頭頂部と体部に自然面を残す。下端部は、自然面を残し、若干の擦りは認められるが、機能面としては構成されておらず、凹の曲面を呈する。

250は、棒状の礫の折断面に剥離痕を有する。剥離は折断面の端部に認められるが、一周していない。いわゆるスタンプ状石器の加工途中の様相を呈する。使用の痕跡は認められない。

501は、片面全面に自然面を残す。周縁を剥離により加工しているが、刃部を形成するには至っていない。形状は打製石斧に類似する。

502は、両面のほとんどが自然面で、側縁に剥離が認められる。一部両面からの剥離である。

278は、円盤状の礫を側縁の2点?からの加熱によって、厚さをほぼ半分に減じている。刃部は、両面からの剥離によるが、2箇所にパンチ痕と思われる痕跡が認められる。

279は、側縁の一部を両面から打ち欠いて刃部を作出している。残りの周縁は平坦に加工されている。

760は、側縁に平坦面を構成し、一側縁を打ち欠いて刃部としている。2箇所にパンチ痕が認められる。

VI類 痕跡の不明なもの（搬入礫等）

研磨等の痕跡が不明瞭で、自然礫と区別し難い礫を一括した。円盤状・小判形・楕円形等の形状を呈するものが多い。

特に、IV—2区B I—428グリッドからは、形状の類似する円盤状の礫が8点一括して出土した。いずれも全面研磨が施されているようであるが、断定はし得ない。

この形状の礫は、L—V類の礫器とした278・279の素材として使われている。

これらは、礫石器の素材として搬入されたものか、又は何らかの用途を有していたものと考えられる。

M類 石皿・台石・砥石

第1次調査の報告では、側縁の高まりを作出しているものを除いて、石皿と古石の区分が不明瞭である。このため、分類の困難なものもあるが、分別できるものは極力分別した。

I類 石皿

A一面の側縁に高まりを作出しているもの（第1次調査M—I類に相当）

B—擦りによって内湾しているもの（同M—I類に相当）

C—擦りによる面をもつが、内湾まで至っていないもの

II類 台石

A—1面が平坦なもの（同M—I類に相当）

B—2面が平坦なもの（同M—I類に相当）

C—素材自体の節理により、A・Bに分類できないもの

III類 砥石

IV類 分類し得ないもの・大型の礫

※敲打による凹みが顕著な大型のものは、この類としたが、手による運動が可能な中型のものはL—I類の凹み石として扱った。

I—A類 7点出土した。遺構内出土0点・遺構外出土7点・IV—2区出土0点で、すべて欠損品である。

側縁の高まりが非常に明瞭なものと、若干の高まりだけのものが認められるが、ほとんどのものが高まりの直下に沈線状の整形痕が認められる。4は側縁に一条の浅い溝が作出されている。

I—B類 17点出土した。遺構内出土4点・遺構外出土12点・IV—2区出土1点である。

862は、IV—2区の配石遺構（第66図）の立石として使用されていたもので、大型の完形品であり、安山岩を素材としている。

8は欠損品であるが、側縁に湾曲面が認められ、砥石として使用された可能性もある。また、側縁端が2cmほどの厚さを有するに対し、破断面は～4mmの厚さである。

I—C類 4点出土した。遺構内出土1点・遺構外出土3点・IV—2区出土0点で、軟質の石材を用いているものが多い。安山岩を素材としたものは、不明のもの多いため、IV類としたものが多い。

II—A類 12点出土した。遺構内出土2点・遺構外出土10点・IV—2区出土0点である。

21は、両面に多数の凹みを有するものである。

平坦面は、平滑なものも見られるが、おおむね素材の細かい起伏が残存している。

II—B類 16点出土した。遺構内出土1点・遺構外出土12点・IV—2区出土3点である。

平坦面はII—A類同様の様相を呈するものが多く、板状節理による素材を用いたものがほとんどである。

II—C類 71点出土した。遺構内出土1点・遺構外出土63点・IV—2区出土7点で、総点数の半ばを占める。また、小破片に分割されたものが多いのが特徴である。

II類は、主要面に擦り及び敲打による荒れが認められるが、擦りが面全体に及んでいるもの

は少い。II-B類は主使用面が不明なものが多い。

III類 砥石（有溝砥石）

1点出土した。欠損品である。器体は、両面及び両側面とも中央に向かって大きく凹んでいる石皿様のもので、正面8本・左側面3本・裏面6本の計17本の溝を有する。溝は、断面形が薬研状を呈し、長軸断面上では端部が浅く、中央部が深いものである。

器体の大きな湾曲は擦りによるもので、溝より古いものと思われる。石質は砂岩である。

IV類 分類し得ないもの

大形の礫で、一部に擦り等の痕跡を有するが、I・II類に分類し得なかつたものも含む。

遺構内出土のものが多く、円礫等が多い。

I類は、砂岩・凝灰岩を素材としたものが多く、II類は、安山岩を素材としたものが主体を占める。これは主要使用目的の差異によるものと思われる。

III類の有溝砥石の痕跡ほどではないが、I-A・B類の4・5・8・10・13・15の6点にも溝状の擦痕が認められる。このうち明瞭な溝は、4—裏面に8本・5—表面に4本・8—両面使用のうち片面に1本・10—裏面に3本・13—主使用面に2本、うち1本は高まりを作出したものか?・15—両面使用のうち片面に1本である。(主使用面とは2面使用のうち、より凹んでいる面)

これらの溝は、ほぼ同様な断面形状及び深さを有している。また、破損前からの痕跡と思われ、平滑な面及び曲面における擦り潰し等の作業とは異質の作業が同時に行われていたことが示唆される。これらの石皿片は有溝砥石同様に石皿として使用頻度の高いものである。

使用としては、溝の形状から骨角器・玉などの作出が考えられるが、今回の調査では、非常に小型の玉が出土しただけで、これらの溝とは合致しない。また、使用具の再研磨も考えられる。(破損前からの使用と考えたが、破損後、この溝状の痕跡の残る作業を行い、この過程で再度破損した可能性も考えられることを追記したい。)

(白鳥)

第IV群 石器

本群は、いわゆる石製品を一括した。N類：軽石は第1次調査において、軽石製品として第III群石器の中で取り扱っていたが、本報告では石製品として第IV群石器として取り扱う。

N類軽石（第126図1-12）

軽石は、遺構内7点・遺構外11点、計18点出土した。個々の計測値は付表に示した。

本類は、更に5種類に細分した。

I類 (1)

擦り面と思われる平坦な部分をもつものである。形態は、断面形・正面形とともに隅丸長方形をなす。両側面に平坦な擦り面が観察される。一部に、火を受け焦げた痕跡がみられる。

II類 (2・3)

貫通孔をもつものである。

(2) は、2個の貫通孔及び貫通孔であったと思われる痕跡が4個みられる。

(3) は、正面形が台形、断面形が長方形をなし、上底側に1個の貫通孔をもつ。

III類 (4~9・11・12)

加工により形を整えているもので、正面形には台形・楕円形・隅丸長方形がみられる。

IV類 (10)

凹みのあるものである。正面及び側面に1個ずつ凹みがみられる。

V類 (実測図・写真なし)

加工の痕跡の認められないものである。

O類 円盤状石製品 (第127図2)

表採品である。石を円形に打ち欠き、周縁を擦って整形しているが十分でない。

大きさは、径4.7×4.4cm、厚さ1.3cm、重さ48gである。石質は安山岩である。

P類 有孔石製品 (第127図3~20)

(3) は、67号土壤覆土1a層より出土した。球状の石に盲孔が認められ、穿孔途中の未整品と思われる。孔周辺部に潰れが見られ、不明瞭であるが孔中央に螺旋状の条痕が認められる。大きさは、2.2×2.1×2.2cm、重さ12gである。石質は、玉ずいである。

(4~20) は、4号土壤覆土より17点出土した。個々の計測値は、第7表に示した。

正面形は、円形ないしは楕円形をなし、断面形は、長方形をなすものが多いが、台形状をなすものもある。貫通孔は両側から穿孔され、中はすぼむ。石質は緑色凝灰岩でややもろい。

4号土壤は、他の伴出遺物がないため断定はできないが、圓りから弥生時代の土器が出土していることから弥生時代の可能性がある。

(一条)

R類 石棒 (第126図14~16)

3点出土した。すべて欠損品である。

14. C W-382グリッドからの出土である。円柱状を呈し、先端部は丸い。折損部付近に擦りによると思われる平坦面が構成されている。また、全面に焼化を受けている。

15. D B-378グリッドからの出土である。両端及び裏面半分を欠失している。表面に煤状の炭化物が付着しており、焼化を受けたものと思われる。推定径14cmの大型のものと思われる。

16. 表採資料である。先端部だけ残存しており、先端面中央に、若干の高まりが認められるが、自然面か意図的なものなのかなは不明である。焼化を受けている。

※ 第18号土壤の確認面で検出した1点は、擦り・敲打等の痕跡が認められない角柱状の石材で、土壤構築時に立石としていたものが、横倒しになった可能性が考えられる。(白鳥)

S類 石刀（石劍）（第127図1）

(D A-379) グリッドIV層より1点出土した。石刀の破片と思われ、裏面を欠失している。粘板岩を擦って整形しており、擦りの痕跡が明瞭に観察し得る。背部は、平坦に整形されている。長さ5.8cm、幅2.1~2.6cm、厚さ1cm、重さ22gである。

U類 その他の石製品（第126図13）

(B A-427) グリッドI層から出土した。両側縁に3個ずつ計6個の抉りを作出している。抉りは敲き潰しによるもので、ほぼ左右対称である。長さ10.4cm、幅7.1cm、厚さ2.5cm、重量310gである。石質は、安山岩である。

石錘とも考えられるが、抉りの作出がていねいであることなどから石製品として取り扱った。

(一条)

(3) 土製品

IV-1区から出土した土製品は、遺構内・遺構外を含めて円盤状土製品85点、三角形土製品4点、鐸形土製品18点、靴形土製品1点、葺形土製品1点、三角柱状土製品3点、土偶1点、環状土製品3点、土器片鍾10点、計126点である。

各土製品の分布状況は、第132図に示した。

(ア) 円盤状土製品（第128図~129図）

本土製品は、遺構内11点、遺構外74点、計85点出土した。個々の計測値は付表に示した。

土器の胴部片を円形に打ち欠いてから周縁を擦って整形している。形態は、名称のとおりほぼ円形をなすものもあるが、不整円形になるものが多い。また、胴部片を利用していているため、文様の有無を問わず多少湾曲する。大きさは、径3.5~4cm、厚さ7~8mmのものが一般的である。重量は、かなりばらつきがある。

文様は、無文のもの(24点)、有文のもの(61点)があり、有文のものには、沈線文(1~45)、格子目状沈線文(46~51)、刺突文的な短沈線文(52)、繩文(53~55)、撚糸文(59・60・85)がみられる。

本土製品の使用目的、用途は現在のところ明確ではない。

繩文時代後期の十腰内I式の土器片を利用していると思われる。

(イ) 三角形土製品（第129図86~89）

遺構内1点、遺構外3点、計4点出土した。個々の計測値は付表に示した。

本土製品は、三角形板状土製品・三角形土板・三角形土製品などと呼称されているが、ここでは三角形土製品の名称を用いる。

土器の胴部片を三角形に打ち欠いた後、周縁を擦り二等辺三角形に加工している。胴部片のため湾曲する。文様は、沈線文(87)、繩文(86・888)、網目状撚糸文(89)が見られる。

縄文時代後期初頭の土器片を利用して製作されている。

(ウ) 鐸形土製品 (第130図)

遺構外より18点出土した。本土製品の名称は、鈴形土製品、土製垂飾、鐸形土製品、鐸形土器などと呼称されるが、第1次調査にならって、鐸形土製品の名称を用いる。個々の計測値は付表に示した。

文様は、無文のもの、有文のものがある。有文のものには、沈線文のみのもの、沈線文と刺突文を組合せたものがある。

また、貫通孔の有無及びその方向により、4種に分類することができる。

1種：貫通孔をもち、つまみ出し部分の長軸方向と平行するもの (1~10)

2種：貫通孔をもち、つまみ出し部分の短軸方向と平行するもの (11・12)

3種：貫通孔をもち、垂直に穴があくもの (13)

4種：貫通孔がなく、つまみ出し部分がくびれるもの (14・15)

となる。

本土製品の時期は、文様及び施文技法、過去の出土例から、縄文時代後期初頭のものと思われる。

(エ) 鍋形土製品 (第131図1)

111号土壙の覆土中より1点出土した。口縁部の一部とつま先部分を欠損している。

大きさは、高さ3.2cm、口縁部長径3.3cm、短径2.6cm、底面最大幅3.5cm、残部長さ4.8cmである。底面はやや張り出しており、安定があまり良くない。

文様は、極めて細い(0.5mmほど)沈線が多数、底面以外の部分に雜に施される。胎土には、やや多めの砂粒を含み、色調は黒褐色を呈する。

(オ) 茅形土製品 (第131図2)

51号土壙の覆土中より1点出土した。カサの縁、茎の一部が欠損している。

全体の大きさは不明であるが、カサの最大径5.5cm、茎の径2.2cm~3.3cm、残部高さ3.4cmである。カサは、内側に反り返り、茎は先細りの様相を示す。

文様は施されない。胎土には、多量の砂粒を含み、色調は明赤褐色を呈する。

(カ) 三角柱状土製品 (第1図3~5)

遺構外のIV層より3個体出土した。すべて欠損品である。

本土製品の名称については、立体土製品・三角彫形土製品・石冠状土製品などとも呼称されるが、第1次調査にならって、三角柱状土製品の名称を用いる。

(3) は(CY-381) グリッドより出土した。2分の1以上を欠損している。

形態は、正面形が背部が弧状をなす長方形で、側面形が隅丸の三角形である。底面は、長辺

部分が弧状をなす長方形に近い形である。また、底面は内側に反り返り、中央部分に円形の凹をもつ。

文様は、正面側の底面からの立ち上がり部分及び側面との稜線部分に、円形竹管による2列の刺突文が施される。他の部分は無文である。

(4) は、(D E-378) グリッドより出土した。上半部のほとんどを欠損している。

全体の形態は不明だが、底面は長方形をなし、やや内側に反り、隅が幾分張り出す。

文様は、極めて細い沈線文及び磨消繩文が施される。

(5) は、(D C-378) グリッドより出土した。

一部分しか残っておらず、全体の形態は不明である。

文様は、沈線文及び磨消繩文が施される。

3個体は、いずれも胎土に多量の砂粒を含む。焼成はあまり良くなく、ややもろい。色調は赤褐色(3、5)、黒褐色(4)を呈する。

文様及び施文技法から繩文時代後期初頭のものと思われる。

(キ) 土偶 (第131図6)

(C S-386) グリッドより1点出土した。両手、両足、顔は欠損して、ない。

大きさは、残部高7.7cm、最大幅7.5cm、最大厚4.1cmである。顔の部分はないが、側面形から、顔が前に突き出すと思われる。

文様は、首、肩から胸付近までに表裏面とも円形竹管による刺突が多数施され、表の胸の中心から胸部下半まで同様の刺突が一列垂下する。

胎土には、多量の砂粒を含む。作りはやや雑で、焼成はあまり良くない。

形態、文様、施文技法から、繩文時代後期初頭のものと思われる。

(ク) 環状土製品 (第131図7~9)

遺構外より3点出土した。すべて欠損品である。

(9) は(D A-382) グリッドより出土した。全体の大きさは不明である。螺旋状の沈線が施される。

(7、8) は、表採で、文様はない。

(ケ) 土器片鍤 (第131図10~19)

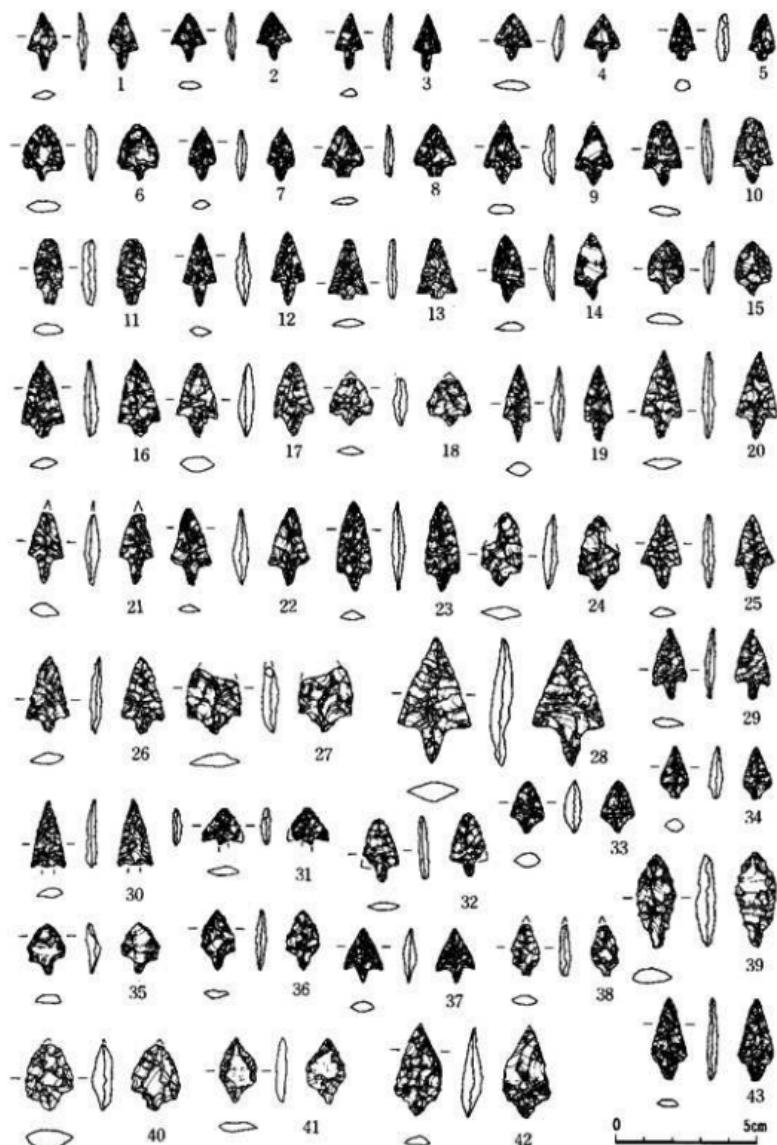
遺構外より10点出土した。個々の計測値は付表に示した。

土器片を長方形に打ち欠いた後、周縁を掠り形を整え、その長軸の両端に切り込みを施したものである。口縁部片を利用したもの(10~13)、胴部片を利用したもの(14~19)がある。

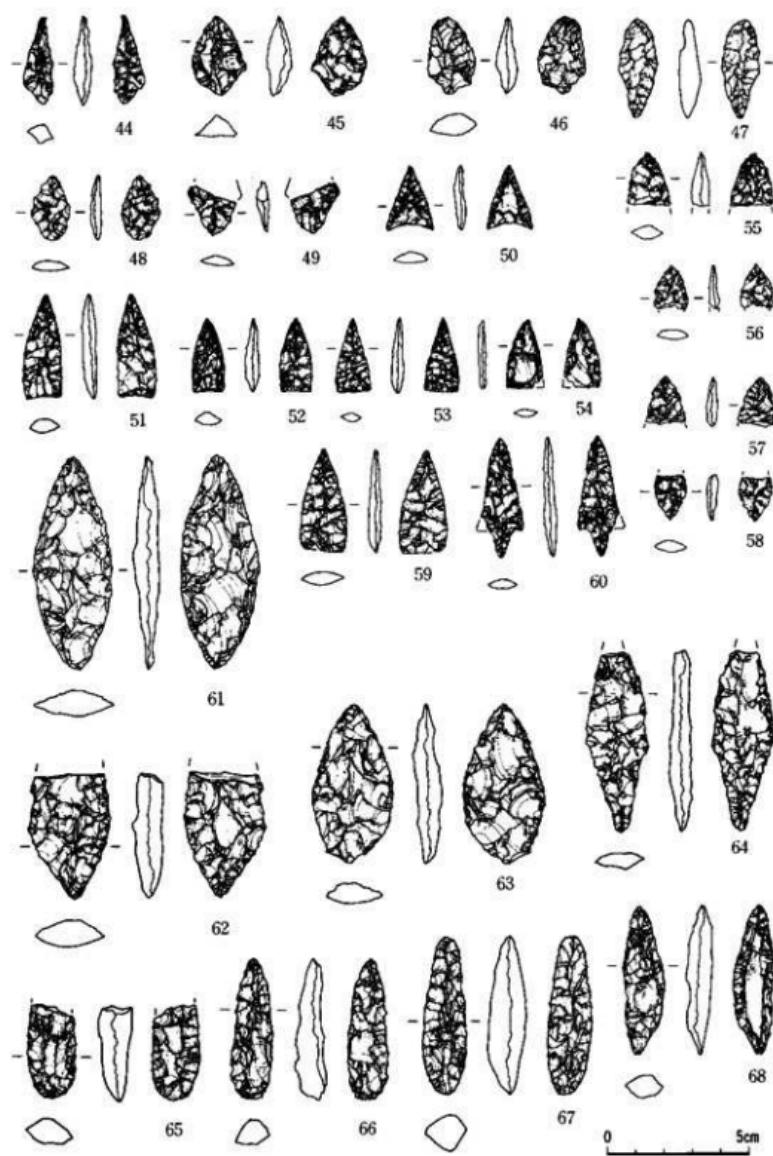
用途は、漁網鍤と思われる。

繩文時代前期初頭の早稻田6類の土器片を利用していると思われる。

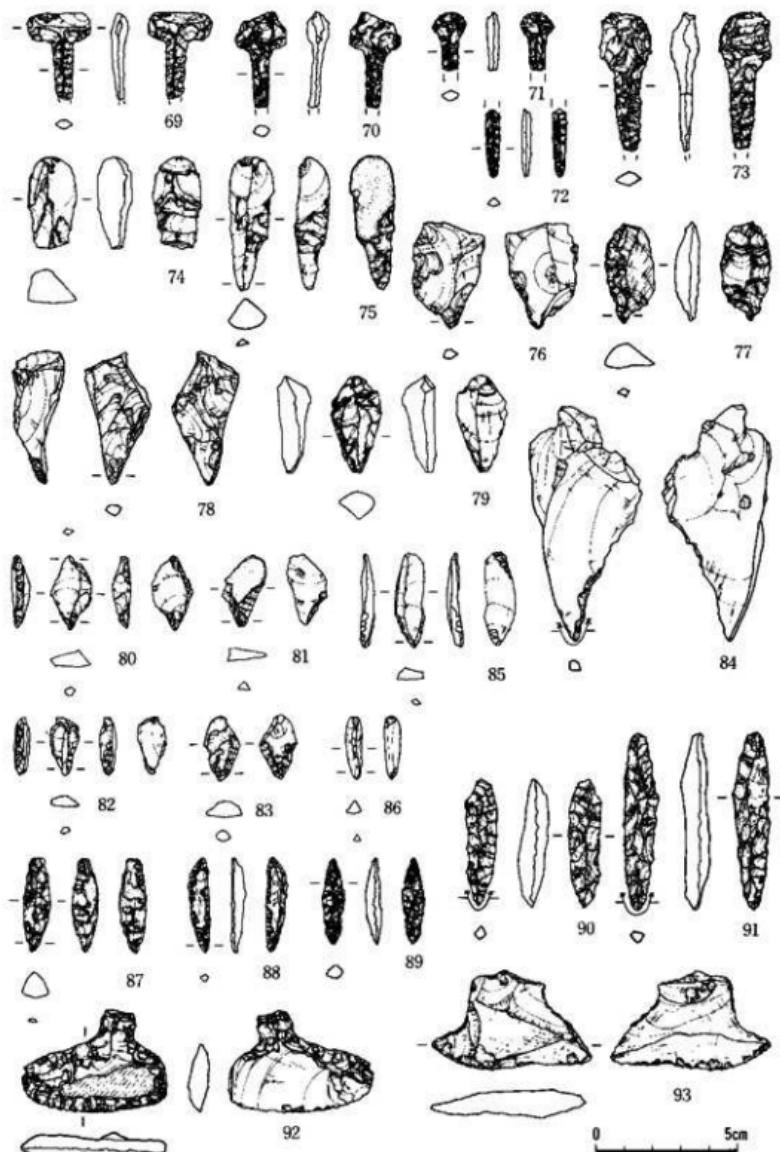
(一条)



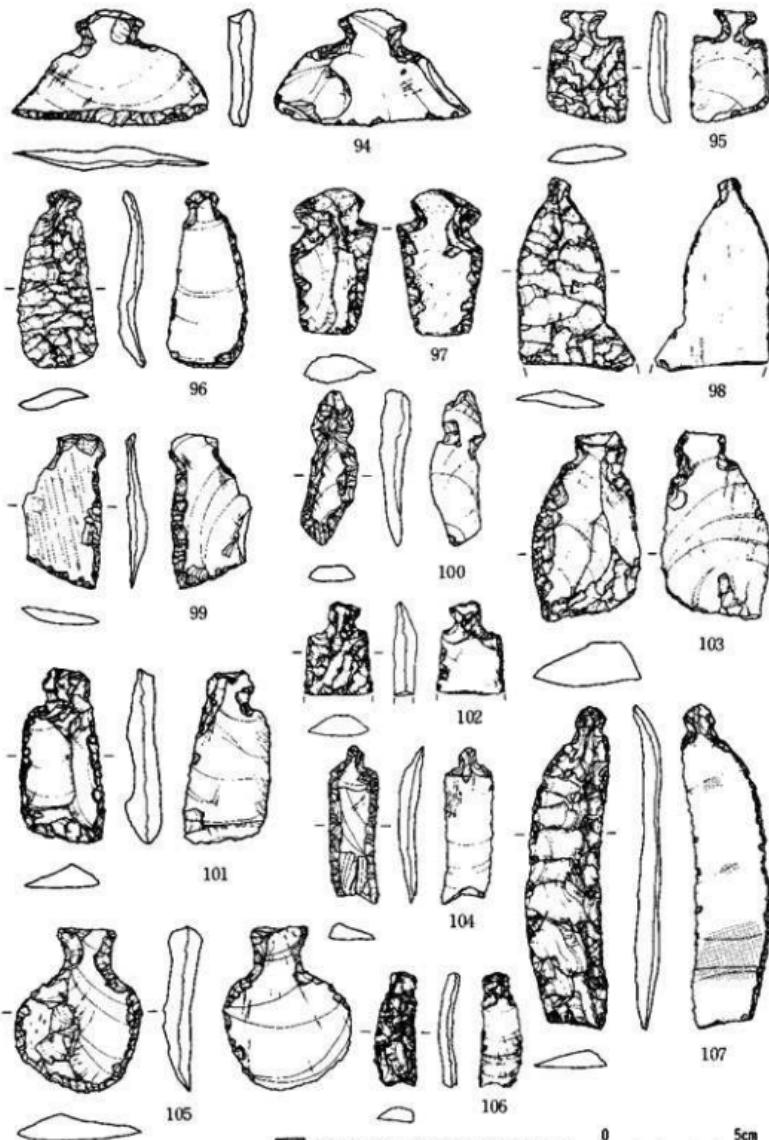
第95図 石器(1)、A類



第96図 石器(2)、A類(59・60・68はN—2区出土)・B類



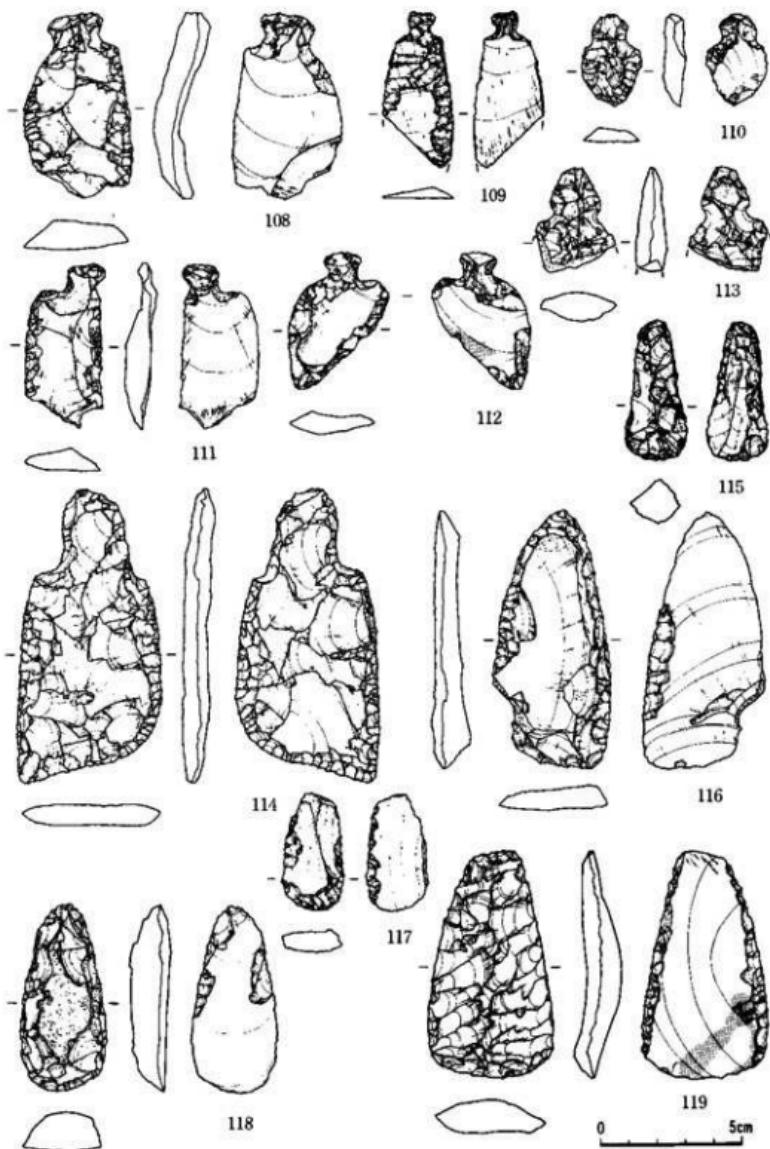
第97図 石器(3)、C類、D類



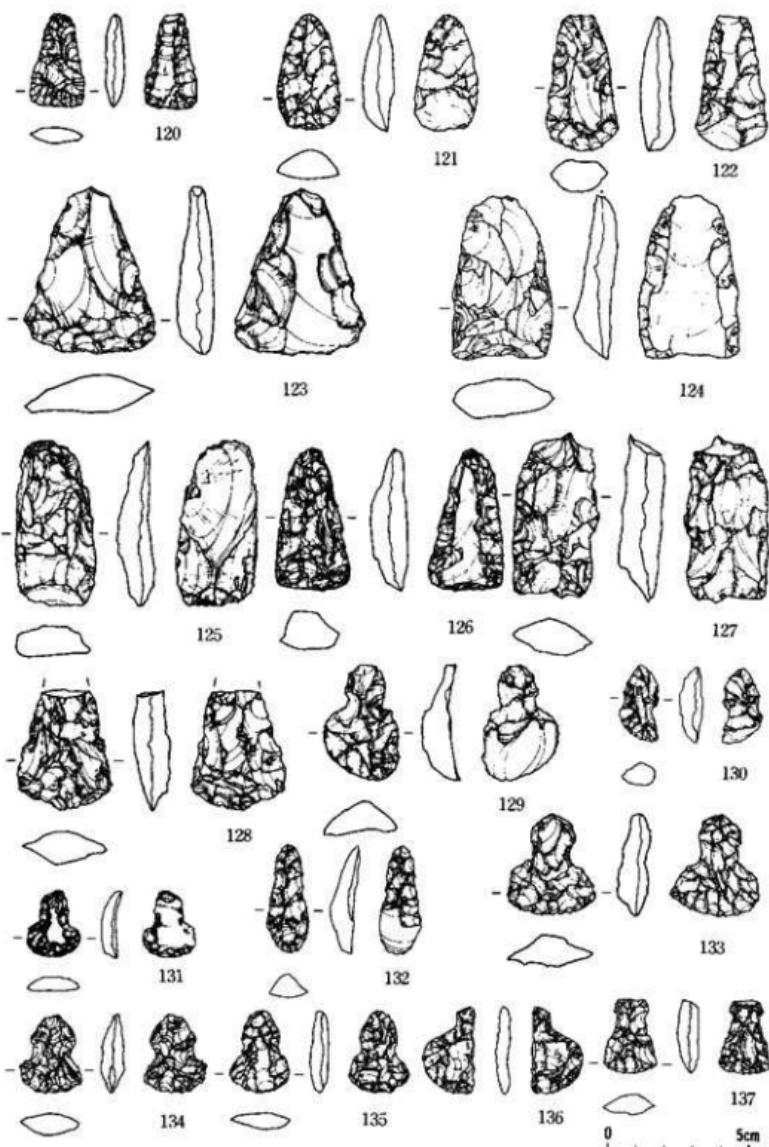
■ 光沢灰 (第丁群石器について以下同じ)

0 5cm

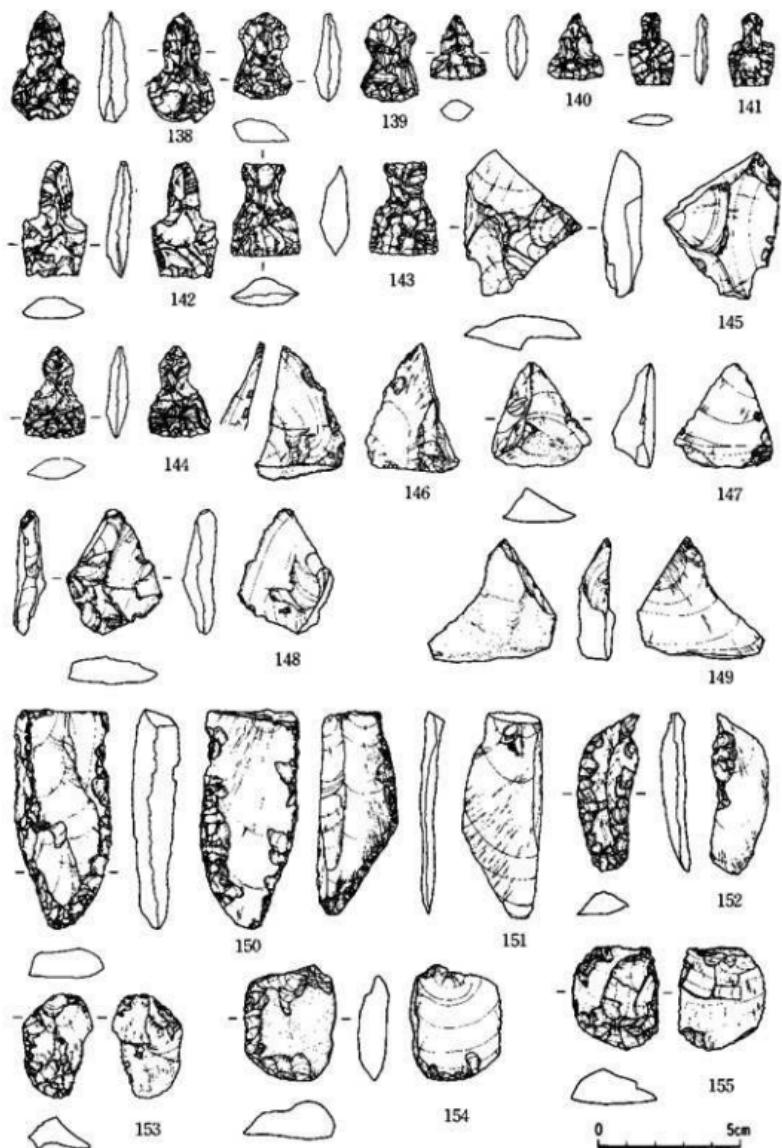
第98図 石器(4)、D類 (102・103はM-2区出土)



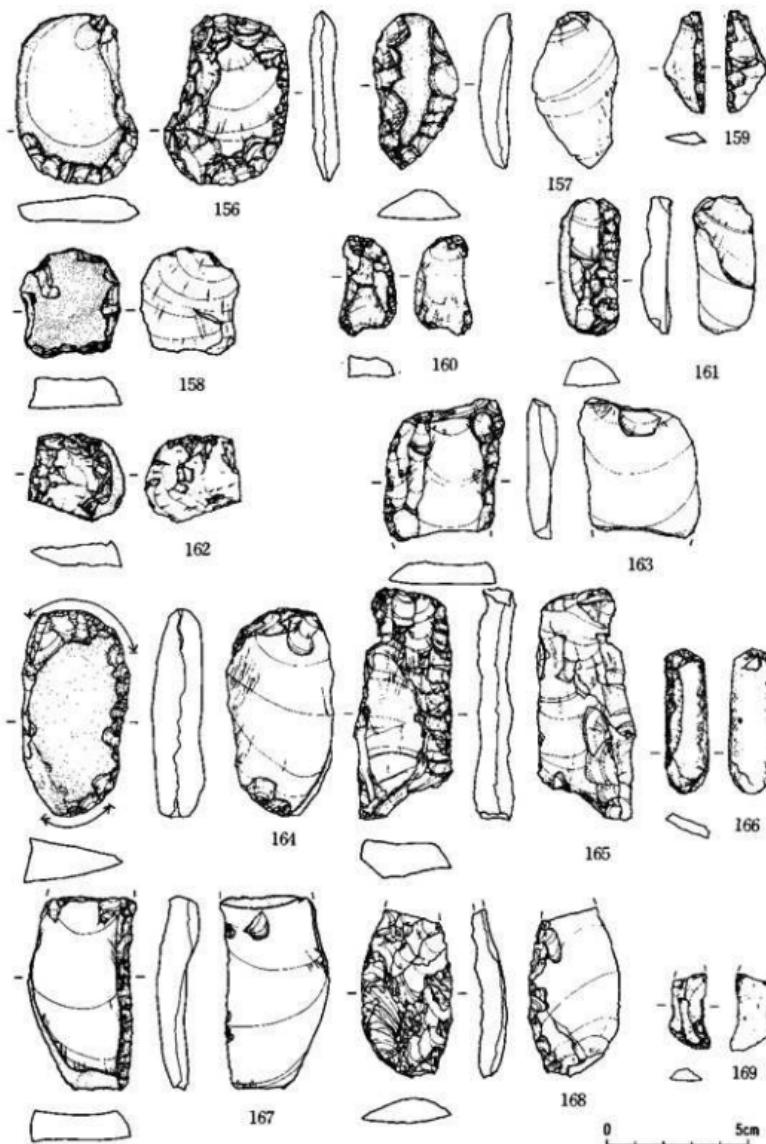
第99図 石器(5)、D類、E類、G類(115)



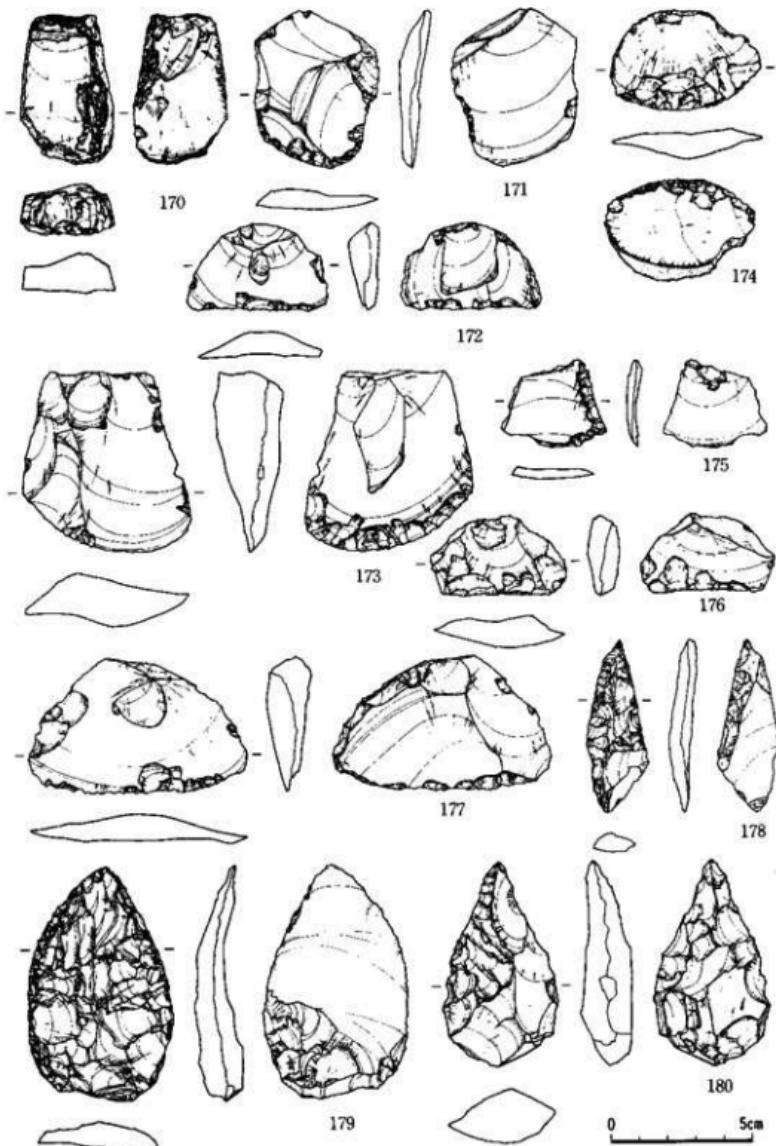
第100図 石器(6)、E類



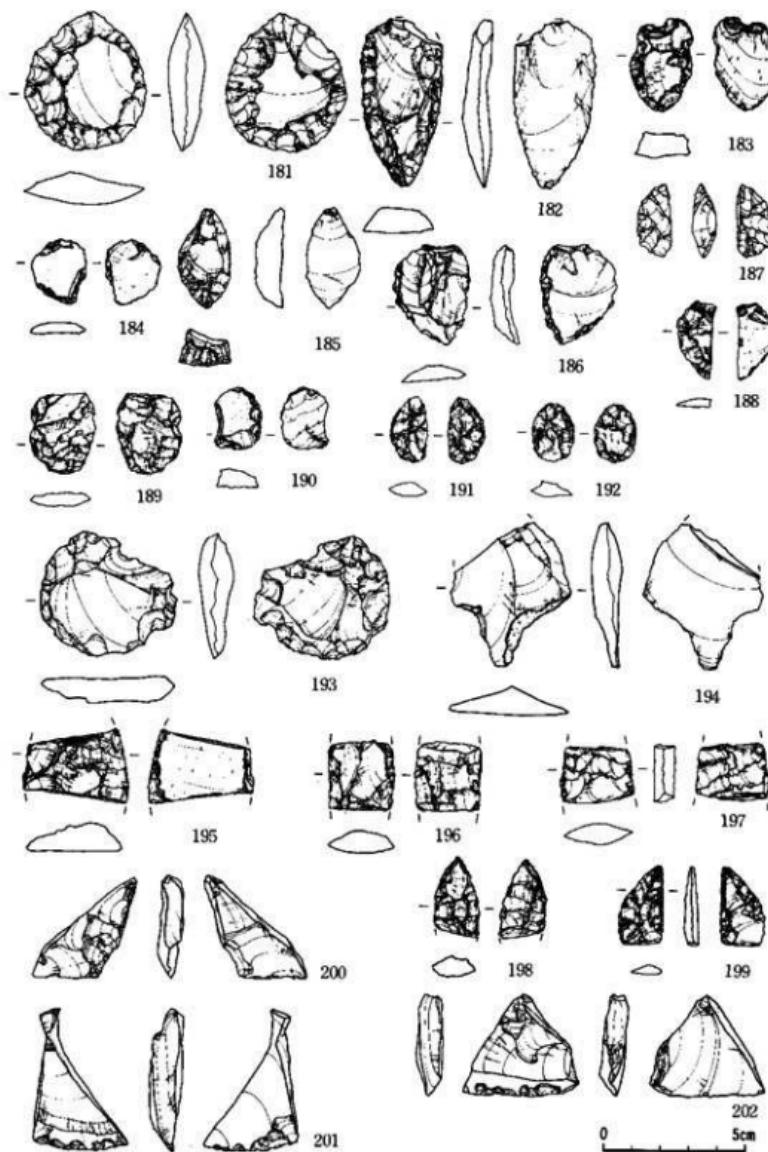
第101図 石器(7)、E類、F類(149はN-2区出土)



第102図 石器(8)、F類



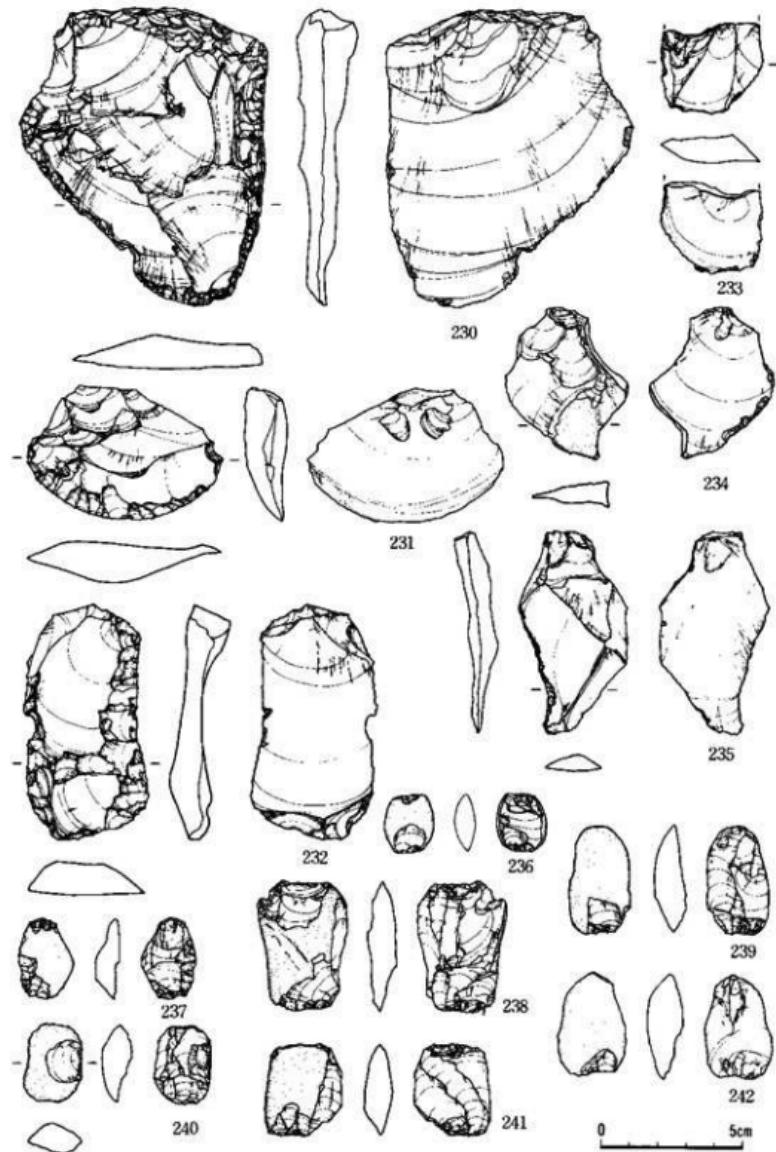
第103図 石器(9)、F類



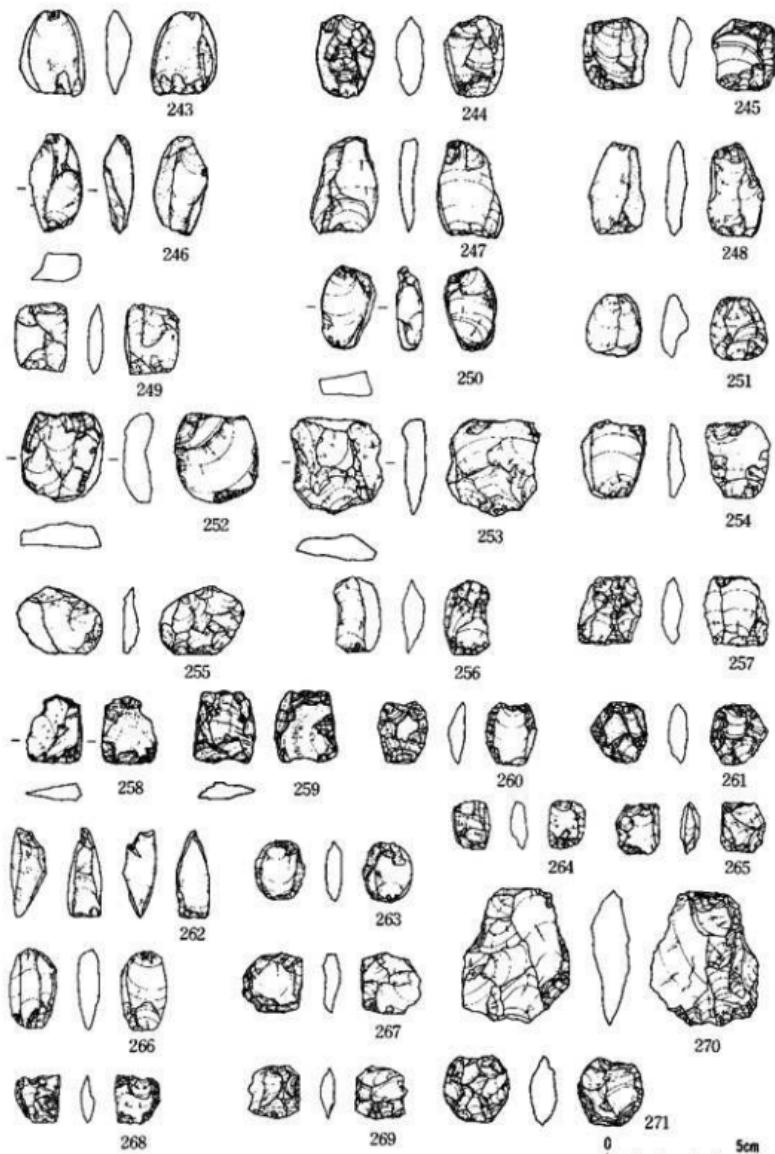
第104図 石器(10)、F類



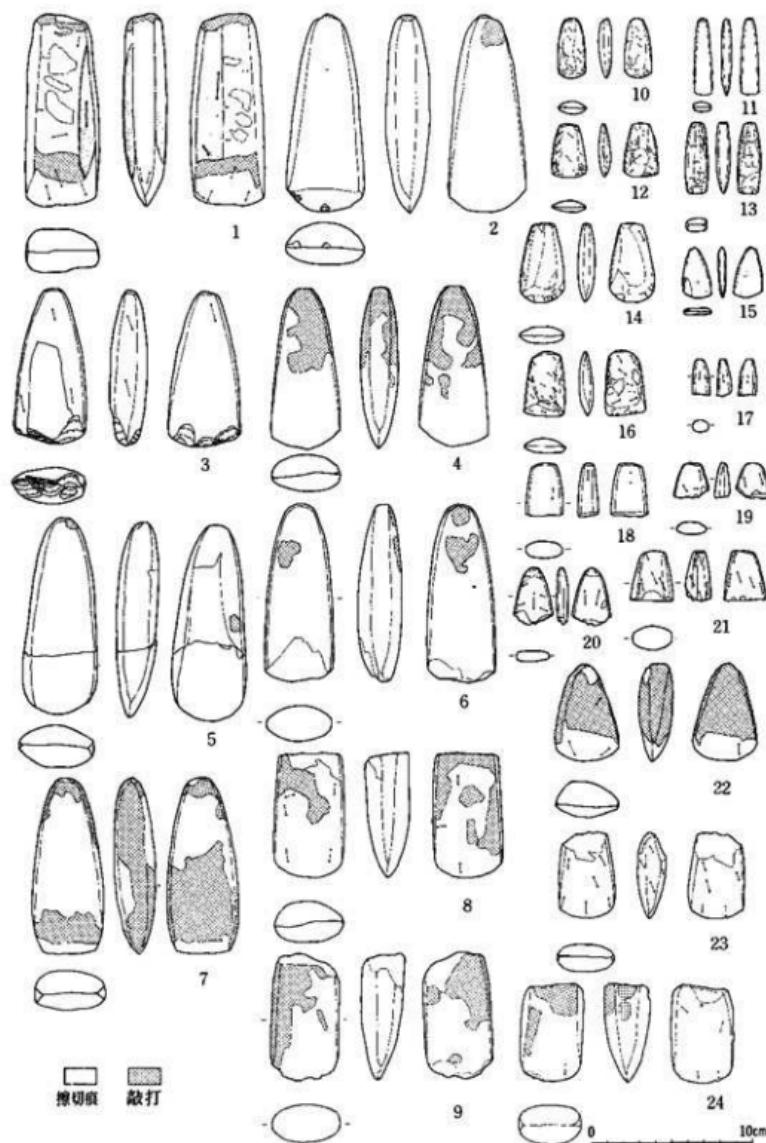
第105図 石器(11)、F類



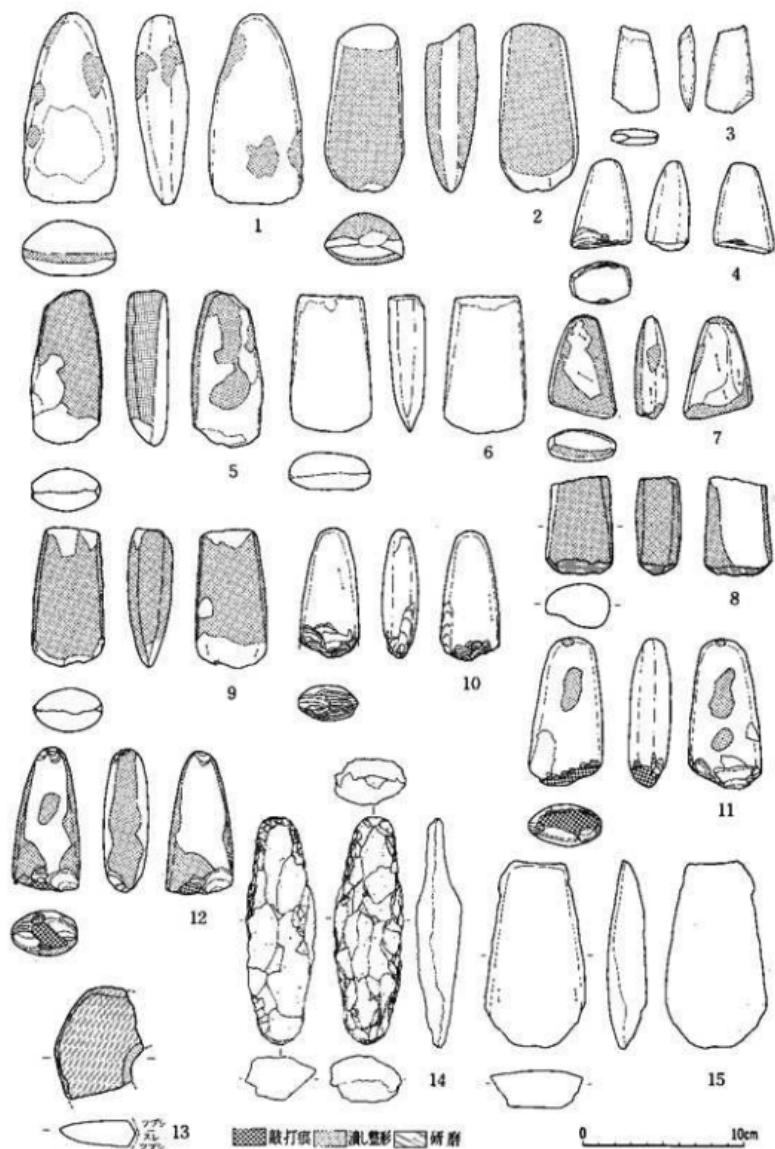
第106図 石器(12)、F類(140~142はIV-2区出土)、H類



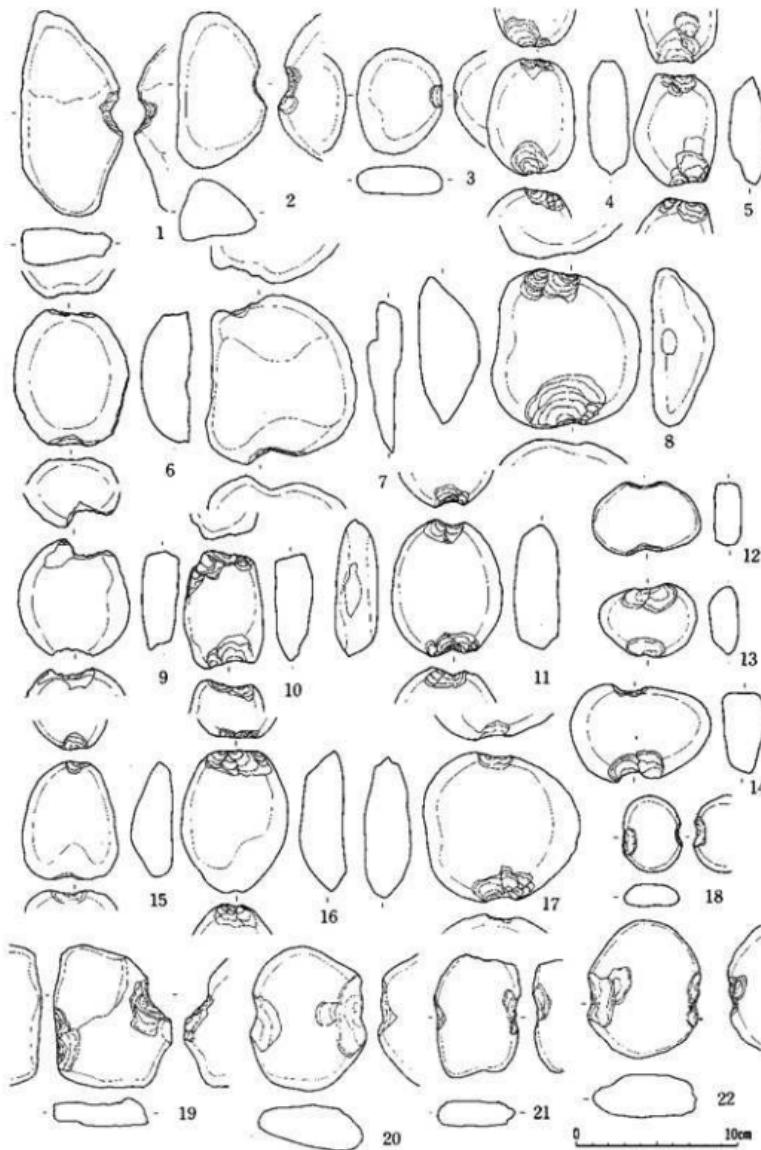
第107図 石器(13)、H類



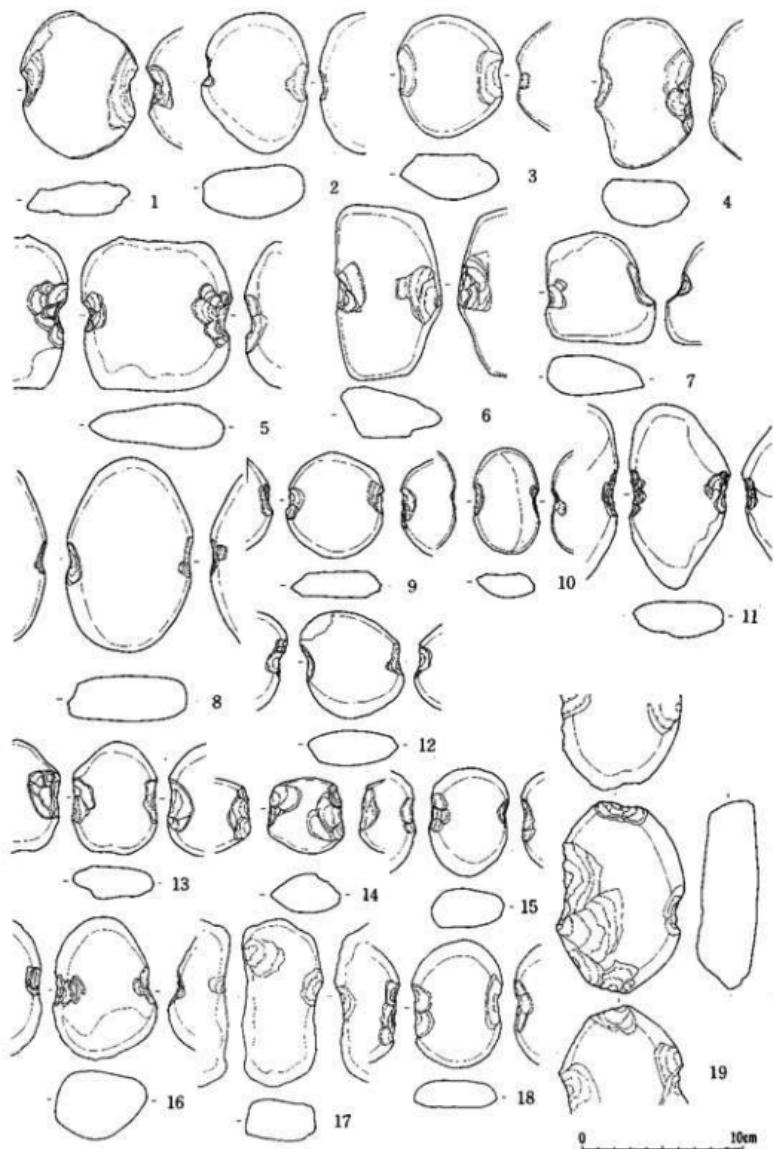
第108図 石器(14)、1類



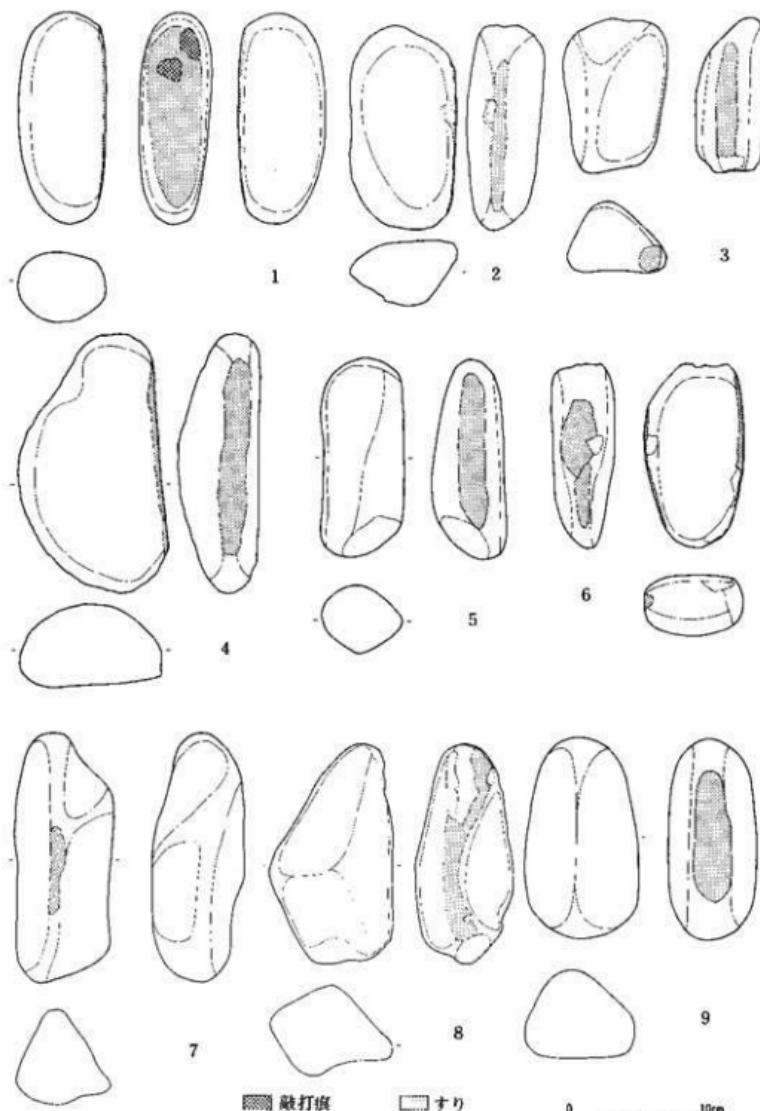
第109図 石器(15)、I類・J類



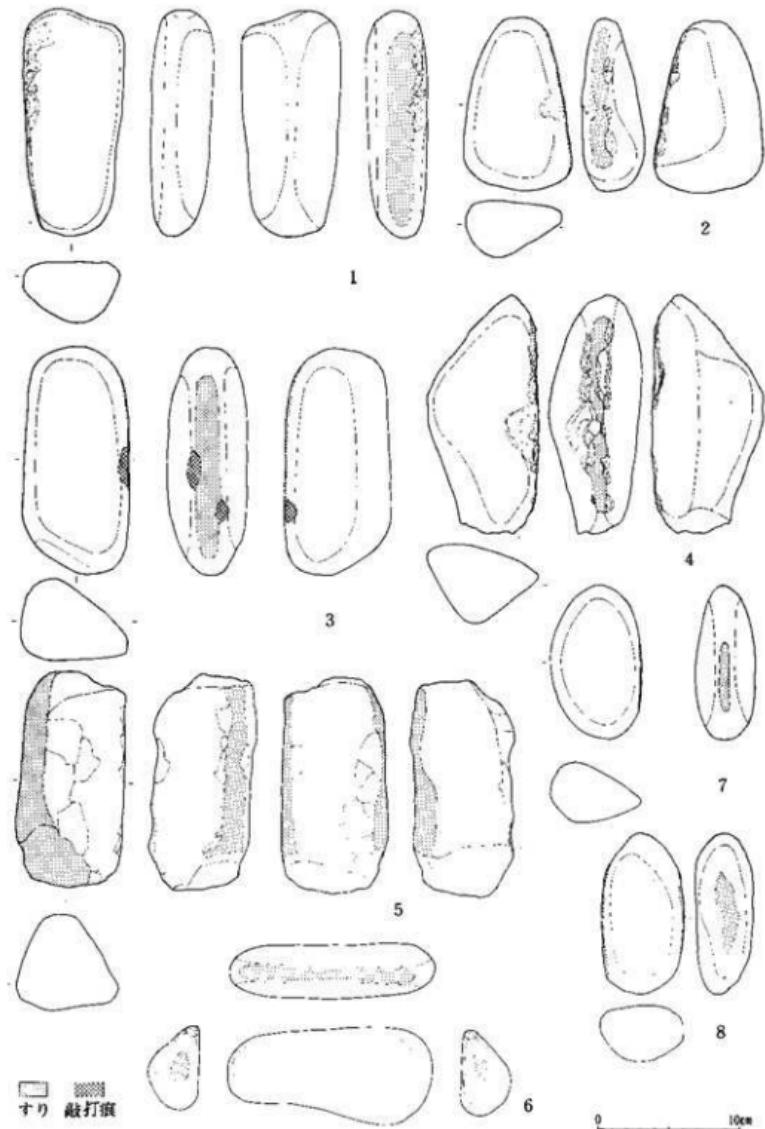
第110圖 石器(16)、K類



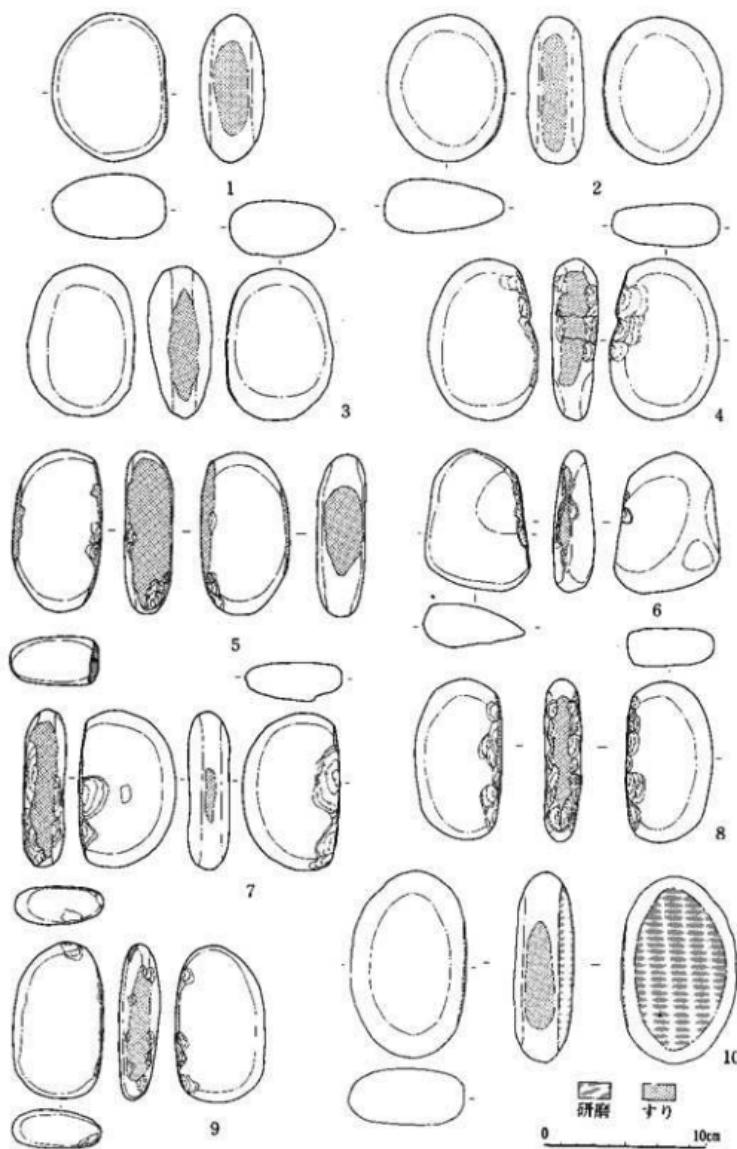
第111図 石器(17)、K類



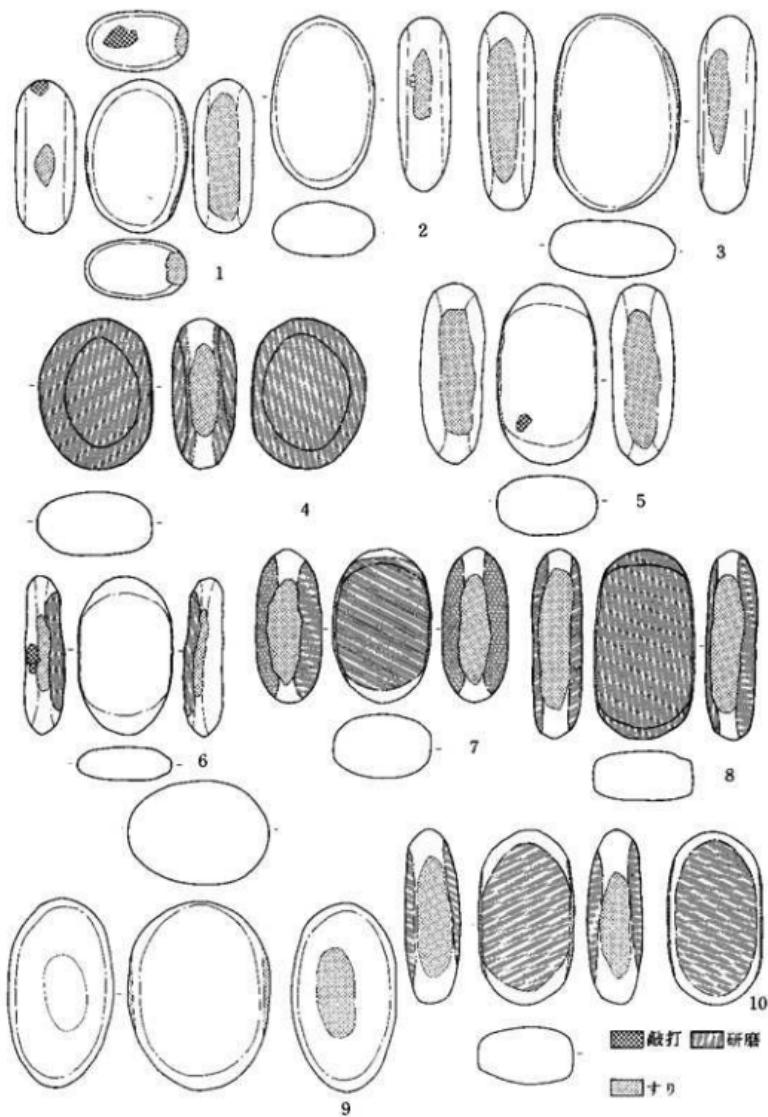
第112図 石器(18)、L—I A類



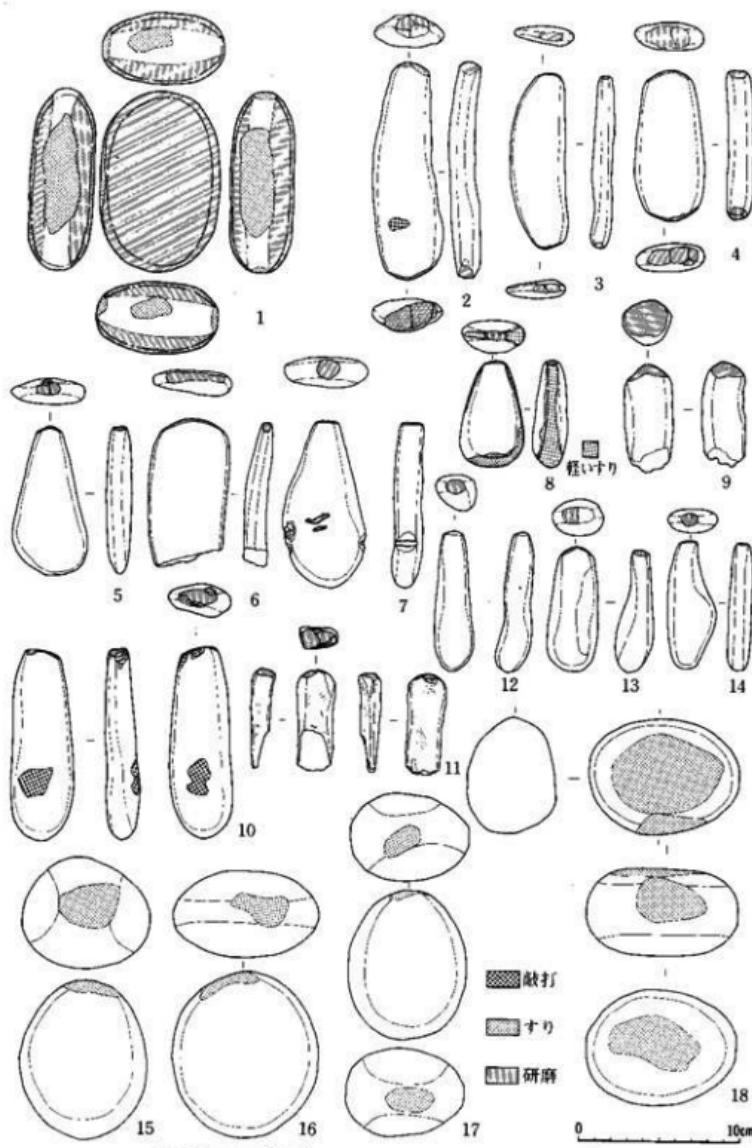
第113図 石器(19)、L—I A類



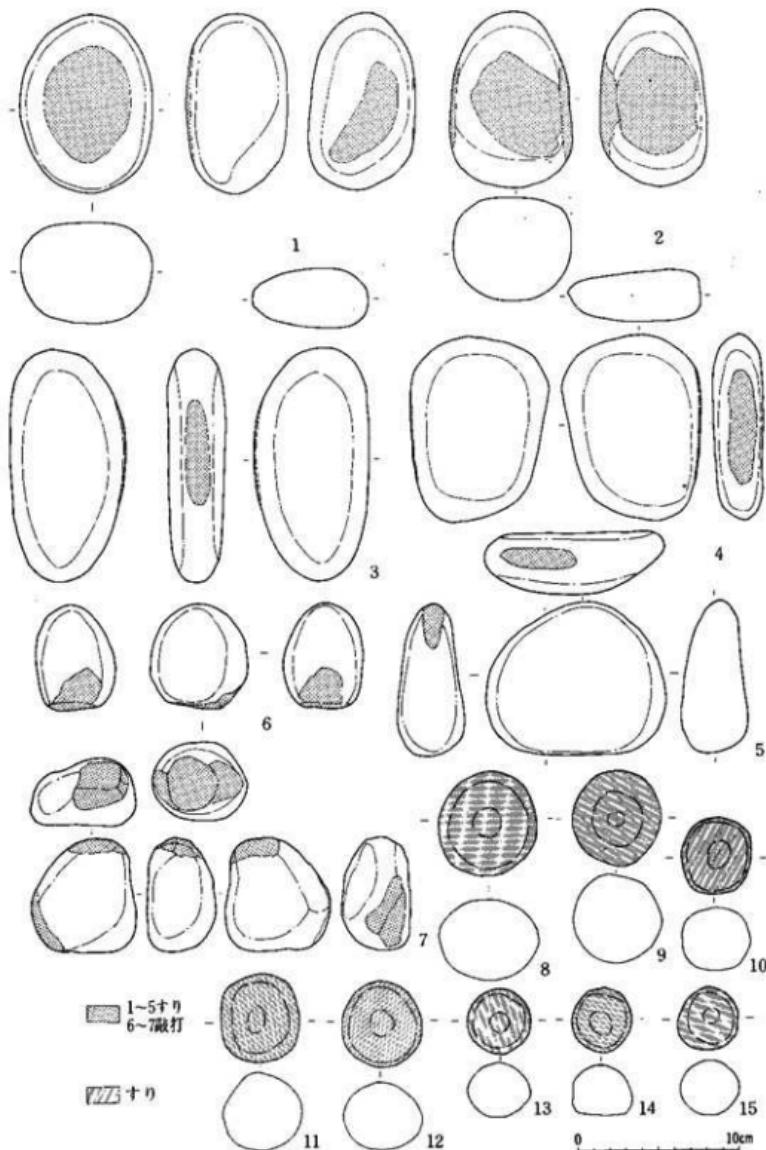
第114図 石器(20)、L—I Ba～Bc類



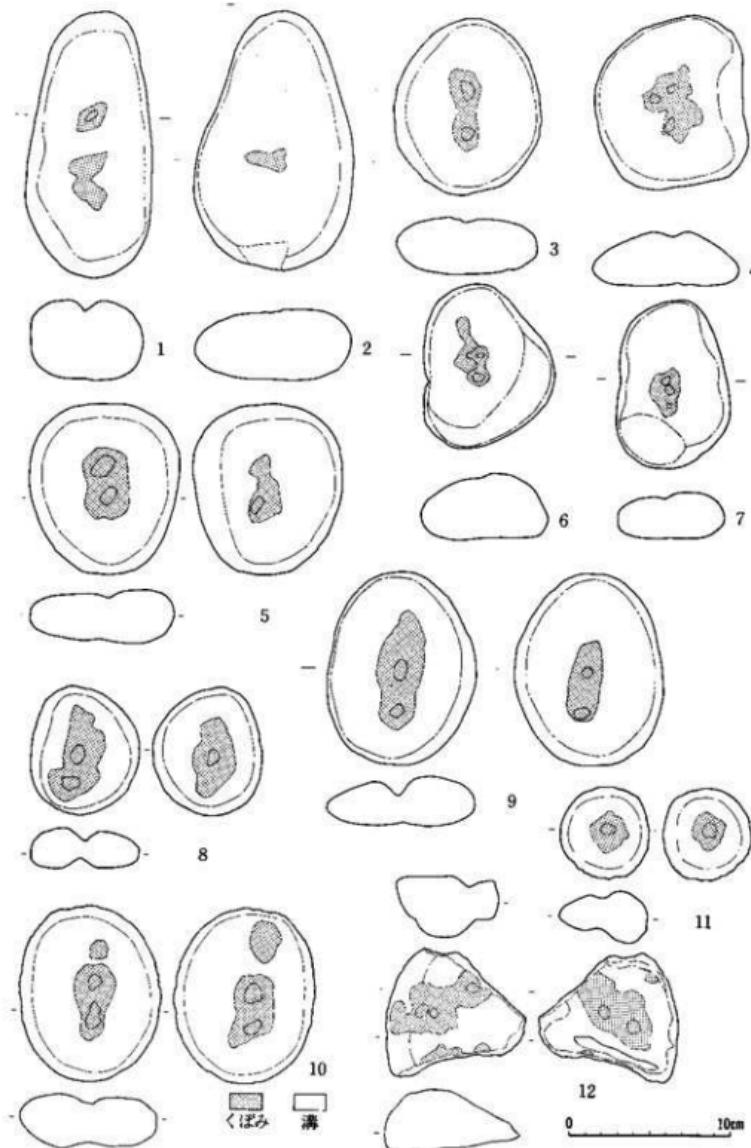
第115図 石器(21)、L—I Bc～Bd類



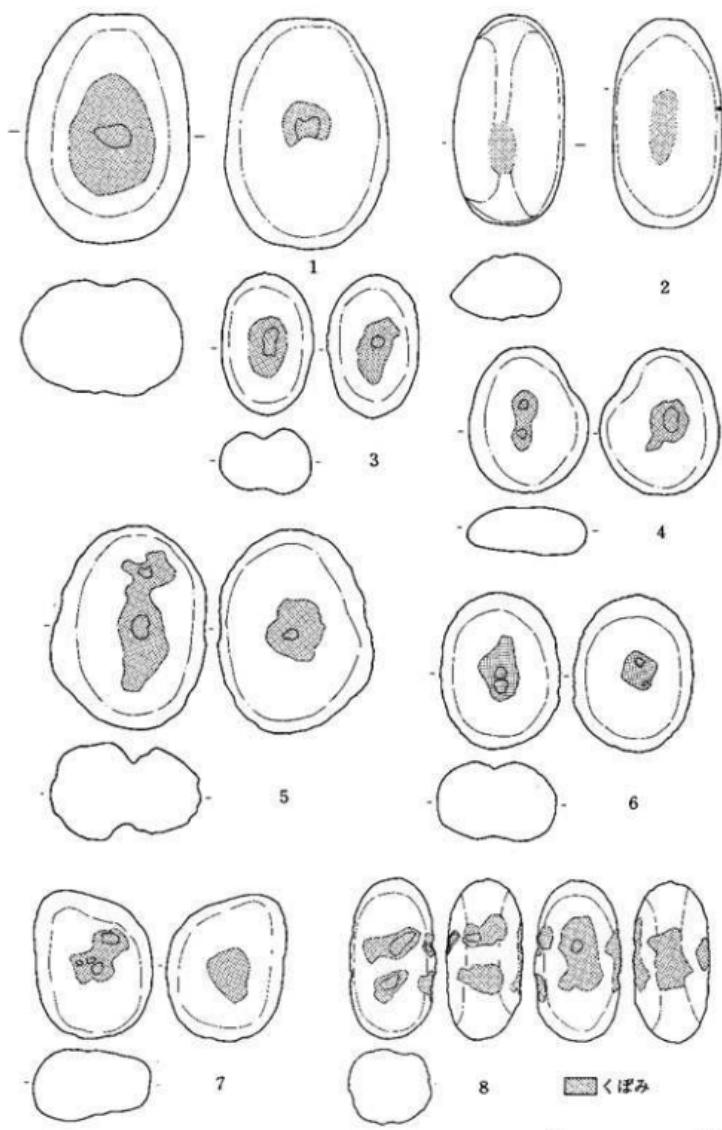
第116図 石器(22)、L-B e・L-I C・L-I E類



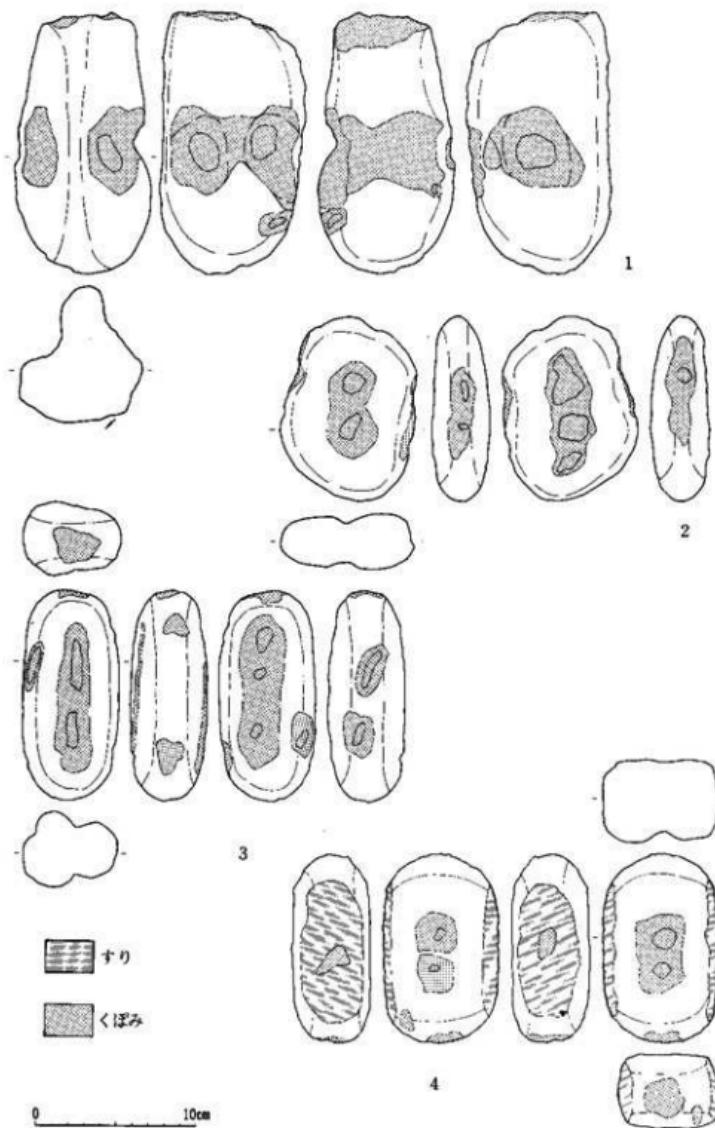
第117図 石器(23)、L-I D・L-I E・L-I F・L-II類



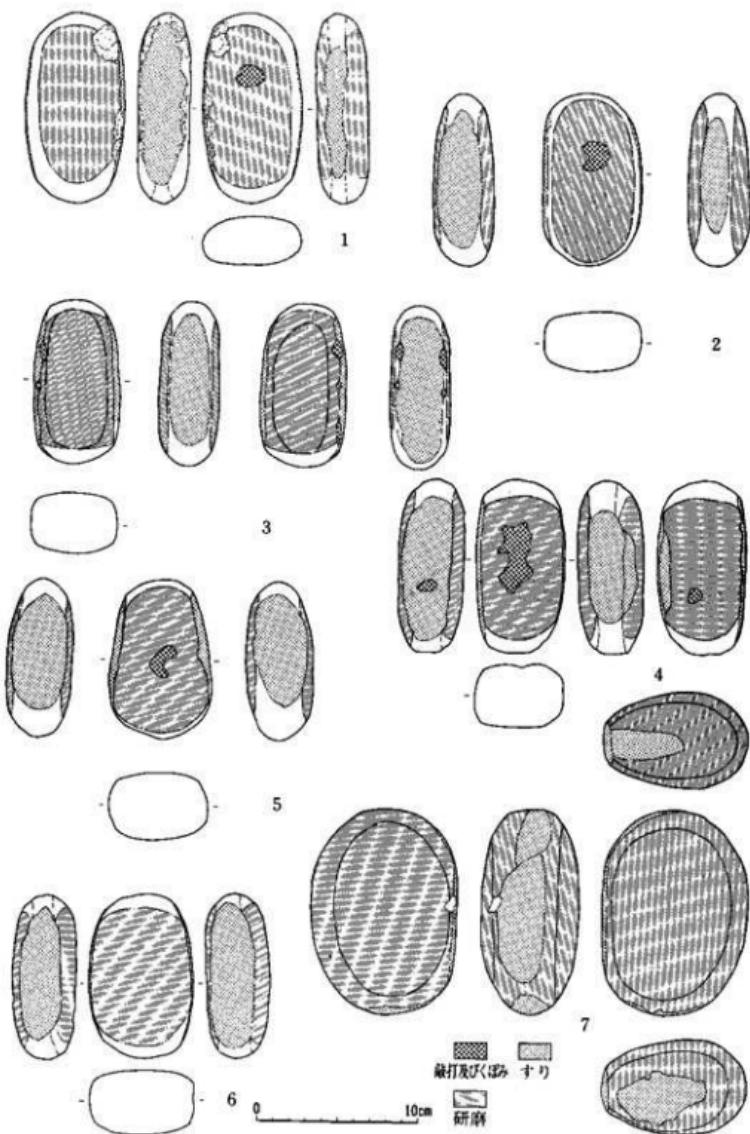
第118図 石器(24)、L—III類



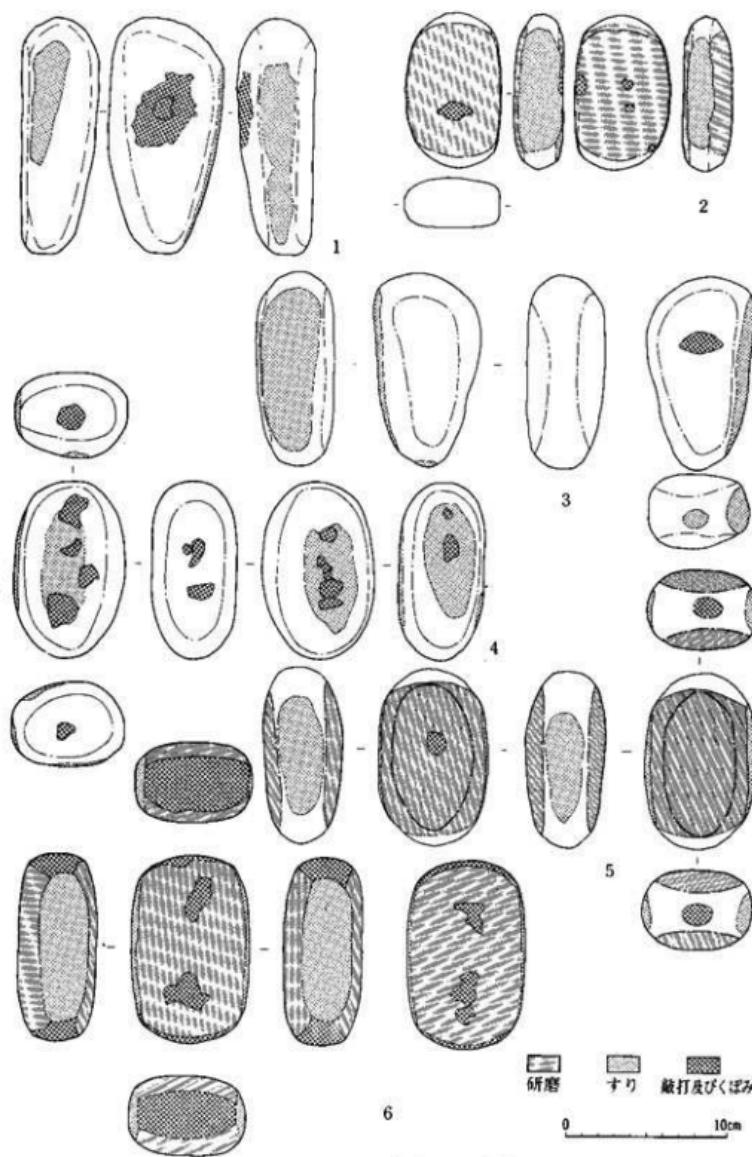
第119図 石器(25)、L-I~III類



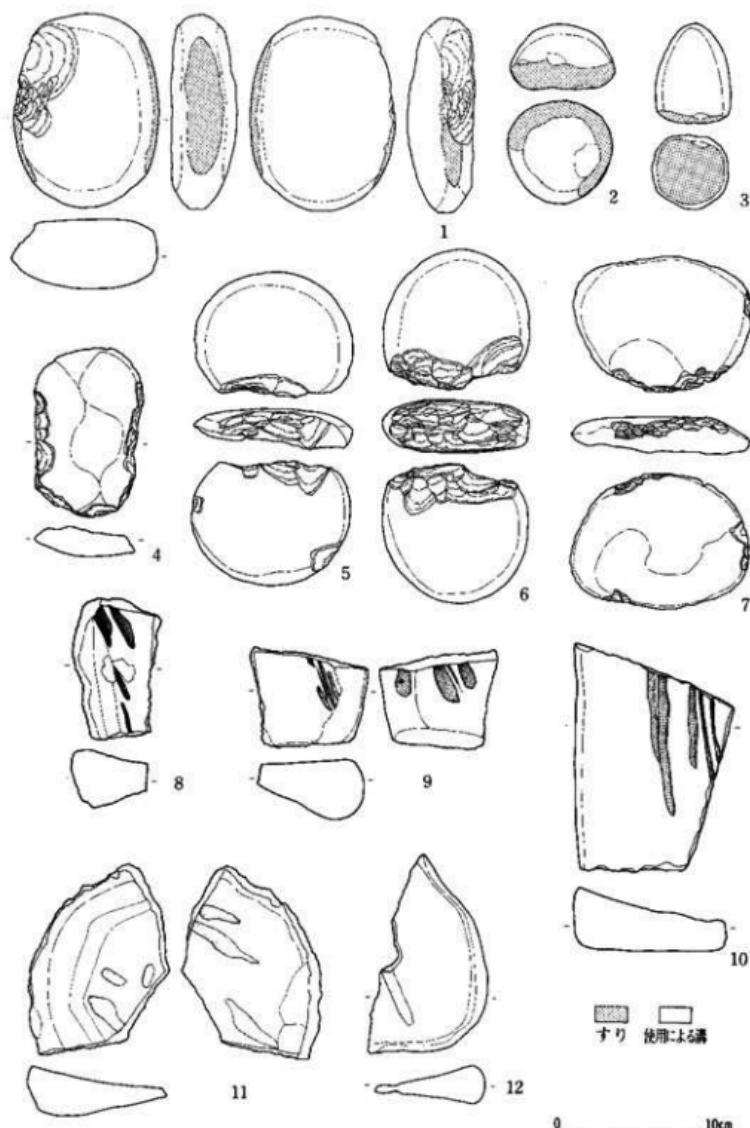
第120図 石器(26)、L—II類



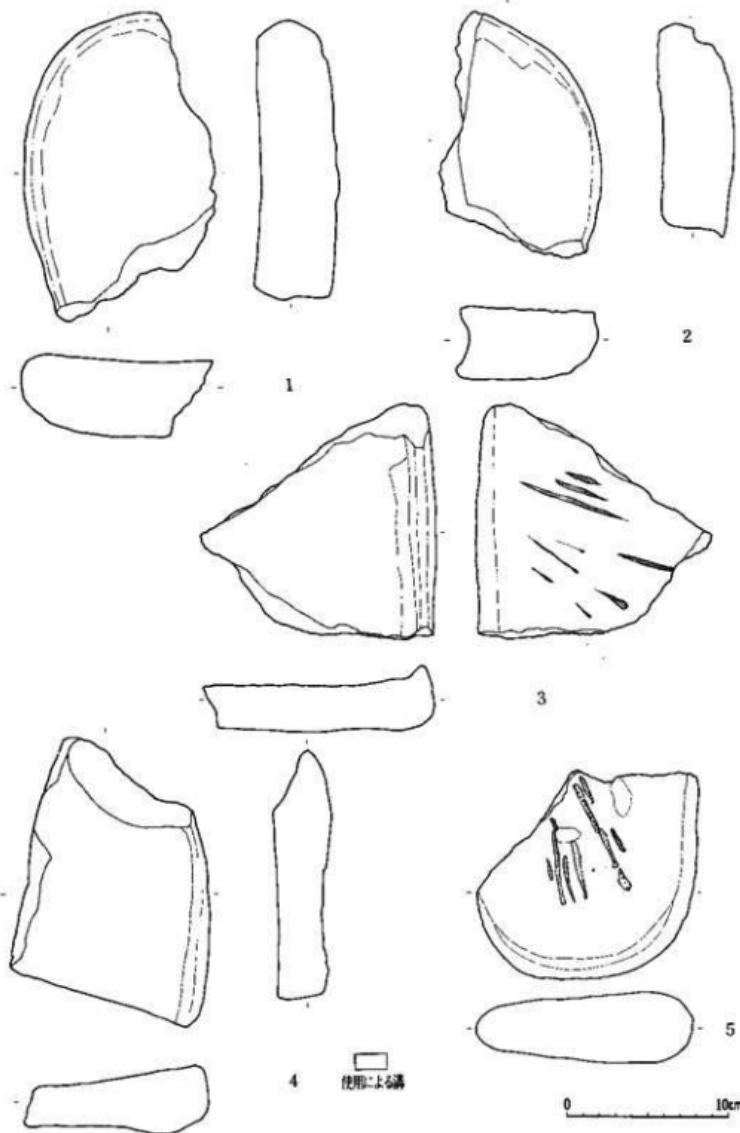
第121図 石器(27)、L-17類



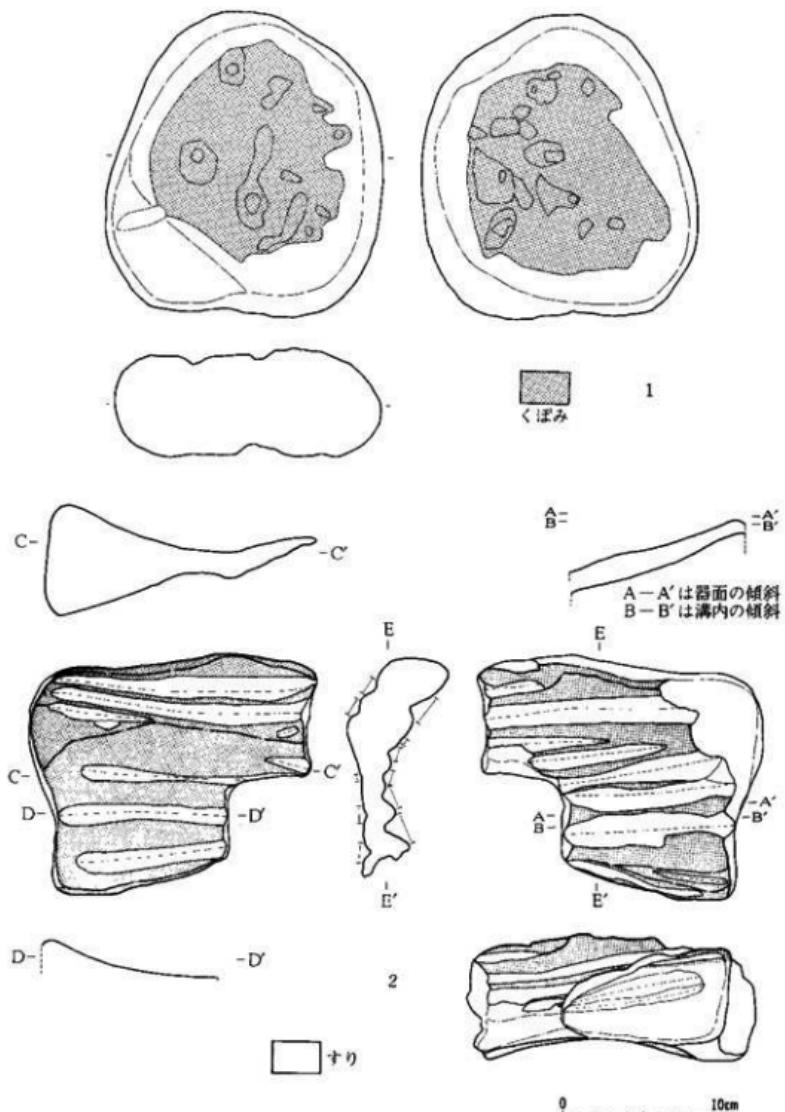
第122図 石器(28)、L—I—IV類



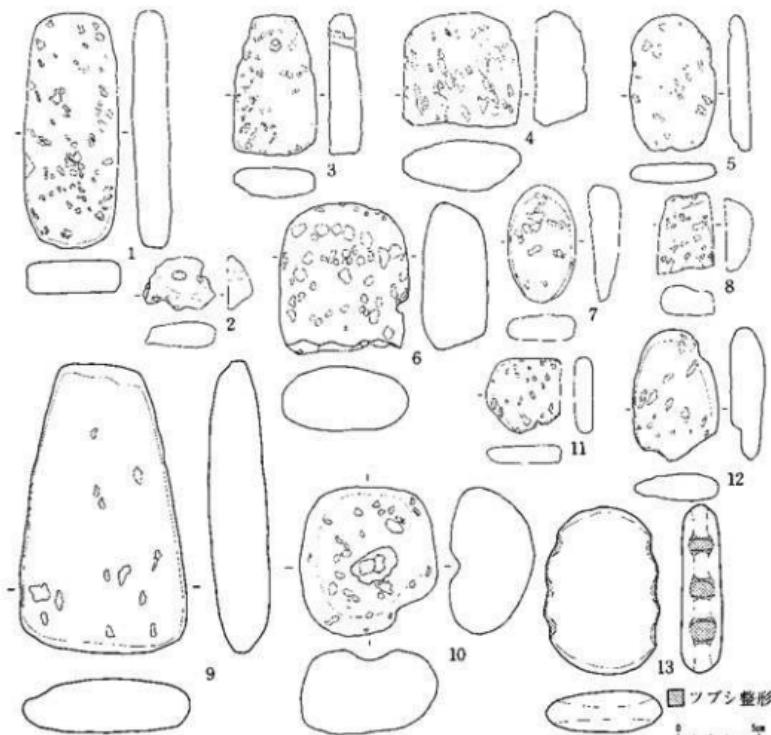
第123図 石器(29)、L-V類・M類



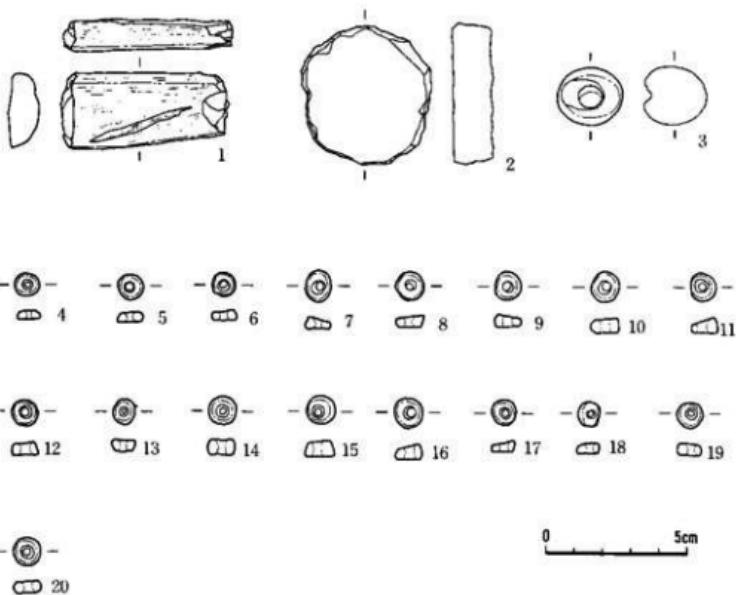
第124図 石器(30)、M類



第125図 石器(31)、M類



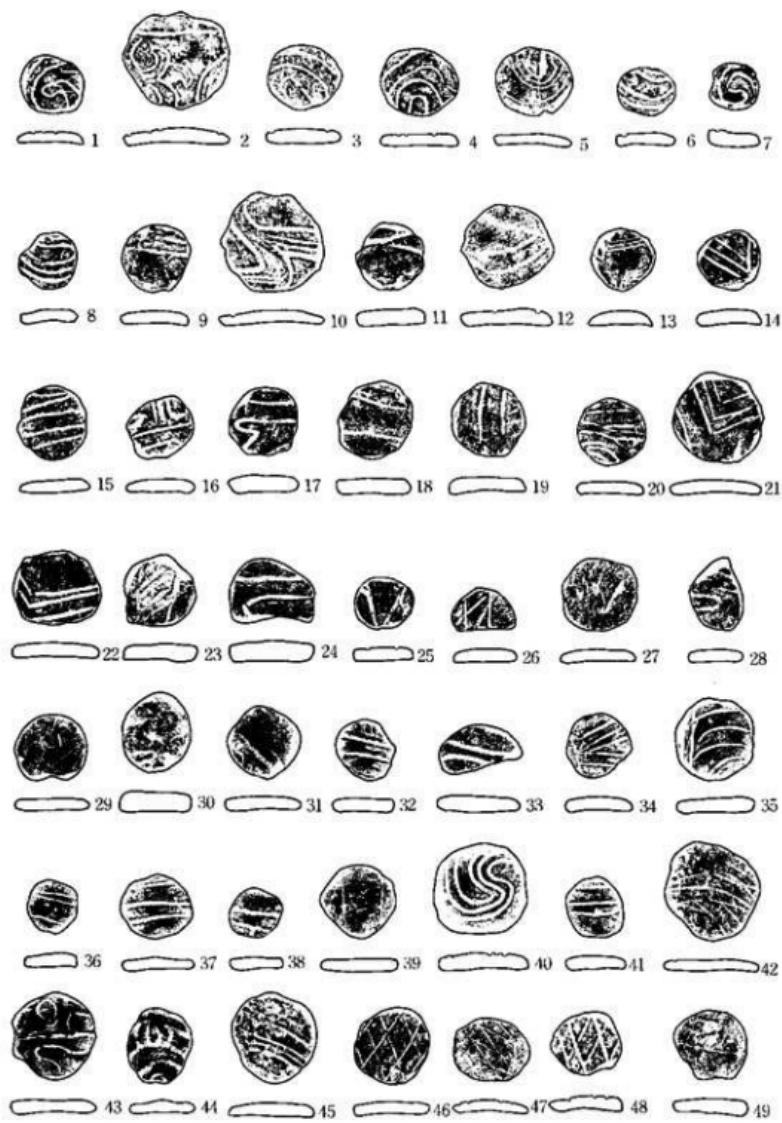
第126図 石製品実測図 (1)



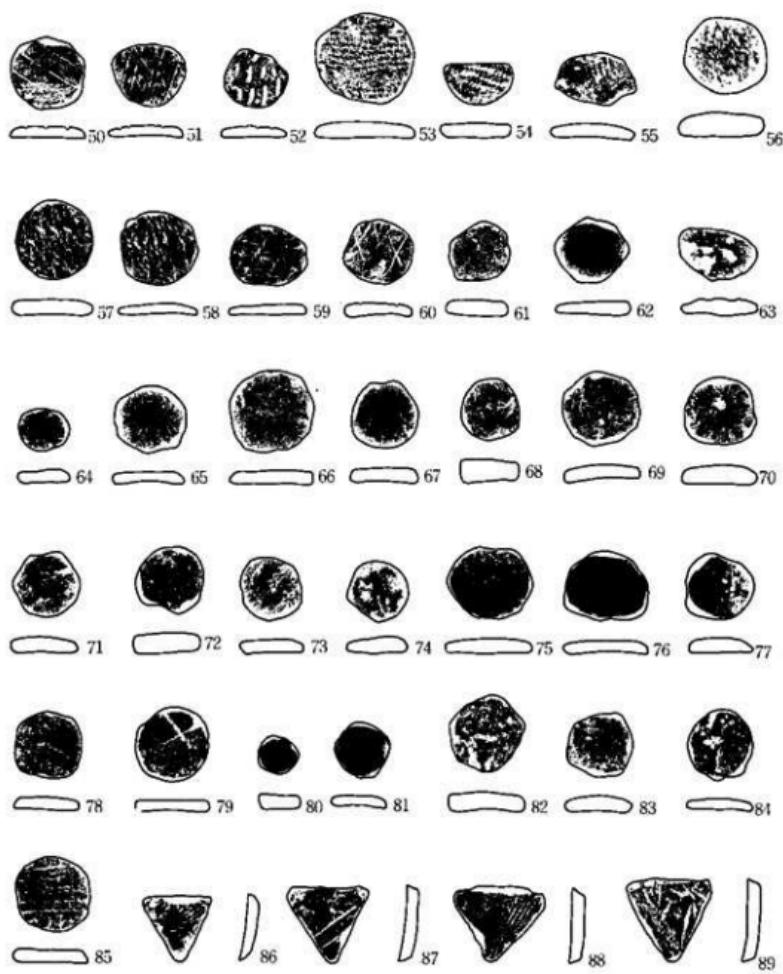
第127図 石製品実測図（2）

第7表 4号土壤出土有孔石製品（玉）計測表

整理番号	採集No.	外径mm		穿孔径mm		厚さmm	重量g
		長径×短径	外	内			
1	127回-4	9 × 7.5	4	2.5	3	0.20	
2	5	8.5 × 8.5	3.5	3	3.5	0.25	
3	6	8 × 8	4	2.5	3.5	0.20	
4	7	11 × 9	5	2.5	4	0.41	
5	8	10 × 10	3.5	2.5	4	0.35	
6	9	10 × 9	4	3	4	0.32	
7	10	10.5 × 10	5	3.5	5	0.47	
8	11	10 × 9	5	2.5	5.5	0.42	
9	12	9 × 7.5	4.5	3	4.5	0.32	
10	13	8.5 × 7.5	3	1.5	4	0.25	
11	14	10 × 9.5	4.5	2.5	5	0.55	
12	15	10 × 10	4.5	2.5	6	0.55	
13	16	10.5 × 9.5	4.5	2.5	5	0.46	
14	17	8.5 × 8	4	2.5	3.5	0.25	
15	18	8.5 × 7.5	3	2	4	0.28	
16	19	9 × 9	4	2.5	4	0.32	
17	20	9.5 × 9.5	4.5	3	4	0.38	

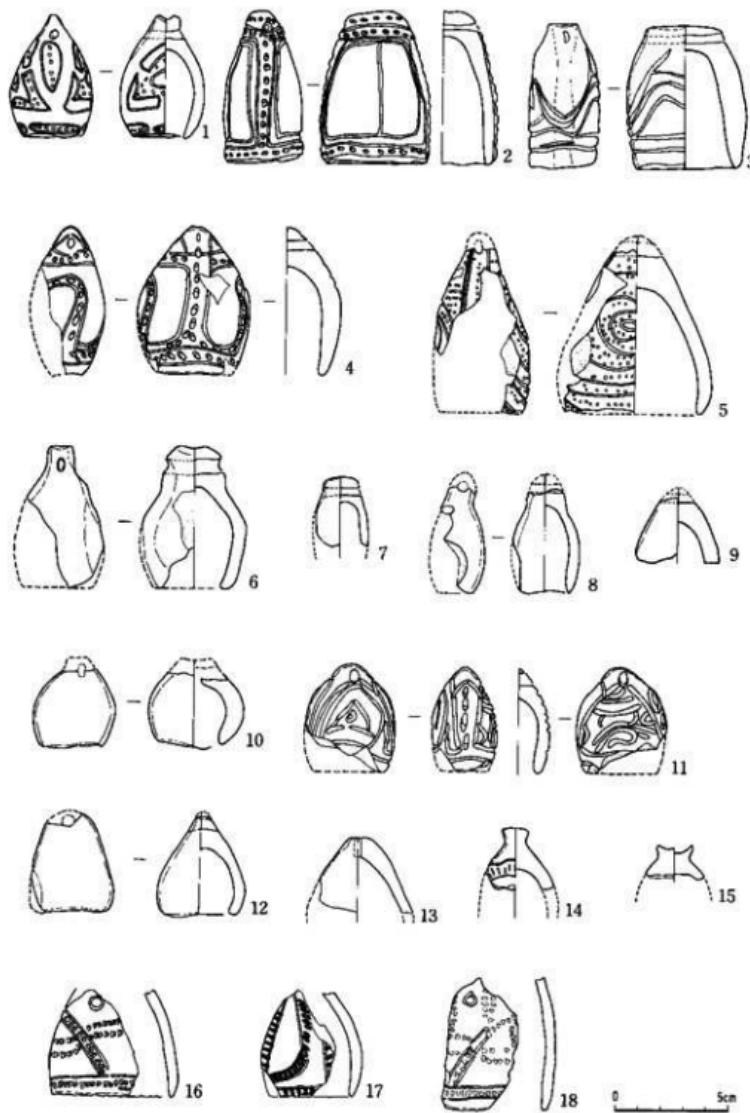


第128図 土製品実測図（1）

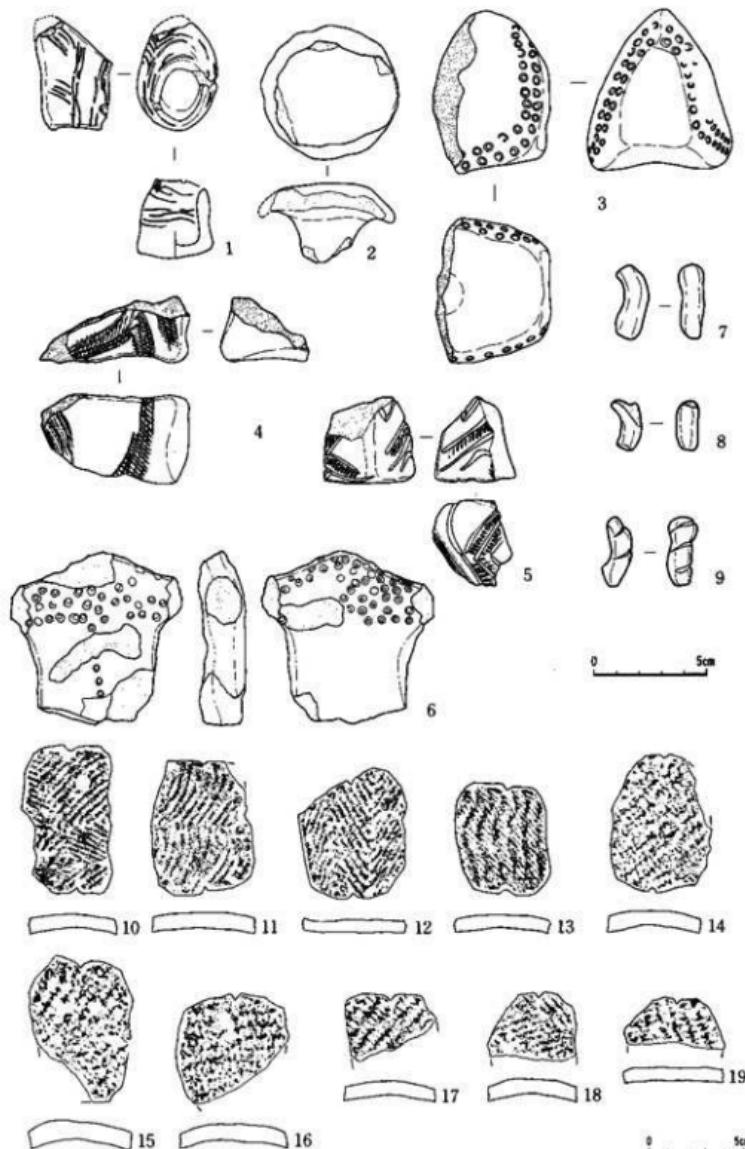


0 5mm

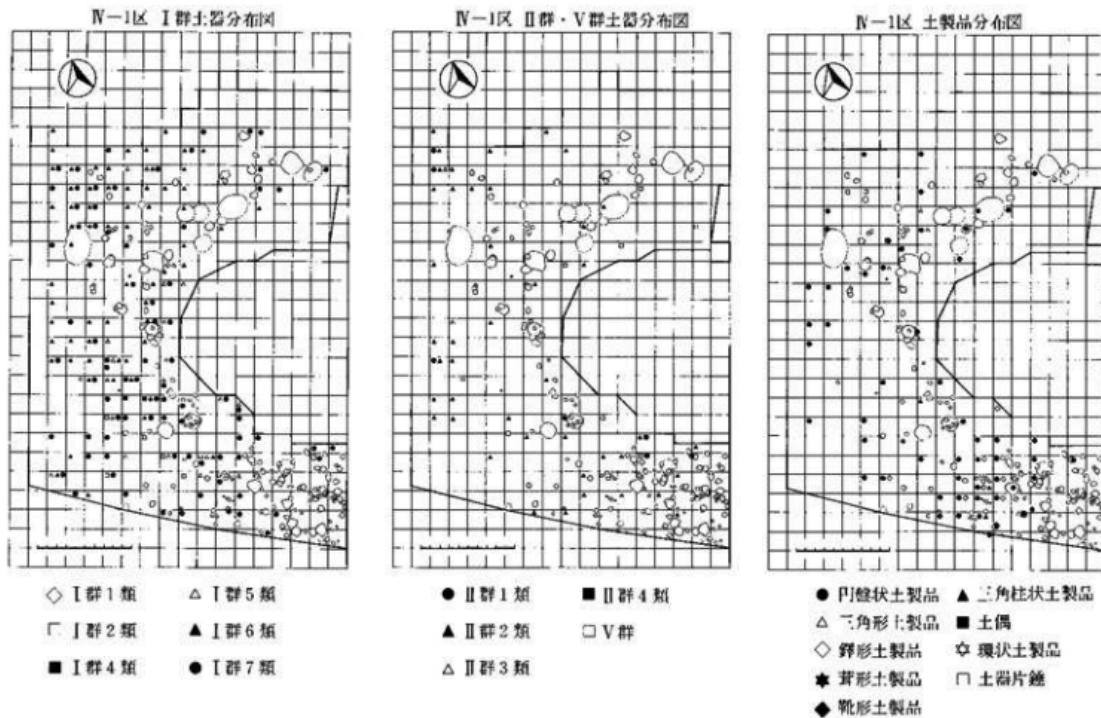
第129図 土製品実測図 (2)



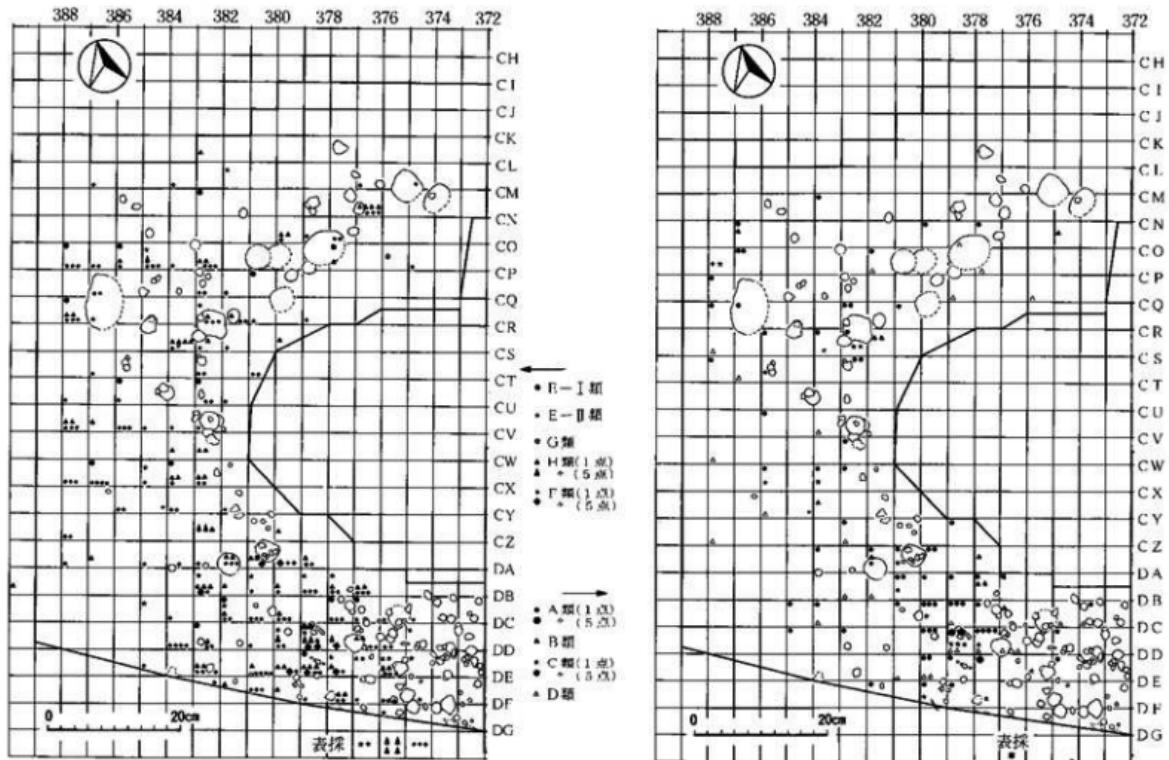
第130図 土製品実測図（3）



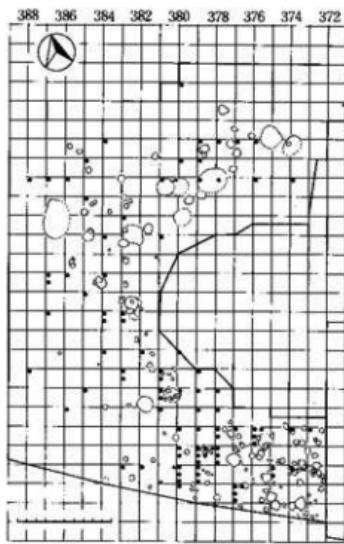
第131図 土製品実測図 (4)



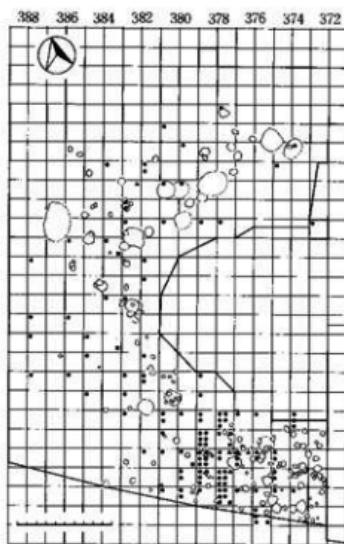
第132図 第I群・II群・V群土器及び土製品の分布図



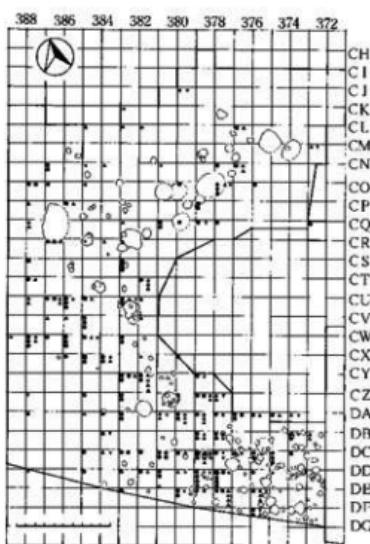
第133図 造構外出土石器(A類～H類)分布図



● I類
▲ J類

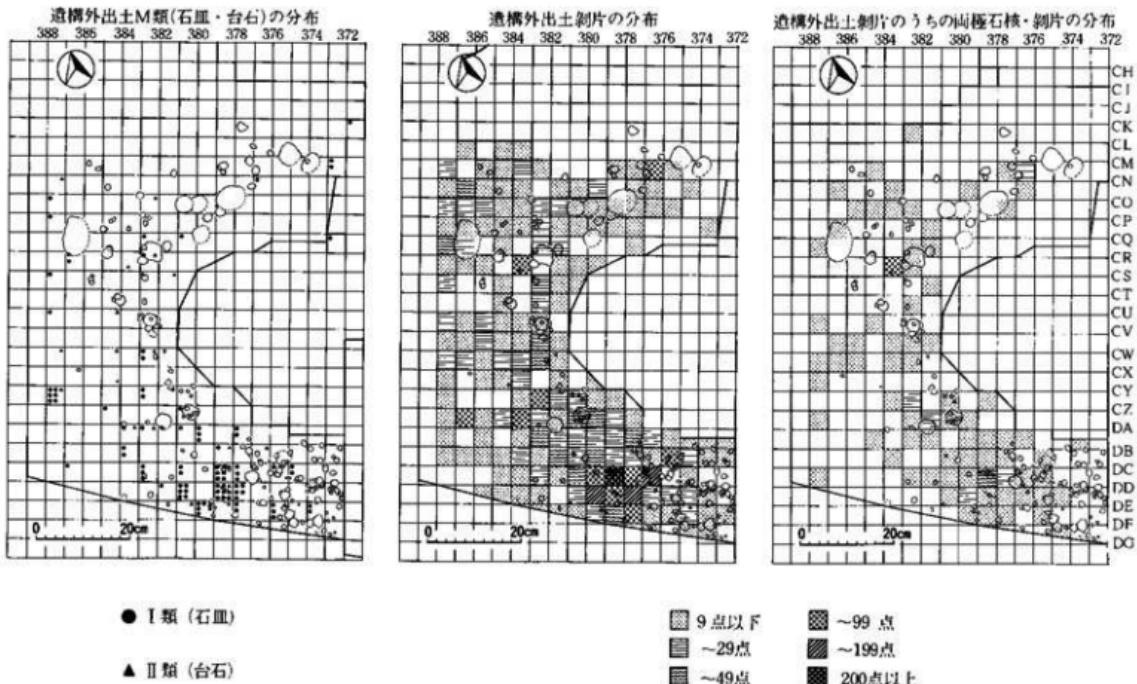


▲ K-I類
● K-II類
■ K-III類



● 5点 L-I類 ▲ 5点 L-II類
● 1点 L-I類 ▲ 1点 L-II類
■ 1点 L-II類 ★ 1点 L-IV類
▼ 1点 L-V、VI類

第134図 造構外出土石器(I類～L類)分布図



第135図 遺構外出土石器(M類)及び剝片分布図

第2節 V区

1. 検出構造

(1) 幕状ピット

V—4区で11基検出した。各溝状ピット（以下ピットという）の位置及び計測値は一覧表にまとめた。（第8表）

（平面形状）

溝状を呈し、幅が狭く細長いもの・葉巻形のもの・やや幅広のすんぐりしたものがある。

（断面形状）

長軸上では、開口部が底面より長いもの・短いもの・ほぼ同一なものがある。壁面の形状は、垂直なもの、一様な傾斜をもつもの、袋状のものがある。

短軸上では、Y字状・V字状等の形態がある。

（検出層位）

第3・4号ピットは試掘トレンチの断面から第III層を掘り込んでいることを確認した。他のピットはすべて地山面での確認であり、掘り込まれた層位は不明である。

（重複）

第7・8号ピットは、約45°の角度で重複しており、8号が新しい。

（長軸方向）

方向に規則性は認められないが、第8号ピットが等高線に直行しているのを除くと、おおむね等高線に平行である。

(2) 土壌

B C—254グリッドに位置する。直径40cm・深さ45cmの柱穴状の土壌である。周囲を拡幅したが、ほかには確認されず、単独での存在である。 (一条)

第8表 溝状ピット計測表

番号	グリッド	長 軸			短 軸			深さ mm	長軸方位	備考
		上	中	下	上	中	下			
1	YS169	333	303	252	83	32	17	83~102	N-2.5°-E	
2	YS・YT174	310	318	335	121	49	32	128	N 15.5°-W	
3	ZK・ZL170	-	-	-	18	-	9		N-35.0°-E	
4	ZK・ZL166	-	-	-	21	-	15	131	N 23.5°-E	
5	AB・AC158・9	382	357	359	100	26	14	153	N-55.0°-E	
6	AJ163	385	372	371	66	23	16	122~130	N 58.0°-E	
7	ZW・ZX155	-	408	448	54	24	23	80~117	N-21.0°-E	IH
8	ZX・ZY155・6	320	312	366	76	32	'24	94~134	N-66.5°-E	新
9	AH147・8	366	345	324	83	25	14	132	N-60.5°-E	
10	AL・AM152	394	382	356	82	24	16	145	N-15.0°-E	
11	ZN・ZO176	406	369	367	50	14	11	123	N-79.0°-E	

2. 出土遺物

(1) 土器（第140図～第141図）

(7) I群土器

I群1類（5）

(AH-148) グリッドより1点出土した。表裏面に貝殻条痕が施される。

I群6類（6～9）

(ZH-264) グリッドより4点出土した。器面に沈線文が施され、内面には貝殻条痕が施される。

I群7類（10）

(BD-157) グリッドより出土した。単節斜縄文（LR）が施される。胎土には、繊維の混入が認められる。

(8) III群土器

II群5類（11）

(ZX-214) グリッドより1点出土した。胴部片で、木目状撚糸文が施される。胎土には、細かな砂粒を含み、少量の繊維の混入が認められる。

(9) III群土器

III群3類（12～23）

V-2区より主に出土した。V区出土器の中では最も多い。

器形は、やや胴部が張り、口縁部が外反しながら立ち上がる深鉢形である。平縁（14、15、17、20、21）と波状縁（18、19）がみられるが、波状縁のものは口唇部近くでやや内湾する。底部片が2点（22、23）あるが、外周縁がやや外へ張り出す。

文様は、口縁部から胴部付近までの文様から5類に分類できる。

a類：（1、12～14）地文の斜縄文を施した後に、沈線文を施すものである。（1）は、いわゆる波頭状文をなす。

b類：（15～17）地文の斜縄文を施した後に沈線文を施し、沈線で区画した内側、又は外側を磨消縄文の技法により磨り消すものである。沈線文には、破片のため明確ではないが、U字状文、△状文、波頭状文と思われるものがみられる。

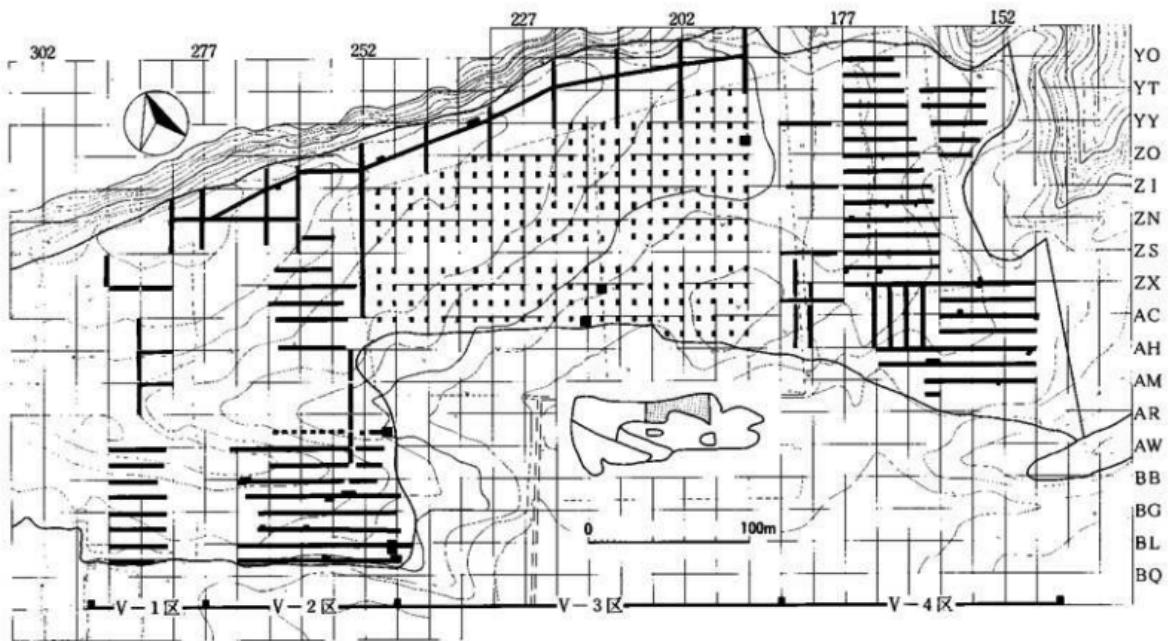
c類：（2）は、沈線文で区画した中に、縄文が充填されるものである。

d類：（18、19）沈線文、隆帶文、刺突文、ボタン状突起が施されるものである。

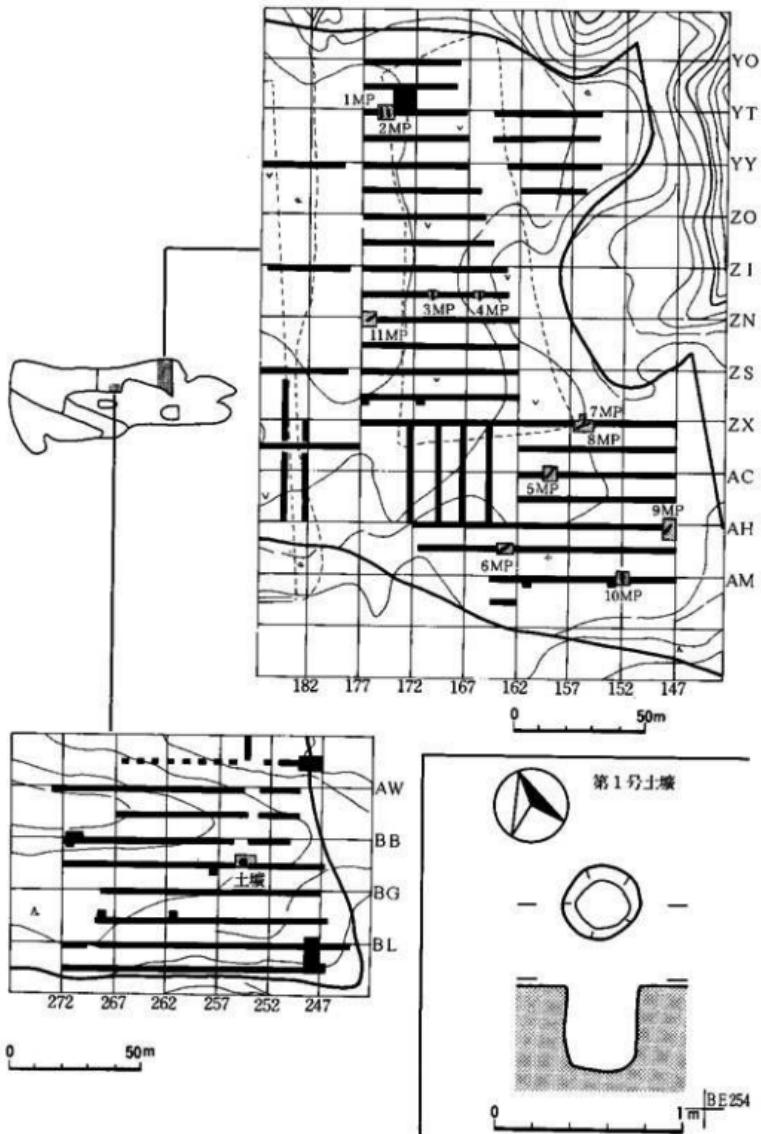
e類：（20、21）器面に斜縄文のみを施すものである。

以上、5類に分類したが、地文の縄文には、LR、RL共にみられ、縦位回転によるものが多い。また、底面には網代痕がみられる。

内面は、平滑に調整されている。胎土には、多量の砂粒を含む。色調は、暗褐色、黒褐色を



第136図 V区グリッド配置図



第137図 V区造構配図

呈し、器厚は9~11mmである。

(z) IV群土器 (第140図3、第141図25~31)

完形品1個体と破片が少量出土した。(3)は、胴部がやや張り、口縁部が外反する深鉢形土器である。口唇直下に2条の沈線が巡り、それ以下の胴部は無文で、器面はよく磨かれている。胎土には、砂粒を含む。(口径21.2cm、底径8.5cm、器高26.4cm)

(25~31)は破片で、文様には沈線文、隆帶文がみられる。

(f) V群土器 (第141図32~34)

(32、33)は、(ZD-249)グリッドより出土したが同一個体である。口唇部にB字状突起をもつ、粗製の深鉢形土器で、口唇部には刻目が施される。

文様は、口縁部に5条の平行沈線文が施されるが、1条目の沈線は、B字状突起部分で山形状をなす。更に、1条目と2条目、3条目と4条目の間には、連続刺突文が施される。胴部には、単節斜繩文(O段多条LR)が施される。

胎土には、少量の砂粒を含む。色調は暗褐色を呈し、器厚は5mmほどである。

大洞C1式に相当するものと思われる。

(34)は、(YQ-222)グリッドより出土した。胴部上端から内側に屈曲し、口縁部が内側に傾斜しながら立ち上がり、口唇部付近が外反する粗製の深鉢形土器である。

文様は、口縁部に6条の平行沈線文が施され、胴部には斜繩文(RL)が施される。口唇部近くの内面にも1条の沈線が巡る。

胎土には、細かい砂粒を含む。色調は暗褐色を呈し、器厚は7mmほどである。

繩文時代後半の土器と思われる。

(g) 第VI群土器 (第140図4)

(AT-249)グリッドより、逆さまに潰れた状態で出土した。器形は、平縁の台付浅鉢形で、口縁部と胴部の境に段をもつ。口径21.1cm、器高11.6cm、台部径8.6cm、台部高2cm、器厚5mmとなる。

文様は、口縁部には変形エ字文(4単位)が2段巡り、口縁部と胴部との境には、列点文1段、沈線2条が巡る。胴部には沈線文が施されるが、磨耗により文様構成は不明である。

内面は、横位調整により平滑になっている。胎土には、砂粒を含む。焼成はあまり良くなく全体的にもろい。色調は、暗黄褐色を呈する。

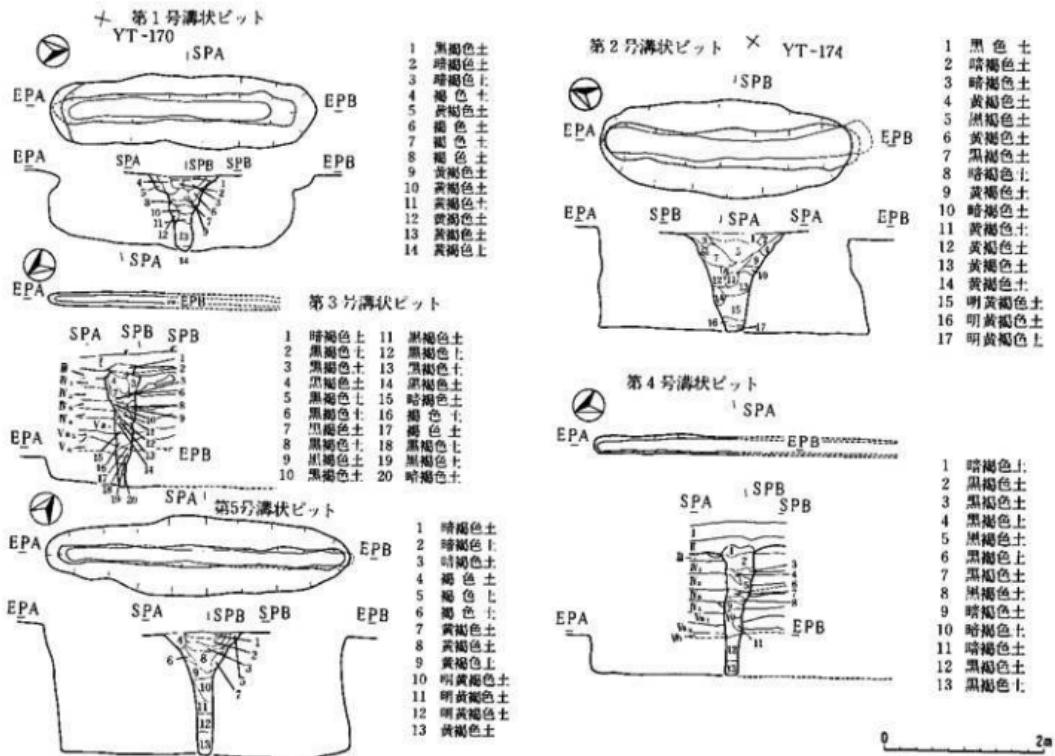
弥生時代の二枚橋式に相当すると思われる。

(一条)

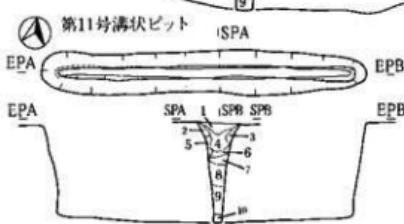
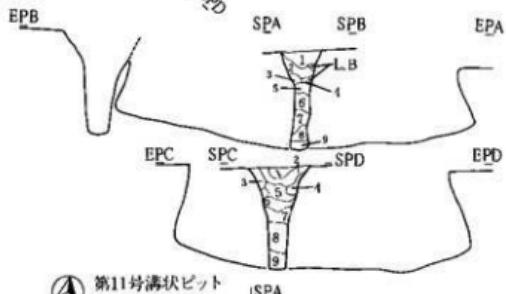
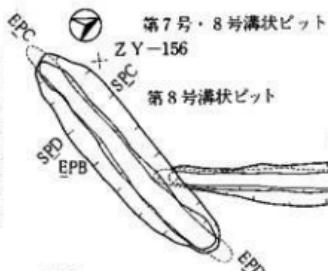
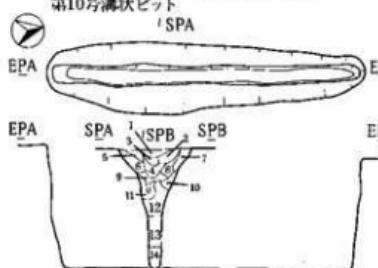
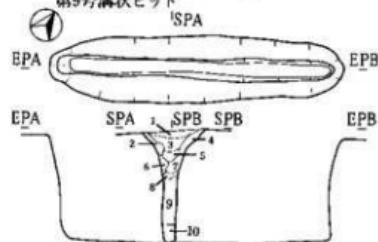
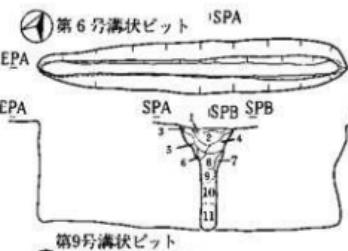
(2) 石器

フレーク3片と、礫46点が出土した。石器はK類(石錐)1点・L-I類(スリ石)2点で、いずれも散発的な出土であった。

(白鳥)



第138図 V区溝状ピット実測図(1)



第7号溝状ビット

1 黑褐色土
2 暗褐色土
3 黄褐色土
4 黄褐色土上
5 黄褐色土
6 黄褐色土上
7 黄褐色土
8 黄褐色土上
9 黄褐色土

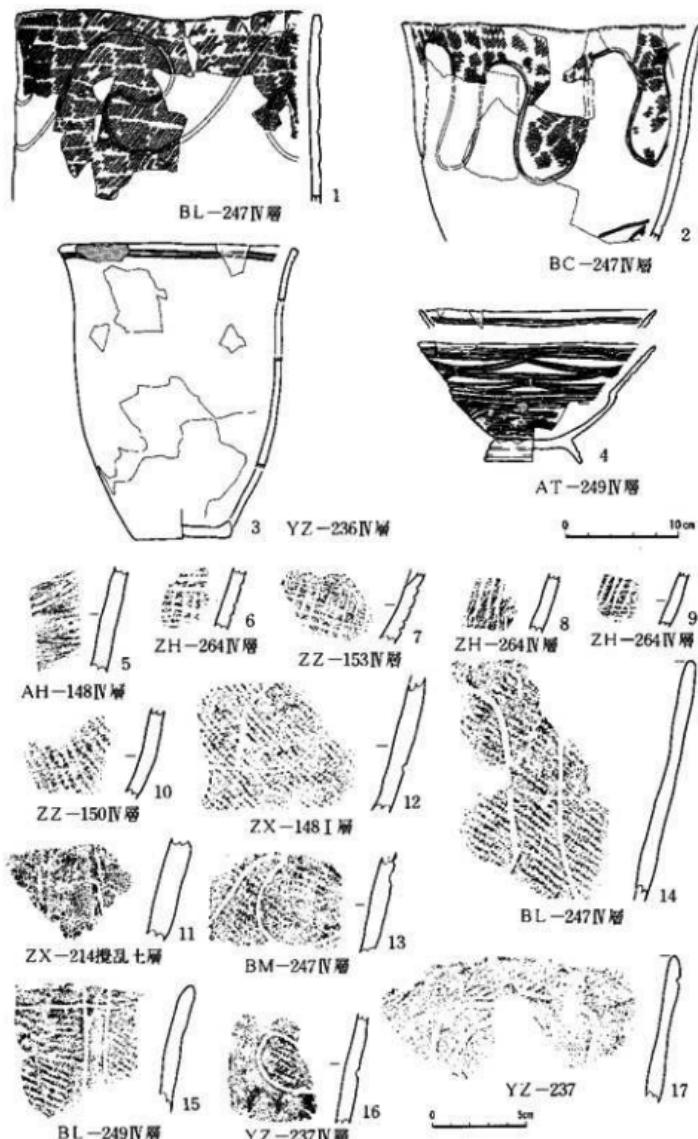
第8号溝状ビット

1 黑褐色土
2 暗褐色土
3 黄褐色土
4 黄褐色土上
5 黄褐色土
6 黄褐色土上
7 黄褐色土
8 黄褐色土上
9 黄褐色土

1 黑褐色土
2 褐色土
3 暗褐色土
4 暗褐色土上
5 黄褐色土
6 黄褐色土上
7 黄褐色土
8 黄褐色土上
9 黄褐色土

0 2m

第139図 V区溝状ビット実測図(2)



第140圖 V區出土土器實測圖・拓影圖



第141図 V区出土土器拓影図

第3節 VI区

1. 検出遺構

(1) 溝状ピット

4基検出した。各溝状ピット（以下ピットという）の位置及び計測値は一覧表にまとめた。

〈平面形状〉

溝状を呈し、幅が狭く細長いものとやや幅広のずんぐりしたものがある。

〈断面形状〉

長軸上では、開口部が底面よりも長く、壁面の形状は、ほぼ垂直なものと一様な傾斜をもつものがある。

短軸上では、Y字状・V字状等の形態がある。

（検出層位）

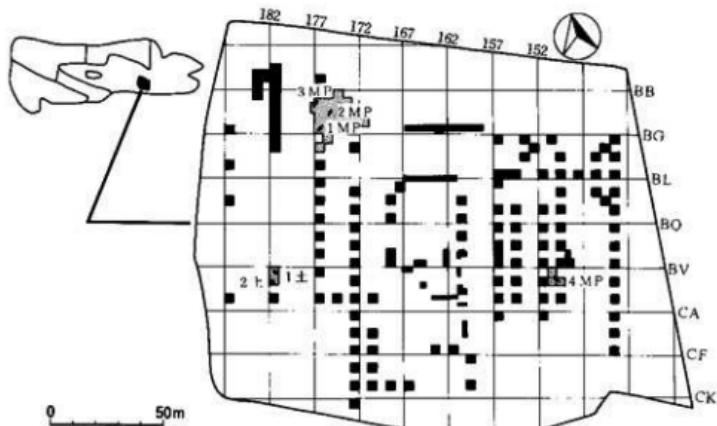
第1号ピットは第III層を掘り込んでいるが、掘り込み面は不明である。他のピットはすべて地山面での確認である。

（長軸方向）

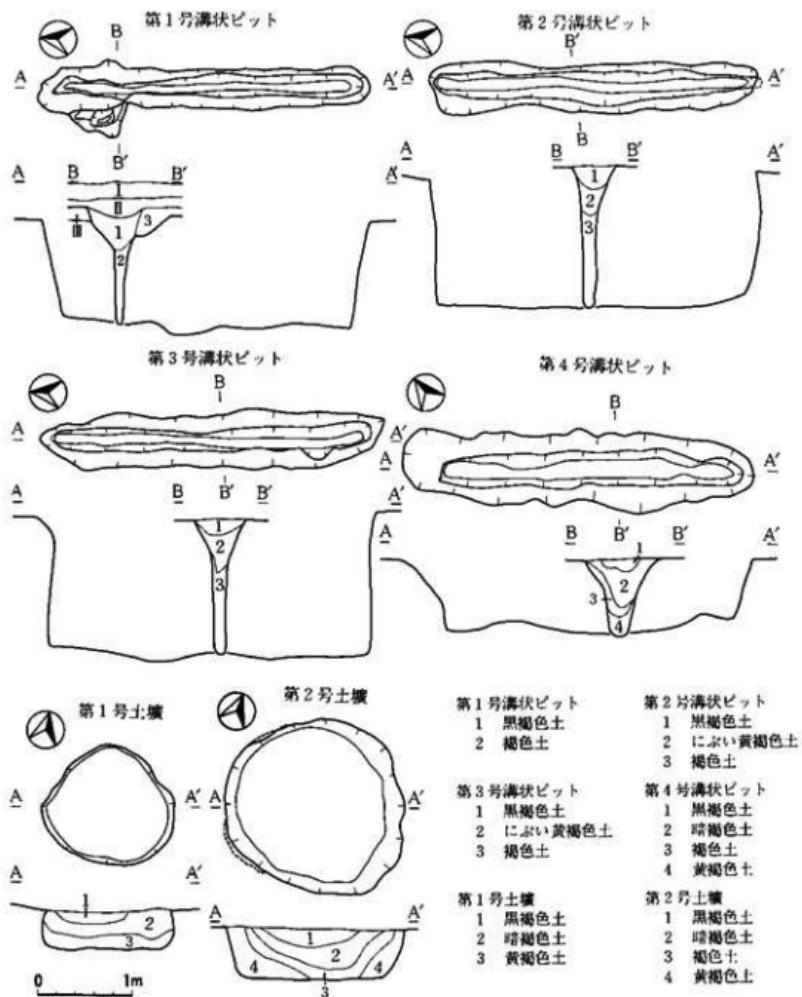
南北方向に向くものがほとんどである。また、平坦面に構築されているため、等高線との関係は不明である。

（2） 土壙

4基検出した。平面形は円形のプランを呈する。径は1.5m前後で、ほぼ垂直に掘り込まれている。出土遺物なし。時期は不明である。
(赤平)



第142図 VI区グリッド・遺構配置図



第143図 造構平面図

	グリッド	開口部	據底部	深さ	長軸方向		グリッド	開口部	據底部	深さ	長軸方向	
1号溝状ピット	B F-176	350×48	305×11	126	N-4°-W		4号溝状ピット	B W-147	371×85	305×22	81	N-90°-W
2号溝状ピット	B D-174	346×55	343×12	146	N-5°-E		1号土壤	B N-181	143×28		43	
3号溝状ピット	B C-176	365×65	331×10	156	N-2°-E		2号土壤	B W-181	183×180		55	

第9表 計測表 単位(cm)

2. 出土遺物

(1) 土器

縄文時代早期、前期、中期の土器が出土した。

(7) I 群土器

I 群 1 類 (第144図～第146図)

第VI区では最も多く出土した。器形は、平縁の尖底深鉢形で、口縁部は直立するもの、外反するもの、やや内湾するものがみられる。口唇部は、内側が傾斜をもち口端がやや薄くなる。特に、(33) はその度合が大きく口端の幅が 1mmほどしかない。

文様は、口縁部から胴部にかけての文様により 5種類に分類できる。

a 類：(1、5～13) 地文として貝殻条痕を施した後に爪形文が施されるものである。爪形文は、(8) を除いてすべて粘土のまくれ返りをもつ。また、縦位の爪形文が一般的だが、(9) のように横位のものも見られる。文様構成では、2～4段の連続爪形文を巡らすもの、横2列3列の爪形文を約5cm間隔で巡らすもの(5、6)、横3個の爪形文を、上下(上下差約4cm)交互に施するもの(1)などが見られる。

b 類：(14) 横位の貝殻腹縁文が施されるものである。

c 類：(15) 器面全体に貝殻条痕のみが施されるものである。

d 類：(28～36) 縄文及び撚糸文が施されるものである。(28、29) は、地文に単節斜縄文(L R)が施され、粘土のまくれ返りをもつ爪形文が2段巡るが、斜縄文の施しはかなり浅い。また(30) は、口唇部より2cmほどの幅を無文帶とし、それ以下に単節斜縄文(L R)が施される。

(32～36) は、撚糸文(極めて細いL Rの縄文原体を棒に巻きつけた絡条体回転文)が施されるが、施しは浅い。

e 類：(2) 文様を有せず、器面を平滑に調整しているものである。光沢をもつほどよく磨かれている。

以上は、口縁部から胴部の文様で分類したが(19、20、25) は底部片で、貝殻条痕が施されるもの、無文のものが見られる。

本類の内面は、横位の調整が良く行われおおむね平滑になっている。中には光沢をもつほど良く行われているものもみられる。胎土には、砂粒を含み、(9) を除いては繊維の混入は認められない。焼成は良く、色調は赤褐色、暗褐色、黒褐色、灰褐色を呈する。器厚は、8～10mmである。

I 群 5 類

(BU-149) グリッドより 1点出土した。器形は不明。器面に貝殻条痕を施した後に貝殻

腹縁文が施される。内面は平滑に調整され、胎土には細かな砂粒を含む。器厚は6mmほどである。

I群 7類

(47) は胴部片で、単節斜繩文（L R）が施される。胎土には、少量の砂粒を含む。また、多量の繊維を混入するため、かなり軽い。器厚は10mmほどである。

(イ) II群土器

II群 2類 (第146図39~46)

器形は、平縁の尖底深鉢形と思われる。口唇部は平坦に面取りされている。

文様は、単節斜繩文（L R, R L）、複節斜繩文（R L R）、繩文原体（L R）の回転方向を変えることによる羽状繩文、ループ文（R L）+竹管押引沈線文がみられる。(45)には、ループ部分の圧痕がみられる。

内面は、横位の調整が良く行われている。胎土には砂粒を含み、繊維の混入も認められる。

II群 3類 (第146図48~第147図61)

器形は、平縁、平底の深鉢形と思われる。口縁部は、直立するものとやや外反するものがあり、口唇部は平坦に面取りされている。

文様には、刺突文、沈線文、ループ文、コンパス文がみられる。(48、49、51、57)は、同一個体で、ある程度文様構成を知り得る。口唇部直下に半截竹管による刺突列が2段巡り、それ以下の胴部には2~3cm幅のループ文（O段多条R L）が施される。

(55)は、沈線によって区画された中にヘラ状工具による刺突列が施され、更に、下位に刺突列が横位に施される。

(56)は、胴部から底部にかけてのものだが、胴部側には爪形状の刺突列、底部側にはヘラ状工具による刺突列が見られる。底面にも、刺突列が円を描くように施される。

内面は、良く調整されており、胎土には砂粒を含み、個体によって量の差はあるが繊維の混入が認められる。焼成はやや良く、色調は赤褐色、暗褐色を呈する。器厚は9mmほどである。

(ウ) III群土器

III群 1類 (第144図3)

(B T-156) グリッドより1個体出土した。大きく外反する4つの肩状突起をもつ円筒深鉢形土器である。口径27.1cm、最大胴径21.9cm、残部器高25.4cm、器厚7mmとなる。

文様を見ると、胴部上半から上に上部文様帶を構成している。口唇部には、鋸歯状の隆帯が施され、それ以下には、横位、縱位、斜位、弧状の隆帯及びO段rの太い原体を使用した馬蹄形状の圧痕により文様が構成される。隆帯上にはすべて撚糸圧痕文（L）が施される。上部文様帶以下には、結束1種羽状繩文が施される。

内面は、横位の調整が行われるが、雑で、全体の作りも粗雑である。胎土には砂粒を多く含

むが、繊維の混入は認められない。

III群2類 (第144図4)

(BT-156) グリッドより1個体出土した。口縁部が外反し、4つの山形突起をもつ円筒深鉢形土器である。口径32.7cm、最大胴径27.4cm、残部器高35.1cm、器厚9mmである。

文様を見ると、胴部中位から上に上部文様帯を構成する。口唇部にそって隆帯が施され、隆帶上には、2方向からの撚糸圧痕文(L)が施される。各山形突起の直下には、隆帯を施した山形状の把手がつけられる。地文としての結束1種羽状縞文を施した後に、各把手部分から垂下する2本の隆帯が施され器面を4区分する。更に、その区分の中に弧状隆帯、横位隆帯が施される。また、山形突起の内面側にも2本の横位隆帯が施される(隆帯の幅は4mm前後)。

上部文様帯以下には、地文としての結束1種羽状縞文が施されている。

隆帯は、貼り付け後、その側縁をヘラ状工具によってはがれ落ちないよう調整されているが、充分でなく剥落している部分が多く見られる。

内面は、良く調整されているが、土器自体はやや粗雑な作りになっている。胎土には、砂粒を含むが繊維の混入は認められない。色調は、暗褐色、暗赤褐色を呈する。

(I群1類土器について)

本類は、前述で文様によりa～e類まで細分したが、d類について補足したい。

d類は、器面に縞文あるいは撚糸文が施されるものである。器形は、平縁の尖底深鉢形と思われる。文様構成には、爪形文+縞文、無文帯+撚糸文、縞文のみ、撚糸文のみ、などがみられる。撚糸文の存在は、白浜遺跡で指摘され^(注1)、少量ながらも館平、下松苗場、千歳(13)、吹切沢、新納屋(1)、売場遺跡等でも、縞文あるいは撚糸文が施されたものが出土している。

また、県外においても、爪形文、縞文及び撚糸文、沈線文(d類には存在しない)を文様要素とすると土器が、岩手県蛇王洞^(注2)洞穴(蛇王洞II式)、北海道西股遺跡^(注3)(ノダップI式)で出土している。蛇王洞II式、ノダップI式では、縞文及び撚糸文が、爪形文、沈線文とともに主要文様要素としてとらえられているが、d類をI群1類土器の中で同様にとらえてよいものは、断定し得ない。(a～c、e類に比較してd類は極めて少量である。)

縞文及び撚糸文が、主要文様要素となり得るかどうかを別にすると、d類は、器形、文様構成(爪形文+縞文)において、蛇王洞II式、ノダップI式に類似するが、前者が横走縞文が主体をなし、後者が斜縞文であることから、よりノダップI式に近いものと思われる。

d類をI群1類(白浜式・小般渡平式に相当するもの)の中でとらえうるかどうかであるがd類が、a～c、e類とともに出土していること、口唇部の刻み目の存在、爪形文の形態及び施文技法、胎土、焼成が、縞文及び撚糸文の存在をぬきにすれば、a～c、e類と酷似することから、一応現時点では、d類をI群1類の中でとらえたい。

(一条)

(注1) 江坂彌爾 1955 白浜遺跡 日本考古学年報4号

(注2) 芹沢長介・林謙作 1965 岩手県蛇王洞洞穴 石器時代7号

(注3) 北海道第4紀研究会 1974 函館市字紅葉山西股遺跡発掘調査報告書 「西股」

(2) 石器

第I群石器

8点出土した。F—I b類1点、F—IⅢ類4点、F—IⅣ類3点である。石質はすべて珪質頁岩である。

(畠山)

第II群石器

I類 磨製石斧 1点出土した。掠切磨製石斧の欠損品で、基部端・刃部を欠失している。両側縁に掠切痕が若干残っている。正面は潰し整形後、研磨を行っているが、敲打痕を多く残す。裏面は、横位及び縦位方向に無数の擦痕が観察される。欠損後、正面刃部側及び基部側の折損端に潰しがなされ、更に基部側より剥離が行われている。潰しと剥離の新旧は不明の部分が多く、併行して行われた可能性も考えられる。基部側の端部に表裏面から2個所づつパンチ痕が認められる。石斧として再加工したものかは不明である。

第III群石器

K類 石錐 5点出土した。抉りは148図—2を除いて長軸の中軸線上に作出されている。抉りの作出は、両方とも両面からのもの2点・一方が両面からで他方が片面からのもの2点・一方が両面からで他方が自然面のもの1点である。

L類 敲磨器類 L—I類シリ石14点（うち欠損品8点）・L—IⅡ類敲き石1点（欠損品）が出土した。L—I類は14点中11点が三角柱状磨石で、小型の4点と大型の1点を除いて欠損品（器体のほぼ半分が欠失）である。

第10表 土器片鑑計測表

擲出番号	出土グリッド	層位	大きさ 長軸×短軸	厚さ	重さ(g)	部位	文様	備考
147図—64	BT—157	IV	69×48	10	20	胴部	斜縄文	破損品
65	BT—156	"	37×44	7	11	"	"	"
62	BT—157	"	66×44	9	38	"	"	"
63	BS—157	"	68×55	7	30	"	"	"

() は複部計測値

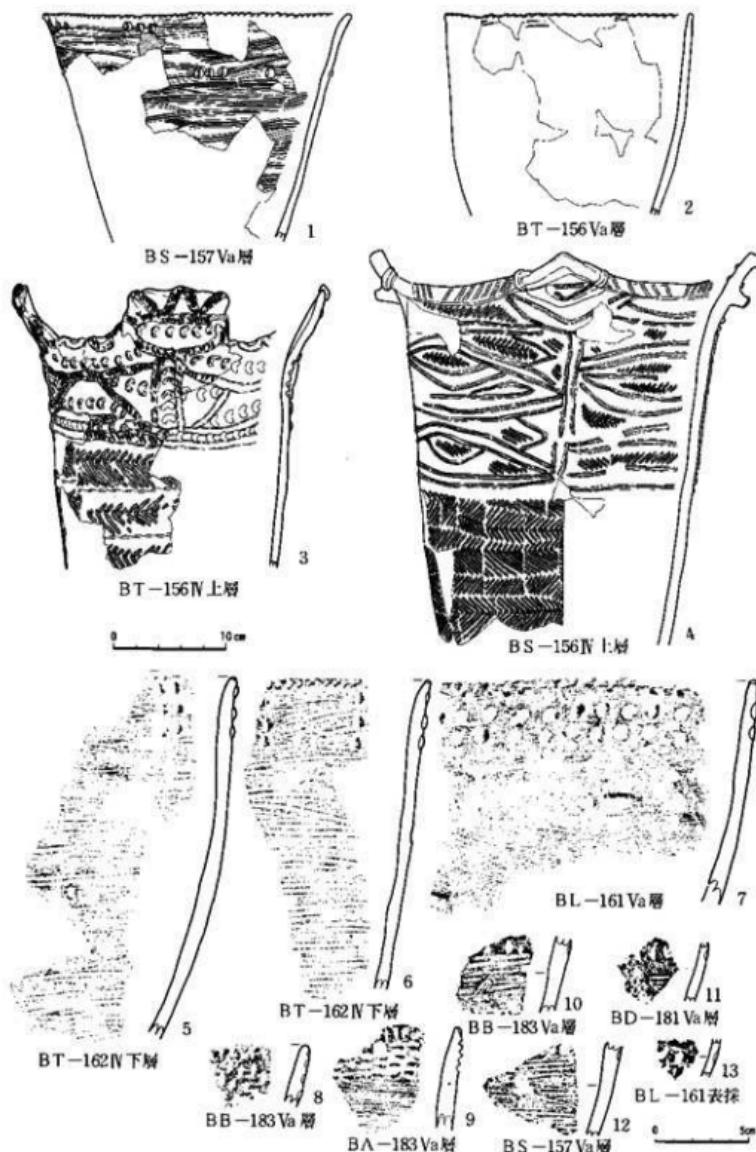
M類 台石 数点出土した。すべて欠損品である。

※本区の出土土器は、縄文時代早期～中期の土器で、主体は早期前半と前期前半である。他地区の主体が縄文時代後期・弥生時代であるのに対して、時期的な特徴を有する。鍤石器の面からは、石鎌がⅡ A類（長軸上に抉りを作出）だけであることと、スリ石のほとんどが三角柱状磨石であることが特徴的である。
(白鳥)

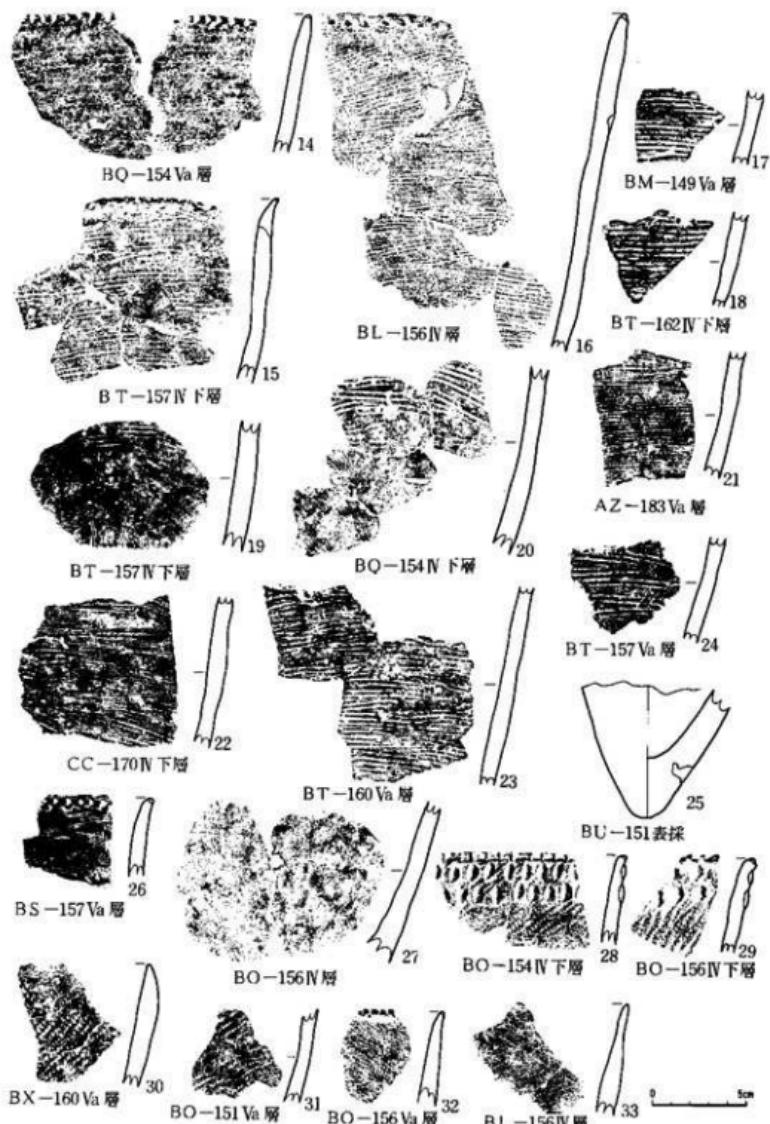
(3) その他の遺物

土器片鎌 (第147図62～65)

4点出土した。個々の計測値は第10表に示す。縄文時代前期初頭の早稲田6類土器を利用して作られている。
(一条)



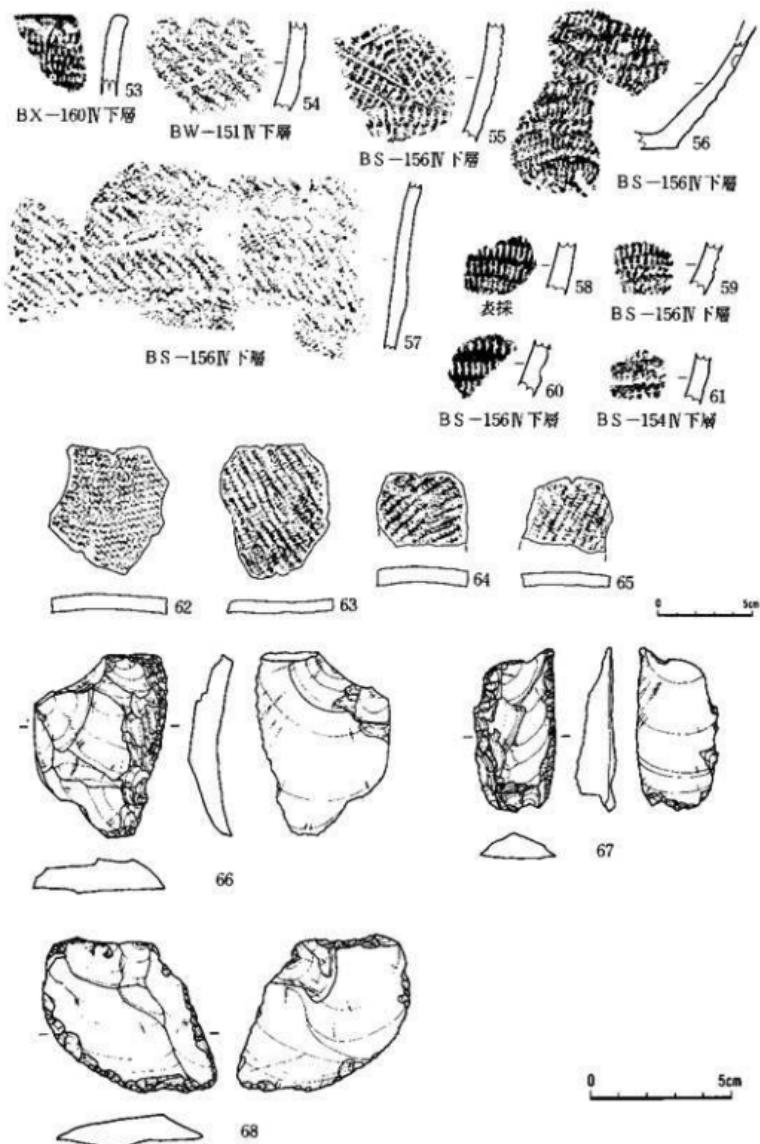
第144図 VI区出土土器拓影図 (I群1類)



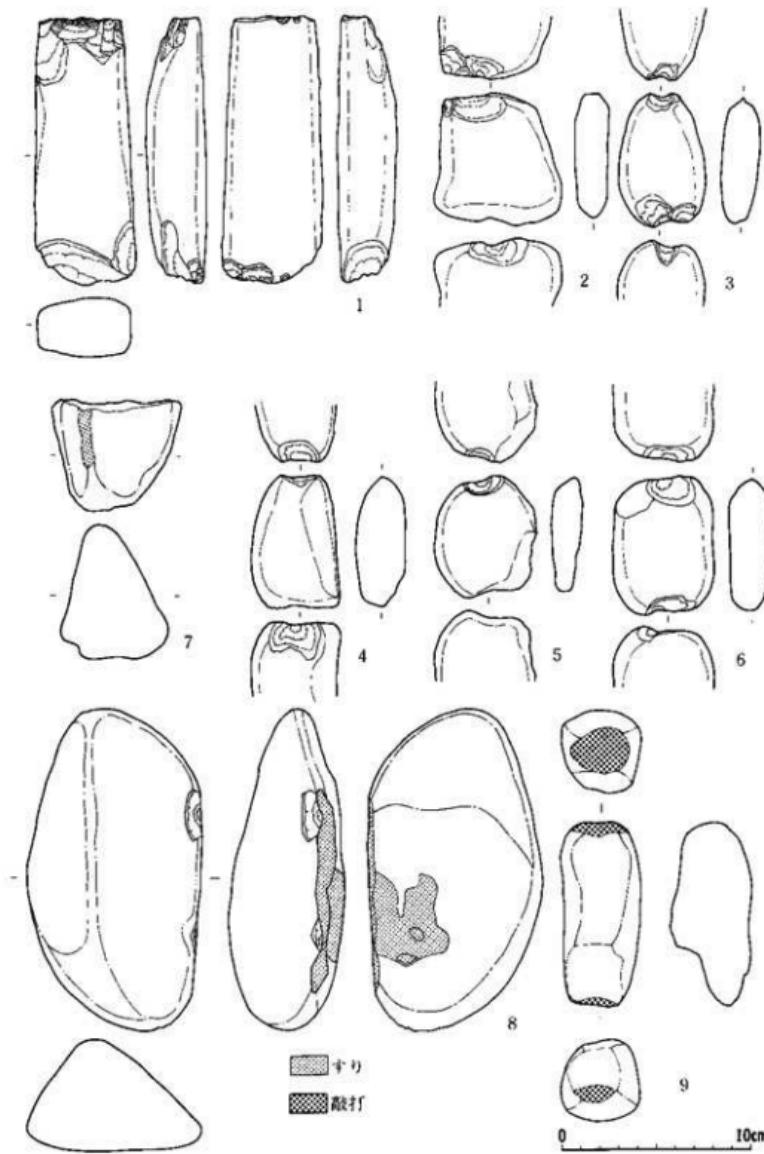
第145図 VI区出土土器拓影図 (I群1類)



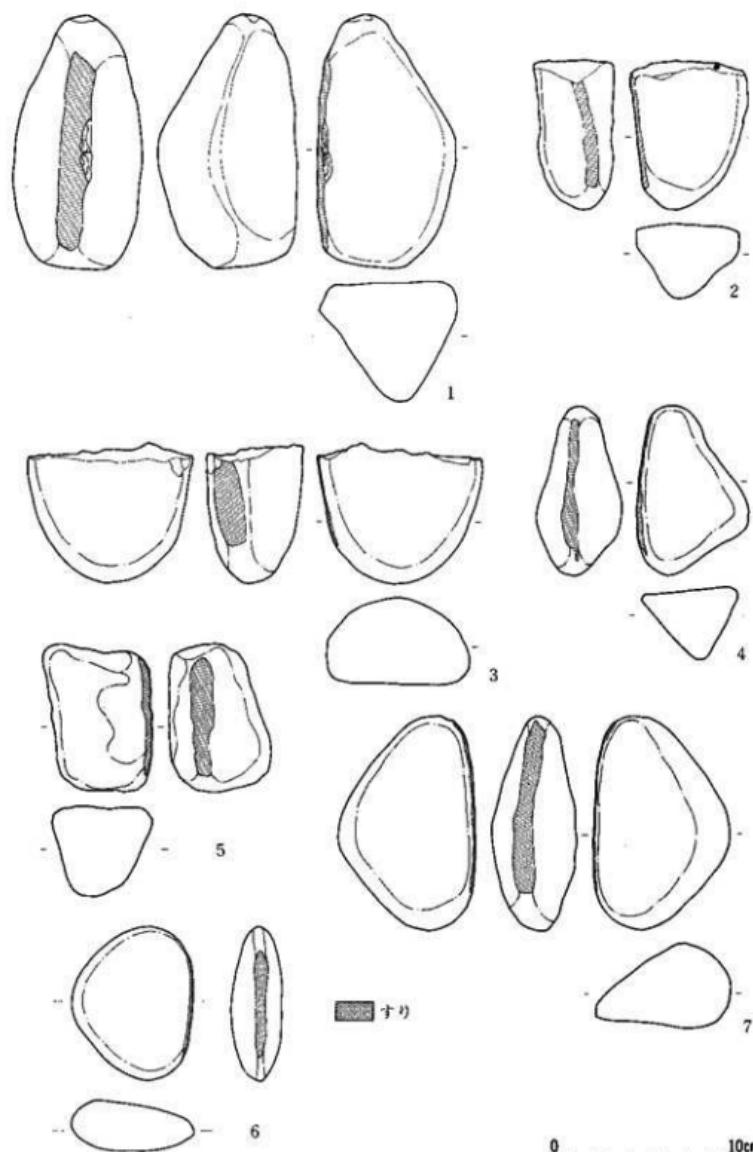
第146図 VI区出土土器拓影図 (I群1類、II群2類、3類)



第147図 VI区出土土器拓影図・土製品・石器実測図



第148図 第VI区出土石器 (1)



第149図 第VI区出土石器 (2)

第4節 VII区

本地区は調査時点で「大石平遺跡中の島地区」と呼称されていた地点である。本地区の地形は、IV区の湧水地を水源とする小沢の北側に位置する東西120m、南北40mの馬背状を呈した小孤立丘である。この台地の最高位の標高は42.3m、周囲の低湿地は約39mで、比高差は3m程度である。

このような台地上に、堅穴住居跡16軒、土壙18基、土器埋設遺構2基が検出された。各遺構及び遺構外からの出土土器は大木10式併行期、十腰内I式の2型式である。以下に、各遺構の概要と、遺構内からの遺物の出土状況について述べる。

1. 検出遺構

(1) 堅穴住居跡

第1号住居跡

〔位置と確認〕 調査区II C～II D-107～109に位置する。馬背状台地の南西斜面で傾斜が最も緩やかな地点である。基本層序第V a層上面で黒褐色の円形の落ち込みとして確認した。本住居跡中央部付近は、風倒木による擾乱(3.5×3.2m)を受け、小マウンドを形成している。

〔重複〕なし

〔平面形・規模〕 南西壁は削平されており、また一部調査区外に位置するため、全容は把握できなかった。残存部から推定して、長径5.6m、短径5.4mの楕円形のプランを呈すると思われる。床面積は20m²で、調査区内では最大規模と推定される。

〔壁〕 残存している北、東壁は、基本層序第IV層をほぼ垂直に掘り込んで壁面としている。壁高は、北壁33cm、東壁20cmである。

〔床〕 基本層序第V b層を掘り込んで床面としている。風倒木の影響で1/2が破壊されているため、壁際の床面のみ確認できた。比較的堅緻である。

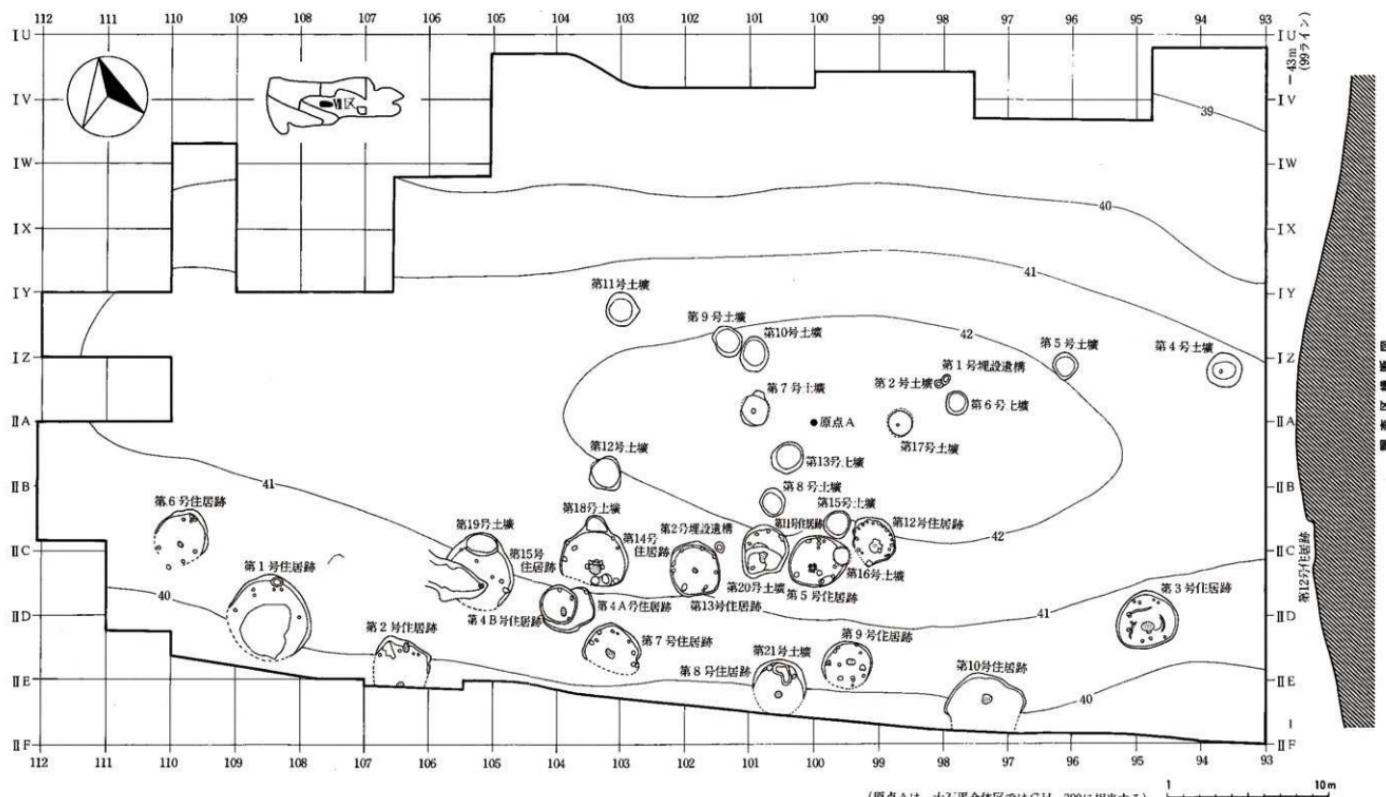
〔柱穴〕 堅穴内より6個のピットを検出した。このうち、規模、深さからみてp i t 1・2・3・5・6(未検出)が主柱穴で、六角形の柱配置と考えられる。

No.	規格cm	深さcm									
1	32×27	45	2	23×16	48	3	23×14	36	4	17×13	34
5	22×21	42	6	21×18	55	7	16×16	28			

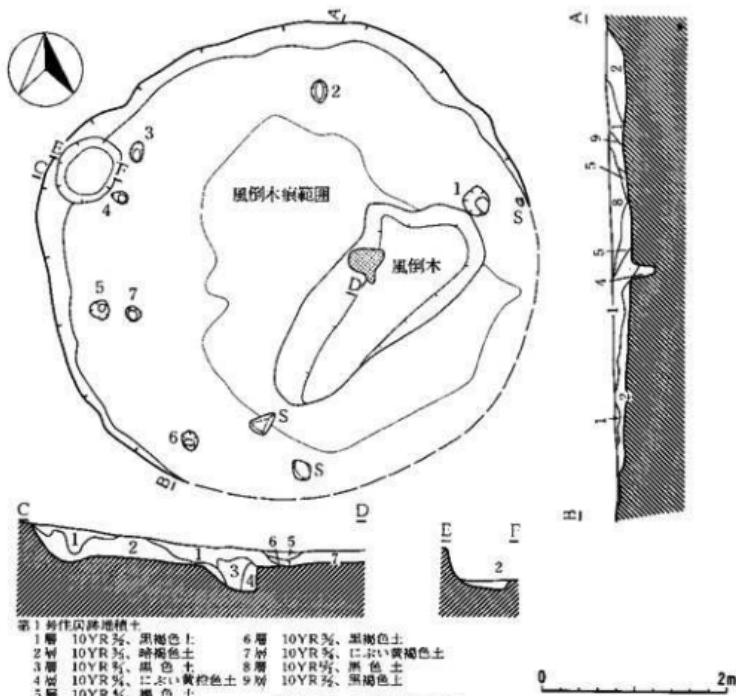
〔炉〕 風倒木によって形成された小マウンド上に、40cm×38cmの範囲で焼土が確認された。本住居跡中央付近に位置することから、炉として使用された可能性がある。

〔付属施設〕 堅穴北側で80cm×65cm、深さ14cmの小堅穴を検出した。本住居跡に伴うものであるが、出土遺物はなかった。

〔堆積土〕 2層に区分できた。ローム粒を含む暗褐色又は黒褐色シルト質土層で、人為堆積と考えられ。



第150図 VII区 造構配図



第151図 第1号住居跡

〔出土遺物〕 破片資料30片と台石が出土した。図173—1は初期堆積土中より、図173—2は風倒木痕中より出土した。いずれも十腰内Ⅰ式である。

第2号住居跡

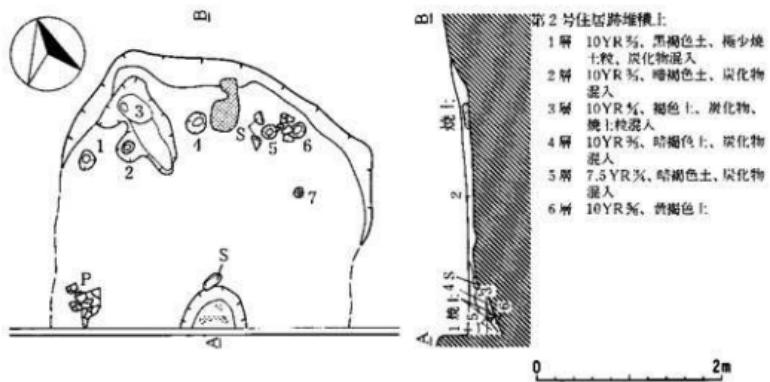
〔位置と確認〕 調査区II D—106に位置し、基本層序第V a層上面で黒褐色の落ち込みとして確認した。馬背状台地の最低位の斜面上である。南側約半分は調査区外のため未発掘である。

〔重複〕 なし

〔平面形・規模〕 残存部が少ないためプランの全容は把握できなかった。残存部の床面積は、7.9m²である。

〔壁〕 北壁のみ確認できた。基本層序第V a層を緩やかに掘り込み壁面としている。壁高は20cmである。

〔床〕 基本層序第V b層を掘り込んで床面としている。用水路に近接するため床面を覆う土



第152図 第2号住居跡

層は湿性が多く、軟弱である。

〔柱穴〕 竪穴内より7個のピットを検出した。このうち、規模、深さからp i t 2、4、5が主柱穴の可能性がある。

No.	規模(cm)	深さ(cm)									
1	22×17	41	2	27×27	45	3	36×26	37	4	23×23	17
5	17×15	46	6	18×15	24	7	11×10	16			

〔炉〕 南側の用水路との境界で、70cm×(90)cm、深さ最大7cmの規模の掘り込みと23cm大の炉石1個を検出した。掘り込みの底面は堅く縮っていて、全面焼土化していることから、石閉炉の可能性がある。

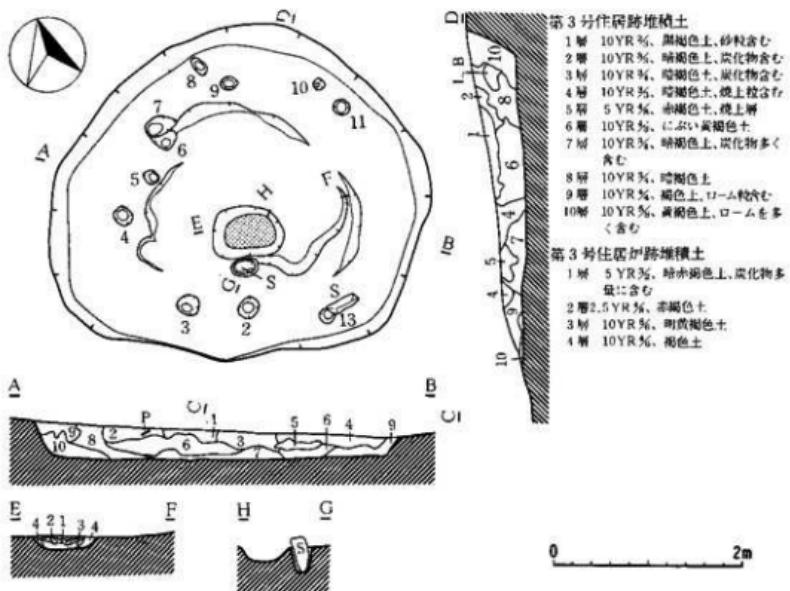
〔堆積土〕 黒褐色シルト質土の単一層で、自然堆積と思われる。

〔出土遺物〕 破片資料が多数と石9点が出土した。図170—1、2は床面直上、図173—3、4は堆積土中からの出土で大木10式期である。また、図176—2は石皿、図176—3は敲石である。第3号住居跡

〔位置と確認〕 調査区II C—94～II D—94・95に位置する東南の緩斜面に、基本層序IV層中に黒褐色の円形の落ち込みを確認した。

〔重複〕 他の遺構との重複はなく、隣接する遺構もない単独の住居跡である。約7m南西側に、第10号住居跡がある。

〔平面形・規模〕 平面形は北側が弧状になり、南側は歪んだ不整な円形状を呈する。長径を東西にもち約4m、短径は3.5mを計る。床面積は、9.5m²である。



第153図 第3号住居跡

〔壁〕 基本層序第V a層を壁面としている。斜面に位置しているため、南側の壁高は不明であるが、他の壁は遺存状態は良好である。全ての壁は緩傾斜し、堅微である。壁高は、北壁55cm、西壁40cm、東壁20cmである。

〔床〕 基本層序第V b層を床面としている。床面は、段状施設が構築され、中央部が凹んだ状態にある。段状施設の構築は、住居南側を除き、弧状に巡らされているが、粗雑な構築のためか所々で、途切れている。床面と段状施設の比高差は2cm～8cmである。

〔柱穴〕 本住居跡内から13個のピットが検出された。ほとんどのピットが、段状施設を巡ぐる様に位置しており、住居の西側寄りから多く検出された。ピット1、2、4、6、7、13が主柱穴になると思われるが、ピットを検出できなかった部分があり、柱穴の配列は把握できない。

No.	規格(cm)	深さ(cm)	No.	規格(cm)	深さ(cm)	No.	規格(cm)	深さ(cm)
1	23×20	38	2	24×24	47	3	25×24	8
5	17×14	16	6	23×16	38	7	33×21	24
9	19×15	10	10	14×13	15	11	19×18	40.4
13	17×16	23				12	20×20	-

〔炉〕 炉は、住居のほぼ中央部に位置し、長径75cm、短径52cmの不整楕円形である。炉の南側に、炉石が1個埋設されている。炉石の掘り方は、20×30×25cmで長径40cmの窪が埋め込まれている。

〔堆積土〕 堆積土は12層に分層される。第1～3層は砂粒を多く含む土層であり、第2層、第5層には炭化物が混入する。第8層は焼土層である。

〔出土遺物〕 住居床面からは、口縁部を半分欠失した略完形土器が、北西の壁際から倒立した状態で出土した。(図170—3) 堆積土第1層中より復元可能な土器(図170—4)、第2層から土器片(図170—5)が出土した。土器は全て、十腰内I式土器である。

第4 A号住居跡

〔位置と確認〕 調査区II D—103の基本層序V a層で確認された。

〔重複〕 第4 B号住居跡を切って構築している。

〔平面形・規模〕 長径3.4m、短径2.6mの不整な楕円形である。西壁の一部が確認できなかつたが、推定床面積は6.1m²である。

〔壁〕 基本層序第V a層を壁面としているが、第14 B号住居跡と重複している部分ではその堆積土である暗褐色シルト層を使用している。

〔床面〕 壁と同様に基本層序第V b層を床としているが、第14 B号と重複している部分では、の堆積土を踏み固めて床としている。全体に軟弱である。

〔柱穴〕 本住居に伴出するピットは1個より検出できなかつた。第14 B号住居跡の堆積土を床面としているため、見逃した可能性がある。ピット1は29cm×18cm、深さは30cmである。

〔炉〕 検出できなかつた。

〔堆積土〕 4層に細分される。1層が黒色腐植土であり、他はローム粒及びそのブロックを多量に含む。

〔出土遺物〕 図170—6～7や多量の細片及び図175—1～3の不定形石器が覆土中より出土した。

第4 B号住居跡

〔位置と確認〕 調査区II D—103の基本層序V a層で確認された。

〔重複〕 第4 A号住居跡に上部を削平されている。

〔平面形・規模〕 直径約2.4mの円形プランで床面積は3m²である。

〔壁〕 基本層序第V a層を壁面としている。壁高は北壁約50cm、南壁15cmである。

〔床〕 他の住居跡と異なり、掘り込みが深く、堅穴底面は砂礫層に達している。この層を削平し、床面としている。

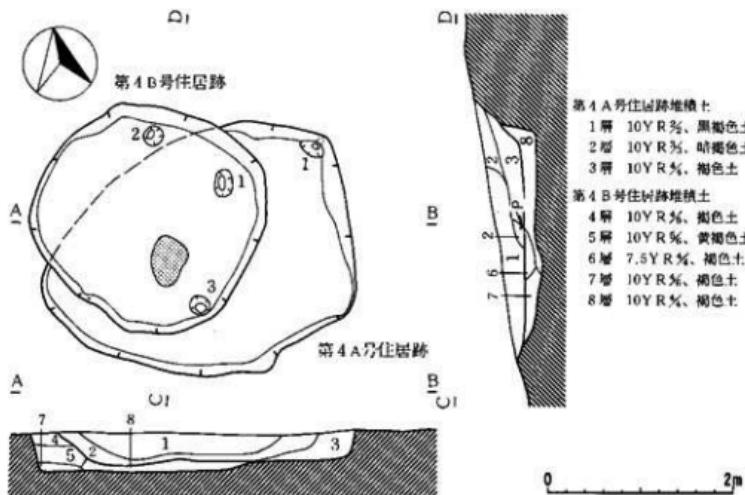
〔柱穴〕 本住居跡に伴出するピットは3個検出された。いずれも小規模で浅い。

No.	規模cm	深さcm	No.	規模cm	深さcm	No.	規模cm	深さcm	No.	規模cm	深さcm
1	30×18	17	2	22×22	16	3	24×20	18	4		

〔切〕 積穴中央部からやや南東壁寄りに偏在して地床炉を検出した。焼土は極めて薄い。焼土の分布範囲は28cm×20cmの楕円形である。

〔堆積土〕 堆積土の上部は第14A号住居跡の構築時に削平されており、残存する下部の堆積土は2層に細分される。いずれもローム粒を多量に含み、少量の焼土粒、炭化物粒を混入する。

〔出土遺物〕 なし



第154図 第4A号住居跡・第4B号住居跡

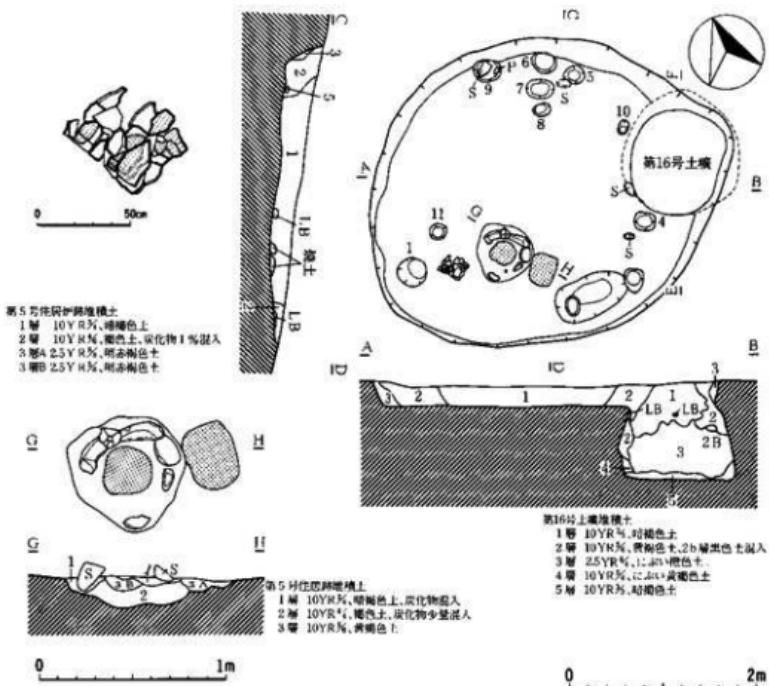
第5号住居跡

〔位置と確認〕 小丘陵の頂上部近く、標高42m程の緩斜面II C—99~100に位置する。基本層序第V a層上面で、暗褐色の円形状の落ち込みを確認した。

〔重複〕 第16号フラスコ状土壤と重複する。住居の東側部分で、第1号土壤と重複しており、第16号土壤の方が新しい。

〔平面形・規模〕 平面形は、東西にやや長い楕円形である。規模は、長径3.75m、短径3.5mを計る。面積は、7.8m²（推定で8.3）を計る。

〔壁〕 砂層を壁面としている。全ての壁が緩傾斜しており、砂層を壁面としているためか、軟質であるが、遺存状態は良好である。壁高は、北側40cm~5cmを計る。



第155図 第5号住居跡

〔床〕 基本層序第V b層を床面としている。住居北側には小さな起伏がみられ、中央部に向かってゆるやかに傾斜する。南側も中央部に向かって傾斜するがほぼ平坦である。炉近くの一部を除いて、壁と同様に軟質である。

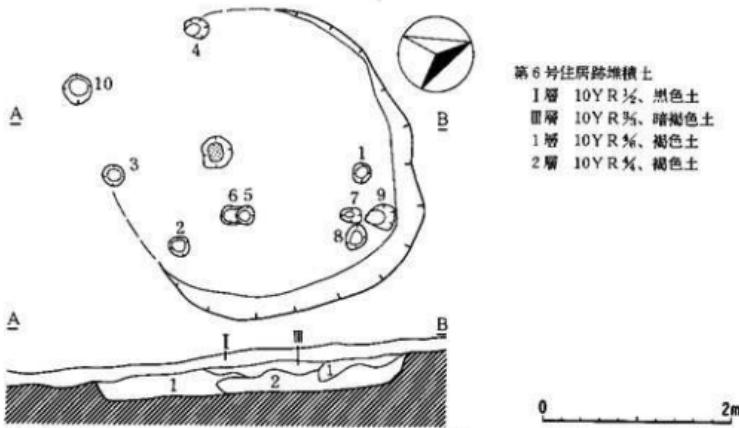
〔柱穴〕 住居内から11個のビットが検出された。住居東側を第16号土壤に切られ、北西側にもビットを検出できなかったため、柱穴の配列は不明である。

No	横幅cm	深さcm	No	横幅cm	深さcm	Xa	規格cm	深さcm	No	横幅cm	深さcm
1	32×31	35	2	21×16	20	3	25×22	31	4	22×21	16
5	23×20	39	6	26×22	57	7	29×20	48	8	18×14	23
9	30×23	21	10	17×16	15	11	31×31	17			

〔炉〕 炉は、中央部からやや南西側に位置する石囲炉である。炉石は、浅く掘り込まれた後に南西側に開放する様に、礎が5個「コ」状に配列されている。炉石Bは、石皿の転用である。石囲炉のすぐ傍には焼土があり、地床炉として使用されたものと思われる。炉の深さは約35cmで、15cm程の厚さで焼成を受けている。地床炉の横に、80cm×45cmの範囲で、浅く凹んだ堅い床面がある。炉の前庭部の可能性もある。

【堆積土】 堆積土は、3層に分層される。第1、2層は、炭化物を含む砂質土であり、第3層は、多量のロームを含む。

【出土遺物】 床面より、底部を欠失する大木10式土器（図170—8）が、石圓炉の傍から出土した。また、スリ石が2点（図176—4・5）の他、剥片が床面から出土した。



第156図 第6号住居跡

第6号住居跡

【位置と確認】 調査区II B～II C—109～110区、馬背状台地の南西斜面に位置する。標高は41cmである。この付近は、開墾時に削平されており、遺存状態は極めて悪い。

【重複】 なし

【平面形・規模】 竪穴の壁を確認できたのは、北東側約半分である。したがって、プランの全容は不明であるが、残存部から推定して、径3.2m程の不整な円形を呈するものと思われる。

【壁】 台地斜面に構築されており、しかも一部削平されているため、斜面高位の北東壁より残存しない。この北東壁では約10cmの壁高がある。壁面は基本層序第V a層である。

【床面】 基本層序第V b層を床面としている。全体に汚れが少なく、しかも極めて軟弱であり、長期間使用された床とは思われない。

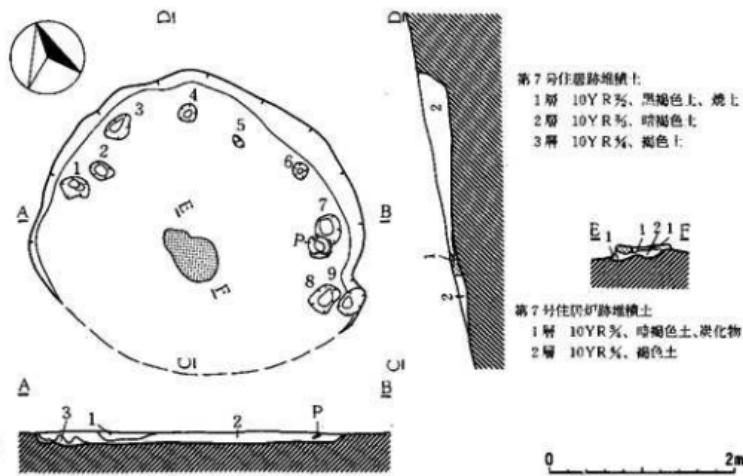
【柱穴】 竪穴内及びその周辺で検出できたピットは10個である。いずれも柱痕跡を確認できなかった。ピットの配置からはp i t 1～4が主柱穴の可能性がある。

No	規格cm	深さcm									
1	21×18	16	2	23×20	13	3	24×22	13	4	25×20	22
5	20×20	26	6	19×16	13.3	7	22×17	10	8	28×22	14
9	30×25	23	10	31×30	21						

〔炉〕 堪穴の中央からやや南側に偏在した床面上に炉を検出した。掘り込みや、石の抜き取り痕等が検出されないことから、床面を直接利用した地床炉であろう。焼土の範囲は直径が20cm前後で、厚さは5cm程である。

〔堆積土〕 堪穴内の堆積土は2層に細分されるが、いずれも地山のロームが多量に混入する層である。人為的に埋戻された可能性がある。

〔出土遺物〕 なし



第157図 第7号住居跡

第7号住居跡

〔位置と確認〕 調査区II D-103~104に位置し、基本層序第V a層上面で半円形の暗褐色の落ち込みを確認した。

〔重複〕 なし

〔平面形・規模〕 南側半分が削平により破壊されており、全容はつかめなかつた。残存部から推定して、長径3.6m、短径3.3mの梢円形のプランを呈するものと思われる。

〔壁〕 基本層序第V a層をほぼ垂直に掘り込んで壁面としている。壁高は、東壁15cm、西壁12cm、北側32cmである。

〔床〕 基本層序第V b層を掘り込んで床面としている。床面はほぼ平坦で、炉周囲がやや堅く締っている。

〔柱穴〕 堪穴内より9個のピットを検出した。このうち規模、深さからp i t 1, 3, 4,

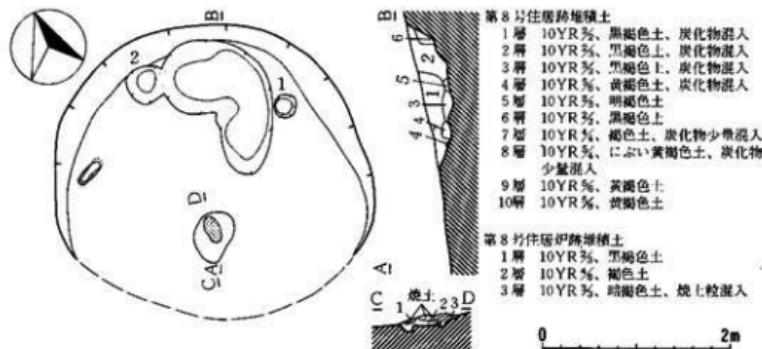
6、7、8号が主穴の可能性がある。

No.	規模(m)	深さ(cm)	No.	規模(m)	深さ(cm)	No.	規模(m)	深さ(cm)
1	33×22	34	2	27×18	14	3	35×22	26
5	16×9	16	6	19×17	17	7	33×17	32
9	34×24	25				8	32×22	22

〔炉〕 慶穴中央部で70cm×43cm、厚さ35cmの規模で、焼土がブロック状に堆積していた。堆積状況から見て、地床炉が廃棄されたものと思われる。

〔堆積土〕 暗褐色の單一層であり、自然堆積と思われる。

〔出土遺物〕 破片資料6点、石6点が出土した。図170—9は、第4号住居跡堆積土中の破片と接合した壺形土器、図173—7は床面上出土でいざれも十腰内I式である。磨石が1点出土した。



第158図 第8号住居跡

第8号住居跡

〔位置と確認〕 調査区II E—100の基本層序第V a層上面で落ち込みを確認した。この位置は第2号住居跡、第10号住居跡と同様、馬背状台地の最低位の斜面上である。

〔重複〕 不整規円形の性格不明な小堅穴と重複している。本住居はこの小堅穴を削平して構築されている。

〔平面形・規模〕 南側半分が検出できなかったが、直径3.3m程の円形と推定される。

〔壁〕 基本層序第V a層を壁面としている。北側の壁高は約30cmもあるが、南側は削平され、残存しない。

〔床面〕 基本層序第V b層を直接床面としている。また小堅穴と重複している部分では小堅穴の堆積土をそのまま踏み固めて床面としている。汚れや凹凸も少なく全体的に軟質である。

〔柱穴〕 堅穴内で検出できたピットは3個である。このうち、p i t 1～2が柱痕跡を検

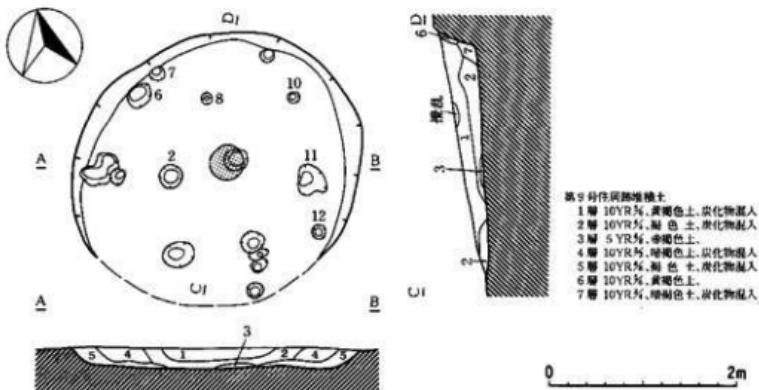
出できなかったものの規模、深さからみて主柱穴の可能性がある。

No	規模cm	深さcm									
1	40×38	25	2	25×24	32	3	25×24	32	4	25×24	32

〔炉〕 壁穴のほぼ中央部に地床炉を検出した。焼土の範囲は直径40cmの円形である。また、厚さは6cm程である。

〔堆積土〕 1～6層に細分される。1～3層は黒色系の腐植土、4～6層はロームが多く混入する層である。

〔出土遺物〕 破片資料が19片と、図176—6の凹石が出土した。破片資料の大部分は初期堆積土中のものである。いずれも十腰内I式であり、他の時期のものは混在していない。



第159図 第9号住居跡

第9号住居跡

〔位置と確認〕 調査区II D～II E—99に位置し、基本層序第V a層上面で暗褐色の円形の落ち込みを確認した。

〔重複〕 なし

〔平面形・規模〕 削平により南壁は確認できなかつたが、直径約3mの円形と推定される。残存部床面積は6.3m²である。

〔壁〕 基本層序第V a層を壁面としている。北壁はほぼ垂直に掘り込まれ、壁高40cm、東、西壁は緩やかに掘り込まれ、壁高は18～20cmである。

〔床〕 基本層序第V b層を掘り込んで床面としている。床の硬さは炉の周囲が比較的堅く締っているが、壁際にかけては軟弱である。

〔柱穴〕 壁穴内より16個のピットを検出した。このうち、規模、深さからp i t 3、6、

9、11が主柱穴の可能性がある。

No.	規模cm	深さcm	No.	規模cm	深さcm	No.	規模cm	深さcm
1	26×22	6	2	26×24	13	3	34×27	32
5	40×32	13	6	25×23	35	7	16×15	24
9	16×14	26	10	12×12	9	11	32×31	30
13	26×24	24	14	20×10	23	15	18×11	23
							16	16×16
								17

〔炉〕 壁穴のほぼ中央部で地床炉を検出した。焼土の範囲は直径約40cmの円形で、最大8cmの厚さである。

〔堆積土〕 7層に区分できた。炉直上の3層を除き、ローム粒が多く混入する土層で人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 破片資料が48点、石が4点出土した。床直上の細片や堆積土中より出土した土器は全て十腰内I式期である。また、図176—8は磨石である。



第10号住居跡

〔位置と確認〕 調査区II E—97の基本層序第V a層上面で落ち込みを確認した。この位置は馬背状台地南斜面の最も低い面である。本住居の南側は低湿地となり、壁穴が構築される可能性がほとんどである。

〔重複〕 なし

〔平面形・規模〕 壁穴の壁及び床面を確認できたのは、北側約半分である。したがって、プランの全容は不明であるが、残存する壁の状況から推定して径4.5m程の不整円形であろう。

〔壁〕 比較的急な斜面に構築され、しかも壁穴が浅いため、壁穴の南半分は削平され残存

しない。北側は基本層序第V a層を壁面としている。壁高は最も高い地点で約40cmある。

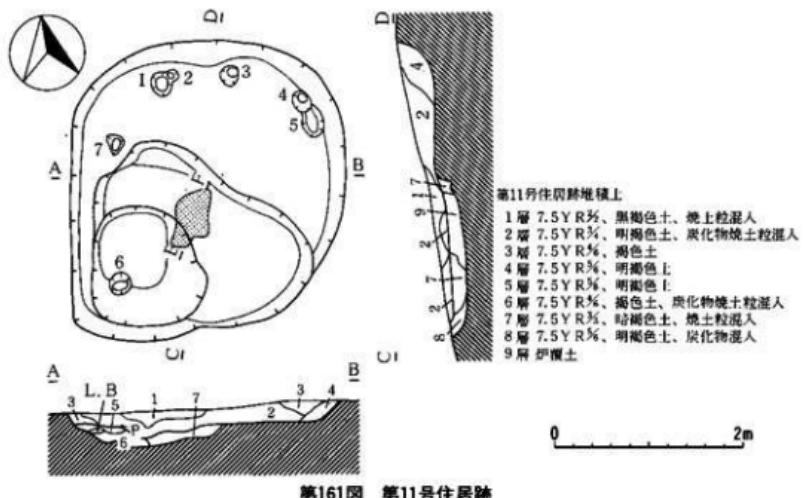
〔床面〕 基本層序第V b層を削平し床面としている。炉の周囲が比較的堅緻であるが、全体に軟質である。

〔柱穴〕 竪穴内外でピットは検出されなかった。

〔炉〕 竪穴の中央部から北壁寄りに偏在して地床炉が検出された。焼土は40cm×46cmの梢円形の範囲に分布する。厚さは中央部で約5cmである。

〔堆積土〕 6層に細分される。1～3層は黒色系の腐植土、4～6層は黄褐色ローム質土が多量に混入する層である。

〔出土遺物〕 床面出土の遺物はない。竪穴の初期堆積土中から土器の細片が、また図176-9の磨石が出土したにすぎない。図170-10は十腰内I式である。



第161図 第11号住居跡

第11号住居跡

〔位置と確認〕 調査区II C-100に位置する。この位置は第12号住居跡と同様、標高42mの最高位である。

〔重複〕 長径1.5m、短径1m程の第20号土壙と重複している。この土壙の堆積土を削平し、床面と炉を構築している。

〔平面形・規模〕 竪穴は直径約3mの不整円形である。特に小竪穴と重複する南西壁が張り出している。炉を含む床面は6.53m²である。

〔壁〕 基本層序第V a層を壁面としている。検出できた壁高は北壁で23.0cm、南壁で5cmである。

〔床面〕 基本層序第V b層を削平して床面としているが、性格不明の小堅穴と重複している部分では、その堆積土である暗褐色土層を直接踏み固めて使用している。床面は全体に軟質である。

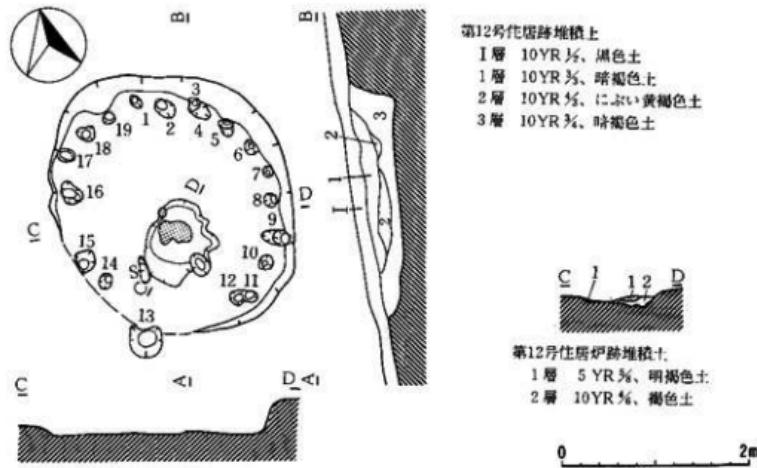
〔柱穴〕 堪穴内で検出できたピットは7個である。いずれも壁直下に位置する。

No	横幅cm	深さcm									
1	26×20	28	2	7×6	11	3	22×18	28	4	22×18	41
5	31×22	18	6	24×23	15	7	21×18	12			

〔炉〕 堪穴中央部からやや南側に偏在して地床炉が検出された。炉の位置する場所は第20号土壤上面である。焼土の範囲は50cm×30cmである。

〔堆積土〕 堪穴内の堆積土は4層に細分される。第2層は床面のほぼ全体を覆うもので、炭化物粒、焼土粒が混入する。第4層は壁直下に分布するもので、壁の崩落土を主体とする可能性が高い。

〔出土遺物〕 十腰内I式期の縞片と不定形石器1点が堆積土中から出土しただけである。



第162図 第12号住居跡

第12号住居跡

〔位置と確認〕 調査区II C—99で検出された。この位置は馬背状台地中央部の南斜面であり、また標高は42mで、住居跡群中最も高位である。

〔重複〕 なし

〔平面形・規模〕 長径2.9m、短径2.4mの不整椭円形である。炉を含む床面積は4.9m²である。

〔壁〕 砂層を壁面としている。したがって、崩落が激しい。

〔床面〕 砂層を掘り込み、その上に薄く黄褐色ローム質土を貼って床面としている。炉の周辺と堅穴中央部がやや堅緻である。

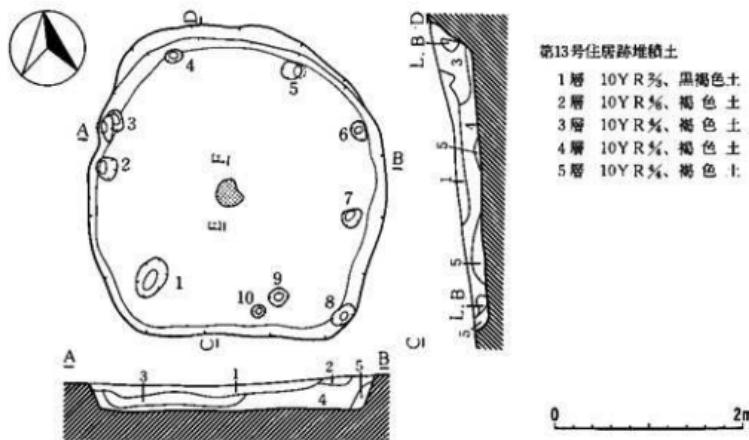
〔柱穴〕 堅穴内で検出できたピットは19個である。p i t 13を除き、いずれも小規模で、壁直下を一巡する。上屋を支えた主柱穴か、砂層である堅穴壁の土留用の柱穴が推定される。

No	規模cm	深さcm									
1	15×12	16	2	22×20	25	3	15×13	25	4	17×15	14
5	20×15	19	6	18×13	19	7	11×10	15	8	15×15	24
9	32×22	25	10	15×15	12	11	15×11	29	12	16×15	30
13	36×30	20	14	16×12	22	15	22×20	16	16	30×17	28
17	20×13	19	18	20×16	18	19	13×12	17			

〔炉〕 堅穴の中央部から南壁寄りにやや偏在して検出された。長径約80cm、短径約50cmの不整な小堅穴であるが、壁際には石の抜取痕と推定される小穴や壁のみだれがあることから、本來は石囲炉の可能性が高い。炉底は薄く焼土化している。

〔堆積土〕 3層に細分される。ローム粒、砂粒が多く含む全体に砂質の度合が強い。

〔出土遺物〕 十勝内I式の細片が堆積土中から出土したにすぎない。



第163図 第13号住居跡

第13号住居跡

〔位置と確認〕 調査区II B～II C—101～102に位置し、基本層序第V a層上面で落ち込みを

確認した。

〔重複〕 なし

〔平面形・規模〕 遺存状態は極めて良好である。直径3.2mの不整円形であり、床面積は7.4m²である。

〔壁〕 基本層序第V a層を垂直に掘り込んで壁面としている。壁高は、東壁37cm、西壁33cm、南壁14cm、北壁48cmである。

〔床〕 基本層序第V b層を床面としている。北から南へ20cm傾斜している。床面は砂質で全体的に軟弱である。

〔柱穴〕 壓穴内より10個のピットを検出した。このうち、ピット配置からみてp i t 1, 3, 4, 5, 7, 9が主柱穴の可能性がある。

No.	埋深cm	深さcm	No.	埋深cm	深さcm	No.	埋深cm	深さcm	
1	45×30	24	2	23×22	3	32×22	35	4	18×15
5	21×20	6	21×16	11	7	22×18	18	8	29×16
9	20×19	18	10	15×13	15			9	

〔炉〕 整穴のほぼ中央部で地床炉を検出した。直径30cmの円形プランを呈し、最大4cmの厚さで焼土化している。

〔堆積土〕 6層に区分できた。いずれも黄褐色のローム粒が混入しており、人為堆積と思われる。

〔出土遺物〕 破片資料34点、石3点が出土した。図171—12は堆積土上面から出土した略完形の深鉢形土器、図170—11は初期堆積土中から出土した壺形土器で、いずれも十腰内I式期である。

第14号住居跡

〔位置と確認〕 調査区II B～II C—103に位置し、基本層序第V a層上面で暗褐色の二重の落ち込みを確認した。

〔重複〕 本住居跡北側で第18号土壤と重複しており、本住居跡が古い。

〔平面形・規模〕 南壁側が削平されているため、全容は把握できなかった。残存部から推定して、長径4.3m、短径3.6mの不整楕円形を呈するものと思われる。

〔壁〕 基本層序第V a層をほぼ垂直に掘り込んで壁面としている。壁高は、東壁で17～20cm、西壁で20cm、南壁で4～5cm、北壁は推定で40cmである。

〔床〕 基本層序第V b層を床面としている。床の硬さは、炉周辺及び壁より80cm中央寄りが堅く締っている。

〔柱穴〕 壓穴内より6個のピットを検出した。

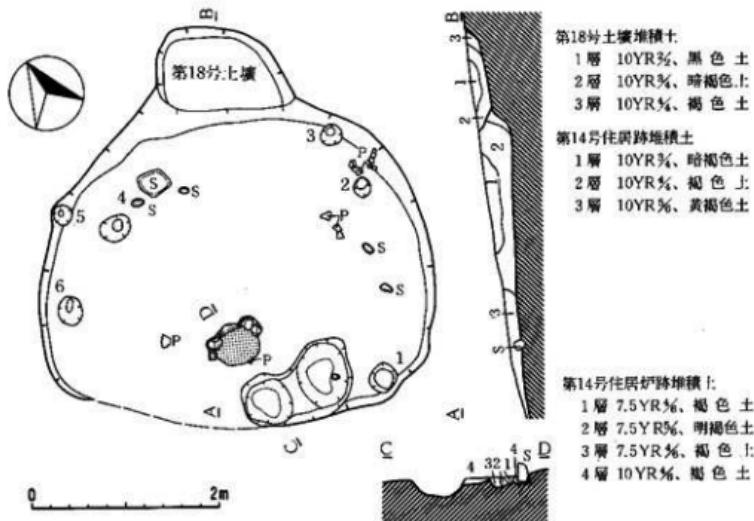
No	規格(単)	深さ(単)	No	規格(単)	深さ(単)	No	規格(単)	深さ(単)
1	31×27	13	2	22×18	13	3	23×22	16
5	22×18	7	6	30×26	14	4	33×27	20

〔炉〕 本住居跡中央部よりやや南壁寄りに偏在して石囲炉を検出した。石囲部は、11cm～25cm大の5個の河原石が残存していたが、炉石の抜き取り痕が連続して確認されたことから、構築時は梢円形に一巡して配置されていたと思われる。炉石は掘り方をもつ。炉内は65cm×55cmの範囲で焼土化している。

〔付属施設〕 炉の中軸線延長上で南壁際に2基の連続する掘り込みを検出した。西側は、60cm×50cm、深さ24cm、東側は、80cm×55cm、深さ20cmの規模で掘り込まれている。共に底面は堅緻で、使用頻度が高かったものと推定される。出入口として使用された可能性がある。

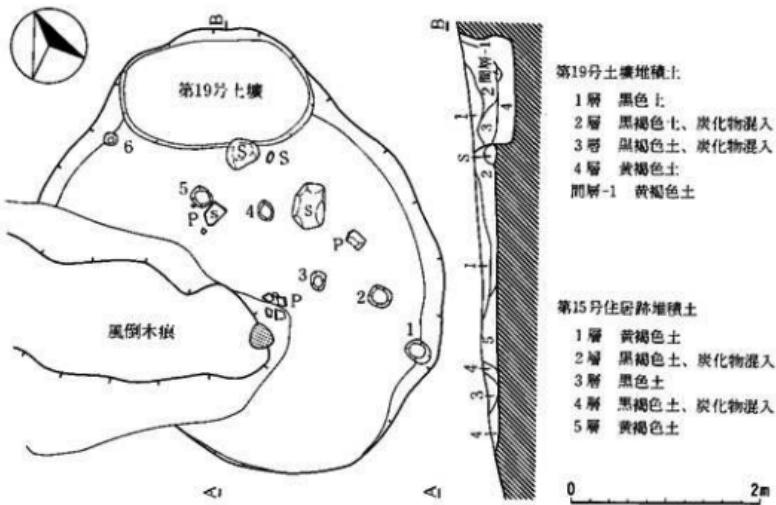
〔堆積土〕 3層に区分できた。いずれも褐色系のシルト質土層で人為堆積と思われる。

〔出土遺物〕 破片資料が14点、石が12点出土した。図171～13は床面直上、図173～12は壁面から出土し太木10式期である。図173～17は堆積土中で十腰内I式期である。図176～10・12・13は磨石である。



第15号住居跡

〔位置と確認〕 調査区II B～II C—104～105に位置し、基本層序第V a層上面で確認した。馬背状台地の南西斜面で標高41m付近である。



第165図 第15号住居跡

〔重複〕 北側で第19号土壤と重複しており、本住居跡が古い。また、西側約3分の1は風倒木により破壊されている。

〔平面形・規模〕 南壁が削平され全容はつかめなかったが、残存部から長径4.5m、短径3.8mの橢円形と推定される。

〔壁〕 東壁及び北西壁が確認された。基本層序第V a層を壁面としており、壁高は東壁で38cm~41cm、北西壁で20cmである。共に緩やかに立ち上がる。

〔床〕 基本層序第V b層を掘り込んで床面としている。床面には砂粒が多く混入しているため軟弱である。

〔柱穴〕 本住居跡内より6個のピットを検出した。このうち、規模、深さからp i t 2、5が主柱穴の可能性がある。

No	規模cm	深さcm									
1	28×21	16	2	24×22	15	3	20×16	9	4	21×15	11
5	22×21	26	6	15×13	8						

〔炉〕 積穴中央部よりやや南壁寄りに位置し、風倒木により約20cm程度盛上がって焼土が確認された。規模は27cm×25cmの範囲で焼土化しており、地床炉の可能性がある。

〔堆積土〕 3層に区分できた。黄褐色及び暗褐色シルト質土層でいずれも自然堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 細片が比較的多く出土した。図171~14は床面から、図173~14~15は堆積土中から出土した。十腰内I式期である。図176~11は磨石である。(三浦・赤平・小田川)

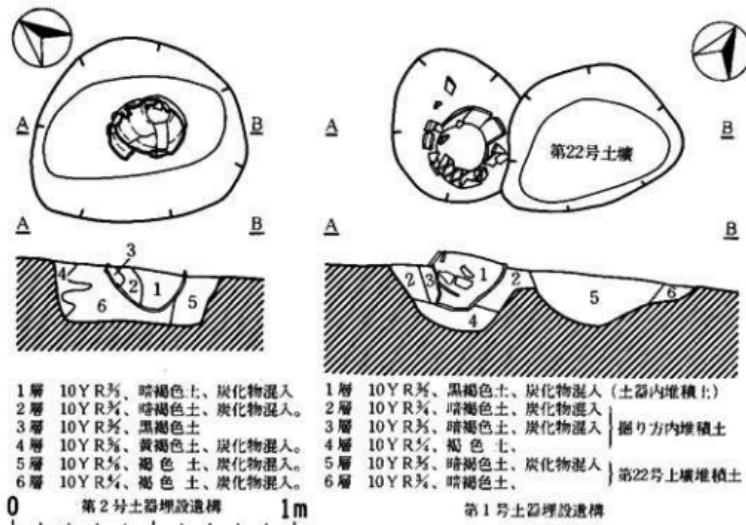
(2) 土器埋設遺構

第1号土器埋設遺構 図171—15

調査区I Z—98に位置する。馬背状台地の最高位の地点であり、周辺土壤群が密集する特殊な地域である。本遺構は、北東側で第22号土壌と重複しており、本遺構が古い。土器上面の確認は基本層序第IV層中である。埋設の方法は正立埋設であるが、土器は北方に約20度傾斜している。掘り方は55cm×50cmの楕円形のプランを呈し、遺構確認面からの掘り込みは25cmである。土器内の堆積土は単一層で炭化物、ローム粒が若干混入する他には遺物はない。土器は、口徑25.5cm、推定高32cmの深鉢型土器である。波状口縁で、器面には2条の格子目状沈線文が施されており、十腰内I式期に位置づけられる。

第2号土器埋設遺構 図171—16

調査区II B—101に位置し、基本層序第IV層上面で確認した。周囲には、第11号及び第13号住居跡が近接する。埋設の方法は正立埋設であるが、土器は北方へ約35度傾斜して検出された。掘り方は、75cm×65cmの楕円形で、遺構確認面からの掘り込みは20cmである。堆積土はいずれも褐色系のシルト質土層で炭化物が微量に混入している。土器内の堆積土は3層に区分でき、この中にも炭化物粒の混入がみられる。土器は、最大胴径24.7cmの深鉢型土器で、LRの地文繩文が施されており、十腰内I式期に位置づけられる。
(赤平)



第166図 土器埋設遺構

(3) 土 壤

VII区で検出された土壌は、総数18基である。土壌は、低湿地に囲まれる馬背状台地の頂上部付近（標高41m）から、頂上部緩斜面（標高42m）に構築されている。住居跡群が南斜面に位置するのに対し、土壌は頂上部から北側に位置する。

土壌の形態は、平面形で円形（不整円含む）楕円形（不整楕円含む）不整形に、断面形では円筒状・ナベ底状（舟底状含む）フラスコ状・不整形に分けられる。概して、円筒状とフラスコ状のものは深く大型であるが、ナベ底状のものは前者に比べ浅く小型である。第7号土壌はフラスコ状土壌であるが、中場の一部に張り出し状の掘り込みをもつ特異の形態である。また、壙底内に小ピットを設けるものが4基ある。

土壌内より遺物が出土するものが、半数以上であり、堆積土中よりも壙底からの完形品の出土がめだつ。第5・7・9・13号土壌からは、完形及び複原可能な土器が壙底より出土している。いずれも十腰内I式期のものである。

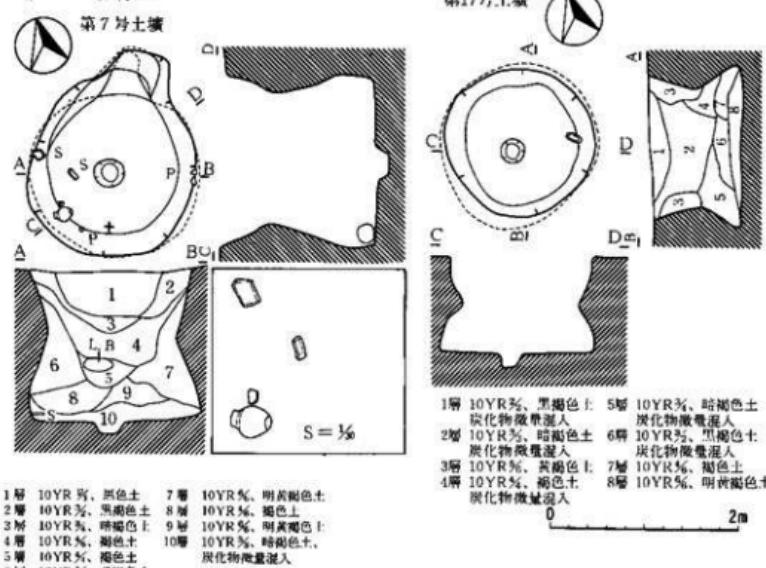
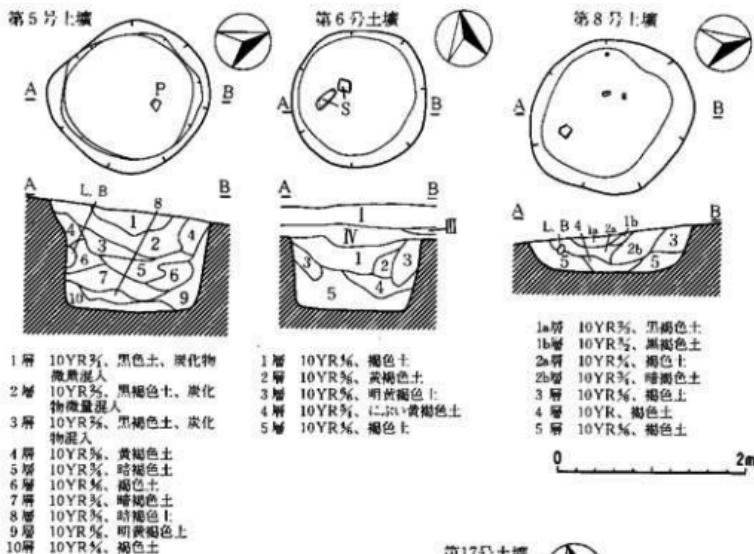
土壌の配列としては、円筒状のものが東と西へ弧状に並ぶのに対し、ナベ底状のものは、東西にはほぼ直線的に並ぶ。フラスコ状はほぼ中央に位置する。他調査区の土壌が高密度で密集するのに対し、大型のものが、点在するのが特徴である。住居跡と重複するものが5基あるが土壌同志の重複はみられない。

類似土壌の機能については、貯蔵穴、土壌墓等の諸説があるが、本地区で検出されたものについて主機能を特定するに至らなかった。しかし、大型の円筒形土壠の完形土器や大穀は、「副葬品」、「抱き石」と考えることも可能であろう。

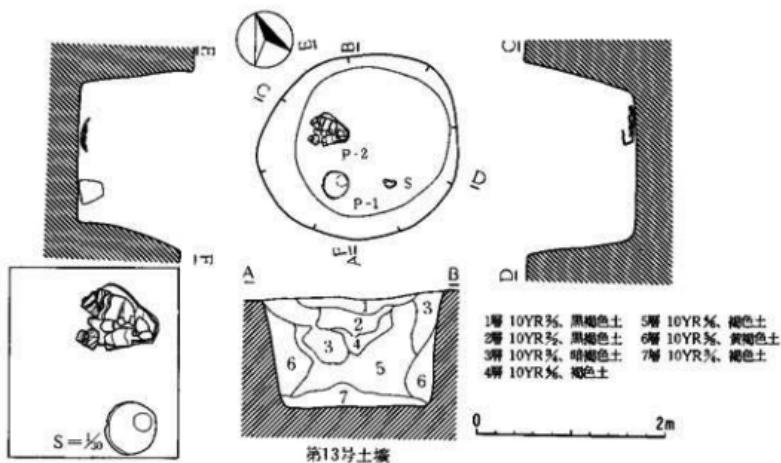
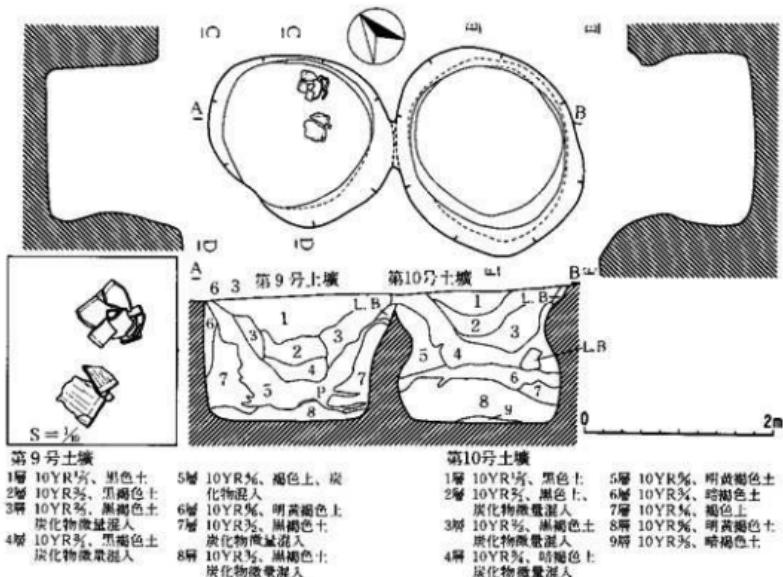
（三浦）

第11表 VII区 土壌観察一覧表（第167～169図）

土壠 番号	検出データID	重複関係	平面形	形態	計測値 (単位cm)			出土遺物			土壠の 時期
					南北部	東西部	深さ	土器	陶片	石器	
5	I Z-9 6		不整円形	円筒状	(174)×164	136×132	120	○	1	○	古
6	I Z-9 7		円形	円筒状	154×144	128×122	80	○	○	○	*
7	I Z 100～I Z 101		不整円形	フラスコ	222×172	164×174	160	○	1	○	古
8	II B-1 0 0		円形	舟底状	180×160	130×120	50	○	○	○	*
9	I Y-1 0 1		不整円形	円筒状	198×178	156×160	140	1			*
10	I Y-100～I Y-101		円形	フラスコ	228×190	180×144	150				*
11	I Y-102～I Y-103		不整円形	不整形	230×200	159×148	115			○	*
12	II A-1 0 3		不整円形	円筒状	214×204	192×168	125			○	*
13	II A-1 0 0		不整円形	円筒状	215×194	166×158	120	○	2	○	古
14	I Z 9 3		円形	ナリ鉢状	232×212	174×138	110	○			*
15	II B-9 9		不整円形	舟底状	192×174	166×154	60				*
16	II C-9 9	>5H	円形	フラスコ	112×100	135×125	115				*
17	I Z-98～II A-98		円形	フラスコ	152×148	180×160	100		○		*
18	II B-1 0 3	>14H	不整円形	舟底状	140×110	120×75	20				*
19	II B-1 0 5	>15H	指円形	円筒状	210×130	195×110	60				*
20	II C 1 0 0	<11H	不整円形	舟底状	250×190	220×130	40	○	1		古
21	II D 100～II E 100	>8H	不整円形	不整形	150×(140)	120×(80)	60				*
22	I Z-9 7	>10H	不整円形	ナリ鉢状	130×100		50				*

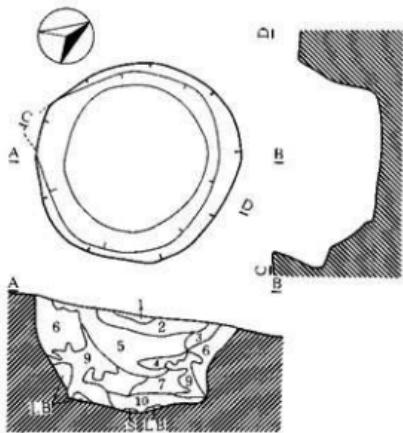


第167図 土壤(1)

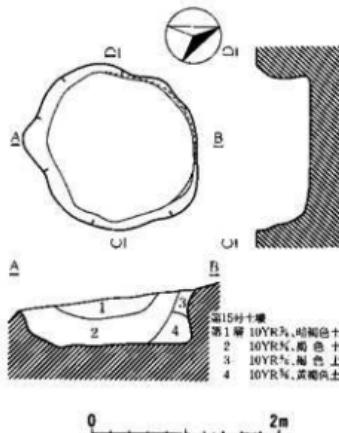


第168圖 土壤(2)

第11号土壤

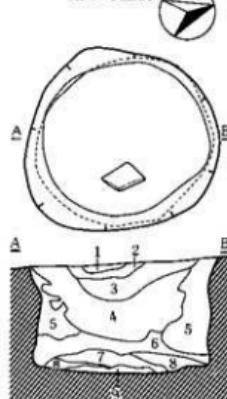


第15号土壤



0 2m

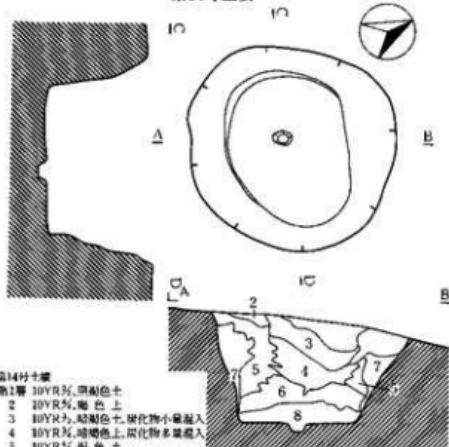
第12号土壤



第11号土壤

第1层 10YR 5/6, 黑色土 6带 10YH 5/6, 墓脚色土
2 10YR 5/6, 黑褐色土 7带 10YK 4/1, 棕色土
3 10YR 5/6, 墓脚色土 8带 10YR 5/6, 墓脚色土
4 10YR 5/6, 黑色土 9带 10YR 5/6, 棕色土
5 10YR 5/6, 墓脚色土 10带 10YR 5/2, 墓脚色土

第14号土壤



第169図 土壤(3)

2. 出土遺物

(1) 土器 (第170~174図)

VII区では、縄文時代中期、後期の土器が出土したが、VII区が以前、重機により周囲から土が盛られ、遺物包含層が搅乱されていることから、遺構内以外の出土遺物が以前からVII区に存在したものか判別ができない。そのことから、VII区の状況、性格を知る上での資料価値は低くなる。したがって、VII区では、遺構外出土土器については、実測図及び拓影図を掲載するにとどめた。

(7) III群土器

III群3類

縄文時代中期末の大木10式に併行すると思われるもので、8個体出土した。いずれも住居跡より出土している。(170図1、2・173図4) — 2号住居跡、(173図6) — 4a号住居跡、(170図8) — 5号住居跡、(170図13、173図12・13) — 14号住居跡である。

器形を知り得るものは以下に記す。

(170図8)は、胴部がやや張り、口縁部が外反する深鉢形土器である。口縁に3個(2個は破損によりない)の山形突起を有すると思われる。(口径18.6cm、最大胴径16.4cm、残部器高20.1cm、器厚5~6mm)。

(170図13)は、4波状縁を呈し、胴部が張り、口縁部が外反しながら立ち上がり、口唇部近くで内湾する深鉢形土器である。(口径18.5cm、底径8.4cm、最大胴径13.5cm、器高29.5cm、器厚5~6mm)。

(170図1、2)は、やや胴部がはり、口縁部が外反する平縁の深鉢形土器である。推定口径は(1)15cm、(2)20.5cmである。

(173図6)は、(170図13)と同様の器形を呈すると思われ、波状縁の頂部には刻み目が施される。

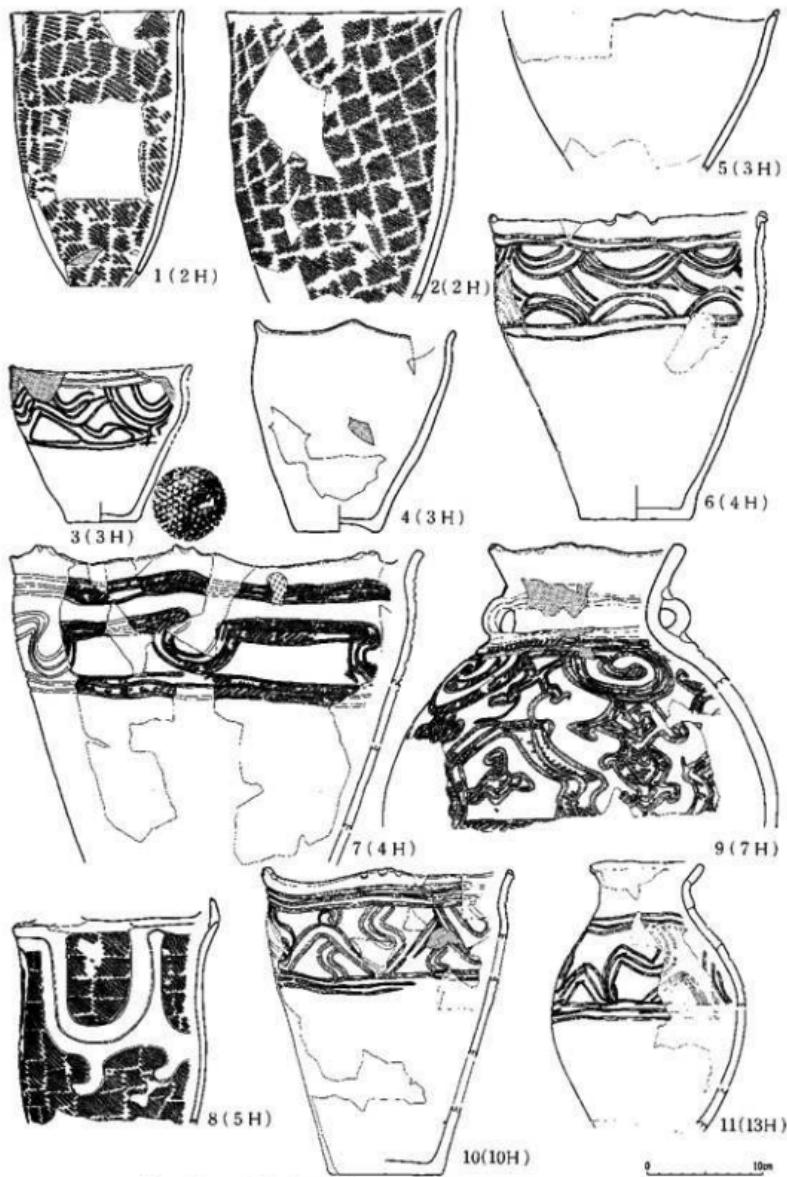
文様を個々について見てみると、以下のとおりになる。

(170図8)は、地文に単節斜縄文(LR)を施した後に、沈線文によるU字状文、コ状文、波頭状文が施され、更に充填縄文の技法が用いられる。

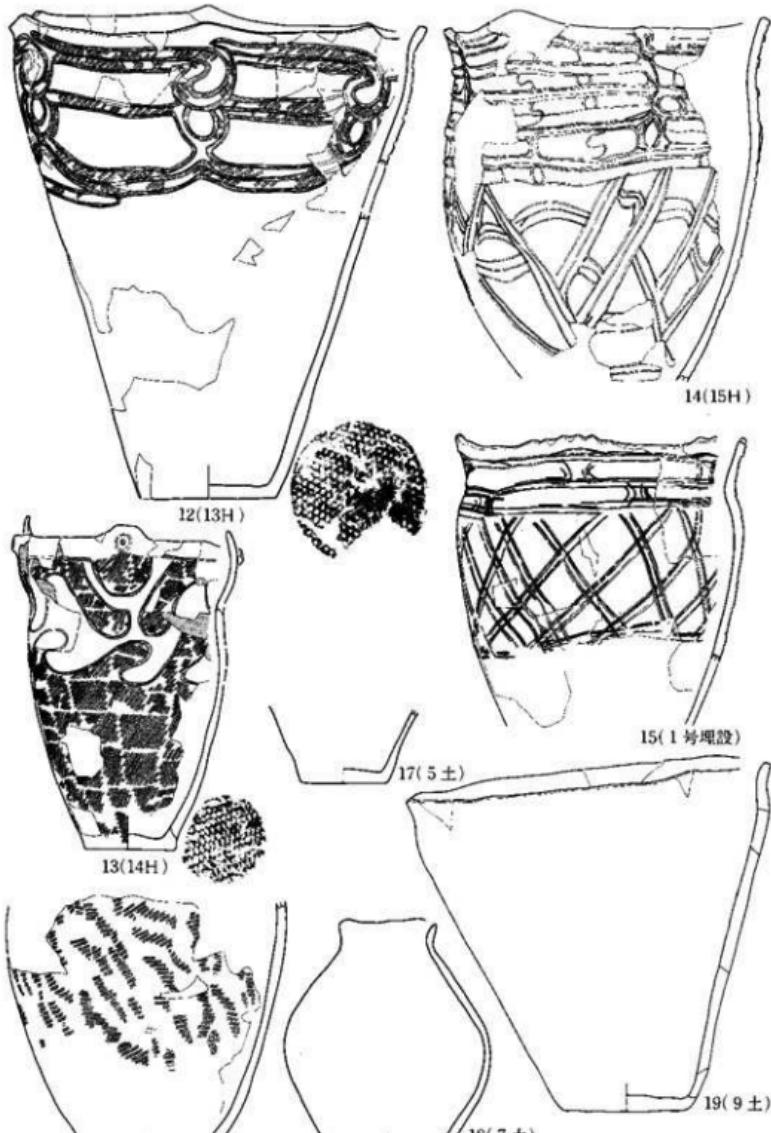
(170図13)は、地文に単節斜縄文(LR)を施した後に、△状の沈線文、波頭状文が施され、更に磨消縄文の技法が用いられる。4個の波状縁部分には、粘土の貼り付けによるボタン状突起が、1個づつ配される。

(173図12)は、地文に単節斜縄文(LR)を施した後に、波頭状文が施され、更に充填縄文の技法が用いられる。

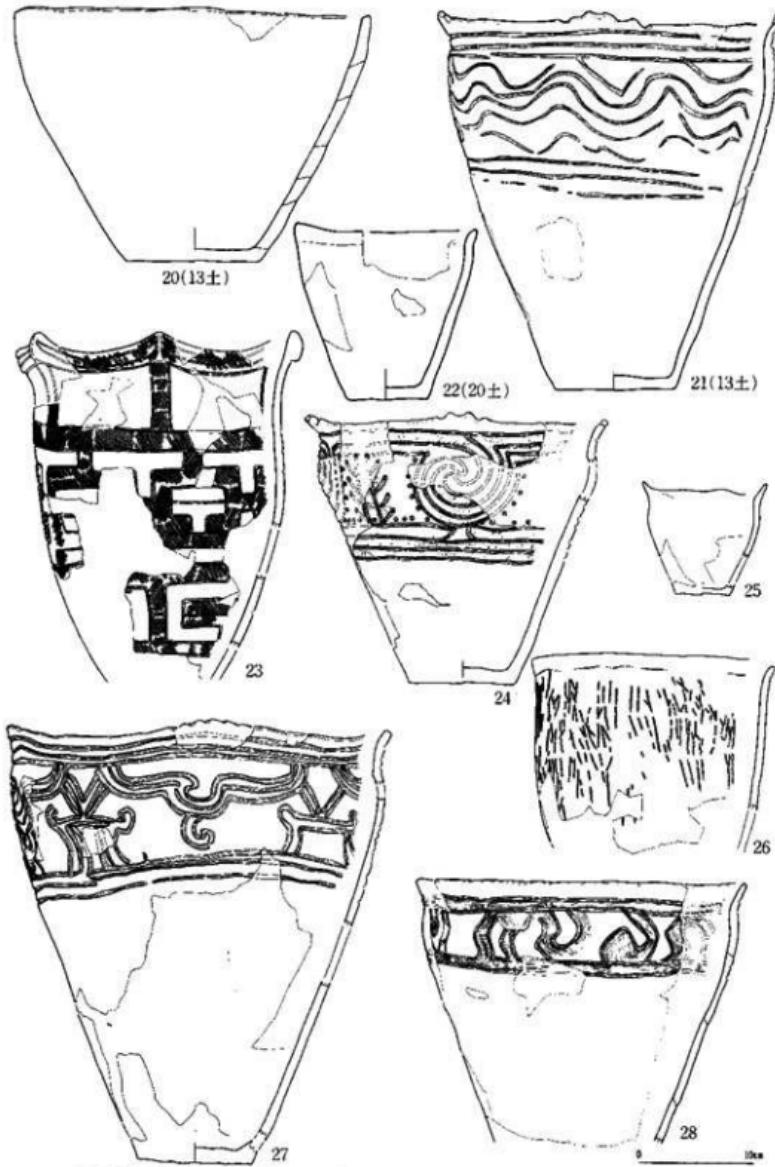
(170図1・2、173図6)は、全面に単節斜縄文、(173図13)は、全面に無節斜縄文が施される。内面は、いずれも良く調整され平滑になっている。光沢をもつものもみられる。胎土に



第170図 VII区出土土器実測図(1) —— 住居跡出土(1~11)



第171図 7区出土土器実測図(2) — 住居跡出土(12~14)・土器埋設遺構(15,16)
土壌出土(17~19)



第172図 VII区出土土器実測図 (3) — 土壌出土 (20~22)・グリッド一括 (23~28)

は、砂粒を含み、焼成は良い。色調は、赤褐色、暗褐色、黒褐色を呈する。

(一条)

(イ) 第IV群土器

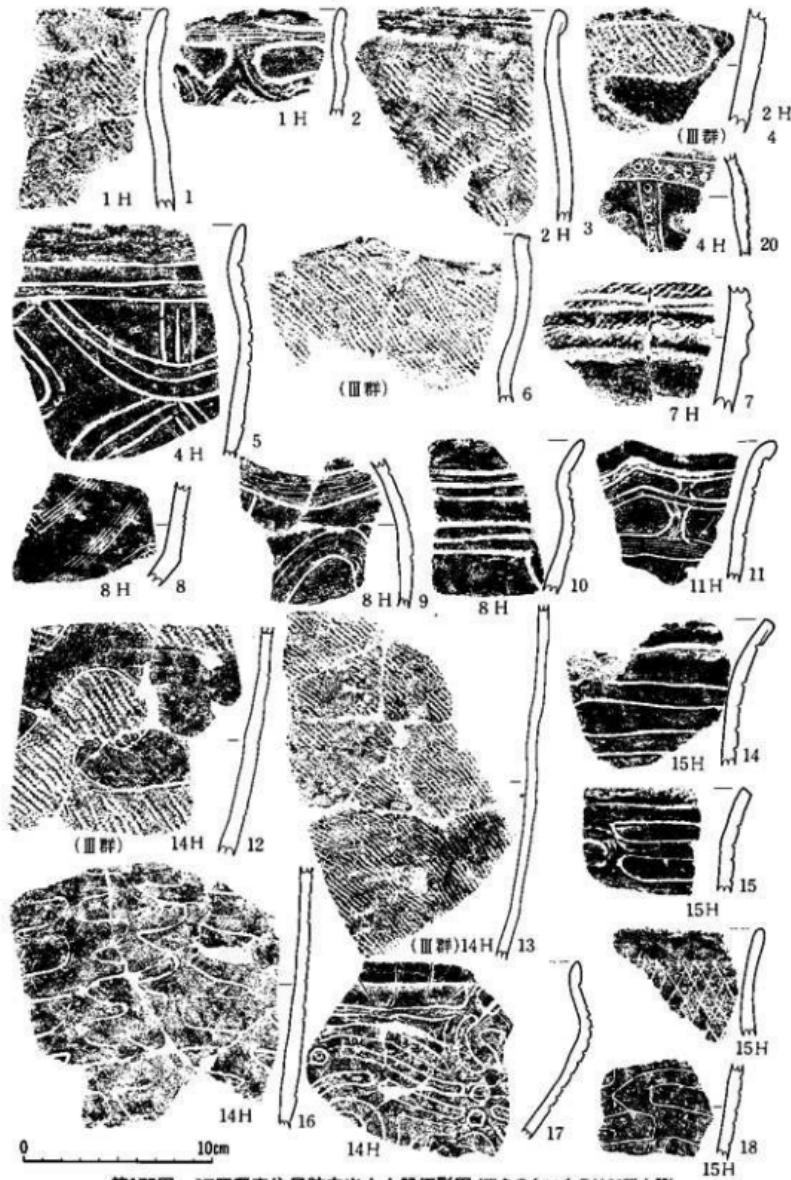
本地区から出土した第IV群土器の総量は、ダンボール箱で約8箱分であった。そのうち、遺構外から出土したものは約5箱分に相当する。5箱分の土器のほとんどが、本区南斜面から出土している。ただし、遺構外出土土器については、前述しているとおり、本区が過去に重機による盛土作業が実施されていることから、遺構外出土土器とはいえ、一般的にグリッド一括等で取り上げる遺構外出土土器という取り扱いと同一視はできず、現に5箱分の土器についてみても破片がほとんど接合できない状況であり、挿図に拓図を掲示するにとどめた。

資料的価値は、このような状況下の土器であるため、大分低下しているが、それでも他の時期の出土土器に比較すれば一番量的に多く、本区出土土器の中で第IV群土器が9割強を占めている。

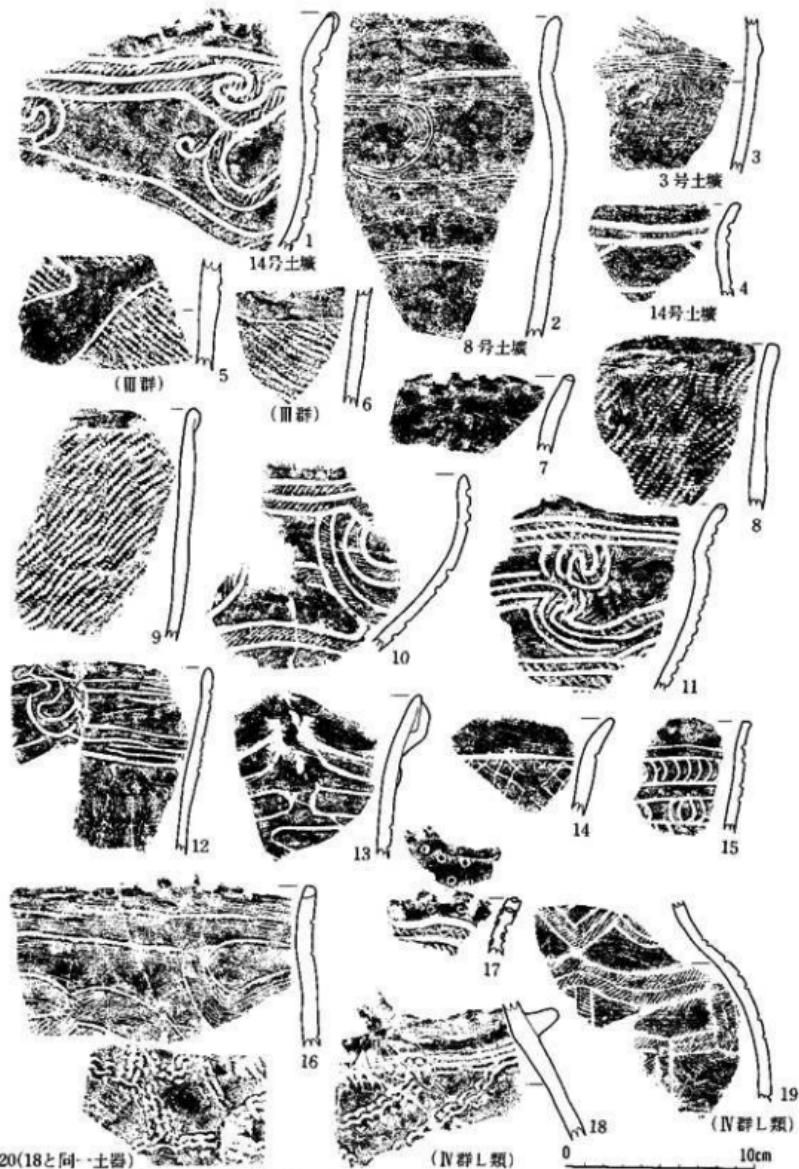
(遠藤)

第12表 VII区 出土土器(復原実測土器)観察一覧表

土器 番号	出 土 地 点	層	計 測 値(cm)			器 形	主 文 様	時 期		備 考
			口 径	底 径	高 度			人 分 数	分 類	
1	2H	床 面	(15.0)	(--)	(24.0)	鉢	地文縦文(L.R.)	III群		
2	*	床 面	(20.6)	(--)	(25.0)	鉢	地文縦文(L.R.)	III群		
3	3H	床 面	(16.0)	6.3	13.6	鉢	沈 縦文	IV群	G-1	
4	*	フカ上	17.5	7.3	18.5	深鉢	無 文	IV群	A-1	
5	*	フカ上3層	(24.0)	(--)	(14.0)	鉢	無 文	IV群	A-1	
6	4H	フカ上3層	24.7	9.6	26.9	深鉢	沈 縦文	IV群	G-1	
7	*	フカ上3層	(--)	(--)	(28.0)	深鉢	光環縦文	IV群	F-2	
8	5H	床 面	18.1	(--)	(20.0)	深鉢	地文縦文、沈縦文	III群		大木10式 縦行縦文
9	7H	フカ上	17.3	(--)	(25.0)	鉢	光環縦文	IV群	F-2	縦状把手
10	10H	フカ上	22.0	9.7	26.9	深鉢	沈 縦文	IV群	G-1	
11	13H	フカ上	9.9	(--)	(23.0)	壺	沈 縦文	IV群	G-1	
12	*	フカ上	36.5	12.0	43.5	深鉢	磨消縦文	IV群	F-2	
13	14H	床 面	18.8	8.0	29.5	深鉢	地文縦文、沈縦文	III群		大木10式 縦行縦文
14	15H	床 面	(28.6)	(--)	(32.7)	深鉢	地文縦乱付、沈縦文	IV群	G-2	
15	埋没1		25.5	(--)	(20.0)	深鉢	平行沈縦文	IV群	G-1	
16	埋没2		(--)	11.0	(23.5)	深鉢	地文縦文(L.R.)	IV群	(B)	
17	5±	底 面	(13.0)	7.8	(7.0)	(深鉢)		IV群	(G)	底邊部
18	7上	底 面	8.7	8.3	21.6	壺	無 文	IV群	A-1	
19	9上	底 面	32.0	11.5	31.4	鉢	無 文	IV群	A-1	
20	13±	底 面	31.1	11.6	22.2	鉢	無 文	IV群	A-1	
21	*	フカ上	30.5	16.7	33.3	深鉢	沈 縦文	IV群	G-1	
22	20±	フカ上	16.0	7.1	15.5	鉢	折り返し口縁、無文	IV群	A-1	
23	24±	23.6	(--)	(30.7)	深鉢	光環縦文	IV群	K		
24	*		26.6	9.5	23.9	深鉢	朝突文、地文縦文	IV群	F(?)	
25	*		10.8	4.5	9.9	小形鉢	無 文	IV群	A-1	
26	*		21.4	(--)	(17.5)	深鉢	横条体回転文	IV群	D	
27	*		33.7	10.0	39.0	深鉢	沈 縦文	IV群	G-1	
28	*		(24.6)	(--)	(22.0)	深鉢	磨削状沈縦文	IV群	H-1	



第173図 VII区竪穴住居跡内出土土器拓影図 (群名のないものはIV群土器)



20(18と同一土器)

第174図 VII区土壤内出土(1~4)・遺構外出土(5~20)土器拓影図

(2) 石器

第Ⅰ群石器（第175図1～10）

豊穴住居跡（第2・4・11・14号）から、F—I類2点、F—II類2点、F—III類1点出土しているほか、両極石核が1点（4号）出土している。

遺構外からは、A—I類の石鏃1点、F—I類1点、F—II類2点、F—III類3点、F—IV類1点が出土したほか、両極石核が1点出土している。すべて、南斜面上からの出土である。

2は、石匙の破片とも思えるものである。

9は、尖頭状を呈する部分に、彫刀面が作出されている。

石質は、珪質頁岩6点、玉ずい質の珪質頁岩5点、チャート1点である。 (白山)

第Ⅱ群石器

I類 7号住居跡から1点（整理番号77）・遺構外から3点出土した（同78・80・409）。409は基部欠損後、折断面を敲き石に転用している。

第Ⅲ群石器

K類 II B c類が2点出土した。遺構外出土である。

L類 2H—2点・5H—2点・7H—1点・8H—1点・9H—1点・10H—1点・14H—4点・15H—1点・6土—1点・17土—1点・遺構外4点の出土である。

10H（十腰内I式期の住居跡）出土の316は、IV—1区出土の1に類似するが、1端部に敲打による剥離が認められる。

6号土壤出土の325は、片面にスリの痕跡有するもので中央部が内溝している。

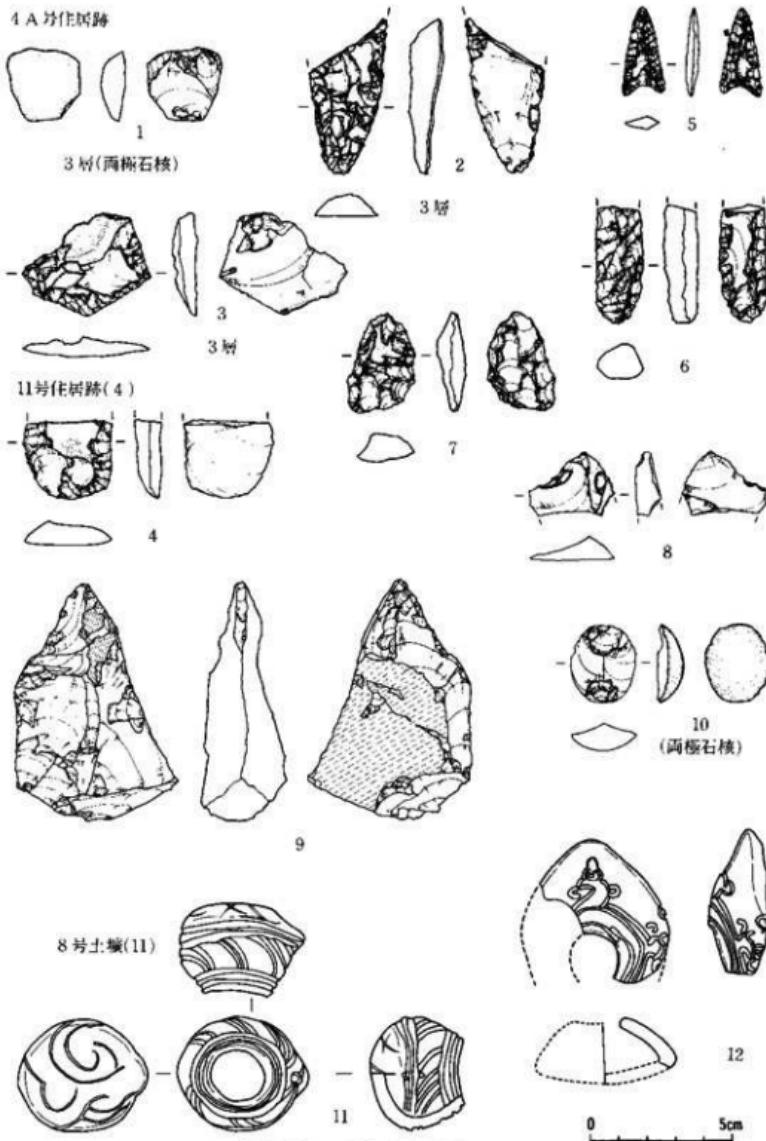
IV—1区のL—I類に比して分厚い素材を使用しているものが多い。

M類 1—H3点・2H—4点・3H—1点・5H—1点・7H—1点・13H—1点・14H—1点・6土—1点・遺構外3点の出土である。全体に大型の礫が多く、床面等出土のものは大型の自然礫の一部を使用している。 (白鳥)

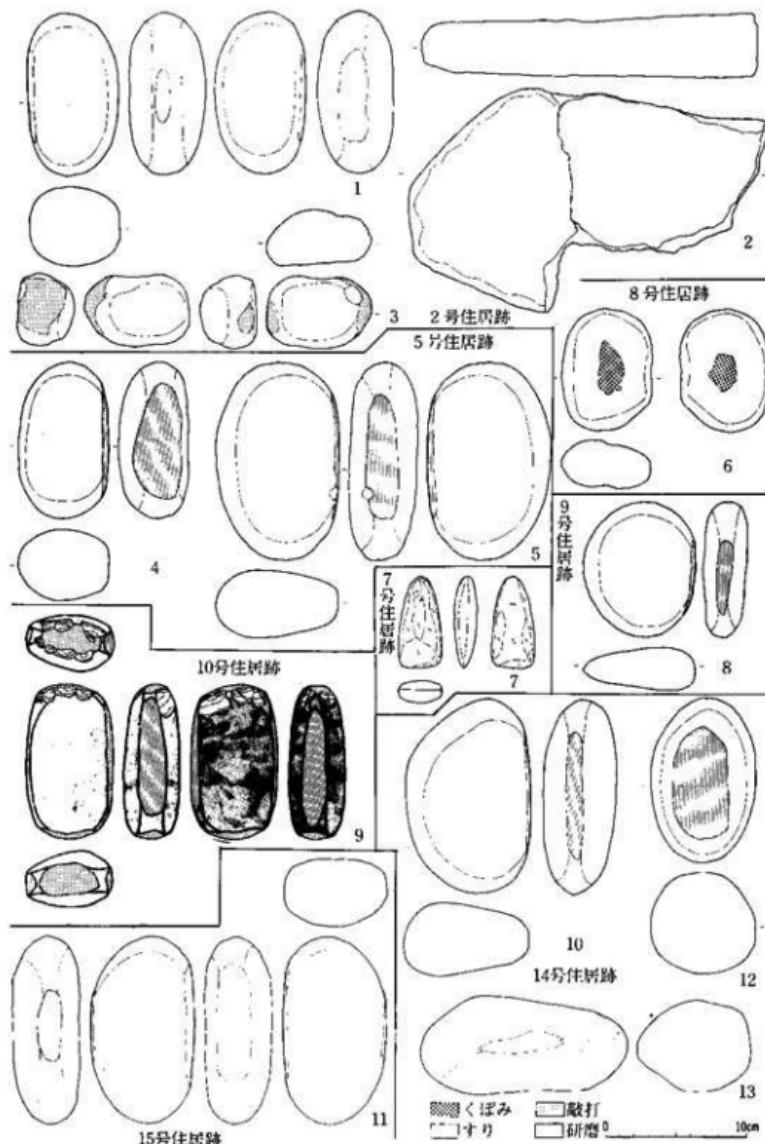
(3) その他の遺物（第175図11、12）

靴形土製品が2点出土した。（11）は、8号土壤覆土から出土した。大きさは、高さ3.3cm、口径1.8cm、底面長径4.4cm、短径4.2cmで、文様は平行沈線文が施される。色調は暗赤褐色を呈する。（12）は、底面及び側面を欠損している。大きさは、高さ2.3cm口径1.3cm（推定）で、底面長径、短径は計測不能である。文様は、平行沈線文、入組状沈線文が施される。色調は、黒褐色を呈する。2点ともにつま先部分に貫通孔がみられる。また（11）の内面には、黒い物質が付着しており、中に何かを入れていたと思われる。

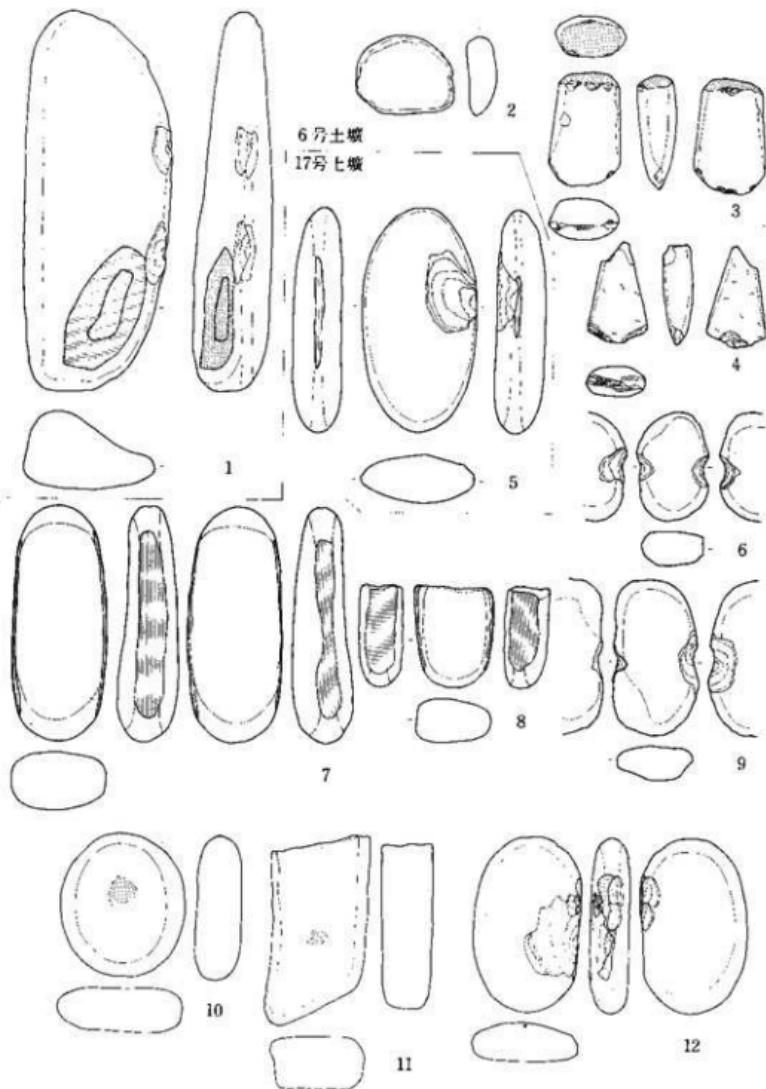
（一条）



第175図 VII区出土の石器と土製品



第176図 第7区出土石器 (1)



第177図 第VI区出土石器（2）

小 結

これまで本地区の検出遺構の概要を述べてきたが、次に各遺構の台地上の占地の有り方や、各時期の集落構成について簡単に分析を加えたいと思う。

〔大木10式併行期〕

大木10式併行期の土器は極めて少ない。その中でも第5号住居跡、第14号住居跡、第2号住居跡の床面及び床面直上の土器が主体で、遺構外からのものは数片程度である。上記3軒のうち、第5号住居跡及び第14号住居跡床面出土の図170-8・171-13は、ボタン状粘土粒貼付や、充填繩文による「U」状、弧状、方形区画文等の文様帶が横位に展開する文様を特徴とする土器群である。これらの特徴は大木10式併行期の中でも終末期に位置づけることが可能であろう。また、第2号住居跡出土の図170-1、2は地文繩文だけであるが、細片資料は大木10式期であるので、本住居跡も前二者に伴出する可能性が極めて高い。なお、該期に直接後続する型式期の遺物は出土していない。

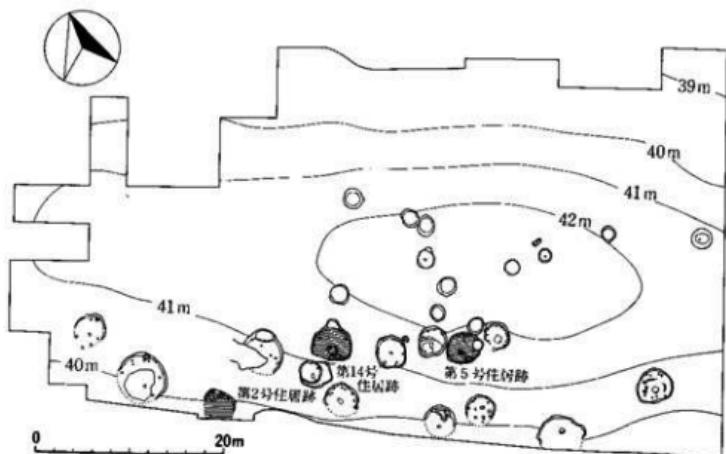
この3軒の台地上の占地の有り方を図178でみると、いずれも馬背状台地の南斜面に構築され、しかも、各住居間は8.5m程の等距離である。全体に弧状配置となる。また、第2号住居跡の南側は直接低湿地に連なることから、これ以外の住居跡の存在は考えられない。したがって、大木10式併行終末期に3軒の堅穴住居で構成される小さな集落が本台地の南斜面に形成されていたが、その集落は短期間営まれていただけで廃絶したものと考えられる。

〔十腰内I式期〕

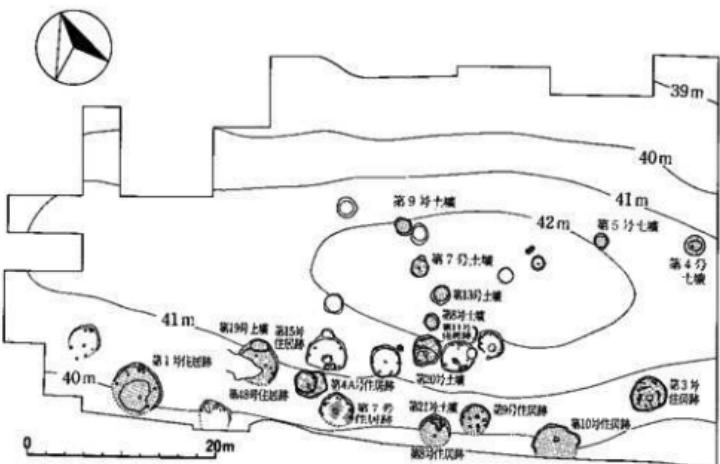
出土土器からみて十腰内I式期と推定される遺構は、堅穴住居跡13軒、土器埋設遺構2基、土壤13基である。地形上での占地をみると、各住居跡は馬背状台地の南斜面に、また、土壤は台地の頂部にそれぞれ配置されている。台地頂部に配された土壤は、大型の円筒形土壤がほとんどである。

南斜面に構築された該期の住居ノ群は、出土土器で少なくとも二大別が可能である。これは、第15号住居跡出土の土器（図171-14）群のグループ（A期）、第3号住居跡、第10号住居跡出土の土器（図170-3、4、10）を中心とするグループ（B期）である。前者は十腰内I式の前葉期を担う土器であり、後者は十腰内I式の全盛期（中葉期）のものとして位置づけることが可能である。したがって、第15号住居跡を中心とする集落と、第3号住居跡を中心とする集落の2時期が考えられる。しかし、住居の営まれた時期を推定する主要な要素である床面出土等の遺物が極めて少ないとから、該期の多くの住居の時期決定に明確さを欠く。本稿では、少なくともA期、B期の2時期の存在を指摘する程度にとどめ、詳細な分析とその結果については本遺跡に係る調査が終了した後の報告に譲る。

（三浦）



(1) 繩文時代中期(大木10式併行期)遺構分布(大木10式併行期末期の)
1時期で構成される。



(2) 繩文時代後期(十塁内I式期)遺構分布(十塁内I式期の2~3時期で
構成される。
(1)及び(2)のスクリーン・トーンで図示した以外は時期不詳)

第V章 調査の成果

本報告書は、例言にも記述したとおり、今回の調査のメインであったIV-1区が第1次調査及び昭和60年度に発掘調査を実施した区域と各々隣接し合っているということから、一つの遺跡の調査における中間発表的意味を含んでいる内容であるといえる。

このような点をふまえ、本報告書に記述した内容は、あくまでも資料公表が第一であるという共通理解のもとに、事実記載に重きをおいたものである。

したがって遺跡（第1次調査…昭和58年度・第2次調査…昭和59年度・第3次最終調査…昭和60年度）・遺構・遺物という巨視的な見地からのとらえ方はしなかった。それは、昭和61年度に刊行予定の調査報告書が、遺跡の中心部と思われるIV-1区を含めた「大石平遺跡」の最終調査報告書になるからであり、その中で「大石平遺跡」の遺構・遺物を総合的に考察しようと考えたからである。

そこで、本稿では、昭和59年度の発掘調査における成果と問題提起という観点から、いくつかの項目を取り上げ、それについて記述することとした。

（遠藤）

〈竪穴住居跡について〉

第2次調査で検出したIV-1区の13軒の住居跡について、構築年代、平面形、規模、炉等を簡単にまとめ、考察にかえることとする。

13軒の住居跡のうち、床面・ピットからの出土土器及び炉に転用した土器から、構築年代を決定できるものは、第1号・第5号・第8号～第10号住居跡の5軒である。このうち、第1号及び第10号住居跡は弥生時代に属し、他の3軒は、縄文時代に属する。また、以上の5軒を除いた8軒の住居跡について、床面直上及び覆土中の土器や出土状況から推定すると、縄文時代に属すると思われる。以下、時代別に記述する。

縄文時代の竪穴住居跡は、11軒である。いずれも、後期前半に属するものと思われる。これを第1次調査に当てはめて考えると、第II期（後期初頭～前半）に相当すると思われるのは第11号住居跡、第III期（十腰内I式）に相当するものと思われるは、第5号・第8号・第9号住居跡である。残りの6軒については、良好な土器が出土しておらず、不明であるが、多くはIII期に属する可能性がある。

平面形は、形状のわかるものでは、円形・楕円形・不整形なものが、各2軒ずつある。

規模についてみると、最大は長径4.7mの第13号住居跡、最小は長径2.9mの第5号住居跡である。長径4.5m・短径4m以内のBグループ（第1次調査での分類）に属するものが4軒で最も多く、長径4.5mで短径4m以内のAグループに属するもの2軒、長径5.5mで短径5m以内のCグループは1軒である。

炉についてみると、地床炉4軒、石組炉5軒、単独鍊炉1軒となっている。

弥生時代の竪穴住居跡は、第1号住居跡と第10号住居跡の2軒である。縦年的には出土土器から、須藤隆氏縦年の2期（第1次調査での弥生第2群土器）にほぼ相当する。いずれも、完全な形で検出されなかつたが、前述の縄文時代後期前半のものより大きく、第1号は長径8.0m、第10号は推定ではあるが6.5mである。いずれも、平面形は梢円形を呈するものと思われる。

炉は、第1号跡が土器埋設炉で、第10号跡が土器埋設石囲炉である。但し、第10号跡の場合、当初は地床炉（この可能性の方が強い）か土器埋設炉として使用し、建て替えによって土器埋設石囲炉に変えた可能性が考えられる。

柱穴は、4本柱を基本とし、壁際に支柱を巡らしたものと考えられる。第10号跡では主柱穴と考えられるピットが二重（うち1個は未検出）に検出され、柱の建て替えが行われたものと考えられ、その時に、炉も改造されたのであろう。なお、住居跡の改造が、原位置のままで、柱のみを移動させたものか、増築されたものかは把握できなかつた。

〈IV-1区における土壤の時期について〉

(1) 土壤の確認状況からみた場合

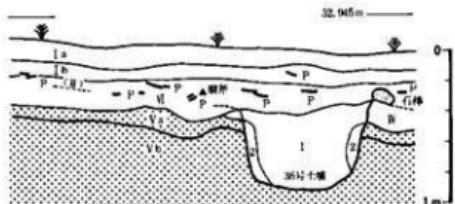
IV-1区における土層は、遺跡全体の基本層序に準じてみると、基本的には、上位からⅠ層（表土）Ⅱ層、Ⅲ層、Ⅳ層、Ⅴ層（ローム層、地山）の順となっているが、Ⅲ層は部分的にしか認められず、間層的な扱いをされている層となつてゐる。このⅢ層欠如という状況が、両者共に暗褐色を呈するⅡ層とⅣ層の識別をほとんど不可能にしてしまう事態へ直面させることになつた。

このことは、遺構精査時における土層からみた遺構構築面の観察に大きな障害となつたことはいうまでもないことである。それに加えて、遺構確認作業の段階では、土層観察用のベルトセクションも除去していくわけで、構築面の確認が困難であることはなおさらである。

結果的には、160基の土壤のうち、ほとんどの土壤は、このような状況下で構築面を確認することができなかつたが、幸いにも160基中第36・39号の二つの土壤の構築面が残しておいたベルトセクションの壁面に明瞭に現われた。

この2例についてみると、第179図のごとく土壤の構築面は、第Ⅱ層が人為的に動かされていないとすれば（動いていないと調査時に判断した）確実に第Ⅳ層中にあることがわかる。

全体の1割にも満たない2例で、160基全体を予測することは非常に困難であるが、あえて予測すれば、160基の大半は、時代差があるにせよ第Ⅳ層中であろうと考えている。第Ⅳ層は、比較的の層厚が厚く、弥生式土器及び後期を中心とした縄文式土器が混在している層である。



第179図 土壌構築面

(2) 土壌内出土土器からみた場合

土壌の時期を決定し得る最大の要素として、土壌から出土した土器を挙げることができる。ただし、その出土土器もある程度、土壌底面から出土していなければ時期決定をするには至らず、覆土中の出土土器では余り信憑性がないといえる。

以上の点をふまえ、160基の土壌を調べると次のようになる。

遺物が出土しない土壌	33基
土器は出土せず石器のみ	3基
土壌の時期を把握できるに至らない	
遺物が出土した土壌	約80基
出土状況及び少量の土器出土	
ある程度土壌の時期を把握できるよう土器出土	約45基

土壌内出土土器からみた土壌の時期については、全体の約3分の1に相当する約45基の土壌について把握することができた。(第IV章の土壌観察一覧表に記載)。

それらをまとめると、45基のうち、大半が縄文時代後期のもので42基あり、残り3基は弥生時代である。縄文時代早・前・中・晚期の土壌は認められなかった。これらのことから、160基の土壌の帰属時期を予測すると、縄文時代後期と弥生時代であり、その中でも縄文時代後期(十腰内I群期)が主体であろうと考えられる。

(遠藤)

〈「内外面連続山形文」土器について〉

本土器は、第15・79・88図に掲示した土器である。この土器を本項で取り上げ記述することにしたのは、小さな連続した鋸歯状の山形文それ自体と、内面全面にも文様を施していること等、極めて類例の少ない特異な土器だからである。この種の土器は、第15図-1の復原できた1個体のほか、第88図に示した破片約40片である。

連続した山形文を有する縄文時代後期の土器は余り出土例がなく、第1次調査で器外面にのみこの文様の施文された土器が復原可能な状態で1個のみ出土している。内面に部分的に文様が施文されている土器はそれほど珍らしくはないが、このように全面に施文されている土器の出土例はほとんどみられない。なお、約40片の破片の内面については、部分的に連続した山形文が施文されているものが数片みられるだけである。従って、表題に付したような内外面全面

に文様が施されている土器は、この土器1点だけである。以下、この土器について記述する。

本土器は、IV-1区第9号堅穴住居跡の床面からつぶれた状態で出土した。

器形は、口縁に1個（当初は対で2個あったと思われる。）の小突起を有する小波状口縁の小型の鉢形を呈する。計測値は、口径14.5cm、底径4.3cm、器高10.0cm、器厚0.3～0.5cmである。胎土は細砂を多く含んでいるが、焼成は堅くしまり良好である。

文様は、器外面には胴上半部にR Lの単節で施された地文縄文の上に沈線による渦巻文、連続する山形文、カニバサミ状文の組合せによる文様構成がされており、器内面は、無文の面に沈線で外面と同じ文様が施されている。器内外面とも、沈線による文様の描き方は、粗雑で、施文当初に綿密な文様構成が組み立てられないままに施文したように感じ取られる。

本土器の帰属時期は、共伴する土器や個々の沈線文様、器形等から判断して、縄文時代後期前葉と考えられ、型式名的には「十腹内I群土器」の範疇の土器ととらえることができる。

本土器については、その特異性から、調査指導員を含めた関係者一同で討議の結果、『内外面連続山形文』という名称を付すこととした。

用途については、現在のところ不明としかいえない。それは、土器の沈線文様の箇所や器面全体を観察すると、摩滅している箇所がほとんどなく、日常雑器として頻繁に使用された器ではないと思われるからである。推測するとすれば、祭事的な場合にのみ使用するために作られた器ではないかと考えられる。

本土器についての考察は、今後この種の資料の増加に期待し、研究課題としたい。（遠藤）

〈両極石核・剥片と、それらを素材とする石器について〉

IV-1区からは、661点の剥片石器と約3,600点の剥片が出土した。その中には、両極技法によって生産された石核や剥片のほかに、それらを素材としている石器が数多く見られたのでもこのことについて、まとめてみたい。

両極技法によって生産された石核・剥片は、確認できたものだけでも、剥片全体の約1割を占めている。石質は、玉ずい質の珪質頁岩が約7割、珪質頁岩が約3割で、他に玉ずいが若干ある。しかし、剥片全体の石質は、6割強が玉ずい質の珪質頁岩であるため、両極技法によるものと認定できなかった剥片の中にも、両極石核・剥片が多数含まれているものと思われる。

両極石核・剥片を素材としている石器には、ビエス・エスキューユ、石鏃、石錐、不定形スクレイパー（F-II類）、R-フレイク（F-III類）がある。

ビエス・エスキューユは、第IV章第1節において記述したように、本書における分類基準から、両極石核との区別の問題があり、両極石核を多分に含んでいるものと思われる。

石鏃は、細部調整が両面に施され主要剥離面が広く残されているものが少ないと、確認できたものは3点しかない。いずれも、玉ずい質の珪質頁岩を素材としているもので、I c類

に含まれるものである。

石錐は、III類・IV類に数点見られ、II類にも、両極石核を素材としている可能性が考えられるものがある。両極技法によって生産された角柱状の剥片の一部に細部調整を施したもの、その特徴を最も明瞭に現している。

不定形スクレーパー（F—I類）では、両極石核・剥片の側線や末端に細部調整を施したものがある。片面縁部加工のものがほとんどで、裏面は平坦な剥離面が1面見られるものが多い。また、II—f類の第22図5・第58図14は截断面に細部調整を施したものと思われる。

以上のほかに、両極石核・剥片の一部に細部調整を施しただけの、いわゆるR—フレイクが25点ある。また、確認できなかつたが、その可能性の考えられるものが、これらのはかにも多数ある。したがつて、岡村氏（1983）の言うように、両極技法は扁平な小円錐を打削するには有効な手段であり、それによって生産された両極石核・剥片を素材として、前述したような小形の石器を製作したものであろう。

これらの石器や石核・剥片類の所属時期は、①縄文時代後期前半（十腰内I式期）の遺構から出土している例や、②分布状況から、縄文時代後期前半の土器が多量に出土した地域（DC～DE—377～379グリッド）に濃密に分布すること、③弥生時代の第3号屋外炉の近辺（CR—383グリッド）にも濃密に分布していること、④前年度の報告で、弥生時代の第16号竪穴遺構の記述の中に、両極石核（？）が出土していることなどから、縄文時代後期前半と弥生時代の両方が考えられる。

注　岡村道雄 1983「ピエス・エスキューユ、楔形石器」『縄文文化の研究7』雄山閣

〈L—I类（複合痕跡を有する敲磨器）について〉

第122図—6は、本類の中で最も特徴的な石器である。L—I类の項でも述べたが、更に特徴を細かく記述し、この観察結果から考察を試みた。

平坦面 研磨と浅い凹みの痕跡を有する。全体が研磨によって構成された面で、凹みよりも新しい痕跡である。凹みはL—I类（凹石）の痕跡より相当に浅いもので、磨消されかかっているものもある。これは、本来、深い凹み又は強い器面の荒れが、研磨によって更に浅くなつたものと考えられる。

側縁部（面） 擦り及び研磨による面である。部分的に敲打によるものと思われる痕跡も有する。擦りの後に研磨がなされたもので、ややざらつく部分と光沢のある部分がある。また一方が直線的で他方はやや短く、曲線的である。

端部（面） 敲打痕を有し、更に軽い研磨がなされている。敲打は、L—I类（敲石）とは異なるもので、潰し整形様のものである。敲打痕は側縁の研磨面まで及んでいる。

これらの諸特徴から、この石器を使用による痕跡の集合体として位置付けることに疑問がも

たれ、使用痕跡というよりは、磨製石斧等の器体整形に近いものと考えられる。

調理具・加工具としての石器とするよりは、より製品化されたものとしての性格が強い。

この石器は、L—I—IV類としたが、本来、最終的に研磨がなされていることからL—I類に包含されるべき器種と思われる。また、各種の痕跡はL—I—B類としたものと類似点が非常に多いため本石器の成立過程の再検討を試みた。この中には、第1次調査の報文中で坂本が、定型化された敲磨器としたものを含む。

L—I—B類をふまえた成立過程は、次のとおりである。(模式図参照)

1. 小判形の礫を素材とする。小型の扁平なものから、本石器のようにやや大きめの分厚いものがある。

2. 素材の左側縁が、ある程度使用された(擦り減った)段階で右側縁を使用する。(同時使用でも左方に主機能面の性格がある。)

3. 平面形上において、左側縁が直線的となる。右側縁は曲線的で、おおむね短い。平坦面に研磨が認められるものもあるが、器体中央がやや厚いものが多いようである。

4. 平坦面に敲打痕が認められる。器面の荒れ程度のものと浅い凹みのものが認められるが、研磨によって磨消されかけているものもある。研磨と敲打の順序は特定し得ない。

5. 右側縁がより直線的となるが、左方に比してやや短く、まだ曲線的である。側縁の擦り面は、素材が偏平なものはほぼ平坦面を呈しているが、肉厚のものは緩い弧状を呈する。

この段階で、端部に敲打痕もしくは擦り敵き痕が認められるが、機能面は小規模である。

6. 端部の敲打による範囲が広くなり、形状もより緩い弧状を呈する。平坦面・側線の研磨も同時進行する。

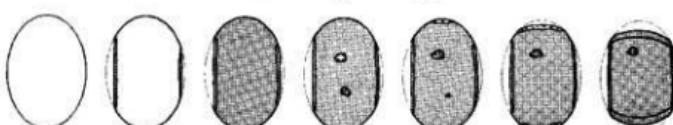
7. 本石器の端部敲打痕(潰し整形)は、平坦面・側線端に接している。

8. すべての面に研磨がなされる。(端部は軽い研磨)

9. この後の段階は不明であるが、全面にていねいな研磨が行われるものと思われる。

使用痕跡が、器体整形となるものか、またある段階から意図的に整形を行ったものかは不明であるが、最終的に磨消される凹みを有することなどから、最終段階として製品化され得たものと推察される。また、この形態が何らかの用途をもった用具として存在した可能性も考えられる。

模 式 図



ただ、すべてのL—I—B類とした石器が、この形態となり得るとは思われず、ごく一部のものに可能性がある程度であろう。第1次・2次の調査においても、この1点だけの出土であるという特殊性に意味があるものと思われる。

現段階では、石製品として把握するには無理があり、前述のとおり何らかの機能をもつ用具の可能性もあるため、単に観察結果から示唆するにとどめる。今後の調査で、この種の石器の報告を待ちたい。

(白鳥)

〈土製品の分布について〉

IV—1区の土製品の分布状況は第132図に示したが、やや特徴がみられる。湧水の南西側区域に主に分布しており、数量的にも多い。(円盤状土製品はIV—1区全般に分布するが、数量的には南西側区域に6割近く集中する) この区域では、円盤状土製品、鐸形土製品、三角柱状土製品、環状土製品が出土しており、石製品の石刀、石棒も出土している。

また、この区域では、その東側に多くの土壌が集中するにもかかわらず、かなり土壌が少なくなり、土壌からの出土遺物が全くないか、微量であるという特徴をもつ。このことや土製品の出土が多いことは、この区域が何らかの意味をもつ特徴な区域であった可能性を示唆しているのではないだろうか。第1次調査において、北林氏は、III区から、日常生活に使用しない土製品や道具がまとまって出土したことから、III区を、「ある時期においては、特殊な道具、土製品を使用した神聖な場所、換言すると祭祀、儀式、呪術、埋葬、祈願などの原始信仰、風習、行事などが取り行われた領域（場所）でもあったと考えられる。」としているが、IV—1区の土製品の多い区域も、それと類似の領域（場所）と考えることができるかもしれない。しかし、この区域は、土器及び石器の出土量も多く、やや捨て場の様相をもつことや、呪術的要素の強い土偶が1点も出土していないこと、(かなり離れたC S—386グリッドからは1点出土している)などから、現時点では特殊な領域と断定するには至らない。

昭和60年度も引き続き、IV—1区南側部分を発掘調査しており、その結果を加えることにより、より状況が明確になると考へる。したがって本報告では、特殊な領域（神聖な場所）としての可能性をもつということに留めたい。

これまで後期初頭の土製品の分布について述べたが、前期初頭の土器を利用した土器片鍤がまとまって出土していること（CN—385グリッド9点、CN—384グリッド1点）を付け加えておく。

(一条)

まとめ

昭和59年度においても、縄文時代後期を中心に早期から弥生時代にわたる遺物や遺構が多量に検出され、第1次調査の成果も合せて、様々な観点から検討・考察が加えられた。その間、型式・分類の見直しや年代・時期の修正等が行われ、“大石平原始文化”的編年も除々に具現化されつつある。特に、この遺跡から、昨年度來弥生時代の集落が確認されていることは、今日でさえ厳しい自然条件をもつ当地区において環境に対する受動的な生活から、環境を積極的に開拓・活用していった定住型生活圏の存在も考えられる画期的な発見となった。

本調査の大きな特徴は、大規模な平面調査が実施され、各期の文化圏が重層的に確認できたことである。このことから、断片的な遺物や遺構の検出に留まらざるを得ない点・線の調査では、考究の難しい集落の構造等、資料の体系づけが可能になると思われる。

本報告に、今年度（60年度）の成果が更に加えられることにより、大石平遺跡の性格がより明確なものになることが期待できる。

(山田)

(遺構・遺物の一覧)

遺構

地区名 遺構名	IV 区		V 区	VI 区	VII 区		計
	IV-1区	IV-2区					
整穴住居跡	13軒	縄文 (後期) 11 弥生 2			16軒	縄文 (中期末) 縄文 (後期) 13	29軒
土 壤	160基	6基	1基	2基	18基	187基	
溝状ピット		1基	11基	4基		16基	
配石遺構		12基					12基
土器埋没遺構					2基		2基
墓 外 墓	3基						3基
焼土状遺構	10基						10基

第13表 掘出遺構一覧表

遺物

地区名 遺物名	IV 区		V 区	VI 区	VII 区	計
	IV-1区	IV-2区				
絶 墓	105箱	5箱	1箱	2箱	8箱	128箱
縄 文	○	○	×	○	×	4箱
土 器	早期 ○	○	×	○	×	3箱
時 代	中期 ×	×	○(大木10式併行)	○(P1脚上層)	○(大木10式併行)	3箱
後 期	○(十腰内 I 群)	○	○	×	○(十腰内 I 群)	3箱
施 工 時 代	○	×	○	×	×	2箱
新 生 土 器	○	×	○	×	×	2箱
石 器	40箱	2箱	微量	半箱	3箱	45箱
刮 片	661点	19点	×	8点	12点	700点
礫	735点	50点	3点	21点	41点	850点
土・石製品	148点	×	×	4点	2点	154点

第14表 出土遺物一覧表

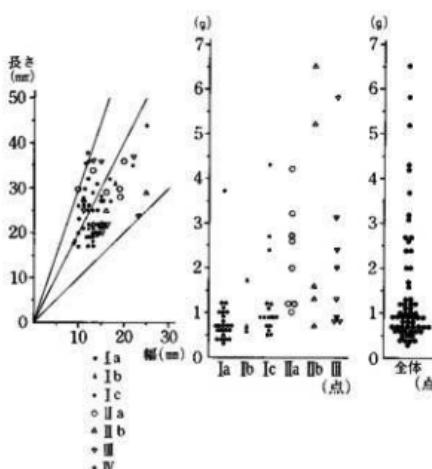
石器一覧表

(内は遺物数)

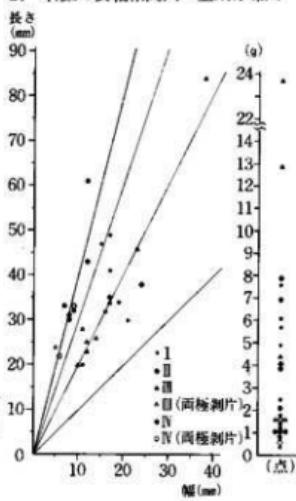
分 類	N-1		VI		VII		小	
	遺 物 内 外		遺 物 内 外		遺 物 内 外		遺 物 内 外	
	台面附 土 塊	遺 物 外	台面附 土 塊	遺 物 外	台面附 土 塊	遺 物 外	台面附 土 塊	遺 物 外
A	1(4)	16(10)	51(34)	(3)			1	114
B		(1)	5(6)	1				13
C	1	18(7)						26
D	3(1)	22(6)	1(1)					24
E-I	1	14(5)						20
E-II	1	18(3)						22
F-I	1	8						
F-II	3(1)	7(4)	97(26)	5	1	2	2	146
F-III	3(1)	5	92(5)	4	4	2	2	106
F-IV	2	3	49(3)	3	3	1	1	65
G			1					1
H	6	9	123	1				139
小計	21	57	583	19	8	5	7	700
I-I	(1)		1(2)	1(1)	1			2
I-II			1					1
I-III A	6(9)		1					
I-III B	(1)	3(2)			1	(1)	18	
I-III C		3				1(1)	33	
I-III D	(1)	(1)	(29)	(1)			3	42
小計	3	1	91	4	1	1	3	104
J-I		3						3
J-II		1(1)						2
小計		5						5
總 計		(1)						1
K-I		5						5
K-II A	(1)	11						17
K-II B	1	14	1					16
K-II C	1	21	1					23
K-II D	2	4	51	2			2	61
K-II E	(20)	(1)						21
K-III		5(2)						7
小計	3	6	129	5	5		2	160
L-I A		1(1)	19(22)	1(4)	5(6)		2	59
L-I B	(1)	3(3)	1		4			12

分 類	N-1		VI		VII		小	
	遺 物 内 外		遺 物 内 外		遺 物 内 外		遺 物 内 外	
	台面附 土 塊	遺 物 外	台面附 土 塊	遺 物 外	台面附 土 塊	遺 物 外	台面附 土 塊	遺 物 外
L-1 B		1		8				1
L-1 C		1(2)		8			3	15
L-1 D	1			8	1			10
L-1 E			1		1			2
L-1 F		(9)						9
L-1 G	3	1	10(2)	1(1)				18
L-1 H	5			25				30
L-1 I	1(1)	1(1)		8		(1)	1	14
L-1 J			3			1(1)	1(1)	8
L-1 K	1	1	1					3
L-1 L	2	1	8	1				12
L-1 M	1	4	6(2)			(1)	1	16
L-1 N			(1)					1
L-1 O	1	1	10(8)	1				30
L-1 P	2		4(5)	1				56
L-1 Q	1(1)	16(1)	2					19
L-1 R		(22)	(1)					23
L-1 S	1(1)	1(1)	10(8)	1			1	33
L-1 T		3(4)					1(1)	9
L-1 U		(1)	10					12
小計	19	24	29	25	15	12	2	405
M-1 A		(7)						7
M-1 B	(2)	1(1)	1(1)	(1)				18
M-1 C	(1)	(3)						4
M-1 D	(1)			(1)				2
M-1 E	(1)	1	1(9)					14
M-1 F	(1)	1	1(1)	(2)				19
M-1 G	(1)	(6)	(7)					73
M-1 H	(2)	(1)		(1)				4
M-1 I		(1)		(1)				1
M-1 J	1(6)	2(1)	1(8)	(1)		(6)	(1)	*39
小計	13	10	129	13		12	1	381
R			(3)					3

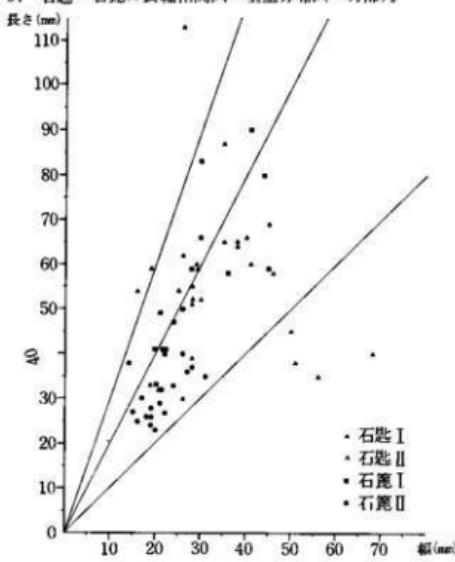
1. 石鎚の長幅相関図・重量分布図



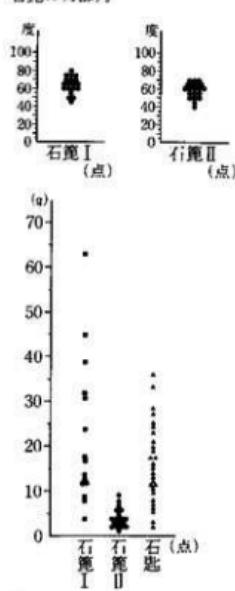
2. 石鎚の長幅相関図・重量分布図



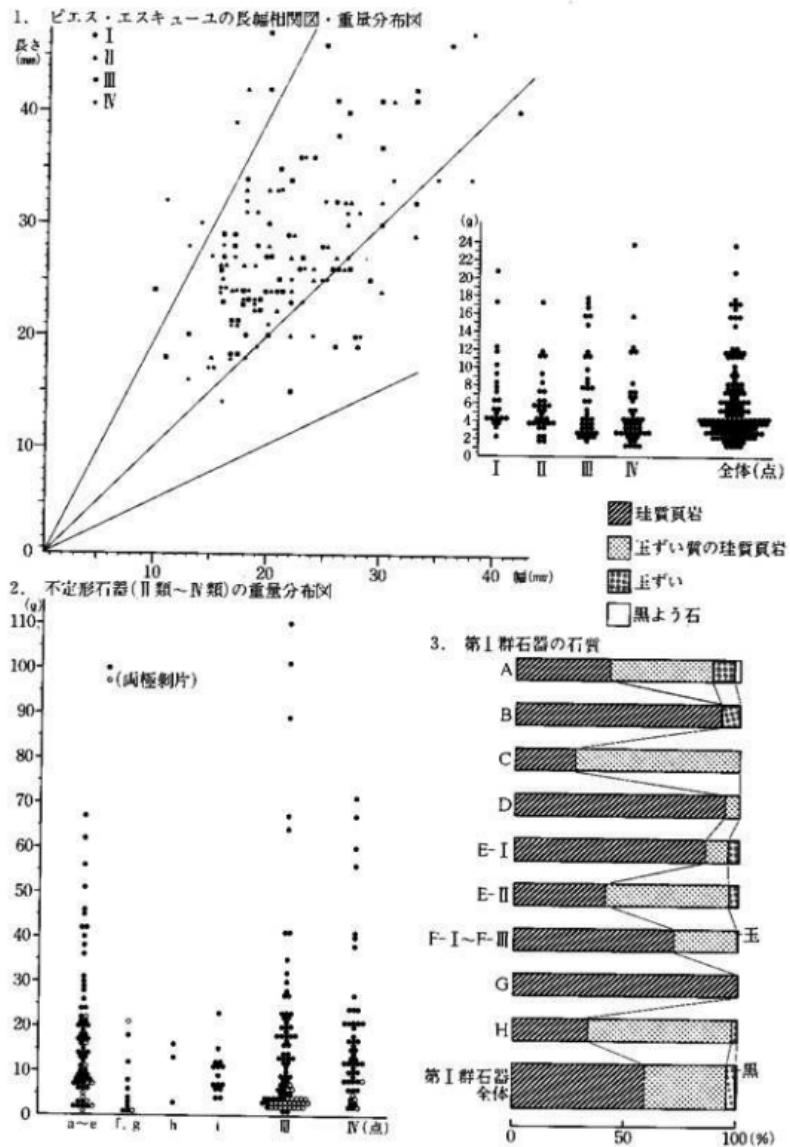
3. 石匙・石窓の長幅相関図・重量分布図・刃部角



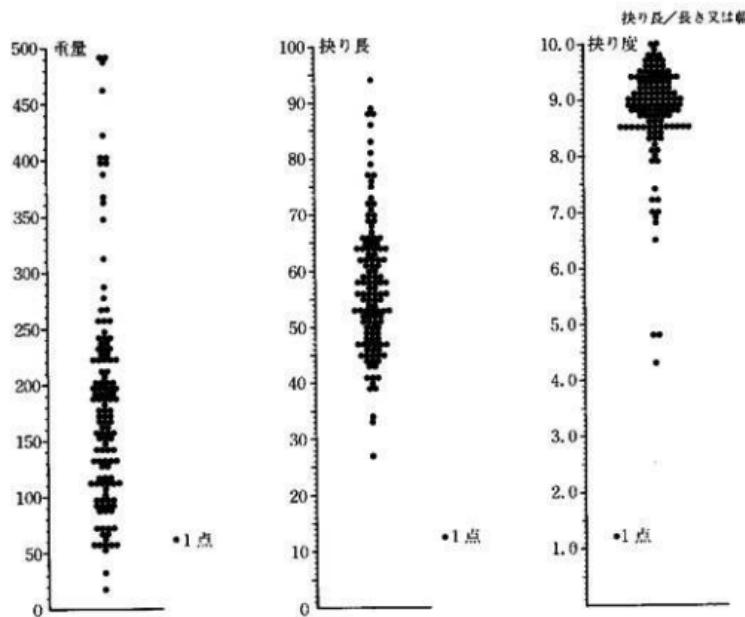
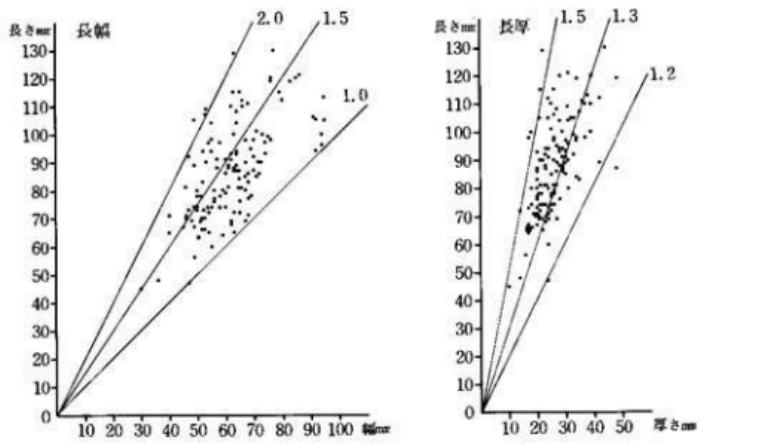
石窓の刃部角



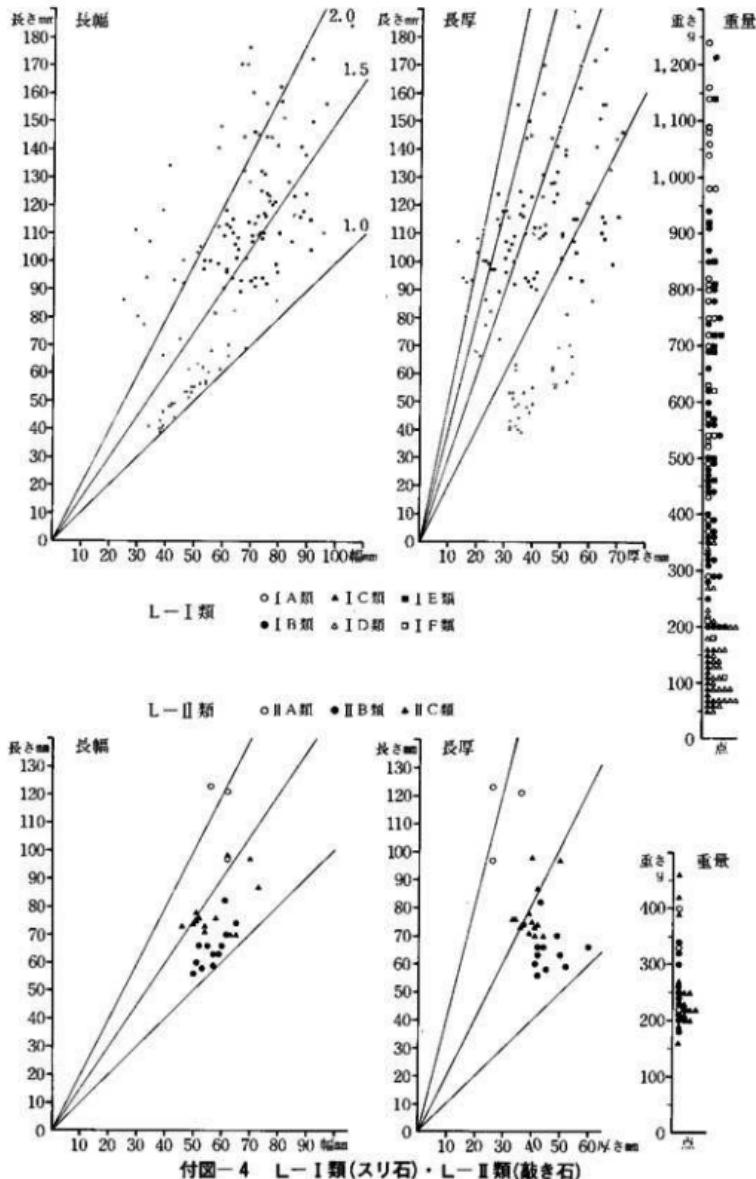
付図一 第I群石器計測グラフ



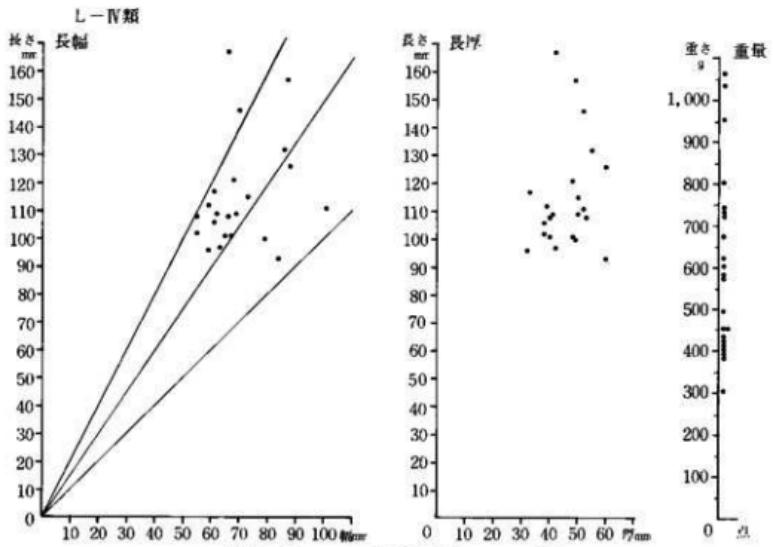
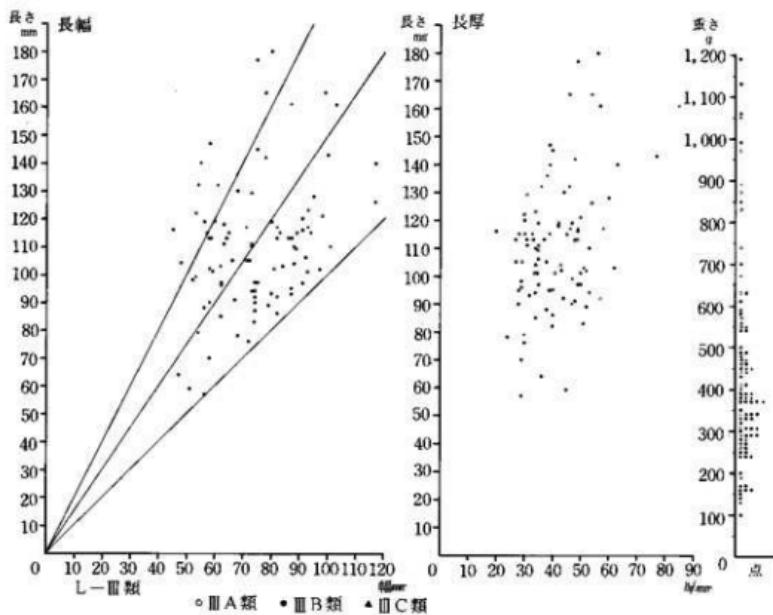
付図-2 第I群石器計測グラフ



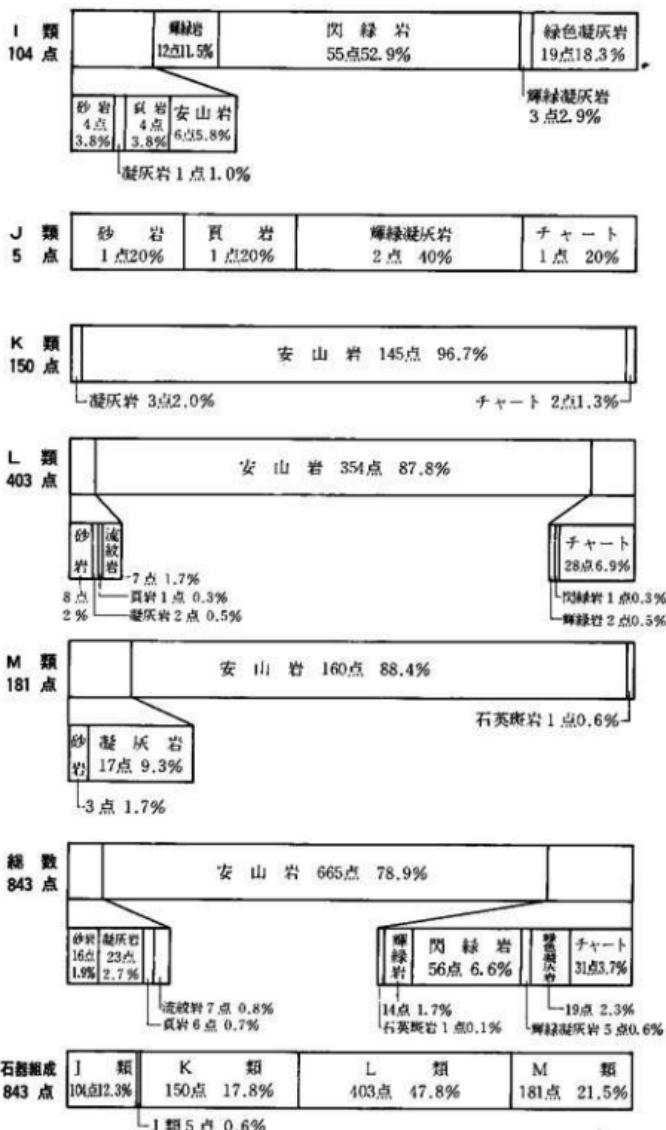
付図-3 K類(石錐)



付図-4 L-I類(スリ石)・L-II類(敲き石)



付図-5 L-III類(回み石)・L-IV類



付図一 6 第Ⅱ・Ⅲ群石器組成

石器計測表

(凡例) 玉 —— 玉髓
 青 —— 青石
 砂 —— 砂岩
 泥 —— 泥灰岩
 安 —— 安山岩
 黑 —— 黑曜石
 灰 —— 灰岩
 石英 —— 石英
 磷灰岩 —— 磷灰岩
 脊椎 —— 脊椎灰岩
 鳞片 —— 鳞片灰岩

粘 —— 粘板岩
 砂 —— 砂岩
 泥 —— 泥灰岩
 烧 —— 烧成岩
 灰 —— 灰岩
 硅 —— 硅灰岩
 磷灰岩 —— 磷灰岩
 鳞片 —— 鳞片灰岩

図番	出土地	等	最大計測値			石質	分類	測量番号	備考
			長(m)	幅(m)	厚(m)				
22-1	1住	■	21	(12)	4	(0.5)	珪	■ 41	
22-2	2 ■	底下	29	16	5	2.0	■ Ba	■ 32	
22-6	3住	フ	(18)	15	3	(0.6)	■ La	■ 44	
22-7	5住	住	(23)	13	4	(1.2)	■	— 58	
22-8	8住	■	(17)	14	4	(0.9)	玉透	— 101	
58-3	16土	1	31	18	5	1.7	■ 1b	75	
58-5	18土	7	(17)	15	3	(0.4)	珪	■ 72	
58-6	26土	4	(20)	16	4	(0.5)	■ ■■	76	
59-2	45土	1	37	22	7	5.8	■	— 74	重量
59-5	47土	1	(21)	13	4	(0.7)	玉透	■ 71	ピッチ付箋
59-12	77土	フ	(20)	14	2	(0.3)	玉 1b	76	
59-18	78土	フ	28	11	4	0.9	■ ■	■ 64	角生
59-15	■	■	(24)	12	6	(1.1)	珪	■ 65	同一母岩
59-16	■	■	(36)	12	5	(1.2)	■	■ 66	■
59-17	■	■	(24)	12	5	(0.9)	■	■ 67	■
59-18	■	■	(34)	12	5	(1.1)	■	■ 68	■
59-19	■	■	30	11	4	0.9	■ ■	■ 69	■
59-13	■	■	38	12	4	1.1	■ ■	■ 70	■
114土	■	■	20	16	3	(0.6)	珪	■ 73	幾ヶハジケ
114土	■	■	30	19	5	2.6	■ Ba	96	
59-9	52土■	■	(27)	14	8	(3.0)	■ Ba	46	石鑿?
59-1	43土	■	38	20	7	4.2	■ Ba	104	幾ヶハジケあり
58-17	37土	■	36	15	5	2.4	■ ■■	112	
56-14	DA29	V ■	36	11	3	0.6	玉透	■ 1	
2	DC328	■	17	12	3	0.4	玉	■ 2	
6	CN327	V ■	20	16	3	1.0	珪	■ 3	
5	DC325	V ■	17	10	4	0.5	■ ■	5	
3	DB329	■	20	10	3	0.3	玉透	■ 6	

図番	出土地	等	最大計測値				石質	分類	測量番号	備考
			長(m)	幅(m)	厚(m)	重(t)				
17	CW305	■	25	14	5	1.1	■	■	■ 10	
25	DA277	■	25	13	4	0.6	珪	■	■ 14	
19	DC328	■	26	10	3	0.6	玉	■	■ 15	
28	CO384	■	44	25	6	3.7	珪	■	■ 17	最大
15	DD377	■	19	13	4	0.7	玉透	■	■ 19	
11	CR305	■	23	10	4	1.0	■	■	■ 21	
26	CZ303	■	27	15	4	0.9	玉透	■ ■	■ 22	
16	DC328	■	27	15	4	1.2	■	■	■ 24	
23	CQ380	■	32	12	5	1.2	■	■	■ 25	
12	DD377	I	26	12	5	0.7	■	■	■ 26	
	CW303	V ■	19	12	4	0.6	■	■	■ 29	ビッチ付箋
22	CO386	I	28	15	5	1.0	珪	■	■ 32	
1	DB327	V ■	21	11	4	0.4	玉透	■	■ 34	
9	DB328	■	21	12	4	0.7	■	■	■ 35	
7	DC328	■	18	9	4	0.4	■	■	■ 36	
4	DC377	■	17	13	3	0.4	■	■	■ 37	
29	DC328	■	31	14	4	0.8	■	■	■ 38	
	DB329	■	20	13	5	0.7	■	■	■ 39	ビッチ付箋
13	CQ386	■	21	15	4	0.7	珪	■	■ 40	
13	DD374	I	(21)	14	3	(0.7)	玉	■	■ 42	
21	DD377	■	(35)	16	5	(0.6)	玉透	■	■ 46	
28	CO386	I	26	15	5	(1.1)	■	■	■ 47	
27	DB328	V ■	(24)	20	5	(1.6)	珪	■	■ 48	
19	CO382	■	(23)	14	3	(0.7)	玉透	■	■ 47	
8	DC377	V ■	(18)	16	3	(0.6)	■	■	■ 55	
18	DC279	V ■	(17)	15	4	(0.6)	玉	■	■ 53	
	CN386	■	16	(10)	3	(0.4)	玉透	■	■ 56	
20	DD378	■	(22)	18	4	(1.0)	■	■	■ 58	
29	DC382	■	25	12	3	0.7	■ ■	■ 61		
37	DC378	■	20	14	4	0.6	■	■	■ 62	
35	CS387	V ■	(23)	12	4	(0.7)	■	■	■ 69	
31	DD379	V ■	(13)	14	3	(0.4)	■	■	■ 71	
34	CQ382	■	18	9	4	0.5	珪	■ ■	■ 74	
33	DB379	■	19	12	6	0.9	玉透	■	■ 75	
38	DB373	■	21	12	3	0.5	■	■	■ 76	
43	DB378	■	29	12	4	0.9	■	■	■ 77	
42	DA383	■	22	17	6	2.4	■	■	■ 78	
35	DA380	■	18	13	4	0.7	■	■	■ 80	両面削片を素材とする
32	DC377	■	22	12	3.2	0.6	■	■	■ 80	
	CZ379	B	35	22	10	4.3	玉透	■	■ 85	本製品?

固番	出上点	種	最大計測量					石質	分類	整理番号	備考
			長(m)	幅(m)	厚(m)	重(t)					
96-48	DC378	IV	(14)	(14)	(3)	(6.6)	実建	I c	37		
95-38	DB380	IV	33	14	(5)	(2.1)	*	*	39		
46	DC378	*	(22)	17	7	(2.3)	建	*	50		
38	DB378	*	(18)	19	4	(0.5)	疊層	*	51		
DD277	B	21	15	4	0.9	*	*	89			
DA380	IV	(24)	19	5	(1.8)	玉	*	97			
96-44	C382	*	30	10	6	1.2	瓦	II a	30		
47	DA376	B	34	13	5	2.7	柱	*	35	*	*、IC間に位置
48	CQ387	V	22	13	3	0.7	*	II b	13		
DE378	IV	22	15	5	1.2	*	II a	28			
58	DC379	*	(15)	12	(4)	(0.6)	疊層	*	36		
45	CY382	B	28	19	9	3.2	*	*	45		
	C388	*	22	14	3	0.7	土	I c	84		
95-41	CR382	*	(31)	16	6	(2.7)	瓦	II a	88		
	DA378	*	(25)	19	9	(3.5)	玉	*	102		
	C379	IV	21	15	4	1.0	柱	*	105		
	DD377	*	22	15	5	1.3	*	II b	82		
	CY378	B	26	(17)	6	(2.4)	玉	*	103		
	DC378	*	25	16	5	5.2	瓦	*	111		
96-51	C382	IV	36	13	5	2.0	柱	II a	9		
50	DC374	B	22	16	4	0.8	*	*	91		
	CM383	*	(16)	15	4	(0.7)	*	*	96		
53	DE381	IV	26	12	4	0.6	*	II b	8		
52	CU385	I	25	11	5	1.3	玉	*	22		
54	DB384	IV	24	(13)	3	(0.8)	疊層	*	32		
	CR383	*	29	15	5	0.9	*	*	100		
	CN379	I	(25)	(12)	(5)	(1.0)	*	*	34		
57	CP387	*	(16)	(14)	(3)	(0.6)	疊層	*	35		
	表抜		(19)	(15)	5	1.2	*	*	42		
	DC377	IV	(21)	(18)	(4.0)	(0.8)	建	*	48		
	DC384	*	(31)	12	(5.6)	(1.7)	疊層	*	49		
	表抜		(14)	(17)	5	(1.1)	建	*	47		
55	DC379	IV	(17)	(15)	6	(1.2)	*	*	90		
	表抜		(29)	(19)	4.3	(1.7)	*	II b	92		
	CZ381	IV	(21)	(11)	3	(0.6)	疊層	*	94		
	CW382	I	(16)	(13)	(3)	(0.7)	疊層	*	99		
	CV382	*	(23)	18	7	(1.7)	玉	*	109		
	DC378	IV	(17)	(17)	(4)	(1.1)	疊層	*	110		
98-16	II±	7	20	16	5	1.6	*	II b	(25)		
	CR382	B	34	23	5	3.1	柱	II b	(93)		
60-7	III±	7	29	25	9	6.5	*	II b	(58)		

固番	出上点	種	最大計測量					石質	分類	整理番号	備考
			長(m)	幅(m)	厚(m)	重(t)					
96-60	BC482	I	42	(15)	(4)	(1.1)	*	I a	7	IV-2区	
59	BE417	IV	35	16	4	(2.2)	玉	II b	16	*	
56	CD378	*	(15)	11	3	(0.4)	疊層	*	83	*	
175-5	II±近辺	IV	29	14	4	1.2	*	II a	113	W区	
	B46 石板										
52-2	II±	7	(53)	13	7	4.1	石		10	羅身	
96-61	CX383	IV	75	27	9	15.9	*		1		
63	CX374	B	56	29	8	18.6	*		4		
66	DB378	IV	50	15	10	7.8	玉		5		
64	CX382	*	(43)	21	8	(9.3)	疊層		2		
67	DC377	*	55	16	12	11.2	*		6		
68	CR382	V a	(43)	29	10	(12.4)	*		3		
69	CM386	I	(24)	(7)	(2.7)	*			8		
	CR381	B	(60)	(25)	(15.9)	*			9		
70	DA377	IV	(57)	(36)	(11)	(19.0)	*		12		
71	CE381	*	(33)	(17)	(11)	(6.2)	*		13		
72	B4142	I	52	14	8	6.2	*		7	IV-2地区	
	C46 石板										
97-19	CZ380	IV	(20)	22	5	(1.8)	玉	II a	1		
79	DD375	*	(34)	16	7	(2.5)	柱	*	19		
71	CW385	*	(30)	12	4	(0.8)	瓦	*	31		
72	CW386	*	(34)	5	3	(0.4)	*		12	底部	
75	CE382	B	47	15	10	6.1	*	1 b	4	底部のみ加工	
76	DC378	*	(41)	17	14	(7.6)	*	*	5		
74	*	*	(32)	16	11	(5.7)	*	*	7		
73	DA380	IV	(49)	17	10	(4.9)	*	*	9	底部、複合 羅心	
	CZ381	*	*	35	17	7	4.0	*	13	*	
77	CY377	*	*	38	24	8	7.9	柱	*	16	底部マセウ
78	CW383	B	28	11	5	1.5	柱	*	6		
79	CO387	I	34	17	11	4.4	玉	II b	8		
	CQ386	B	28	11	5	1.5	柱	*	8		
70	CR381	*	46	23	18	12.9	*	*	17	底部マセウ	
80	DC377	I	26	14	6	1.6	II b	*	18	両面削り利用	
82	表抜			23	12	5	1.3	*	29		
81	*	*	25	12	5	1.6	*	*	22	両面削り片利用?	
82	*	*	20	10	5	0.9	*	*	22	*	
84	CO387	V b	34	38	14	22.7	柱	*	24	羅心マセウ	
88	DC378	B	33	7	5	1.0	玉		2		
87	表抜			8	8	2.1	*	*	3		
91	DE377	G	61	12	10	6.9	柱	*	14	羅心マセウ	

規格	出上点	番	最大計測値					石質	分類	管理番号	備考
			長(m)	幅(m)	厚(m)	重(g)					
90	C 326	N	43	12	8	3.9	130	*	15	*	
85	D B 379	H	33	9	4	1.6	*	*	19	表面剥片を利用	
86	表面		22	6	5	0.6	*	*	23		
89	D E 379	N	30	8	5	1.0	*	*	43	全面調整	
58- 4	B 土	T	32	8	5	1.0	38	*	78	*	
D級 石化											
59- 3	A 45±	T	33	*	19	4	2.5	H	G c	23	小形
59- 7	B 51±	T	60	11	27	*	*	*	25		
60- 9	B 112±	T	51	28	9	15.6	*	H	22	表面部に調査痕	
60- 11	*	*	36	26	10	10.7	*	I a	33		
97- 90	D C 378	N	25	56	10	15.4	*	*	29		
96- 90	D D 379	*	48	68	7	17.2	*	*	17		
97- 90	D B 378	*	38	51	8	12.3	*	I b	18		
	C Y 387	I	45	50	12	19.8	*	I a	35		
96- 90	D B 383	H	66	40	6	13.7	*	H a	4		
106	C U 383	V a	(40)	15	5	(3.5)	*	G	5		
107	C K 381	N	113	26	7	24.6	*	G a	6	长大	
108	C Y 382	*	54	16	9	6.5	*	*	9		
101	D C 377	*	60	29	12	17.2	*	*	12		
95	D A 381	*	39	28	5	6.4	*	*	13		
99-111	C P 378	*	(5.7)	28	8	(11.2)	*	*	14		
99- 90	D A 382	*	55	28	6	8.5	*	*	19		
95	I	62	26	6	11.1	*	*	*	24		
99-109	C O 377	IV	54	25	4	5.7	*	*	28		
96- 97	D C 378	*	52	28	9	12.7	*	*	31		
	C N 378	V a	59	29	13	16.9	*	H b	6		
105	D B 374	IV	58	46	5	20.7	庄	*	11		
	C X 385	G	59	19	8	10.4	*	*	21		
	D B 373	V	69	45	10	33.3	*	*	30		
	C Z 383	H	65	35	12	23.3	*	H c	2		
	D C 376	*	87	35	9	24.4	*	*	3		
99-112	C R 387	N	52	30	8	11.1	*	*	27		
110	C O 381	*	32	21	6	3.5	*	*	34	小形	
108	C S 386	*	65	38	12	28.5	*	H b	16		
96-104	C P 375	*	(55)	17	7	(6.4)	庄	G	1		
	C V 387	G	(36)	(24)	(8)	(8.1)	*	*	7	ハジケ	
99-112	D C 376	IV	(36)	(27)	(10)	(8.6)	*	*	29	表面加工、ハジケ	
	D D 379	*	(27)	(10)	(7)	(2.4)	*	*	32		
98-102	B 1412	I	(33)	(24)	(8)	(6.3)	*	*	10	N-2地区	
103	B I 427	*	64	38	15	35.8	*	H a	15	*	

規格	出上点	番	最大計測値					石質	分類	管理番号	備考
			長(m)	幅(m)	厚(m)	重(g)					
E-1組 石造											
60- 14	127 L	T	83	*	30	19	63	庄		16	
100-120	D C 378	N	33	*	26	6	3.9	*		2	表面加工
	C W 383	*	(42)	33	*	13	(16.6)	*		14	* 基礎破損
127	C O 387	I	(56)	30	*	13	(26.5)	*		15	*
125	C W 386	H	59	*	45	13	30.6	*		3	
126	C M 382	I	58	*	38	13	17.4	*		5	
126	C U 382	N	50	*	26	13	16.8	*		12	
99-116	C T 385	*	90	*	41	11	38.8	*		18	
100-121	D B 377	*	60	*	22	11	8.9	*		1	
122	C O 387	U	47	*	24	10	13.1	*		4	
99-119	D B 378	*	80	*	44	11	44.8	*		11	
	C O 385	H	(50)	35	*	9	(18.0)	*		7	
115	D B 376	N	49	*	21	16	12.1	玉井		19	
100-125	C F 380	*	59	*	28	11	23.9	II		13	
	C T 382	H	(45)	38	*	15	(33.1)	*		6	基礎破損
99-117	C Q 387	*	41	*	22	7	7.6	毛		8	
	D C 378	IV	41	*	26	14	12.8	玉井		10	
118	D C 382	H	49	*	21	15	12.1	庄		20	
	D D 378	*	66	*	20	14	31.7	*		9	
	D B 381	N	(26)	*	(26)	(11)	(12.4)	*		17	基础・局部破損
E-2組											
59- 6	49上	T	37	*	28	9	6.9	II	b1	13	
100-132	D D 377	N	38	*	14	8	3.1	玉井	a2	1	
	D C 379	N	27	*	22	8	3.7	*	a1	5	
	C O 384	H	35	*	31	10	6.4	庄	*	6	
	D D 374	*	26	*	19	7	3.6	*	a2	8	
	D E 384	*	49	*	26	11	9.5	*	*	9	表面右方に似る
	C O 385	*	27	*	15	8	2.2	玉井	*	10	形がくびつ
	C D 371	*	24	*	19	5	2.2	庄	*		
	C W 384	N	28	*	19	8	3.8	玉井	*	22	
135	D D 375	V a	29	*	21	6	3.3	*	a1	3	
101-129	D C 374	N	31	(26)	*	(4.4)	*	*		4	
	D A 377	H	(19)	28	*	(2.3)	*	*		11	瓦礫片
100-136	D A 378	*	30	*	17	5	2.5	*	*	12	
101-138	D D 376	N	(39)	(23)	*	(7.0)	庄	*		15	抜けによるハジケ
	D C 378	*	36	*	27	8	7.3	*	*	21	
100-137	D A 380	*	26	*	18	8	3.2	瓦礫	*	2	
101-143	D A 382	*	33	*	24	10	6.1	*	b1	7	
141	D D 376	*	25	*	16	4	1.2	庄	*	14	
140	C Q 382	*	23	*	20	7	2.2	*	*	16	

固形	出 土 地 点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備 考	
			長(m)	幅(m)	厚(m)	重(g)					
144	D D375	+	22	21	8	3.9	土	*	18	瓦灰磚	
142	C L381	1	41	22	7	5.5	土質	*	19		
	D B381	N	(20)	(13)	(6.9)	(1.5)	*	-	23	頭部磨光	
F99 不定期(面)											
58-12	22土	フ	45	23	10	9.3	H	1	172		
101-147	C Z329	N	37	34	15	12.7	H	*	118		
148	D E360	H	3.6	29	10	11.4	H	1	102		
	D D377	H	45	33	12	11.7	H	1	91		
145	C U385	N	52	41	12	18.3	石	*			
	C O387	I	47	25	14	15.2	*	*	134		
	D D379	H	29	37	8	10.6	*	*	297		
	C S382	*	63	27	6	9.3	*	*	296		
	C Z388	*	39	31	10	8.0	*	*	299		
22-3 1住	底床	30	26	9	8.3	*	H d	264			
22-5 2住	床	44	15	6	5.6	*	H f	216			
3住	フ	22	(15)	10	(6.1)	*	H d	267			
22-11 8住	フ	33	39	11	20.1	*	*	165			
22-9 *	*	49	45	12	20.4	*	*	166	造形ハジケ		
22-10 *	*	(20)	(17)	11	(3.8)	*	H i	167			
	*	35	17	6	2.9	*	H v	270			
10住	*	47	40	12	26.5	*	H c	268			
*	*	21	34	4	3.3	*	H v	269			
3住	I	25	27	6	3.1	*	H d	277			
58-1 8土	フ	33	17	6	3.1	*	H b	278	^		
58-7 26土	フ	17	31	7	3.2	瓦	H e	171	瓦(同様削片束打)		
58-9 9*	*	20	25	9	4.3	*	H d	272	瓦-H-S-5		
58-8 *	*	4	32	25	10	7.9	*	H v	273	瓦-S-17	
*	*	43	49	12	23.6	建	*	274	S-13		
58-15 34土	フ	33	24	10	7.5	*	H a	348			
58-18 37土	*	(21)	26	7	(4.2)	*	H c	279			
45土	フ	31	26	10	5.6	瓦	H v	281			
58-4 47土	*	18	22	5	2.4	*	H d	276			
58-9 56a土	*	40	22	6	6.4	H	I	151	折断石器?		
58土	*	64	42	12	34.8	*	H b	275			
60-1 72土	*	24	44	8	7.5	*	H f	158			
60-2 86土	*	36	45	10	17.8	*	H d	147			
60-4 *	*	(22)	(20)	(7)	(3.4)	*	H i	153	石?		
114土	*	32	18	5	2.1	*	H b	283	瓦?		
*	*	17	25	5	2.2	*	H d	284			
60-13 119土	フ	(39)	(20)	4	(3.4)	建	H i	149	石?		
60-12 134土	*	(34)	16	10	(4.4)	*	H i	233	石?		

固形	出 土 地 点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備 考
			長(m)	幅(m)	厚(m)	重(g)				
101-150	C U387	V b	78	32	16	45.3	*	H a	9	
152	D B380	N	54	26	9	8.6	*	*	15	
151	C O382	V a	72	25	8	15.6	*	*	16	
102-156	D D378	G	69	41	8	23.7	*	*	34	
	D C375	G	56	53	18	62	*	*	40	
101-155	C Z384	*	35	29	12	15.2	H	a	57	
102-157	C Z379	*	51	30	10	15.9	*	*	59	陶・肉桂加工
102-175	*	*	28	35	4	4.0	上	d	61	陶
	D C375	*	25	25	8	6.4	建	H a	94	
	D E382	*	38	43	15	19.5	上	d	119	
	D C379	*	50	38	14	31.4	建	H a	189	
	D C278	N	31	30	11	9.3	H	a	292	
	C F386	B	37	16	3	2.7	建	*	240	
	C G382	*	42	46	19	21.7	建	*	251	ピエス?
	D G383	*	16	16	4	1.4	*	*	312	陶-H-ピエス?
101-153	C W385	*	35	23	12	6.5	H	a	314	陶-片削加工
	D C383	*	(26)	(19)	9	(4.0)	*	*	323	
	C Q382	N	32	28	9	9.5	H	b	4	
102-165	D A382	V b	81	34	14	41.8	卫	*	7	
	D B380	N	(52)	32	9	(18.5)	建	*	14	
	D C378	H	46	26	10	18.9	瓦	*	27	陶
	D C377	*	68	36	8	27.7	建	*	30	
	C U385	*	73	37	16	56.2	*	*	32	
	C X385	H	42	27	9	25.5	*	*	33	
	C W384	*	33	36	9	13.7	*	*	42	
	D C377	N	53	29	15	21.4	上	*	45	
106	C W386	H	51	16	6	5.9	H	*	66	
	D C377	*	35	19	7	4.9	*	*	105	陶
	D D377	H	76	24	16	19.8	*	*	173	
	C W386	*	64	40	11	28.2	*	*	175	
	D A376	*	40	41	11	15.9	*	*	182	
	D A382	*	38	24	7	9.8	H	b	185	
	D B381	N	46	30	6	9.3	建	*	199	
	C X385	*	64	22	9	12.6	*	*	204	
102-159	米井	*	36	14	4	1.6	*	*	208	
	C Q382	N	(26)	35	9	(9.4)	*	*	256	
	C N377	H	50	45	8	16.5	*	H c	22	
103-170	D D375	N	53	32	14	36.2	*	*	257	
	D C378	*	63	59	19	67	*	*	143	

固 板	出 土 点	地 质	最大计重值				石 料	分 量	整 理 号	描 写
			长 (m)	宽 (m)	厚 (m)	重 (t)				
102-169	DC375	II	22	13	5	1.8	五连	*	182	
	DA376	Va	28	25	9	7.0	*	*	186	
165	CY382	I	34	30	10	11.4	*	*	313	
103-176	DC380	IV	27	46	10	13.4	往	H d	3	
	CN377	*	(40)	(26)	7	(8.0)	*	*	24	
177	CW387	II	30	49	8	11.6	*	*	25	
174	DD378	*	36	53	9	21.1	*	*	38	
	CS382	Va	37	52	16	30.0	无连	*	38	
	DE380	II	39	50	17	39.0	玉	*	39	
	CN378	*	46	63	16	45.0	连	*	54	
177	CS380	*	45	77	14	40.5	*	*	55	
	CQ378	*	45	92	16	42	*	*	583	
	CY378	III	31	39	6	7.4	*	*	238	
104-186	CO386	I	35	26	6	7.0	*	H e	1	
182	DA382	IV	59	29	9	17.4	*	*	2	
103-179	DA382	*	78	56	14	51.1	*	*	11	
104-181	DB375	*	49	41	13	23.7	*	*	23	
	DA375	*	51	36	10	14.1	*	*	50	
	DD375	II	47	34	12	15.7	*	*	63	
	DA379	*	31	38	8	8.4	五连	*	79	
	奥灰		24	29	6	1.8	连	*	138	
103-178	CR381	IV	60	29	8	7.9	*	*	155	
104-185	DB377	*	35	16	11	6.9	五连	*	166	
184	DC383	II	22	29	5	2.2	*	*	304	
183	DC379	*	30	22	8	6.1	*	*	311	
58-34	34±	?	37	13	6	2.6	母	H f	8	
	DC378	II	40	28	9	12.0	*	*	153	
104-190	DC382	II	21	(16)	7	(3.0)	毛连	H f	194	
	CW382	*	(27)	17	8	(2.6)	连	*	228	
187	DD378	II	26	12	8	2.3	五连	*	296	
188	DC377	*	27	12	3	1.1	*	*	309	
193	CZ387	*	47	46	9	17.7	连	H g	17	
189	DA378	*	22	28	6	4.1	无连	*	74	
	DC377	*	38	40	13	20.8	*	*	99	
191	CZ379	*	21	15	5	1.3	*	*	122	
	DD377	*	(26)	(19)	10	(5.5)	*	*	126	
192	CZ379	*	23	13	5	1.3	*	*	220	
	龙溪	(22)	(19)	6	(2.2)	*	*	*	224	
194	CL386	II	37	41	9	13.1	H	H h	71	
	CL376	IV	(42)	34	15	(16.5)	*	*	97	
	DD379	II	38	47	13	18.5	*	*	254	

固 板	出 土 点	地 质	最大计重值				石 料	分 量	整 理 号	描 写
			长 (m)	宽 (m)	厚 (m)	重 (t)				
195	CO382	*	42	17	4	3.0	*	*	263	
	CQ386	Va	(40)	35	10	(11.0)	*	*	51	
	CP381	IV	(26)	37	11	(12.0)	*	*	52	
	CS380	II	(26)	36	6	5.7	*	*	48	
	CL374	*	(14)	33	9	(6.9)	*	*	49	
	DD382	*	(33)	23	5	(4.0)	*	*	70	
	CP382	*	(25)	(20)	9	(4.0)	*	*	72	
	CU383	IV	(19)	26	8	(5.3)	*	*	73	
	CY387	I	(16)	(21)	8	1.4	五连	*	99	
	灰层		(11)	30	5	(1.6)	*	*	104	
200	CW387	II	31	23	7	7.0	连	*	116	
	CY387	*	23	15	7	2.4	五连	*	122	
	DE377	*	(15)	(21)	7	(1.8)	连	*	127	
	灰层		(18)	(14)	9	(3.0)	*	*	142	
	DC377	IV	(20)	23	11	12.4	*	*	144	
187	CO387	I	(20)	26	7	(4.9)	*	*	156	
196	CT380	IV	(23)	23	10	(7.0)	*	*	175	内墙带重
	DC378	II	(22)	32	9	(11.9)	*	*	209	带
	CT381	IV	(25)	26	17	8.5	*	*	205	带
104-199	CO386	I	(27)	15	5.0	(1.7)	非	H I	219	
	CZ380	Va	(22)	(20)	5	(1.9)	五连	*	224	円、石壁？
	DG375	*	(24)	17	6	(1.9)	连	*	226	尖？
198	CX381	*	(26)	(15)	7	(2.6)	不连	*	227	石壁？
	DB377	*	(26)	17	5	1.4	连	*	230	石壁？
	DD377	*	(27)	(21)	8	3.1	不连	*	231	*
	灰层		(21)	(19)	4	1.3	连	*	232	円、*
	DB374	IV	(26)	(25)	9	(6.0)	*	*	245	石油？
	CT382	II	(19)	26	9	5.0	*	*	255	
	CU382	*	33	20	11	7.1	*	*	266	带
	DD380	II	40	26	10	10.9	*	*	268	带
	DA377	*	35	24	7	5.7	*	*	269	带
	CZ379	*	34	24	18	23.1	*	*	271	带
	CW387	I	40	20	14	12.2	*	*	292	带
	CW382	*	35	28	6	6.9	*	*	293	带
	DE375	II	34	16	8	3.9	*	*	294	带
	CO384	*	28	19	5	3.5	*	*	296	带
	CO383	IV	92	39	27	89	*	带A	297	
	DD378	II	42	65	13	40.6	*	带A	31	
	DD380	*	55	41	13	22.2	*	带A	36	
	CQ387	Va	35	60	7	22.4	*	带A	47	

固 化 度	出 生 地 点	固 化 度	最大計測値				石質	分類	整理 番号	備 考
			長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (kg)				
105-207	C X385	*	35	29	13	11.7	珪岩	珪	85	(C207000)
	C P386	*	28	26	8	6.0	*	*	95	
214	C Z380	*	25	17	5	1.9	玉斑	*	124	面八
	D A376	*	(26)	(25)	5	(1.9)	珪	*	181	八
215	大津		21	15	4	1.4	珪岩	*	306	面八・高加
306	D C383	H	22	18	5	1.5	*	*	310	面
	C Y378		29	16	9	2.5	*	*	315	面
211	D E374	N	49	22	8	7.7	珪	珪 b	12	八
229	D B379	H	71	23	8	17.7	*	*	29	八
	C O375	H	52	26	10	14.0	*	*	41	八
	D E377	N	43	25	9	12.7	*	*	43	
	C Y381	H	75	62	7	22.0	*	*	56	八
	C Z380	V a	36	26	12	13.1	*	*	64	
	C Q387	V a	43	22	14	18.5	珪	珪 b	67	
	C Y382	H	33	26	7	3.8	*	*	82	八
	C Q388	*	56	35	10	17.7	*	*	92	八
	D C382	*	55	41	13	23.4	*	*	93	八
	D E375	I	24	21	6	3.2	*	*	96	八
105-208	D A382	*	32	25	5	3.6	珪	*	103	面八
	C P386	H	82	53	22	47	珪	*	107	
228	C O385	*	33	42	8	9.6	*	珪 d	108	
	D B379	I	40	40	10	18.7	*	珪 b	109	
209	D C376	H	21	21	5	2.8	珪	*	112	面
	D B379	*	26	18	6	3.0	*	*	113	面
222	D E376	*	25	17	3	1.5	珪	*	114	
	D C379	*	36	29	10	11.4	珪	*	136	
	D D384	*	32	22	7	5.2	珪	*	162	八
	C Q381	N	44	46	12	17.9	*	珪 d	161	
	D A380	*	44	46	11	17.7	*	*	169	
	C T382	H	34	38	7	6.6	*	*	174	
	C U387	*	41	34	19	27.9	*	珪 b	177	
	D C376	*	45	23	9	6.9	珪	*	178	八
	D D379	*	36	26	9	8.3	珪	*	184	
212	C M376	*	27	22	6	3.7	珪	*	186	面
	D D379	V a	(21)	(11)	6	(1.5)	*	*	192	面八
	D B381	N	20	18	9	3.3	珪	*	197	面八
	C Q387	*	33	33	13	13.7	*	*	203	
	A 86		17	33	10	3.8	珪	珪 d	207	
	C Z387	N	29	19	7.5	3.9	珪	珪 b	218	
216	D D378	H	34	17	3	2.4	珪	*	221	面

固 化 度	出 生 地 点	固 化 度	最大計測値				石質	分類	整理 番号	備 考
			長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (kg)				
	D C383	*	39	32	10	12.4	珪	*	237	
	D A378	H	38	22	5	3.7	*	*	242	
	C U385	*	28	45	12	16.6	*	珪 d	247	
	D D380	*	37	39	17	27.6	*	*	265	
227	D A377	*	19	22	6	3.0	珪	*	303	面八
228	D B380	*	26	17	7	3.5	*	珪 b	307	面八
	D D378	H	27	18	6	2.7	*	*	308	面
229	D C377	*	25	23	6	3.4	*	*	316	面
105-210	D A382	H	27	23	8	5.8	珪	b	320	面八
231	C Z381	*	20	19	5	1.7	*	*	321	面八
	C Z381	N	57	54	14	29.5	珪	c	322	
	D B377	*	33	45	7	13.3	珪	*	346	
	C L383	*	36	29	5	(4.6)	珪	*	360	八
	A 86		45	35	12	22.0	*	*	371	八
	D A375	N	55	39	11	21.3	珪	*	376	
233	C R383	*	26	18	4	1.6	珪	*	389	面
	C O382	N	21	27	8	2.6	*	*	391	面八
	D B376	N	38	16	10	6.8	珪	*	390	面八
	D C378	H	29	15	7	3.0	珪	*	391	面
235	C Z382	*	19	16	5	1.7	珪	*	392	面八
237	C N379	H	30	20	7	4.5	*	*	317	
	C Z385	*	29	15	6	2.7	*	*	318	面
	D C378	N	45	46	18	40.5	珪	c	44	
	C M376	H	50	48	7	15.5	*	*	45	
	D A378	*	36	51	12	19.7	*	珪 d	75	
	C O384	*	26	32	11	9.2	*	*	76	
	C U387	*	26	40	14	12.5	珪	*	78	八
	C Y378	*	25	20	7	5.0	珪	*	235	
	D D377	H	41	26	14	14.0	珪	g	190	面八
	D D380	*	(22)	(14)	6	(2.2)	珪	i	197	面
	C Q381	V a	35	42	6	7.3	珪	d	190	八
	C O384	H	61	35	12	8.7	珪	g	202	コ?
	C M376	N	58	55	18	64	珪	*	139	
	D E380	H	64	57	23	101	*	*	140	
	D D377	*	55	28	18	23.4	*	*	252	
	C Q382	N	71	29	9	24.3	珪	i	5	
	C Z379	H	44	45	12	20.9	*	*	35	
	C P375	*	70	56	17	71	*	*	37	
	D B383	*	67	54	14	55.2	*	*	77	
	C Z378	*	57	35	10	21.0	*	*	84	
	D B375	*	36	55	11	17.3	*	*	86	

図 版	出 上 点	高 度	最 大 計 測 值				石 膏	分 類	整 理 番 号	備 考
			長 (m)	幅 (m)	厚 (m)	重 (t)				
	CMB2	I	25	15	4	1.6	*	*	87	
	DA378	II	34	23	10	5.5	王柱	IV	88	
	DA378	*	56	46	12	38.1	柱	*	101	
	DB378	IV	41	29	8	15.0	*	*	106	
	CQ37	II	33	26	8	9.5	*	*	111	
	DC377	*	53	(16)	13	(7.5)	*	*	115	
	CF381	*	29	36	11	12.3	*	*	117	
	DB380	*	62	22	22	40.9	*	*	119	
	CO387	I	40	32	13	16.4	*	*	120	
	CW383	II	32	35	8	10.4	*	*	125	
106-233	DC378	*	(25)	(21)	6	(2.2)	*	*	129	
	DA378	*	34	26	9	2.3	*	*	130	
	DC384	*	26	35	13	11.6	*	*	137	
	DC378	IV	37	33	12	18.4	*	*	144	
234			56	42	12	20.6	*	*	157	
	DE379	E	41	53	15	40.4	*	*	159	
	DC375	*	37	38	14	15.1	*	*	162	
	CO385	*	75	55	16	62	*	*	179	
	DC378	*	37	25	9	8.7	*	*	189	
	CZ381	IV	32	32	12	11.8	王柱	*	195	
	CZ381	*	34	23	7	6.9	柱	*	196	
	DD379	II	36	47	12	29.5	*	*	213	
	CR380	*	36	35	11	13.3	*	*	214	
	DE378	*	38	47	13	17.3	王柱	*	222	
	CO384	*	37	25	8	8.3	H	*	236	
	DC378	*	27	36	12	8.2	*	*	239	
	DC378	*	45	46	9	11.6	*	*	243	
	CW384	IV	63	36	15	26.9	*	*	244	
	DC378	II	47	38	9	19.5	*	*	246	
	夫柱	31	37	10	12.1	*	*	248		
	CZ383	II	36	31	9	8.0	*	*	249	
	CZ379	*	37	36	16	20.8	*	*	250	
	DE378	I	43	33	7	10.6	*	*	253	
	DA382	II	56	36	13	14.3	*	*	255	
	DE375	*	26	21	10	4.2	*	*	257	
	DF376	Va	35	35	8	12.7	*	*	258	
	DE377	II	39	34	13	23.8	H	IV	259	
	CT382	*	54	52	16	60.0	*	*	260	
	CZ379	*	39	35	11	16.6	*	*	261	
	DC378	*	38	32	9	10.4	*	*	262	
	CT382	*	24	25	13	5.9	*	*	264	

14版	出 上 点	高 度	最 大 計 測 値				石 膏	分 類	整 理 番 号	備 考
			長 (m)	幅 (m)	厚 (m)	重 (t)				
	CO385		29	14	6	2.1	*	*	290	新
105-224	DD379	G	26	22	7	4.3	王柱	*	319	同
	夫柱		25	16	5	2.1	*	*	325	同
	218	D375	I	24	19	9	4.5	*	*	326
104-281	CT387	B	51	32	11	11.4	柱	III	49	新
105-264	CO384	IV	39	40	12	15.5	*	*	96	新
	CZ381	*	22	(15)	9	(2.6)	王柱	*	196	
	DC378	E	51	29	7	15.6	柱	III	99	
	CR382	*	24	23	6	3.1	柱	*	193	
	DD379	*	19	27	7	3.8	柱	*	234	新
	CZ378	IV	35	26	8	6.1	王柱	III	256	同
	DD382	*	60	13	19	110	柱	III	210	
	CW386	E	15	22	4	1.1	*	III	191	
	DE378	*	(19)	17	6	(2.1)	*	*	229	右腰?
	夫柱	*	(20)	14	3	(0.6)	*	IV	225	
106-231	DC378	IV	49	41	13	23.7	*	III	23	
	BC412	E	43	55	12	49.6	柱	II	141	N-2区
	223	BY382	IV	81	42	15	53.8	*	145	*
230	BW382	*	15	49	16	138	*	III	10	*
	BK427	I	53	55	25	78	王柱	II	60	
	BA412	I	27	21	9	5.5	柱	II	237	*
	BC412	*	24	19	9	4.5	*	III	237	*
	BJ427	*	39	40	11	10.5	*	III	228	*
	*	*	53	22	13	29.7	*	III	322	*
	AW312	Va	39	25	4	2.7	*	IV	330	*
	*	*	44	42	10	26.2	*	*	331	*
	夫柱	*	15	15	7	2.2	*	*	329	*
	BE427	*	41	13	6	2.6	*	III	13	*
147-66	BO356	E	65	45	12	34.0	柱	II	4	IV区
	BB182	III	27	37	7	9.5	*	III	1	*
68	BL156	E	59	45	15	37.9	*	III	3	*
	BS157	III	57	29	11	17.4	*	III	8	*
67	BW151	E	52	26	12	18.5	*	*	11	*
	BO156	E	47	42	12	25.0	*	IV	5	*
	BQ154	E	47	39	13	20.6	*	*	6	*
	BS156	*	40	42	13	23.9	*	*	7	*
	2E1	I	45	69	15	42	子	III	WES	
175-2	4住	3	(41)	(26)	10	(10.7)	王柱	II	*	
	3	*	*	36	7	9.3	*	III	*	
	4 11住	7	(26)	36	8	(7.6)	柱	II	*	

固形	出 土 点	層 号	最 大 計 算 値			石質	分類	整理 番号	備 考	
			長 (m)	幅 (m)	厚 (m)					
G類 板状石炭	146	2	32	18	10	4.1	玉珪	IV		
	9 南斜面	1	35	54	21	9.4	*	I		
	*	*	36	49	14	19.0	珪	*		
	5	*	(40)	16	11	(10.4)	玉珪	Bb		
	*	*	38	24	11	11.0	珪	*		
	7	*	35	21	10	7.0	*	Dg		
99-115	CQ375	I	99	50	7	45.7	珪	*	1	
H類 ビース・スティール	1H	7	15	15	5	1.5	珪	IIa	72	
22-4	*	*	32	33	8	11.1	*	IIa	78	
10H	*	*	30	27	8	9.0	*	IIb	74	
14H	*	47	29	10	8.6	玉珪	IIa	106		
7上	*	27	25	7	5.9	珪	IIa	79		
20±	*	26	17	7	3.5	玉珪	IIa	96		
58-13	34±	*	26	23	8	5.4	*	Ia	75	
59-16	64±	*	24	18	8	2.1	*	IIa	99	傾斜?
60-3	86±	*	25	10	7.0	珪	IIa	23		
60-5	105±	*	20	8	7	1.3	玉珪	IVa	100	傾斜?
60-8	111±	*	23	19	7	1.3	珪	IVa	70	
60-10	112±	*	23	19	7	3.4	*	IIa	73	
D A360	E	46	36	14	20.6	玉珪	Ia	7		
107-245	DB361	IV	32	26	10	12.1	*	*	18	
CQ364	E	38	26	10	10.4	珪	*	26		
106-238	大屋	34	21	12	7.0	玉珪	*	28		
241	CQ377	IV	29	22	13	8.3	*	36		
239	CV382	Va	27	16	7	4.0	珪	*	87	
表層		27	20	8	4.5	玉珪	*	94		
CQ381	IV	20	22	7	4.3	*	*	95		
表層		26	13	10	2.4	*	*	102		
CZ381	E	30	20	9	3.5	II	Ib	3		
CR383	IV	22	22	8	4.4	*	*	38		
CR383	*	28	25	11	7.7	*	*	66		
DC378	E	28	19	8	4.3	玉珪	*	91	一辺に調整板	
DB396	IV	40	42	7	17.0	珪	*	12	N-2区	
CQ392	*	19	26	6	3.2	*	*	60		
DA376	*	34	18	6	4.2	*	*	67		
CV383	E	19	28	9	6.3	玉珪	*	76		
表層		24	22	8	5.0	*	IIa	2	一辺に調整板	

固形	出 土 点	層 号	最 大 計 算 値			石質	分類	整理 番号	備 考
			長 (m)	幅 (m)	厚 (m)				
107-251	CV387	I	41	31	12	17.3	*	*	15
	CV382	E	25	24	7	5.9	珪	*	17
	CD374	*	33	21	5	5.5	玉珪	*	21
	DC378	*	26	18	5	2.4	*	*	26
	CZ386	*	33	20	6	4.7	珪	*	25
	CR383	IV	22	19	6	3.8	玉珪	IIa	29
243	CV382	E	22	21	10	4.3	*	*	30
248	DD379	*	29	22	8	8.4	*	*	32
249	DC377	*	23	18	8	3.5	*	*	44
250	CQ387	I	26	16	6	3.3	珪	*	34
表層		30	30	16	11.5	*	*	57	
253	表層		29	22	8	3.9	玉珪	*	61
255	DE377	IV	24	30	7	5.3	珪	*	37
256	CR379	E	25	16	8	3.6	珪	*	40
257	DC379	IV	26	27	10	6.1	珪	*	68
258	DA376	IV	27	26	10	7.7	玉珪	IIa	6
259	DC379	I	29	15	4	4.3	珪	*	6
257	CQ384	E	24	21	7	4.1	玉珪	*	10
260	DD379	*	23	16	10	4.4	*	*	19
261	DE379	*	24	22	8	6.0	珪	*	27
262	DE377	*	22	19	6	2.6	玉珪	*	33
266	DB379	*	26	16	8	3.6	*	*	39
267	DD379	IV	42	26	15	16.5	珪	*	41
表層		18	17	6	2.0	玉珪	*	*	46
268	*	23	18	9	3.3	*	*	48	
269	*	23	19	6	2.5	*	*	51	一辺に調整板
270	*	26	26	10	7.6	珪	*	*	55
271	*	21	17	6	2.6	*	*	58	
272	CQ387	IV	25	29	8	5.1	*	*	59
表層		18	11	7	1.7	玉珪	*	*	65
273	DD375	E	35	21	12	7.8	珪	*	97
274	CY382	IV	42	33	12	14.8	*	*	107
275	CN379	E	23	18	7	2.3	*	*	109
表層		15	22	7	2.0	玉珪	IIb	31	ヒザ
276	*	18	17	5	3.0	*	*	77	
279	CW382	E	25	21	7	3.8	*	*	11
280	DC377	*	21	17	7	2.5	*	*	102
281	DC379	N	26	27	9	8.0	珪	*	104
表層		24	18	7	4.0	玉珪	IIa	9	調整板

固	土	種	最大計測値						石質	分類	整備番号	備考
			長(m)	幅(m)	厚(m)	重(t)	石質	分類				
107-266	D	377	*	25	22	9	5.2	*	*	13		
	DC	279	*	25	25	7	3.5	*	*	16		
	CM	376	N	36	23	10	11.8	玉	*	20		
	DC	378	E	27	17	8	3.7	玉	*	22		
	表	40		18	18	6	2.2	珪	*	42		
	DC	376	E	25	13	7	2.6	玉	*	43		
263	CW	382	*	24	16	5	3.0	*	*	47		
	DA	382	N	21	17	7	2.5	*	*	48		
	DC	378	*	19	19	6	2.2	*	*	50		
265	DA	381	*	17	15	7	2.1	*	*	53		
	CU	386	E	31	19	9	6.1	*	*	69		
	CG	382	N	32	25	7	6.7	珪	*	80		
264	DC	378	*	33	21	9	7.0	玉	*	82		
	DD	378	*	29	24	5	2.5	*	*	84		
	DC	378	*	30	14	8	3.3	*	*	86		
269	DA	377	E	18	13	5	1.4	玉	*	99		
	CO	385	N	21	17	8	3.0	珪	*	92		
	CO	384	N	32	18	8	4.0	*	*	96		
	DC	377	E	34	26	8	12.0	珪	*	106		
	CZ	380	*	18	17	6	1.7	玉	N-1	45		
	CZ	381	N	24	16	7	2.5	*	*1	52		
271	表	38		14	16	6	1.0	*	*2	63		
	DA	382	E	24	16	8	2.7	*	*1	85		
	表	38		16	7	2.6	*	*2	90			
272	DC	382	E	22	23	9	5.4	珪	N-2	5		
	CM	376	N	34	35	8	11.5	*	*1	56		
	CO	382	N	26	23	6	4.2	*	*1	62		
273	CN	379	*	21	20	6	2.9	*	*2	61		
	DA	382	E	47	38	14	23.7	玉	*	106		
	CZ	380	N	17	15	5	1.2	*	*	103		
106-236	4H	7		26	24	10	7.3	玉	H-a	131		
	CM	376	E	36	23	11	11.9	玉	I-a	114		
	CM	376	E	36	24	11	9.2	珪	I-a	129		
106-342	DD	380	N	20	18	8	3.7	玉	*	117		
	DD	382	N	36	24	11	9.2	珪	I-b	135		
	CY	382	*	24	20	10	6.0	珪	I-b	136		
107-246	CY	382	*	36	19	11	5.6	*	I-a	112		
	DD	382	*	42	28	10	11.0	*	*	123		
	CK	382	*	24	17	5	2.1	*	*	125		
107-246	CZ	379	*	32	27	12	11.0	*	*	126		
	DC	379	*	33	16	11	6.0	珪	*	128		
	CY	379	N	46	25	12	17.3	玉	I-a	110		

固	土	種	最大計測値						石質	分類	整備番号	備考
			長(m)	幅(m)	厚(m)	重(t)	石質	分類				
107-266	D	378	E	41	26	10	11.4	*	*	111		
	CY	382	*	27	23	9	6.3	*	*	113		
	表	38		24	18	7	3.0	*	*	115		
	DC	378	E	26	26	14	9.5	珪	*	120		
	CY	382	*	37	30	10	11.6	玉	*	121		
	*	*	*	41	30	13	17.5	*	*	122		
263	DA	379	*	40	27	11	15.6	珪	*	124		
	CU	387	E	29	17	8	4.7	玉	*	126		
	DC	377	N	41	33	13	15.9	珪	*	141	一端が平坦。石塊?	
265	CY	382	*	39	17	13	8.0	玉	Wa	116		
	CO	384	*	31	28	7	2.5	*	*	118	礫片?	
	DC	376	*	27	15	9	2.9	*	*	122		
264	*	*	*	31	27	8	4.2	*	*	133		
	*	*	*	24	17	5	1.8	*	*	134	礫片?	
	CR	382	*	31	16	9	4.5	*	*	136		
269	CY	382	*	25	25	8	6.8	*	*	137	一端が平坦	
	*	*	*	27	27	9	7.0	*	Wa	119		
	CQ	382	E	25	16	11	4.2	珪	*	140	一端が平坦。石塊?	
254	表	38		30	26	6	5.2	*	I-b	4		
	DC	377	E	27	22	6	2.9	玉	I-b	53		
	DE	381	N	32	27	7	3.7	*	*	1		
252	CE	383	*	24	26	6	4.1	珪	*	34		
	DD	375	Va	28	26	6	4.7	玉	*	35		
	CW	383	N	34	31	11	15.6	*	Wa	不291		
106-6	DC	381	E	32	11	10	3.7	*	Wa	不341		
	BA	42	I	46	26	12	13.5	玉	I-a	20		
I層 磁性石片												
14-1	8H	フク	(81)	43	26	(151)	磁鐵	I		68	刃	
14-2	2	*	(100)	(45)	30	(212)	閃	IB		87	方欠基	
	*	*	(43)	31	23	(41)	矽	ID		69	基	
61-2	6上	*	(61)	45	(26)	(106)	輝	*		70	刃	
106-16	CO387	EW	46	25	8	12	*	I		3		
106-7	DB375	*	(63)	(41)	(19)	(74)	輝	*		40	基、内斜用	
	DA380	*	(57)	59	(14)	(75)	*	*		97	刃基、X大切	
	CV382	Va	52	19	10	16	頁	B		42		
106-10	CY382	EW	37	16	7	7	矽	IA		1		
106-12	DE376	*	32	20	7	7	*	*		2		
106-14	DC379	*	48	26	10	21	*	*		4		

固 定 数	出 土 地 点	层	最 大 计 算 量				石 质	分 類	整 体 番 号	備 考
			長 (m)	幅 (m)	厚 (m)	重 (t)				
109— 4	C M278	IV	100	42	23	144	閃	*	10	完
109— 5	C Y360	IV	32	17	5	8	褐鐵	*	95	高火
109— 11	C Z378	*	47	13	6	4	*	*	96	完
109— 17	D D378	*	(22)	(11)	(8)	(3)	*	*	6	高
109— 19	C U384	II	(21)	(22)	(9)	(6)	頁	*	7	低
109— 25	D C277	IV	(36)	(23)	(7)	(7)	*	*	8	高
109— 3	C X379	Va	96	44	(23)	(16)	層	*	15	高火
109— 19	C R363	IV	(79)	(36)	(22)	(9)	閃	*	19	高火
	C Y382	Va	(49)	(38)	(20)	(7)	褐鐵	*	33	高
109— 11	C N379	I	(92)	(45)	26	(168)	層	*	56	高火
	C O375	III	(33)	26	(6.6)	(8)	褐鐵	*	64	高火
109— 3	D B277	IV	(54)	(28)	16	(23)	綠泥	*	94	高火
109— 8	C X383	*	121	48	26	222	閃	ⅢB	9	完
	C N384	II	92	36	22	104	*	*	55	完
	C Z377	*	151	47	32	358	*	*	75	完
109— 5	C M279	*	(86)	(43)	(24)	(149)	*	*	11	複合、基
	D C279	*	(50)	(45)	(24)	(69)	*	*	12	列
			123	45	(25)	(216)	*	*		
109— 6	D D322	IV	(110)	42	26	(206)	*	*	14	高火
	D A277	IV	(90)	(45)	24	(53)	安	*	16	高
109— 5	C V386	*	(95)	43	26	(177)	閃	*	17	高火
109— 2	D D276	IV	(103)	42	31	(236)	*	*	18	高火
109— 9	D D374	*	(77)	(42)	(27)	(143)	*	*	21	高火
109— 8	D D378	IV	(77)	42	(26)	(145)	*	*	22	高火
109— 9	C V382	IV	(86)	44	(23)	(172)	閃	ⅢB	22	高火
	C O378	IV	(36)	(40)	(24)	(47)	*	*	29	接、方
	C O377	II	(87)	(45)	(28)	(184)	*	*	50	接、基
			115	—	26					
	C M277	Va	(145)	(53)	(31)	(418)	*	*	30	高火
109— 8	C P379	II	(59)	41	25	(127)	*	*	31	高火、未利用
	D D381	Va	(93)	(47)	(21)	(165)	*	*	39	高火
	D E326	II	(88)	(49)	(31)	(162)	*	*	51	接、基
	C X381	—	—	—	—	—				
			153	49	28	333				
	D D379	*	160	(41)	23	(153)	*	*	54	高火
	D E326	II	(99)	—	(33)	(214)	*	*	59	高、硬質
	C X381	*	(96)	52	(31)	(211)	*	*	76	高
109— 4	D C378	*	(96)	(37)	(25)	(72)	層	*	84	高、硬質
	C Z380	IV	(98)	(43)	26	(152)	*	*	87	高火
	D B375	*	(127)	(46)	22	(314)	頁	*	88	高火
	D B377	*	(112)	(49)	(29)	(224)	*	*	89	高火

固 定 数	出 土 地 点	层	最 大 计 算 量				石 质	分 類	整 体 番 号	備 考
			長 (m)	幅 (m)	厚 (m)	重 (t)				
109— 6	C T385	*	(85)	49	(22)	(179)	閃	*	90	高火、部分a?
	C T386	I	(95)	(51)	(29)	(221)	閃	*	91	高火
	C Z379	IV	(91)	(45)	(27)	(176)	*	*	92	高火
109— 12	C Y386	*	(60)	(41)	27	(151)	*	*	93	高火
	D A374	I	(66)	(37)	(37)	(203)	閃	*	109	
109— 22	D D374	IV	60	39	30	55	閃	ⅢC	29	完、再加工
109— 7	C Z380	*	109	44	24	190	*	*	85	完
109— 1	C T383	*	118	57	33	329	*	*	86	完
109— 24	C O373	II	(59)	38	(25)	(98)	*	道D	24	高火
	C Z384	IV	(60)	42	(30)	(106)	*	*	25	高
	D A385	*	(39)	(45)	(19)	(47)	*	*	26	高
109— 23	D B374	*	(53)	34	(17)	(46)	層	*	27	高
	D D379	*	(41)	37	(26)	(50)	*	*	28	高
	D C378	*	(62)	(37)	(24)	(92)	*	*	34	基
	C V383	*	(42)	(36)	(24)	(48)	閃	*	35	基
	C O385	*	(51)	(35)	(24)	(60)	砂	*	36	基
	C O380	*	(66)	(45)	(30)	(106)	*	*	37	基
	C Y387	*	(57)	(35)	(28)	(80)	閃	*	38	基
	D E379	*	(58)	(41)	(27)	(97)	*	*	41	基
	C Y388	IV	(64)	(42)	(30)	(119)	*	道D	42	基
	D C377	*	(39)	(35)	(22)	(37)	閃	*	43	基
109— 18	D C378	II	(32)	(23)	(13)	(15)	層	*	44	基
109— 21	D C379	IV	(30)	(26)	(15)	(19)	層	*	45	基
	D D379	II	(30)	(32)	(22)	(37)	層	*	46	基
	A 木	*	(37)	(32)	(26)	(33)	發	*	47	高
	D E376	Va	(74)	(48)	(38)	(154)	閃	*	48	中
	D C378	IV	(53)	(48)	(31)	(134)	*	*	49	中
	C R380	II	(32)	—	(25)	(44)	*	*	52	刀
	C M375	*	(96)	(58)	(33)	(259)	*	*	53	刀火基
	C J379	II	(57)	(39)	(26)	(53)	層	*	57	基
	C P375	I	(51)	(38)	(30)	(78)	閃	*	58	基
	C P384	II	(43)	41	9	(26)	砂	*	60	刀
	D D374	*	(21)	(48)	(15)	(14)	層	*	66	刀一部
	D C377	*	(13)	(29)	6.7	(2)	*	*	66	刀一部
	D B379	*	(68)	(36)	(27)	(88)	閃	*	89	基
	C Q382	*	(52)	(35)	(26)	(45)	砂	*	91	基
	D C378	*	(50)	(30)	(23)	(54)	安	*	92	基
	D B374	IV	(40)	(42)	(27)	(79)	閃	*	98	網
	D B375	*	(40)	(34)	(23)	(37)	安	*	100	基
	C T386	I	(78)	(45)	(26)	(147)	閃	*	101	基
	D B375	IV	(72)	(41)	(29)	(123)	*	*	102	基

固	土	点	種	最大計測値				石質	分類	整理 番号	備 考
				長(m)	幅(m)	厚(m)	積(m)				
C O 286	*	(65)	(27)	(24)	(49)	*	*	103	基		
D B 275	*	(55)	(42)	(28)	(94)	*	*	104	基		
C V 283	*	(55)	(45)	(24)	(72)	*	*	105	基		
D B 273	*	(45)	(34)	(14)	(51)	*	*	106	基		
C M 283	II	(39)	(25)	(4)	(6)	安	*	107	瓦		
C N 278	*	(59)	(38)	(25)	(65)	*	*	108	基		
166- 1	B O 442	IV	114	45	25	278	植	1	13	安明、N-2区	
C B 275	IV	(53)	(36)	(22)	(63)	*	*	99	基		
166- 13	B O 472	I	44	13	8	9	IA	5	5		
B I 427	*	(82)	(44)	(29)	(163)	閃	BD	85	基		
148- 1		141	53	22	45	真	I	D4	VIII		
176- 7	7 H	65	31	15	49	結	IA	77	瓦		
177- 4	南		(71)	(20)	(8)	結	IA	78	70	瓦欠	
177- 3	南		81	49	27	172	閃	IB	409		
南(36)	I	(84)	(46)	(34)	(191)	*	*	80	基		

J 管 鋼管等

109- 15	C O 286	III	115	61	24	216	磚	I	32	基欠	
C S 281	II	69	37	11	31	千	+	63	63		
C K 271	*	91	62	23	159	磚	+	74	74	瓦	
109- 14	D C 275	*	142	41	28	155	瓦	II	72	瓦	
	D D 280	*	(58)	(54)	(21)	(85)	砂	*	73		

露状右方

109- 13	C O 274	II IV	(75)	(56)	(16)	(81)	磚		71		
---------	---------	-------	--------	--------	--------	--------	---	--	----	--	--

K 槌 石碑

固	土	点	種	最大計測値				石質	分類	整理 番号	備 考
				長(m)	幅(m)	厚(m)	積(m)				
14- 5	B H	?	67	45	20	45	66	安	IIb	209	
*	*	(60)	(59)	(25)		(82)	*	IA	211		
16- 13	H H	*	112	66	24	56	229	+	IIb	223	
61- 10	6土	74	50	23	43	88	*	*	251		
61- 3	*	100	63	29	58	152	*	IIb	253		
61- 8	60土	II	99	75	33	66	287	+	IIc	249	
62- 5	61土	?	72	65	21	58	119	*	261		
62- 8	102土	*	113	95	26	86	425	*	IIb	265	
62- 11	116土	*	84	65	34	58	221	*	IIc	271	
110- 3	D C 277	II	66	52	17	52	58	*	I	1	
110- 2	D C 276	*	97	54	34	47	244	*	*	2	
110- 1	C O 282	*	129	63	22	55	193	*	*	3	
	D D 277	*	77	56	25	53	170	*	*	4	

固	土	点	種	最大計測値				石質	分類	整理 番号	備 考
				長(m)	幅(m)	厚(m)	積(m)				
D B 277	*	71	46	20	34	87	*	*	*	5	
110- 9	C O 279	*	76	69	21	62	141	*	IIA	7	
110- 15	C B 27?	?	74	58	26	71	119	*	*	8	
110- 4	D C 280	II	72	54	25	70	157	*	*	9	
110- 6	C V 287	*	85	71	30	81	235	*	*	10	
110- 8	D F 275	*	100	94	29	94	493	*	*	11	
110- 7	D C 279	*	105	92	25	89	266	*	*	12	
110- 10	D C 278	*	89	61	30	88	226	*	*	13	
110- 5	D C 275	*	79	52	23	66	89	*	*	14	
110- 11	C K 277	II	95	69	25	77	232	*	*	15	
110- 10	C T 284	*	74	49	21	66	106	*	*	16	
	C X 284	*	56	49	16	59	55	*	*	13	
D C 277	*	92	47	23	39	127	*	IIb	17		
D C 278	*	112	80	42	75	462	*	*	22		
D D 279	*	93	74	39	69	189	*	*	26		
110- 12	C Q 272	*	67	45	17	39	57	*	*	27	
	C P 286	*	65	63	26	61	229	*	*	29	
D D 277	*	69	48	21	45	97	*	*	30		
D A 282	*	86	58	26	46	143	*	*	33		
C W 287	*	73	52	26	51	134	*	*	36		
D F 277	*	107	53	35	46	214	*	*	37		
D A 277	*	110	66	37	56	360	*	*	38		
D E 274	*	88	61	29	52	205	*	IIb	39		
110- 13	D A 273	*	60	55	24	41	50	*	*	40	
D D 278	*	89	49	27	49	169	*	*	42		
C R 283	*	72	65	14	47	71	*	*	46		
110- 17	D F 275	*	96	94	31	88	387	*	IIb	6	
110- 22	D E 280	I	96	72	27	63	211	*	*	21	
111- 4	D D 278	II	93	62	26	53	187	*	*	23	
D C 275	*	66	57	23	48	156	*	*	24		
111- 3	D D 277	*	76	45	28	60	199	*	*	25	
110- 20	D E 279	I	90	72	26	64	230	*	*	31	
D A 277	II	90	67	31	56	185	*	*	34		
D C 278	*	73	59	17	41	72	*	*	35		
111- 6	D D 274	*	111	68	36	65	366	*	*	43	
110- 19	D C 278	*	98	76	17	62	134	*	*	44	
110- 21	D C 280	*	74	58	18	47	110	*	*	46	
111- 7	D B 278	*	69	67	24	57	156	*	*	47	
D C 276	*	94	52	24	52	164	*	*	48		
110- 18	C S 287	I	48	36	14	33	30	*	*	49	
C N 283	Va	98	55	34	50	237	*	*	50		

河段	出上点	里	粗大计数表						石质	分层	整理 番号	備考
			長(m)	幅(m)	厚(m)	块(m)	重(t)	石質				
III-1	C Z378	II	90	72	21	64	179	*	*	61		
	C P362	*	95	97	25	48	158	*	*	84		
	D C377	*	97	74	26	69	196	*	*	89		
	D E379	*	109	53	31	46	182	*	*	111		
	D C376	*	66	52	18	45	75	*	*	124		
	支流	*	87	63	23	53	141	*	*	132		
III-17	D A377	II	105	49	24	43	260	*	*	118c	19	
III-18	C N381	II	65	49	17	36	57	黑	*	41		
	D A377	II	80	58	24	40	119	黑	*	51		
	C Q378	*	101	71	25	64	196	*	*	52		
	D B378	IV	78	58	26	55	131	*	*	54		
	C Y361	II	78	56	21	44	96	*	*	55		
III-5	C Q380	*	94	92	29	83	247	*	*	56		
III-6	D C378	*	120	76	28	73	296	*	*	57		
	D A377	*	86	60	29	51	174	*	*	59		
	D A373	*	96	57	27	62	224	*	*	60		
	D C375	II	121	86	31	76	385	*	*	63		
	C M373	*	91	57	24	53	170	*	*	64		
	D B378	*	74	60	25	51	160	*	*	65		
III-15	D E377	*	73	47	24	45	96	*	*	66		
	C O366	*	104	64	28	61	186	*	*	67		
	C U362	Va	120	55	39	79	402	*	*	68		
	C L380	II	87	70	48	64	257	*	*	69		
III-16	D B377	*	89	64	42	56	257	*	*	70		
III-13	C Z382	*	70	52	20	49	93	*	*	71		
III-14	支流	*	47	47	24	44	71	千	*	72		
	D D377	II	45	30	10	27	17	灰	*	73		
	D E373	*	104	55	31	47	223	*	*	74		
	C M379	*	106	64	27	57	260	*	*	75		
	D D379	*	105	65	32	58	256	*	*	76		
	D C374	*	90	53	22	52	154	*	*	77		
	D C381	*	92	70	33	63	245	*	*	78		
	C N374	*	99	51	27	47	114	*	*	79		
	?	*	81	65	28	64	195	*	*	80		
	D D377	II	83	68	25	61	247	*	*	81		
	D A375	*	89	62	21	53	127	*	*	82		
	D E377	*	83	52	26	46	115	*	*	83		
	C Y365	*	64	59	17	56	96	*	*	85		
	C V365	*	81	65	27	55	169	*	*	86		
	D B378	*	76	56	29	47	50	*	*	87		
	C R365	*	91	66	30	58	199	*	*	88		

河段	出上点	里	粗大计数表						石质	分层	整理 番号	備考
			長(m)	幅(m)	厚(m)	块(m)	重(t)	石質				
III-18	D A379	IV	81	46	23	41	96	*	*	90		
	D C375	G	94	64	29	53	180	*	*	91		
	D F375	*	80	56	18	51	94	*	*	92		
	D C374	*	87	65	20	59	176	*	*	93		
	C N381		79	60	26	54	153	*	*	94		
	D A380	II	66	62	23	56	184	*	*	95		
	C Q382	*	100	72	18	64	199	*	*	96		
	C U383	*	105	95	33	62	276	*	*	97		
	D D377	*	93	64	35	45	202	*	*	99		
	C Y381	*	94	55	22	49	167	*	*	100		
	D E377	*	80	59	31	50	175	*	*	101		
	D D378	*	91	52	25	60	212	*	*	102		
	D A376	*	81	61	21	54	147	*	*	103		
III-11	C Y382	*	115	63	26	56	198	*	*	110		
	D D374	*	60	67	26	59	110	*	*	117		
	D D378	*	119	83	48	77	489	黑	*	131		
	D B378	*	(89)	(70)	(23)	(190)	灰	II B	106			
	C Y387	*	(99)	(80)	(27)	(213)	*	*	107			
	D E376	Va	113	(64)	(39)	(374)	*	*	108			
	D A372	E	91	(60)	(24)	(150)	*	*	109			
	D A377	*	74	(55)	25	(135)	*	*	112			
	D E377	*	(72)	42	(17)	(56)	*	*	113			
	C Q377	*	(100)	(71)	(25)	(225)	*	*	114			
	D D377	*	(72)	(42)	(19)	(72)	*	*	115			
	C X381	*	98	(57)	38	(301)	*	*	116			
	D C376	*	(45)	(60)	25	(77)	*	*	118			
	C Y378	*	83	(62)	31	(219)	*	*	119			
	D C276	*	(63)	(79)	25	(158)	*	*	120			
	D B378	*	68	(48)	(19)	(75)	*	*	121			
	(85)	*	74	(19)	(151)	(102)	*	*	122			
	C W384	E	(71)	(48)	(21)	(105)	*	*	123			
	尖石	*	(80)	(49)	(32)	(165)	*	*	126			
	D B380	II	78	(56)	(18)	(91)	*	*	127			
	C S381	*	(99)	(70)	(27)	(224)	*	*	128			
	C Z384	*	(70)	(57)	(18)	(106)	*	*	129			
	D E378	*	(65)	(58)	(17)	(78)	*	*	130			
	D E377	*	98	70	26	205	*	*	131			
	D F372	*	130	77	44	66	495	*	*	24		
	C W383	*	97	58	38	222	*	*	32			
	D B377	*	77	68	28	62	182	*	*	50		
	C R383	*	119	76	34	68	482	*	*	104		
III-19												

固	板	出	上	層	大計				石質	分類	整理番号	備考	
					長(m)	幅(m)	厚(m)	積(m)					
D	F375	x			119	(94)	(28)	(671)	x	x	105		
DC	379	x			(58)	(53)	22	(79)	x	x	122		
C	G574	I			106	91	26	72	310	x	194	26	
111-	2	C	D377	II	87	65	29	59	168	x	185b	45	
111-	2	C	J366	I	115	79	21	72	269	安	186c	52	
111-	12	C	D373	II	65	63	22	55	94	x	x	82	
B	E62	x			(70)	69	21	(125)	x	D3	1	IV-2区	
148-	2	B	W149	III	71	68	19	65	125	x	B4	D1	V区
148-	4	x			71	66	24	67	116	x	x	D3	
148-	3	B	H144	II	70	46	20	65	93	ナ+	x	18	
148-	6	B	V143	II	74	54	22	70	114	安	x	21	
148-	5	V	143	II	65	54	17	59	54	x	x	22	
177-	9	南	南	表	110	62	25	53	223	x	186	406	V区
177-	6	南	南	I	76	51	25	44	59	安	x	407	

L層 茶色砂

固	板	出	上	層	大計				石質	分類	整理番号	備考
					長(m)	幅(m)	厚(m)	積(m)				
9-	10	H	底原	111	29	22	101	実			203	1-C
9-	11	x		94	33	15	67	x			204	x
9-	12	x		123	56	26	328	x			201	B4
9-	11	2 H	底下	150	81	38	807	x	ナ	1	79×12	206
10-	7	3日		115	63	30	343	x	ナ	1	16×17	207
14-	4	8日		115	52	27	157	x			213	1-C
14-	3	x		65	57	42	261	ナ+			210	B4
16-	11	9 H	pH2	82	61	43	304	x			218	x
		x		87	73	42	419	安			220	B4
16-	12	x		101	62	48	496	x	ナ	2	77×41 66×32	217
									タタキ	2	26×13 23×16	
									M1	2	54×25 56×27	
18-	17	10日		(73)	(68)	(48)	(374)	x			223	1-B
18-	18	x		76	62	53	273	x	ナ	1	36×13	221
				42	41	34	92	x			719	x
				53	47	37	113	x			720	x
19-	17	x		61	59	47	153	x			226	x
19-	18	x		44	43	35	93	x			228	x
19-	16	x		(162)	(77)	(60)	(733)	x			227	1-E
21-	10	13日	x	166	71	67	1136	x	ナ	2	92×25 85×31	230
				(114)	(68)	(63)	(376)	x			231	N
61-	1	6土		118	88	29	447	x	ナ	2	67×14 69×15	233
61-	4	7土		100	79	49	574	x	ナ	2	44×23 58×25	235
61-	5	18土	x	92	82	57	589	x	ナ	1	20×18	237

固	板	出	上	層	大計				石質	分類	整理番号	備考	
					長(m)	幅(m)	厚(m)	積(m)					
61-	6	26土	IV	101	65	50	506	x	スリ	2	58×34 50×19	239	
		x		(130)	78	55	(90)	x	スリ	1	74×12	238	
61-	7	38土	I	62	53	51	228	x				243	
		x		(76)	(75)	(57)	(158)	x				245	
62-	3	51土	100	46	22	157	x					246	
		x		56	50	42	230	ナ				247	
				52土	8	112	(58)	26	(301)	スリ	2	82×18 (44×19)	248
61-	11	65土	7	74	50	42	205	ナ				252	
		x		(77)	(47)	(58)	(220)	安				250	
61-	9	x		67	7	(106)	(91)	(62)	(654)	x	1	1A 1級	255
				121	62	36	404	x				258	
62-	1	67土	7	104	58	34	230	定	四	2	43×25 39×20	254	
		x										19×18	
62-	4	72土		107	70	30	279	x	スリ	1	90×24	259	
62-	5	74土	7	170	56	43	805	x	スリ	1	157×11	260	
62-	7	86土		93	62	32	251	x	四	1	22×19	263	
62-	10	117		76	52	34	217	ナ				266	
		x		98	62	40	287	x				267	
		x		71	54	39	195	x				268	
				(45)	(63)	(47)	(212)	安				273	
		x		(66)	(69)	(67)	(464)	x				272	
62-	9	131土	x	132	54	36	279	タボミ	2	73×23 18×15	274		
		x										75×25	
112-	4	C X383	II	184	165	55	1240	x	スリ	1	136×21	38	
112-	5	C W385	x	156	96	65	965	x	スリ	1	134×15	42	
112-	6	D E377	x	144	67	37	516	x	スリ	1	125×11	44	
									タタキ	2	23×13 29×9	x	
112-	9	D B378	x	141	79	62	1063	x	スリ	1	85×39	46	
		x		145	59	49	718	x	スリ	1	128×34	47	
112-	3	C C377	x	140	58	51	537	x	スリ	1	111×22	48	
				125	83	46	704	x	スリ	1	71×10	49	
				121	76	59	247	x	スリ	1	49×16	51	
112-	3	C Z362	x	109	72	58	567	x	スリ	1	89×15	52	
				176	69	65	1043	x	スリ	1	84×12	72	
113-	2	C Z379	x	123	76	43	495	x	スリ	1	105×13	31	
				170	66	36	824	x	スリ	1	153×26	39	
113-	3	D C384	II	162	88	56	1062	移	スリ	1	127×15	40	
113-	1	E D379	x	160	70	43	785	安	スリ	1	140×21	41	
112-	2	D B373	x	144	75	46	813	x	スリ	1	107×11	45	
112-	4	D A374	IV	156	75	64	965	x	スリ	1	132×13	74	
112-	6	D F375	II	128	68	47	537	x	スリ	2	112×32 55×24	54	

图版	出土地点	年	总 计 面 积				石质	地 质		整理 番号	分 析	鉴 考
			长	宽	厚	积		层	长×宽×厚			
113—7	DD377	*	166	85	41	386	*	X 9	2 53×7 36×9	37	*	*
113—8	CU385	*	112	58	41	306	*	X 9	2 58×14 78×14	60	*	*
113—9	DA379	*	151	81	63	1158	*	X 9	2 119×19 118×19	73	*	*
	DA376	V	(94)	(66)	(42)	(454)	*			120	*	
	CZ378	H	(143)	(87)	(62)	(1073)	*			125	*	
	CQ377	H	(150)	(85)	(55)	(896)	安			126	1 A	
	DD380	*	(117)	(75)	(55)	(631)	*			127	*	
	CO387	*	(107)	(72)	(48)	(418)	*			128	*	
	381	*	(103)	(77)	(48)	(459)	*			129	*	
	CX385	*	(90)	(65)	(49)	(426)	*			130	*	
	CU382	*	(86)	(68)	(49)	(405)	*			131	*	
	CN386	*	(93)	(82)	(45)	(676)	*			132	*	
	CX379	*	(80)	(93)	(47)	(381)	*			133	*	
	CU385	I	(75)	(75)	(48)	(400)	*			135	*	
	CV384	H	(68)	(80)	(52)	(317)	*			136	*	
	CZ384	*	(65)	(77)	(50)	(322)	*			137	*	
	CD375	*	(65)	(69)	(47)	(272)	*			138	*	
	CW382	*	(77)	(24)	(43)	(278)	*			139	*	
	CI389	*	(60)	(85)	(52)	(236)	*			140	*	
	CT381	*	(61)	(65)	(62)	(241)	*			142	*	
	CN386	*	(85)	(60)	(33)	(256)	*			143	*	
	CW387	*	(81)	(64)	(37)	(245)	*			144	*	
	CS382	*	(61)	(71)	(40)	(262)	*			145	*	
	DA382	*	(134)	58	38	(320)	*			146	*	
	CN377	*	(82)	(70)	(58)	(338)	*			147	*	
	DC377	*	(96)	(68)	(48)	(318)	*			148	*	
	DE379	*	(58)	(62)	(29)	(173)	*			149	*	
114—2	DD377	*	92	75	33	346	*	X 9	1 66×13	27	1B	
114—3	CV384	*	93	66	38	291	*	X 9	1 69×20	39	*	
										44	19×10	
114—1	DA377	*	91	71	39	395	*	X 9	1 59×23	66	*	
	DC378	*	(61)	(55)	(25)	(126)	*			114	*	
	DC375	*	(113)	93	36	(581)	*			123	*	
	CW382	*	(72)	(77)	38	(184)	*			124	*	
	DC374	*	125	73	35	489	*	X 9	1 96×15	30	1B	
114—4	DC375	*	101	68	36	295	*	X 9	1 70×19	32	*	
114—5	DB378	*	100	53	33	279	*	X 9	2 92×30 55×25	33	*	
114—6	CW386	*	100	55	22	266	*	X 9	2 82×15 43×6	34	*	
114—7	CR386	*	97	53	26	197	*	X 9	1 71×13	35	*	
114—8	DD375	*	97	61	25	253	*	X 9	2 81×17 30×7	36	*	
114—9	DD378	H	89	66	38	394	H	X 9	2 56×8 41×15	37	1B	

图版	出土地点	年	总 计 面 积				石质	地 质		整理 番号	分 析	鉴 考
			长	宽	厚	积		层	长×宽×厚			
115—1	CU384	*	113	61	38	306	*	X 9	2 62×8 91×16	91	*	
115—2	DD377	*	94	63	37	318	*	X 9	2 80×23 26×12	10	1B	
115—3	DC374	*	121	78	47	748	*	X 9	2 81×39 77×20	11	*	
115—4	DA379	*	120	77	36	577	*	X 9	2 85×29 63×14	12	*	
114—10	DC380	*	116	72	36	499	*	X 9	2 65×17 37×8	23	*	
115—2	DD378	*	106	64	33	324	*	X 9	2 27×5 42×11	24	*	
115—4	DD377	*	94	71	49	481	*	X 9	2 52×17 28×9	26	*	
	CY382	*	123	55	39	597	*	X 9	2 65×13 96×35	67	*	
	DC375	*	104	65	31	330	*	X 9	2 54×7 32×4	92	*	
115—8	DB398	H	118	61	38	436	H	X 9	2 88×21 89×20	13	1B	
115—5	QC377	H	112	62	40	478	H	X 9	2 88×22 77×23	16	*	
115—10	DB377	*	109	66	33	395	*	X 9	2 69×19 62×18	17	*	
115—7	DF375	*	96	61	41	367	*	X 9	2 58×39 61×21	20	*	
115—8	QC382	*	99	58	24	292	*	X 9	2 48×7 44×10	25	*	
	DB377	*	124	69	48	851	*	X 9	2 48×17 71×21	53	*	
115—9	CU382	Va	115	87	64	929	*	X 9	2 54×26 49×27	55	*	
	CO375	?	110	73	37	463	?	X 9	2 56×7 55×11	56	*	
	DA376	?	109	70	43	544	?	X 9	2 72×28 78×28	59	*	
116—1	CJ314	H	110	74	44	566	H	X 9	2 70×23 74×22	4	1B	
										26	24×14 25×14	
	CX382	H	107	84	54	783	H	X 9	2 58×27 53×31	15	*	
	CY381	*	118	59	(35)	(225)	*			110	1 B	
	CW387	*	(81)	(56)	(37)	(286)	*			111	*	
	CW387	I	(74)	(55)	(30)	(222)	I			112	*	
	DC382	H	(48)	(56)	(41)	(173)	H			115	*	
	CQ372	I	(112)	74	46	(558)	I			116	*	
	CY382	*	(107)	66	(35)	(265)	*			117	*	
	DC374	H	(121)	84	34	(587)	H			119	*	
	DD380	*	112	59	(33)	(306)	*			121	*	
	DB373	*	541	(66)	(30)	(156)	*			122	*	
116—2	DD378	*	135	41	19	147				96	1 C	
116—3	CN376	*	107	34	13	80	*			97	*	
116—4	DD382	*	93	43	18	114	*			98	*	
	DA396	*	72	45	28	116	*			100	*	
116—10	CP385	H	118	39	29	128	H			101	1 C	
116—7	DA387	I	103	51	28	138	I			102	*	
116—5	DC378	H	92	46	16	87	H			103	*	
116—12	CS382	Va	66	25	22	60	?			104	*	
116—14	DA377	H	89	36	16	52	H			105	*	
116—13	CW384	H/V	77	32	23	65	?			106	*	
116—8	DD377	H	66	39	21	75	H			107	*	

回	版	出	土	大計測				石質	後			面	等
				幅	高	厚	重		鉄	角	共×幅面		
116—	6	D	B306	W	(92)	(49)	(16)	(114)	*	99	*		
116—	9	D	C378	W	(66)	(30)	(25)	(71)	*	108	*		
116—	11	D	D378	*	(63)	(23)	(14)	(26)	鉄	109	*		
117—	9	D	A375	V.a	66	55	54	226	安	701	I D		
		D	C381	*	57	54	52	219	*	702	*		
		C	X384	*	56	54	48	201	*	703	*		
117—	11	C	O377	*	55	50	48	177	*	704	*		
		C	P378	*	55	49	46	143	*	705	*		
117—	12	C	Y381	*	53	49	43	159	*	706	*		
		D	D384	*	53	47	42	127	*	707	*		
		D	B383	*	51	48	43	135	*	708	*		
117—	13	D	D377	*	49	42	40	110	*	709	*		
		D	D377	*	49	43	35	94	*	710	*		
		C	X384	*	46	39	38	85	*	711	*		
		D	A383	*	48	42	38	97	*	712	*		
		D	D377	*	42	38	32	69	*	713	*		
117—	15	C	X384	*	46	38	35	69	*	714	*		
117—	13	C	X384	*	41	39	34	72	*	715	*		
		?	*	41	34	32	52	*	716	*			
117—	14	D	C386	I	46	38	32	62	*	717	*		
		C	U385	*	39	38	36	66	*	718	*		
		C	X384	*	56	52	48	196	*	721	*		
		D	A378	*	61	48	34	136	*	722	*		
		D	E382	*	63	51	34	163	*	723	*		
		C	T387	I	62	53	47	269	*	724	*		
117—	8		278	E	66	62	54	268	*	725	*		
		C	Q379	*	69	68	49	345	*	726	*		
		D	E378	I	86	79	61	355	*	727	*		
116—	18	C	W385	W	93	70	57	466	安	87	I E		
117—	2	D	D381	V.a	106	74	65	688	*	879	2	67×50 57×32	
								*	879	3	64×49 68×57		
								*	879	4	64×48		
117—	1	C	O377	W	110	80	44	809	*	880	1	72×55	
		D	C378	*	114	69	45	724	*	881	1	56×39	
								*	881	2	タカキ 1		
								*	881	2	タカキ 2		
								*	881	2	22×21 36×27		
116—	13	C	S382	*	99	79	48	706	砂	882	1	タカキ 1	
116—	17	C	Z382	*	94	74	53	581	安	883	2	タカキ 2	
		C	W385	*	115	91	55	919	*	884	2	44×14 38×12	
		C	U386	*	103	91	55	745	*	885	2	27×18 25×12	
117—	4	D	C375	*	116	85	31	522	*	886	1	70×17	
117—	3	C	Q378	*	145	72	39	622	*	887	1	70×17 24×14	
117—	5	C	X384	*	119	95	46	627	*	888	1	58×15	

回	版	出	土	大計測				石質	後			面	等
				幅	高	厚	重		鉄	角	共×幅面		
117—	6	C	R366	*	97	62	28	224	*	889	1	E A	
		C	R373	III	56	57	52	246	*	890	1	E B	
117—	7	C	Z378	G	63	58	50	268	*	891	1	85	
		D	E375	*	74	65	37	238	*	892	1	94	
		C	Y382	*	70	62	49	217	*	893	1	95	
		D	E377	*	66	66	60	343	*	894	1	149	
		D	A376	V.a	66	55	42	228	*	895	1	150	
		D	D377	H	58	53	45	205	*	896	1	151	
		D	C373	*	60	51	41	184	*	897	1	152	
		C	O387	I	66	52	44	215	*	898	1	153	
		C	U384	H	76	58	34	200	*	899	1	154	
		C	G382	*	78	51	39	256	*	900	1	155	
		C	S387	I	73	46	31	157	*	901	1	156	
		C	U386	H	72	54	36	219	*	902	1	157	
117—	7	D	C382	*	70	65	41	270	*	903	1	158	
		C	L376	V.a	70	63	44	249	*	904	1	159	
		D	C380	H	97	79	56	463	*	905	1	160	
		C	O379	*	(83)	(68)	(19)	(151)	*	906	1	161	
		D	C388	I	(76)	(41)	(28)	(113)	*	907	1	162	
		D	Z379	H	(60)	(57)	(43)	(191)	*	908	1	163	
118—	2	D	A379	*	165	99	46	826	*	909	1	1	
		C	T381	*	126	117	54	971	*	910	2	2	
		D	E377	H	111	93	56	569	*	911	3	3	
		C	L382	*	121	93	34	634	*	912	4	4	
		D	E377	*	121	96	50	886	*	913	5	5	
118—	4	C	T381	H	110	103	34	414	*	914	6	6	
		D	C378	*	129	73	31	458	*	915	7	7	
		C	R363	*	109	89	35	442	*	916	8	8	
		C	M372	*	105	71	29	271	*	917	9	9	
118—	6	C	U386	*	102	81	41	502	*	918	10	10	
		C	W387	V.a	95	74	48	293	*	919	11	11	
		C	U386	H	111	73	35	400	*	920	12	12	
		D	C378	*	122	53	36	313	*	921	13	13	
		D	A373	*	115	57	28	191	*	922	14	14	
		D	A380	*	104	48	42	330	*	923	15	15	
		C	Z377	*	96	62	29	264	*	924	16	16	
118—	1	C	G369	*	105	78	54	958	*	925	17	17	
		D	E378	I	113	86	49	729	*	926	18	18	
		D	D379	H	94	80	53	553	*	927	19	19	
			278	*	(111)	(85)	(29)	(345)	*	928	20	20	

固 版	出 土 地 方	器 種	量 大 計 測 值			石 質	規 格	規 格	整 理 番 号	分 類	備 考
			N m m	H m m	厚 m m						
	DA375	*	(90)	(28)	(64)	(411)	安		70	*	
	CR362	*	(105)	(73)	(34)	(348)	*		79	*	
	CY362	*	(106)	(80)	(40)	(398)	*		85	*	
	CZ378	*	(78)	(49)	(18)	(90)	*		89	*	
	DE375	*	(105)	(64)	(44)	(275)	*		91	*	
	CT367	I	(73)	(59)	(44)	(221)	*		127	*	
	CU361	H	(218)	(97)	(53)	(1200)	*		761	*	
	DB378	*	(161)	(103)	(57)	(194)	*		19	BB	
119—1	CO377	*	142	106	77	1061	*		20	*	
119—5	DB375	*	128	95	60	635	*		21	*	
	DA360	*	162	97	42	614	*		22	*	
118—8	CW367	*	126	91	35	369	*		23	*	
	DC363	*	113	82	37	435	*		24	*	
118—5		196	92	35	374	*		25	*		
118—10	DB372	H	119	88	34	330	48		26	*	
	CN376	*	115	91	49	560	92		27	*	
	CL376	H	119	80	35	325	*		28	BB	
	CO	I	116	73	52	466	*		29	*	
	DD361	V.a	103	64	67	537	*		30	*	
	DA	H	105	72	38	262	*		31	*	
	DE377	*	95	82	28	344	*		32	*	
	CJ379	*	97	91	29	495	*		33	*	
119—6	DC378	*	97	74	49	407	*		34	*	
	DA379	*	113	87	31	373	*		35	*	
119—7	DA374	*	92	74	44	366	*		36	*	
	DB377	*	97	75	55	362	*		37	*	
	DA378	*	94	73	34	297	*		38	*	
119—4	CY361	*	90	74	28	279	*		39	*	
	DC378	*	89	79	52	336	*		40	*	
	CL381	*	82	74	46	251	*		41	*	
	CY366	*	76	72	30	196	*		42	*	
118—8	CU362	V.a	78	66	24	156	*		43	*	
	CY381	H	76	58	29	150	*		44	*	
	DE375	*	64	47	36	144	*		45	*	
	CY365	I	59	51	45	163	*		46	*	
	CP368	H	100	80	56	1136	*		47	*	
	CT381	*	177	75	49	982	+		48	*	
119—2	CR366	*	147	58	39	541	安		49	*	
	DE377	*	139	56	44	492	*		50	*	
	CR369	*	118	63	42	311	*		51	*	
	CQ367	*	113	56	33	369	*		52	*	

固 版	出 土 地 方	器 種	量 大 計 測 值			石 質	規 格	規 格	整 理 番 号	分 類	備 考
			N m m	H m m	厚 m m						
	CX383	*	113	64	27	277	*		53	*	
	CP387	V.a	113	58	48	158	*		54	*	
	CQ382	H	119	54	47	236	*		55	*	
	DE375	*	116	45	29	165	*		56	*	
	CY381	*	111	63	31	166	*		57	*	
	CZ377	*	105	66	27	228	*		58	*	
	CN363	*	101	59	34	212	*		59	*	
	CW384	*	98	52	29	170	*		60	*	
	CZ377	*	97	62	35	272	*		61	*	
119—2	DB377	*	86	56	28	241	*		62	*	
118—12	CQ387	H	86	62	40	252	移		63	BB	
	DC376	*	149	117	63	1065	*		64	*	
	DC378	H	145	75	49	698	*		65	*	
	DC379	G	91	67	48	449	*		66	*	
	CU386	I	83	74	51	389	*		67	*	
118—11	CO384	H	57	56	29	105	*		68	*	
	CV381	*	(110)	(90)	(29)	(325)	*		69	*	
	DC378	*	(97)	(73)	(33)	(306)	*		70	*	
	DC379	*	(93)	(77)	(33)	(287)	*		71	*	
	CN376	*	(89)	(73)	(31)	(216)	*		72	*	
	DA376	*	(87)	(56)	(22)	(68)	*		73	*	
120—1	DA384	*	161	87	65	1053	*		74	CC	
	CY381	*	140	55	39	392	*		75	*	
	CU387	*	136	68	38	379	*		76	*	
	CW388	I	115	94	39	451	*		77	*	
120—2	DA377	G	115	83	33	478	*		78	*	
	CU384	*	92	78	48	452	*		79	*	
	CU387	*	102	58	62	449	*		80	*	
119—8	CX383	*	99	53	47	311	*		81	*	
	CY378	*	96	58	47	237	*		82	*	
	CZ378	*	117	82	58	353	*		83	*	
120—4	DD374	*	117	71	49	559	*		84	*	
120—3	DB372	V.a	132	61	46	444	*		85	*	
	CL384	H	93	46	563	*			86	*	
	K46		79	54	38	134	*		87	*	
	DA379	H	(27)	(75)	(59)	(481)	*		88	*	
	CW387	V.a	117	(99)	(39)	(507)	*		89	*	
	DC379	I	(94)	(90)	(66)	(544)	*		90	*	
	DC378	H	(138)	(65)	(29)	(338)	*		91	*	
	DF372	G	(93)	(57)	(33)	(257)	*		92	*	
	DC377	*	(82)	(57)	(32)	(152)	*		93	*	

出 土 地 点	番 号	最大計 測値				石器	横 形 面		壁厚 番号	分類	備 考
		長 辺	短 边	厚 さ	前 幅		長 辺	幅			
C T 367	*	(93)	(56)	26	(243)	*			93	*	
C L 381	*	(83)	(56)	32	(207)	*			95	*	
C X 380	*	(76)	(57)	31	(135)	*			96	*	
D C 383	*	(78)	(60)	42	(273)	*			97	*	
D B 378	II	(68)	(57)	29	(140)	安			98	III	
C Z 380	*	(83)	(46)	29	(167)	*			99	*	
D A 378	*	(66)	(56)	32	(129)	*			100	*	
D D 378	*	(68)	(44)	30	(98)	*			101	*	
D E 377	*	(105)	(54)	29	(166)	*			102	*	
C P 383	V a	(90)	(51)	32	(218)	*			103	*	
D B 380	II	(58)	(66)	27	(87)	*			104	*	
C V 384	*	(65)	(53)	25	(71)	*			107	*	
D A 381	*	(85)	(58)	35	(215)	*			108	*	
C X 386	*	(90)	(45)	28	(112)	*			109	*	
D D 380	*	(44)	(56)	26	(63)	*			110	*	
D C 380	*	(87)	(46)	25	(106)	*			111	*	
D E 374	*	(54)	(56)	18	(47)	安			112	*	
122- 5 D D 378	*	115	73	56	746	*	x y	2	82×32	87×33	I N
							タテナ	2	61×34	61×32	
							四	2	28×26	27×16	
								33	18×16		
									2	94×33	88×28
							タテナ	2	42×33	37×16	
							四	2	30×27	29×21	
								47	19		
121- 4 D C 378	II	108	55	46	423	*	スリ	2	91×32	69×25	3 *
							四	1	43×19		
122- 5 D D 378	II	109	68	56	601	安	スリ	2	70×26	69×25	5 *
							四	2	22×13	17×12	
								1	16×9		
122- 4 C N 380	II	106	66	53	567	*	スリ	2	69×31	58×28	6 *
							タテナ	2	26×13	16×14	
121- 3 D C 378	II	102	55	38	386	*	スリ	2	89×31	78×28	7 *
							四	1	25×15		
121- 5 D C 377	II	97	63	42	409	*	スリ	1	73×34	69×32	8 *
							四	1	20×17		
121- 1 D D 379	II	117	61	33	411	*	スリ	2	102×23	82×15	14 *
							四	1	16×12		
121- 2 C X 381	II	106	61	38	396	安	スリ	2	86×26	69×20	18 N
							四	1	18×16		

出 土 地 点	番 号	最大計 測値				石器	横 形 面		壁厚 番号	分類	備 考
		長 辺	短 辺	厚 さ	前 幅		長 辺	幅			
121- 6 C J 379	II	101	65	40	493	*	スリ	2	69×30	60×28	19 *
							四	1	22×9		
122- 2 D E 375	II	96	58	33	304	*	スリ	2	62×23	67×18	21 *
							四	1	20×13		
122- 3 C U 382	V a	146	70	32	734	*	スリ	2	93×42	113×42	43 *
							タテナ	1	103×33		50 *
							四	1	15×12		
							タテナ	1	22×16		
							四	1	114×37		61 *
							タテナ	1	23×14		
							四	1	26×26		
121- 7 D D 377	II	126	58	60	1035	*	スリ	1	81×31		63 *
							タテナ	2	53×35	52×31	
							四	1	44×12		
											275 *
											276 *
											277 *
											278 *
											279 *
											280 *
											281 *
											282 *
											283 *
											284 *
											285 *
											286 *
											287 *
											288 *
											289 *
											290 *
											291 *
											292 *
											293 *
											294 *
											295 *
											296 *
											297 *
											298 *
											299 *
											300 *
											301 *
											302 *
											303 *
											304 *
											305 *
											306 *
											307 *
											308 *
											309 *
											310 *
											311 *
											312 *
											313 *
											314 *
											315 I A IV-2 IX

固版	出上点	番	最大計画面積				右質	地盤		整理番号	分類	備考
			幅(m)	長(m)	幅(m)	長(m)		高(m)	長×幅(m)			
		*	93	76	23	279	*			715	*	
		*	87	69	23	196	*			716	*	
		*	91	79	24	257	*			717	*	
		*	79	71	19	175	安			718	*	
		*	91	87	33	286	*			719	*	
		*	76	68	29	171	*			720	*	
		*	81	65	29	154	*			721	*	
		*	96	72	25	291	*			722	*	
149—7	B H144	*	99	80	41	207	安	スリ	1 95×11	19	I A	VEX
149—8	*	*	113	71	44	431	*	スリ	1 61×7	20	*	
149—5	B T160	N上	81	57	52	299	*	スリ	1 60×13	23	*	
149—7	B F162	B	(76)	(60)	(57)	(340)	*			24	*	
149—	支押	(113)	(81)	(54)	(589)	*	スリ	1 160×27		*		
	B S156	下下	(86)	(68)	(45)	(281)	*	D 2:				
149—1	B J156	上上	133	67	67	748	*	スリ	1 106×17	D 4:	*	
								タキ	1 19×14			
149—2	B S156	下下	(79)	(62)	(43)	(251)	*	D 5:				
149—8	B S156	去探	172	92	61	1143	*	スリ	1 113×11			
B Q154	上上	(99)	(68)	(57)	(480)	*						
149—3	B S156	先段	(99)	(68)	(34)	(261)	解					
B D181	(83)	(58)	(49)	(381)	安							
149—6	B K156	B	82	64	25	181	*	スリ	1 51×6	I F:	*	
B O156	B	(79)	(71)	(34)	(216)	*						
149—9	B S157	IV上	(97)	42	43	250	チ			E C:		
176—1	2 H	?	115	62	54	625	安	スリ	2 66×36 39×13	302	I NEX	
176—3	*	床置	75	51	46	232	チ	タキ	1 40×19	307	E C:	
176—5	5 H	床置	141	87	48	914	安	スリ	1 88×24	308	1 Br	
176—4	4 H	床置	110	63	50	562	安	スリ	1 60×39	309	1 Br	
176—7	H	(128)	91	26	(458)	解				312	1 F	
176—6	6 H		85	62	34	289	安	四	1 40×19	314	1 B	
176—8	8 H	ビ1	96	79	30	357	*	スリ	1 52×13	315	1 Br	
176—9	10 H	?	109	62	41	455	*	スリ	2 65×19 89×21	316	N	
								タキ	2 43×25 39×27			
176—10	14 H		138	89	53	871	*	スリ	1 89×12	318	1 Br	
176—12	*	床置	116	75	79	852	*	スリ	1 80×41	322	1 E	
176—13	*	*	144	77	68	1092	*	スリ	1 64×14	320	1 F	
176—11	15 H		132	73	48	748	*	スリ	2 50×18 85×26	323	1 Br	
177—2	6 上		66	56	29	106	*	スリ	1 65×49	325	1 F	
177—5	17 上	?	157	86	34	658	*	スリ	2 74×8 44×36	326	1 Br	
177—12	床置	I	124	75	27	446	*	スリ	2 75×14 44×8	324	1 Br	

固版	出上点	番	最大計画面積				右質	地盤		整理番号	分類	備考
			幅(m)	長(m)	幅(m)	長(m)		高(m)	長×幅(m)			
177—6	床置	?	167	66	42	671	*	スリ	2 125×19 132×21	402	N	
177—5	床置	I	(73)	(56)	(31)	(228)	*				403	*
177—10	床置	?	161	88	32	464	*	スリ	1 21×21	405	V	
M原石置-台石												
固版	出上点	番	最大計画面積				右質	地盤		整理番号	分類	備考
			幅(m)	長(m)	幅(m)	長(m)		高(m)	長×幅(m)			
1 H	床置	(121)	(81)	(37)	(186)	安	I	265	*			
2 H		*	(197)	(145)	(118)	(3300)	*	*		324		ナ面平坦
3 H		*	209	195	37	6790	*	*		325		
4 H	フ	(191)	(207)	(156)	(7600)	*	*			326		
5 H	床置	(236)	(246)	(93)	(9400)	*	*			327		ナ面平坦。ナケ?
6 H	フ	(181)	(140)	(57)	(2100)	*	I B	212				
9 H	フ	(180)	(84)	(73)	(1129)	*	IV	219				
10 H		(96)	(72)	(19)	(191)	*	II	222				
13 H	床置	(120)	(160)	(27)	(453)	*	*			229		
18土	フ	361	114	87	6000	*	IV	252				
43土	*	(97)	(72)	(17)	(175)	*	II	244				
62土	*	(62)	(47)	(16)	(51)	*	I B	256				
70土	I	256	179	107	5500	*	I B	331				
82土b	フ	274	228	75	5500	*	I B	322				
		*	(122)	(163)	(85)	(2200)	*	BB	327			
82土	?	(94)	(58)	(50)	(756)	*	E C	262				
91±	*	(161)	(112)	(49)	(1200)	*	I C	264				
124—4	D E375	B	(69)	(59)	(21)	(68)	*	I	277			
123—30	D E378	V a	(181)	(124)	(42)	(572)	*	I A	2			
		*	(141)	(99)	(37)	(490)	*	5	ナ面に凸			
D A382	*	(140)	(79)	(36)	(367)	*	*	6				
D C378	*	(122)	(79)	(24)	(174)	*	*	7				
C U364	*	(93)	(64)	(33)	(249)	*	*	12				
D D378	*	(80)	(66)	(34)	(158)	*	*	14				
D B376	*	(55)	(57)	(20)	(63)	*	*	23				
66	A R		486	291	49	13500	*	安	I B	362		
124—14	D E378	B	(193)	(119)	(51)	(1146)	*	*	1			
123—12	C N378	*	(126)	(67)	(23)	(137)	*	*	8	ナ面		
D E379	*	(123)	(68)	(45)	(369)	*	*	9	ナ面面有溝			

图版	高	上口宽	下口宽	最大计深			石质	分层	整理 番号	图 考
				尺 (m)	码 (m)	厚 (m)				
123-11	C R362	H	(128)	(88)	(25)	(231)	砾	I B	10	
123-8	D E362	*	(39)	(54)	(22)	(180)	*	*	13	右溝
123-9	D E366	I	(75)	(59)	(34)	(171)	砾	*	15	右溝
	C W367	V	(81)	(53)	(25)	(81)	*	*	17	
	C Y367	H	(157)	(88)	(57)	(810)	炭	*	603	
	D D378	*	(173)	(146)	(51)	(1960)	*	*	805	
	C W384	*	(110)	(163)	(25)	(290)	*	*	809	
	C S381	*	(179)	(128)	(57)	(1830)	*	*	815	
124-3	C Y381	*	(147)	(146)	(40)	(692)	砾	I C	4	左溝
	C D382	IV	(81)	(80)	(28)	(248)	*	*	11	
	C W382	H	(162)	(96)	(36)	(660)	炭	*	807	
	D D376	*	(142)	(123)	(36)	(720)	*	I A	810	
	D D381	*	(171)	(167)	(34)	(1940)	*	*	825	
	D A377	*	(181)	(118)	(50)	(1550)	*	*	829	
	C Y382	IV	320	246	95	5600	*	*	840	
	D A382	*	(271)	(241)	(126)	(11200)	*	*	841	
	D D378	*	(427)	(264)	(87)	(10200)	*	*	842	
	D D378	*	(265)	(169)	(82)	(5200)	*	*	844	
	C W382	H	(130)	(116)	(102)	(2050)	*	*	855	
	D A379	IV	(142)	(163)	(104)	(2590)	*	*	856	
	D C380	I	(228)	(117)	(215)	(7900)	*	*	858	
125-1	C Q380	H	(193)	(169)	(68)	(2670)	*	I B	21	画面因多數
	D D377	*	(224)	(164)	(52)	(2340)	*	*	20	碧
124-5	D A383	*	(130)	(133)	(44)	(811)	*	*	22	左溝
	D C378	*	(158)	(105)	(37)	(810)	*	*	862	
	D C378	*	(229)	(111)	(65)	(1700)	*	*	817	
	C R386	*	(194)	(117)	(45)	(980)	*	*	820	
	D A377	*	(238)	(141)	(50)	(1110)	*	*	822	
	D C377	H	(136)	(115)	(73)	(1640)	*	*	824	
	D D378	*	(282)	(116)	(32)	(1780)	*	*	827	
	D D377	*	(167)	(100)	(39)	(660)	*	*	828	
	D D377	IV	247	234	76	7600	*	*	845	画面平坦片面S2
	D D380	*	(194)	(127)	(91)	(2000)	*	*	859	
125-2	D D373	H	(175)	(152)	(77)	(1460)	*	I		
	D C377	*	(107)	(75)	(40)	(245)	砾	IV	16	
	D E377	H	(46)	(58)	(47)	(162)	砾	IV	18	
	C O373	*	(57)	(32)	(14)	(24)	*	*	19	
	D C374	*	(94)	(76)	(38)	(250)	炭	*	861	
	D A376	H	(134)	(115)	(55)	(1380)	*	*	864	
	D C380	I	(147)	(122)	(56)	(1450)	*	*	866	
	D A382	*	(143)	(99)	(50)	(930)	*	*	868	

图版	出 土 点	地	最大计深			石质	分层	整理 番号	图 考
			尺 (m)	码 (m)	厚 (m)				
	C W382	*	(132)	(117)	(50)	(1120)	*	*	812
	C W382	*	(102)	(100)	(38)	(500)	*	*	813
	D C377	H	(139)	(98)	(78)	(1480)	*	*	814
	C U381	*	(131)	(130)	(57)	(1460)	*	*	815
	D D377	*	(119)	(58)	(118)	(1100)	*	*	816
	C T383	H	(109)	(106)	(48)	(750)	*	*	819
	D C378	H	(132)	(119)	(46)	(1290)	*	*	821
	C Y382	*	(190)	(188)	(70)	(4000)	*	*	823
	C Y382	*	(149)	(91)	(58)	(1860)	*	*	826
124-3	D A372	*	(249)	(185)	(92)	(4900)	*	*	843
	D D377	*	(156)	(124)	(105)	(3000)	*	*	860
	C P378	H	324	121	96	4800	*	*	861
124-2	B A365	I	(154)	(101)	(43)	(795)	*	I B	3
	B C367	*	(146)	(90)	(62)	(730)	*	II	34
	B Y377	H	(132)	(81)	(42)	(632)	*	II B	* 6
	C Y374	*	(206)	(166)	(46)	(1390)	*	*	7
	A Q377	IV	(242)	(195)	(53)	3140	*	*	12
	C E379	H	(52)	(48)	(18)	(72)	*	II C	* 8
	C E379	*	(50)	(29)	(15)	(33)	*	*	9
	B Y382	*	(33)	(29)	(30)	(46)	砾	*	10
	B A424	*	(167)	(118)	(36)	(820)	炭	IV	811
	I H	*	(265)	(224)	(20)	(8500)	*	I A	847
175-2	2 H	高直	(247)	(158)	(44)	(4400)	*	II B	303
	2 H	I	(79)	(56)	(76)	(710)	*	*	305
	13 H	*	(323)	(198)	(74)	(2500)	*	*	317
	2 H	I	(45)	(34)	(22)	(103)	*	II C	306
	14 H	H	(64)	(36)	(19)	(95)	*	*	321
	1 H	高Y	(122)	(58)	(58)	(1079)	*	IV	301
	1 H	高B	(265)	(198)	(10)	(79)	炭	IV	846
	2 H	高直	(153)	(93)	(45)	(1096)	*	*	304 ヤケ
	3 H	*	(355)	(154)	(53)	(8600)	*	*	845 背石、ヤケ
	5 H	*	(272)	(170)	(93)	(5600)	*	*	310
	7 H	F	(89)	(83)	(22)	(92)	*	*	311
177-1	6 上	麻直	(266)	(101)	(53)	(1900)	*	*	324
	6 中	*	(296)	(193)	(57)	(4200)	石灰	I B	410
177-11	6 北	*	(146)	(66)	(37)	(677)	*	IV	403

図版	出土 地 点	層	最大計測値			石質 番号	整理 番号	備 考
			長(m)	幅(m)	厚(m)			
6互	DD386	CY387						
4+	DC378	DE379						
3+	DC382	DD378	DE375					
2+	CM372	DA379	DB383	DC374	DC377	DD377	DE373	DE377 C K370
1+	CN376	CO387	CP387	CQ372	CQ382	CR382	CR386	CS387 CU387
	CW382	CY382	CZ380	CZ384	DA389	DA381	DB378	DC386 CG371 CK371

N類 硬石

-1	DB373	IV	147	58	22	114	■	I	1
3	CW382	+	88	51	20	27	+	II	2
2	CO375	+	33	45	15	9	+	II	3
7	26上	?	73	42	20	15	+	III	4
4	CV387	IV	70	73	32	32	+	III	5
12	6上	?	81	53	21	16	+	III	6
5	7上	?	53	83	12	13	+	III	7
9	26上	?	180	182	36	49	+	III	8
6	DC379	IV	89	80	40	55	+	III	9
11	DA378	IV	47	46	12	7	+	III	10
8	37上	?	47	35	16	6	+	III	11
10	DC376	IV	95	84	50	54	+	IV	12
11H上	?	54	85	29	22	+	V	13	
CR382	IV	126	65	41	55	+	III	14	
DD383	IV	82	37	20	13	+	III	15	
10H	?	66	55	28	18	+	V	16	
CX381	IV	43	71	24	12	+	III	17	
DC380	IV	69	64	19	20	+	V	18	

O類 内壁有石製品

図版	出土 地 点	層	最大計測値			石質 番号	整理 番号	備 考
			長×幅×厚(m)	幅(m)	厚(m)			
14-	直探		47×44	13	48	安	18	

P類 有孔石製品

図版	出土 地 点	層	最大計測値			石質 番号	整理 番号	備 考
			長(m)	幅(m)	厚(m)			
14-	67土	後七	22×21×22			12	玉	3

R類 石棒

大探		(147)	(118)	(97)	(100)	安	R	849
CW382	SV	(171)	136	84	(220)	+	+	854
DB378	II	(163)	(148)	(125)	(304)	+	+	857

図版	出土 地 点	層	最大計測値			石質 番号	整理 番号	備 考
			長(m)	幅(m)	厚(m)			
14-	DA379	IV	58	21~26	10	22	鶴	1
U類 その他の石製品								
14-	BA427	I	104	71	25	310	火	1

石器一覧表の()内は既出品

円盤土工製品 () は複数計測値

規格番号	図版	グリッド	部位	大きさ		重量kg	備考
				長辺×短辺	厚さ		
1	12B102-1	DC383	IV	33×30	5	7.5	
2	-2	DD380	x	57×50	7	26	
3	-3	DA384	x	39×24	7	12.5	
4	-4	C S387	x	41×34	6	11	
5	-5	DC383	x	41×36	5	9	
6	-6	表抜		31×24	5.5	5.5	
7	-7	DC378	IV	25×25	7-9	7.5	
8	-8	DB377	x	32×27	5	7	
9	-9	DC378	x	37×34	6	10.5	
10	-10	DC378	x	52×50	6	23	
11	-11	DC378	x	35×33	8	12.5	
12	-12	DB375	x	43×43	8	17.5	
13	-13	DB377	x	33×32	6	7.5	
14	-14	DC375	x	32×31	7	9	
15	-15	DC378	x	39×36	6.5	11	
16	-16	C Z379	x	33×31	7	9	
17	-17	DC378	x	36×35	8	15	
18	-18	DD378	x	41×37	8	17.5	
19	-19	C O376	x	38×37	6	14	
20	-20	C Z387	x	36×34	6	10	
21	-21	DD380	x	48×45	6	20	
22	-22	DD380	x	45×37	7	17	
23	-23	DC383	x	37×37	9	16	
24	-24	DC383	x	46×34	9	19	
25	-25	表抜		30×(28)	7	8	破損品
26	-26	DA375	Va	32×(22)	7	7.5	x
27	-27	DA375	IV	39×37	7	13	
28	-28	実抜		38×(26)	7.5	10.5	破損品
29	-29	C R383	IV	39×37	6	10	
30	-30	DC378	x	43×36	9	20	
31	-31	DF378	x	36×34	7	13	
32	-32	12F-1	フク土	34×27	7	9	
33	-33	x		43×(24)	8	10	破損品
34	-34	25土	x	34×32	8	11	
35	-35	40上	x	42×42	7	18	

規格番号	図版	グリッド	部位	大きさ		重量kg	備考
				横幅×高幅	厚さ		
62	12F-36	DB381	IV	27×27	6	5.5	
63	-37	98土	フク土	36×33	6	9	
64	-38	114土	x	30×28	7	7	
65	-39	52土	x	38×38	7	13	
66	-40	C N382	IV	49×48	7	24	
69	-41	DB378	x	32×31	7	7	
70	-42	DC379	x	54×49	6	19	
71	-43	C Z384	x	46×42	6.5	17	
77	-44	DA378	x	37×35	6	9.5	
80	-45	CR383	x	47×45	7	17	
29	-46	CF386	x	41×38	5	13	
30	-47	DE380	x	37×32	6	11	
32	-48	CS387	x	36×34	6	10	
33	-49	DC378	IV	38×37	7	10	
31	12F-50	CU307	Va	41×37	7	13	
78	-51	CL384	IV	39×34	5.5	9	
34	-52	DD379	x	33×28	5	7	
54	-53	C Q382	x	52×45	7	25	
55	-54	CM375	x	36×(22)	7	7	■ ■ ■
56	-55	CO387	x	43×(26)	8	11	*
59	-56	12上	フク土	44×40	13	18.5	
35	-57	CO377	IV	42×41	8	19	
36	-58	C X383	x	42×39	4.5	10	
37	-59	DE379	x	41×31	5	10	
38	-60	CR385	x	34×34	5.5	10	
43	-61	DB378	x	33×32	7.5	11	
39	-62	DB379	x	38×33	6.5	11	
40	-63	C Z379	x	41×(27)	7.5	11	■ ■ ■
41	-64	表抜		26×21	5	4.5	
42	-65	DE378	IV	37×32	6	10.5	
44	-66	DD377	x	45×42	7	19	
45	-67	DA377	x	35×35	9	14	
46	-68	3H	フク土	32×31	12.5	16	
47	-69	DD377	IV	41×37	7	14	
49	-70	CU306	x	38×36	10	18.5	
50	-71	DB378	x	34×33	7	11	
52	-72	DC378	x	34×34	11	17.5	

整理番号	図版	グリッド	層位	大きさ mm		重量g	備考
				長径×短径	厚さ		
53	1294-73	DF379	IV	32×32	8	10	
66	-74	30±	フク土	31×30	8	9	
73	-75	DC377	IV	46×38	7.5	16.5	
74	-76	C L381	#	44×(35)	6	14	破損品
75	-77	C P381	#	36×35	7	11	
76	-78	C V387	Va	34×34	7	11	
79	-79	DC384	IV	40×39	5	11.5	
81	-80	表採		21×18	7.5	4	
82	-81	CO377	IV	28×27	5.5	5	
83	-82	C X380	Va	41×38	11	15.5	
84	-83	C K369	IV	35×34	8	11	
85	-84	CR384	#	36×34	6	8	
86	-85	11H+	フク上	37×37	6	12	

三角形土製品

整理番号	図版	グリッド	層位	大きさ mm		重量g	備考
				3辺の長さ	厚さ		
103	1298-86	CO380	IV	37×35×36	6	5	
100	-87	CR383	#	46×44×47	7	12	
101	-88	C P381	#	41×47×46	8	10	
102	-89	11H	フク土	43×43×37	7	8	

四角形土製品

整理番号	図版	グリッド	層位	大きさ mm		重量g	備考
				長径×短径	高さ		
6	1304-1	DC377	IV	26×25	54	32	
8	-2	DC378	IV	44×32	68	51	
9	-3	DB378	IV	46×29	64	70	
10	-4	DC378	IV	(35)×(13)	63	46	破損品
5	-5	DC383	IV	(56)×(36)	#		
13	-6	CM374	IV	(33)×(30)	63	20	#
14	-7	DD377	IV			5	#
18	-8	DD377	IV	(21)×(17)		10	#
15	-9	表採				23	#
17	-10	DD378	IV	30×27		34	#
7	-11	DC378	IV	(30)×(21)	48	24	#
1	-12	CY377	IV	32×30		23	#

整理番号	図版	グリッド	層位	大きさ mm		重量g	備考
				長径×短径	高さ		
12	1304-13	DC378	IV			14	破損品
4	-14	DD379	IV			5	#
11	-15	DA375	IV			10	#
16	-16	DC378	IV	(53)		11	#
3	-17	CY382	IV	(37)		10	#
2	-18	DC378	IV			10	#

土器片類

図版	出土グリッド	層位	大きさ mm		重量g	部位	備考
			長径×短径	厚さ			
1314-10	C N385	IV	78×45	9	33	口縁部	羽状溝文
-11	C N384	I	71×51	10	41		#
-12	C N385	IV	67×54	9	30		粘土1種 羽状溝文
-13	C N385	#	57×47	10	30		#
-14	C N385	#	72×52	10	33	側部	斜溝文
-15	C N385	#	75×52	9	34		#
-16	C N385	#	(53)×56	10	25		#
-17	C N385	#	(34)×47	9	10		#
-18	C N385	#	(36)×47	9	12		羽状溝文
-19	C N385	#	(25)×53	8	8		斜溝文

写 真 図 版



IV区遠景(西→東)



IV-1区近景



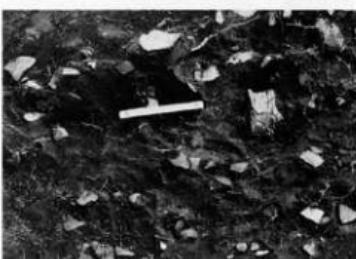
IV-2区近景(北→南)



IV-1区作業風景



IV-1区遺物出土状況



IV-1区遺物出土状況



IV-1区遺物出土状況(第179図参照)

P L. 1 M区



IV-1区遺物出土状況



1号住居跡



1号住居跡炉



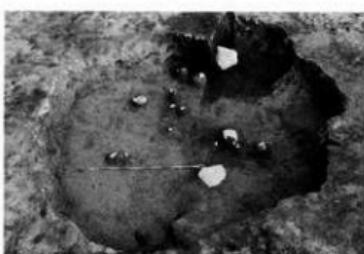
2号住居跡



4号住居跡



11号住居跡



5号住居跡



9号住居跡遺物出土状況



13号住居跡

P L. 2 M-1区 掘出遺構



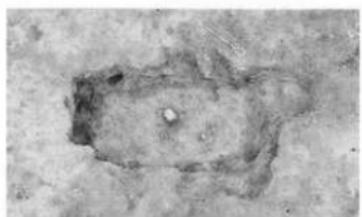
10号住居跡(左上)
同 炉(右上)
同 出器出土状況(右下)



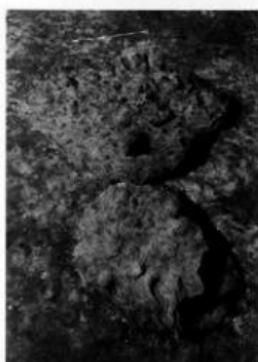
IV-1区検出遺構群(東→西)



IV-1区検出遺構群(西→東)



4号土壤(上)、遺物出土状況(下)

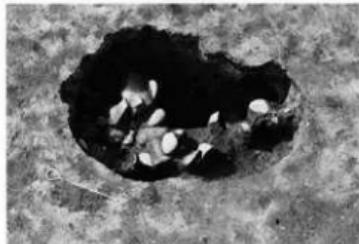


7号(上)・8号(下)土壤

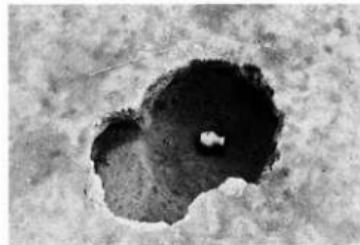
P.L. 3 IV-1区 検出遺構



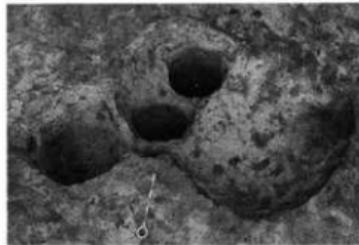
18(a—右、b—左)号土壤



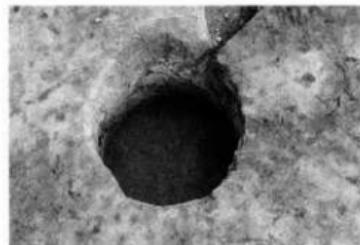
26号土壤



26号土壤



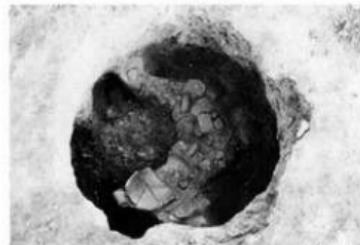
53号土壤



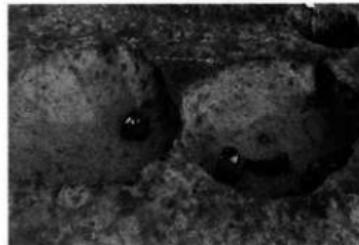
67号土壤



68号土壤(セクション)

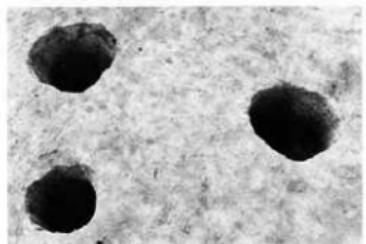


73号土壤



78(右)・86(左)号土壤

P.L. 4 M-1区 検出土壤



88(左上)・90(左下)・93(右)号土壤



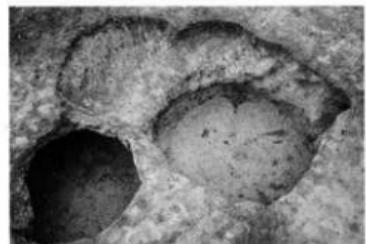
97号土壤



101号土壤(セクション)



112号土壤(セクション)



113(左)・115(aー右下、bー右上)号土壤



127号土壤(セクション)



IV-2区土壤検出状況

PL. 5 IV-1・IV-2区 検出土壤



IV-2区検出土壤



配石群近景



第1号配石



第5号配石



第1号配石断面



第7号配石



第8号配石

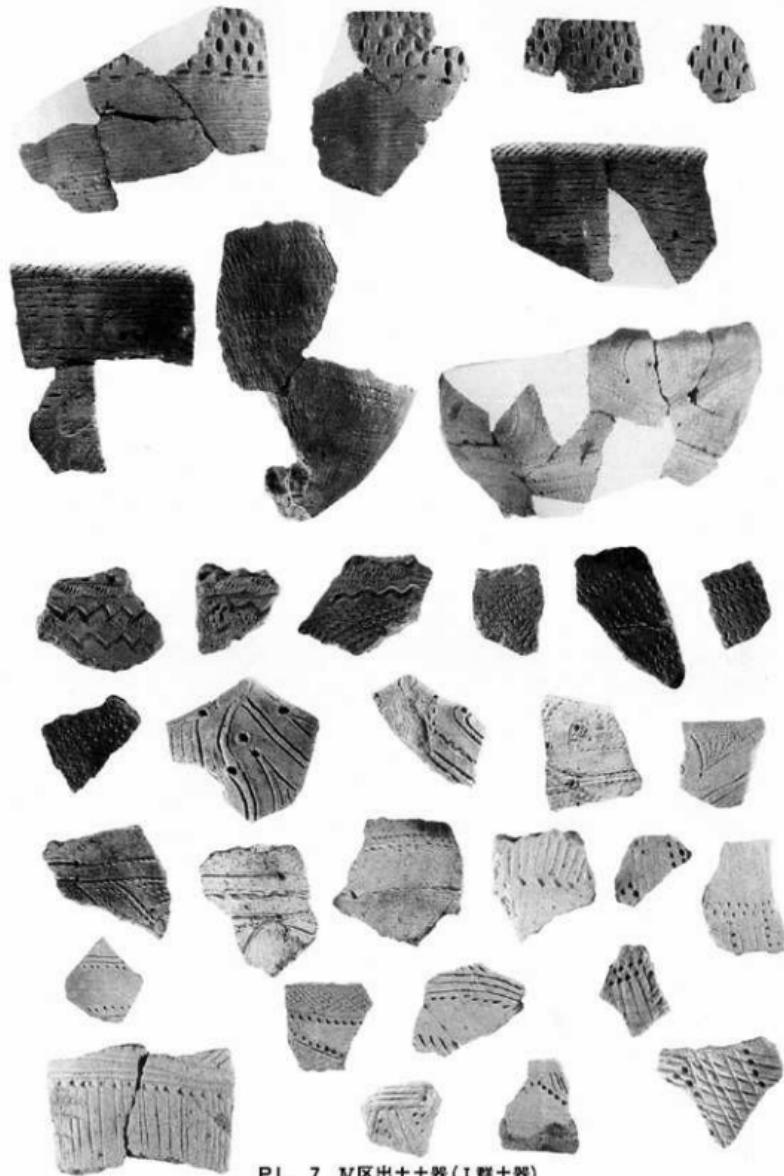


第9号配石

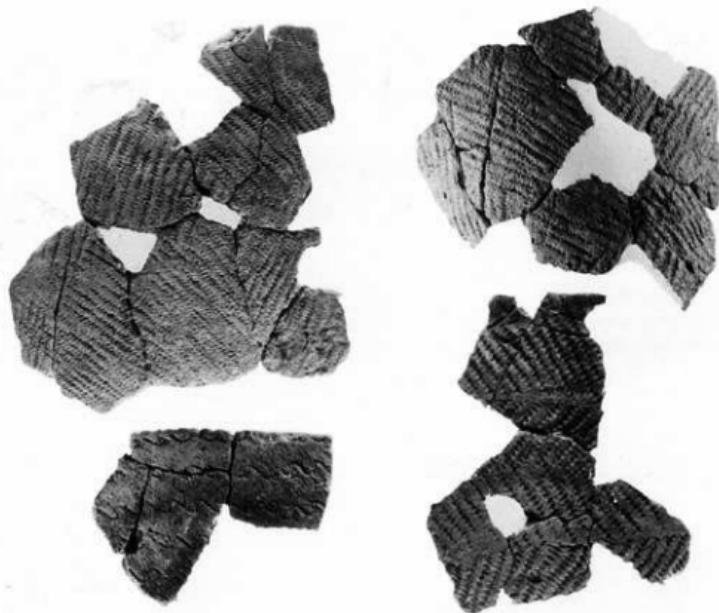


第8号配石断面(左端は石Ⅲ)

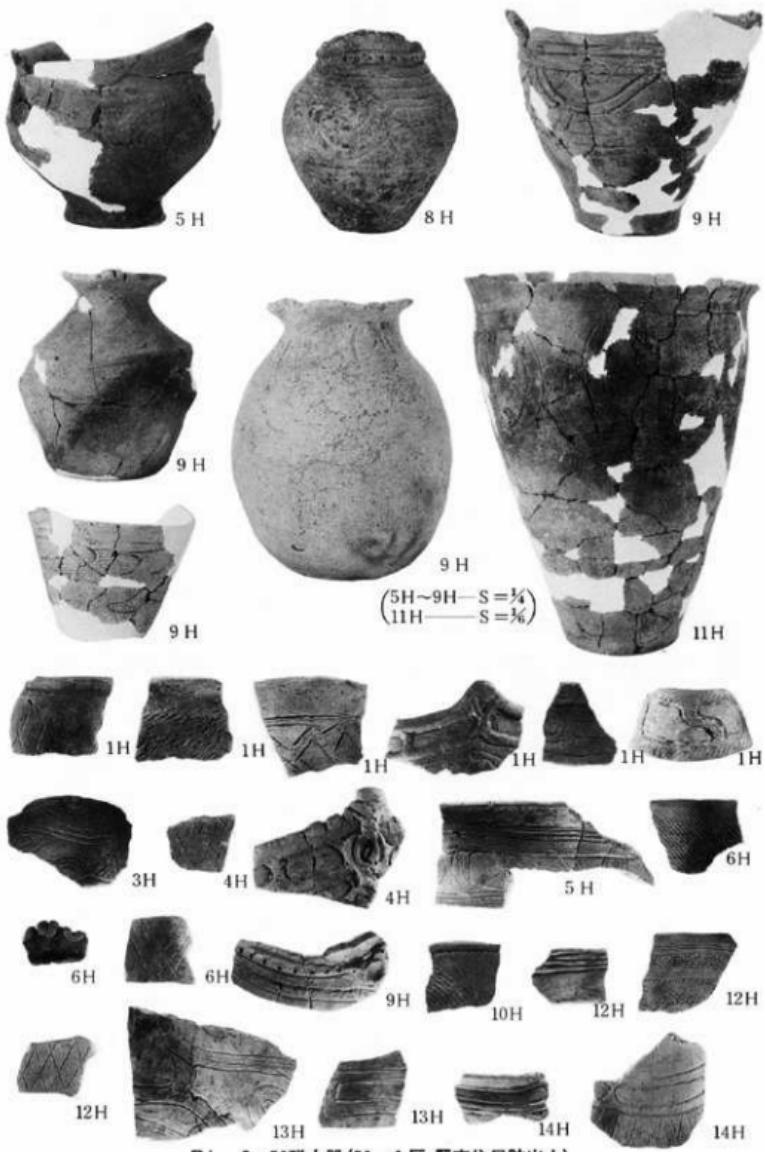
PL. 6 M-2区 换出遺構(配石)



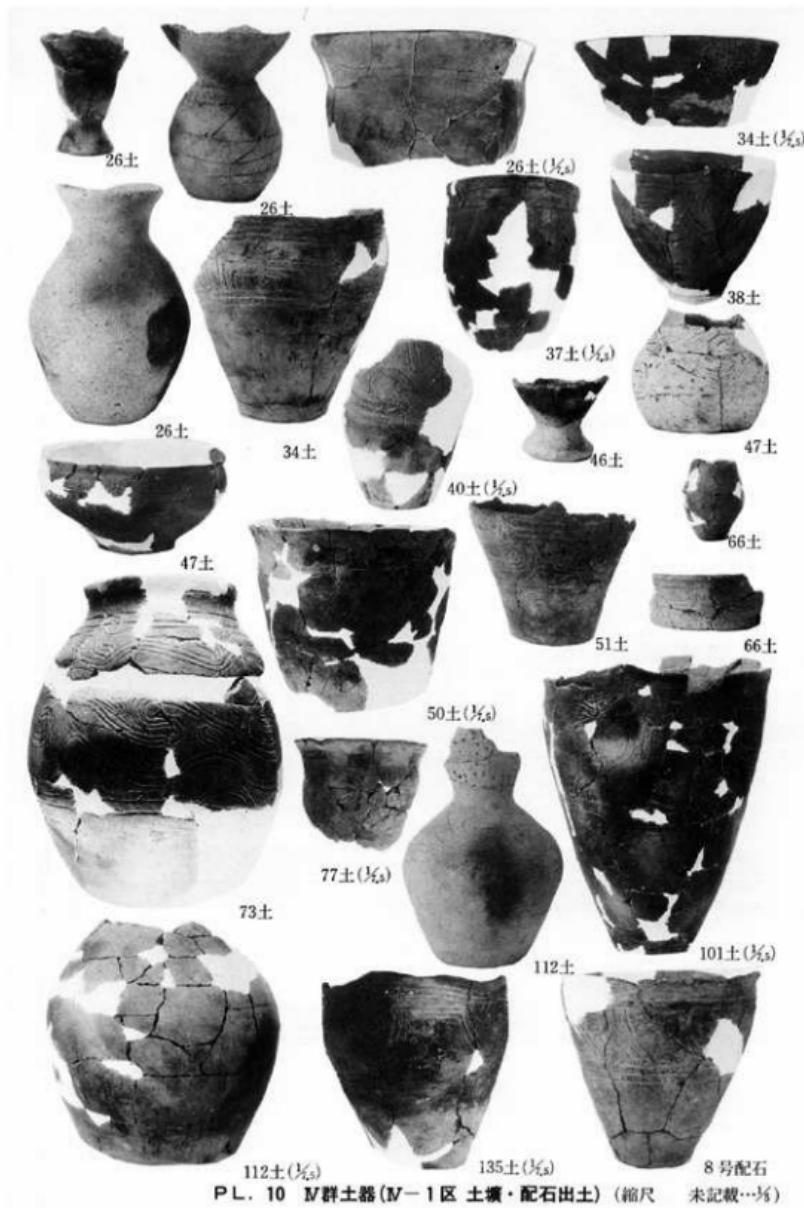
P L. 7 M区出土土器(I群土器)



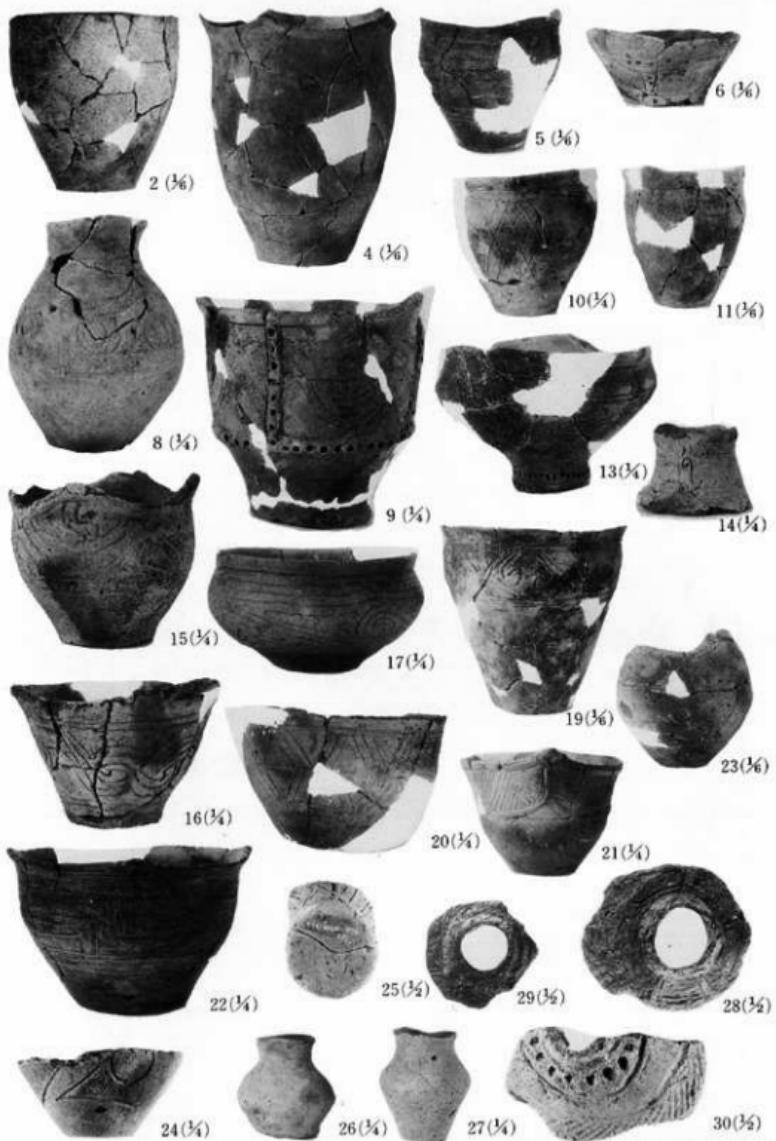
P L. 8 IV区出土土器(I群・II群土器)



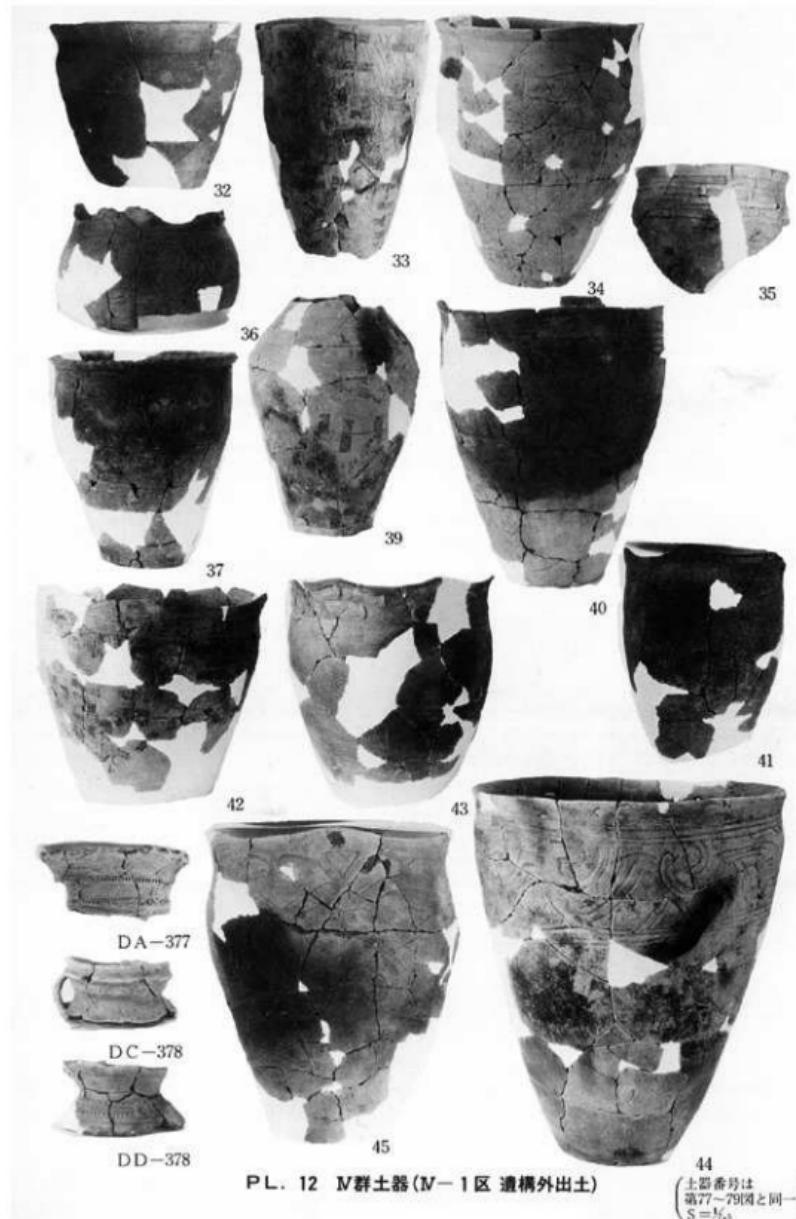
P L. 9 M群土器 (M-1区 穹穴住居跡出土)



P.L. 10 M群土器 (M-1区 土壌・配石出土) (縮尺 未記載…3分)



P.L. 11 M群土器(M-1区 遺構外出土) (土器番号は第76図と同一) ()は縮尺



P L. 12 IV群土器 (IV-1区 遺構外出土)

(土器番号は
第77-79図と同一)
S = M₃



外面



内面

P L. 13 内外面連続山形文土器(9H出土)



(V群)



1号住



1号住



7号土壤



7号土壤



7号土壤

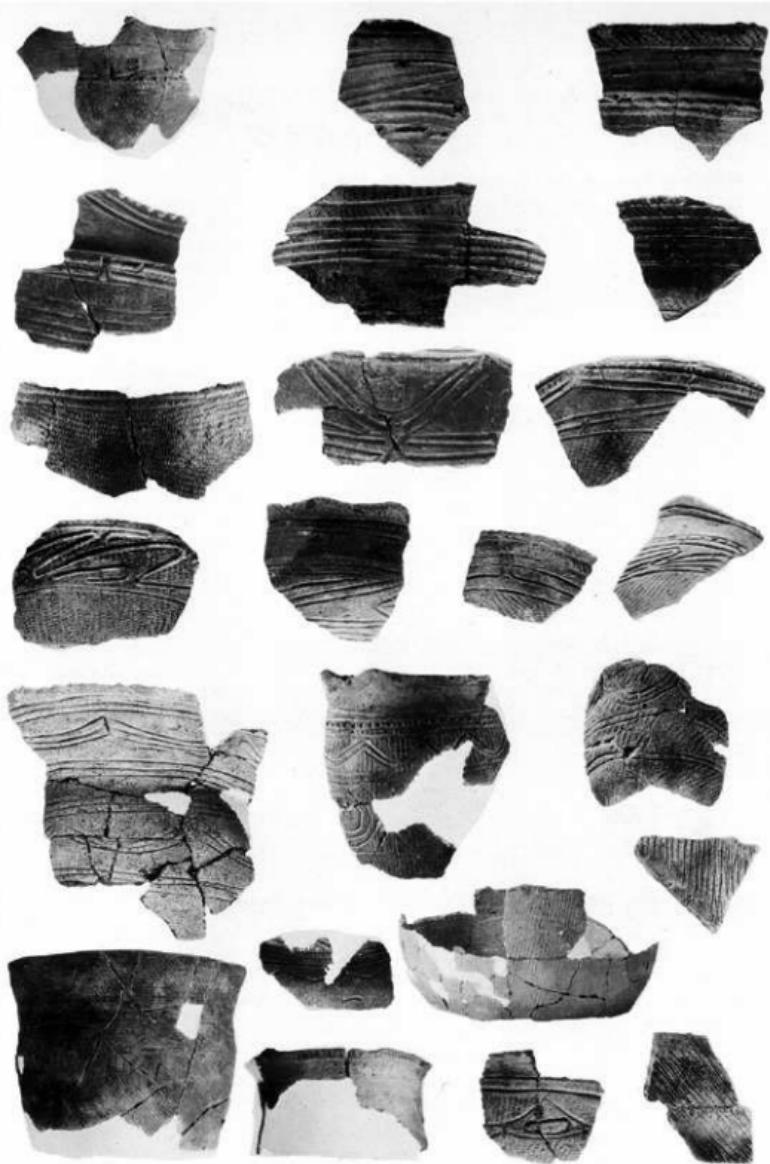


78号土壤



10号住

P.L. 14 第V・VI群土器(M-1区)



P.L. 15 第VI群土器 (N-1区)



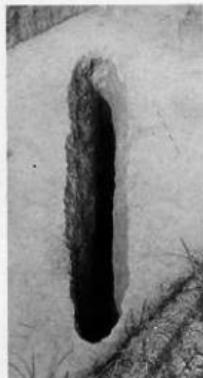
V区 遠景



V-2区 遗物出土状況



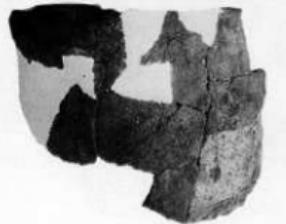
3号溝状ビット



6号溝状ビット



7・8号溝状ビット



P.L. 16 V区遠景・遺物出土状況・溝状ビット・遺構外出土土器



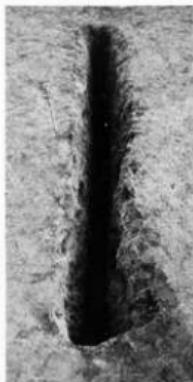
VI区 遠景



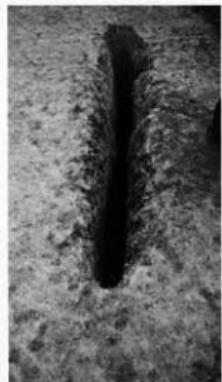
基本層序



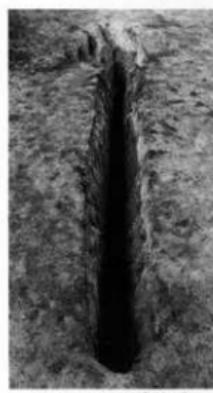
1号溝状ピット



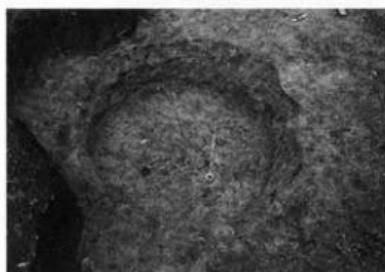
2号溝状ピット



3号溝状ピット

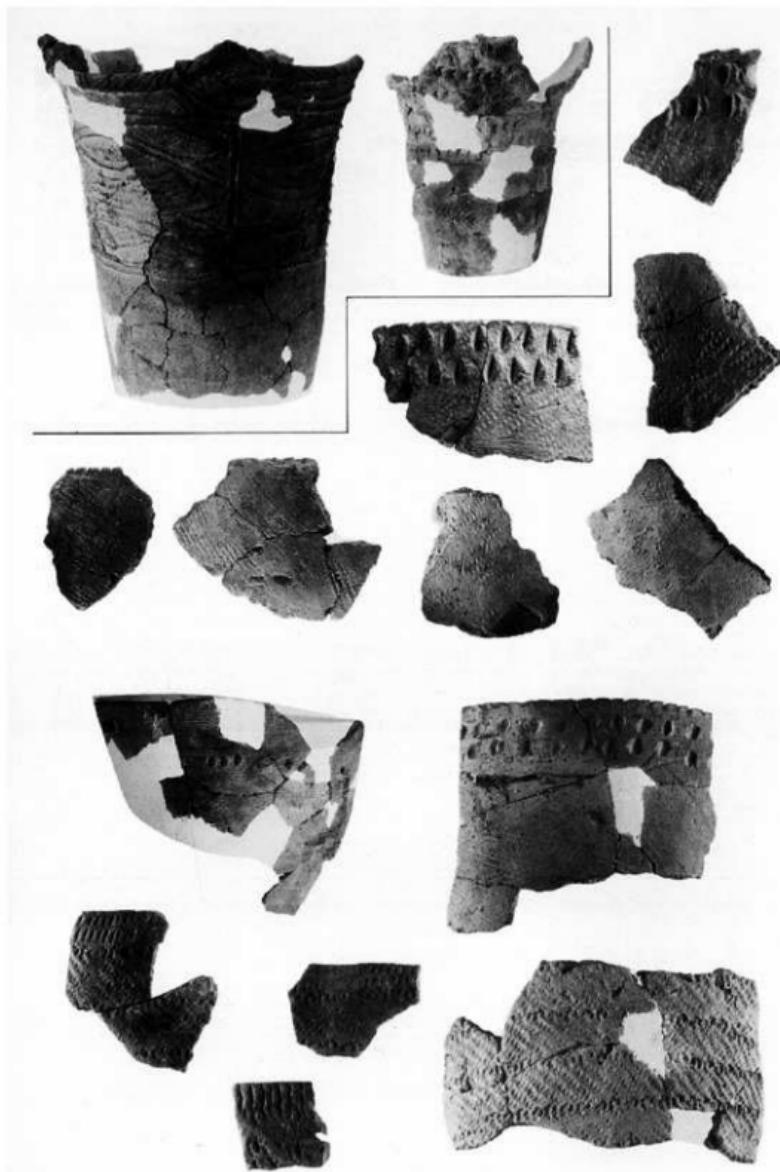


4号溝状ピット



円形ピット

P.L. 17 VI区遠景・基本層序・溝状ピット・円形ピット



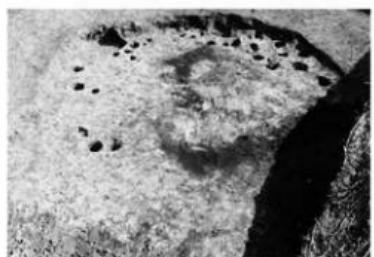
P.L. 18 VI区出土土器



VII区 遠景(南→北)



VII区 作業風景



1号住居跡



3号住居跡



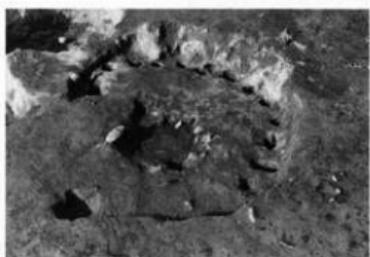
4号住居跡



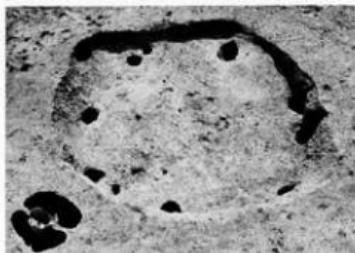
10号住居跡



5号(下)・12号(上)住居跡



12号住居跡



13号住居跡



14号住居跡



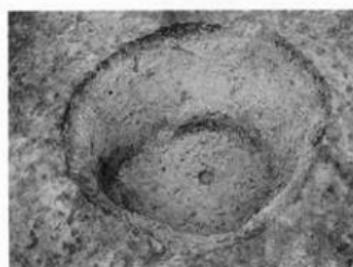
土器埋設遺構



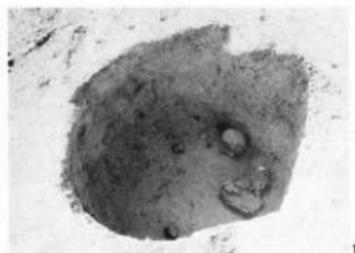
6号土壙



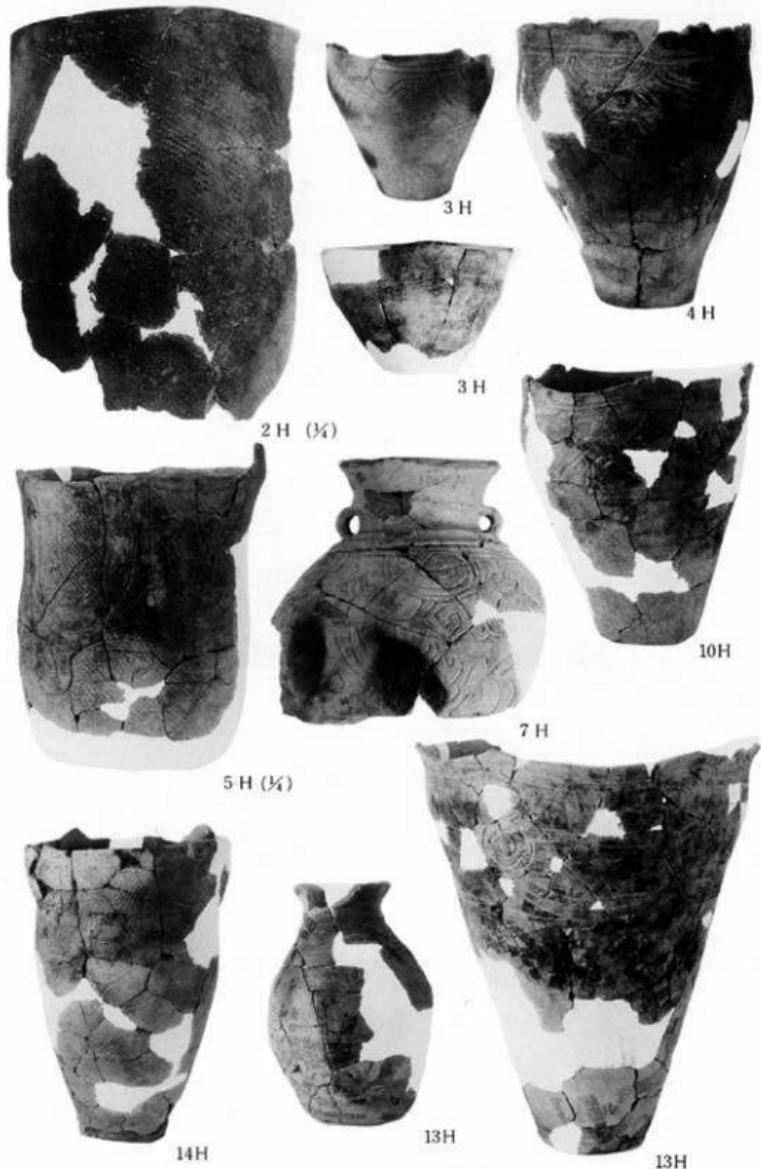
7号土壙



14号土壙



13号土壙(左右)
P.L. 20 VII区 検出遺構



PL. 21 VII区出土土器(1) (縮尺 未記載…%)



15H



7 土



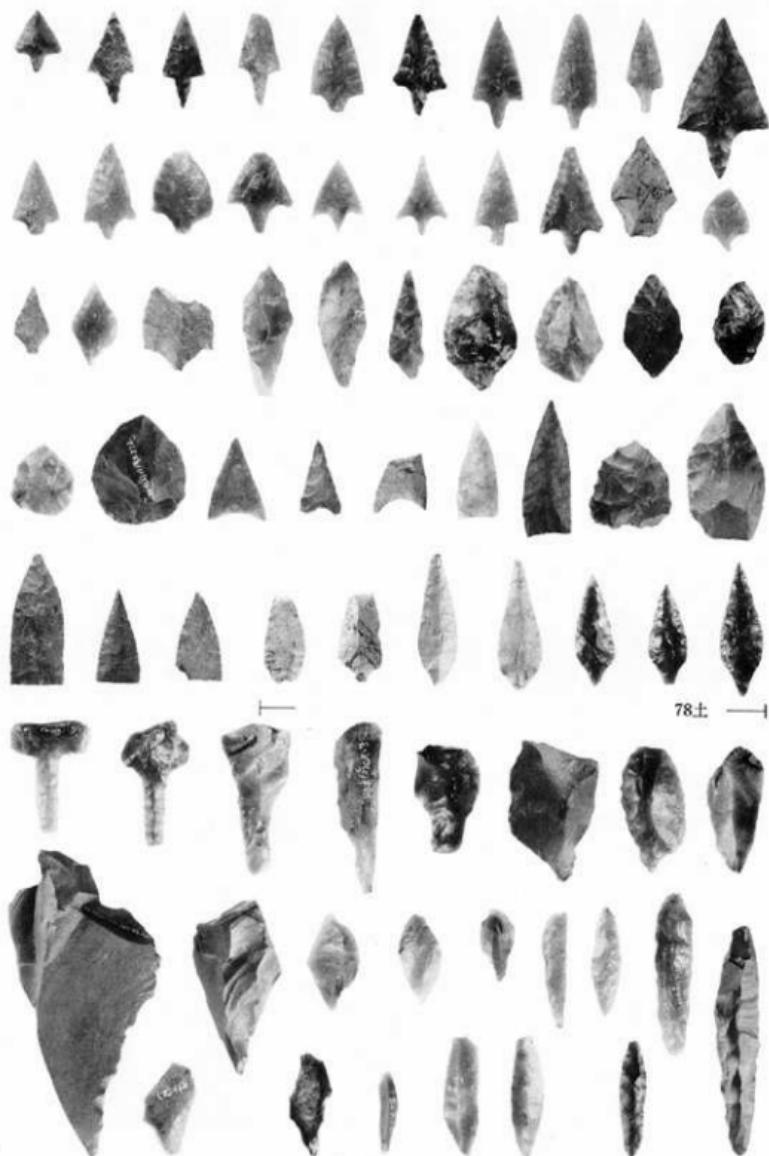
9 土



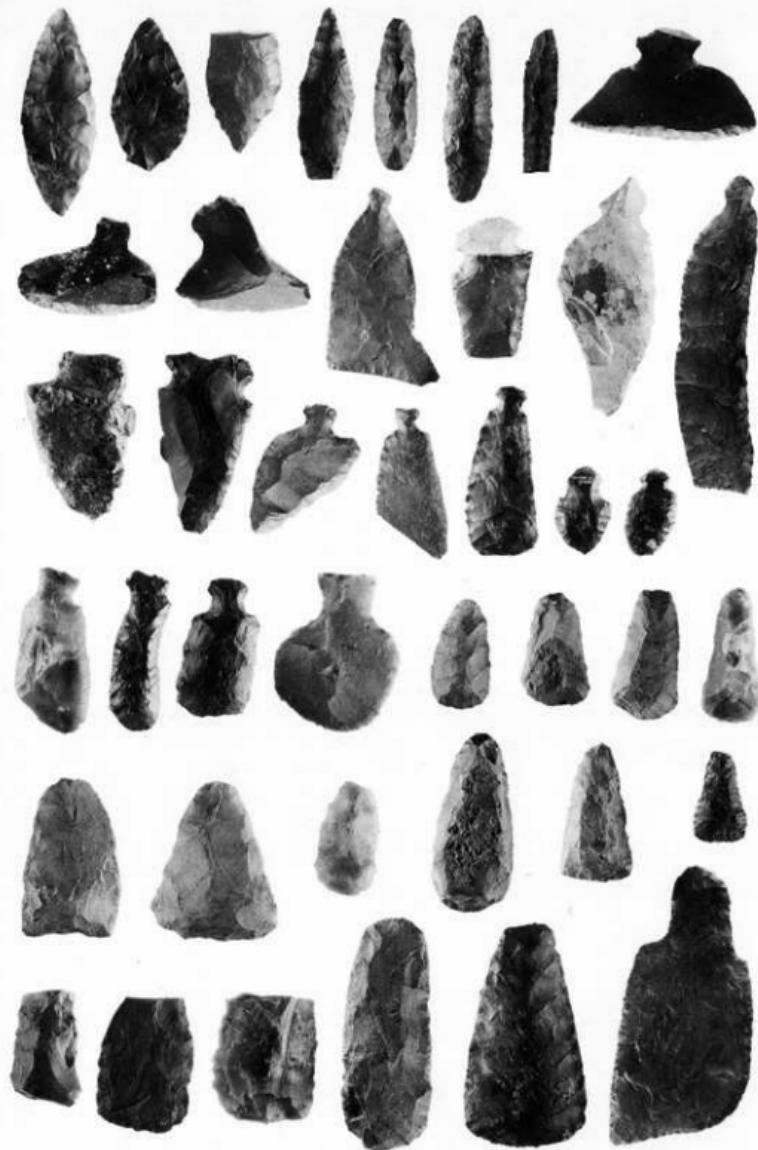
13 土



P.L. 22 VII区出土土器(2) (S=36)



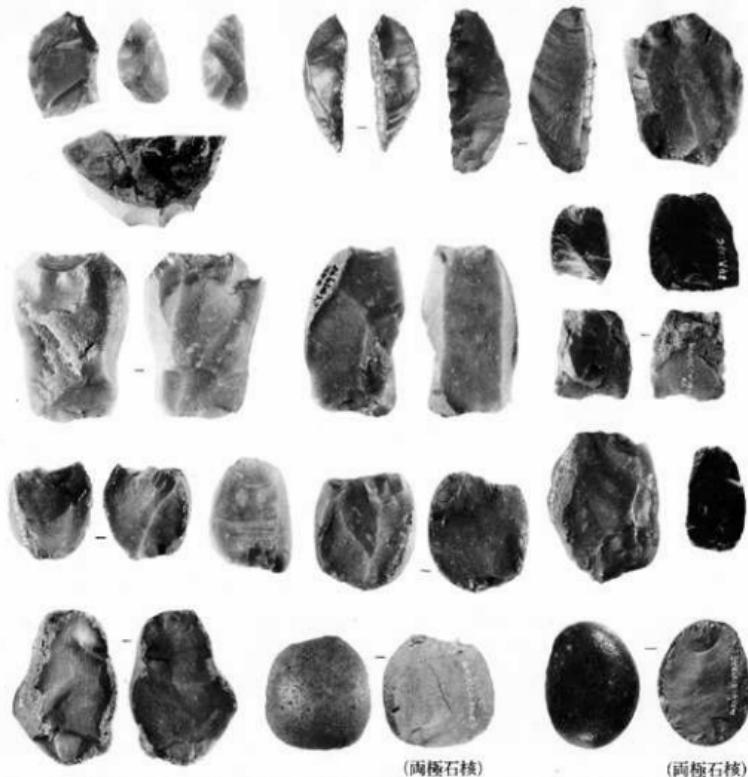
P.L. 23 第I群石器(A類・B類)



P.L. 24 第I群石器(C類・D類・E-I類・G類)

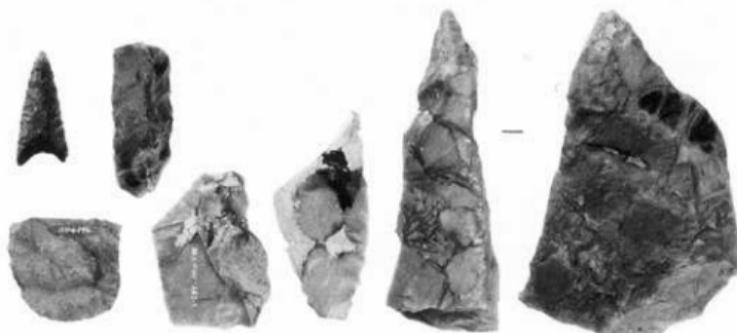


P L. 25 第 I 群石器 (E - II 類・F 類)

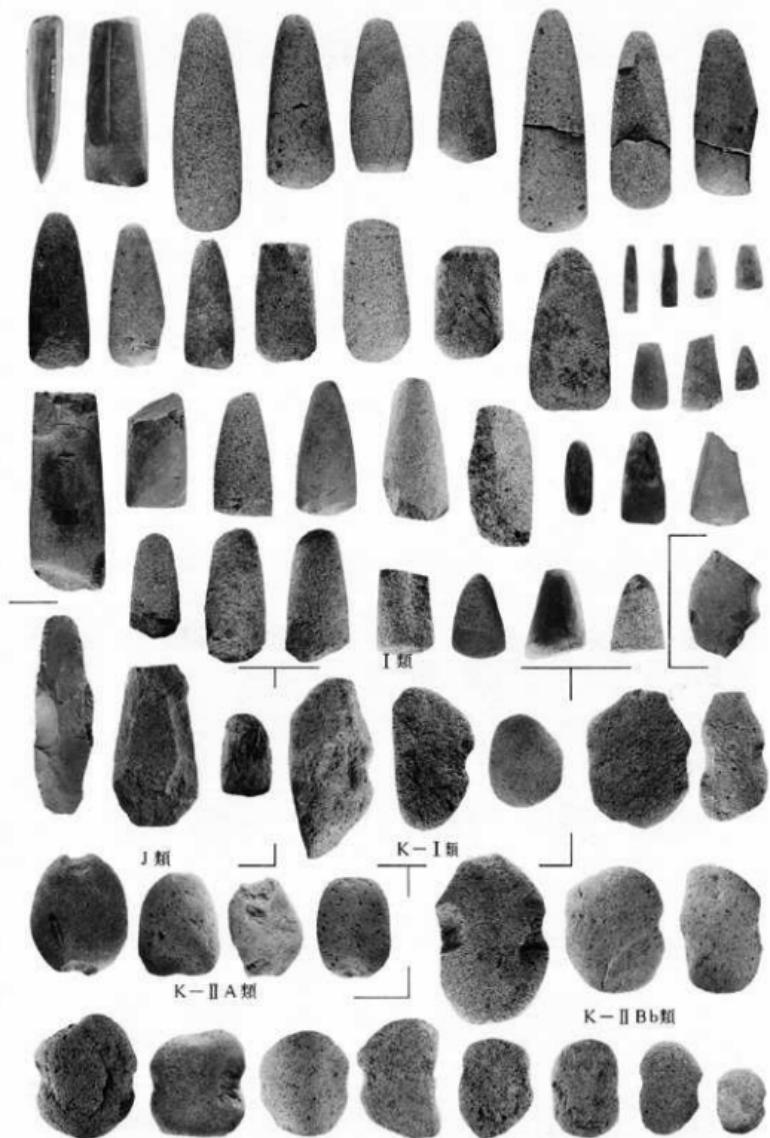


(両極石核)

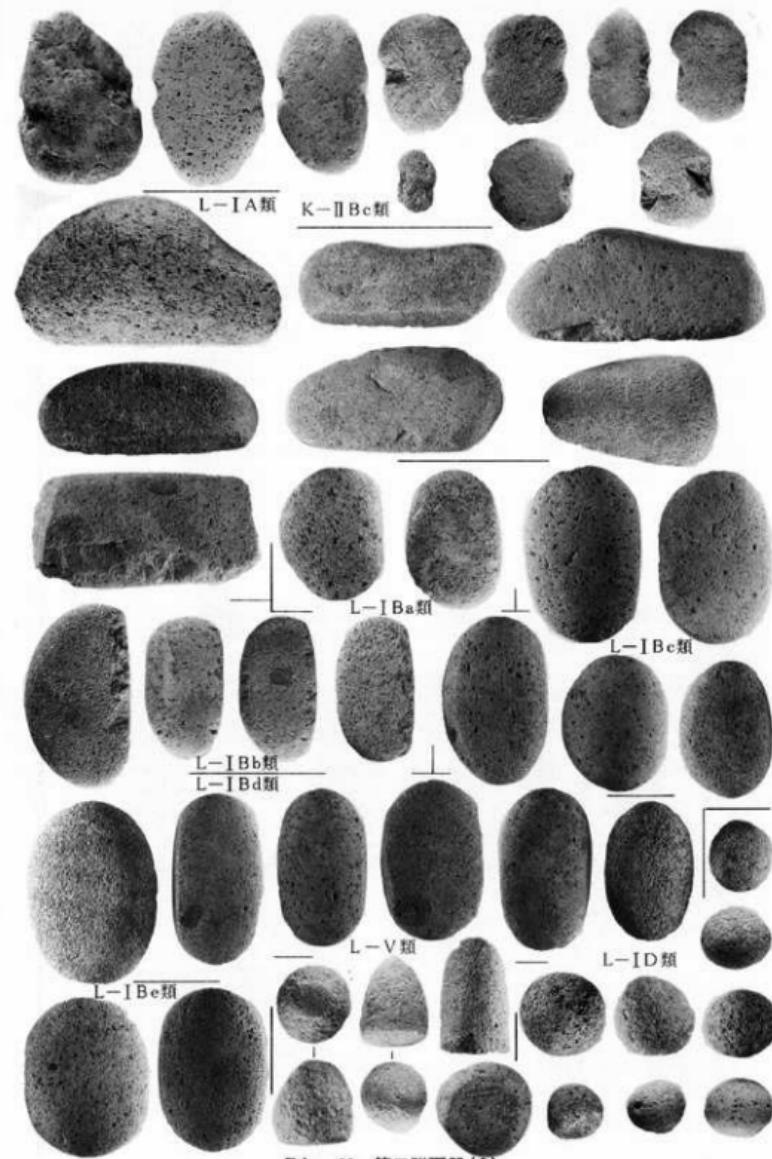
(両極石核)



P.L. 26 第I群石器(F類・H類、下段はVII区出土石器)



P.L. 27 第Ⅱ・Ⅲ群石器(1)



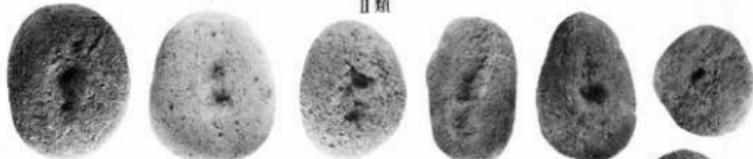
P.L. 28 第III群石器(2)



L-I類



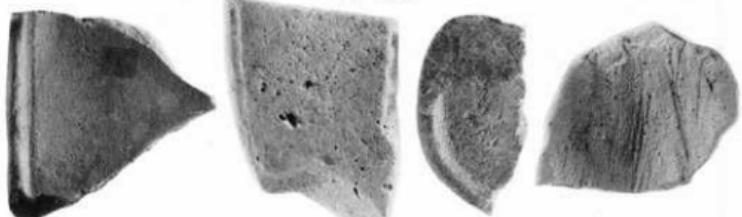
II類



L-III C類



L-IV類

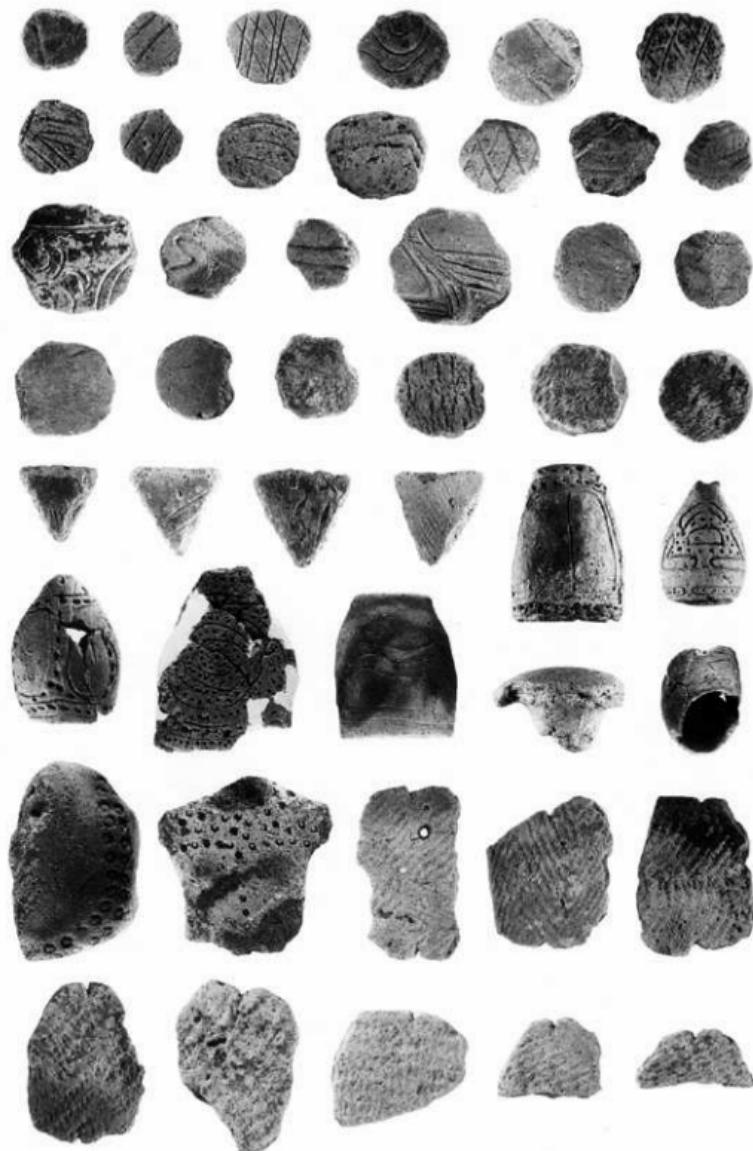


M-I類

P.L. 29 第III群石器(3)



P L. 30 出土石器・石製品



P.L. 31 出土土製品

青森県埋蔵文化財調査報告書第97集

大石平遺跡Ⅱ発掘調査報告書

—むつ小川原開発事業関係埋蔵文化財調査報告書—

発行日 昭和61年3月31日

発行 青森県教育委員会

編集 青森県埋蔵文化財調査センター
〒030 青森市大字新城字天田内152-15

印刷所 東北印刷工業株式会社
〒030 青森市合浦一丁目2-12
